
竜殺しの過ごす日々

トナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜殺しの過ごす日々

【Nコード】

N2499J

【作者名】

トナ

【あらすじ】

なんの意図もからまずに異世界へと移動した幸助。得た力は大きすぎるもの。持て余しそうな力を持って幸助は異世界で生きていく。異世界で幸助はなにをなすのか。

偶発的人間魚雷

神隠しと呼ばれる現象がある。

人が突然姿を消してしまう現象だ。

昔の人は天狗や鬼などにさらわれた、神さまの世界に誘われたなどど畏れを抱いた。

実際には家出や人間による誘拐、不慮の事故による死亡の行方不明などだろう。

だがなかには本当に妖怪にさらわれたり、異世界へと行ってしまった人間もいるのではなからうか。

この物語の主人公である渡瀬幸助もそんな一人だ。

彼が神隠しにあったのは偶然としかいえない。そこに神の意思も異世界の人間の意志も関わっておらず、偶然目の前に開いた次元の裂け目に入ってしまったのだ。突如目の前が真っ暗になるほどに間近で開いたため、避けることもできなかった。入ったあと自力で何とかすることは無理で、流れるまま別の箇所を開いた裂け目へと吸い込まれ、異世界へと放り出された。

幸助に起きた神隠しはそのようなものだ。

そんな彼の現状は落下中というもの。

幸助はなにが起きているのか理解できていない。一分も経たずにめまぐるしく変わっていった風景に混乱し、落下に慌てることもできていない。

幸助の視線はぼんやりと空に向けられている。下を見ていれば、そこにいる巨体生物に驚きの声を出していたのかもしれない。

巨体生物は西欧型の竜だ。知性を宿した赤黒い瞳に、黒い鱗をまとい、鋭い爪と牙、立派な二本の角、雄雄しい銀の皮膜の翼を持つ、どこか禍々しい雰囲気竜の竜。

そして幸助はそのまま巨大生物の尾の付け根あたりにぶつかり激痛であっさり意識を手放した。

高い位置から頑丈な竜の鱗にぶつかり致命傷一步手前、いやほとんど棺桶に入っていた幸助。

だが三つの要因でその命の煌きは消えることなく、以前にも増して輝くことになる。

その日は竜にとっては半年に一度の食事の日だった。

怯える贅を一思いに丸呑みにしようか、それとも恐怖を与えた末に噛み砕こうかと思いに耽りながら、贅の到着を待っていた。

国を脅し、能力の高い人間の乙女を差し出すように仕向けたのは、もう三十年以上も前のこと。

そのときから竜は怯える乙女の肉を砕き飲み込み、己の糧としていた。

竜は知っていた。このような暴虐が許されるのは己が強いからだ。圧倒的な強さの前には弱人の群など蹴散らし、その思いを汲む必要すらないと。弱者は己の餌でしかないのだと。

神が己を止めにくいても、その神を食らってやろうとすら考えていた。

竜はここに来る前も同じことをしていた。気まぐれで巢をかえ、行く先々でそこに住む生物に恐怖を与えてきた。

百を越える年月に幾千幾万の猛者が竜へと立ち向かい、ただ一度の負けもなく竜は存在していた。

諦めず竜にはむかうものはいても、かすり傷すら与えられずにその身を潰されていった。

竜は幸助が現れるその日まで絶対の覇者だった。

竜の最後は、生まれて初めて感じる魂をかき消すような激痛によるショック死だった。

ホルン・コルベス・ストラーチは贅を入れる豪華な籠の中で、それを聞いた。今までに聞いたことのない、竜の咆哮。

咆哮だけならば幾度も聞いたことがある。けれどもその咆哮は自身に満ちた己を誇示するかのような咆哮だ。

しかし今日聞いたものは違う。悲鳴なのだ。

竜の住まう山を登っていた籠が止まる。籠を運ぶ者たちも戸惑っているのだらうとホルンには予想がついた。

けれどもそれがなんなのだと諦めの思いで自問する。

疑問を抱き解決したところで、己の命は今日まで。今日ここで国の存続のため邪竜に食べられ、命を散らすのだ。

それ以上考えることなくホルンは籠が動くのを待ち続ける。

虚ろな瞳には生を望む意思は欠片も浮かんではいない。

やがて籠は動き出す。贅を捧げる祭壇へと。

二十分ほど時間が経ち、籠は再び止まる。時間的にここが終着点なのだろうとホルンは思う。

鍵を開ける音がして、籠は開かれた。

騎士たちによってホルンは籠から出される。のろのろとしたホルンの動きにイラつくことはなく、むしろ憐憫すら浮かべ、ホルンの歩調に合わせ祭壇へと向かう。

ホルンが身に着けているものは灰色の髪と白い肌にあわせた一級品ばかり。死ぬ前にせめて着飾って晴れ姿を親に見せてやれという国からの贈り物だ。だが生気の薄い様相では死装束にも感じられる。今まで贅にされてきた乙女たちと同じように。

騎士たちにより祭壇最上部に連れられたホルンは、ここにじっとしているようにと告げられる。

ホルンが逃げ出すことは考えていない。それはホルンが貴族だからで、そのことをホルンが自覚していると知っているからだ。

騎士たちは籠を持ち、来た道に戻る。ここにいれば竜に不快感を与え、そのことで町一つが消えかねないのだ。

ホルンは目を閉じ、竜がくるのを待つ。五分経ち、十分過ぎ、三十分待ち、一時間が経過して、そろそろ二時間になろうかという頃、ホルンはようやく目を開けた。

表情には恐怖のほかに、どうして竜が現れないのかと疑問が浮かんでいる。

死を待ち続けるということに苦しみ、これ以上待つのは嫌だすぐにでも楽になりたいと考えたホルンは自分から竜の元へと向かうことにした。

この場から動いたことで機嫌を損ねたとしても結局は食べられ死ぬのだから、多少のわがままは許されるはずだと思い祭壇からおりて、山の奥へと歩き出す。道は竜が木々を押し倒したことでできたものがある。これに沿って行けば、巢までたどり着けるのではないかと考えている。

この山には動物は少なく、魔物にいたってはまったくいない。竜のそばになどいたくもないのだろう。

虫や鳥の鳴き声のない木々の間をホルンは歩く。聞こえるのは風が木の葉を揺らす音と己の足音のみ。

三十分ほど歩いてホルンは足を止める。黒く大きな塊が木々の向こうに見えたからだ。

ホルンは首を傾げる。なぜなら威圧感がないからだ。以前一度だけ遠くから見たときは、離れているにもかかわらず体が震えたのだ。だが今は体は震えない。威圧感の欠片もない。まるでただの石像を見ているかのような感じすらしている。

意を決するように頷いてホルンは一步一步竜へと近づく。

そしてホルンは自分が助かったことを知った。

「……死んでる」

一目見て竜が死んでいることを理解したのだ。

竜にとって最重要器官は角だ。竜の力の全てがそこで生まれ、体

中を巡り、集まる。角がなければ竜は生きていけない。その角が砕け散っていた。すなわち死んでいることを意味している。

「どうして？」

死んでいることはホルンにとっても国にとってもいいことなのだが、なぜこのようになっていたのかと戸惑う思いが強い。

原因を探ろうと竜の頭部に近づくも、戦いを専門にしているわけではないホルンにわかることはない。

それでもなにかわからないかと竜の体を探る。

十メートルを越す巨体には傷一つついていない。汚れてはいるが、手で汚れをぬぐうだけで艶々とした鱗が現れ光を反射する。

「あ」

ゆっくりと歩いていたホルンが倒れている少年をみつけた。

異世界に放り出され、落下し、勢いよく竜にぶつかった幸助だ。

大丈夫なのかと幸助に近づきホルンは一つの発見をした。

いままで傷一つなかった竜の鱗の一枚が砕け散っているのだ。

竜が死んだのはこの一撃が原因だった。

竜が極端に痛みに弱かった、というわけではない。ほかの箇所の鱗が砕けただけならば、少し痛いだけですんだ。

砕けた鱗周辺は竜本人も知らない弱点だったのだ。それもそこをつけば一撃で倒すことが可能という大きな弱点。

今までは鱗の頑丈さと弱点範囲の狭さに守られていたのだが、幸助が偶然落下しピンポイントでぶつかってしまったのだった。

幸助は鱗を叩き割った右肩を中心に、肩の粉碎と右腕の複雑骨折と裂傷、胸部骨折、全身の骨にひび、全身打撲という致命傷。その大怪我と引き換えに竜を倒すという大金星を上げていた。

「この子が倒したの？」

経緯はわからずとも、なんらかの方法を用いて倒したのではと予測し、ようやくホルンはこの先も生きていられることを実感した。

青い瞳からポロリと一滴の涙が流れたことをきっかけに、次々と涙が溢れていく。

「うあ、あああーっ」

言葉にならない声、それでも込められた感情で歓喜の泣き声だとわかる。

しばらく泣き声が周囲に広がる。つられるように虫の泣き声が小さく響きだした。虫も竜が死に、恐怖が去ったことを知ったのだろう。

ひとしきり泣いたホルンは涙をぬぐい、幸助に礼を言おうと近づく。間近に近づいて、幸助の怪我に気づく。

慌ててホルンは診察していく。戦いの知識はないが、医術知識は豊富に持っているのだ。診察を終え、状態がわかったホルンは顔を青ざめた。

泣いている間に幸助が死んでいたのかもしれないのだ。恩人をそのようなことで失っていたのかもしれないと思うと、悔やんでも悔やみきれない。この先ずっと必ず後悔し続ける。

急いで重傷箇所から治療術を使っていく。始めは右腕、次に胸と一箇所一箇所丁寧に治療していく。

この世界の誰もがこのようなことができるのかというところでもない。ホルンは治療術に高い才能を持っているのだ。齢十九にして大陸トップクラスといわれるほどに。

その才が原因で竜の贄に選ばれたのだから、ホルンは才能を恨んだこともあった。

医者任せると半年はかかりそうな怪我を三十分で治療し、再度

の診察で怪我はなくなったことを確認し、ほっと胸を撫で下ろす。安心したら眠気が襲ってきてホルンは竜に寄りかかるように眠ってしまった。治療術による体力の消耗もあるが、恐怖や不安などで睡眠時間が減っていたのだ、眠気に勝てなくとも無理はない。

ホルンが寝入って二時間ほど経ち、ようやく幸助は目を覚ました。血が足りずくらくらする頭をさすり起き上がる。回りを見渡し、ここはどこだと首をひねる。

腕に違和感を感じ見てみると、真っ赤だった。流れた血が乾いていたのだ。

パニックになりつつ腕を触り、異常がないことだけは確認した。ぶつかった衝撃などで記憶がとび、現状がさっぱりわからない。住んでいた場所付近には森などはない。それなのに今いる場所は森そばには年上らしき美人が寝ていて、さらには馬鹿でかい見たことのない生物がいる。

どうしてこんなところにいるのか必死に朝からの記憶を辿っていく。

「朝起きて家を出て、学校に。学校終わって、小腹がすいてコンビニへ。それから、それから……目の前が真っ暗になった？ 暗闇から抜けたら落下してた？ なにかにぶつかった？」

思い出せる範囲で記憶を辿っても要領を得ない。当然だ。そのときの幸助も現状を把握していなかったのだから。思い起こしたところで現状を理解できるはずもない。

「まるで小説か漫画みたいだ。

とりあえずこの人に話し聞いてみよ。日本語通じないよねえ、英語なら通じるといいなあ」

幸助はホルンの肩を叩いて、それで起きないので肩を掴み揺する。

「起きて起きて」

まだまだ寝たりないという様子ではあるが、ゆっくりとホルンは目を開く。目を開き幸助を見るまでの間に、助かったことは夢だったのかもしれないとネガティブな考え生まれていた。だが目覚めた場所は籠の中ではなく、竜の腹の中でもなく、眠ってしまった場所で、目の前に治療した少年がいることから夢ではなく本当に助かったのだと安堵の溜息を吐いた。

ホルンはどこか痛む場所はないか聞くため、幸助はここがどこか聞くため、同時に口を開いた。

「d f y e r h s」

「j u k g t y h j n f」

互いに発した言葉がわからない。互いに聞き間違いかともう一度口を開いた。

「j s t h s m u」

「j u k l h , f」

幸助は明らかに英語ではない言語に言葉が通じないことを確信し、ホルンは単純に聞いたことのない言語に首を傾げた。

幸助はジェスチャーでどうにか意思疎通できないかと、いろいろな動作を試みる。だが不思議そうな顔で首を傾げるホルンに全く通じていないのだと悟る。

途端に幸助は不安と焦りに包まれた。どこだかわからず、なぜここにいるのかわからず、どうしてこんなことになっているのかわからない。その不安は表情にも現れる。通じないとわかっていても必

死に言葉を発して話しかける。

幸助が不安がっているとわかったホルンは、幸助が落ち着くように頭を撫でる。街で泣いている子を親が撫でて泣き止ませていたのを思い出したのだ。怖がらなくてもいいと微笑みを浮かべ、ゆつくりと撫でる。貴方の敵ではないと想いを込めて、幸助が落ち着くまで撫で続けた。

ホルンのおかげで少しは落ち着けた幸助は、もういいとホルンの手をとって撫でるのをやめさせる。

「ありがとう」

通じないとわかっていても礼を言う。

ホルンは笑みを浮かべたまま首を傾げた。

ホルンが自分の胸に手をあて言葉を発する。

「ホルン」

名前だけでも知らせようとしたのだ。もう一度名前を言って、次は幸助を指差した。

なにをしているのだろうと幸助は首を傾げる。それを見てホルンはもう一度同じことを繰り返す。

さらにもう一度繰り返し返したことで、幸助はようやく名前を言っているのではと推測できた。

「幸助」

「コースケ？」

指差されたときに自分の名前を言う。ホルンが発した自分の名前に頷く。もう一度指差され名前を言われ頷いた。

そうして微笑んだホルンに安堵した。名前だけでも伝えることが

できて、意思疎通が絶対に不可能ではないと証明され、不安が少しだけ晴れたのだ。

名前を伝えることができたホルンは、幸助を不安にさせないよう表情は笑みのままでこれからどうするか考え込む。

実家に帰るのは論外だ。逃げ出したのだと勘違いされるだろう。家族は渋りつつも受け入れるかもしれないが、街や国中の人間はなんてことをしたのかと怒り出すに決まっている。そうなると実家に迷惑がかかる。竜は死んだのだと説明しても信じてはくれないだろう。何人もの猛者が挑み死んでいったのだから、倒せない存在なのだと思い込んでいる。幸助を連れて行っても信じてくれそうにない。外見を見るだけではとても倒せそうには見えないのだ。それに信じてもらえても貴族たちにはいいように利用され、使い潰される可能性すらありえる。なにせ伝説の竜殺しの再臨だ。使いようによっては外交の切り札にもなりうる。命の恩人にそんな目にあってほしくない。

（とりあえずエリスのところに行きましょう。あそこなら街から離れているから隠れるのにちょうどいいし、エリスも人々に私のことを言わないし。

問題はここから離れてるってことよね。この子素直についてきてくれるかしら）

方針を決めたホルンは立ち上がる。つられるように幸助も立ち上がる。

万が一エリスが渋ったときのことを考えホルンは土産を持っていくことにした。土産とは竜の鱗だ。滅多に手に入らない高価な材料だし、竜が死んだことの証明にもなる。

幸助がぶつかり割れている箇所を手をかけて力いっぱい引っ張る。成人男性と同じ程度は力があるホルンでもはがすことは困難で、お

もいっきり引っ張っても肉からはがれない。

ホルンの行動を見て、鱗が必要なのかと考えた幸助は手伝うことにした。ホルンが苦勞している姿を見て、はがすのは大変だと思つて両手を使ったのだが、シールをはがすように簡単にはがすことができた。ホルンはよほど力がないんだなと思いつつ、これならば片手でも大丈夫だと判断し、次々と鱗をはいでいく。

そんな幸助を見てホルンは驚きの表情を浮かべている。楽にはがせるような筋力をもっているように思つていなかったのだ。だがその驚きもすぐに納得したものとなった。竜を殺せるのだから、見た目と違いすごい力を持っているのだらうと。

両者ともに勘違いが入っているのだが、指摘する者もおらず、できる者もない。そのまま勘違いすることとなった。

四十枚ほどはがしたところで幸助はホルンに止められた。鱗を渡すような仕草をするホルンに幸助は鱗全てを渡す。ホルンはシヨールに鱗を包んで端を結び、肩にかけた。

そしてホルンはエリスの家がある方向を指差し、幸助の腕をひっぱり歩き出す。

知り合いは魔女

長く歩き続け、どこまで行くかわからない幸助は時折不安にかられたが、そのつど不安を察したホルンが気遣うように顔を向けてくるので、一人ではないと不安をはらすことができていた。情けないところを見せたくはないという見栄もあった。不安は見抜かれていたので、あまり意味のない見栄だった。

歩いていけば当然お腹がすく。そんなときはホルンが森の中の果物などを見つけ出し、ホルンが先に食べて見せることで大丈夫だと示した。獣に食べられないので森の中には食べ物が腐るほどある。

喉が渴き、みつけた小川では水の透明度に幸助が驚くといった場面もあった。なぜ驚くのかホルンには分からない様子だった。

疲れると休憩し、困ったことがあればホルンが解決し進むというパターンで二人は先に進む。

そして歩き始めて七時間後、山を下りた二人は小さな村を発見した。

頼めば一晩くらいは泊めてくれるのではと、安堵の表情を浮かべそちらへ進もうとする幸助をホルンが止める。

どうしてと振り返った幸助は初めて、ホルンの困った顔を見た。不安そうな感情もみつけることができた。

ぐいぐいと村からそれるように歩くホルンに、幸助は素直についていく。なんとなくだが村に行きたくないのだとわかったのだ。

さらに二人は歩く。ずっと歩き通しだったおかげで、振り返り見える山は小さくなっていた。

やがて日が暮れた。

今日は月が夜空を照らしている。平野を歩いていれば多少歩きづらいただけですんだが、今歩いている場所は林の中だ。

暗い中を歩くのはホルンも不安があり、明かりの術で周囲を照らしている。小さな光の粒が二人の周囲を舞っている。

これを見たときの幸助の反応を思い出し、ホルンは小さく笑みを漏らした。はしゃぎようがすごかったのだ。珍しくもないこんな術で今日初めての表情を見せてくれた。今も粒をつつこうとしている幸助を見て、ホルンは肩から力が抜けていった。

少し歩き小さな泉をみつけたホルンはここを野宿地点と決めた。手にはここまで拾った枯れ枝がある。それを地面に置くと、幸助も枝を置く。その様が親の真似をする子のように、再び笑みを漏らした。

枝からとった枯葉に小さな火を飛ばし燃え広がったところで、枯れ枝を追加し焚き火とする。

実はホルンは野宿は初めてだった。なにをすればいいのかわからないが、火はあったほうがいと判断し焚き火を作ったのだ。火があれば獣が近づきづらいということも知らない、夜がふけて冷え込んだときのために燃やしておいたほうがいとも知らない。ただ安心するからという理由で焚き火を作ったのだった。

夕食は山からもってきていた果物だ。味は薄いが空腹は満たせるので、二人は分け合い食べる。

食事を終えるとなることがなくなった。言葉が通じれば会話を楽しむことができた。互いに聞きたいことはたくさんある。会話可能ならば、それこそ夜通し話していただろう。

だがそれはもしもの話した。現状は静かにならざるをえない。

ホルンは焚き火の音や鳥と虫のざわめきを聞くうちに、瞼が重くなった。もともと睡眠不足ということもあるが、ここまでくるのに魔法で疲労を回復して精神的にも体力的にも疲れていた。魔法でも使わないとホルンの体力ではここまで歩き続けることは不可能だったのだ。黙々と歩き続けるホルンを見て、幸助は体力あるなと勘違いしていた。

座ったまま寝入ってしまったホルンを見て、幸助はそのままでは寝づらそうだと思い、ホルンの頭を太ももに持つてくる。

「これで少しは寝やすくなるかな。
体力あるって思ってたけど無理していたんだなあ。

ここまで頼った分がこれくらいで返せるとは思わないけど、少しは返せたはず」

起こさないように小声で呟いた。

幸助はゆっくりと寝転がる。頭上には木々の隙間から星が見えた。ここまで綺麗な夜空は生まれて初めて見たのだが、今の幸助にはそれを楽しむ余裕はない。

「それにしてもここどこなんだろう。可能性としては異世界なんてことも考えられるけどまさかね？」

ここは地球で一般人には知られない世界があつて、たまたまそういったことに巻き込まれただけ、であつてほしい。

それはそれで嫌なんだけど、異世界なんてものに放り出されるよりましだし」

重い重い溜息が吐き出される。

「この人もなにかわけありなんだろうな。でないと村に行ってたはずだし。」

村に行けない人が目指してる場所ってどこだ？ やばげな場所な気がしてきた。

でも頼れる人がこの人しかないんだよなあ。悪い人じゃなさげだし、ついていくことには不満ないんだけど」

再度重い溜息が吐き出された。

「わからないのはまだある。」

体力がおかしい。俺ってここまで体力ないはず。歩き続けることはできるだろうけど、疲れがないってどうよ？

ほんとどうなってんだか。誰でもいいから教えてくれんかなあ」

答えが返ってくることを期待していない呟きに、当然の如く返答はなかった。

そのままぼんやりとしていた幸助はいつのまにか寝息を立て始めた。

火が消えて寒くなり、ホルンが目が覚めるまで二時間ばかり時間を必要とする。

隙だらけの二人は獣や魔物にとって格好の餌だ。しかしそれらが近寄ってくることはなかった。むしろ近寄らず息を潜めている。

火が怖いのではない。原因は持ってきた竜の鱗だ。竜の匂いを放つ存在に近寄る気はないのだ。匂いで危険がわからないのは人間くらしいだが、荒くれ者や盗賊はここらにはいない。お土産がお守りとなり二人を守っていた。

山を出て四日目の昼過ぎ、ようやく二人はエリスの家にとどり着いた。

幸助は薄汚れてはいるがさほど疲れをみせていない。一方でホルンは疲労困憊一步手前というところまできている。整備された道を歩かず、人目を避けるため林などを通ってきたためだ。

幸助は何度かジェスチャーで背負うことを提案したが、通じてないのか遠慮なのかホルンが頷くことはなかった。

ホルンが扉を軽く叩く。返事はない。そこで諦めずにホルンは何度も叩いた。いることを確信してるかのよう。

やがて扉の向こうからいらだたしげな足音が聞こえてきた。

「しつこい！　いったい誰じゃ!？」

勢いよく開けられた扉から二十後半ほど思われる女がでてきた。艶やかな黒髪は整えられておらず、衣服もいい加減に選んだといった感じだ。整った容姿を持っているので、髪に櫛を通し、衣服に気を使うだけで見違えるだろう。

足音が聞こえていた時点でホルンは扉から離れておりぶつかることはなかった。

「十五日ぶりくらいねエリス」

にこやかに告げるホルンの顔をエリスはポカンとした顔で見ている。顔からスコーンと険しさが抜け落ちた。

「……ホルン？ ど、どうしてここに？」

「くるところがここくらいしか思いつかなくて」

「逃げてきたのか？」

「助かっちゃった」

「た、助かった？ とにかく無事でよかった！

よく見ると顔色悪いじゃないか、早く家に入りな！」

「ありがとう。エリスならそう言ってくれると思ってた。

コースケ」

二人の会話を不思議そうに見ていた幸助に振り返り、ついてくるように手招きする。

その仕草でようやくエリスは幸助の存在に気づいた。

「誰じゃ？」

「命の恩人」

ホルンのその一言で幸助がなしたことを知り、まじまじと見る。観察するかのような視線に幸助は居心地悪そうな表情を浮かべた。

「あんたも中に入るといい。詳しい話は中で聞くとしよう」

「コースケは私たちの言葉わからないから」

「……そうなのかい？　じゃあどうやってここまで」

「身振り手振りで」

「よくそれでここまで無事にたどり着いたものじゃ」

「悪い子じゃないしね」

「子って、まあ十四くらいだろうから、十九のお前さんから見れば子供の範疇か」

幸助は十七才なのだが、エリスたちからは幼く見えるだろう。

いつまでも玄関で話していても仕方ないと家に入る。

「散らかつてますね」

ホルンの言うとおり、家の中は空き巣にあったかのように散らかっていた。物で溢れているのではなく、なぎ倒され床に散らかりっぱなしなのだ。

十五日前ホルンが訪れたときはある程度片付いていたので、エリスは整理整頓できないわけではない。これはホルンを助けることができず荒れて、そのままにしてあったのだ。

「……ちよつとね」

「あとで片付けましょうか」

「ボルドスが帰ってきたらやらせるからこのままでいいさ」

「しばらくお世話になるかもしれませんから、やりますよ」

「そうかい？　できる範囲で頼むわ」

散らかっているものを避けて三人はリビングに入る。

出された茶菓子とお茶を飲み、ホルンと幸助はほっと息を吐く。

刃物も鍋もなかったので温かいものを飲み食いしてなかったのだ。じんわりと温かさが体中に広がっていく。

「そろそろなにがあったか聞きたいのだが」

「その前に通訳の魔法を使ってあげてほしいの。たしか使えたはずよね？」

「ああ、そのほうがいいね」

エリスは椅子から立ち上がり、幸助のそばによる。

人差し指を幸助の額に当て、魔法を使う。

なにをされるのかと不安そうな表情になる幸助の手をとって、大丈夫だとホルンは笑みを浮かべた。

何度も助けられたホルンの笑みに幸助の不安は晴れる。じっとしていると熱が頭部を貫通した。

「これでいいはずじゃ。私たちの言葉がわかるかい？」

「……わかる……言葉がわかる！」

わかると連呼し跳ねて喜ぶ幸助をホルンは微笑ましそうに見ている。

そんな幸助をエリスはうるさいと頭をはたいて止めた。

「なにすんだ!？」

「埃が舞うだろう。お茶に入るかもしれんじやろうが」

「ごめんなさい！」

眼光鋭いエリスの迫力に負け、即座に謝る。

「この程度の威圧で……本当に竜殺しなのか？」

「たしかに竜は死んでいて、そばにコースケがいましたよ。竜は怪

我をしていて、コースケも致命傷を負ってたわ。

証拠は私が生きていて、いまだ国が無事なこと。それとこの鱗です」

持ってきた鱗をテーブルに置いた。

「……あのバケモノの鱗かい？」

「はい」

「触っても？」

「どうぞ。もともと差し上げるつもりでしたから」

エリスは鱗を一枚とり、間近で眺めていく。縦十センチ横六センチ厚さ三ミリの楕円形の黒鱗。

以前見た竜と同じ色で鱗の形も同じだと確認、軽く叩いて頑丈さを確かめる。指先に炎を出現させ、それであぶり反応を見る。

「たしかにあの忌々しいバケモノの鱗のようだの。

死んでないとこんなにたくさん手に入れないか。

コースケといったか、竜を殺したときの話を聞かせておくれ」

「状況っていつでも、俺もなにがなんだかさっぱりで。

そばにいた黒い奴って竜だったの？」

この言葉にホルンとエリスは顔を見合わせる。

この国に居座っていた竜は世界的にも有名だ。直接見たことのないものでも風聞で姿くらいは知っている。なにせ黒鱗の竜はいまのところ、あれただ一匹だった。それを知らないとはどういうことなのか。

「結論を急ぎすぎたのかもしれない。順序をおっていこうか。お前さんの名前はコースケでいいんじゃない？」

幸助は頷く。

「私の名前はエリシール。親しいものはエリスと呼ぶ。お前さんは、まあ好きに呼ぶといい」

「じゃあエリスさんで」

許そうとエリスは頷く。

「私はホルン。ホルン・コルベス・ストラーチ。ようやく正式に自己紹介ができました」

「俺は渡瀬幸助。渡瀬が家名で、幸助が名前。ここにくるまでいろいろとありがとう」

そう言っ頭を下げる。

「助かったのはこちらなのだから、お礼なんていいわ。

それにしても家名が前ということはホネシング大陸の出身？ あそこの大陸の国のいつくかは家名が前にくるようになっていたはず」
「……出身地は日本ってどこ」

大陸名を聞いて、もしかしくとも異世界にきたのかと幸助は気持ち沈む。

ホルンとエリスはその名前の国に聞き覚えはない。

「どんな国なの？ 特徴を教えてくださいわかるかもしれん」

幸助的には結論が出ているのだが、自分のように来た者が過去にいたかもしれないと思い、特徴を述べていく。

幸助の言葉を聞いても二人には、該当する国を思い浮かべること

はできなかった。

「島国で、縦長で、四季があって、大陸そば、治安がよく、世界でも名の知れた国。

島国と聞いて思いつくのはベレレ諸島じゃが、名の知れた国は別名じゃしもう」

「ニホンというのはコースケたち自国民特有の呼び名でしょうか？」

「そうだとしてもほかの条件に見合う国はないんじゃない？」

これはもしかすると」

エリスは脳内から一つの言葉をみつけだす。

これであっているのか確定づけるため、さらなる質問をする。

「セブシック、カルホード、エゼンビア、ホネシング、ベレレ。

これらに聞き覚えは？」

「ない」

「アレイル、プラーネ、テリストン。

これらに聞き覚えは？」

「ない」

ここでホルンが驚いた顔になる。

エリスが上げた三つは世界を支える神なのだ。子供でも寝物語で一度はそれらの話を聞かされる。知らないなんてことはありえない。

エリスはこの返答で確信した。

「コースケは流離い人じゃな」

聞き覚えのないホルンが首を傾げている。

そんなホルンと幸助に、エリスは以前読んだ書物を思い出しつつ説明する。

「流離い人とはこの世界の外から来た者を指す。過去に三度、そういった者が存在したといわれておる。彼らはこちらはない知識や技術を用いて、世界に栄華と混沌を与えたという。」

言葉が通じなくて当然じゃ。使っていた言葉はここには存在せんからの。大陸や神の名を知らなくて当然じゃ。これらはこちらにしか存在せんからの」

「その過去にきた人たちって元いた世界に戻れた？」

恐る恐ると発した幸助の質問に、エリスは首を横に振る。

「皆、この世界にて生を終えたようじゃ」

「……帰る方法がない？」

「私は知らぬ」

「魔法とか存在するんだから、召喚の反対の魔法とかっ」

「私は魔法についてはひとかどのものと自負しておるが、心当たりはない」

「エリスは大陸中に名の知られた魔法使いなの。そのエリスが知らないというのだから魔法関連で帰還の方法はないのかもしれない」
「えっと……ほかにないか」

すぎるような表情の幸助に二人は頭を下げた。

「すまぬ、帰還に関しては私たちでは力になれそうにない」

「すみません」

望みを絶たれた幸助はがくりとうなだれる。

実はエリスには一つだけ思いついた方法がないわけでもなかった。しかしそれは実現させる可能性が低く、無駄な徒労に終わりがねなかった。

思いついた方法とは神に聞くというものだ。地球とは違い、こちらには神が実在している。その神に会い、帰還できるか聞くというのがエリスの思いついた方法なのだが、どこにいけば会えるのかわからないし、会えたとして帰還方法を知っているとはかぎらない。ここでその方法を言って期待を膨らませ、苦勞の果てに面会を成し遂げ、知らないと答えられたときの心境を思うと、黙ったままのほうがいいと考えたのだ。

「慣れぬ野宿で疲れておるだろう、とりあえず休んではどうじゃ？
続きは起きてからとしよう」

これ以上は話を続けにくいと思ったエリスの提案に、それがいいとホルンも頷いた。

「コースケを客室に案内してくれ。その間に風呂を沸かしておく。
汚れを落としたいだろう？」

「助かります」

礼を言ってホルンは幸助を客室の一つに連れて行く。

ベッドに寝転がった幸助はこれからのことを考える間もなく、数日振りのベッドの寝心地のよさにストンと意識を沈めた。

風呂上りに様子を見にきたホルンが戸を静かに開けると、幸助はくーすーと寝息を立て熟睡していた。

ホルンはエリスに一声かけて、遊びに来たときに使う部屋に向かう。ホルンも連日の疲れで、ベッドに入って一分もたたずに寝息を立て始めた。

エリスは二人の眠りの邪魔にならないように静かに過ごす。ホルンが生きていることの喜びを噛み締めながら。

突発的超人誕生の解説

時間にして午後七時を過ぎたあたり、五時間ほど眠った二人は食べ物の匂いで起きだしてきた。ある程度満たされた睡眠欲を食欲が上回ったのだ。

「起きてきたか。こっちに座るといい。すぐに準備は終わるからの」
首を傾げる幸助に通訳の魔法の効果が切れていると思い至り、エリスは再度魔法を使う。

テーブルの上には三人分のスープとパンが並んでいる。フライパンからはジュージューと肉類の焼ける音が聞こえてきた。

思わず幸助の喉が鳴る。座りましようかとホルンに誘われ、素直に従った。

エリスが最後の一品をテーブルに置く。温野菜が添えられたハムステーキだ。

食べる前にホルンとエリスが同じ動作を行い、眼を閉じた。

「それって宗教的なもの？ 俺もやったほうがいい？」

幸助の問いに二人は困ったような表情を見せた。

「今私たちがしたことは世界神に感謝を捧げるという儀式の略式のよ。」

私たちにとっては当たり前のことなんだけど、コースケもしたほうがいいのかしら？」

「周囲に怪しまれたくないならしたほうがいい。」

急いでいるときならばしないが、ほとんど場合で皆してることだ

からの。

国によって少しずつ違った形になる場合もある。他国にいったときはそちらにあわせてもいいし、自国の作法でもいい」

「じゃあ、俺の場合はこれかな？」

いただきますと手を合わせる。

「コースケの世界にも似たものがあるのかい？」

「これは神様っていうより、食材になってくれた植物と動物と料理を作ってくれた人に感謝を捧げる作法なんだよ。

外国には神に感謝を捧げる作法もある。でも俺はその宗教には属していないから」

幸助が言っているのはキリスト教の作法だ。幸助の家は仏教だ。

「調理人と食材に感謝か。こちらでは聞かない解釈だね。

まあ幸助はそれでいいと思う。それをしていけば、まわりが勝手に故郷の作法なんだろうと勘違いするだろうさ」

「わかった」

話しはこれで終わり食事が開始される。

一度手をつけると、久々のまともな料理に幸助は夢中になる。

勢いよくたいらげていく幸助を、ホルンは微笑ましそうに見て、エリスは懐かしげに見ている。

ホルンもよくやくありつけたまともな食事に、いつもより多めに食べることとなった。

二人のおかげで料理はきれいさっぱりなくなる。作り手も嬉しくなるくらいの食べっぷりだ。

ごうちそうさまと手をあわせる幸助に、それも作法の一つかとエリスが尋ね、幸助は頷いた。

ホルンとエリスが食器を片付け終わり、話し始める。話題は寝る前のものだ。

おずおずと切り出すホルンだが、幸助はそれほど沈んでいない。寝て食べたことで余裕ができた。もともと切り替えが早いほうなのだ。両親や友達には諦めが早いとも言われていた。

「いつまでも悩んでても解決しないしね。もしかすると将来ぼつと解決策がでてくるかもしれないし。

それよりもこれから先のことを考えないと。俺この世界になにもないし、なにも知らないから大変そう」

「帰還については無理だけど、これから生きていくことなら力になります。だから頼ってもらっても大丈夫」

「私もホルンの恩人を放り出すような真似はせぬよ。困ったことがあれば頼るといいさ」

ありがとうと幸助は頭を下げる。

「この世界の知識とかはあとでいいとして。

コースケがこっちにきて、ホルンと出会うまでになにがあったか聞きたい。話してくれないか」

隠すようなことでもないので幸助は頷いて話した。

と言っても自分で確認したように詳しいことは不明なままなのだが。

続いてホルンが幸助をみつけたときのことを話し、なんとなくエリスには顛末がわかった。

「コースケはきつと竜の弱点にすごい勢いでぶつかったんじやろうな。

肩の粉碎なんぞ並大抵の勢いでは起きんからのう」

「そ、そんな大怪我でよく生きてたな俺」

そんな重体であったことに顔が青ざめている。

「ホルンが治療したことと竜の力を吸い取ったおかげじゃな」

もう一つ原因があるが、そのことに今は誰も気づかない。
首を傾げる幸助に詳しい説明をする。

「ホルンは大陸有数の医術者じゃ、こと怪我を治すということに関して優れた才を持っておる。そのホルンが全力で治療したのなら、どのような怪我でも完治して当然じゃ。

生きてさえいれば胴体が真っ二つにちぎれていても、治癒可能なのではとまで噂されておる」

「ホルンってすごいんだ。

あ、あと助けてくれてありがとう」

「怪我人がいれば治療するのは医術者として当然のことです。まして命の恩人のためならば全力を尽くさないはずがありません」

恩人という部分に幸助は反応する。

「そこなんだ！ 命の恩人ってところがわからない。

俺が竜を殺したことで、どうしてホルンの命を救ったことになんの？」

「ホルンは生贄だったのさ」

「生贄ってーと、竜はホルンを食べるつもりだったってこと？」

「そのとおり。

あのバケモノは三十年前からこの国に居座っててな、年に二回の生贄を要求してきたのさ」

「ありふれた話だなあ」

「たしかにのう」

エリスは幸助の言葉に同意したが、二人の捉え方は違っている。幸助は童話などの作り話としてありふれた題材と言ったのに対し、エリスは過去実際に幾度もあったことだと頷いた。

その違いに気づかないまま会話は続く。

「その生贄には条件があつての。力の強い人間の乙女を喰らいたがつたのじゃよ、あれは。それが受け入れられないと好き勝手暴れた。竜が壊滅させた村や街は十を超える」

「退治とかは？」

「何度も屈強な冒険者たちや勇敢な騎士や英雄と呼ばれた戦士が挑んだがな、皆返り討ちじゃった。

そのうち人間では倒すことは無理だと、竜に従うことを選択するようになっていった。

そしてホルンの番がきたのじゃよ」

「エリスさんはすごい魔法使いなんでしょ？　どうにかできたんじゃない？」

エリスは俯く。そのエリスを励ますように、ホルンがそっと肩に手を置く。

「エリスもどうかしようと思ってくれたの。そしてエリスの使った魔法はたしかに効果を発揮した。エリスが使った魔法は竜の弱体化。でも弱体化しても人間では太刀打ちできなかった」

「……名が知れておるといっても、守りたい者を守る力もないのじゃよ。情けないことだ」

場が静かになる。ホルンは変わらず肩に手を当てている、その手にエリスは俯いたまま自分の手を重ねた。

雰囲気を変えるように幸助が口を開く。

「あ、えと、さっきの続きなんだけど俺の助かった理由のもう一つって?」

幸助の気遣いによってエリスは顔を上げた。

「竜を殺したことで力を吸収し、強くなったからじゃ」

「吸収ってどういう?」

「お前さんがいた世界には吸収の概念がないのか?」

「吸収っていうと、食べ物の栄養を胃が吸収するとか、布が水を吸うとか、こういったことに使われる言葉だよ」

「ふむ……そっちにはない概念のようじゃな。」

吸収というのは魔物や獣などを殺したとき、それらの強さを吸い自分のものとする事」

RPGでいうところの経験値というものだ。幸助もそう捉え、それであっている。

つまり大量の経験値を手にいれレベルアップし、死にづらくなった。死のカウントダウンを伸ばし、なんとか生きているといった状態でこのままでは死ぬというところにホルンが到着し、治療が間に合った。

吸収とホルンの治療術ともう一つの理由が重なったことで、幸助は生きていられる。

ちなみに吸収は経験値とまったく同一というわけではない。同じ種と戦っても同じだけの力を吸収し続けるわけではないのだ。二度目は半分、次はさらに半分。といった具合に減っていき、最後には得るものはなくなる。

「強くなったって言われても実感が……あ。ここにくるまで疲れが

ほとんどなかったのはそれが原因か？ 俺の体力じゃ、こんなに動けないと不思議だったんだ」

「理解できたようじゃな。どれお前さんの強さを調べてみようか」
「計測器を持っているの？」

ホルンの問いにエリスは頷き、立ち上がる。

「ガレオンが古くなっている計測器を新品に代えるというのでな、一つ買い取ったのさ。」

たまに使うのなら、まだまだ長持ちする代物じゃ」

部屋を出たエリスはすぐに戻ってくる。

四つに折りたたんだ新聞ほどの金属版と金属カードを持っている。
持ってきた金属板をテーブルに置く。

「この上に手をあててくれ」

「……なにか浮かんできた？」

幸助が手を乗せどけたあと、表面に文字らしきものが浮かんできた。当然幸助には読めないものだ。

エリスと横から覗き込む形でホルンが見ている。

「……わかっていたことではあるが、このように表されると改めて驚くのう」

「……竜殺してここまですごいものなんですねえ」

言葉に込められたものは驚きと呆れが半々といったところか。それだけ表示されたものがすごいということだろう。

「説明してほしかったり。文字読めないんです」

「ん、わかっておる。
まずここじゃが」

エリスは浮かび上がった情報を一つ一つ説明していく。

RPG的に説明すると、筋力、頑丈、器用、知力、精神のステータスがある。筋力頑丈器用は読んで字の如く、知力は知恵と知識量を示し、精神は魔法に対する耐性や精神的柔軟性を示している。ほかに体力魔力素早さの三つがあり、これらは順に筋力と体力の平均、知力と精神の平均、筋力と器用の平均で表される。

ステータスの表示は数ではなく、A＋～E－の十五段階で表される。人間基準で、Eで普通、Dで優れている、Cで一流、Bで怖がられ、Aで崇められる。

幸助のステータスは筋力B＋ 頑丈B 器用B 知力C＋ 精神C－となっている。

「一つもAってないんだね」

「あーうん……知らないからこそいえる言葉じゃの」

「さすがにAがあつたら驚き通り越しておかしいです。計測器の故障を疑いますね」

「そうなん？」

「戦いを生業としていない成人男性が筋力E＋ 頑丈E＋ 器用E 知力E 精神Eだ。それと比べてもそんなこと言えるかの？ ちなみにお前さんが殺した竜はオールB＋。これは下級神クラスに入っておる。」

そのバケモノで一國壊滅させることが可能なのじゃよ。

お前さんの平均はB－、能力値だけを見れば一都市を壊滅させることは可能ということになる」

「……もしかしてめっちゃ高い？」

「もしかしなくても高いわ。」

後にも先にも人類最強と呼ばれた英雄で平均Cなのですよ？」

「私は平均C一だ。それでも大陸に名を響かせておる」

幸助の強さを再びRPG的にレベルで表すと70を少し超えたところだ。人類最強と呼ばれたもので40を少し超え。幸助が殺した竜で80から90の間。

「手に入れたものが馬鹿でかすぎて実感わきにくいです」

「無理ないのう。吸収という概念もなかったわけじゃからな。

暮らしていけば嫌でも実感するじゃろうて。

次はギフトだ。これはお前さんはもってないが、称号がギフトを兼ねておる」

「称号も気になるけど、ギフトの説明をお願い」

「ギフトというのは個人が持つ特殊な能力のことだ」

「神様からの贈り物という説もあるからギフトと名づけられたのよ。

私は治癒3、エリスは魔法融合2を持っているわ」

「数字はなにを表してるの？」

「これは効果の大きさと多様性を表しておる。数字は1から3までで、数字が大きいほど効果も大きい。

成長することがあるが、どうやれば成長するのか明確には解明されておらん。

ギフトに関連した行動をとり続けるといいなどと言われておる」

「この世界の住人全員が持つてる？」

「いや持っていない者もある。そんな者たちは筋力と頑丈が高めになる。」

お前さんもその二つが高いじゃろう？ いや特殊すぎてわかりづらいの。器用もBじゃし」

ここまでステータスが高ければ、ギフトのあるなしの違いがなくなってくる。

「次は称号の説明だ。」

これは神から与えられたり、人々の認識で持つに至ったり、行動の結果で得られるものじゃ。

ステータスやギフトや行動に影響を与える。

一人で複数の称号を持つことは可能じゃが、基本的に持っておる称号一つしか効果を発揮させることはできん。

意識すれば脳内にもっておる称号が浮かび、その中から好きなものを選ぶことができる。変更は一日一回じゃ。

私は優れたる魔女の称号を持っておる。効果は魔力を一段階アップと魔法効果の若干の上昇いうものだ。

ホルンはレーリルのお気に入りという称号で、効果は医療関連の行動に補正がある」

「レーリルって？」

「医療を司る女神じゃ」

「ふーん。俺の称号は？」

「竜殺し2じゃな。数値がついておるのは先ほども言ったようにギフトも兼ねているからじゃ。」

効果はステータス全て一段階アップ、先ほどのステータスにはすでに含まれておる。

効果はそれだけではないはずじゃ。一段階アップは竜殺し1の効果じゃからの。

ほかのギフトの成長の仕方から考えて……上昇範囲がステータスだけに留まらないといったところじゃなかろうかと思う。

つまり全ての行動に補正がつくというものじゃ」

後日の成長の速さでこの推測は当たっていたとわかる。

この称号が幸助の生き延びた最後の理由だ。力を吸収して強くなったところに、称号によってさらに強化され、肉体の持つ自然治癒に補正がついていた。

「なんてチート」

「チート？」

「反則とかずるいって意味であってるはず」

エリスは説明に頷いた。

「たしかにのう。」

全ての行動に補正がつくのなら学習能力にも補正がつくということじゃろうし、すごい勢いで成長していくじゃろうなあ。

ほかの者から見ればずるいだらうの。

さすがは最強の竜を殺して得た称号なだけはある」

「最強の竜？」

「うむ。お前さんが殺した竜は、竜種として最高ランクに位置しておったよ」

「……弱点に体当たりされただけで、そんなやつがよく死んだね？」

「お前さん自身が死にかけるような体当たりだからのう。それはすごい衝撃があったのだらうさ。」

あとは弱点ってことでほかの鱗よりも若干脆かったのかもしれない。今となっては確かめようのないことじゃがの。いや死体を探ればなにかわかるかもしれないが、あれに触るなんぞごめんじゃ」

「毛嫌いしてるなあ。当然か。」

ほかに説明することは？」

「あとはカード以外には特にないか？」

「と思いますね。」

なにか言い漏らしあっても、その都度説明すればいいですし」
「そうじゃの」

エリスは文字の浮かぶ金属板に金属カードをくつつける。すると文字が消えていく。十秒もすると金属板はもとの何も書かれていない状態に戻る。

金属板から離れたカードを幸助に渡す。カードには文字が浮かんでいる。幸助は自分の名前だけはなんとかわかった。

「それは身分証明にもなるから失くさないように。本人が持ったときのみ情報が表示されるから身分証明用としてちょうどのじゃ」

「名前はなんとかわかるけど、ほかにはなんて書いてんの？」

「拠点としている国と街。そこにはピリアル王国リッカートって書かれてる」

「リッカートが拠点になってるんですか？」

「うむ。おそらくここに留まっていることで、そのように判断されたのじゃろう。コースケがもとと住んでいた場所は刻みようがなかったんじゃないか」

「リッカートって？」

「ここから二時間弱歩いたところにある街です。私もそこに住んでいるんですよ」

「自動的に浮かぶのは名前と拠点のみ。ほかの情報は所有者の意思で選別可能じゃ。」

「といったところで今日のお前さんに関しての話はここまでじゃ。」

次はホルンの今後の予定について

「俺は席外したほうがいい？」

「いえ聞いててかまいませんよ。ただし面白くもない話になりますけど」

本人が許可するのならと幸助はこの場から動かず、聞いておくことにする。

「ホルンはこれからどうするのか考えておるのか？」

「一応は。しばらくここに滞在させてもらって、その間にエリスに家に連絡してもらいたいなど。」

今帰ると大騒ぎになりそうです」

「確実に騒ぎになるじゃろうなあ」

「ですから、家に無事を知らせもらい、竜が死んだことも確認してもらって、国中の人たちが竜の死を知ってから帰りたいです。

そうしないと家に迷惑かけることになりそうですから。伯爵家の娘が逃げたなんて風聞立てられたら、ほかの貴族からいいように攻められるでしょうし」

「伯爵家？」

黙っているつもりだった幸助は思わず声を漏らした。

「ええ、私は伯爵家の長女です。末っ子なんですけどね」

「貴族って始めて見た」

テレビでも見たことない存在が目の前にいることに、幸助は驚いている。

「コースケの住んでた場所の近くには貴族の屋敷とかなかったのかい？」

「いや貴族自体が俺の国にはいないから。百年以上前は似たようなもので武家ってのがあったけど、それもなくなった。

貧富の差ってのはあったけど、身分の差っていわれてもぴんところない」

「じゃあ国には王や貴族はいなくて平民のみかの。国をどうやって動かしている？」

「王に似たものはいるよ。天皇っていうんだけど、天皇はいくつかの決められたこと以外には国政には関与しないんだ。

国を動かすのは国民が選出した代表者たち」

「キューハン自立都市に近い感じですね」

ホルンは隣の大陸カルホードにある都市の一つを思い出す。

キューハンは昔、国の圧政に立ち向かい自立を勝ち取った都市だ。貴族からの干渉をはねのけて、今でも都市住民たちの代表者たちによって自立を守っている。日本との違いは選挙権が年齢で決められておらず、中規模以上の店の主たちにのみ与えられていることだ。

「ホルンが生贄に選ばれたとき権力で変更できなかったの？」

「そんなことしたら最悪爵位取り上げられます」

「どうして？ 貴族って偉そうだから多少の無茶はできそうなんだけど」

「大事のためには小事を切り捨てる。これが貴族の基本的な考え方です。」

国の危機が私という個人の命で免れることができるのなら、情を振り切って差し出せるのが貴族ですよ。

私も死ぬのは怖かったですけど、生贄となることには納得していました」

「考え方は理解できるけど、実行は俺には無理」

「私たち平民には無理だろうね。簡単に命を差し出せるなんて私たちからすれば狂気にも近いよ」

このときだけはエリスはホルンをにらみつける。

それを微笑んでホルンは受け止めた。考えの違いなどつくに理解しているのだ。

「私はそこまで貴族として完成された考えではないですよ。」

二才のときから生贄になることが決まってきましたから、貴族としては最低限の教育だけ受けて自由に過ごすことができました。

誇り高い貴族として育てられていたら、国のために命を使えることを喜びすすんで生贄になっていたと思います。おそらく誰かが生かそうとしても、怒って断っていたかもしれません。

まあ国大事といっても国が揺るがない範囲だと、保守的でどこま

でも自己の利益を追求するのも貴族の一面ですけどね」

「やっぱり理解しづらい世界だ」

「無理に理解する必要もないと思うがの。」

話を戻そうか。

連絡をつけてほしいんじゃないかな？」

「ええ」

「それはいいのじゃが、どのように伝えるかな。」

あまり屋敷には行きたくない。といって手紙だけを届けても悪戯と判断される可能性もある」

「あ、それとコースケのことは秘密にしてください。」

竜殺しの称号は大きすぎますから」

「竜殺しが現れたと知ったら貴族どもが利用しようと騒ぐじゃろうしなあ。」

コースケは貴族に対する対応を知らんから、いいように利用される可能性が高いじゃろうなあ。

コースケ、お前さんは弁が立つほうか？」

「お偉いさんと渡り合えるかといわれると無理としかいえない。」

今思いつく対応は……暴れるぞ？ と脅すくらい」

この対応はあながちはずれでもない。今の幸助でも街を破壊することは可能で、今後戦い方や魔法を学ぶとエリスが言ったように都市破壊が可能になる。

脅した貴族の領地で暴れたら財政的に大ダメージを与えられるだろう。

「有効じゃろうが、その場合は演技を悟られないようにせんな。見破られると逆に脅される可能性もある。」

最悪国を敵に回すことになるとも覚えておくように」

「なるべく貴族に会わないようにすればいいよね」

「そうじゃの。あとは大店の者たちも貴族とつながりがあるから気

をつけておけ」

「わかった。」

それにしても竜殺しの称号のすごさはわかったけど、竜殺しって存在自体もすごいんだ」

「うむ。歴史上お前さんを含めて三人だけじゃからな」

エリスは竜殺し二人の人生を簡単に聞かせていく。

一番最初の竜殺しは五千年前で、その次は二千二百年前だ。両者とも竜種としては下位のB-を倒して竜殺しとなっている。

上位の竜が人間に殺されたのは初めてのことだ。このことを貴族が知ると、あちこちから幸助を取り込むための動きが見えるだろう。

「五千年前の記録がよく残ってたもんだ」

「そんな昔の記録は残ってないと思いますよ」

感心したという感じの幸助の言葉をホルンが否定する。

「記録が残ってないなら、竜殺しのことを話せないと思うけど？」

「記録に残ってなくとも神に聞けばいいじやろう？ 生き証人じゃから詳しい話を聞けるしの。実際、話を聞いてまとめられた本がある。」

私が話したのも、その本からの引用じゃ」

幸助の動きが止まった。

「……神様って実在するの？」

「当たり前じやろうに。」

ん？ もしかしてそっちにはいなかったのか？」

「神話とか伝承は残ってるけど実在してるって証拠はない。話すならんてもってのほか。」

神様がいるなんて話してたら、まず正気を疑われる」

「神がいないなら世界はどうやって作られたというのかの？」

「度重なる偶然とか奇跡とか言われてた。

神様がいなくても世界ができる前から、今に至るまでのことは説明できてたし」

「信じられんのう」

「私もです。神がいない世界など想像もできません」

「世界が違うから、この言葉で納得できそうな気もするけどね」

「それで納得しておいたほうが無難かもしれんの」

よそはよそ、うちはうち。こう考えたほうが両者のためだろう。

神の存在しない世界のことを考えても意味はない。こちらにはいるのだから。考えてなにになるかというところ、戯曲や小説のネタになるくらいだろうか。

「神様がいるんなら帰る方法聞けるんじゃない？」

いいことを思いついたと幸助は笑みを浮かべる。

それに対してエリスは首を横にふる。

「どこにいけば会えるかわかっておらん。

会えなくとも話すことはできるが、そのギフトは希少でな。今の世には所有者はおらんよ。

声を聞くだけなら可能じゃが、それは一方的なもので会話とは呼べん」

「教会、神様を信仰する人たちの集まりってある？」

「あるが？」

「そこに行けば話せそうなんだけど？」

神様も自分のことを信仰する者たちを気にかけるのでは、と思っ

て聞く。

「人間が勝手に信仰しとるだけで、神々が気にかけることはないな。信仰する者よりも、気に入った生物を優先しとる。」

教会の人間に神託を授けず、どこかほかの人間に神託を授けるなんてよく聞く話じゃて」

「そっかあ、いい考えだと思ったんだけど」

「神に聞くという方法は、私も思いついてはいたんじゃないか。神に会えたとして帰還方法を知っているかどうか。」

神に会うのはきつと苦勞する。その苦勞が報われん可能性があると思うと、黙っていたほうがいいと思ったのだ、すまんの」

「知らないって可能性もあったか。神様っていうと万能って感じだから、知ってるって思い込んでたよ」

これも幸助とエリスたちの認識の違いだろう。

地球で神様といたらなんでもできるすごい存在というイメージだ。しかしこちらでは、人よりもはるかに優れできることも多い存在だが、万能ではないと歴史上でいくつか実例がある。

「話がずれたな。どのようにしてホルンの無事と竜の死を伝えるかだったか。」

私が屋敷に行くのが確かか、行きたくないがのう」

「手紙書いておきますね。あとは証拠として与えられた貴金属を一緒に持っていけば信じてもらえるでしょう」

「竜の死因は病死か事故死とでもしとくかの。断定せず想像の余地を残しておけば、勝手に結論付けてくれるじゃろうて」

「竜殺しが現れたと考える人が出てきませんか？」

「出てくるじゃろうが、言い出した本人も可能性は低いと考えるのではないかの？」

結論としては、気まぐれな大精霊が殺したか、寿命といったもの

になると思う。そうなれば狙い通りで万々歳じゃ」

優れた占い師が竜殺しの出現を言い当てるという可能性がある。だがエリスはそこから幸助のことがばれる心配はしていない。出現を知ることができても、個人の特定まではできないからだ。人間ではそこまでの精度の占いはできない。わかってせいぜいどこの国にいるといったくらいだ。

ホルンに竜殺しを見てないか問う者がいても、ホルンが竜のところまでに行く前に去ったらしいと証言すれば疑いようがない。事実、籠に乗っているときに竜の悲鳴をホルンと騎士たちが聞いているのだ。そのときに倒されたと判断し、ホルンが祭壇に到着するまでから竜の死体を発見までの時間でいずこかへと去ったと考えるだろう。

「とりあえず明日、山に行って死体の位置を確かめてくるかの。ついでに一発魔法叩き込んでやるとするか。

屋敷に行った際に、伯爵たちに死体の位置を教えれば勝手に確かめに向かうじゃろ」

明日からの方針を決めた三人はちょっとした雑談で時間を潰す。話題は幸助の世界のことで、ホルンたちはこちらとの違いに何度も驚かされる。そして幸助とホルンはエリスに促され、早めに就寝することになる。

一人残ったエリスはとっておきの酒を取り出し、ホルンの無事と竜の死を祝って一人で祝杯をあげた。

久しぶりに美味しい酒が飲めたエリスは、いい気分のままベッドにもぐりこんだ。

勉強、運動、また勉強、そして実践

「お勉強しましょう」

朝食を食べ終わり、エリスが空を飛び出発したのを見送ってすぐに、ホルンは隣にいる幸助に提案する。提案というよりは強制だろう。幸助に反対の意思はないが。

「なにについて？」

「こっちの常識についてです。最低限のことを知らないと困るでしょう？」

「あーうん。お願いします」

幸助はホルンから椅子に座って待つように言われ、ホルンは教材を持ってくるため書斎へと向かう。事前に書斎に入る許可はもらっているのもので、どこに必要なものがあるかも聞いていた。

必要な物を取ってきたホルンは幸助の隣に座る。

「まずは大陸地図を見て、位置を把握しましょう」

幸助が領いたのを見て、ホルンは一枚の紙を二人で見やすい位置に置き、大陸南部を指差す。

「現在位置はここ。昨日も言ったようにリッカート近くの森のそば。ピリアル王国に属しているわ。」

リッカートはそれほど珍しい街ではありません。特徴は、人口の多さと大きさが国の中で六番目ってことくらいね」

「人はどれくらい住んでんの？」

「周辺の村も合わせて……七十万のはず。」

王都は周辺地域を合わせると百万を楽に超えますね。たしか三百万に届いたような？」

「王都でそれだけなんだ」

「だって、王都で二百万だとこちらでは標準より少し下といった感じなのですが」

「俺の住んでたところの国の中心地は七百万超してたから」

東京二十三区の人口を思い浮かべこれで確かあったたよなど、思いつつ口にする。

「大きな国に住んでいたのですね」

「広さ的に見るとそうでもない。山ばかりで人が住めるところにぎゅっと集まってた。そんな感じ」

その地形でどうやって作物の育て人を養っていたのかなどと聞かれ答えていく。

脱線した話がおしるこの作り方に及んだところで、両者とも話がそれていることに気づいた。

「この話はまた別の機会にしましょうか」

「そうだね、いい加減やめないとどこまででも脱線していく。」

それにしても米とか味噌とかがあるって知れたのは嬉しかった。

食べなれたものを食べられるのは嬉しい」

「私も話に聞いただけですよ。この大陸にはありませんし」

「あるってわかっただけでもいい収穫だったよ。いつか食べに行けたらいいな」

「私もチャーハンやお寿司というものを食べてみたいです。」

えっとそれでどこまで話しましたっけ？」

「現在位置」

そうでしたとポンと手を叩いて、ピリアル王国の主要都市を一つずつ指差していく。

歩きや馬車や飛車を使つての移動時間も加え大体の位置関係を話していく。

飛車とは名前の通り、空を飛ぶ乗り物だ。見た目は空飛ぶバス。人や亜人の魔力を買い取って燃料として動く。乗車料金が高いので、一般的に金持ち専用となっている。一般人はよほど急いであるときにしか使わない。個人で飛車を所有をしているのは王族と公爵家のみだ。ほかの国でもトップのみが個人所有する。

「続いて大陸の位置だけど、これは詳しく説明しなくてもいいですね。

中央にカルホード大陸、その東にセブシク。カルホードの南西にペレレ諸島。諸島の東、カルホードの南にエゼンビア。カルホードの北にホネシング。

私たちがいるのはセブシクです。人間種族が多く住んでいます」「人間種族？ その言い方だともしかして異種族がいる？」

「ええ、いますよ。エルフやドワーフやゴブリンなど妖精族、獣人族、魔族、冥族、代表的なものはこれくらいです。あとはこまごまと」

「ゴブリンも妖精族？ 魔物に属するって思ってた。あと魔族ってうちんとこじゃ邪悪って言われてたんだけど」

ゲームやライトノベルだと大抵敵役として出てくるので、こちらでもそうではないかと思ったのだ。

「そちらの世界だとゴブリンは魔物なの？」

こちらでは人間と同じように一種族として捉えられているわ。

魔物としてのゴブリンもいることはいるけど、それは理性を失い暴れているゴブリンが魔物と称されるの。でもこういう状態だと

ゴブリンだけじゃなくて、ほかの種族も魔物としてみなされます。

魔族については、悪人はいますが種族全体が邪悪かと聞かれれば答えはノーです。魔族は魔法が得意な種族ということを示しています」

「なるほど。あとは冥族ってのが想像つかない」

略しているだけなのかと頷き、さらに質問する。

「冥族は死族とも言われてまして、一度死んで再び動き出した人たちのことをさします」

「アンデッドのことか」

「冥族の前でアンデッドと言ってはいけません。

アンデッドとは魔物の区分のひとつで、冥族に向かって言った場合は侮蔑の言葉になります。気をつけてくださいね。問答無用で戦闘になることもありますから」

「肝に銘じときます。殴り合いの喧嘩なんてしたことないし」

「覚えておいて損はないです。

私たちと同じように、礼を持って接すればきちんと礼を持って返してくれますから、特に意識せずともいいんですけどね」

「種族に関することでほかに気をつけることはある？」

魔族が常に身につけている宝石はその人の魂石なので触れては駄目、獣人とギフトで獣人化できる人は別物などなど種族に関して気をつけることをホルンは話していく。

魂石とは魔族が生まれたときから持っている宝石、その人の一部で弱点にもなる。獣人は獣の顔を持つ人型生物で、ギフトで変化した場合は顔に大きな変化はない。完全獣化できるのはギフトを使用してのみ。冥族は体臭を香水で誤魔化している人が多いのでわかりやすい。

といったことを話していき、種族の話を終えた。

「次はお金の話です」

エリスに借りている硬貨をテーブルに置いていく。

並べられたのは、同じ大きさの四枚の四角い硬貨。左から金銀銅だと幸助もわかった。しかし一番右はよくわからない。

ホルンが一番右の硬貨を指差す。

「これが1ルト。もつとも価値の低い硬貨です。せきかといいます。この1ルトが二十枚で、銅貨になります。そして銅貨二十枚で銀貨となります。さらに銀貨三十枚で金貨となり、金貨十枚で閃貨となります。」

閃貨はエリスが持っていなかったので用意できていません。見た目は銀と緑を混ぜた色で、ほかの硬貨よりも少しだけ大きいですね。日常生活で使われるのはせきかと銅貨と銀貨で、大きな買い物すると金貨が使われることがあります。閃貨は平民ならば見る機会ほとんどありませんし、使う機会はないと言い切れます」

「せきかの材料って石？」

ホルンが頷く。

石の貨幣と書いて石貨だ。幸助の脳内で「せきか」と平仮名だったのが、石貨と変換された。

「石も材料の一つです。あとはミシト鉱石というものがまざっています」

ほかにジレンという合成金属も微量に混ざっているのだが、ホルンもそこまでは詳しくはない。

ジレンは偽硬貨を判別するために入っている。この金属は真贋判別用の魔法に反応するように作られていて、石貨以外の硬貨にも入

れられているのだ。

ジレンのことは偽造対策のため硬貨鑄造の関係者のみしか知らされていない。だからホルンが知らなくとも無理はない。

「一人一食あたりいくらで食べることができる？」

閃貨の価値がいまいち掴みづらかったので、見当をつけるため質問する。

「そうですね……贅沢しなければ10ルト前後でしょうか」

「四人家族で一日の食費銅貨六枚、一ヶ月で銀貨九枚。」

四人家族の一月の生活費はいくらくらい？ 平均的な収入で

「えっと……税も含んで銀貨二十枚くらい？ おそらくですが」

「……一年三ヶ月分の生活費で閃貨一枚かあ。それなら大金だね」

素早く計算し納得した幸助はうんうんと頷く。

「計算できるんですね。しかも早い」

「褒められることかな？」

「そちらでは今の計算は皆できて当たり前なのですか？」

「俺の住んでいたところではね。だいたい十才を超えたら、早さに差はあるだろうけどできるようになる。」

七才辺りから皆学校に通い始めて、十六辺りまでは勉強するように国が指導してる。そのあと勉強し続けるかは個人の自由。ほとんど人が続けるけどね」

「勉強に力を入れている国なのですね」

「そう……だね。でも学んだことをすべて活かせるわけでもないんだけど。」

使い道がわからないものを教えられて、その後ずっとその知識を使わないってのはざらにあることみたい」

「……昨日も話を聞いて思いましたが、平和で余裕のある国なんです。すね。

生きていくうえで使わないかもしれない知識まで教えてくれるなんて、民の可能性を育てようとしているように感じられます。

こちらでは十代前半から立派な労働力とみなされますよ。育てるよりも、早く労働力に回し国の発展を促そうとしています」

いい国ですねと羨ましがな顔のホルンに、幸助は遠く離れた故郷がいいところなのだという実感を得た。

住んでいるときは当たり前だったのでわからなかったのだ。授業で海外では戦争をしているところもあると教えられても実感がなかった。しかしここにきて便利さはもとより、平穩に暮らせるだけでも羨む人がいるということをおぼろげながらも理解できた。

「お金の話はここまでです。

そろそろお昼ですから、挨拶について話して終わりにしましょうか。そう難しいことでもないので簡単に覚えることができますよ。」

ここでホルンは椅子から立ち上がる。実例つきで進めていくのだ。

「親しい人やすれ違うときには言葉のみで大丈夫です。丁寧に行う場合は、このように片腕をお腹の辺りに持つてきて頭を下げます。

そして貴族など目上の相手や敬意を払う相手に行う場合は、右手を心臓にあて頭を下げます」

「動作になにか意味ある？」

「右手を心臓に当てることにはありますね。腕をお腹に持つていくほうは知りません。

ほとんどの生物にとって心臓は生きていくうえで大事なものです。そこに手をあてることで、あなたは私の心臓のような方です、あなたなくして私は生きていきませんと示しているそうです」

「なんかプロポーズみたいにも思える」

「そうですね、プロポーズに使う人もいるみたいですよ」

今日の勉強はここまでと言って、ホルンは昼食を取りに台所に向かう。幸助も手伝うために一緒に移動する。

昼食は朝と同じものだ。スープを温めなおし、パンとチーズと果物をテーブルに並べて終わり。

ホルンは簡単な調理しかできない。それを知っているエリスが準備していったのだ。一人で調理させるにはまだまだ不安があるとわかってる。

エリスがホルンの料理の腕を知っているのは、エリスがホルンの料理の先生だからだ。エリスに会う前は少しも料理できなかった。ホルンにとって料理とは誰かに作ってもらったものだった。それを知ったエリスが少しずつ教えてくれたはできたほうが便利だと言って、簡単なものを少しずつ教え込んでいた。

「ごちそうさま」

幸助が手を合わせ、ホルンが食器を重ねていく。

使った食器を水につけ、幸助が洗い、ホルンがタオルで拭いて棚に置いていった。

食事と後片付けが終わって一息ついていくときに、ホルンはエリスから幸助に指示されていたことを伝える。

それは薪割りだ。

「薪割り？」

「知らない？」

「いや暖炉とかにくべる木を切れてことだね？」

「ええ、それであってます」

疑問あるような仕草を見せたのは、働かざる者食うべからずってことなのかと考えていたからだ。

その考えははずれている。身体能力の上昇具合を実感させようと考え、指示を出したのだった。

実際に動くと、どれだけ上昇しているのかわかりやすい。ついでに薪も増えてちょうどいい。エリスの考えはこんなところだ。

「案内するからついてきて」

二人は勝手口から出て、すぐそばにある小さな倉庫に入る。

大きめの鉋とノコギリと皮付きの丸太が壁に立てかけられている。木材は長さ一メートル強、円周五十センチ以上のもの。幸助の腕の何倍もの太さがある。

けっこうな時間ほったらかされているのか、鉋もノコも木材もうっすらとほこりが積もっている。

「これを大体三十センチ弱の長さの薪にしてくれとのこと。薪一つのサイズは最低でも八等分くらいにしてくれとも言っていました。

急ぐ必要はないそうです。自分のペースでやれと」

「了解。切ったものはこの小屋の中に積んどけば？」

「ええ。では私は家の中に戻っていますね。」

あ、そろそろ通訳魔法の効果がきれますから、今のうちになにか聞いておきたいことはありますか？」

ホルンは倉庫から出ようとして振り返る。それに少し考えこんだ幸助は首を横に振る。

そうですかと言ってホルンは家に戻っていく。

「とりあえず丸太を切っていくことから始めないと、四等分くらいで三十弱になるかな」

丸太をひょいっと持ち、小屋を出る。

この行動だけでも筋力が上がったことが実感できた。丸太が重くなかったのだ。

「……これならまとめてもてるな」

四本ほどまとめると持ちにくさはあったが、まだ余力があった。周囲を見渡しても作業台がないので、転がした三本の丸太の上に丸太一本を載せ、ノコギリで切りやすくする。十五分ほどギーコギーコと切る音が響く。

「ふう」

かいてもいない汗をぬぐい。ノコギリと大鉈を持ちかえる。

「はじめに軽く食い込ませて地面に叩きつけるといいんだっけ」

昔テレビで見た画像が鮮明に脳裏に浮かぶ。このように以前見聞きしたことがスムーズかつ詳細に思い出せるようになっていく。これも竜殺しの称号のおかげなのだろう。

鉈を木材に食い込ませ、力を入れ振り下ろした。

木材は見事に真っ二つ。それで勢いが止まらない鉈は地面に深く食い込んで止まる。土と刃の摩擦で止まったのではなく、自力で止めたのだ。止めなかった場合、振りぬけていたはずだ。

「……土の抵抗まったく感じなかった」

自分の起こしたことにひきが入っている。

「これがステータスが上がったってことか。気をつけないと変な失敗しそうだ」

エリスの思惑は見事達せられ、幸助は自身の能力上昇を実感する。力を抜いてと呟きつつ、幸助は木材を切っていき、五回切ったところで動きが止まる。

この調子なら食い込ますことなく、振り下ろしただけで切れそうだったのだ。

「よっと」

目標がややずれて斜めに切れてしまう。

「だったらこうか？」

振り下ろしイメージを修正し、振り下ろす。今度は切れた二つの大きさが違う。

再度修正し、振り下ろす。満足できる切り方ができた。

このあとは狂いなく綺麗に切り続ける。

準備したものを全て指示通りに切り終えたところで、幸助はちょっと遊び心が湧いた。

空中に薪を放り投げ、真っ二つに切れるかなと思い、今ならできるかもと思ったのだ。

「よっと」

薪を放り投げ、落ちてくるタイミングに合わせ鉋を振るう。

結果は失敗。力加減を間違え半ばまで食い込んで止まる。しかも縦に切れず横から食い込んでいるのだ。

薪から鉋をはずし、もう一度投げる。今度は二つに切ることはで

きた。だが切り込む位置はずれたままだ。

そのまま何度も試していき、一時間後には100%成功させることができるようになっていた。こうなるともっと難易度の高いことができないかと考えるようになる。

薪を割り始めて四時間後、もう終わった頃だろうと様子を見に出てきたホルンが見たものは、放り投げた薪を空中で四等分にする幸助の楽しそうな姿だった。

「コースケ？」

「ん？ ホルンなにか用事？」

「ghmr ejppk', p, m」

通訳魔法の効果時間が切れたことで、幸助にはホルンがなにを言っているのかわからない。それでも驚いていることは表情からわかる。

言葉が通じていないことを仕草で伝えると、それでホルンは落着きを取り戻し、家に入るように伝える。ホルンの目から見て、十分すぎるほどに薪が作られていたので終わってもいいだろうと判断したのだ。

薪を集めて片付けた二人は家に戻り、エリスが帰ってくるまでのんびりと過ごす。

家の中はある程度片付いていた。幸助が薪を割っている間に、ホルンも掃除をしていたのだ。だが綺麗にはいかない。料理と同じように掃除も誰かにやってもらうものだったからだ。ホルンがしたことは、散らかっているものをもとあった場所に返し、床を掃いた程度だ。置き場所がわからないものは、邪魔にならないよう部屋の端にまとめて置いている。

エリスが帰ってきたのは午後五時過ぎ。行きだけで九時間近くかかっている。帰りは転移魔法を使ったのだが、行きでほとんどの魔力を使っていたので魔力回復薬を使って不足分を補っていた。

通訳魔法が効果をなくしているのに気づき、かけたことで魔力は
ほぼ打ち止めとなった。

テーブルにぐたりと倒れこむ。

「疲れたわ、魔力をここまで使ったのは久しぶりじゃ」

「お疲れ様。竜の死体は見てきました？」

「うむ。きっちり死んでおったな。あれだけ暴れまわっておったあれの醜態を見て、溜まっていた鬱憤が綺麗さっぱりなくなったわ！」

上機嫌に笑い言い切った。よほどあの竜が気に入らなかったらしい。

「明日にでもコルベス家に行ってくるとしよう。手紙は今日のうちに書いておけ」

「わかりました」

「コースケ、薪割りはどうくらい進んだ？」

「立てかけられてた丸太全部薪にしたよ」

「そうかそうか。それで身体能力が上がっていることは確認できたかの？」

「最初は驚いたけど、ある程度確認できた。向こうにいた頃とは比べものにならないくらい上がってる」

「じゃろうな」

「私が様子を見に行ったときは、空中に投げた薪を浮いてる間に四等分にするって離れ技やってました。」

あんな切り方初めて見ましたよ」

「ほほう」

「いや、できるかなあって思って練習してたらできるようになったんだ。俺もちょっと驚いてる。」

竜殺しの称号の後押しってすごいね」

綺麗に同じ大きさにすると拘らなければ六等分もできるようになっている。

「確かに。例えば同じステータスでも行動の補正がなければ、どれくらい時間がかかるか。

しかしそれならば魔法についても上達は早そうじゃの」

「魔法を教えてくださいん!？」

魔法という不思議は使えない者にとって憧れだろう。おとぎ話に出てくる魔法使いの起こす奇跡に、わくわくした者は多いはずだ。幸助も魔法という存在に心躍るものを感じていた一人だ。

「うむ。いつまでも私が通訳魔法をかけていては不便じゃろう？

自分で使えるようにしてやらんとな。夕食後に魔法の基礎知識から教えてやろう。通訳魔法自体はそう難易度の高いものではない、習得に苦勞することもないじゃろ」

「よろしくお願いします！」

勢いよく頭を下げた幸助にエリスは頷き返した。

そのあと少し眠るといってロッキングチェアに座り、眼を閉じた。魔法を使い続け、本当に疲れているのだろう。すぐに小さな寝息を立て始める。

「ホルンは魔法についてどれくらい知ってるの？」

「私ですか？ 自分の専門以外はそう詳しくは」

ホルンが使えるのは治療系と少しの補助のみだ。補助は患者が痛みで暴れたときに動きを止められるためや、患者を支えられるように自身の筋力を強化するためと治療するときに使いそうなものを中心に覚えている。攻撃系はからきしだ。護衛が常にそばにいたので、

覚える必要がなかった。

「ここに来るまでに使ってた光の粒も魔法であってる？」

「ええ。明かりの魔法ですよ」

「初めて見たときすごい驚いたよあれ。まだここが地球だって思ってたから、魔法使える人がいるのかって」

「あれは誰でも使えるから、そう驚くようなものでもないんですけどね」

「魔法がないところに住んでる人から見ると、いきなり光が現れると驚くよ」

「そう？」

地球に住むものにとって魔法はなくて当たり前、同じようにこちらの住人にとっては魔法はあって当たり前。

幸助が地球での暮らしに特別なものを感じていないように、ホルンも魔法に特別なものを感じていない。だから幸助の驚きを完全には理解できない。

一時間後にエリスが目を覚まし、夕食の準備を始める。それを幸助とホルンも手伝っていく。手伝えるのは材料を切ったり洗ったりと下準備のみだ。調理の段階になると二人ともテーブルに追いやられた。手軽に済ませるつもりなので、これ以上の手伝いはいらなかったのだ。

夕食と後片付けが終わり、お茶を用意して魔法の講義が始まる。

「魔法とは世界に望みを告げて叶えてもらう技術のこと。魔法でできることは多い。それこそなんでもできるというくらいに。」

魔法で起こせる現象は奇跡にして歪みだ。世界から見ると魔法は不自然なのじゃよ。

だから魔法を使う際にはある程度の手順を踏む。魔法が自然な現象と認められるのならば、誰もが思い描くだけでなんの代償もなく

使えておるはずじゃ。

手順とは世界に問いかけることであったり、動作であったり、陣を描くことであったり、それらを含めた長時間の儀式であったりじゃな。

こういった手順を踏み、供物を捧げ、世界に伺いを立てる。これこれこういった現象を起こしたいのですが、よろしいですかと。そして手順が正しく、供物が十分だと判断されると、世界は起こしたい現象を認め、魔法が発動する。

魔法を使う際の流れはこんなところじゃ。

供物とは魔力のこと。たまになにかしらの鉱物や薬草などを必要とすることもあるかの。

ここまででなにか質問はあるかの？」

幸助は聞いたことを反復していく。

「魔法の効果を起こしているのは自分じゃなくて世界？」

「そのとおり。我らは起こしたい現象を世界に願うだけじゃ。

一方で、ギフトは使い手自身が魔法のような効果を起こしておる。両方で消費するものも違う。魔法は魔力、ギフトは体力」

「じゃあ常に効果を発揮してる竜殺しは、常に体力を消費してる？」

「いや、しておらん。常時発動しているものは基本的に消費はないと思っっている。

例としては、私の魔法融合やホルンの治癒は体力を消費する。暗視や怪力などは常に効果を発揮しておるから体力の消費はない。

怪力は常に筋力の一段階アップという効果じゃが、ギフトが成長すると増強ということができるようになる。これは体力を消費して、さらにもう一段階筋力のアップとなっておる。これが例外の一つじゃな」

「なるほどなあ」

「ほかに質問は？」

「魔法を使う際に必要なのは魔力と手順を間違わないことで、ギフト以外の個人の才能は関係してこない？」

つまりギフトとか抜きにして、誰が使っても効果の大きさに差異はでてこない？ 魔力の多い人と少ない人が同じ魔法を使ったとき、効果は同じ大きさ？」

「その認識でよい。魔力の多さは効果の強弱ではなく、使える魔法の多さに関連する。」

魔力の少ない者が、必要魔力を準備できない魔法を学び覚えたとしても、基本的にはどう頑張ろうと使えぬ。

それでも使うことを諦めずに試行錯誤し、結果を残した者がいる。その結果の二つが、魔力を貯めておき魔法使用の際に魔力を開放する魔法補助道具と、複数人で一つの魔法を使う集団儀式じゃな。魔法補助道具は遺物で手に入れにくく、集団儀式とはある魔族の秘術じゃ。この二つの入手は一苦労じゃぞ。

ほかに質問はあるかの？」

「世界にあげた魔力ってどうなってるんだろう？」

これは知的好奇心からでた質問だ。知らなくても魔法使用にはなにも問題ない。

「歪みを正すことに使われておるようじゃ。」

それを私は実感したことはないが、神々がそのように言ったらしい」

ほかにとは聞かれ、ないと首を横に振る。

「それでは次じゃな。」

魔法には二種類ある。形式魔法と無形式魔法。

一般的に使われておるのは形式魔法じゃな。魔法書に載っておるのもこちらじゃ。

魔法は歪みといったな？ その歪みを少しでも正常なものと世界を騙し認めさせ、魔法発動を容易にしたのが形式魔法。こちらは世界への問いかけ、動作、陣を描くといった手順で手軽に使える。手軽な分、大きな効果は期待できん。

ちなみに種族によって精霊術、獣式術、魔法、冥技法と名前は変わるが違いはない。作法が少し違うだけじゃ。

無形式魔法は効果の大きな魔法に使われる。手順は儀式のみ。無形式魔法で起きる効果は大きな歪みと捉えられ、形式魔法のように世界を騙すことはできん。じゃから時間をかけて伺いを立てる必要がある。

あとは新たに魔法を生み出した場合、それが簡単に発動できるものでも最初は無形式魔法に分類される。学会に発表し、形式魔法と認められた場合、形式魔法として魔法大鑑に載る。

基礎知識としてはこんなところじゃろうて」

「手順を踏まずに、問いかけや動作や陣なしに魔法を使うことって可能？」

以前読んだ漫画や小説に出てきた詠唱破棄や無詠唱について聞いてみる。

「無理。それも古来より研究されてきたが誰一人として成果を上げたものはいない」

「いいところまできて失敗続きなのか、まったく成果なしのどっち？」

「後者」

即答だ。

成果がでないのは当然だ。すでにエリスが言ったように、魔法で起きる現象は世界が起こしている。生物は世界に頼み込んでいるだけ。

手順なしでの魔法発動は、世界が起こしていることを生物が自力で起こすこと。発動成功するということは、世界と生物が同等というおかしな等式が成り立つことになる。こんなもの魔法という存在以上の歪みだ。

使いたい魔法が例え魔法を使わずとも行える簡単なことでも、手順なしでは効果を現すことは絶対ない。

例えば弱風を起こす魔法がある。これは団扇を使えば誰にでも簡単に再現できる。それほど簡単なことでも魔法での効果を求めようとする手順を踏まなければならない。

簡単なことだからこれくらいならば手順なしでも大丈夫だろうと、昔の研究者が研究した実例がある。一ヶ月で終わるだろうと思われた研究は、実に四十年という長い年月をかけても終わることはなかった。そして研究者が死んで、結果がでないまま研究は終わりとなった。

以降、手順をなくせる研究をしろと研究者に命じる者はいなくなった。これを研究課題に選ぶ者もほばいない。ときおり無駄に自信家な研究者が挑戦しては玉砕する程度だ。

「昔の研究者がここまで時間をかけても無理だったのだ、手順なしでの魔法使用などできると思うかの？」

「無理だね」

幸助は納得し頷いている。

「では魔法を使う際に注意することを話して、講義は終わるとするかな。

魔法を使うには手順を踏んで魔力を捧げる。

この魔力を捧げる際に必要分を出す。これが大事なことじゃ。当たり前なことではあるが、できていない者も多い」

「手順を踏めば勝手に使われるんじゃないんだ？」

「捧げる、という表現からわかるように術者から動かねばならん。自動的に減るということは世界が術者から抜き取っていくということ。世界としては魔法が発動しないのならば別にそれでもかまわんという姿勢じゃからな。わざわざ抜き取るという手間をかけてまで、魔法発動を認めるつもりはないのだろう」

「なるほど」

「話を戻すが、必要分の魔力を捧げることがなぜ大事かというとじゃな。」

当たり前だが魔力が足りていないと魔法は使えん。捧げた分も無駄になる。

もう一方で必要分よりも多く魔力を捧げた場合は、魔法は使える。だが効果に変化はない。こちらも余分な魔力は無駄となる。

魔力は必要分をぴったり捧げること。これを覚えておくように」

「了解」

「まあお前さんの学習能力ならば、練習さえすれば問題はないと思う。」

講義はここで終わり。実戦に移るぞ」

「待ってました！」

いよいよ魔法が使えるようになり、幸助のテンションは上がる。

「そこまで楽しげにすることでもないと思うがのう」

「魔法に対して憧れがあるみたいよ」

読んでいた本から目を離しホルンが言った。

「憧れのう……わからん」

エリスにとっても魔法はあって当たり前のものだ。ないと思われたものが目の前に現れ、触れることすらできることへの幸助の興奮

は理解できないだろう。

「まあいいさ。とにかく練習を始めよう」

「よろしくお願いしますっ」

「まずは簡単なもので、肩慣らしと行こうか。『光よきたれ』」

エリスは言葉と共に腕を振る。するとエリスの前方に光の粒が現れた。野宿でホルンが使ってみせた魔法だ。

「このように言葉と共に魔力を捧げるだけでいい、やってごらん」

「……どうやって魔力を捧げるん？」

「どうやってって」

ここでエリスは言葉に詰まる。いざ説明しようとするとなかなか難しい。

この世界の住人にとって魔力を捧げるということは、呼吸するということと同じ。できて当たり前なのだ。それをどうやってと問われると戸惑う。

「んー……言葉にしづらい。

なんというか、自分の中にあるものを体外へと押し出すような感じかのう？」

エリスは困ったようにホルンを見る。

「私を見られても困ります。専門家ではありませんし。

便利だから使っていて、どのような働きで効果を発揮するのかなど気にしたことはありません」

「普通はというか誰もが気にせんわな。

まさかここで躓くとは」

魔力があること自体は金属版で調べてわかっているのだ。だから当たり前のように魔法を使えるのだろうと考えていた。

初歩ですらないところで躓くとはエリスもホルンも予想していなかった。

「とにかく言葉通りに言ってみたらどうじゃ？」

「『光よきたれ』？」

エリスの真似をして腕をふる、がなにも反応はない。

エリスとホルンは本当に困ったという顔になる。

「自分でいろいろ試してみるしかないかなあ」

「頑張ってみてくれ。こっちでもいいアドバイス考えてみる」

幸助は頷いて小さく言葉を繰り返します。言葉に力を込めてみたり、意識を手に集中してみたりといろいろな試行錯誤していくが、なるの反応もない。

その日は繰り返しだけで、時間が過ぎていき就寝時間となった。

そして次の日も、暇をみつけては使ってみようと言言葉を繰り返すも変化はなかった。

さらに次の日も同じだった。エリスとホルンも、幸助を褒めたり、おだてたり、貶したり、罵ったり、脅してみたりと協力を惜しまなかった。

エリスの貶し方が堂に入っていたり、罵るときホルンが少しだけうっとりしているように見えたが、幸助は演技なのだと思ひ込む。しかもその夜、成功したと喜んでいたら、目が覚めて夢だったとわかり落ち込んだ。

「どうしたものかのう」

「本当に」

ぐたりとテーブルにつつぷす幸助を見ながら二人は話している。

「魔力は人間の一流どころと同じくらいある。これはたしかなのだがどうして使えんのか。」

書物にもこういった出来事は載ってなかったしのう」

「魔力はある、言葉も間違えていない。」

魔法を使うには魔力を捧げる。使えないということは、世界が魔力を受け取っていない」

ホルンは魔法を使う際に行うことを再確認するように述べていく。そして一つの可能性を見出した。

「……もしかして」

「なにかわかったのかな？」

疑問に思ったまま、思いついたことを口にする。

「世界にお願いしていないではと」

「だが最初に説明したはずじゃぞ。魔法とは世界に望みを告げて叶える技術だと」

「幸助にとってここはまだ異邦の地で、世界とはもといいた世界のことなのでは？」

だから願う場合もちちらではなく、あちらの世界を思っ願っていたのかも」

「ふむ。納得できる説じゃな。」

どれ、そこを十分に言い聞かせて使わせてみるかの」

起きろと言いつつ、スパンと幸助の頭頂部を叩く。遅々として進まない魔法練習に少しイラついているのだろう。

「ホルンが有力な説を思いついてくれた。これが正しければお前さんは魔法を使えるようになる。よく聞いておけ」

「わかったよ」

「お前さんは今ここにいます。それはわかるな？」

幸助は頷く。

「ならばお前さんの世界はここだ。以前いた場所ではなく、今生きているこちらのなのだ。

だから願いはこちらの世界に願うのが筋だろう？

いいか？ お前さんはこちらで生活を送っている。こちらの世界に感謝し、祈りを捧げよ。

そこを踏まえて魔法を使ってみるがいい」

幸助は頭の中でこちらの世界に話しかけることを強く意識し、言葉紡ぐ。

同時に己の中で何かが蠢いたことを感じ取り、それを動かせるだけ体外に押し出した。

「光よ、来たれっ！」

幸助の前方に、ホルンやエリスが魔法を使ったときと同じ現象が起きている。

「できた！」

「おめでとうございます！」

幸助とホルンが手を取り合い喜んでいる。

エリスはようやくかと呟いて、椅子に座った。

「はいはい、いつまでも喜んで座れ」

「これが喜ばずにいられるかあーっ！ やっとやっと使えるようにっ」

「うるさい」

幸助の思いをばっさりと切り捨てて、椅子に座らせる。

「まずはおめでとうと言っておこうかの」

瞬間、輝く笑顔を見せかけた幸助を押さえるように続ける。

「だがっ！ 魔力出しすぎじゃたわけ」

「どれくらい使えばいいかわかんないから、とりあえず動かせるだけ動かしたんだけど」

「それにしても全魔力の90%は出しすぎじゃろう。本来ならば10%以下で十分じゃ」

「大体どれくらい使えばよかったん？」

「そうさの……お前さんの魔力の大きさから考えるに、全魔力を100%として仮定したら1以下。これで使うことが可能じゃろうて」

「そんだけでいいの？」

いくらなんでも少なすぎるのではと驚いている。

「簡単な魔法と言ったろう。簡単ということは魔力も少量でいいのじゃ。」

今日はずっと光の魔法で練習しておれ。

ほかの魔法も教えようとは思ったが、今の魔力量では難しいのう」「そーいや魔力って一晩寝たら全快する？」

「一晩寝て自然回復するのは半分ほどじゃな」

なるほどと納得し幸助は魔法を使い始める。

少なくとも意識して、ほんの少しだけ魔力を動かす。今回は少ないのか、光の粒が出ることはなかった。

もう少し多めにと再度挑戦し、成功する。

「もう少し減らせそうだなあ」

このあと五回成功させ必要量を把握する。

言葉を変えるとどうなのかなど応用を試しつつ、時間は流れていた。

称号竜殺し効果の一端

幸助が魔法を使えるようになり二日経ち、幸助は新しい魔法を覚えてもらっている。記憶力も以前と比べはるかに発達しているおかげで次々と覚えることができる。

この二日で、エリスはコルベス家へと手紙は届けていた。明後日明々後日には、コルベス家当主と調査隊が山へと竜の死骸を確認するために出発するだろう。

目的であった通訳魔法はすでにマスターし、ほかにも教わっている。覚えている魔法は家事と治療中心だ。家事はエリスから、治療はホルンから。

目玉焼きを作る魔法などいらないのでは、と思いつつもものちのち必要になるのだろうと考え習得していく。

エリスが治療魔法を教えるのは、それが一番得意だからだ。しかしエリスが家事魔法中心に教えているのは、家事分担で楽しめるという思いからだ。のちのちの複雑な手順の魔法に応用などされない。

目玉焼きを作る魔法を教えたのは料理できなさそうという思い込みからだ。実際は料理本の手順に従って作っていえば、失敗しない程度の腕を幸助は持っている。複雑な手順じゃなければという条件がつくが。

「今回の魔法は洗濯じゃ」
「ういっす」

今、幸助とエリスは庭に出ている。二人のそばには洗濯物の入った籠と、水の入ったタライが置かれている。洗剤はない。開発されていないのか、必要としないのかはわからない。

ホルンは室内で窓際の椅子に座り、外から聞こえてる声を聞きつ

つ本を読んでいる。

「まず下準備としてタライに水を入れておく。それに洗濯物を入れる」

幸助が服や靴下や下着などを入れていく。

「ん？」

「どうした？」

「なんであんたらのパンツとかも入ってんだ！？ 分けとけよ！」

「気にするな。この年になるとそういった羞恥心は少なくなる」

「この年ってエリスさんどう見ても二十代」

「私は今年で七十じゃぞ？」

目の前に立つエリスをまじまじと見る。やはりどこからどう見ても二十代だった。

「私は長寿の種族じゃからな」

「さすが異世界。それでエリスさんについては納得するとして。

ホルンはなんで？」

「私ですか？ コースケが洗濯するなんて知りませんでしたし。

私自身は洗濯できませんから、洗ってもらえるのに文句など言うことはできません。

ですがじろじろ見られるのはちょっと」

言いつつホルンの頬に少し朱がはしり、視線をずらす。

幸助は気をつけますと答え、気を取り直しエリスへと向き直る。

「納得したかの？ では続きだ。

『ざぶざぶ洗え』と言って、指を洗濯物に向けて右回りに一回く

るりと回せ。

魔力量は明かりの魔法の十三倍程度じゃな」

「ざぶざぶ洗え」

指示通りに魔法を使うと、タライから洗濯物が水ごと浮かび、五十センチほどの位置で止まりくるくる回りだす。

立て回転横回転逆回転と回り、洗濯物はおみくちゃにされている。それを見て幸助は魔法版洗濯機みたいだと考えている。

「しつこそうな汚れがあるときは、汚れ落としの魔法も併用するといい」

「それはどうやって使うん？」

「洗濯物を指差して一回縦に振り『汚れなし』と言えばいい。

魔力量は明かりの魔法の八倍程度じゃな」

幸助はこの魔法も使ってみる。薄い煙が発生し、水の回転に巻き込まれていく。

「あとは回転が収まるのを待つだけじゃな。

時間にして、そうさな……三十分ほどか。その間に回転は弛んでいき、水もタライへと徐々に落ちていく」

「三十分暇になるんだ、なにしようか。というか回ってる間、目を離してても大丈夫？」

「問題なしじゃ」

家の中にも入っておこうかと幸助は考え体の向きを変えたとき、壁の角近くの地面に人の影が映っていることに気づいた。

影の主はすぐに姿を現す。濃紺の短髪と黒の目を持つ、人のよさげな大柄の男だ。年は幸助よりも上で、ホルンに近いように見える。背には無骨な造りの斧を背負い、上半身のみ鉄製の鎧に身を包んで

いる。

男は幸助を見て驚く。

「ね、姉さんが男を連れ込んでる！？？」

しかも十五にもなっていないような子供っ！？ ショタっ気はないと思ってたのに！！」

「なにぬかしとる！ 焔の飛礫よ！」

エリスが差し出した手から、三センチの火が十個ほど男へと向かって飛んだ。

幸助がこの世界に来てはじめて見た攻撃魔法は、おしおきとして使われた。

「あつつ熱い！」

男はその場に倒れじたばたとしながら、熱さに悶えている。

「エリスさん、この人知り合い？」

「ボルドスという名の愚弟じゃ。何しにきたのやら」

「お、俺は姉さんの様子を見にきたんだよ」

火傷の痛みに顔をしかめながら起き上がる。

「そろそろ落ち着いた頃かなって思ってたさ」

「落ち着く？ どうして？」

「いやホルンが」

「私が？」

ボルドスの火傷を治療するために庭に出てきたホルンが、自分の名に反応する。

「あ、ホルン久しぶり。」

ホルンが生贄になって、落ち込んだり荒れたりしてるんじゃないかと」

「生きてるから落ち込む必要はないな」

「なにいつて……まさか寂しさのあまり幻覚を？」

本気で心配しているのだろう。目には嘲る色などまったくない。けれどもホルンは馬鹿にされたように感じる。口の端が引くつくのを感じながらボルドスに問う。

「いや死んでないじゃろ？ 死んでたら隣に立つ者は誰なのかと」
「隣？」

ボルドスが誰もいない方を見て、そっちではないとエリスは指でホルンを示す。

「ホルン……ホルンだな？ ホルンホルン……」

なにかを考えるようにホルンの名前を繰り返す。
やがてなんらかの結論に至ったのだろう、顔から血の気が引く。

「ばばばばば化けてでた！？」

「いい加減死んでいないということを認めいっ！」

慌てるボルドスの頭をエリスはグーで思いっきり殴る。

エリスの筋力ランクはDー、そんじょそこのゴロツキよりも上だ。対してボルドスの頑丈ランクはCー、後々にひびく怪我はしなかった。むしろ殴ったエリスのほうが手を痛めた。

ホルンが火傷を治療したことで、ようやく生きていることを認め

たボルドスは笑って誤魔化している。

「いやーごめんなさい。あっはっはっは、まさか生きてるとは！
はははははっめでたいな！」

「うるさい。笑ってないで落ち着いて話せ」

「うっ、勝手に死んだことにしてごめん」

「気にしてませんよ。私も生きていられるとは思っていませんでしたし」

「どうして生きてるんだ？ 逃げてきた？
それにしても竜が暴れてないし」

ボルドスも竜が死んだとは思いつかない。

「信じられんかもしれんがこやつが殺したのじゃよ。話を聞くかぎり
は偶然じゃがな」

ぽんぽんとエリスに頭を叩かれたあと、幸助はぼかんとしたボルドスに一礼する。

「竜殺し？ まったまたく冗談だろう？」

エリスの予想通りボルドスは信じていない。

だからホルンが生きていることと、竜の鱗と、とどめの幸助の身分証明カードを証拠として見せた。

「うわぁー本当に竜殺しって書いてある。
証拠が揃ってるのに認められないって初めてだ」

虚ろな笑いがボルドスの口から漏れている。驚きすぎて、驚いた
というリアクションがとれないらしい。

「信じられなくとも本当だ。」

私は竜の死体を見てきたからの」

これが決定打となり、ボルドスは竜が死に、竜殺しが生まれたことを認めた。

「竜殺しのこととはほかの誰かに言ってはならんぞ？ 厄介なことになるだけじゃからな。」

竜は寿命や病死じゃないかということにしておる」

「竜が殺されたことも現実感ないけど、そっちの理由もまた」

あの竜が死ぬこと自体現実感を感じられない者が多いのだ。どの理由も信じにくいのは無理もない。

誰もが無理だと思うことをなした幸助に、エリスは自己紹介しろと促す。

「どうも。渡瀬幸助です。エリスさんとホルンに世話になってます」

「……俺はボルドス。母さん……いや姉さんの弟だ。」

ホルンを助けてくれてありがとな」

エリスのことを母さんと呼んだ瞬間鋭い視線が飛び、慌てて修正する。

「ワタセコースケ。ここらじゃ聞かない響きの名前だな」

「あ、渡瀬がファミリーネームで、幸助が名前です。幸助と呼んでください」

「わかった、コースケ。これでいいんだな？ ちなみに俺にはファミリーネームはない。」

俺に丁寧な言葉遣いはなくていいぞ。成人を迎えてないガキが

大人ぶらなくていい」

「……成人って何才から？」

ボルドスも年齢勘違いしていると確信しつつ聞く。

「知らないのか？ 十八才からだ」

「たしかに成人してないけど、あと一年で十八なんだけど」

「まじで？ てっきり十三くらいかと」

「エリスさんとホルンよりも低く見られてた！？」

「いやあちっこいし」

「あんたから見たらほとんどの人がちっこいでしょうが！」

ボルドスの身長は190に近い。幸助は同年代の平均身長にほんの少し届かない。エリスは平均よりも高めで、幸助を抜いている。ホルンはこの中で一番小さいが、幸助よりも少し小さいだけだ。

「すまんすまん。俺謝ってばかりだな」

「謝らせるようなことばかり言うお前が悪い」

エリスにごもつともと返し、苦笑を浮かべた。

「しっかしあんなものどうやって殺したんだ？」

エリスが幸助がこちらの世界にきたところから、今に至るまでを説明していく。

その間に洗濯は終わった。それに幸助は気づいたが、説明が終わったあとに再開するとエリスが言ったので、ホルンと暇潰しに話していた。

このところホルンが読んでいた本は医術書や薬学書だったらしい。死なずにすんだので、興味あることを思う存分するつもりなのだ。

ホルンは楽しげに語る。

幸助が薬草についての話を聞いているうちに、エリスとボルドスの話は終わり、

「波乱万丈な」

説明を受けたボルドスの感想がこれだった。

「竜殺しに飽き足らず、異世界からやってきた？

ミタラムに愛されてるんじゃないか？」

「ミタラムって？」

聞いたことのない単語を隣にいるホルンに聞く。

「偶然と必然を司る女神ですよ」

そのとき幸助の頭の中で、ミタラム様が見てる、という文章が浮かんだ。

似たような題のアニメがあったっけと思いつつ、三人に浮かんだものを伝える。

「もしかすると称号を得たのかもしれないな」

「その可能性はあるな。カードを見てみたらどうだ？」

促されるままカードを取り出し、持っている称号を浮かび上げらせる。

竜殺しの下に文字が浮かんでいる。幸助には読めないが『ミタラム様が見てる』と書かれている。

あれが称号を得たときの感覚なのかと幸助は感心する。

「増えてるな」

「増えてます」

「本当に関心もたれてんだなあ」

「俺が世界を越えたのはこの神様のせい？」

ミタラムに呼ばれたのだろうか疑問を抱く。

それにエリスは首を横に振る。

「ミタラムは神といえど中級神、ほかの世界まで干渉はできぬだろうよ。ついでにいえば上級神も無理だろう。可能性として残るのは世界神のみじゃな。だが世界神が世界を作った以外になにかしたという話を私は聞いたことはない。

コースケがここにいるのは偶然。だからこそミタラムもお主に目をつけたのじゃろう。

己の管轄外の偶然を引き起こしたコースケを面白いと感じたか」

「そんなものなのか。

ところでこの称号ってなにか効果あるかな？」

「それは計測器を使わんとわからんのう。家に入るか」

その前に洗濯物の続きを、と幸助が言う。このままほったらかしにはできないのだ。

あとは水分を飛ばすだけのようで、タライから籠に洗濯物を移動し、魔法をかける。今日は天気がいいので、半分のみ水分を飛ばしあとは天日干しにする。水分を飛ばす加減は、魔法をかけ続ける時間で決まる。完全に乾かしたければ十秒間、生乾きならば半分でいい。

しわ伸ばしの魔法もあるようで、干すときはしわに気をつける必要はない。

洗濯物を干すという魔法は作られていないようで、四人で手早く洗濯物を干して家の中へと入る。

計測器を使って称号を調べた結果、得たものには特別な力はないとわかった。

ただ神様が見てますよ、と知らせるだけのものらしい。

「だが神域には入ることが可能になったのう」

「神域っていうと、人間には入ることのできない領域って認識でいい？」

「うむ。それでよい。

神の名が入っている称号を持つ者は、神域に入することを許可されておる。

神域には貴重な薬草や鉱物があり、希少生物がいる。持って帰ることができれば一財産じゃな。

まあ行くまでが大変じゃがの」

「知られてる神域はどこも難所だしなあ」

ボルドスも四つほど知っているが、どれも危険な場所にある。

「行くようなことはないだろ。冒険者協会の依頼にも滅多にでないしな」

「出しても意味はないから出さないだけじゃ。そういった依頼は有力な冒険者に直接依頼されるからの」

洗濯魔法の教授は終わり、少し早いが昼食の準備を始めようということになった。

今回は幸助が作る番だ。記憶に浮かぶ手順で作っていけば失敗はしないとすでに一度作ってわかっている。保管されている材料からコロッケにメニューを決めた。パンとスープが余っているのでそれを出す。

材料をみじん切りにできるミキサー魔法もあるので調理に手間がかからない。

幸助が作っている間、ボルドスが自分の知っているニュースをエリスとホルンに話していく。

あと半年もせずに武道大会が開かれるとか、北部はかわらず戦争中だとか、暇つぶしのダンジョンで高品質付与武具がでたらしいとか、どこかの犯罪組織が潰されたなど幸助の耳にも届いてきた。

テーブルにできあがった料理を並べると、三人は話を切り上げた。

神に祈りを捧げ、フォークを手につ。

「この料理は見たことないな」

コロッケにフォーク刺しながらボルドスが言った。

「コースケの国の料理なのでしょう。名前はなんていうの？」

「コロッケ」

「美味けりゃなんでもいいや。うん、美味い」

旺盛な食欲を見せるボルドスの横で、幸助とエリスがコロッケの作り方について話している。話しがてんぷらまで及んだとき、料理が冷めるからとホルンが止めた。

賑やかな昼食が終わり、後片付けも終わり、食休みをしながら四人は話している。

「このあとコースケはボルドスと模擬戦じゃ」

「わかった」

「え？」

頷いたのはボルドスで首を傾げたのは幸助だ。

「なんでいきなり模擬戦？」

「竜殺しの戦闘能力を見てみたいからじゃ」

「俺戦ったことはおろか、喧嘩の経験すらないんだけど」

「ならばなおさら経験しておいてほうがいい。こちらの世界はお前さんがいたところより物騒じゃからな。一度くらい経験しておいたら、いざ実戦ってときに動きが固まらずにすむ」

竜が実在し、人にあだなすのだから幸助にも地球より物騒らしいとわかっている。護身の術も必要そうだとわかる。

しかしいきなり言われても心の準備ができていない。

「殺し合いをさせようと言うわけじゃない。素手での殴りあいじゃ。やりすぎる前に私が止めるしの。」

そこまで痛い目もみないじゃろうて」

渋る様子の幸助を見て、エリスは言う。

治療なら任せてとホルンも模擬戦を止める様子はない。

幸助はこの先必要なら仕方ないと、持ち前の諦めの早さを発揮して受け入れた。表情は曇ってはいるが。

再び庭に出た四人は、洗濯物を干した場所とは別の場所に移動する。せっかく綺麗に洗った洗濯物を巻き込んで汚したくはなかった。柔軟をするボルドスを真似て、幸助も体を解していく。十分に体が温まったと判断したエリスが二人の間に立ち、呼びかける。

「そろそろ始めるぞ」

エリスの声に反応して、二人は向き合う。

「始める前にボルドス」

「なに？」

「称号をバーサーカーに換えておけ」

「いやさすがにそれは駄目だろう?」

「なにを言っておる相手は竜殺しの称号じゃ。強化して体を丈夫にしておかねば、いらぬ怪我をするかもしれんぞ」

「でもよ。確実に暴走するぜ?」

「そのときは私かコースケに止められるだけじゃ」

「きちんと止めてくれよ?」

「家を壊されてはかなわんからの、しっかりと止めてやる」

それならとボルドスは虚空を見つめる。この状態が称号を換えて
いる状態なのだろう。

「バーサーカーってなんか嫌な響きなんだけど。そんなものに換えて大丈夫なん?」

「大丈夫。私かお前さんなら止めることはできる。

変更は終えたな? では始めっ!」

合図を出したエリスはホルンのそばまで下がる。いつでも魔法が
使えるように準備を整え見物に回る。

「始めは小手調べだ」

そう言っってボルドスは真っ直ぐ幸助へと近寄り、ストレートを放
つ。小手調べと言っているが、そこらのチンピラが殴りかかるより
も早かった。

それを幸助は小さく悲鳴を上げてなんとか右に避けた。

「次々行くぜ?」

ボルドスはさらに速度を上げていく。

左手のジャブで幸助が右にずれたのを確認しての、右ストレート。

これは幸助の右頬をかすめる。

それに注意がいつている幸助へと、死角からの左ローキック。パ
アーンといい音がして腿へと命中。さらにもう一度、左のロー。今
度は下がって避けられる。それを織り込み済みの左足を軸とした回
し蹴り。ローは前に出るために放ったのだった。これも命中かと思
われたが、幸助が下がりぎり服をかすめるだけとなる。

フェイントも織り交ぜ攻撃は続く。当たるものと当たらないもの
差が顕著だ。それはフェントを使ったか使わなかったか。フェイン
トを織り交ぜた攻撃は景気よくほとんどが当たるかかするかしてい
く。

しばらく攻撃を続けたボルドスが止まる。

「避けてばかりか？ 反撃はどうした」

ボルドスはわざと止まって攻撃を誘う。丁寧に指でちよいちよい
と招くように挑発つきだ。

挑発にのったか、好機と捉えたか、幸助は踏み込み右ストレートを
打つ。

ボルドスから見れば、構えも踏み込みもなっていないストレート
だ。たいした威力はなさそうだと右手を出して受ける。

差し出した手に拳が当たる。ごく当たり前に止められるとボルド
スは考えていたが、結果はあっさりと力負け。幸助の拳はボルドス
の右手ごと胸に叩きつけられた。

予想外の衝撃にボルドスはよろめいて二三歩後ずさった。小さな
驚きが脳裏にはしり、にやりと笑みが浮かぶ。

これでボルドスのスイッチが入る。

ボルドスから闘気が放たれる。連続して攻撃を仕掛け、幸助はそ
れになんとか対応してく。

徐々にボルドスの目からは理性の輝きが消え、代わりに強い戦う
意思が宿る。そして闘気に混ざって殺気も放たれだす。

殺気など向けられたことのない幸助は、薄ら寒いものを向けられていると感じ取っていた。

「雰囲気変わったんだけど!？」

「ここからが本番じゃぞ、気を抜くなよ？」

エリスの言葉は正しい。

動き出したボルドスからは手加減がまったくなくなっていた。

ホルンには捉え切れない動きで、幸助との差を詰め、体の膝肘肩など部位すべてを使って連撃を仕掛けていく。フェイントはなく、すべて幸助を捕らえ地に叩きつけるための攻撃だ。

「おおおおおおっ!」

「ちよっうわっあぶなっ!？」

幸助は攻撃をかわしていく。最初こそかわしきれず浅めに攻撃は当たっていたが、回避回数が増すほどに攻撃は当たらなくなっていく。

ボルドスにスイッチが入ったように、闘争の雰囲気に触れて幸助にもスイッチが入ったのだ。

もともと身体能力のスペックはボルドスを凌駕している。本気で避けようと集中すればボルドスの攻撃を見ることはできるのだ。

経験不足ゆえに見切ることとはできない。しかし凶暴化しバーサーカーの称号で暴走が強化され、動きが雑になってきている今のボルドスの動きならば、見て避けることなど簡単なのだ。

十分間避け続け、幸助は完全に攻撃を避けられるようになっていた。

「幸助」

「なに？」

エリスの呼びかけに応える余裕すら生まれている。

「一回おもいっきり殴れ」

「なんとかっできそうだけどいいのっ？」

「その状態のボルドスは気絶させんと止まらん。なに打撲なんぞホルンにかかればすぐに治るから遠慮はいらん」

「気絶させられるかわかんないよっ」と

「そのときは私が気絶させるさ」

幸助は避けながらタイミングが合うのを待つ。

すぐにそのときは訪れた。ボルドスが強引に動いて体勢を崩したのだ。

「ごっつ」

前屈みの状態から立て直したところに踏み込み、張り手を腹にぶちかました。張り手なのは拳を握って殴ると、拳を痛めることがあると思ひ出したからだ。

幸助が手を振りぬくと、ボルドスは体をくの字に曲げて五メートルほど吹っ飛んで地面に転がった。

殴った者も指示した者も見ていた者も、その結果に驚いて固まる。

三人とも人が水平に吹っ飛んで行くのを見たのは初めてだった。

ボルドスはその一撃で気絶したようで動かず、倒れたままだ。

「……ボルドス大丈夫なん？」

顔を引きたせながら幸助がボルドスを指差す。それでエリスとホルンは我に返る。

ホルンが駆け足でボルドスに近寄り、診察していく。

「ホルンどうじゃ？」

「治ります。ですが想像していたより重傷でした」

「具体的には？」

「胸骨とあばら骨と背骨にひびが入ってますね。腹筋も痛んでいます。内臓もひどくはありませんが傷ついています。念のため夕食は消化に良いものを食べさせた方がいいかもしれません」

「おもいつきり殴れて言ったせいじゃな」

「殴った俺にも原因あるけどね。この力は怖いわ」

今幸助は心臓が激しく脈打ち、膝もがくがくと細かく震えている。人を殺す意図はなかったが、それでも殺しかけたことに恐怖を感じている。

「そういう感情を持ち続けることができるなら、力に酔って暴れることもないじゃろ」

「……暴れるってか振るうことすら躊躇われるんだけど」

「それだと万が一の事態に対応できません。ある程度は力に慣れなければな。己の使い方次第じゃ。」

使いどころを誤らず、欲のまま動かず、力に振り回されず。

これを守ればまあなんとかやっていけるのではないか？」

「道具と同じか。道具に感情はなく、良いも悪いも使い手次第。そんなことを聞いたことある」

「そんなもんじゃろうな。」

力を使い方はこれまでどおり、教えてやる。どう使っていくかはコースケ、お前さん自身で考えるべきことじゃ」

治療の終わったボルドスをエリスが担ぎ、家へと入っていく。

細腕のエリスがそれを行っている様子は異様だが筋力はD一、これらの成人男性よりも力は上なのだ。ボルドス程度の重さならば運

ぶことは可能だ。

一時間もするとボルドスは目を覚ました。体の調子は、治療の
いあって胃が少しだけ痛む以外はどこも悪くはないようだ。

「結局、俺を止めたのはどっちなんだ？」

「覚えてないん？」

「暴走したら記憶がとびがちなんだ。それでどっち？」

「俺。思いつきり腹に張り手ぶち当てた」

「ああ、だから腹が痛むのか」

「ごめん」

「謝ることない。多少の怪我は納得済みだったんだ」

幸助の謝罪に軽く手を振って朗らかに笑い答える。

「私からも謝っておこうかの」

「姉さんも？」

エリスが謝ったことにボルドスは驚いている。

「腹が痛むのは私がコースケにおもいつきりやれと言ったからだか
らな。」

あそこまで威力があるとは思ってもいなかった。称号で強化して
おいてほんによかった」

「姉さんが謝るくらいだから、怪我ってそれなりに大きかった？」

「あばら骨と背骨にひび、腹筋と内臓にもダメージあり。」

自然治癒に任せると、まともに食事できるようになるまで三週間
弱といったところですね。

一般人だと死んでいてもおかしくはありませんでしたよ」

予想以上の怪我にボルドスの笑みが引きつった。同時にそれなら

ば謝りもするかと納得している。

強化した状態では筋力はC＋、頑丈はCとなる。その状態でそこまでの怪我負うのは仕事をしていても滅多にない。

「さすがは竜殺しといったところなのか」

「戦ってみた感想はどうじゃ？」

「覚えているかぎりだとアンバランス。

戦い方はなっちゃいないが、能力が高すぎる。だから攻撃を読まずに見てから避けるなんてことも可能になってくる。フェイントにひっかかっていたのは経験不足だからだな。

戦い方を覚えたら戦う者としてはあつという間に一流どころの域まで到達できるんじゃないか？」

「下地はできておるからのう。」

ボルドス、お前が戦い方がある程度教えてやれ」

「別にいいけどさ、長期間滞在はできないぞ？ 依頼こなさないと金が」

「そこまで時間はかからんだろうさ。魔法も習得に時間はかかっておらんからの。」

基礎を教えておけば、あとはどうとでもなる」

「まあ一撃当てれば大抵はどうにかなるだろうしな。あとで剣の握り方から教えとくよ」

話しが一段落ついたと判断し幸助は疑問に思ったことを聞く。

「模擬戦のあの変貌ってなに？」

「あれ？ あれはギフト凶暴化のせいだ。

効果は筋力と頑丈を一つ上に上げるってのと、戦闘中に暴れて敵味方関係なく襲い掛かる。

一定以上の衝撃を受けたら正気に戻る」

「エリスが気絶させないと止まらないって言ってたけど？」

「それは称号のせいだ。

バーサーカーの称号は凶暴化を強化する。それによって筋力頑丈はもう一段階上がる。かわりにダメージを受けただけじゃ正氣に戻れないんだ」

「やっかいな称号持つてんのな」

「だからいつもは生存者のほうを使ってる。

生存者は体力を一段階上げて、傷の治りも早くなる。

こっちの称号を手に入れるまではいろいろ大変だった。今でも苦労はあるがな」

「所有者にマイナスな効果のギフトや称号ってあるんだ」

「そう多くはないけどな」

話のあと幸助とボルドスは外に出て、エリスとホルンは家の中でそれぞれの時間を過ごす。

ボルドスはそこらへんの木の枝を斧で切り、小枝を払ってブロードソードと同じくらいの長さに整える。

それを幸助に持たせる。エリスに言ったように握り方からいくつかの振り方を教えて、幸助に実践させる。ボルドスは座ってその様子を見ながら、おかしな点を指摘していく。斧を使う前はボルドスも剣を使っていたので基本は教えることができるのだ。

一種類の振り方に違和感がなくなれば、次の振り方へとどんどん変えていく。日が沈む少し前には、どれもおかしな点はなくなりボルドスが指摘できる点はなくなった。素振りに関してはあとは反復練習のみという、物覚えのよさにボルドスは驚くやら呆れるやらで乾いた笑みを浮かべていた。

「今日はここまでにしとこうや。これ以上は俺が落ち込む」

「あー俺も自分の物覚えのよさに驚いてる。ってか竜殺しの後押しってやっぱり反則だ」

「だなあ」

明日も使うだろう棒を幸助は壁にたてかけて手を洗う。そのあとは洗濯物を取り込んで、しわ伸ばしの魔法を教えよう。

幸助が着ている服はボルドスが以前着ていたものだ。サイズが合わなくなっていたので、捨てたのだろうとボルドスは思っていたが、エリスは一応しまいこんでいた。十年前に来ていた服を見て、ボルドスが懐かしそうにしている。

しわがなくなった洗濯物をたたんだあと、エリスは夕食の準備を始める。ボルドスのため消化にいいものを作るつもりだ。

夕食の後は騒ぐことなく穏やかに時間が過ぎていった。

おまけ

渡瀬幸助 十七才

筋力B＋ 頑丈B 器用B 知力C＋ 精神C－
ギフト・称号 竜殺し2 ミタラム様が見ている

ホルン・コルベス・ストライチ 十九才

筋力E＋ 頑丈E＋ 器用D－ 知力D 精神C－
ギフト 治癒3 称号 レーリルのお気に入り

エリシール 七十才

筋力D－ 頑丈D－ 器用C－ 知力C＋ 精神C
ギフト 魔法融合2 称号 優れたる魔女

ボルドス 二十二才

筋力C 頑丈C－ 器用D 知力D－ 精神D－
ギフト 凶暴化 称号 バーサーカー 生存者

大国の実力派騎士団長

筋力C－ 頑丈D＋ 器用C－ 知力D－ 精神D

平均的な王

筋力E＋ 頑丈E＋ 器用E 知力D＋ 精神D－

試験な旅立ち

ボルドスと出会った次の日も三人から魔法と知識と戦い方を教えてもらい、それが一週間続いていた。

この一週間で、幸助は生きていくうえで必要最低限のことは習得した。

魔法は攻撃から家事まで主に使いそうなものは頭に入っている。知識は生活するのになにも問題はない。戦いは言うまでもない。駆け出し冒険者などものともしないくらいの実力を持っている。盗賊三十人程度笑いながら無力化できるとはボルドスの言だ。ぶっちゃけボルドスよりも強くなった。このことにボルドスは、自己鍛錬に費やした時間を思っ着一粒の涙をこぼした。実際はボルドスとの戦いに慣れたただけだ。

成長した幸助は今でかける準備をしている。講義の集大成として街に出て一ヶ月ほど暮らしてみることになったのだ。いつまでもここに引きこもってばかりじゃ教えた意味がない街に出てみる、とエリスに命じられたのだ。

さすがにたった一人で放り出すのは問題があるかもしれないと、一緒にボルドスがついてくことになっている。今回のことはそろそろ街に戻ると言ったボルドスの言葉を聞いて、思いついたただけだったりする。

「準備終わったかコースケ」

「準備って言っても荷造りしてもらったものを背負うだけだよ」

荷物が入ったリュックを背負い幸助はボルドスに答える。そうだなとボルドスが苦笑を浮かべた。

与えられた部屋からリビングへと移動する。

エリスがいくつかの袋を持って幸助に近づく。

「これらが一ヶ月の生活費、こちらが剣一本買うお金だ。

この生活費と同じ額を一ヶ月で稼いで返せば、お前さんはどこでも生きていくことはできるじやろ。剣のお金は餞別じゃから返さんでよい。

なくさんようにな」

「うん」

受け取ったお金をリュックにしまう。

このお金は借金に近い支度金だ。一月で返すように言われてはいるが、強制ではないし利息もとらない。一ヶ月を目安に頑張ってみろという意図を含んでいる。エリスにとってはこの程度のお金ははした金に近く、剣のお金と同じように餞別として渡してもいいのだが、借金という形にしたほうが気合が入るだろうと考えていた。

「そのまま街にいつくのもよいが、一度は戻ってくるんじゃないか。わかつたな？」

「了解です。といってもここで暮らし続けたいって気持ちは変わらないと思う」

幸助にはここが実家のように感じられているのだ。おそらくこの世界で居場所がまだここにしかないからだろう。美人二人との生活を捨てがたいという下心もある。

「まあ、それならそれでもよい。戻ってくることを拒みはせんよ」

「ええ、私もお土産話を楽しみに待ってます。体に気をつけて楽しんでください」

「うん。特別なことをしようってんじゃないから、気楽にいくよ」

エリスとホルンに見送られ、幸助とボルドスは出発する。

目的地はここから歩いて三日の位置にあるベラッセンという街だ。リッカードに比べると規模は格段に落ちるが、街としては規模は大きい方だ。

幸助が飛翔魔法を使いボルドスを抱えていけば移動時間は格段に短縮できるが、旅の仕方と野宿の仕方を教わるために歩きで移動している。エリスの家に行くまでに旅も野宿も経験はあるが、あれが正しいやり方とは幸助も思っていない。

「なにかいる？」

「どしたコースケ？」

草原の中に少し違和感を感じた幸助が止まる。

「あのあたりが動いたような？」

「どのあたりだ？ あ、たしかになにかいるな」

幸助が指差す辺り、二十メートル先の草むらに中をじっと見つめわずかな違和感をボルドスも感じ取った。

なにかがひよこりと動き、屈んでいた状態から立った状態へとかわる。黒毛の頭部と尾が見える。

「ありゃあラッツモンキーだ」

「猿？」

「魔物としての猿だな。動物の猿よりも凶暴で力は強い。魔物としてのランクは低い。」

普通は群で行動してるもんだが、新しく群を作るために群を出た奴が年取って追い出されたか」

小さい頃からエリスに平民が受けられる以上の偏った教育を受け

させられたので、こういった魔物知識をボルドスは豊富に持っている。知力Dーは伊達ではない。

エリスに授けられた知識は、歴史や文学といったものにボルドスが関心をみせなかったため、学問というよりはサバイバルなど実践寄りだ。

幸助は魔物については教わっていない。

「ほおっておいてもいいんだが、コースケ戦ってみるか？

実戦を経験しとくのはいいことだぞ？」

「実戦って獲物これだよ？」

ボルドスが作った木の棒を持ち上げる。

「それで十分だろ。一撃当てれば終わるだろうしな。魔物に自分の力がどれだけ通用するのか知っておいたほうがいい。

まああっけなく終わるだろうが。あと魔法はなしで」

「んー……一撃で終わるってことは殺すってことだよね？」

「そうだが、気にしなくていいぞ？ 生きてても人間に迷惑しかかけんし」

「それでもちょっと抵抗があるんだけどさ」

「そういう気持ちにふんぎりつけるためにもいってこい」

ドンッと幸助の背を押す。そしてボルドスはラッツモンキーへと石を投げつける。石はラッツモンキーのそばを勢いよく通り過ぎていった。

これで二人に気づいたラッツモンキーは威嚇しながら草原から出てくる。

黒に近い茶の毛皮と鋭い牙と爪を持ち、猿よりも少し大きい。これがラッツモンキーだ。

ラッツモンキーのほうはやる気満々だ。対する幸助はテンション

が上がりきらない。

やる気がないのを恐れとみなしたラッツモンキーは威勢よく幸助に襲い掛かる。幸助が自信満々でいれば、ラッツモンキーは実力差を悟り逃げ出したはずだ。向かってくるラッツモンキーに対して幸助は棒を振って対抗する。

振った棒は見事ラッツモンキーに命中、鎖骨周辺を砕き肉を潰す感触が棒を通して感じられた。棒は衝撃に耐え切れず真っ二つに折れ、ラッツモンキーは血を撒き散らして絶命した。

「うわっ」

すでに動かないラッツモンキーだった肉塊を見て、目を逸らす。一度逸らした視線を戻し、ごめんと呟いた。罪悪感があるのは襲い掛かれたわけでもなく、殺す必要もなく、悪戯に命を奪ったことで感じられるのだろう。

「やっぱり一撃で終わったな」

「……終わったね」

「テンション低いな」

「ある一定以上の大きさの動物を悪戯に殺すのは、もとの世界だと罰せられることだったから悪いことしたって思っちゃうんだよ」

「そこらの感覚は慣れるしかないのかもな」

「殺すことに慣れる？」

「いや殺すことじゃなくて、ああいった魔物は人にとって害悪ではないんだ。だから罪悪感を抱く必要はないってことに。倒して褒められることはあっても、罰せられることはない」

「こうっ見た目がもっと醜悪だと平気かも」

「そういったやつもいるにはいるが、やっぱり慣れろとしか言えんな」

「郷に入っては郷に従えっていうしね。頑張ってみる」

「なんだそれ？」

「住む場所の習慣に従ったほうが上手く生きていけるって意味の諺だよ」

「なるほどな」

似たような言葉があったなと思い出そうとするボルドスに幸助は、ラッツモンキーはどうするのかと聞く。

「どうするって？ こいつは特に剥ぎ取るような場所はないぞ？」

「そうじゃなくて、このまま道にほったらかしにしていいいのかってこと。あとでここを通る人の邪魔にならない？」

「そういうことか。このままでもかまわない。いずれ野犬や狼といった肉食の獣が持っていく。気になるなら道の端にでも寄せておけばいい」

気になりはするが触る気が起きないので幸助はそのままにしておくことに決めた。

歩き出して、幸助はさきほどの剥ぎ取るということが気になり聞く。

「さっき剥ぎ取るって言ってたでしょ？ 役に立つ部位を持ってる魔物っていの？」

「いるぞ。魔物のどこそこを取ってきてくれるっていう依頼がよく出てる」

幸助はオンラインの狩猟ゲームを思い出した。幸助自身はやったことがないが、それでもゲーム自体はやっていたので時折そういったゲームの情報も入ってきたのだ。

（リアルで狩猟をやるはめになるとは思ってもいなかった。

人生ってなにが起こるかわからん)

「どうしたんだ？ 乾いた笑みなんか浮かべて」

「なんでもないよ」

二人は旅を続ける。

ベラッセンに着く前にもう一度魔物と戦っている。ファードッグという犬の魔物で、ふかふかの毛の中にいくつかの角を隠し持った魔物だ。それが四匹。

また幸助一人で戦った。複数との戦い方を実践するいい機会だということだった。魔法もまた禁じられている。武器は折れた棒と同じく、ボルドスのお手製の棒だ。

ボルドスからの忠告を受けつつ戦い、無事に戦いは終わった。怪我はない。三度ほど体当たりを受けたが、持ち前の頑丈さで痛くもなんともなかったのだ。

戦いが終わり反省点を挙げられつつ、一般人ならば数針縫う怪我を負うところだと聞かされ、自身の非常識さを再認識させられた。

やはり罪悪感を感じたのだが、ラツモンキーのときよりも小さかった。一度殺すということを経験したことで、受ける衝撃は小さく感じられるようになってしまっていた。このまま慣れていくのかと複雑な思いがあった。

収入もあった。ファードッグの角はそう高くはないが売れるのだ。十三本の角がとれ、それはすべて幸助のものとなった。ボルドスにとってはいした収入でもないらしい。これだけで一人二日分の食費になる。

二度の戦闘以外はなにごともなく、予定よりも半日早くベラッセンに到着した。二人の体力の高さゆえだ。

ベラッセンは、主要道の石畳にそれ以外の土の地面とレンガと木の家、洋風の光景が広がる街だ。幸助の知る街と違い、魔物に対しての防衛として三メートル弱の石堀が街を囲んでいる。街の西にこ

の街で一番大きな屋敷がある。この街を治める貴族の屋敷だ。

街の入り口に歩兵が立っている。ボルドスが近づくと、顔見知りのようで気軽に挨拶してくる。歩兵の視線が幸助に動き、ボルドスが知り合いだと説明する。それだけの説明で満足なのか幸助にもにこやかな歓迎の笑顔を向けてくる。

彼らに一礼し幸助はボルドスと一緒に街に入る。

「ここが俺が根城にしてる街ベラッセンだ。リツカートより小さいが、そのぶんのどかで落ち着いたところだ」

「なにか特徴とかある？」

「……ないな。まあ目立つ特徴を持った街なんてものは多くはないし、これが普通だろ」

「そだね」

「さて最初はどこに行くか……そうだな剣を買いにいくかな。こつちだ」

ボルドスに先導され、ボルドスいきつけの武具店へと向かう。道行く何人かに声をかけられつつボルドスは目的の店に入る。幸助には読めないが看板にはチェイン武具店と書かれている。

「いらっしやい！」

店番をしている二十歳すぎの女がボルドスを見て笑みを浮かべ出迎える。

「よお」

「ここ何日か街でも見かけなかったけど出てたの？」

「姉さんのところにな」

「そうなんだ。今日はなんの用？　後ろにいる子に関係するのかしら？」

「そのとおり」

斜め後ろで店内を珍しそうに見ていた幸助を前に出す。

「こいつは……弟分みたいなものでコースケ・ワタセ。

こいつの剣を買いにきた。鋭さよりも頑丈さを優先したそこそこの剣をくれ」

少々鈍らでも力で叩き斬れるだろうと予想しているので、刃の鋭さよりも壊れにくさを優先したのだ。

「えっと、お願いします」

「私はクラレス・チェインよろしく。

ちよいとこつちに来てくれる？」

クラレスは幸助を招く。幸助は招かれるまま近づいた。

「手を出して」

「両手ですか？」

「利き手でお願い」

出された手と腕を調べていく。手のひらを触ったあと、腕も触っていく。

幸助の手から目を離さず、クラレスは口を開いた。

「剣を扱い始めてそんなに日が経ってないでしょ」

「わかるんですか？」

「うん。私も職人の端くれだからね。これまでそれなりに冒険者たちを見てきたから、彼らの手と比べてね。

もういいよ、ありがと」

クラレスは店奥にある棚から三本のブロードソードを持ってでてきた。

「注文の中でコースケのサイズにあうものだと、この三本だね。値段も手ごろなはずよ」

「この中で一番重いのは？」

「これだよ」

ボルドスの質問に指差し即答する。

ボルドスは指差された剣を取ってコースケに渡す。

「抜いてみな」

渡された剣を鞘から抜いて、幸助は正眼に構えた。教えられたことを忘れず綺麗な型で止まっている。

「重さは大丈夫か？」

「大丈夫。軽いよ」

「まあ、そうだろうな」

あれだけ筋力が高ければ生半可な重さなどものともしない。だから一番重いものを選んだ。重さでダメージが増すように。鞘に剣を戻す幸助を驚いた顔でクラレスは見ている。

「自分で言うておいてなんだけど、あの子本当に剣使い出したばかり？」

「そうだぞ。剣を使う練習を始めて一ヶ月も経ってない。剣を握ったのは今日が初めてじゃないか？」

「うん。鉈は使ったことあるけど、剣はこれが初めて」

「ちょっと信じられないなあ。あれだけ綺麗な型、そうそう見られるものじゃないよ」

「物覚え早いからなあ」

「反則ですよ」

「だなあ」

自分のことなのに他人事のように話す幸助が意味不明で、クラレスは首を傾げる。

「天才ってやつ？」

「そうかもなあ」

竜殺しのことを説明はできないので、クラレスの推測を認める方向で話しを進める。天才とたいしてかわらないだろうとも思っている。

剣のお金を払い、剣は幸助のものとなった。腰に下げたためのベルトは、今後もひいきにしてもらうためかサービスとなっている。

「じゃ、行くわ」

「もう？ 防具は？」

「このあとギルドと宿に行く予定だからな。」

防具はまた今度だ。金がない」

なくても平気なことはファードッグとの戦闘で証明されている。もっとランクの高い魔物と戦う場合は平気とはいえないだろうが、ここらで暮らすぶんには大丈夫だ。一ヶ所を除いて強い魔物はでない。

「あなたがそういうなら大丈夫なんでしょうけど。無茶をさせちゃだめよ。駆け出しなんですよ？」

知らないゆえの言葉だとわかっていても竜殺しを心配するクラレスに呆れてしまう。

「俺よりも強いから大丈夫さ」

「冗談ばかり言って。バーサーカーのあんたにあの子が敵いそうには見えないわよ。」

とにかく防具は今度なのね。わかったわ、またきてよね」

「おう。腕磨いておけよ」

「ベルトありがとうございます」

「気にしないでいいよ。初めてきた客には大抵サービスすることになっているから」

店を出て行く二人に、威勢よくまいどありと投げかけられる。

武具店を出た二人は次の目的地である。冒険者ギルドへと向かう。ボルドスが歩きながらギルドについて説明するが、幸助の思い描いたものたいてい違ってはなかった。

冒険者にとっては依頼と情報を提供してくれる場所だ。依頼人にとっては問題を解決してくれる人がいるかもしれない場所。

冒険者はどんな依頼でも受けることができるが、あきらかに力量にあつてない場合は止められる。あとギルドから依頼遂行の指名をされることもある。そのような場合はギルドが報酬を上乗せしてくれる。

歩く二人の前に大きめの喫茶店が見えた。ボルドスが目指しているのはそこだ。もとは酒場だったのだが、先代店主が酔っ払いを嫌って変えてしまったのだ。

二人がギルドに入ると視線が集まり、すぐに散った。

「なんで見られたん？」

「俺はここら辺りだとそこそ有名なんだ。その俺が連れてるお

前さんが気になったけど、たいしたことなさそうに見えたからすぐに散った。こんなところだろ」

大当たりだった。

なるほどと頷く幸助を登録カウンターまで連れて行く。

「ボルドスさんお帰りなさい」

「あいよ。こいつの登録してくれないか？」

「はい、ではこちらの紙に記入を」

「先輩！」

してください、と受付をしている職員が言い掛けて邪魔が入った。遮ったのは幸助と同じくらいの年齢に見える少女だ。

ボルドスはその少女に見覚えがなく、新入りかと推測する。

「なにか用事？」

「わ、私が登録を担当してもいいですかっ!？」

「別にかまわないけど、どうしたの。やけにやる気に満ちてるわね？ま、いいわ。どじさえしなければ。

失礼しました。こういったわけですので、ここからはこちらの職員が説明いたします。

新入りですので至らないところは多々あります。なにかしでかした場合はすぐに私かほかの職員をお呼びください」

「ありますとかなにかしでかすとか、ちょっと不安になるんだけど」

幸助の言葉に職員はにこやかに笑い、

「ええ、この子どじですから」

断定した。ここで働き始めてから、よほどどじを重ねてきたのだ

ろう。

しかし悪人ではないのだろう。どじどじと繰り返した職員の言葉の中に、貶し嘲るような響きは含まれていないのだから。

「手順は覚えてるわね？」

「はいっ！」

「いつも返事だけはいいのよねえ」

「忘れててもメモ帳見るんで大丈夫です！」

メモ帳の入った胸ポケットを自信満々に叩く。

「それならいいけどって、いいわけないわ。普通は覚えておかないと駄目なのよ。」

でも業務が滞ることがないのなら、それを認めるしかないのかしら？

とにかく自分から言い出したのだから、きちんとこなしなさい」

「はい」

念を押して職員は幸助とボルドスに一礼し、別の仕事をするため移動していく。

「ここからは私ウィアーレが登録作業を進めさせてもらいましゅっ」

囁んだ。本当に大丈夫なのかと幸助とボルドスの胸中に一抹の不安がよぎる。

涙目になりポケットからメモ帳を取り出し、手元に置く。

「ではこちらの用紙に記入をお願いします」

差出された紙と木炭を受け取って、日本語で書こうとして止まる。

「俺、字の読み書きできないんだ」
「えっ!？」

ウィアーレが大きく驚いた顔になる。

どうしてそこまで驚くのかわからず幸助は首を傾げる。ボルドスも読み書きできないことは珍しいことではないと知っているので、ウィアーレの驚く理由がわからない。

「そこまで驚くことなん?　もしかして読み書きできないのってすごくおかしい?」

それならばホルンとエリスも文字を教えてくれるはずだと考えている。

「い、いえまさかあなたが文字の読み書きできないとは思ってなかったの」

「おかしくない?　俺のこと知らないよね?　俺は初めて君と会っただけ」

「はい、初対面です。でも私のギフトであなたが竜」

ろしってわかりました、と続けようとしたウィアーレの口をボルドスが手で塞いだ。エリスがここにいれば、いい判断だと褒めただろう。

あとでこのときのことを幸助がボルドスに聞くと、嫌な予感がしたらしく素早い反応ができたらしい。

「そのことは秘密だ、いいな?」

強い魔物と対するかのような真剣さでボルドスは言い聞かせた。

それに怯えすら見せ、ワイアーレはうつすらと目の端に涙を浮かばせこくこくと頷く。

ワイアーレの目をじっと見て嘘ではなさそうだと判断したボルドスは手を放す。

「どうかされましたか？」

離れた場所で棚の書類整理をしていた職員が話しかけてくる。冒険者たちの視線も集まっている。

「いや、こいつがちよっとどじって驚いたんだ」

「そうですか」

納得ですと言って職員は離れていく。ほかの冒険者たちもまたかと納得し注目は散っていった。

どじということが役立った珍しい瞬間だった。

「もしかして今ばれそうになった？」

自体を把握した幸助がボルドスに聞く。

「ああ、どうやらこいつは他人の称号かギフトを見ることができるみたいだ」

「いきなりばれてんじゃん」

「早かったな、というか早すぎだ。まさかいきなりこんな奴に会うとは。」

あとできっちり交渉して黙っててもらわないとな」

ワイアーレがひっと小さく悲鳴をあげた。交渉という部分が脅迫と脳内変換されたのだ。

「この話はあとだ。今は登録をすませちまおう」

「文字書けないし、君に代筆頼んでもいい？」

「は、はい！ え、ええええとまずはっ名前をお願いします！」

一つでもミスがあればどうなるかわからないと気合を入れ、ウィアーレは作業を進めていく。幸助は聞かれたことに答えていく。答える必要のないことはボルドスが口を挟んで止めていった。ボルドスが口を挟むたび、ウィアーレはなにかしでかしたかとビクツと震えることとなる。

書類記入と書き込んだことの説明が終わる、渡してもらったカードにギルドに属しているという印を刻んで幸助に返し、ウィアーレはほうつと安堵の溜息を漏らす。大仕事を終えたような感覚なのだろう。

「あ、あとは依頼の受け方などの説明となります」

「ああ、そこらへんは事前に説明しているからとばしていい。

あとは依頼引継ぎと報酬関連についてだ」

「わかりましたあ。

では依頼引継ぎについて説明させていただきます。

依頼を受けて、これは自分の手に負えないと思ったり、分野が違うと判断することがあります。そのようなときはギルドにきて、依頼引継ぎの手続きをとってもらいます。

引継ぎした場合は、報酬は基本的になしです。そして依頼に関わってわかっていることを職員に説明してもらうことになります。依頼によっては違約金を払ってもらうことになります。

次は報酬についてです。

報酬は依頼書に載っています。載っている報酬は、ギルドが仲介料として5%引いたものとなっています。ですので依頼人が言っている報酬と額が違う場合に怒鳴り込んでこられても差額を渡すこと

はありません。ただし仲介料が5%を大きく超える場合は、職員に申し出てください。

なおギルドを通さず受けた依頼については、仲介料を取ることはありません。当たり前ですね」

ところどころメモ帳を開いて述べていく。

「ギルドを通さないってことは、やましいところがあると白状しているようなものだから注意しとけ。

まあ基準に達する報酬を出すことができずに、だめもとで頼んでくる場合もあるんだがな。

対策としては怪しいと思ったら断ればいいってところか」

ウィアーレの説明に、ボルドスが付け足す。

「はい。そのような依頼を受けた場合の責任は、冒険者自身にありますのでどのようなことが起きてもギルドが介入することは滅多にありません。ご注意ください。

説明はこれで終わりとなります」

やり遂げたといった感じでウィアーレは背もたれに寄りかかる。

「これで終わり？」

「終わりだ。あとはこの嬢ちゃんに口止めするだけだ」

「はうあ!？　それがあったあ」

仕事に集中していて忘れていたのだ。ずるずると椅子から滑り落ちていく。

「仕事が終わるのはいつだ？」

「あと一時間もすれば終わりますう」

「じゃあ、一時間ほしたらセ・オリアスって喫茶店に。知ってるかそこ？」

「いきつけですう」

あまりの落ち込みように幸助は哀れに感じているが、黙っていてもらわないと自分が大変なことになるので諦めもらう。黙ることに納得したら、なにかおごってあげようと決めた。

ギルドでの用事を終えた二人は暇つぶしに街ぶらつく。

ついでにファードッグの角も売り払う。売却はボルドスが担当した。一度もこういった交渉の経験がないと言った幸助に手本として実演してみせたのだ。

少しでも安く買い取ろうとする商人と通常価格で売ろうとするボルドスの交渉は、ボルドスに軍配が上がった。

商人と顔見知りになればこういった交渉はしなくてもよくなる、というアドバースとともにお金を幸助に渡す。

約束の時間までまだ三十分ほどあるが、することもないので先に喫茶店へと行くことに。

幸助はボルドスに読んでもらったメニューの中からオレンジのカスタードタルトを頼む。ボルドスは甘いものはそれほど好まないように、ハムタマゴサンドとコーヒーを頼む。

注文の品が届くまで幸助は、ボルドスにもう一度メニューを読んでもらい単語の勉強をしている。

あらかたメニューを覚えたところで、店員が注文の品を持ってきた。

しっとりとしたタルト生地に甘さ控えめのカスタード、そしてオレンジソースと薄切りオレンジがのせられている。タルトにかじりつくため口元に持っていくと、ふわりとリキュールの香りが漂った。食べ終わって満足していた幸助は、ウィアーレがこちらに歩いてきていることに気づいた。

会話と初めての仕事

「約束通りきましたので、どうかお手柔らかに」

幸助とボルドスがいるところにくるなり、ウィアーレは深々と頭を下げる。

「どうなるかはお前さん次第だな」

「ここで話すん？」

「いや、このどじ娘さんがうっかり口滑らすと大変だから別の場所
で」

とりあえずは会計をすませる。そのときに幸助はシュークリームを一個買ってウィアーレに渡す。これで少しはテンション上がってくれればと思ったのだ。テンション低いまま話していると、いじめているような感じがするのだった。

「食べていいんですか？」

「そのために買ったからね。いらないなら俺が食べるけど」

「いえっいただきます！」

甘いものが精神的負担を和らげたのかウィアーレの表情から悲壮感が抜ける。食べ終わるとまた元に戻ったのだが。それでもいくらか気分が浮上したようでシュークリーム一個分の効果はあったようだ。

「これから向かう先は？」

「俺の使っている宿だ。コースケもそこに宿をとらせようと思う」

「お金大丈夫？」

「一般的な宿より少しランクが上なぶん金も少し高いが、設備と安全と清潔さは保証されている。

そこでいいか？」

この街を拠点にしているボルドスに任せれば間違いはないだろうと、幸助は頷いた。

三人が歩く先にそこそこの歴史を感じさせる建物が見えた。目的地の宿だ。

玄関をくぐるとボルドスの顔なじみの従業員がおかえりなさいと声をかけてくる。ボルドスはそれらに応えつつ受付に足を向ける。

「おかえりなさい」

「ああ、ただいま。」

こいつの部屋を頼めるか？ 個室で」

「はいはい。空いていますよ。」

こちらに名前を記入して、宿泊日数分の金を払ってください」

出された宿帳に幸助はたどたどしく名前を書いていく。書いたものをボルドスに確認してもらい、従業員に返す。

宿賃は十日分払う。もしかすると宿が合わずかえるかもしれないということと、のちのちお金が必要になるかもしれないからだ。

「そちらの方はどうされますか」

「わ、私ですか？」

「こいつは必要ない。ちょっと話があって一緒にいるだけだから」
「そうですか。」

ではこちらが鍵となっています。

浴場や食堂やその他の設備に関しての説明は必要でしょうか？」

「いや俺が説明しとく」

「わかりました。」

お客様が健やかに過ごせますよう従業員一同努力いたします。なにか問題がありましたらいつでも従業員に申し付けください」

そう言って従業員は洗練された綺麗なおじぎをしてみせる。それに思わず幸助もよろしく願いますと頭を下げた。

そんな幸助に従業員は小さく笑みを漏らす。

「コースケの部屋に行くか」

どこになにがあるかの説明をしつつボルドスが先導し、幸助の部屋を目指す。

宿は三階建てで、二三階が客室だ。一階は食堂などの設備でうまっている。地下もあるが、そっちは食料庫やワインセラーなので客が行くことはない。

三階の日当たりのいい部屋が一番値段の高い部屋で、一番安いのは二階の大部屋だ。長期滞在客は個室をとり、一泊など短期宿泊の客は大部屋をとる。

幸助の部屋は二階の東側だ。ボルドスは三階の東。

部屋の中は一人には十分な広さになっている。家具は机と椅子とベッドとクローゼットのみだ。クローゼットの中には籠が入っていて、洗濯物をこの中に入れて従業員に渡せば洗ってくれるのだ。窓には格子がはまっていて出入り不可となっている。

荷物と剣をクローゼットに入れた幸助はベッドに座る。ボルドスは机によりかかった。ワイアーレは床に正座。

「なんで床に座るの!？」

「あ、いつも怒られるとき床に正座するんでつい」

そう言って立ち上がり、幸助の隣に座る。椅子だとボルドスに近くて怖いのだ。

「んじゃ話をするとするかね。

ま、用件はすでに言った通り、黙ってろってことなんだが」

「どうして黙っていなきやいけないのか、理由を聞いてみたかったりするんですが。

だって竜殺しですよ？ 名乗り出ればすっごい有名になって、ちやほやされますよ？」

ウィアーレが恐る恐る問いかける。

「お前さんの言いたいことはわかるが、利点だけじゃないだろう？ 貴族とかのお偉いさんにいいように使われるって欠点もある。

コースケにはちよいと事情があつて、その事情から名乗り出ない方がいいって判断したんだ。

もしくは名乗り出るにしてもまだまだ早すぎる」

「はあ」

「本人も名乗り出て目立つことを望んじやいないんだ。人の嫌がることをしたいのかお前さんは？」

「いえ、したくないです。

えっとあなたは本当にそれでいいんですか？」

隣に座る幸助に聞く。

「うん。世話になってる人たちからもアドバイスを受けてそれでいいって思ってる。

だから黙ったままでいてくれるかな？ お願い」

ウィアーレは少しだけ考える様子を見せるも、すぐに結論は決まったようだ。

「わかりました。誰にも言いません。世界神に誓って約束します」

「ありがとう」

「よかったなコースケ。いやあ一時はどうなるかと」

「ちなみに、ちなみにですよ？ 私が話すって言ってたらどのような対応に？」

「とりあえず拉致してどこかの森に放り込み、木の上にでも縛りつけてくか。そのあとツテの権力でちょいっと小細工して、お前さんが急にいなくなったことを誤魔化す。お前さんは放置されて餓死かな。」

別の方法とるかもしれんが、この場で拉致は確実かな」

にこやかに述べるボルドスを見て、ワイアーレはひいっと悲鳴を上げ幸助の腕と肩を掴む。

ボルドスが本当にそれを実行したかはわからないが、脅しているのは確実だ。前準備もなしに誘拐など難しいだろうから、やはり脅しなのだろう。

「承諾してくれたんだから、怖がらさなくても」

「うっかり口を滑らさないように念を押しておいたほうがいいと思っ
つてな。」

短期間でギルド職員だけじゃなく冒険者にまでどじだと知れ渡っているくらいだから、これくらいでちょうどいいさ」

思わず自分でも納得してしまったようで、ワイアーレはなににも言い返すことができない。

「そろそろ腕から手を離してくれない？ 血が止まってるみたいで」

「あ、すみません！」

ワイアーレが手を離すと、腕から先に暖かいものが駆け巡る。

本来の話が終わり、幸助は疑問に思ったことを聞く。

「俺が竜殺しってわかったのはギフトのおかげだね？
どんなギフトなのか聞いてもいい？」

「私のギフトは称号操作の2です。自分と他人の称号を何度でも変更可能なんです。他人の称号をかえるには称号が見えないといけませんから、それでコースケさんの称号がわかったんです」

「そのギフトを買われてギルドに雇われたんだな？」

「はい。私の主な仕事は称号の操作です」

称号は基本的に一日一回のみ変更可能だ。それが日に何度も変更可能になるちょっとした便利さにギルドは目をつけたのだ。サービスを充実させるための雇用なのだろう。

「話はこれで終わりですか？」

「俺はない。コースケはどうだ？」

「俺もないよ」

「でしたら私は帰ります。家族が待っていますから」

ベッドから立ち上がり扉へと向かう。

扉を開け振り返って一礼するウィアーレに、幸助が声をかける。

「明日からよろしく」

「え？ あ、そうですね。登録したから依頼受けるんですよ。
はい、こちらこそよろしくお願いします」

もう一度頭を下げてウィアーレは去っていった。

「最初の依頼くらいは手伝おうか？」

「んー……いやいいよ。簡単なものを受けて慣れていくから。」

どれくらいの報酬が駆け出しの受けるものなん？」

「そうだな……駆け出し四人組で討伐系依頼で最大1600ルト……銀貨四枚ってとこだ。」

これ以上は手に余るだろうな。一人で受けるのならこの半分くらいか？」

「じゃあそれ以下を目安に受けていくよ」

「お前さんなら……いや慣れるためにはそのほうがいいか」

強さから駆け出しが受けるもの以上の依頼をこなせると考えたが、知識経験ともに不足していることを思い出し反論を取り消す。

このあとはボルドスがいままでにどんな依頼をうけ、どのように解決していったかを聞いて時間を潰していく。ついでに荷物整理も手伝ってもらう。部屋に置いていいものはグローゼットに入れていく。

やがて夕食の時間が来て食堂に移動する。

三食の料金が宿賃に含まれていることや、頼めば弁当を作ってくれることや、風呂は時間によって男女の順番が決められていることなど宿について聞きながら、夕食をすませる。

「このあとはどうする気だ？　俺は酒を飲みに行ってくるつもりだが」

「宿の周りを散歩してみるよ。行っちゃいけない場所とかある？」

「この宿周辺ならないな。北の倉庫街とそこの近くにある酒場は近寄らない方がいい」

「わかった。ここらへんうちよろしてるよ」

「それなら安全だ」

早速行ってくるとボルドスは宿を出て行った。

幸助は宿の玄関ホールにあるソファに座り、窓から見える人の流れをぼんやりと見ている。

日が落ちて暗くなった街を魔法の明りが照らしている。暗闇をはねのけるような明るさは、日本の繁華街に勝るとも劣らない。

ホルンから聞いたように人間だけではなく、エルフやドワーフといった異種族もちらほらと見かける。一見魔物のようにしか見えない者も堂々と歩いていて、そういった人たちを見ているだけでも時間は潰せた。

「どなたか探されているんですか？」

「え？」

声をかけられ振り向くと受付をしていた女が私服姿で立っていた。

「いや歩いている人たちを見てただけで、誰かを探してたわけじゃないんです」

「そうでしたか。それにしてもいぶん熱心に外を見ていましたね？」

「あー……人間以外の種族を見るのって初めてで」

「ああ、それで」

「えっと仕事は大丈夫なんですか？」

「私に課せられた分は終わったので自由時間なんですよ。」

隣に座ってもいいですか？」

「……どうぞ」

互いに自己紹介をして、雑談が始まる。

実年齢に驚かれるのには慣れ始めた幸助だ。

名前はシデイといって宿の一人娘。二十才になったばかりで、現在跡継ぎの修行中とのこと。

することがなく暇だったところ、同じように暇そうに見えた幸助と話してみようと思って声をかけたらしい。客に話を聞くことはよくやっているようだ。

この街とリツカートのみしか行ったことがなく、ほかの街の様子を知りたいといって幸助の住んでいた場所のことを聞く。それに幸助はどのように答えようか迷い、無難にのんびりとした田舎だと答えることにした。

それでもいいからとシディが聞いてくるので、幸助は故郷のことをこちら風にアレンジして話していく。幸助の故郷は特にこれといった特徴はなく、いくつかの果物が特産品というだけだ。そんな話でもシディは満足できたようだ。

そうしているうちに入浴時間が男の番になり、幸助はシディと別れた。

風呂から上がった幸助はそのまま部屋に戻る。することがないのでこのまま眠ってしまおうかと思ったとき剣が目に入る。

「型の確認だけでもして寝ようかな」

鞘つきのままベルトから外し、部屋を傷つけないようにゆっくりと型を繰り返していく。

そのうちファードッグの動きを思い出し、シャドーボクシングに近いことをし始める。ラツツモンキーとの戦いは短時間で終わったので、動きはあまり見ておらずシャドーに使うには情報不足だったのだ。

軽めに行くはずだった確認は集中してしまい、軽めとはいえなくなっている。そのことに気づかずゆっくりと小さく動いていく。

三十分ほど続けた頃、剣が壁に当たり我に返った。

「あ、軽めのはずが……まあいいや。

壁に傷は入ってないね、よかった」

傷の有無を確認し、剣を壁に立てかける。

することがなくなった幸助は眠ることに決め、自分に眠りの魔法

をかけてあっさりと眠りについた。

翌朝、早めに寝たおかげで六時前に目が覚める。通訳魔法を使ってから顔を洗いに一階の水場に向かうと、既に起きて掃き掃除をしているシディと出会う。

「おはよう」

「おはよ。早起きだね？」

昨日の会話のおかげか砕けた話し方となっている。

「十時ごろに寝たから早めに目が覚めたんだ」

「いつもそれくらいに寝てるの？」

「いんや、することがなかったから、その時間に寝ただけ」

「そっか。朝食の準備はまだだから、部屋でのんびりするなり身支度を整えるなりしてきたら？」

「顔を洗ったらそうするよ」

掃除に戻るシディの横で、顔を洗い目が完全に覚めた幸助はシディに一声かけて部屋に戻る。

手櫛で髪を整え、服をきちんと着込み、剣を帯び、荷物整理で軽くなったりリュックを手を持つ。

準備を終えた幸助は、部屋を出て鍵を閉める。まだ朝食まで時間はあるが、部屋にいるのも暇なので食堂で待つことにしたのだ。

五十人ほどがゆったりと座ることができそうな食堂は、今は広々と空いている。店員以外には二人だけ座っている。その二人はテーブルに突っ伏して寝ているらしい。

適当に座りぼんやりしていると、朝食ができたことを知らせるベルが鳴る。寝ていた二人はそれで起き、ぐっと背筋を伸ばして眠気を払う。そして朝食を受け取るため動き出す。幸助も同じように力

ウンターに向かう。

「あのー弁当用意してもらっていいですか？」

「あいよ。内容は勝手にこっちで決めるけどいいか？　といっても大抵サンドイッチと果物なんだがな」

「お願いします」

「食器を返すときにもう一度声をかけてくれ、そのときに渡すから」
「わかりました」

渡された朝食を持ってテーブルに戻る。今日のメニューは魚のムニエル、パン二枚、ゆで卵、リング四分の一だ。ジャムとバターはカウンター近くに置かれていた。一枚にマーマレードを塗り、食べ始める。

幸助がゆっくり食べている間にほかの二人は食べ終わり、食堂を出て行った。入れ替わりに少しずつ宿泊客が食堂に入ってくる。

それを眺めつつ食事を食べ終え、食器を持っていく。籐製のバスケットを受け取り、食堂から出る。

「準備を整えてるってことは、もう出るのかな？」

受付にいるシデイが声をかけてくる。

「うん。今日が初仕事。」

まあ、ちよūdいいい依頼がなかったら、なにもせずに帰ってくるんだろうけど」

「そっかそっか。頑張ってるっしょい」

「いってきます」

「はい。いってらっしゃいませ」

従業員としての顔に戻ったシデイが幸助を見送る。

シデイの声を背に幸助は宿を出た。

ギルドまでの道をゆつくり歩く。昨日と同じように道行く人を見ているのだ。国際色豊かというのか、様々な種族があちこちに見える。彼らは定住しているものは少ないようで、ほとんどの者が旅装姿だ。

ギルドに到着し、依頼を確認できる区画に向かう。ウィアーレはまだ来ていないのか、みつけることはできなかった。

ギルドが行っている依頼紹介は大きく三つにわけられる。大きな仕事の依頼紙はバインダーに保管されている。次に冒険者たちが日常的に受ける依頼紙は、衝立に張り出されている。報酬額と仕事の種類による仕分けもきちんとされている。最後に冒険者でなくとも行えそうな雑事系の依頼紙は壁に大雑把にはられている。

今も冒険者たちの多くは衝立を見ている。バインダーを開いている者もいるが、どのようなものがあるのか確認しているだけで受ける気はなさげだ。

「さあてどんなのがあるのかな」

幸助もほかの冒険者たちと同じように衝立を見る。そしてすぐに問題が発生した。

「文字読めねえ」

ボルドスについてきてもらうんだだったと頭を抱える。

うっかり文字を読めないことを忘れていたのだ。昨日習得した文字というか単語は、喫茶店などでしか役に立たない。かろうじて報酬だけはわかる。けれどもそれだけわかってても意味がない。知識を必要とされる依頼とわからずに受けてしまうかもしれないからだ。

誰かに聞くしかないと考え周囲を見渡したとき、タイミングよく出勤してきたウィアーレをみつけることができた。

「おはよう、そして助けて」

「い、いきなりなんですか？」

「依頼を探そうとしたんだけどさ、文字読めなくて」

「あーなるほど。わかりました。先輩に出勤してきたことを知らせてきますから、ちょっと待っていてください」

「ほんとに助かる」

ワイアーレはどこか嬉しげに職員の部屋へと向かう。いつもどじばかりで頼られることがすごく少ないので、頼られることが嬉しいのだ。

すぐに戻ってきたワイアーレと一緒に衝立を見ていく。

「どんな依頼が受けたいですか？」

「一人でも受けることできて、安全なもの。初めての仕事だから簡単なものがいい」

「……強いのに」

幸助を見る視線の温度が下がる。

「昨日も言ったように事情があって、片手で数えられるほどしか戦闘経験ってないんだよ」

「それでよくりゅ……じゃなかったその称号を」

「……今」

「ちょっと危なかったです」

両手で口を塞いで誤魔化し笑う様子は可愛かったが、幸助は可愛いと感じるよりも本当にどじなのだなあと苦笑を浮かべている。

「依頼そのものに慣れるためにも簡単なものを紹介してもらいたい」

ワイアーレは条件を考慮し衝立の中で一番依頼料の安い列を見て、その中の一枚を指差す。

「これなんかどうでしょう？ 近くの森で指定された草を取ってくるというのですが」

「近くの森ってどこ？」

「ここから南東に三十分ほど歩いた森ですね。」

コノツネ、ハバカロ、トートリネという三つの草を十づつ取ってきてもらいたいそうです。報酬は400ルト」

「よさげだけど、トートリネっていう草を俺は知らなくて。ここでサンプル見ることできる？」

コノツネとハバカロはホルンと勉強していたときに教えてもらったのだ。この二つは条件さえ整えばどこでも取れる。南東の森はその条件が整っているのだろう。

「はい。植物図鑑がありますから。」

この依頼を受けますか？」

「お願い」

「ではこちらへどうぞ」

カウンターに連れて行かれ、依頼を請け負う手続きをしていく。

「図鑑とってきますね」

ワイアーレは近くにいた先輩職員に図鑑のありかを聞き、持ってカウンターに戻ってくる。

「えっとトートリネですねー……ありました」

差し出された図鑑の指差された箇所を見る。

文章は読めないの、描かれた葉の形や生えやすい場所を覚える。文章部分も念のため読んでもらい、コノツネとハバカロも見せてもらった。

「これでいいかな。じゃ行ってくるよ」

「はい、お気をつけて」

ワイアーレに見送られて、幸助はギルドを出て、街を出る。

教えられた通りに南東へ三十分弱。道中なにごともなく目的地へと到着した。

「さっそく探しますか」

森の手前で虫除けの魔法を使い、中へと入る。

コノツネは明りを嫌い風通りのいい木陰に生え、ハバカロは落ち葉に隠れるように腐葉土に生え、トートリネは小川の水流の中に生える。

始めに木陰を見ていき、コノツネを集めていく。大抵三本はまとまって生えているのであっさり集まる。根っこの土を払い、集めたコノツネを紐でまとめる。

周囲に小川はないので次はハバカロを探す。足で枯葉と土を払っていくと、地を這うように生えている草が顔を出した。こちらはコノツネよりも時間がかかる。けれどたいした苦労はなかった。

最後にトートリネを採取するために小川を探す。

「聴力も上がってるかな？」

耳を澄まして小川のせせらぎでも聞こえないかと試してみる。

木の葉の擦れる音、虫などの鳴き声、獣かなにかが移動する音が聞こえ、背後からなにか近づいてくる音が聞こえた。

振り返って十秒後、ラッツモンキーが四匹現れる。

「魔物が出んの!？」

考えてみれば草原にも当たり前のように魔物はいたのだ。森にいてもなにもおかしくはない。

いると思っていなかったのは、ホルンと野宿していたときのことを基準に考えていたせいだろう。

なんとか戦いを避けられないかという迷いを察したのだろう、ラッツモンキーたちはいつせいに襲い掛かってきた。

数は増えてもボルドスには届かない動きなので、余裕を持って避けることができる。

「……やるか」

襲われたことで踏ん切りがついた幸助は剣を抜く。

やる気を出した幸助にラッツモンキーたちはわずかに戸惑いを見せるが、襲うことはやめない。

一番早く近くまで飛び掛ってきたラッツモンキーの胸めがけて剣を振るう。ボルドスとの練習の成果は見事に出て一刀両断。血が舞い、少し幸助へと付着する。

仲間の血に濡れた幸助に恐れをなしたか、力の差をはっきりと理解したか、ラッツモンキーたちの動きは止まる。

幸助が脅すように剣を真横に振るうと、後ずさり逃げていった。同時に周囲から気配が離れていくような感じがしている。第六感的な曖昧な感覚なので、幸助ははっきりと断言できない。

しかしこの一戦でなんとなくだが理解した。

「強気でいれば襲われることもない？」

獣や魔物は弱肉強食の世界に住み、人などよりもはるかに危険を察知する感覚に優れている。幸助が弱気でいたり迷いを見せるから襲うのだ。戦いを避けたいのなら強気か殺す気があると見せかけるほうがいい。そうすれば死にたくない獣や魔物は近づかない。

好戦的な魔物は殺気に当てられるとむしろ襲い掛かってくるだろうが、そのような魔物は人間の住む場所の近くにはほぼいない。騎士や兵によって倒されるか追い払われるからだ。

剣についた血を振るって払い、布で残った血を拭ってから、小川を求めて歩き出す。

さきほど一戦で幸助の強さを知った魔物や獣たちは一切姿を見せない。息すら潜め隠れているようで、森のざわめきが減った。

そのおかげか、移動したおかげか、幸助は小川のせせらぎを聞き取る。

みつけた小川に入り、点々と生えているトートリネを集めていき、依頼された草の収集は達成された。

「これで終わりかあ。

あの太陽の位置だとちょうど昼くらいだろうし、休憩ついでに昼ご飯食べてから帰ろっかね」

座るのにちょうどいい岩をみつけ、バスケットと水筒を出し食べ始める。。

水の流れる音や木の葉の擦れる音に和みつつ、ちょっとしたピクニック気分を味わい、昼食を終える。

「うしっ帰ろ」

目的を果たし、森を抜ける。

ギルドに帰り着いたときは一時手前だった。

「ワイアーレはいるかな」

ギルド内を見渡しても見当たらないので、昼を食べに行っているのだろうと判断した。

「すみません。草収集の依頼を受けて、採ってきたんですけど」

「はい。依頼ナンバーは何番でしたか？」

「334番です」

「少々お待ちください」

職員は手元のファイルを開き、依頼を確認する。

「コノツネとハバカロとトートリネの収集ですね。

集めてきたものを出してもらえますか？」

「どうぞ」

小袋に入れていた草を三束、職員に渡す。

「少々お待ちください」

職員は薬草図鑑で三つの草を確認していく。

「間違いなく依頼したものです。ただ依頼よりも本数が多いですね。ご自分用にとってこられたのでは？ お返ししましょう」

「いえ、十本目の近くに生えてたんでついにとってきただけで、依頼人にまとめて渡してください」

多いといってもコノツネ三本、トートリネ一本だけだ。

「そうですか。わかりました。

ではこちらが報酬となります。

銀貨一枚400ルト、ご確認ください」

渡された銀貨を財布代わりの小袋に入れる。

「これで依頼完了となります。依頼達成お疲れ様でした」
「聞きたいことあるんですけどいいですか？」

頭を下げる職員に声をかける。

「私でわかることでしたら」

「文字を覚えるために本を買いたいんですけど、だいたいいくら必要になるかわかりますか？」

「本ですか。そうですね……この図鑑は銀貨三枚でした」

「たかっ!？」

魔法で製本の過程を高速化簡略化できるので、昔の地球のようにすべて手書きというわけではない。その分値段は下がるが、やはり一冊ずつ手作りではあるので割高となるのだ。

「ですがこれは情報量の多さと装丁に費用がかかっている部分もありますからね。

文字学習用となると値段は低くなるでしょう。おそらく高くても銅貨十枚といったところではないでしょうか」

「ありがとうございます。ついでに本屋の位置を教えてくださいませんか？」

「たしか商店街の南にあったと」

「ありがとうございます」

再び礼を言ってギルドを出る。
教えてもらったあたりで外から店を覗いていき、三軒目で発見できた。

店員に買いたいものを聞き、二冊の本を買った。それで今日の稼ぎの半分以上を使い切った。

「おかえりなさい」

「ただいまです」

宿に戻ると受付をしているシディが幸助を出迎える。

「どうだった？」

「街の外に草集めに行ってきた。

その稼ぎで文字学習用に本を二冊買ってきた。これから勉強」

「文字読めなかったんだ？」

「うん」

「うちにも何冊あるから、ある程度読めるようになったら使う？」

買ったのではなく宿泊客がたまに忘れていくのだ。それが四冊溜まっている。

「いいの？」

「私もほかの皆も読み終わってるからかまわないわ」

「じゃあ、後日借りる」

「声をかけてくれたら、いつでもとってくるから」

わかったと答え、幸助は部屋に戻る。

ベッドに座り、最初は名詞が中心の本を開く。リングや馬などい

ろいろな絵の下に文字が書かれている。一ページに六つの単語が載っていて、百ページほどある。その文字をひたすら頭に叩き込んでいく。集中すれば、どんどん頭の中に入っていき二時間で全て覚えることができた。書くときはつかえるかもしれないが、読むだけならば完璧だ。

「きゅ、休憩しよ」

二時間の集中に疲れた幸助は部屋から出て、一階に下りる。

食堂にバスケットを返すついでにジュースを頼み、のんびりと飲む。

二十分ほど休憩し、体を動かすために宿の洗濯干し場に向かう。そこで今日のラッツモンキーたちの動きを思い出し、シャドーをしていく。今日はぶつけることを気にしないでいいので、素早く振っていく。

十五分シャドーをしたあと、素振りをしていきそれも終えた幸助は部屋に戻る。草の収集と修練で汗が出たので、風呂に入ろうと思ったのだ。

風呂を上がり、夕食も終えて、勉強を再開する。今度は、簡単な物語形式で誰がどこでなにをどうした、ということが絵で示された本を読む。生物や動きや場所など対応する絵と単語に矢印がついている。

読み進めていくうちに文法は英語に近いと気づくことができたが、今は文法にまで気が回せない。書くことは後回しで、とりあえず読めるようになるように勉強していく。

読み終えたのは十一時過ぎだ。

本を机に置いて、寝る準備を始め、ベッドにもぐりこむ。

こうして幸助の街生活二日目は終わった。

冒険出ずになんでも屋

次の日は六時前に起きるようなことはなく、七時を過ぎて起き出した。

昨日と同じように身支度を整え、食堂へと向かう。ちょうど混む時間帯なのか、食堂には昨日と比較にならないほど人が入っている。空いている椅子を見つけ、確保しておく。今日のメニューはパン、チーズ、トマトサラダ、コーンポタージュ、オレンジ半分。弁当も忘れずに頼んでおく。

周囲の話を聞きながら、のんびり食べていく。聞いていた話によって、昨日から会っていないボルドスが四日かけてなにかのタマゴを取ってくる依頼を受けたらしいとわかった。

ご飯を食べ終わりバスケットを受け取った幸助はギルドへと向かう。

昨日の勉強で少しは読めるようになった依頼紙を眺めていく。ほかの冒険者の邪魔にならないようにと考え、見ているのは雑事系だ。

「これは……家、岩、動かす。家にある岩を動かすでいいのかな？報酬は200ルトか。これ受けよ。」

番号は……って書いてない？ はぎとって持っていてもいいよね」

あとで張りなおせばいいと考え、幸助は依頼紙を持ってカウンタ―に向かう。

「これを受けたいんですけど」

「……これは雑事系の依頼ですがよろしいですか？」

「庭にある岩を動かすって依頼ですよ？ それであってるなら」

「はい、あっています。」

ではこの紙を持って、依頼主の家まで行ってください」

「手続きはないんですか？ 昨日はしてたんですけど」

「雑事系の依頼を受けるのは初めてですか？」

幸助は頷く。

「雑事系の依頼にはたいした手続きはありません。

職員に一声かけて依頼主の元へ行き、この紙と依頼主が持っている完了証明紙の二つを持ってギルドに戻ってくる。これだけで雑事系の依頼は完了となります。

注意することは、この紙か証明紙どちらかをなくした場合、依頼を完了したとしても報酬はでないということです」

「ありがとうございます。」

ついでにどこに行けばいいのか教えてもらいたいんですが？ 文字を習得途中で住所は読めなかったんです」

職員に住所と依頼主の名前を教えてもらい幸助はギルドを出た。

道行く人に方向がまっているか尋ねつつ、到着した先は周囲の家よりも大きめの家だった。

呼び鈴を探しないことを確認してから、門を開ける。ドアをノックして少し待つと、ドアの向こうから足音が聞こえてきた。

「どちらさんですか？」

六十ほどの男がドアを開け、尋ねてくる。

その男に幸助は依頼紙を見せる。

「ギルドで依頼を受けてきた者ですが、岩を動かすという依頼をしたのはあなたですよね？」

「おおっ！ 受けてもらえたのか。」

早速、やってもらおうかな。

お仲間を呼んできてくるといい、わしはここで待っとるからな」

「仲間？ 俺一人ですよ？」

「一人！？ いや一人じゃ無理だろう。悪いことは言わん、誰か知り合いを連れてきなされ」

「大丈夫だと思うんですが？ これでも力はあるほうなんです」

男は幸助の体を見て、疑わしそうな目つきになる。幸助の体は筋肉がついているどころか、ほっそりとしていて力仕事には向いているようには見えない。

「とても力がありそうには見えんがのう」

「まあ、一度挑戦して無理だったら知り合いつれてきますから、試させてください」

一度挑戦すれば諦めるだろうと考え、男は幸助を案内することに決めた。

「庭はこっちじゃよ」

案内された庭は、学校の教室二つ分より少し広いといった感じだ。一般市民が住む家としては破格の広さだろう。

庭の右側に二つの岩がある。うち一つは埋まっているようだ。埋まっている方の大きさは四人で手を繋いでようやく囲めるくらいか。

「あれをここまで移動してほしいんじゃよ。どうだ。無理だろう？」
「とりあえず挑戦してみます」

埋まっている岩を指差し、言外に諦めろと言ってくる男の言葉に、笑みを浮かべつつ答える。実物を見ても運べないとは思えなかった

のだ。

岩の前まで移動し、ふと思う。

「砕いて運ぶって方法があるんじゃない？」

そのことを男に聞くと、岩がとても硬くて砕くことができなかったのだと返答が返ってきた。

そうなのかと呟き、岩を抱きかかえるように掴む。そのまま力を入れる。

男の呆れたような表情がじょじょに驚きへと変わっていく。

少しずつ岩が土の中から引き抜かれているからだ。力を入れる過程で、幸助の指は岩に食い込んでいる。

「だっしゅーっ！」

気合の入った掛け声と一緒に岩は引っこ抜かれた。

抜かれた岩を見ると全体の三分の一が埋まっていたことがわかる。幸助は今まで持ったものの中で一番重いと感じていたが、それでもまだ余裕もあった。

危なげなく指定された位置まで運び下ろす。

「もう一つの岩はどうするんですか？」

「あ？ ああっ！ あああっちも頼む」

心底驚いたという表情の男に次の指示を聞く。

もう一つの岩は引き抜いたものより小さく、楽に運ぶことができた。

「本当に一人で運ぶとは思ってもよらなんだわ！

しかももっと時間がかかると思っておったんじゃないがなあ」

「力には自信があるって言ったでしょ？」

「自信がある程度ではすまされん気もするがな。まあいいわい。ありがとうよ、本当に助かった。」

これで庭に離れを作ることができる」

ありがとうという言葉に嬉しさを感じつつ、完了証明紙のことを告げる。

「うむ、待つとれ」

男は家屋に入り、証明紙とクッキーの詰め合わせを持って出てきた。

「この菓子はすごいものを見せてもらった礼じゃ」

「いいんですか？」

「かまわんよ。もらいものの一つじゃ。ほかにもまだまだ残つとる」

「じゃあ、ありがたくもらいます」

礼を言って、証明紙とクッキーを受け取る。

「ところでお前さん、このあと暇か？」

「ギルドに戻るだけで、時間は余ってますけど？」

「そうかそうか。実は右隣の婆さんがな部屋の模様替えをしたがつとるんじゃ。その手伝いをしてやってくれんか？ もちろん報酬はでる」

「いいですよ。岩運ぶよりも軽いでしょうし」

まだ十時を少し過ぎただけだ。このまま帰っても暇を持て余すだけだろうと思い領いた。

「じゃあ着いてきてくれ」

男の案内で隣の家に向かう。

出てきた老婆に男が事情を説明し、幸助は家に上がらせてもらった。

老婆の指示通りに動き、タンスなどを移動させていく。岩よりも断然軽いが、ぶつけないように気を使ったのでこちらの作業のほうが大変だったのかもしれない。

こちらの作業も一時間もせず終わる。

「ありがとう。これはお礼よ」

そう言って老婆は銅貨三枚を渡してくる。それをポケットにしまう。

「また頼むかもしれないね」

「俺がこの街にいるときなら引き受けますよ」

名前と泊まっている宿を教える。

「あなたみたいな冒険者もいるのねえ。冒険者といったら乱暴者で、このような依頼なんか受けないって思っていたわ」

「わしもギルドの職員に引き受ける者がいない可能性があると言われておった」

「俺は外に出るのをめんどくさがってるから雑事系依頼を引き受けてるんですよ」

ここらにでる魔物に勝てることはわかっているが、積極的に戦いたいとは思っていないのだ。

「俺は帰りますね」

「今日は助かったよ」

「気をつけて帰るんだよ」

二人の依頼人に見送られ幸助はギルドへと戻る。

依頼紙と完了証明紙を受付に渡し、銅貨五枚をうけとる。

弁当を食べたあと、朝の依頼と似たようなものを探すため雑事系依頼を見ていく。似たようなものならば、もう一回こなす時間があると考えたのだ。

そして使わなくなった家具を廃材置き場へと運ぶ依頼をみつけた。受付に内容の確認をしてから、幸助は三回目の依頼へと出かけていった。

向かった先でも、一人なのか運べないのではと疑問を持たれたが、実際に持ち運んで大丈夫だと証明してみせた。

この依頼にかかった時間が一番長い。持ち運びの移動で時間をくい、終わらせるのに二時間近くかかったのだ。

それでもたいして疲れることはなかった。完了証明紙をもらい、ギルドで銅貨五枚をもらい、今日の仕事はこれで終わりとした。

「おかえりなさい」

「ただいま」

「ちょ、ちょっと待って」

挨拶をかわして自室に戻ろうとした幸助をシディが呼び止める。

シディの視線は幸助の持っているクッキーに釘付けだ。

なぜ呼び止められたのかわからず幸助は首を傾げている。

「そのクッキーって」

「これ？ これは依頼をこなしたことの追加報酬みたいなものだよ」

「今リッカードで一番の人気を誇る店のクッキーなのよ！」

「そなの？ いいものもらったのかな」

「すごくいいもののな！ 三週間の予約待ちで手に入れにくいって噂よ！」

「予約待ちまで。ちょっと食べるのが楽しみになってきた」

シディはなにも言わずじっと幸助を見ている。

目は口ほどにものを言うということを幸助は実感している。

「……一緒に食べる？」

「いいの！？」

「どうせ一人では食べきれないから」

「じゃあこっちにおいでよ。休憩所で一緒に食べよう。お茶の準備してくる！」

うきうきとした表情で受付から食堂へと走っていく。

「受付誰もいなくなっただけど、いいのか？」

浮かれていたシディだがその辺は抜かりはないようで、食堂に行く途中で受付のことをほかの従業員に頼んでいた。

ティーポットとカップを持ったシディが、いまだ受け付け前にいる幸助を呼びにくる。

二人はフロントそばにある扉を開いて中に入る。

なにもものっていない皿にクッキーをのせていく。マール、チョコチップ、ナッツ、キャラメルコーティング、ジャムのせなどなど計八種類のクッキーが並ぶ。

それらがある程度つまんで、幸助はシディに頼みごとをする。

「本？」

「うん。見せてくれるって言ってたっしょ？」

「いいけど、買った本は？」

「あれは読んだ」

「そうなんだ。いいよ、とってくる」

すぐに戻ってきたシデイの手には一冊の本がある。

「これ観光の本なんだよ。ここらへんじゃなくて、隣の国のことを書いてるんだけどね」

「ここで見てもいい？ わからんとこ聞きたいし」

「いいよ。でもあと十五分で休憩終わるからね？」

幸助は本を開いて、流し見ていく。幸助の語彙力では読み解くにはまだまだ難しく、わからないところをシデイに聞いていく。

シデイの休憩時間が終わり、幸助は本を持って自室に戻る。名詞で躓きながらも前後の文章で、推測しながら進めていった。

次の日もギルドへ行き、雑事系依頼を眺めていく。

みつけた倉庫解体の仕事を受付に持っていく。

「あ、ワイアーレおはよう」

「おはようございます。コースケさん」

「この依頼受けてくるよ」

依頼紙をワイアーレに見せる。

「これ雑事系ですよ？ いいんですか？」

「うん。昨日も雑事系をこなしたんだ。安全でいいよね雑事系」

「昨日もやってたんですね。まあ、本人がそれでいいならいいんですけど。」

「あ、そうだ」

幸助が雑事系をこなすと知って、ワイアーレはなにかを思いつく。

「その依頼が終わったあとでいいので、私の依頼を受けてもらえませんか？」

「内容聞いてできると判断したらね。あと報酬ももらうよ？」

「わかっています。では依頼を頑張ってください」

「了解、ってきます」

ワイアーレに見送られ幸助は依頼者のもとへと出発する。

依頼紙に書かれていた住所は事務所で、幸助はそこから依頼人と一緒に倉庫へと移動する。

目的地には四つの倉庫があり、その中の二つを壊すのだ。四つとも老朽化しているのだが、いつきに四つ壊すと中の品物の置き場がない。よって今回は中身を移し空っぽにした二つを壊す。あとの二つは新築した倉庫に品物を移したあと、再び依頼を出すつもりなのだ。

依頼者の職場も人数が揃っていて解体はできるのだが、ほかの仕事で忙しくこちらには手が出せない状態なので冒険者に依頼をだしたらしい。

例によって幸助一人だけなのを心配されたのだが、重いハンマーを二刀流にして実際に壊し始めた様子を見て納得したのか依頼者は帰っていった。

できるだけ破片は小さくしてくれという注文を実行していき、作業を終えたのは午後一時前だった。

その場で弁当を食べてから、事務所に戻り終わったことを告げる。予定よりも早く終わったことに依頼者は驚き、一緒に現場に向かい依頼達成を確認してもらう。

「ただいま。はい、依頼紙と完了証明紙」

「お疲れ様です。」

えっと……報酬の銀貨一枚です」

幸助は受け取った銀貨を内ポケットにしまう。

「ワイアーレの依頼はこれから？　その前に内容聞かないといけないんだけどさ」

「してもらいたいことは屋根の修理です」

「修理って俺大工じゃないから無理なんじゃ？」

「本職のように完全に直してもらわなくてもいいんです。応急処置で大丈夫です」

「それなら俺に頼まなくても自分たちでできそうじゃない？」

「いえ私の身近な人で屋根に上がって大丈夫そうな人はいないんですよ。」

私が上がろうとすると止められますし」

「あーどじって話だし、落ちると思われてるんだろねえ」

おそろくとワイアーレは頷いた。

どじということもあるが、ワイアーレが命綱などの安全措施をとらずに上がろうとするので周囲は必死に止めたのだ。

「素人修理で大丈夫なら引き受けるよ」

「では明日でいいですか？　今日の依頼もつと時間かかると思ってたんでこっちの準備が終わってないんです。」

明日の午後早退か、長めの休憩もらえるように先輩に交渉しないと」

「了解、明日の昼頃ここにくればいいんだね？」

「はい、お願いします」

「今日はこれで帰るわ、ばいばい」

「また明日」

これまでと変わらず文字の勉強をして過ごし寝る。

そして翌日の午後、幸助はギルドにやってきた。腰に剣をさげることも、剣の重さにも違和感を感じなくなっている。振るうことはそれらと同じように慣れたとはいえない。

ギルド内喫茶店にいるワイアーレをみつけ近づく。

「こんにちは」

「あ、こんにちは」

ワイアーレから昼食を食べたかと聞かれ、幸助は頷く。それならばさっそく出発しようとする二人はギルドを出る

歩きながらワイアーレに現在地の住所を聞き、地理を覚えていく。到着した先はアパートのような建物で、庭では六人ほどの子供がはしゃぎまわっている。

「ここの屋根を修理してもらいたいです」

「なんというかあちこちボロボロだね」

「あまりお金ありませんから。ここを出て行った人たちの仕送りで暮らしていくことはできますが、修理にお金を回す余裕はないんですよ」

敷地内に入ると子供たちがワイアーレの周りに集まってくる。

その騒ぎに気づいたのか、建物内にいた大人も外に出てくる。

「ワイアーレ？ まだ勤務時間じゃないのか？」

「ただいまお父さん。先輩に長めの休憩時間もらって、この人を案内してきたんだよ」

六十を越したくらいの男が二人に近づいてくる。足を悪くしてい

るのか杖を使っている。

「こちらはどなただい？」

「屋根修理のために雇った冒険者だよ」

恋人かとはやし立ててくる子供たちを無視して、幸助を紹介する。
男は幸助を見て頭を下げる。子供たちは幸助が冒険者と知って静かになり、少し距離を置く。

「そうでしたか。」

はじめまして、この孤児院の院長のウェーイと申します」

「屋根修理を請け負ったコースケ・ワタセと言います」

ウェーイへと頭を下げる。

それを見てウェーイは少しだけ驚いたような表情となる。

「なにか驚くようなことありましたか？」

「いえいえ、ただ冒険者にしては礼儀正しいなと思ひまして。

全員とはいいませんが冒険者に荒くれ者が多いのも事実でして、
依頼者に頭下げるような者は少数なのですよ。

私も若い頃は冒険者をやってましてね、荒くれ者側でした」

ウェーイが恥ずかしそうに笑う。

子供たちが静かになり離れたのも、幸助を荒くれ者側だと思ったからだろう。

「そうなんですか。俺は冒険者になって一ヶ月も経ってませんし、
染まってないだけかもですよ？」

「そうかもしれませんが、私は最初から生意気でしたよ。おかげで
依頼者との交渉がこじれることも少なくありませんでした」

「じゃあこれからこの姿勢は崩さないほうがいいんですかね？」
「時と場合によりますねえ。時には強気なほうが上手くいきますからね」

「なるほどなるほど」

「いつまでも話してないで依頼の話しようよ」

自己紹介から冒険者の心得へと移っていた会話をワイアーレが止めた。

「そうでしたね。仕事に来てたんでした。

では依頼の話をしましょうか。といってもワイアーレが話しているようですし、道具と材料を置いている場所の案内をしましょうか」

子供たちを除いた三人は庭の隅に置かれている修理道具一式のもとへ移動する。

手順としては修理箇所にも薄めの板を釘で打ちつけ、水を弾くペンキで板とその周囲を二度塗りするという簡単なもの。高さという問題がなければ誰にでもできそうな作業だ。この建物の高さは八メートル少々、周囲にはクッションになるような木や茂みはない。素人が落ちれば軽傷ではすまないだろう。

「はしごで登りますか？ それとも二階の窓からよじ登りますか？」

「魔法で飛べますからはいりません」

魔法で少し浮いて実践してみせる。

これならば大丈夫と判断したウェーイはお願いしますと頭を下げ、建物の中へと戻っていく。

「私もギルドに戻りますね」

「その前に」

ギルドに戻ろうとするワイアーレを呼び止める。

「なんですか？」

「一度一緒に上に上がって修理箇所を教えて。そうしないと修理箇所見逃す可能性がある」

「……えっと上がるってどうやって？」

「だっここかおんぶで一緒に飛ぶ」

「……お父さん呼んで来ちゃだめ？」

「高齢者にあまり負担はかけたくないな」

「……落とさない？」

「わざと落とすわけないよ？ 暴れなかったら落ちないだろうし」

悩みに悩んでワイアーレは頷いた。

「一度上がろうとしたんだろ？ なんでそこまで悩むんだ？」

「空飛ぶのって初めてだから不安が」

「誰でも飛べるんじゃないんだ？」

「飛翔魔法は使い勝手がいいわけじゃないって知ってるでしょ？」

「教えてくれた人そんなこと言ってなかったけどなあ」

エリスや幸助のように魔法に優れた才を持ち、魔力Cー以上の者にとつては飛翔魔法は便利なものだ。しかしそれ以外の者にとつてはそうそう便利なものではない。制御が下手だと速度調節や方向転換が上手くいかず、魔力が足りないと長時間飛ぶことなど無理だ。

エリスの魔力C十で十二時間近く、幸助のCーで三時間ほど飛ぶことができる。飛翔魔法は魔力が最低Dないと使用不可能だ。そのDで十分間の飛翔が可能となっている。ちなみに飛翔速度は魔力消費に関係ない。どれだけ速く飛ぼうが、魔力消費が増えることはない。ただし調子にのって限界速度まで出すと制御ミスを起こしたと

き自爆するはめになる。

「一度一人で飛んでもらえます？　その飛ぶ姿を見て、不安がなければ背負ってもらいます」

「了解」

幸助は魔法を使い空中に浮く。そしてゆっくり屋根まで移動して下りてくる。

「これでどう？」

「大丈夫そうですね。」

で、では失礼します」

幸助の背中に抱きつく。互いに落とさないよう落ちないようにしっかりとくっついていてる。

ウィアーレの大きいとはいえない胸が幸助の背中に押し付けられる。そのことに気づいた幸助の動きが止まる。

「どうかしました？」

動きを止めた幸助に不思議そうにウィアーレは問いかける。

「い、いやなんでもありませんよ！？」

「そ、そうですか」

気恥ずかしさやら感じる柔らかさに気をとられたりで挙動不審な幸助を、ウィアーレはさらに不思議に思う。

「飛ぶよ！」

「きゃっ」

誤魔化すために勢いよく上昇する。そのせいでワイアーレはさらに強く抱きついた。

幸助は一瞬だけ気がそれそうになるが、なんとか集中し屋根まで浮かび上がった。

浮いたまま屋根を移動し、修理箇所を教えてもらう。

確認を終えた二人は地面に降り立った。地面に足をつけたときワイアーレは安心したような表情を浮かべる。

仕事のためワイアーレはギルドへと戻っていく。それを見送り、幸助は修理を始める。

以前も似たような修理はしたのだろう、あちらこちらに修理箇所がある。どれも応急処置ばかりなのは、経営に余裕がない状態が続いたためか。

カコンカコンと釘を打ち付ける音が響く。板を打ち付け終わり、ペンキを塗る作業に移る。

ペンキをとるために地面に下りたとき、誰かに見られているような気がした。

「ん？」

視線を感じた方向には子供たちがいる。ハケとペンキを持って上がろうとする幸助を子供たちがじっと見ていて、幸助がそちらを見ると建物の陰に隠れてしまう。

なんだろうと思いつつも屋根へと上がる。

修理箇所にペンキを厚く塗っていき、一通り塗り終わる。あとは乾くのを待つて、もう一度塗るだけだ。しかし乾くのに約三時間かかり、その間なにをしようかと屋根に座り考え出した。

五分ほど考えなにも浮かばず、とりあえず下りることにする。

下りる途中、二階の窓の向こうにベッドで寝ている眼帯をした子供と幸助の目が合う。きょとんとしたその子供に手を振ると、その

子供も小さく手を振り返す。

「風邪かな？」

二階を見上げ、首を傾げる。

下りてもなにもすることが思いつかなかった幸助は、ウェイイに声をかけて孤児院を出る。ペンキが乾くまでぶらついて暇をつぶすことにしたのだ。

子供たちの視線を感じ、振り返ると物陰から幸助を見ている。

「用事があるなら話しかける、よね？」

珍獣を見ているものなのだろうと考え、幸助は視線から逃れるように孤児院から離れていった。

そして買い食いなどで暇を潰し陽が傾いてきた頃に幸助は戻ってきた。

残りの作業を素早く終わらせた幸助は、ウェイイに終わったことを告げギルドへと向かう。

「終わったよ」

「お疲れ様です。完了証明紙は私が持ってますから、依頼紙を」
「ほいさ」

ポケットから依頼紙を取り出しワイアーレに渡した。

「報酬は50ルト、銅貨二枚と石貨十枚となります。ご確認ください
い」

「……たしかに。あ、これあげる」

買い食いしていたときに買った焼き菓子と飴玉の入った袋も渡す。

「これは？」

「子供たちに。風邪ひいている子にもね」

「ありがとうございます。でも風邪？」

「二階で寝ている子を見たんだけど」

「あ、あの子は風邪じゃないんです」

「病氣かなにか？」

「いえそういうわけでもないんですよ。健康そのものです。ただ極端に体力がないだけで」

「そういうことあるんだ」

「あと四五年もすれば、日常生活を送るには問題ないと言われてるんです。」

ほかの方が受付に用事があるようなので話はここまででいいですか？」

「邪魔になってたか。ごめん。じゃ、俺は帰るよ」

後ろにいた冒険者に一礼し幸助は宿に戻っていった。

幸助と冒険者たち

次の日もそのまた次の日も幸助は雑事系依頼ばかり受けていく。犬のしつけや翻訳補佐や建築作業などの技術的なものは避けて、力仕事ばかりに偏るのはご愛嬌というものだろう。

そういった雑事系ばかり受ける幸助のことを聞きつけた人が街中で声かけ直接依頼してくることもあった。

例えば牛の大雑把な解体を手伝ったこともある。店主がリッカートにいる出産間近な娘に会いに行くため、手伝いを探していたのだ。これも技術的なことで無理だと思ったが、勢いにおされ断りきれなかったのだ。

幸助の求められたのは牛の各部位を大雑把に切っていくこと。ほかの店員は仕入れや鳥などを捌くことに忙しいので、その作業だけでもやってもらえると助かるのだ。

初日に指導を受け、手順の書かれたメモも準備され、六日間朝から午前九時頃まで切り続けた。おかげで腕は瞬く間に上がっていき、店主が帰ってきた頃には、牛の切り分けは店内でもトップクラスに入る腕となっていた。

こんなふうに冒険者というよりは、街の何でも屋といった働きぶりとなっていた幸助を、ほかの冒険者たちは正規の依頼をこなす実力のない冒険者として見ていた。

だから勘違いする冒険者も出てきた。

「おい」

いつものように自分にあつた雑事系依頼をみつけギルドから出て行こうとしている幸助に、見知らぬ冒険者たちが声をかける。

「なんですか？」

「一緒に来いよ」

「は？ 俺今から依頼受けるんですけど」

「どうせ雑事系だろ。そんなものほっといて俺たちの依頼を手伝えよ。罔くらいにはなるだろうよ」

「いえこの依頼が楽なんで」

じゃつと手を挙げてその場から去ろうとする幸助の肩を掴んでリ
ーダー格の男が止める。

「離してくれませんか？」

「素直に承諾しとけよ。外に連れ出して安全に経験積ませてやろう
って先輩の親切心なんだぜ？」

まあ授業料として報酬はなしなんだがな」

「鎧も着てない人を外に連れ出そうとしてる時点で、親切心からは
ずれたあほらしい考えですよ。しかも報酬もなしとかばかな考え
も追加ですか」

挑発気味に返したのは幸助がいらついているからだ。聞こえるよ
うに陰口を言われ続け、聖人ではない幸助は流すこともできず徐々
にストレスが溜まっていたのだ。

「んだとっ！？ ごちゃごちゃ言っでねーで大人しくついてくれば
いいんだよ！」

男が怒鳴り気味の大声を出す。短気というわけではなく、少し脅
せばついてくるという考えだ。

ほかのメンバーも脅しにのっているようで、険しい目で幸助を睨
んでいる。

その脅しも魔物たちの殺気に比べるとたいしたものではなく、幸
助になんの効果も与えていない。

「どうしたんですか？」

大声を聞いた職員が近づいてきた。

幸助が知っている職員だった。ギルドに來た初日に受付にいた女性職員だ。

「この人たちが依頼に行くのを邪魔してるんです」

「ギルドは冒険者同士の争いには関わらないんだろ。さっさと向こうにいけよ！」

「確かに冒険者同士の争いには関わりませんが、依頼の邪魔となると話は別ですよ」

「いいんだよ！ どうせ雑事系依頼なんだから！」

「雑事系というと、もしかしてあなたはコースケ・ワタセですか？」

「そうですがなにか？」

「いえただの確認です。あなたにはなんの問題もありません。

問題があるとするれば、あなたたちレグルスパロウです」

「レグルスパロウ？」

聞き覚えのない単語に幸助が首を傾げている。

「彼らのチーム名です。複数の冒険者が集まった場合、彼らは一つのチームとして名乗るのですよ」

レグルスパロウ、そういう名の宝石があり、意味としては惹かれ合うというもの。彼らは惹かれ合った者たちという意味でつけたのだろう。

「俺たちになにか問題なんかあるのかよ。問題あるとするればそいつだろ！ 冒険者として失格の小銭漁りが！」

幸助が小口の依頼ばかりを受け続けたことで、ほかの冒険者たちは幸助を冒険者として当たり前の仕事もこなせないという意味をこめて『小銭漁り』という蔑称をつけたのだ。

「……小銭漁りですか」

くすりと小さく笑い、話を続ける。笑みにはどこか嘲りが含まれていたようにも見える。

「知っていますか？　ワタセさんの受けた依頼には偏りがあるんですよ？　どれも力を必要とするものばかりです。普通ならば冒険者など鍛えた者が最低でも四人は必要な依頼をたった一人で、しかも短時間で終わらせているのです。」

しかもこの二十日間で受けた依頼は三十五件、一日休んだだけであとはずっと力仕事をこなし続けています。さらにはどの依頼も依頼者に満足してもらい解決しています」

幸助がそれだけ依頼をこなし続けたのには深い意味はない。ただ疲れなかっただけだ。しっかりと眠れば、この街で受けた依頼程度ならば次の日の朝には疲れがとれた。一日休んだのは、疲れを溜め込んでいるのではと勘違いしたボルドスに無理矢理休まされたただだ。

「そ、それがどうした！　雑事系依頼なんかどれも取るに足らない簡単なものばかりだろ！」

「そうですね、はっきり言って冒険者が受けるには首を傾げるものが多いのは事実です。けれども冒険者でなければこなせない依頼があるというのも事実です。」

そんな依頼を短期間でハイペースで達成し続けているのですよ？

そのすごさがあなたたち冒険者に理解できないはずはないでしょう？　そして小銭漁りなどという二つ名をつけて、あなたたちの自尊心を満たすことの愚かさに気づかないのですか？」

職員は目の前の冒険者だけではなく、ほかの場所からこの騒ぎに注目している冒険者たちも眺めている。

先ほどの嘲りは幸助に向けたものではなく、幸助を馬鹿にしていた冒険者たちに向けられたものだったのだろう。

「やけにそいつの肩をもつじゃねえか！　功績のないそんな奴を鼻屑してなんの意味があるってんだ！」

「有望な冒険者に注目するのはギルドとして当然のことです」

「有望？　そいつが？　冒険者らしいことをなんもしていないそいつが！？」

おもいっきり馬鹿にしたように笑いながら幸助を指差す。指差された幸助も職員の言葉に驚いている。指摘されたように冒険者らしい依頼は受けていないのだ。評価されることが不思議だった。

「有望ですよ？　すでにワタセ氏を指名して依頼が入るようになってますし。といっても雑事系依頼ばかりですけどね」

職員のこの言葉にざわりと雰囲気揺れる。雑事系依頼でも指名されることは多くはないのだ。このギルドに所属する者で指名されるのはボルドスをはじめとして五人だけだ。

「いい加減なこと言うなよ！　そんな奴に指名！？　そいつが受けた依頼は雑事系ばかりじゃねえか！　そんなんで指名なんかされるはずがないだろう」

「雑事系だからこそですよ。雑事系依頼はこの街の住民が困ってい

ること。それを解決し満足してもらえば、それだけ住民に良い印象を与えます。そして解決してもらった住民は近所の住民に話すでしょう。こういった冒険者に問題を解決してもらったと。それを聞いた住民に問題が発生したとき、話に聞いた冒険者ならばどうにかしてくれるかもしれないと思っても不思議ではありませんよ。そして問題を解決してもらえばまた評価は上がり、住民の間に噂は広まるでしょう。

雑事系依頼というのは低めの報酬のかわりに、住民の好印象という見えない報酬を得ることのできる依頼でもあるのです。

わかりました？ こういった経緯でワタセさんに指名が入るようになったのですよ。

ついでにいうとギルド職員の評価も高めです。それは溜まりがちな雑事系依頼をどんどん減らしていったからです」

ギルドからの評価も高いという言葉に、その場にいる冒険者たちはさらにざわつく。

「依頼が解決されず長期にわたり残ってしまうということは、それだけそのギルドに解決能力がないということになります。そんなギルドに依頼をもってこようと思えますか？ もっと頼りがいのあるギルドに持っていこうと考えるのが普通です。そうやって依頼を別のギルドに持っていかれたり依頼をされなくなると、ギルドの収入は減っていきます。

ですから雑事系依頼であろうとも次々と解決していったワタセさんは、ギルドにとって嬉しい存在なのですよ。

これで私がワタセさんを最上とする理由がわかりましたね？ ギルドと住民にとってありがたい存在であるワタセさんと、ギルドにとって迷惑なあなたたちとは対応が違って当然なのです」

レグルスパロウの面々は悔しげな表情で、職員と幸助を睨みつけ

ている。

幸助自身は現状を狙ったわけではない。楽なものを選び続けたただけだ。それが小さなことからこつこつと、という状態に偶然繋がった。

「そいつが最肩される理由はわかった。だが俺たちがギルドにとって迷惑なのは聞き捨てならねえ！」

「わかつていると思うんですが、とぼけているんですか？」

あなたたちが引き受けた依頼は実力にあわぬものが多く、達成率は四割をきる。

本来ならば引継手続きは多用されるものではありません！ それをあなたたちはここ一年半ですでに十回。この街に来る前とあわせると二十を超えます！

ギルドが依頼達成できない者を送ってくると依頼者に思われてしまい、ギルドへの印象が下がります。正直いい迷惑なのですよ。

そこでギルド職員たちによって話し合いが行われ、決められたことがあります。

それは、あと一度でも引継手続きを必要とする事態になった場合、この大陸でのギルド使用を半年停止します。

これは提案ではなく警告です！ わかりましたか？」

こういった話は普通は彼らを呼び出してからするものだ。今回のように多くの面前で話したのは二つの理由がある。

一つは雑事系依頼の重要性を知ってもらい、もっと多くの冒険者に受けてもらうことを狙った。これはその場の思いついたついでみたいなものだ。

本命はもう一つのほうだ。

ギルドが本気ということを知らしめることを狙った。この場にはそれなりの人数がいて、彼らは証人となりうる。もしレグルスパロウが引継手続きを行えば、ギルドは本当に使用禁止を大陸中のギル

ドに知らせる。こうすることで今後のためにも一罰百戒となればいいと考えているのだ。

あとはレグルスパロウにあたがないと知らせることで、成長を促すことも少しは考えられていた。

「ちっ分かりましたよ！」

行くぞ、お前ら！」

ギルドを使えなくなることは冒険者にとって痛手ではない。そのことをレグルスパロウの面々もよく理解している。

だから今受けている依頼を確実にこなすため、これから仲間内で話し合おうと考え、ギルドを出ていった。

「これでましになってくれるといいのですが」

「えっと俺も依頼に行っていないのかな？」

「ええ、いつもどおりの働きを期待していますよ」

「できることを当たり前にやってるだけなんだけどなあ」

高すぎる身体能力あつての仕事量だと自覚はあるが、その自覚がまだまだ足りないゆえに現状がある。一般の冒険者は日に二度の依頼を受けないし、二三日に一度は休みをとるものだ。

「でしたら、そのままでもいいづけてください。

その当たり前ができていない冒険者は意外と多いのですから」

「あと十日間ほどマイペースで頑張ることにします」

「十日？」

「この街にいるのもあと十日ですから」

「そうなのですか。有望な冒険者がいなくなるのは残念ですが、いなくなるなどとは言えませんからね。旅とロマンは冒険者から切り離せないものですし」

「旅というか実家に戻るだけなんですよ。ときどきはこっちにくるんじゃないかなあ。お金稼ぎたいし」

これを聞いた職員は安心したように笑みを浮かべる。優秀な冒険者の流出は避けたいのだ。

その職員に見送られ、幸助は依頼者のもとへとむかった。今日の仕事は荷物の移動だ。

この日から雑事系依頼を受ける冒険者の数が少しずつ増えだすことになる。

エリスに指定された期日まであと六日という日。目標金額に届いた幸助は上機嫌に宿へ戻り、夕食も食べ終えて自室でのんびり過ごしている。明日から依頼を受ける必要もなくどうやって過ごそうかと幸助が考えていたとき、部屋の外から誰かが走る音が聞こえてきた。その足音は扉の前で止まり、勢いよく扉が開く。

「コースケさんっ頼みたいことがあったんです！」

部屋に入ってきたのはワイアーレだ。息をきらして、汗だくになり、必死な表情で幸助を見ている。

自身を見る視線の強さに幸助は押されてる。

「た、頼み？」

「街の外に出たコルングたちを連れ戻してもらいたいんです！」

「コルングって誰？　とりあえず息を整えて、落ち着いて最初から話してくれる？　断るつもりはないから」

水の入ったコップをワイアーレに差し出す。それをいっきに飲んでワイアーレは数秒間息を整える。

「えつとですね、以前幸助さんが風邪をひいてるって勘違いした子が本当に風邪をひいたんです。

体力のない状態で病気になって、私たちが風邪になるよりも苦しい思いをしているんです。

状態をよくするにはとある薬と魔法を併用すればいいんですけど、運悪く薬の材料がこの街にはなくて。

転移魔法を使える人に頼んでよその街からとってきてもらおうと思ったんですが、その依頼料と薬の材料代金が高くてうちでは出せないんです。でもお金は近所に住む人たちに借金することができて調達できました」

ここでウィアーレは一呼吸して続きを話す。

「頼みたいのは、うちにお金がなくて薬草が買えないと思い込み、取りに行った子供たちを連れ戻してもらいたいってことです」

「なるほど、その子供の一人がコルングってこと」

「はい」

「街の中にはいなかったんだ？」

「私たちもはじめは遊びまわってると思って探し回ったんです。したら街から出て行く荷馬車に乗り込むところを見た人がいて」

「その人は止めなかったのか？」

「出て行く馬車の関係者だと思っていたようで」

「それなら止めないね。」

子供たちはどこに向かっているんだ？」

「西のくぼ地です。徒歩で六時間くらいの近場ですが、ここらでは一番の危険地域でもあります。その泉にリルトートリネという薬草が生えているんです」

幸助は薬草の名前を聞いたとたん表情が変わる。その薬草に関連

したことをホルンから聞いていた。慌てて立ち上がり、立てかけていた剣を手取る。

「そこってここらで一番強い魔物のいるところじゃん!？」
そんなとこに子供たちだけで!？」

そこに行くまでも危ないが、到着しても危ない。

急いで宿を出て、飛翔魔法を使う。一緒に宿を出たワイアーレのほかに、騒ぎを聞きつけたシディや宿泊客に見送られあつというまに幸助は街を出た。

出せる最高速度で飛び続けた幸助は三十分を少し超えるくらいでくぼ地の淵に到着した。

一心不乱に前だけ見続けていたので、月が雲に隠れていることもあつて、もし道中に子供たちがいたら見落としてた。だがそうならずにはすんでいた。暗い中二ヶ所明りがついている場所があり、その一つ幸助が着地したところから近い場所に冒険者らしき二人と子供たちが一緒にいたからだ。

「無事だった」

見覚えのある子供たちを見つけて、幸助は大きく安堵の溜息を吐いた。

「あんた、この子らの知り合いか？」

突然やってきた幸助を警戒しつつ、冒険者の一人は問う。

「その子らの保護者と知り合いなんだ。その保護者に頼まれて連れ戻しにきた」

冒険者は子供たちに幸助を知っているか問いかけ、子供たちはそれに頷いた。

それで警戒心が解けたのだろう、冒険者たちの硬くなっていた表情がわずかに弛む。

「そうか。それなら連れ戻してくれ」

ないか、と続けようとした男の言葉を遮って悲鳴が上がる。

全員が悲鳴のした方向を見るが、遠くて暗く何が起こっているのかわからない。

「くそっヴァイオレントバルブに襲われたか!？」

ヴァイオレントバルブ、このくぼ地が危険地域となっている原因の名前だ。

地中に住む魔物で、本体である球根は滅多に動かない。かわりに硬く敏捷で鋭い牙を持つ口のある根が獲物を捕らえる。地面のどこから襲ってくるかわからず、また根の数も多い。根を攻撃しても本体にはなんのダメージもない、間違っても駆け出しには倒すことなどできない魔物だ。

それがこのくぼ地には五体以上群れている。

「あんたはここで子供たちを守っててくれ」

男たちは幸助の返事を聞かずに、悲鳴の上がった方向へと走っていく。

二十分間、怒声や悲鳴や剣戟の音が聞こえ、走っていった男たちが仲間を連れて戻ってきた。彼らは全員傷だらけで、歩くのがやっとといった様相だ。

「こいつらを頼む」

仲間を地面に寝かせて男たちはもう一度、くぼ地の中心へと向かうと立ち上がる。

無茶だと判断した幸助は彼らを止める。

「その傷じゃ無理だ！」

「仲間がまだ一人残ってるんだ！ 俺たちをここまで逃がすために
囚になった！」

「必ず助けると約束したんだっ、だから俺たちは行かなくちゃいけない！」

体はぼろぼろなのに、気力は満ちている。

仕方ないと覚悟を決めて、幸助は口を開く。

「……それでもあなたたちはここにいてください。俺がかわりに行
ってきますよ」

「それこそ危険だ！ 防具もみにつけず、剣一本でどうこうできる
相手じゃ!？」

「大丈夫です。まあ信じろとは言いません。俺も強敵らしい魔物と
戦うのは初めてですし。」

ですけど知り合いは大丈夫だと言ってくれました」

リルトートリネの話を聞いたときに、もしヴァイオレントバルブ
と己が戦うことになったらどうなるかと聞いた。

そのときのホルンたちの答えは、勝つのは難しいが負けることは
絶対にならないというものだった。

勝つには地中にいるヴァイオレントバルブを攻撃しなければなら
ないが、幸助にはその手段はまだない。そしてヴァイオレントバル
ブは幸助にほとんどダメージを与えることができない。幸助がヴァ

イオレントバルブの活動範囲から移動すれば、負けはない。

戦闘経験が少なく自身の実力を完全に把握していない幸助は、自身がヴァイオレントバルブとどれくらいやりあえるのかわからない。しかしホルンたちの言葉を信じることはできる。だからホルンたちの言葉通り負けないのだろうと考えている。

ぼろぼろな自分たちよりも、臆することなく言い切った幸助のほう仲間を助けることができそうだと判断し、男たちはその場に座って「頼む」と一言告げた。

頷いた幸助は、明りの魔法を使ってから、剣を抜き緩やかな坂を駆け下りる。走ったことで起きる振動で、幸助の接近を察知したヴァイオレントバルブの根が、地面から飛び出てくる。ざっと見ても二十本以上あり、一本一本が綱引きの綱と同じくらいの太さで、先端には鋭い牙をずらりと持つ口がある。

「邪魔！」

避けることのできるものは避け、無理なものは剣を振るいちぎられていく。並みの剣では切れない根は力任せの攻撃で両断されていく。

十本ほど斬ったところで、根が密集しているところに到着した。吐き気を催す血の臭いとともに、弱弱しい声と肉を噛む音が聞こえてくる。

「このっ」

剣を振るい根を次々とちぎりとばす。

「うっ」

根を払いのけた向こうには血だらけの男が横たわっていた。

手を口元に当て、吐き気を我慢する。手はそのまま話しかける。

「すぐ治療しますから」

重傷用治癒魔法をかけようとして屈んだときに、新たな根が地面から飛び出してくる。

幸助に襲いかかる根は少なく、ほとんどが血の臭いにひかれて男へと向かっていく。男に近寄らせないため、剣を振り追い払う。そして追い払い治療しようとするたび新たな根が飛び出てきて、男を狙う。

「きりないな！」

「に、にげ……ろ」

薄れゆく意識の中で男は幸助だけでも助かるように声を発する。

「喋っちゃだめだ」

完全に治療することよりも、傷口をふさぐことを目的とし魔法を使う。こちらは重傷治癒用魔法よりも素早く使えるので、なんとか使うことができた。だが傷をふさいただけで、流れ出して失った血と体力まではどうにもできない。

「これからどうしようか？」

応急措置はできたが、動かしていいものの悩む。背負って移動するにしても、根は必ず襲い掛かってくるだろう。そうすると避けなどの動作で、激しい動きになることは必然。重体の身には大きな負担となる。

「襲い掛かってこなくなるというんだけど」

男はまだ逃げろと言っているが、幸助はそれを無視して考えている。考えてる間にも根は襲い掛かってくるので、上手く考えがまとまらない。払っても斬っても次から次に出てくる。

「だあーっ！ 邪魔だお前ら！ 引っこ抜くぞ！」

思わず口に出した言葉に幸助はそれだと手を叩く。

「引っこ抜いて本体叩けばいいのか」

男が無理だろうと小さく突っ込みを入れたが、聞こえていない。思い立ったが即実行と幸助は根を一本掴んだ。両手で持ち、力一杯引っ張る。一瞬ピンッと伸びきり、次の瞬間にはちぎれた。ちぎれた根は少しだけビタンビタンと跳ねてすぐに動かなくなった。

「一本だとちぎれるなら、何本も掴んで引っこ抜いてやる！」

今度は十本掴み力一杯引っ張る。以前岩を引っこ抜いたときよりもヴァイオレントバルブは重く抵抗があったが、引っこ抜けないということはなかった。

土が盛り上がったと思うと、土砂を巻き上げヴァイオレントバルブが姿を現す。それは百近い根を持つライチのような見た目をした魔物だ。大きさは縦横一メートルを少し超えるくらいの球体で、本体には攻撃できるような手段はない。

「近づきたくないな」

うねうねと蠢く多くの根に少し腰が引けている。

だが近づかなければ目的を達せないの、覚悟を決め突っ込んだ。その勢いのまま剣を叩きつける。

一撃叩きつけるごとに根が縦横無尽に暴れ、幸助の体を打つ。それを気にせず剣を振るい、十を超えて根の動きが止まった。

「止めのおっ一撃！」

放った突きはヴァイオレントバルブの中心まで届く。

根がわずかに震え、完全にその動きを止めた。

幸助は剣を抜き、ヴァイオレントバルブの体液を払う。体液は幸助の体にも降り注いでいて全身を濡らしている。それを触り顔を顰めた。

「気持ち悪う。服もぼろぼろだし、買い換えんなあ」

だがそうだったかいあってか、ヴァイオレントバルブの根はでこなくなつた。自分たちを殺せる者がいるとわかり、手出しすることをやめたのだ。

これで落ち着いて治療できるようになり、男に魔法をかけていく。折れていた骨、つぶれていた指などが次々と治っていく。

「これで動かしても大丈夫、だよな？」

「……ああ、助かった。だが本当に引っこ抜いて倒すとは」

痛みが消え、だいぶ楽になった男は今までよりも明瞭に話すことができるようになった。

「ただ血とか体力が減って動けそうにない。すまないが背負ってもらえないだろうか？」

「それくらいなら……俺汚れてるけどそれもいい？」

「贅沢は言ってられないだろ、かまわないさ」

「了解です」

剣を鞘に納めようとしてできず、ベルトにはさむ。そして男を背負う。

「すまないが、もう一つ頼みごとでもいいだろうか？」

「できることなら」

「泉に行つて、リルトートリネを取ってもらいたい」

男たちはリルトートリネの採取依頼のためにここにいたのだ。ヴァイオレントバルブが大人しくなった今ならば回収もできる、この機会を逃したくはなかった。

少し寄道するくらいはどうかとなく、幸助は泉でリルトートリネを回収し、皆の待つ場所へと向かう。念のため奇襲に対して周囲の警戒はしている。

リルトートリネを回収したついでに、腕と顔についたヴァイオレントバルブの体液は洗い流しておいた。

「戻ってきた！ レイコック無事か！」

「ああ、なんとか生きてるよ」

レイコックと呼ばれた男の周りに仲間が集まってく。怪我は自分たちで治したのだろう、傷のほとんどは治っている。

「ありがとうっそんなぼろぼろになってまで仲間を助けてくれて！」

男たちが幸助に頭を下げる。

「これ、取ってきた」

持っていたリルトートリネをレイコックの仲間に渡す。

「とってきてくれたのか」

「頼まれたし、余裕もあったからね」

「余裕ってそんなぼろぼろで」

「ぼろぼろなのは服だけ。怪我はしてないから」

「いやそれだけ服がぼろぼろってことは何度も攻撃受けたんだらう？
それで怪我がないって」

幸助は袖を上げて腕を見せる。根に噛みつかれ叩かれた部分は赤く腫れているがそれだけだ。骨折どころか切り傷一つない。痛みも少しひりひりとする程度だ。

「どんだけ頑丈なんだ」

「人一倍頑丈らしいよ。俺もここまでとは今日初めて知ったけど」

頑丈にもほどがあるだろうと皆呆れる。こうあつけらかんと言われると、死にかけて自分たちがおかしいように感じられていた。実際は死にかけるほうが正常なのだが。

幸助もレイコックたちも目的は果たし、あとは帰るだけだ。しかしレイコックをはじめとして大人たちは休息が必要な状態だ。なので夜明けまでこの場で野宿となった。子供たちが早くリルトートリネを持って帰りたいと騒いだが、そんな状態ではないと冒険者たちが諭す。しかし子供たちは納得せず、自分たちのみで帰ろうとする。

「打ち寄せる眠りの波」

言葉で無理ならば行動で、と幸助が子供たちに眠りの魔法を使う。抵抗する間もなく子供たちはその場に崩れ落ちた。

「始めからこうするか、脅しつければいいのに」

「子供にそんなことはできん」

「優しいのか甘いのか」

動ける者で野営の準備を始める。といっても焚き火のために枯れ草などを集めるだけだが。あとは子供たちを毛布で包んで終わりだ。剣以外なものも持ってきていない幸助は、レイコックたちに携帯食料をわけてもらい空腹を満たす。

なにもすることがなく、幸助たちはぼつぼつと話しながら夜を過ぎしてく。

人間動物魔物なんでも喰うヴァイオレントバルブが近くにいます、ほかの魔物が近寄ってくることはない。そのヴァイオレントバルブも幸助に近づくことがないので、気合を入れて見張りをする必要がなく、ゆったりとした時間をすごせている。

暇つぶしの会話でレイコックらが死にかけた理由が判明する。

彼らはすでにわかっているようにリルトートリネ採取にきていた。到着したのが日が暮れた頃だったので、夜明けを待って行動開始するつもりだったのだ。好きで夕闇の中を行動したわけではない。彼らが動いたのは彼ら自身の甘さが原因だ。

野営の準備をしようかというとき、子供たちが到着し、ここにきた理由を聞いた。そして子供たちの「お願い」を断りきれず、危険だとわかっているのにヴァイオレントバルブの群生地へと足を踏み入れた。人としては素晴らしい判断だったのだろうが、冒険者としては下策もいいところだろう。

それを幸助が指摘すると、申し訳ないと頭を下げた。年下で後輩な幸助に素直に頭を下げたところを見て、幸助はお人よしの集まりなんだなと彼らを評し、それならば子供たちの願いを無視できなくとも無理はないと納得した。

ちなみにレイコックたちがここに来たもとの原因は、レグル

スパロウの引継ぎ手続きだ。レグルスパロウが採取依頼を受けて一度ここに来ていたのだが、ヴァイオレントバルブの強さを読み違い、退くしかなかった。あらかじめ警告を受けていたようにレグルスパロウは、この失敗でギルド利用が不可能になってしまった。

その話を聞いて幸助は、レグルスパロウはこれからどうするのだろうか、と少しだけ考え、すぐに興味を失った。

夜が明け十分休んだ一行はベラッセンへと戻る。

その途中レイコックの仲間たちのガッチという男が話しかけてくる。

「ちょいと聞きたいんだけどいいか？」

「どうぞ」

「どうして剣を鞘に入れないんだ？ 危ないと思うんだが」

昨日、ヴァイオレントバルブを殺したときから剣は鞘に納まらなくなっているのだ。よく見ると刃のところどころは潰れているし、少しだが刀身が歪んでもいる。

「入らなくなっただけですよ。無理に入れると鞘が壊れそうだし」

「ヴァイオレントバルブをぶった斬って、それだけですんだんだから運がいいと思うぞ。普通はあんなふうに斬れない」

戦いの始終を見ていたレイコックが呆れを感じさせ言う。

「斬った？」

「根も本体もざっくざく」

ガッチやほかの仲間たちが驚いた顔で幸助を見る。

「本当に？」

幸助は頷いた。

証拠の剣とレイコックの証言があるので、信じないという選択肢はない。

「強そうに見えないのになあ」

「意識が朦朧としてたから俺も夢かと思った。でもリルトートリネを採った帰りに、転がって動かないヴァイオレントバルブ見たら夢じゃないってわかった」

「それだけ強いならなにか二つ名とかありそうだ」

「小銭漁りって呼ばれてたよ」

「はあっ!？」

冒険者たちが驚く。

「小銭漁りって雑事系ばかり受けて、冒険者としての能力がないって噂だったんだが」

「雑事系ばかり受けてたのは楽だし安全だから」

「冒険者なら遺跡とかにロマンを感じないのか？」

「俺が依頼受けてるのは一定額のお金を貯めるためで、冒険者として身を立てたいってわけじゃないんだ」

「……ああ、なるほど。多くの冒険者と目指す方向性が違うから、依頼の受け方も違っていたのか。」

しかしそれだけの実力があれば大成できように」

レイコックたちは羨望を込めた目で幸助を見る。その目に幸助は少し引け目を感じている。努力してではなく偶然手に入れたので、努力している人たちの視線が痛いのだ。

パーティに加わらないかという誘いを断り、雑談しながら歩き続ける。

子供たちの歩調に合わせたり、休憩したりで予定していた時間よりも遅くなったが無事ベラッセンへと戻ってくることができた。

「じゃ、俺はこの子たちを孤児院に連れて行くから」

「夕方頃宿に行く」

無事に帰還した宴でも開くのかと思いつつ幸助は頷き、子供たちを連れて去っていく。

彼らを少しの間見送って、レイコックたちも歩き出した。彼らは医者に診てもらったあと、ギルドへと向かうことになっている。

孤児院に戻ってきた子供たちを待ち受けていたのは、ウェーイの拳骨だ。皆に心配をかけたこと、勝手に街を出て行ったことを叱る思いが込められていた。

子供たちが叱られている横で幸助はウィアーレに頭を下げられている。

「コースケさんっありがとうございます！」

「お礼は俺だけじゃなく、リルトートリネ採取の依頼を受けていた冒険者たちに言ったほうがいいよ。」

俺は帰り道で護衛しただけ。くぼ地で子供たちを守って、わがままを聞いたのは彼らだし」

「そうですか。わかりました、その方たちにもお礼は言います。ですがやはりコースケさんにもお礼は言います。」

私の話を聞いてすぐに動いてくれたこと、すごく嬉しかったです」
「誰だっと思って動くと思うけど」

「普通の冒険者なら依頼料を聞いてから動きますよ」

「あ、聞き忘れてたっけ。子供たちが危ないって思ってたそこらへん忘れてた」

しまったと思いつつ、頬をかいている。
その幸助をウィアーレは申し訳なさそうに見る。

「報酬なんですけど、きちんと払うつもりはあるんですが、借金してしまって余裕がなくて。分割払いがお金が貯まった頃に一括払いでお願いできませんか？」

「それほど苦勞……」

ヴァイオレントバルブとの戦いを思い出すが、黙っていればわからないだろうと話さず続ける。余裕がないことは孤児院の外装からわかるので、無理はさせたくないと思ったのだ。

「苦勞はしてないから報酬はなくてもいいけど？」

「駄目です！ きちんと払わせてください！」

「でも本当に楽な仕事だったんだから」

「なにを話しているんです？」

ほかの大人と説教を交代したウェイイが二人に近づいてくる。

「お父さん！ コースケさんが依頼料払わなくていいなんて言うのっ」

「だって依頼料もらうほどの働きしたわけじゃ」

「ウィアーレから聞いた話だと、飛翔魔法を使って急いでくぼ地に向かってくれたとか。そしてこうして子供たちを無事に送り届けてもらいました。」

子供たちの無事を思い行動し依頼を達成した、報酬を払うには十分な働きだと私は思いますよ」

「でしたら命をかけた冒険者たちに、今回の報酬を払ってください。
子供たちの願いを聞き届け、無茶をした彼らが受け取るべきだと思います」

レイコックからも依頼を受けたわけではないと言って辞退しそうだと思います。

「子供たちを助けてくれた冒険者がいるのですね。
彼らが行った無茶とは？」

視界のきかない闇夜の中の危険なリルトートリネ採取のことを大雑把に話す。

話を聞いたウェーイの表情に怒りが混ざる。説教が終わったあと、再び子供たちに拳骨が落とされることになる。子供たちの言動で他人の命が危険にさらされた、そのことをほうっておくことはできなかったのだ。冒険者全滅など起こりえた事柄を話して、子供たちに軽はずみな行動のまずさを教え込んでいく。

「あとでもう一回怒らないといけませんね」
「しっかり叱つといてください」

家族のために子供たちだけで街の外に出る、その勇気と行動力は買うのだが同じことは勘弁願うので、幸助は叱るということに大いに賛成だ。

「それはそれとして、やはり報酬は払わないといけない」
「え、そこに話を戻すんですか？」

「冒険者にとっては大事なことでしょう？」
「うんうん、大事なことだよコースケさん」
「それはそうだと思うけど、今回にかぎってはねえ」

断る姿勢を崩そうとしない幸助を見てウェーイは、同情に近い感情を抱いているのだと見抜く。経営が厳しいのは事実で、見下され

ているわけでもないの、幸助の同情を不快には感じていない。そのくらい流す器量はある。

「ちょっと待っててください」

「はい？」

ウェーイは家の中に入り、十分ほどして出てきた。手には黒い衣服を持っている。

「これは私が現役時代使っていたものなのですが、これを報酬としましょう。」

見たところ服がぼろぼろで買い換えどきの様子、ちょうどいいのでは？ この服は少々のことでは破れませんよ」

「現役時代の思い出の品なのでは？ そんな大切なものいただけませんよ！？」

「いえいえ、タンスにしまいこんでいるだけですから。どうぞ」

「……ではいただくことにします」

衣服ならば、そう高くもないだろうと受け取ることにした。

「ありがとうございます」

「いえいえ依頼をこなしたことに對する報酬ですから礼を言う必要はないんですよ」

もらった服はジャケットでどこにもほつれなどなく、何年も前のものとは思わせない。

着てみると少しだけ大きい、動くのに支障はなかった。

似合いますよ、と言ってくるウィアーレの言葉に照れつつ、再度礼を言った幸助は孤児院を出る。

「あ、お帰りなさい」

受付で暇そうに肘をついていたシデイが幸助に気づき、声をかける。

「ただいま」

「どこに行ってたの？ 急いで出て行ったときはただごとじゃない様子だったけど」

「ちょっと急ぎの仕事を頼まれて」

「剣を抜き身のままにしてるのは、その仕事関連？」

「うん。鞘に入らなくなって修理って買った店で頼めるのかな？」

「頼めるぞ」

階段からボルドスの声が聞こえる。

「あ、ボルドス。久しぶりな感じが」

「まあ、最近会ってなかったしな。」

それで剣のことだが、クラレスに頼めばどうにかなるだろうさ。ただ程度によって費用も変わってくるが。

剣を見せてくれないか？」

ベルトから抜いてボルドスに剣を渡す。渡された剣の状態を見てボルドスは軽く目を見開いた。

「……予想以上だな。なにを斬ってきたんだ？」

「ヴァイオレントバルブ」

「くぼ地に行ってたのか。」

ヴァイオレントバルブは硬いって話だが、斬れたのか？」

「斬れたよ。力任せだけど」

ボルドスはなるほど頷きつつ、感心もしていた。力が馬鹿みに強ければ、品質が高いといえない武器でも無理を押し通せるものなのだ。

「これからクラレスのところに行くか？」

「少し寝たいんで、明日行きます」

昨夜は怪我人連中をきちんと休ませるために、幸助が一番長く見張りをしていたのだ。そのせいで、疲れはないが眠気がある。

そのことを告げて、幸助は剣を返してもらい部屋に戻った。そのまま着替えずベッドに横になる。起きたのは部屋がノックされた、夕方頃だ。

眠気を払い扉を開ける。ノックをしていたのはシディだ。

「コースケさんにお客さんよ」

「客？ ああ、そういえば」

レイコックたちのことを思い出す。

「下で待ってるんですか？」

「ええ」

一階に下りると、ガッチともう一人ヒロという名前の冒険者がいた。

「お待ちせしました」

「そんな待ってないよ」

「そうですか。それでどんな用事で？」

「これを渡しにきたんだよ」

ガッチが小袋を幸助に差し出す。

受け取って袋の中身を見てみると銀貨が三十枚入っていた。金貨一枚分だ。一般家庭ならこれで三ヶ月ほど暮らせていける。

「……どうしてお金を俺に？」

「いやな？俺たちの依頼をかわりにやってくれただろ？だから依頼料はお前のものだ」

幸助は耳を疑いもう一度聞くが、同じ答えが返ってきて聞き間違ではないと受け入れた。

「まさか全額持ってきたわけじゃ？」
「全額だぞ」

ヒロが胸をはって答えた。
人が良すぎだと幸助は頭を抱えなくなる。

「あほだ、あほな奴らがいる」

呟いた言葉はガッチたちには届いていないようだ。
依頼を代行したのはたしかだが、全額受け取る気のない幸助は半分もらい、残りをガッチに渡す。

「依頼をかわりにやってもらったのはこっちも同じ。だから半分だけもらおうよ」

全額返そうにも受け取る気がなかったので、半分もらいガッチに渡す。

この申し出は彼らにとって助かるものだった。レイコックが怪我をした際に傷口から入ったばい菌が原因で入院したからだ。あい

くと魔法で簡単に治せる類のものではないので、二週間ばかり入院する必要があった。その間の入院費用や滞在費や修理費用で、彼らは頭を悩ませていた。

「今回のことで駄目になった装備とかの修理にお金かかるだろう？俺もそうだし。」

だから全額はもらえない」

「こちらとしては助かるが、それでいいのか？」

「子供たちを連れ戻すための報酬はもうもらってるから。銀貨全部を受け取るとこちらだけに得がありすぎる」

気にしないで受け取ってという幸助の言葉に、礼を言いつつガツチとヒイロは宿を出て行った。

その背を見送り、あの人たちはこれから大丈夫なのかと幸助は考えていた。人が良すぎて利用されるのではと思いましたが、駆け出しの自分が心配などするのは失礼かと思い、己の頭を軽く叩く。それとなく気をつけておこうと考え、幸助は部屋に戻っていった。

翌朝、ボルドスに起こされた幸助は一緒に朝食を食べ、チェイン武具店にやってきた。幸助は一人でくるつもりだったのだが、ボルドスも用事があるようで一緒にきたのだった。

「いらっしやーい」

店内で出荷用の武器を箱詰めしていたクラレスは、足音で来客に気づく。

「おはよう」

「おはようございます」

「コースケは久しぶりね。来てくれなくて、おねえさん寂しかった

のよ？」

「え、えっと。用事がなくて、すみません」

「謝る必要はないぞ。そんなくらいで寂しがするような奴じゃないからな、からかっているだけだ」

「私だって寂しいときはあるんだけど？ 特にあなたと会えない日は」

目に情熱の炎を揺らめかせ、人差し指でボルドスの胸をつつく。

「繁盛してるんだろ？ 人恋しいなんて日があるわけがない」

ボルドスは笑いながら、すれた答えでクラレスの言葉を否定する。その反応でクラレスの情熱の色が消え去った。落ち込んでいるような雰囲気は幸助は感じ取るが、ボルドスは気づいていないようだ。

「もしかして鈍い？」

幸助の呟きをクラレスは聞き逃さなかった。クラレスは小声を愚痴をもらす。

「気づいた？ ほんとにこの人は私たちの想いに気づいてくれなくてね」

「私たちって、ほかにもクラレスさんのようにスルーされてる人がいるんですか？」

「ええ。私の知っているかぎりもう一人いるわ。冒険者なんだけどもね、私より接点が多いのに、気持ちに気づいてもらえないのよ」

「えっと……いつか気づいてもらえますよ。いざとなったら押し倒せばっ」

「既成事実が最終手段。いい加減我慢できなくなったら、もう一人を誘ってするつもりよ。抜け駆けはしないって約束してるし」

「なにこそそ話してるんだ？」

「なんでもないわ。ちよつとした愚痴に近いこと」

「なにか愚痴があるなら俺も付き合うが？ 日頃世話になってるしな！」

ほんとにこいつはと、溜息一つ吐く。

「機会があったらね。」

それで今日はなんの用事できたの？」

気を取り直し、商売用の顔となる。

「俺は鎧の点検だ。コースケは剣の修理」

持ってきていた鎧をカウンターに載せる。

クラレスは載せられた鎧を眺めて、素早く簡単なチェックを終える。

「これなら今日中に終わるよ」

「いつもながら早い仕事で助かるぜ」

「それほど酷使されてないからね。」

次はコースケの剣を見せて」

差し出された剣を見て、クラレスは大きく顔をしかめた。

様々な角度から見て溜息を吐く。

「こっちは盛大に酷使されちゃって。こんなになるまでほったらかしじゃ駄目よ！」

「ほったらかしたっていうか、昨日の戦いでそんなになって」

「これそれなりに頑丈なのよ？ たった一日でここまで劣化するの

は無理よ」

「いやいや無理じゃないんだ。ヴァイオレントバルブを斬ったらしい。それなら納得できるだろう？」

クラレスは思案気な顔つきになる。

「斬ったの？ 戦ったじゃなくて？」

「斬ったんだろうコースケ？」

問いかけに幸助は頷いた。

ただ戦っただけではそこまでぼろぼろにならないと、鍛冶屋ではないボルドスでもわかる。

「だとするとこれは」

クラレスは考えつつ、軽く剣を振るう。数回振って納得いったのか剣から視線を外す。

「力任せに叩き斬ったのね。そんな無茶したら、そりゃここまで劣化するわ。本当ならこの剣であの魔物を斬るなんて無理なんだし」

様々な武器の状態を見てきたクラレスもこのような状態は初めて見たが、そこはプロを名乗ることのできる鍛冶屋、推測から正解へと辿りついた。

よく折れなかったものだと、剣に賞賛の言葉を心の中で贈る。

「この修理には四日かかるわ。私じゃ無理だから、お父さんに頼まないと」

「お金はどれくらいですか？」

「銀貨で……六枚ほどかしら」

元値の半分以上という修理費に、無理したのだと幸助は改めて思い知った。

昨日もらった報酬から六枚出して、クラレスに渡す。

「まいどあり」

「俺の用事は終わったから帰るよ。では四日後に取りにきます」

「あ、一つアドバイス」

ボルドスとクラレスの邪魔にならないように、幸助は店から素早く出ようとした幸助を呼び止める。

「この剣は振るったとき叩きつけていたからここまで損傷したの。これが斬るということを意識して振るっていたら、ここまで損傷することはなかったと思う」

「次からは振り方を意識しなさいってことですか？」

「場合によっては今回のような振り方も有効ではあるんだろうけどね。長持ちさせたいなら意識して損はないわ」

ボルドスが教えた剣術が叩き潰すといった方針なので、今回の劣化も無理はないのかもしれない。

「気をつけてみます」

今度こそ幸助は店を出て行く。

ボルドスはなにか用事があったのかと首を傾げ、クラレスは気を利かせてくれたのだと理解した。

「防具の一つでも見繕ってやろうと思って一緒にきたんだが」
「その必要はないと思うけど」

「どうしてだ？　初めてここに連れてきたときは防具のこと言ってたろ」

「だってあの子が着ていたジャケットはそこらの安物の鎧より上物よ」

「そうなのか？」

「ええ。あのジャケットはシルモン布っていう布で作られてて、耐斬耐刺耐燃に非常に優れているの。まあ熱は通すし、衝撃までも防ぐわけじゃないけどね。」

「買おうと思ったら金貨三枚くらいは必要になるわね」

「あいつもきちんと防具を手に入れていたんだな」

この話を幸助が聞いていたら、すぐにウェーイに返しに行っただろう。遠慮した報酬よりはるかに高い代物をもらっているとは思ってもしなかったのだ。

そうとは知らずに幸助は長持ちするように作られた衣服と思い込んで、長く着続けることになる。

剣を修理に出し五日が過ぎ、街を出る日となった。

この間に幸助は農業と大工の仕事を手伝い、それぞれの基本的なことを教わっていた。エリスの家に戻ったとき、役立つ技術になると考えたのだ。

畑を造り野菜を提供し、ちょっとした家の修理をできるようになる。居候の立場としては、無駄飯食らいは避けたかった。

ほかにしたことはきちんと元通りになった剣を受け取ったり、農具を買い揃えたり、ギルドに行ったりだ。ギルドに行ったのはしばらくこの街にはこない予定なので、依頼の指名がきても受けることができないと伝えるため。

ギルドに行ったとき、いろんな人から勧誘を受けた。ガッチたちがギルド員に依頼の顛末を話しているとき、近くで話を聞いた冒険者からヴァイオレントバルブを倒したことが広まったからだ。嘘だ

と疑う者もいたが、多くの者は信じた。それはレイコックたちが嘘を言うような人物ではないと、多くの者が知っていたからだ。

持ってきた荷物と買った物を抱えて、幸助はボルドスとシデイの三人で話している。

「もう一ヶ月経ったんだねー」

「お世話になりました」

「お客様だからね、お世話するのは宿の従業員として当然よ。

次いつ来るかとか決まってる？」

「んー……最低でも二十日ほどは家にいるつもり。新しい魔法とか覚えたいし、畑作業とかもあるし。

ボルドスはエリスさんにか伝言ある？」

「特にはないな。元気でやってるとだけ伝えてくれ」

「了解。

じゃ、もう行く。またね」

「ご利用ありがとうございました」

「またなー」

宿の出て行く幸助を、二人は見送った。

街から出た幸助は飛翔魔法を使う。

振り返ると街の全貌が見えた。幸助が真正面を向きエリスの家へと飛び去ると同時に、街の景色がわずかに歪みを見せた。これが表面化し問題となるまでもう少しの時間を必要とし、その解決に幸助も関わることになる。

今の幸助はそのようなことは予想もせず、高速で街から離れていく。一ヶ月ぶりの再会を楽しみにしながら。

変装・潜入・わたし綺麗？

「やっと見えてきた」

空を飛んでいる幸助の視線の先に、エリスの家が見えた。

一ヶ月では大きな変化はあるはずもなく、出かけたときと同じ外見だ。

家の手前に降りようと高度を下げていく。しかし着地する前に見えない壁に阻まれて、顔面を打って地面へと落下した。

「あたたた」

打った箇所をさすりながら幸助は立ち上がる。頑丈さをいかんなく発揮し、怪我一つない。痛いと言っても口にはしているだけだ。

「なに？」

手を前に突き出すとなにかに阻まれ、それ以上前に突き出せない。触った感触は、ざらつきのないつるつとした冷たくも温かくもない壁。軽く叩くと音の響きと振動から、分厚い壁のようだとわかる。透明な見た目もあって分厚いガラス製の壁のように思えてきた。

試しに力を入れて殴ってみると、きしむような音が聞こえてきた。

「思いっきり殴ったら割れるかも。いや、そんなことせんけど」

エリスがわけあってこんな結界のようなものを使っているのだらうと、幸助も簡単に推測することができる。これを壊すことはエリスに不利なことにしかならないだろうし、怒られそうで壊そうとは思わない。

「こんなことしてゐるってことは留守なんかな？」

留守だとしたらどうしようかと頭を悩ませる。さりとていい考えも浮かばず、思いつくままに行動してみることにした。

とりあえず結果がどんな形なのかと好奇心が湧き、調べてみることに。

ペタペタと触りつつ移動して、三十分ほどで調査は完了した。形は立方体だった。隙間などはなく、どこからも入ることはできそうにない。

その調査のついでに様々な角度から家の中を覗き、家に誰もいないらしいと判明した。

「どうしょ」

待ってれば帰ってくるとはかぎらず、近くにあるらしいリッカートに行ってみようかと考え出す。お金は十分あるので、十日の滞在くらい余裕でできる。

「日が傾くまで待って帰ってこなかったら街に行こう」

方針を決めた幸助は荷物を置く。暇なので畑を囲む柵のための材料でも確保しようと、剣を抜いた。

修理された剣は、細かな傷以外は元通りになっている。

「そういえば斬ることを意識しろって言ってたっけ」

斬る斬ると呟きつつ、近くの木に向かう。

幸助の頭の中では包丁の使い方が浮かんでいる。食材に刃をあて引きながら斬る。それと同じように木を斬るつもりだ。

軽く素振りをしたあと、木の目の前に立つ。

「斬るっ」

言いながら木の根元近くめがけて、剣を振りぬいた。

ゆっくりと木が倒れていく。見事に一振りで斬り倒すことはできた。しかしそのまま叩き斬っても結果は同じなので、目的とした斬り方ができたのかいまいち実感できていない。

あれでよかったのかと首を傾げ、倒れた木をひょいっと担いで運ぶ。そう何本も試し斬りなどではしない。何本も斬り倒す必要はないし、斬りすぎるとエリスに怒られるのは目に見えている。

木を結界の近くまで運び、枝を払い、丸太へと変えていく。払った枝をひとまとめにしたあと、丸太を斬っていく。

杭用に斬った木材の先を尖らせていたとき、手元に影ができ声をかけられる。

「おかえり」

声のした方向へと視線を動かすと、エリスが空中に浮かんでいた。

「あー、ただいま。そしておかえり」

「ん、ただいま。なにをしてたんじゃ？」

「畑を囲む柵用の材料を作ってたんだ。木一本斬り倒したよ。もう一本くらい斬り倒すかもしれないけどいい？」

「かまわぬよ。でもどうして畑を作ろうって思ったんだい？ 街でなにか畑仕事に思い出でもできたのか？」

「いや、居候だから食費を少しでも浮かそうかなと」

「お金の心配ならいらんぞ？ 腐るほど持っておるからの。まあ新鮮なものが食べられるだろうから、止めはせんよ。気合入れて上手い野菜を作ってくれ。」

だが畑作りに取り掛かるには二ヶ月ほど遅れるじやろうが」

「どして？」

「これからリツカートと一緒に行的てもらうからじゃよ」

エリスは結界に触れ解除する。

荷物を置くぞ、と言つて家に入るエリスに幸助はついていく。

「鍬などは持つていく必要はない。持つていくものは、下着などの着替えとお金くらいでいい」

「あ、お金」

幸助は荷物から稼いだお金を取り出して、エリスに渡す。

「はい、借りてたお金」

受け取つたお金を確認したエリスは、それを幸助に返す。

「えっと？」

「試験は合格じゃ。十分街でも暮らしていけるな。褒美として、それはお主に渡そう」

「いいの？」

「さっきも言つたように、お金は腐るほどあるのじゃよ。剣のお金も含め渡したお金は返さずとも、私の懐は全く痛まん。

貸しという形にしたのは、そのほうが気合が入ると思つたからじゃ」

「たしかに貸しつて形だと気合入つたよ」

生活費は渡す。指定された金額を稼いでこい。と言われていたらもつとのんびりとしていたのではと幸助は考へている。借金という言葉は、やる気を漲らせてくれた。

貸しの理由に納得した幸助は、とりあえず与えられている部屋に戻り、言われたとおりに荷物をまとめていき、必要と言われたものを持ってリビングに戻る。

「準備したよー。でも出かける前に事情を聞きたいんだけど」

「うむ。話すことに異論はない。椅子に座るがよい」

幸助が座ってから、エリスは口を開く。

「コースケを街に連れて行くのはホルンがいないことにも関係する。ホルンは今、実家にいて外出できない状態だ。怪我をしているわけではないぞ」

外出できないと聞いて、表情を変えた幸助を安心させるように付け加えた。

「父親が外出を禁じておるのじゃよ。」

ホルンは顔を見せるだけのつもりで帰ったのだが、父親はホルンを政治の道具にするつもりなのじゃ。いわゆる政略結婚じゃな。まあいきなり結婚とまではいかんが。今回は候補者とのお見合いといったところか。選ぶのはホルンではなく、父親じゃがの」

ホルンをほしがる貴族はわりと多い。結婚することで伯爵家と繋がりを持てることは魅力的だ。ホルン自身が医術者として得た地位やその実力や各方面への繋がりも、貴族たちには魅力的なのだ。

ほかには縁起がいいという理由でホルンを求める者もいる。それは覆せないはず死の運命を乗り越えたことで、死や滅びを跳ね除けるなにかに恵まれているのではと考えられたからだ。それにあやかり、嫁として迎え入れることで家の存続を願うのだ。

集う貴族たちの中からホルンの父親にとって一番利益のある相手

を選ぶことが、今回のお見合いの目的だ。

「結婚かぁ。ホルンはなんて言ってるの？」

政略結婚と言われても身近なことではないので反応しづらく、そうなんだと相槌を打つくらいしかできない。

「本人はその気はないようじゃ。だがレーテルにとってはホルンの意思なんぞ関係ないのだろうさ」

「レーテルってホルンの父親？」

エリスは顔を顰めつつ頷く。

「本人の意思は関係ないって、そんなことで結婚上手くいかなんじや？」

「政略結婚と言ったろう？ 他家との繋がりを持って、両家に利益があればそれでいいのじゃよ。当事者の仲は二次じゃ。」

それに貴族で恋愛結婚は少ないぞ？」

「俺の周囲には貴族とかいなかったから、そこらへんはよくわからないなぁ」

そんなものだと知っていればいいとエリスは軽く流す。話の本題は貴族の内情などではないのだから。

「話を元に戻すぞ？」

コースケを連れて行くのは、ホルンの身辺警護をしてもらいたいからじゃな。幸助がそばにいれば、私は自由に動けるからの」

「ホルンにボディガードついてないん？」

「ついておるが、そやつらはレーテルの意を受けて動く者たちじゃ。今回の見合いに乗り気ではないホルンの監視も兼ねておる。」

そのような者たちに囲まれては息が詰まる。そこで息抜き要員としてコースケをホルンにつける。それだけが役割ではないがの」

「ほかになにをすれば？」

「屋敷から逃げ出すときの手助けをしよう」

「……それって大事になりそうじゃない？」

「実際に逃げ出せば大事になるじやろうな」

大きく頷いて認める。

「指名手配とか嫌だよ俺は！？」

「行動を起こすときは準備を整えてからだから安心してよい。屋敷に入るときは変装もしてもらう。お主の正体はばれぬよ。」

それに逃げ出すと決まったわけでもない。レーテルとの交渉が成立すれば、ホルンは堂々と屋敷から出られるからの」

「交渉？」

「そっちは私とホルンのみで大丈夫。お主はホルンの身辺警護に励んでいけばよい」

「ちなみに交渉材料ってどんなもの？」

秘密にしておくように、と幸助に言い聞かせて話し出す。

「レーテルは外交官として高い地位を持っておる。それはホルンのおかげなのじゃよ。」

ホルンは腕のよい医師者だとはすでに話したな？ その腕を見込まれ大陸の各地から、診察にきてくれと招かれるほどじゃ。その診察相手は遠くからホルンを呼び寄せることができるほど、金や権力を持っておる。レーテルは診察についていき、そのときの面識を利用して外交官として地位を築いた。

細い繋がりを太く丈夫にしたのはレーテルの高い交渉能力のおかげじゃが、もともとはホルンのおかげで交渉ができたのだ。相手も

そのことを重々承知しておる。だから恩のあるホルンが頼めば、レーテルよりもホルンを優先することもある。その頼みがレーテルに不利だとしてもな。

そのことをレーテルに忠告するのじゃよ」

「つまりは脅しですね」

「ほっほっほ。不安な未来を示唆しての交渉じゃよ」

「でも自分の家に不利なことをホルンがする？」

「家が潰れるような頼みはせんじやろうて、させる気もない。

だがレーテルの地位が若干下がるくらいならば、家が潰れるわけでもなし。そのあとに今後診察でのコネ作りは、相手方にも頼んで拒否するとも言え、ホルンの言い分を無視はできんさ。

まあ最初から脅す気はないがな」

いざとなればエリス自身の持つコネも使って圧力かけてやろうと考えている。

ここまでやってるが、エリスはレーテルが嫌いなわけではない。といって好きでもないが。関心が薄いといった方がいいだろう。

ならばなぜ邪魔をするのかというと、エリスは子供のことを考えない身勝手な親が嫌いだからだ。エリス自身が捨て子で、孤児院での生活も苦しかったということに起因している。

若い頃は親という存在に憎しみを持っていた。長く生きた今はましな親もいると理解している。

ボルドスに自身を母と呼ばせないのも、親嫌いということが関係している。

「ホルンのためになるなら、俺はなにも言わない」

「ホルンのためになるかはわからないな。そのまま結婚したほうが上手くいく可能性がないともいえない。

だがホルンは結婚はまだする意思がない。ならば私はその意思を尊重する」

「ホルンには世話になってるし、俺もその方向で動くのに異論はないよ」

聞くことは聞いたので二人は家を出る。

もう一度結界をはったエリスは、幸助を近くに呼び寄せ、魔法をかける。

「どんな魔法使ったって、声が少し高い？」

魔法の効果をエリスに聞くために出した自分の声が、地声よりも高くなっていることに気づく。

「使ったのは二つ。幻の魔法と声変えの魔法じゃ」

幸助は自分がどんな姿になっているか、なんとなく予想がついた。そしてその予想は当たっている。

今の幸助は女に見えている。年の頃は十五ほど。髪は肩までのボブカットで、色は黒。身長は少し縮み、体の線も細くなっている。目は大きく、小さめの鼻がちょこんとあり、ふっくらとした薄ピンクの唇。十人に聞けば、八人が可愛いと答えるという容姿となっている。

目だけが一般人から外れていて、右目は元の色の黒で、左目は青となっている。意味なくオッドアイにしているわけではなく、きちんとしたわけがある。

鏡がないので、幸助にはそのような姿になっているとはわからない。

なぜエリスがこのような姿を選んだのかというと、美人は得だということを知っているからだ。多少挙動が怪しくとも、美人の行動ならば目の保養と受け取る人間がいることを知っている。

だからこそ怪しさを少しでも誤魔化すためのこの変化なのだ。

「これが変装？」

「性別すら誤魔化しておるから安心じゃろ？　しかもスキンシップ
といって触られても感触すら誤魔化す高等な幻じゃ」

幸助は腕や胸を触ってエリスの言ったとおりだと実感した。ちなみに自分の胸を揉んでも少しも嬉しくはなかった。

「魔法の効果が切れたり、魔法を使ってるって気づかれたりはしない？」

「効果は切れるたびに自分でかけなおせばよい。四時間ほどで効果は切れる。」

魔法を使っていることはばれるじやろう。だが魔眼を封じるために使っておると誤魔化す」

「魔眼？」

ここでオッドアイにしたことがいきてくる。

魔眼はギフトの一つで、ものの動きをゆっくり見ることができる動体眼、遠くのもののはっきりと見ることができる遠見眼、真偽を見分ける鑑定眼などがある。

魔眼の持ち主は誰一人例外なく、オッドアイなのだ。そして魔眼の力を封じるために、魔法や魔法効果のある道具を使うことは珍しくない。自身で発動のオンオフはできるが、ちょっとした拍子に切り替わることもあり、そういった事故を防ぐため魔法や道具を使うものが多い。

「なるほど、で俺が持つてることになってる魔眼の設定って？」

「動体眼でよからうて。似たようなことできるじやろうし」

魔眼を披露するために行くわけでもないので、細かな設定は必要

ない。

二人は飛翔魔法を使い、リツカートへと飛ぶ。

街についたとき、太陽は沈みかけていた。

夕暮れ色に染まる街を、エリスが先導して歩く。着いたところは高級感漂う立派な宿だ。

エリスは受付で幸助の分の鍵を受け取る。事前に自分の隣の部屋を取っておいたのだ。

「これはコースケの部屋の鍵。しばらくここが拠点になるから、この位置を覚えておくように」

「了解」

宿のシステムはシディのところとたいして変わらない。違うところといえば、コースケたちの部屋には風呂が自室にあり、食事も部屋まで持ってきてくれるといったところだ。洗濯は同じようにやってもらえるが、今回は正体をばれないようにするため自分でやらなければならぬ。

幸助は荷物を部屋に置いてから、エリスの部屋に入る。

会わせたい人がいるようで、エリスの部屋で一緒に待つというところらしいが、いまだその人が現れないので、暇つぶしにこの一ヶ月の話をしていく。

話している間に夕食も運ばれてきた。

「もっと思い切った仕事を請けていれば楽に稼げたらうに」

「安全第一」

「そのわりにはヴァイオレントバルブと戦うなんて無茶もしておるではないか」

「あの場面じゃ見捨てるなんて選択肢は選べないよ」

「そうかもしれんう。」

しかしヴァイオレントバルブを引っこ抜くとはな。私はそのよう

な方法を聞いたことないぞ。怪力あつての方法じゃな」

「普通はどうやって倒すん？」

「魔法か毒じゃな。貫通系の魔法で狙い打つ。地中の熱を上げて燻りだす。根に傷を負わせ、そこから除草剤を本体に送り込み、時間をかけて殺す。」

コースケにはそれらを教えてはおらんから、倒せないと言ったのじゃ」

ここで部屋がノックされる。

エリスが扉を開けると、従業員が立っていた。

「すみません。エリシール様に面会したいという方が。お通ししてもよろしいでしょうか？」

「きているのは老女？」

「はい」

「だったら通してかまわない」

返事を聞いた従業員は一礼し、去っていく。

五分後、従業員に案内されて落ち着いた感じの老女が、エリスのとっている部屋に入ってきた。老女は変装している幸助にどこから似ていた。

「コースケ、紹介する、こちらはホルンの世話役のグレスス。コースケには、明日からグレススの孫として屋敷に入ってもらおう」

グレススには孫娘はいても孫息子はいいない。それをレーテルたちは知っている。だから女装して潜入するしかないのだ。

「えっと、はじめまして渡瀬幸助といいます」

頭を下げた幸助にグレススもお辞儀を返す。

「はじめまして、グレスス・ノーマンといいます。厄介なことに巻き込んでしまってごめんなさいね」

「グレススはホルンが赤子の頃から世話しておってな、ホルンのことを自分の娘のように大切に思っているとのことじゃ。

だから雇い主であるレーテルよりもホルンの意思を尊重し、今回も協力してくれるようになった」

「お嬢様が結婚を望んではいけませんから、協力するのは当たり前ですわ」

そう言う姿が自然で、本当にホルン第一なのだと思わせる。

「どうしてグレススさんの孫として屋敷に行くのか聞いてもいい？
グレススさんかエリスの紹介で働きにきましたってことじゃ駄目なん？」

「今屋敷はエリスの家族だけではなく、他家の者もいる。そんなところに正体不明の者を送り込むのは難しいのじゃよ。

だから老いて働くことに苦勞するグレススを補佐するため孫娘を呼び寄せた、という設定を考えたのさ。

グレススは長年問題なく屋敷に勤めて信用を得ている。グレススの孫ならば大丈夫だろうと思わせ、少しの事前調査だけで済ませるだけの信用があるのじゃ」

グレススはホルンの結婚に反対という意味を出してはいないので、今のところはレーテルに怪しまれてもいない。

「レーテル様にも既に許可をもらっていますよ。最近、仕事が辛くなってきたのも事実ですしね」

「明日から当分コースケは、グレススを祖母として接し、名前もユ

イスとなる。

間違えないようにな」

「努力はするけど」

演技など初めてのことだ。へましないかと今から緊張している。

小学校の学芸会でも役を演じたことはない。

その様子を見てグレススは、緊張をときほぐすように微笑みを向ける。

「そこまで緊張しなくても大丈夫。屋敷の人は誰もユイスのことを知らないから、ユイスと似てなくても怪しまれることはありませんよ。

名前の間違いに注意して、話し方を丁寧にして、挙動を荒っぽくしなければいいだけ。仕事もほとんどがお嬢様の近くにいることで、ほかは家事や庭の掃き掃除とかだけ。簡単でしょう？」

「……それならなんとかなるかな」

屋敷で行うことを聞いて、幸助は少し肩の荷が下りた感じがした。

「そういえば今の俺の顔ってお孫さんに似てるんですか？」

「全く似てないわね。あの子も容姿はいいほうだけど、今のあなたほどではないわ」

本物のユイスはグレススの家系ではなく、もう一方の家系の顔立ちだ。

なんとなく疑問に思ったことを聞いた後は、咄嗟の質問に答えられるようにグレススの家族のことを聞いていった。使用人の家族関連を細かく気にすることはないだろうが、念のためだ。

一時間ほど話し合って、グレススはコースケが明日から屋敷に行くということをホルンに知らせるため、屋敷に帰っていった。

グレシスが帰った後、幸助は変装に必要な魔法を覚えてもらう。そして効果を解除してもらい、今度は自分で魔法をかけおかしな点はないかエリスに確認してもらう。

二回ほど細かい調整をしてOKをもらい、自分の部屋に戻っていた。

明日は八時頃に屋敷に行くことになっている。道案内はエリスがするので、幸助は寝坊にだけ気をつければいい。

翌日、幸助は寝坊することなく屋敷の前に立っていた。もちろんきちんと変装済みだ。服も渡された女物を着ている。慣れないスカートが気になってしまうのは仕方のないことだろう。

エリスは門番にグレシスを呼んでもらうため話している。エリス一人ならば顔パスで入ることができるが、今回は幸助もいるためエリスといえども許可を得なければならない。

暇な幸助は目の前に建っている家を眺める。この世界に来て見た建物の中で、一番大きな屋敷だ。庭もそこらの家が何件も入るほどに広い。

本館は三階建てで、窓はガラス張り。ガラスの向こうにちらほらと人影が見える。別棟の建物が二つあり、そちらは一般的な家よりやや大きめだ。庭では三人の庭師が木と草花の手入れをしている。ほかに馬の世話をしている者もいる。

そういった風景をぼんやり眺めていると、別棟の建物の一つからグレシスが出てきた。時間をかけて門へとやってきたグレシスは、幸助を自分の孫であることを証言し、幸助は敷地内に入ることができるようになった。

実際に中に入ってみて、幸助は広さを実感した。

「今お嬢様は離れに住んでいるのですよ」

本館に向かわないのか、という顔をしていた幸助の表情を読んだ

グレースが疑問に答える。

「口に出してないのに、聞きたいことがよくわかりましたね？」

「不思議そうな顔で本館を見ていたし、誰でもわかるさ」

エリスの言葉に顔を押しさえる。

「そこまで表情変えてた？」

グレースは気遣ってか微笑みを浮かべるだけで答えない。だがどこか面白いな雰囲気を漂わせ、幸助の言葉を肯定しているように見える。

「お嬢様がどうしてもして本館で暮らしていないかですが、警備のためです。」

本館には訪問中の貴族の方々もいらっしゃいます。その方々がお嬢様に夜這いをかけないようにと、本館から移動してもらったのです。

もともとあちらの離れはお嬢様用でしたから、移動に不都合はありませんでしたけどね」

「夜這いなんてかけるの？」

「お見合いのようなまどろっこしいことをせずとも、既成事実を作れば万事上手くいくと考えるバカもいるのじゃよ。実際、二人ほど敷地内からたたき出されておるしな」

話しているうちに離れへと到着する。

警備のため立っているレーテルの私兵たちに軽く挨拶して、中に入るとメイドたちが玄関ホールを掃除している最中だった。赤毛でショートカットと白のロングの二人で、赤毛のメイドのほうが少し年上に見える。

「メリイール、セレナ。こっちにきてくれる？」

グレススが二人のメイドに呼びかける。

近寄ってきた二人にグレススは幸助を紹介する。

「話していたように、今日からこの子がここで私の補佐をしてくれます。そう長くはない期間だけど仲良くしてあげて頂戴。

ほら自己紹介して」

「はじめましてユイスと申します。慣れない環境でいたらないところがあると思いますが、精一杯頑張りますのでよろしくお願いします」

「私はメリイールよ。よろしく」

「私はセレナだよ。よろしくね」

幸助が緊張しているのではと気遣って二人は軽い感じで自己紹介をすませる。

メリイールと名乗ったほうが赤毛で、年は二十才を過ぎているように見える。セレナが白毛で、こちらは十七才ほどか。

「では掃除に戻って頂戴。あとでこの子にいろいろと仕事を教えてもらうわ、頼むわね」

「お任せください」

「手取り足取り丁寧に教えていきますよー」

メリイールたちは一礼し、セレナは幸助に手を振って仕事へと戻っていく。

「いい子達で、私も助かっているわ。」

さあ、ついてきてお嬢様のいる部屋に案内するわ」

左手に見えていた階段を上がり、右奥にある部屋にノックしてから入る。中は書斎で、本棚と器具の載った棚がずらりと並び、端にはテーブルと座り心地のよさそうな椅子がある。その椅子にホルンは座って本を読んでいる。

「お嬢様。エリス様とユイスを案内してきました」

どこで誰が聞いているかわからないので、敷地内では幸助のことをユイスと呼ぶようになっていく。

ホルンは読んでいた本をテーブルに置いて、立ち上がる。

「あなたがグレススさんのお孫さんですね。グレススさんには小さい頃から本当に世話になって。これからよろしくお願いします」

話しながら近づいて、幸助の手をとる。そして小さくお帰りなさいと囁いた。

幸助はそれに小さく頷き、ユイスとして挨拶する。

「もう周囲を気にせずともいいぞ。誰も潜んではおらん」

魔法を使い、周辺の探索を終えたエリスが気を抜いて大丈夫だと許可を出す。

「エリス、ありがとう。」

改めて、お帰りなさいコースケ」

「ただいま。なんというか面倒なことになってるね」

「エリスが動いてくれるから問題なく終わると思うわ」

「お見合いを潰すことになるんだけど、ホルンとしてはそれでいいの？」

「普通の貴族なら政略結婚は自分に課せられた義務と思うのでしょ
うね。

でも私の貴族としての役割はすでに終えていると思うの。生贄に
なることが私に課せられていた義務。それを果たした今、自由に生
きて問題はないと思うのよ。

もともと貴族としての教育を完璧には受けていないから、そう思
うのでしょうかね」

今回のお見合い話はレーテルにとってふって湧いた幸運みたいな
もので、話がなくなってもたいした損はない。結婚まで話が進んで
破談になるならまだしも、お見合いならば良い相手がいなかったと
誤魔化しもきく。婚約となる前に話が潰れる方が、レーテルにとっ
ても痛手は少ない。

だからまだ結婚する気のないホルンには、お見合いが潰れること
に異論はない。

「お嬢様、そろそろコースケさんを下の二人のところに連れて行き
たいのですが」

「あまり遅いと怪しまれるかしら。

コースケ、またあとで話しましょうね。街でどんなことをしたの
か聞くのを楽しみにしてますね」

再び読書に戻るホルンを残し、全員部屋を出る。

「それじゃあユイスはあの二人の指示に従ってちょうだい」

頷いた幸助は掃除をしているメイドたちへと近づいていく。

エリスとグレスは幸助到着を伝えるため、レーテルに会いに本
館へと向かった。

家政婦は見えていなかった

近寄ってきた幸助に気づき、セレナが作業の手を止めた。

「あ、来たね。メリイールさん、私が説明してるから仕事を続けて」

「いいの？」

「はい！ 説明と実演は私一人で十分ですよ」

「そう。じゃあお願い」

「りょーかいでっす！

それじゃ早速説明と行きましようか」

「お願いします」

「うんうん、私にもやっと後輩ができたのね」

セレナは感慨深げに頷いている。

「私の指導は厳しいよっついてこれるかな！？」

「ふっメイドになるために生まれてきた私に不可能などありません！」

髪をかきあげ胸をはって答えた。セレナがのっているようなので、幸助もそれにのってみたのだ。

「あはははっのりがいいねっ。これなら上手くやっていけそうだよ」

「遊んでないで働きなさい」

「あたっ」

メリイールがはたきでセレナの頭を軽く叩いた。

「ごめんなさい」

「わかればよろしい。ユイスさんも羽目を外すのはいいけれど、こ
こだけにしておきなさい。」

騒いでも咎めないのはホルンお嬢様くらいなのですから」

「そうなのですか？」

「ええ、レーテル様たちは使用人は使用人らしくあれって考え方で
すからね。貴族として当たり前の方たちです。」

騒いでいるところを見られでもしたら、お叱りを受けるどころか
給金にも響いてきますよ」

「気をつけます」

真面目な顔で頷いた幸助に、メリイールも頷き返し掃除に戻る。

「いやあーやりすぎちゃった。」

じゃあこれからは真面目にいきましょうか」

「はい」

「私たちのというか、あなたの仕事場はここが中心になる。グレス
スさんの補佐としてここにいるんだから当然ね。」

仕事は食事を除いた家事。料理は本館でコックが作るから、私た
ちが作る必要はないの。ここにもキッチンはあるから、作れないこ
ともないわ。グレススさんがお菓子を作ったりするし。」

たまに人手が足りず本館の仕事も頼まれることもある。そう多く
はないし、私とメリイールさんが行くからあなたが行くことはない
と思う」

「となると私が本館に行くことはまったくくない？」

幸助のその言葉にセレナは首を横に振る。

「仕事以外では本館に何度も足を運ぶわ。使用人の食堂とかお風呂
とかあっちにあるし。寝室もあっちにあるのだけど、あなたはグレ

シスさんと一緒にここで寝泊りすること

になると思うわ」

「そうなんですか？ 宿に部屋をとってあるんですけど」

「そのの？ だとしたらそっちから通うのかな？ あとでグレススさんに聞いてみよう」

「そうですね」

簡単に仕事を聞いた後は、貴族のもとで働くうえで注意しなければならぬことを教えてもらい、実際に仕事を始めることになった。まだグレススが帰ってこないのでセレナに掃除のやり方を習いつつ、時間が過ぎていった。

先に働き始めているだけあってセレナたちの手際はいい。一方で幸助はというと、ぎこちなさが見え見劣りがする。それも仕方のないことだろう。普通の掃除ならば地球にいたころに何度もやって慣れている。だがここあるものは高級品ばかりで、そんなものの扱いには慣れていないのだ。必要以上に恐る恐る触れていく幸助を、セレナとメリイルは急かすようなことはしない。自分たちもはじめは似たような態度だったのだから、下手に急かすと壊してしまう可能性もあるのだとよく知っている。

幸助が不慣れとはいえ、人数が増えたことにはかわりなく、ミスもなかったのでもっとも掃除が少しだけ早く終わる。

「これで室内は終わり。次は少し休憩して外で掃き掃除。そのあとは昼食を食べてから洗濯よ！」

「了解です！」

掃除道具を片付けて、休憩用の部屋で雑談に興じる。といっても男の幸助が女の会話についていくのは至難の業で、今は趣味などを質問されているおかげで会話できているが、今後はついていけるの

かとひそかに頭を悩ませている。

ちよっとした悩み事が増えた休憩を終え、家の裏から熊手と箒を持ってきて周囲を掃いていく。

屋外の掃除は簡単にすませる。雑草を抜くなどもつとすることはありそうなのだが、メリイールとセレナは少しも気にしていない。そのことを不思議に思い問うと、それらは庭師の仕事だとメリイールから返答が返ってきた。

「生えてるのは少しだけだし、十分もかからず抜けますよ？ わざわざ庭師にやってもらわなくても」

「気持ちわかるけれど、庭は庭師の仕事場なのよ。彼らには彼らの計画があつて、手入れを進めていくの。ここに生えている草も数ヶ月後の景観を考えて、そのままにしている可能性があるわ。今私たちが勝手に抜いたら、数カ月後越しの計画が台無しになるかもしれない。そんなことになったら彼らに申し訳ないでしょう？」

「私たちが地面をいじるのは、庭師から頼まれたときだけなのよ」「そうでしたか。すぎた意見でしたね」

「気にしないでいいわ。私も同じことを先輩に聞いたから」

メリイールは懐かしげな様子を見せつつ言った。

同じことを聞く人はけっこういるらしく、セレナもグレススも初仕事のときは聞いたらしい。

ほこりなど汚れを落とした三人は昼食のため本館へと移動する。昼には一時間ほど早いが、本館にある設備の案内もついで行うつもりなのだ。

倉庫と風呂とトイレと寝室と回って行く。トイレに来たときちようどよかったので、個室に入って魔法をかけなおす。そろそろ変装が解ける時間だったのだ。

最後に食堂にやってきた。もうすぐできるというので椅子に座り待つ。

当たり前だが風呂は女風呂に案内された。ここで生活するのなら風呂は女湯を使う。トイレはまだかろうじてセーフかもしれないが、多人数で入る風呂はさすがにアウトだ。悩む幸助に気づいたセレナが話しかける。

「考え込んでるようだけど、なにか問題あった？」
「い、いえ」

変装がばれたら変態扱いだ、などと考えていたがそれを口に出すわけにはいかない。なんでもないと首を横に振る。

「そう？　なにか問題があったら遠慮なくいつてね」
「はい」

今悩んでいることは相談できないが、なにか悩みができたら相談しようと思う。

出来上がった賄い料理を食べ終え、ホルンのために作られた料理を受け取る。おまけとして三時のおやつにとクッキーをもらう。これはホルンたちに作ったもののうち、形が崩れ出せないあまりものだ。コックたちが初対面の幸助にサービスしてくれたのだった。

離れに戻るとグレスも戻っていた。エリスは食事のために外へと出かけたらしい。

「グレスさんに聞きたいことがあるんです」

「なにかしら？」

「ユイスって寝泊りどこでするんですか？」

「宿よ」

考え込むことなく即答だ。

はじめは使用人の寝室で寝泊りさせるつもりだったのだ。しかし

男だとばれると大変だし、ここで暮らすとなると女湯に入るなど問題が出てくると気づき、宿暮らしへと変更したのだ。

幸助が悩んでいることにエリスたちも気づいており、対策は考えていた。

ただ宿暮らしだと夜の護衛ができないのだが、そこはエリスがレールに許可をもらい警報の魔法をかけたので、警備兵に頑張ってもらうこととなっている。

「私たちと同じでいいと思うんですけど。ずっと宿暮らしてのもお金がかかりますよ？」

「ずっとここで働くわけではないから、わざわざ部屋を準備してもらうのもね。」

宿代は長期滞在ってことで割引してもらえたし、この子の給金と私の貯蓄をあてるからたいした負担はないわ。

ここで働くことは、ちょっとした行儀見習いになるし、お金以上に得るものはあるわ」

「保護者のグレススさんが認めてるならいいんですけど、やっぱりお金の無駄な気もするんだけどなあ」

グレススも厳しい言い訳だと思っているので、セレナが疑問を抱くのも無理はない。

「それよりもこのあとは洗濯よね？」

「はい」

「ユイスはお嬢様のところに連れて行くから、あなたとメリイールの二人でお願い」

「わかりました。でもユイスはお嬢様のところでなにを？」

頷いたメリイールは抱いた疑問を聞く。

「薬学の助手よ。この子、基礎だけなんだけど薬学修めているから」

メリイールとセレナはなるほど頷き、洗濯に向かう。

幸助とグレススは二階へ。料理を載せたトレイは幸助が持っている。

「お嬢様、お昼をお持ちしました」

「ありがとう」

「私は下にいるから。ユイス、食器はあなたが食堂に持っていったね」

「わかりました」

失礼しますと頭を下げ、グレススは部屋を出て行く。

扉が閉まったことを確認し、ホルンは小声で話しかける。

「小声で話せば誰かに聞き取られることもないってエリスが言っていたわ」

「わかった」

「午前中働いて仕事はどうでした？」

「今のところはなんの支障もないよ。」

むしろ仕事よりも、雑談をどうしようかって思ってる」

「雑談？」

「女の人の会話についていけない」

メリイールとセレナが幸助を女として接しているの、幸助は女として返答しようとして空回りしている節がある。

あからさまに怪しいところを見せなければいいので、多少は男っぽくてもいいのだ。メリイールたちはユイスのことを全く知らず、付き合いは今日からなのだから、深く考えず接していればそういう性格なのだと納得するはずだ。

「そうなの。私も友達多くはないから、女の子同士の会話についてのアドバイスは無理ね。

でも変装がばれなければいいのだから、多少は変に思われてもいいと思いますよ」

「そうなのかな？ 宿に帰ったらエリスにも相談してみるよ」

「そうですね」

話しこむとせっかくの料理が冷めてしまうので、会話を一度止める。

ホルンが食べている間に、幸助は本の背表紙を眺めていく。ある程度偏ってはいるがジャンルは豊富で、医学書から絵本までそろっている。

適当に絵本の一つを手にとって読んでみる。タイトルは『ミイクと歪んだ家』というもの。内容は、主人公であるミイクが廃屋に忍び込んで『歪み』のせいで出られなくなり、動物たちの手助けで脱出するというものだ。

「なにを読んでいるの？」

食事を終えたホルンが話しかける。

ホルンに絵本の表紙を見せた。それを見てホルンが表情をほころばせる。

「懐かしいわ。お兄様がプレゼントしてくれた本なんですよ」

「大事なもののなんだ」

「ええ。そういえば文字を読めるようになったの？」

「完璧じゃないけどね。いまだ勉強中」

「頑張ってください。覚えて損はないですからね」

絵本を本棚に戻し、話を始める前に幸助は食器を食堂へと運ぶ。
美味しかったというホルンからの伝言をコックに伝え、離れに戻る。
ベラッセンで体験したことを話していき、時間がゆったり流れていく。

孤児院の子供たちを連れ戻しに行ったことを話そうとしたときに、扉がノックされる。

「どうぞ」

「失礼します」

一礼し入ってきたのはメリイールだ。

「少しユイスをお借りしてもよろしいでしょうか？」

「ユイスになにか用事？」

「お茶をいれようと思っていまして、そのついでにお茶の入れ方などを教えておこうと」

「ユイス」

ホルンは目でいってらっしゃいと告げる。それを読み取った幸助は立ち上がり、メリイールと一緒に部屋を出る。

一階のキッチンで、茶葉の位置などを聞いて、その中からホルン好みの茶葉を三つ教わる。砂糖の有無と量、香りづけの酒などの入れ方も教わった。

「実演しながらもう一度教えるわね」

「はい」

「あと、魔法も覚えてもらおうわ」

「魔法ですか？」

「ええ、お湯の熱さを知る魔法よ。これでお茶を入れる適温を把握してもらおうの」

「そんな魔法もあるんですねえ」

これはお風呂のお湯加減を調節するときにも使われるらしい。
使い方を教えてもらい、火にかけているティーポットの蓋を開け、
実際に使ってみる。

「どんなふうに見える？」

「オレンジ色の玉が、水面からぼこんぼこんと出ては消えていきます」

「正常に発動できているわね」

メリイールは自身も魔法を使い、効果を説明していく。
色は大まかな温度を示しており、水の状態から沸騰まで十個の色
で現される。水は白で、沸騰までいくとワインレッドとなる。さら
にこまかな温度は球体の大きさと表現されている。今幸助が見てい
る状態が最大の大きさで、この下に三つの大きさがある。

幸助の见ているオレンジの四番目の球体は、摂氏温度で表すと6
8℃あたりだ。

ちなみにこの魔法は水の温度を知るために作られたので、マグマ
の温度や火の温度を知ることはいできない。それらにはまたそっち専
用の魔法がある。

「使うにはまだ早いわ。もう少し待ちましょう」

二分ほど待って使えるようになり、メリイールは火からティーポ
ットをおろした。

てきぱきと作業を進めていき、一人分のお茶をいれる。

「このお茶はこれで完成よ。飲んで味を覚えておきなさい」

差し出されたティーカップを受け取り、飲んでいく。

「美味しかったです」

「ありがとう。じゃあ次はあなたがやってみて。手順は覚えてる？」
「はい」

少し冷めていたお湯を再び火にかけるところから始め、教えられた通り、メリイールの手順の通りに手を動かしていく。

「できました」

「じゃあ、飲んでみましょうか」

今度は一杯のお茶を二人でわけあう。

「ちょっと味が違いますね」

「そうね。でも初めてでここまでできるのはすごいわ。これなら少し手直ししていくだけでお嬢様好みのお茶を出せるようになるわ」

練習をもう二回繰り返し、修正できるところは修正した。あとは数をこなすだけだ。

「練習はこれくらいにしましょうか。あまりお嬢様をお待たせするのは失礼だしね。」

教えがいがあつて、つつい時間取りすぎたわ」

メリイールは急いでお茶の準備を済ませ、お茶と茶菓子の載せたトレイを幸助に渡す。

この茶菓子は幸助が二階にいる間にグレースが作ったものだ。

「これをお嬢様に持って行ってね」

「わかりました」

お茶をこぼすような様子もなくキッチンを出て行く幸助を見送り、メリイールは自分たちのお茶を入れ、セレナとグレシスが休憩している部屋にむかった。

「お茶をお持ちしました」

「ありがとう。」

コースケも一緒にどう？ カップはありますよ」

「お茶を入れる練習で飲んできたから遠慮しとく。お茶菓子のほうをもらってもいい？」

「遠慮しなくてもいいわよ」

幸助は小さめのマフィンを一つもらい、口に放り込んだ。

「このマフィンもホルンの好みにあわせてるのかな？」

「おそらく。少なくとも不味いとは思いませんし」

「コックたちはホルンの家族一人一人の好みを把握してるのかな。だとしたらすごいな」

「そうですね。私なんて作るので精一杯」

「俺も似たようなもの」

再び雑談が始まる。

話がヴァイオレントバルブとの戦いに差し掛かると、怪我はなかったのかと心配される。かすり傷すら負わなかったことを幸助があっけらかんと告げると、ホルンは安堵の中に少しだけ呆れを混ぜた笑みを浮かべた。

この後は雑談のみで仕事の終わりがやってきた。明日からは本当に薬作りの手伝いをする事になっている。ほかに薬学医学を教えてもらえることにもなった。

「じゃあ、今日はこれで帰るよ、また明日」

「はい、明日」

部屋を出て、一階に下りる。

下りてきた幸助に気づいたグレスたちが近づいてくる。

「ユイス、おつかれさまー」

「はい、お疲れ様です。でも今日の仕事はそこまで疲れるものではないかもしれませんでしたけどね」

「おっいうね。これなら明日から大丈夫そうだね」

セレナは頼もしいと幸助の肩を叩く。

「ユイス、明日はベッドメイクといった内装系の仕事やほかのお茶の入れ方を教えるから」

「わかりました」

「今日の仕事ぶりを見るかぎり物覚えはいいし、あなたならすぐに覚えることができるでしょう」

「期待を裏切らないように頑張ります」

「私はこの子を門まで送ってくるわ」

セレナとメリイールにわかれを告げて、幸助は離れ出る。

「明日からは敷地内の出入りは自由にできますからね。

今日と同じくらいの時間に離れにきてちょうだい」

「わかりました」

「では明日からもお願いね」

「はい」

門に到着し、朝に立っていた門番とは違う人たちに挨拶をして、グレスとわかれ宿に帰る。

そのあとはエリスと一緒に夕食をとり、今日の話を話して、自室に戻り寝た。

次の日もその次の日もなにも問題なく、仕事を覚えこなしていく。メリイルとセレナ以外にも顔見知りができ、人間関係も問題ない。十日も過ぎると離れでの仕事は一人だけでも行えるようになった。メリイルとセレナが人手の足りない本館の手伝いに呼ばれることがあるが、なんの問題もなく仕事を進めることができる。

そんなある日の午後、ホルンの昼食の食器を食堂に持っていた帰りに声をかけられる。振り返ると、来客中の貴族らしき人物が立っていた。

「なにか御用でしょうか？」

「君もこのメイドなのかい？」

「はい」

「ここ四日ほど宿泊させてもらっているけど見かけなかったんだが」

そう言いつつ男は品定めするようにさっと幸助の全身を見る。

「私はホルンお嬢様のそばで働いておりますので、本館にはほとんど出向かないのです。ですから見かけなくとも無理はないかと」

「そうだったんだ」

「用件はそれだけでしょうか？」

「いや、これから時間はとれるかい？」

「長時間だと無理です。まだほかに仕事がありますから」

返答を聞いて男の目にちらりと色欲の光が瞬く。男の目を見ていなかった幸助はそれに気づかなかった。

「そう時間はかけないよ。こっちにきてくれるかい」

幸助はなんの用事なのだろうと思いつつ、男に誘われるままついていく。

男は人目を避けて移動し、誰の目にもつかない建物の陰を目指す。なんとなく嫌な予感がしてきた幸助は声をかける。頭に浮かんだ二つの予想は、どちらも碌なものではない。

「あの、どこに行こうとしてるんですか？ 仕事があるんですが」

男はこれになにも答えず歩を進める。

やがて目的としている場所に到着した男は、幸助を抱き寄せた。

「ちよっ!？」

「ここまでついてきたということは、なにが目的なのか想像についているんじゃないのか？」

幸助からしてみれば嫌な笑みを浮かべた顔を近づけ言う。

予想の一つが見事に的中したが、まさか本当に当たるとは思っておらず、あたふたと動揺することしかできていない。

男の幸助にとって男に迫られるなど、経験したくないことだ。予想のもう一つは、変装がばれたというものだった。

「初々しい演技もいい。ますます気に入った。

レーテル殿に交渉して買い取ってやろう。ここで働くよりも高い給金を払ってやる。夜の方の具合がよければ妾としておいてやってもいい」

「離せ……離してくださいっ」

演技ではなく素の状態で拒絶しそうになり、慌てて丁寧な拒絶す

る。

筋力の差がありすぎるので力任せにいけば、簡単に振りほどくことができる。

男を思いつきり罵倒しようと口を開いたとき、頭上から誰かが飛び下りてきた。

「そこまでだ！」

下りてきた男も貴族らしく質のよい服を着ている。その男からふわりと花の香りが漂ってくる。

誰だと考えているうちに幸助は、下りてきた男に手を引かれて男の背後に移動させられた。

「か弱い婦女子を襲う非道の輩め、このヴァンテス三世が秘められし暗黒の力を使い成敗してくれるっ覚悟しろ！」

びしっと伸ばした人差し指でヴァンテスと名乗った男は、突然の登場に驚いている男を指差す。

ヴァンテスは整った顔をしており、今も真剣な表情だ。この姿だけをみれば、誰もがカッコいいと断言するだろう。

だが助けられた幸助は「秘められし暗黒の力」という部分に、数年前に自分もかかっていた病気のようなものを思い出しなんともいえない気持ちになっている。

「どうしたっ！ こないのか!？」

「……なんなんだお前は？」

「名乗っただろう？」

「いや名前じゃない。どうしてここに現れ楽しみを邪魔をする？」

「私の中が正義が叫ぶのだ、悪を滅せよと」

胸をはり自信に満ちた様子で答えた。

「答えがずれてるんだが。まあなんとなく伝わったからいいとしよう。」

そのうえで指摘しよう。俺のどこが悪だ？ 彼女は嫌がっていなかっただろう？」

「なにを言う、はっきりと拒絶を態度で示したではないか！」

「あんなものはふりだよ。本当に嫌ならばここまでついてくるわけがないだろう」

「……そうなのか？」

少しだけ考え込んだヴァンテスは振り返り幸助に問う。
それに対して幸助は首を横に振って答えた。

「違うそうだが？」

「お前が邪魔をしたから興が削がれただけだと思うがね」

「いえ本当に嫌なんですが。」

そもそも私なんかをそういう対象として見るとは思ってもいませんでしたし」

「なんかと自分を卑下するものではない。貴族のようなきらびやかはないが、野に咲き誇る自然の花のような生命力溢れた内側から輝くものを君は持っている。」

その輝きを否定するものは多くはないはずだ」

「その男と同意見というのは気に入らないが、否定はしないな。だからこそ俺は目をつけた」

「はあ」

幸助は気乗りしない反応で返すしかない。魔法で変装していて、さらに中身は男だ。女として褒められたところで、嬉しいわけがない。

加えて、内側からの輝きということは外見だけを褒めているわけではないのだろうが、会って三十分も経っていない二人になにがわかるのだろうと内心首を傾げている。

事態をややこしくしたくはないので、聞くことはしないが。

「気が萎えた。帰る」

幸助を見て、本当にその気がないとようやく理解したのか男はさつさと立ち去る。

「うむ。話せば分かり合えるものだな」

嬉しそうに一人頷くヴァンテスに、幸助は一応礼を言っておいたほうがいいのかと悩むが、助けられたのは事実なので礼を言うことにする。

「助けていただき、ありがとうございます」

「なんのなんの。正義と秩序を愛するものとして当然のことをしたまでだよ」

「すごいですね」

感嘆や畏怖などいろいろと思いを込めて言った。

「なに君にもできるさ！ 魂の囁きに耳を傾け、勇気を持って一步を踏み出せば、誰もがたちまちヒーローさ！」

（本能のままに動いってことなのか？ 違った意味で英雄と呼ばれそうだ）

ヴァンテスの言葉を幸助なりに翻訳して、意味するところを考える。やはり口に出すことはしないのだが。

「それにしても突然飛び降りてくるので驚きました」

「インパクトを狙うにはありえないところからの登場がかかせないからね。」

こっそりあとをつけてきて、スタンバイしていたかいがあったというものだよ」

「……あとをつけてたんですか？」

「ああ。庭で暇を潰そうと出てきたところ、偶然君たちが目に入ってたね。これはなにかあるっとピンときたのだ」

もっと早く出て行けたのだが、建物の陰から出てくるのはあまりに普通だと考え、急いで屋根に上りタイミングを計っていたのだ。ここまで徹底した行動だと幸助も畏敬の念を抱かざるを得ない。

「と、とにかくありがとうございました。」

私は仕事があるので、もう行きますね」

「うむ。気をつけられよ。似たようなことがあれば、私に相談する」とい」

離れに戻ると、戻ってくるのが遅れたことでなにをしていたのかグレススたちに聞かれ、幸助は素直に答える。

すると思わせぶりな態度をとっては駄目だと注意された。

メイドには主人の夜伽を任される者もいて、幸助もそういった一人だと思われたのだと教えられた。次からは誘いをきっぱり断るよう強く言い聞かされた。

そんな幸助にグレススがすまなそうな視線を送っていた。今回のことは、こういうこともあると教えていなかったグレススの失態だからだ。

「ユイスを勘違いした人ってどんな姿だった？」

セレナに、顔立ちや服装などを細かに伝える。

「あーその人か。私も誘いをかけられたよ。ほかの人も声をかけられてるみたい」

メリイールも声をかけられたようで頷いている。彼女たちは対処法を知っているので、波風をたてずに断ることができていた。

名前はセドヴィットというらしく、友人がお見合いにきていて、その付き添いとして滞在しているらしい。

メイドたちの情報網によると、すでに婚約者がいるので今回のお見合いは不参加なのだという。女に声をかけてまわるのは結婚したあとでは自粛しなければいけないので、今のうちに楽しむという考えだから。女好きで強引なところはあるが、力づく無理矢理といった手段はとらないらしい。女の扱いは上手いので軽く付き合うのならば、中々の好物件なのだとメイドたちの間で評判になっている。

こういったことを聞かされても幸助には反応できない。その様子を見てメリイールたちは、こういった出来事に首を突っ込むにはまだまだなのだと微笑ましそうな反応を見せる。

「ユイスを助けてくれた人はヴァンテスと名乗ったのね？」

確認するようなメリイールの言葉に幸助は頷く。

「ただの変人じゃなかったのね」

メリイールはしみじみと感想を漏らした。客人を指して変人とは失礼だが、屋敷の者たちの総意だ。

ただでさえわざわざ別の大陸からきていて、さらには種族も違う。おまけに言動もどこか仰々しい。皆、おかしな人が来たものだと思う。

っていた。

その感想のせいでレーテルに警戒され、ヴァンテスはいまだお見合いができていない。

レーテルは冥族にコネを持っていないので、この機会を生かしコネを得たい。だが今一步関わるという決断に踏み出せないでいた。言動がまともならば、あっさりお見合いできていただろうから、ヴァンテスは自分のせいで目的を果たせないでいる。

「ヴァンテスさんって冥族だったんですか？」

「ええ、顔立ちとか香水とかでわからなかった？」

「冥族とは初めて会ったので」

冥族とはあんなのだと幸助の中でイメージが固まった。

ヴァンテスが特殊なだけでほかの冥族はまともなのだが、幸助が冥族に対して変なイメージを持ったことを誰も気づいていないので修正できなかった。

「お喋りはここまでにして、仕事を再開しましょう」

グレシスが手を叩いて、三人を動かす。

幸助のメイド生活は特に荒事なく進んでいく。裁縫、お菓子作りなどできることを増やしていき、日々メイドとして完成されている。

あの出会いをきっかけとして、セドヴィットやヴァンテスと話すようになった。話してみると悪人ではないとわかる。

化粧っ気がないのはもったいないと香水をセドヴィットから贈られたり、妹分についての相談をヴァンテスから持ちかけられたりと、それなりに親交を深めていく。

その間にもエリスは交渉を進めており、反応がかんばしくないこ

とから穩便に進めることはやめて、そろそろ脅迫も交えてようかと考え出している。

そうして働き始めて二十日が過ぎた。友人のお見合いが終わりセドヴィットは屋敷からいなくなっている。一方、ヴァンテスはいまだ滞在している。

そして今日も幸助はヴァンテスに声をかけられていた。

「今日は頼みがあるのだよ」

「頼みですか？」

「うむ。ユイス嬢はホルン嬢のそばに仕えていると以前聞いた。

そこでこの手紙をホルン嬢に渡してもらえないだろうか？」

「恋文ですか？」

「いやいや、そのようなものではないよ。

実は私は結婚目的ではないのだ。医術者としてのホルン嬢に頼みがあるのだ」

「はじめからそう言って面会を求めたほうがいいと思うのですが？」

「私もそうしなかったのだが、お見合い以外の申し込みはしばらく遠慮願うということらしくてね。

お見合いが終わるまでは、まだまだ時間がかかるだろう？ 長期滞在のつもりで準備していないのだよ。

ならばお見合いの席で用件を伝えようと思ったのだ。だがそのお見合いもなぜか、順番が回ってこない」

本気で不思議そうにしているヴァンテスに、幸助はなにも言えない。若干乾いた笑みを向けるだけだ。

「そういうわけで届けてもらえるだろうか？」

出会ってから今まで、この手紙を託すことができるか探っていて、

大丈夫そうだと判断し頼むことにしたのだ。

「これがお嬢様に害のないものと証言してもらえるのならば」

「我が命と神々の名の下に誓おう。」

私たちはただただ医術者としての力を求めている。力が足らずとも命を脅かし傷つけることはしない」

真意を探るため幸助はヴァンタスの目をじっと見る。ヴァンテスは逸らさず、視線を受け止める。

三十秒ほど見続け、かすかな揺らぎも見えなかった幸助は頷き、届けることを承知した。

「助かる。明日の夕方までここで待っていてくれないか？ 返事を聞きたい。承諾でも拒否でもだ」

「わかりました。明日の夕方ですね。」

念のために、中身をほかの者に確認してもらうこともあるかもしれませんが。

「ああ、かまわない。きちんとホルン嬢に届くのならば」

「では失礼します」

ヴァンテスに一礼し、離れへと戻る。

そのままホルンのもとへと向かわず、グレースに事情を話し、手紙を渡す。

グレースはなにか仕込まれていないか、魔法を使い調べていく。貴族に仕えていれば危険な魔法がかけられた手紙が送られてくることなど珍しくもなく、対処法も確立されている。

「大丈夫、なにか仕込まれていることはないわ」

そう言って幸助に手紙を返す。

「中身は見なくてもいいんですか？」

「ヴァンテス様はおかしなところのある人ではありますが、脅しなどはしない人でしょう。内容は本人が言ったように医術関連なのだと思います。」

中身を見る必要はありませんよ」

「では、お嬢様に持っていていいんですか？」

「ええ、お願い」

二階に上がり、扉をノックして返事を聞いてから開く。ホルンに近寄り、手紙を差し出す。

「これ、ヴァンテスっていう貴族から。医術者としてのホルンに頼みがあるんだって」

「医術者としてですか」

受け取った封筒の封をきり、手紙を広げる。

しばし静かな時間が過ぎる。ホルンが視線を上げたとき、幸助は口を開く。

「明日の夕方に返答をもらいたいってさ」

「そうですか……これをエリスに渡して同行できるか聞いてもらえませんか？」

同行してもらえるのなら、この依頼を受けようと思います」

「了解、エリスに渡せばいいんだね」

再び手紙を受け取った幸助は懷にしまう。

いつものようにホルンと話したり、おやつを作ったりして時間は過ぎていき、宿に戻る。

エリスに手紙を見せて、ホルンからの伝言を伝えた。しばらく考

える様子を見せてからエリスは口を開く。

「わかったと伝えてくれるか？」
「了解」

手紙はホルンが持っておいたほうがいいだろうと、幸助からホルンに返されることになった。

このあとは二人で夕食を食べ、なにごともなく就寝する。
平穏な幸助たちとは違い、屋敷側では事件が起きていた。

ホルンが傷つくようなものではなかったため、警報の魔法は作動せず、ホルンに異変があればすぐに知れるような魔法を使っていたエリスも屋敷の騒動に気づくことはなかった。

そして幸助が屋敷についた頃には事件は終わっていた。

昨夜に起きたのは、滞在している貴族の殺害未遂。犯人は屋敷に十年以上勤める使用人。

犯人は襲った貴族に恨みがあつたのではなく、レーテルに恨みを持っていた。彼はレーテルとの政争に負けた貴族の三男で、変装し身分と名前を偽って屋敷に入り込んだ。勤める前の身辺調査でばれなかったのは、その一族が全滅したと思われていたからだ。

政争に負け、領地も変更され、移り住んだ先で幸助の殺した竜が憂さ晴らしに暴れた。その出来事で家族はおろか家臣すらも失った彼は、家の復興よりも敵討ちを優先しレーテルを付け狙っていた。

だが常に護衛をそばに置いているレーテルを殺すことは難しく、十年の機会が過ぎた。

この十年で殺すことの難しさを実感した彼は、今回のお見合いをきっかけとしてレーテルの貴族としての命を狙うことにした。

滞在している貴族が死ぬかもしれないが怪我を負い、その犯人を見つけれないとなれば、多くの貴族から責任を追及されることは間違いない。

もし使用人が犯人だとばれても、そういった存在だと見抜けずに招き入れていたことで、やはり追求はされるだろうから、目的は果たされる可能性が高い。

犯人がばれないために外部犯に見せかける小細工も考え、昨夜実行されたのだった。

事件を解決したのはヴァンテスで、協力したのは本館に勤めるメイドの一人。ヴァンテスの正義感と冴え渡る推理が犯人を追い詰め、観念した犯人の自供により、明け方頃事件は解決となった。

犯人は取調べ後、即刻処刑され、事件自体は終わった。

「そんなことがあったんですね」

屋敷が騒がしくなにかあったのかと聞いた幸助に、グレシスたちが昨夜から明け方の出来事を話していた。

「まさかオーボワードさんが復讐を考えていたなんて」

「よく働く人だって評判だったよね」

意外だったとメリイールとセレナは頷きあう。

「お見合いは中止だそうよ。滞在している方々は今日中にお帰りになられます。」

お見合いがいつ再開するかも不明です」

「さすがにお見合いをしている場合ではないんですね」

これは事件の後片付けにレーテルが動き回る必要があるせいだ。その後片付けが大変なことになっている。実は怪我した人物は他国の貴族で、内々で済ませることがすごく難しい。親しい貴族ならば借りを作ることでは表沙汰しないことができるが、今回はそう簡単

にはいかず、全ての根回しを終わらせるのに一年以上の時間を必要とした。

結果としてレーテルは貴族としての体面を保つことは成功したし、二国間の大事まで発展もしなかったが、財力は減り、多方面へ借りは増え、事件前のように大きく力を振るうことができなくなった。ついでに出世もとても難しくなっている。

レーテルは全てが終わったあと、ホルンのお見合いを再度行い、権力を少しでも回復しようと画策するも、ホルンが家に寄り付かないので実行は不可能となる。

この事件のおかげでエリスとグレシスの計画は実行されることなく目標達成となったのだ。幸助はただメイドとして働きに来ていただけということになる。

「私たちの仕事に変更はないわ。いつも通りの働きを期待します」

グレシスの言葉に三人は頷いて、掃除を始める。

グレシスに許可をもらい、掃除の前に幸助はホルンにエリスの返答を伝える。ヴァンテスに了承の意を伝えるという伝言を託され、幸助は掃除に戻る。

ヴァンテスへの返事は約束していた夕方ではなく、昼に伝えることができた。ホルンの昼食に使った食器を運んでいるときに会えたのだ。今日中に屋敷をでないといけないので、夕方には会えないかもしれないとヴァンテスの方で会う機会を窺っていたのだった。

「受けてもらえるか！ なんとという素晴らしき返事！ ユイス嬢がいつにも増して輝いて見える！ まるで愛らしき神の使者だ！」

返事を聞いたヴァンテスは満面の笑みを浮かべ幸助に抱きつこうとしたが、するりと避けられる。

「セクハラですよ」

「せくはら？」

「無闇に女性に触れようとするなど、紳士の行いではないということですよ」

「その通りだな。失礼した。舞い上がりすぎたようだ。」

この手紙をホルン嬢へと届けてもらえないだろうか？ 私国に入るために必要なものが入っているのだ」

「承りました」

昨日受け取ったものよりも厚く大きな封筒を受け取る。

「では私は失礼させてもらう。またいつか会える日を楽しみにしているよ」

上機嫌に笑みを残しヴァンテスは去っていく。

幸助も離れに戻り、念のためグレシスに安全を確認してもらってから手紙をホルンに渡す。

この日から五日後、幸助はメリイールたちに惜しまれつつグレシスと共に屋敷から引き上げた。

次の日、ホルンは旅支度を整え、家族とメイドたちにエリスのところに遊びに行くと言って屋敷を出た。

家族たちは短期間のみと考えているが、その足でホネシングへと向かうので短期間では帰ってこれるはずもない。エリスとヴァンテスが手配した人物が転移術を使用することになっているが、それでも行きは一ヶ月近くかかる。

ホルンたちは用事が終わってもそのまますぐに帰ってくる気もなく、あちこちと観光するつもりなのでいつリッカートに戻ってくるかは今のところ不明だ。

十五日過ぎても帰ってこないホルンを迎えにエリスの家に行った

とき、そこには誰もいないなどと思わずにホルンの家族たちは屋敷を出るホルンを見送るのだった。

善行廻って騒動の元

幸助は今一人でベラッセンを目指し歩いている。

エリスとホルンと一緒に家に戻ってから、すでに四日の日数が過ぎていた。

エリスたちとは昨日まで一緒にいたのだが、今二人はセブシック大陸西にある港から、カルホード大陸へと向かう船を探している頃だろう。

ヴァンテスから受けた依頼のために、カルホード大陸からホネシング大陸へと向かっているのだ。セブシック大陸北からホネシングへと直通の船は出ている。けれども大陸北部は戦争中で危なく、エリスがそこを避けることを提案しホルンも賛成したのだ。

幸助が同行しないのは、邪魔だからと置いていかれたわけではない。

依頼人である冥族はしきたりに厳しい種族なのだ。地位が低ければ緩い部分もあるのだが、地位が高いといろいろと作法に拘る。そして依頼人は地位が高い。

ちなみにヴァンテスも地位は高いほうなのだが、他国ということもあり、幸助の至らないところは流していた。そういった気遣いができるので、ヴァンテスが派遣されたのだ。

郷に入れば郷に従えという言葉もあり、冥族の国に行くと冥族のしきたりに従う必要がある。そこでは無作法を流してくれるかどうかは怪しい。

ここでエリスが幸助に提案した。ついてくるか、迎えにくるのを待っているか。ついてきた場合は冥族の国に入らず、近くの国の適当な街で一人待機ということになる。迎えを待った場合はリッカートかベラッセンでエリスを待つ。

この二つを提示され、幸助は後者を選んだ。知らない街で一人待つよりは、知人のいる街のほうがいいのだ。

家で待つという選択肢がないのは、幸助が誤って扱っては危ない物があるからだ。

こういったわけで幸助は二人と別行動して、ベラッセンを目指しているのだ。

旅の準備に三日というのは時間がかかりすぎだ。地球と違い出国手続きといった特別なことをする必要はなく、旅の荷物をまとめればそれで終わりだ。知人に出かけているといったことを知らせる必要はあるが、エリスもホルンもそこらへんは気にしなくてよかったので、一日もあれば余裕で準備は終わった。あとは家の結界調節をする必要があるくらい。だがそれも多くの時間は必要としない。

三日もなにをしていたのかというと、幸助にいろいろと知識や技術を教え込んでいたのだ。約一ヶ月間のメイド生活への報酬だ。本当ならば金銭で払うつもりだった二人だが、幸助がそれを望んだことで、これまでの幸助の生活を元に使えたら便利だろうと思われることを教えたのだ。

エリスからは、小範囲の守護結界と短距離転移と貫通光線という三つの魔法を教えてもらっている。ホルンからは魔法もまじえた怪我に対する適切な治療行為だ。

守護結界は寝転んだ一人を覆えるくらいのもので、強度はラッツモンキーといった弱い魔物の攻撃ならば余裕を持って防ぐことができる。

短距離転移は、歩いて三日ほどの距離を一瞬で移動できる。幸助はこれを使ってベラッセンまであと一時間というところまで来ていた。転移の魔法はこれの上にあと三つあり、一番上は距離に関係なく世界中どこにでも移動できる。だが人間では魔力が不足し使うことは不可能だ。短距離転移も必要魔力ランクD+という一般人からみたら、高めの魔力がないと使用できない。

貫通光線はそのままだ。指一本分の太さの光が五十m先目掛けて

真っ直ぐ飛ぶ。岩程度ならば突き抜ける威力を持つ。習得したはいが、荒事を避ける幸助に使う機会があるかはわからない魔法だ。

ベラッセンを囲む塀が近づく。

以前来たときよりも、はるかに早い到着に幸助は転移魔法の便利さを実感した。

「眼に見える範囲か、一度行った場所じゃないと行けないから、どこへでも行けるわけじゃないんだけどね」

自身の思いに突っ込みつつ歩を進める。

入り口に近づいて幸助は首を傾げた。ちょうど交代の時間なのか、門番がいなかったのだ。

こんなこともあると幸助は街に入り、さらに首を傾げる。

一月前にいたときより、そこらを歩いている人が多いのだ。なにか大きなイベントがあるとは聞いていない。

そしておかしいところはそれだけではない。よくよく見てみると、もつとあからさまにおかしいところがある。

道行く人々の着ているものに統一感がないのだ。ファッションとしておかしいというわけではない。季節感がおかしいのだ。半そで、長袖、袖なしは当たり前。コートを着て厚着している人もいるし、上半身裸の人もいる。ボタンの掛け違いや衣服の前後逆なんて人もいる。

動物たちの様子もおかしい、微動だにしない犬、何匹も集まり重なっている猫、一列に並んで一羽ずつ鳴いている鳥たち。

「あっちにはよく分からんもの作ってる大工がいるし、屋台で失敗料理出してる人いるし。

なにが起きてんのか、さっぱりだ！ それにどうしておかしいことに騒いでないんだ！？」

そう一番おかしいことは、あからさまに異常だというのに街の住民たちはおかしいと感じていないことだ。

コートを着た男が暑いですねと言い、薄着の男がそうですねと相槌を打っている。屋台で失敗料理を出され、文句を言わずに受け取っている。

まるでこれが日常だというふうに、街の雰囲気は落ち着いている。あまりの落ち着きっぷりに、幸助は自分がおかしいのかと勘違いしそうになっていた。

「……宿に行ってみよう」

誰かまともな人がいないか探しながら宿へと向かう。しかし誰もがどこかおかしかった。

「こ、こんにちはー」

宿に到着し、ここはまともであってくれと願い入っていく。

だが床に座り笑い続ける男やソファを縦に置こうと頑張っている女を見て、幸助は肩を落とす。

「やっぱりここもか」

どないしよと頭を抱えなくなった幸助に、誰かきたと気づいたシデイが奥から出てくる。

「いらっしやいませーってコースケじゃない。なんだか戻ってくるの聞いてたよりも早いよね？」

「久しぶりってほどでもないか。一ヶ月くらいだし。」

早かったのはちよつとわけがあつてね」

「そうなんだ。今回もうちに泊まる？」

「そうしたいんだけど、個室空いてる？」

「空いてないけど大丈夫！　ほかのお客さんのように廊下で眠ればいいよ！」

「いやいやいや！　よくないよねそれ！？　お客さんを廊下で寝泊りさせるって、客商売としてどうよ！？」

突っ込みつつ、やっぱりシデイもおかしいのかと、頭痛すらしそうな幸助。

「お客さんたち楽しそうだけどねー」

「不満でてないんだ」

「不満？　出てないよ！　だってできるかぎり快適に過ごしてもらうのがここの流儀だからね！　不満なんかでるわけないよ！」

「現状ででないのがおかしいよね」

廊下で寝て快適に過ごせてるのだろうかと思客を探し顔を見ても。どの顔も不満なしといった顔だった。

本当にどうなってるのかとシデイに最近の出来事を聞いてみる。

「最近変わったこととかなかった？」

「変わったこと？　お客さんが多いことかなあ。この時期は催し事とかないから、いつもならここまでお客さんが多くはないんだよ」

「それは俺も思ったよ。街中を歩く人多かったし。やっぱりなにか行事があるわけじゃないんだ」

「どうして多いんだらうね。でも宿としては客が多いのは嬉しいことだけだよ。」

もっとサービス頑張らないと！　花をたくさん飾って華やかさ演出しようと思ってるんだ。そうすればお客さんはもっと明るい気分で見られると思うし」

「その前にベッド数以上の客受け入れは止めようよ」

幸助の突っ込みは届かず、シデイは花を用意するために出かけていった。

「俺の宿泊手続きなしで行っちゃったなあ。いや部屋一杯で泊まらないんだろうけど。」

ほかの宿部屋空いてるかな？」

望み薄だとは予想ついているが、探してみるだけ探してみようと宿を出る。

依頼で行ったことのある宿を三件回り、どこも満室という結果だった。

幸助と同じく宿に泊まらない者が、宿のそばにテントをはって街中で野宿しているところを見て、部屋が空いてるか聞く前から予想できていたことだった。

「シデイのところに戻って廊下で寝るしかないんかなあ……」

溜息を吐きたくなっている。

「そーいや冒険者ギルドって寝場所の提供してんのかな？ 行ってみるか」

宿へと向けていた足を冒険者ギルドへと向ける。

建物に入ると、一部の冒険者が一ヶ所に集まっているのが見えた。冒険者たちも幸助に気づく。その中にいたボルドスが幸助を呼ぶ。

「戻ってきたんだな」

「久しぶりーってボルドスがまとも！？」

「その言い方は普段がまともじゃないように聞こえるんだが」
「言い方が悪かったね、ごめん。」

ここにくるまでにいろいろとおかしな具合になってて、ちょっと混乱していた」

「気持ちわかる。俺も戸惑ったから」

「ボルドスはこうなってる原因とかわかってる？」

「ああ」

期待せずに聞いた幸助だが、肯定する返事を聞いて驚いた。

「原因ってなに!？」

「歪みだ」

短い返答を元に記憶を探り、該当するものを思い出す。

「魔法を使ったら発生するやつって聞いたけど」

「それであってるぞ」

「でも魔力を使って正しけるとも聞いた。その正されてる歪みが原因？」

「魔力を使っても完全には正すことはできないんだ。ほんの少しだけ小さな歪みが残る。」

その小さな歪みが集まって、悪さすることがある。今回のような。

頻度は多くない。普通は百年に一度生まれるくらいだな。十九年前に歪みが発生したらしいから、七十年以上の余裕があるはずなんだがなあ」

「解決方法はあるんだよね？」

「ある。歪みってのはなにかにとりつくんだ。だからとりついた生き物や物もろとも壊すってのが手っ取り早い解決方法だな。今回は使えなかったんだが」

使えないということは、すでに歪みがとりついてる対象を見つけ、試そうとしたのだろう。

「どうしてその方法が使えなかったん？」

「人間にとりついてたからな。悪人なら遠慮なく斬ったんだが、一般人だったんだ」

とりつかれた人が、なにか悪いことしたわけじゃないので斬れなかったのだ。

さっさと問題を解決するために斬るべきだと主張する人もいたが、それは少数意見だった。

だがその意見を見捨てるわけにもいかなかった。今はなんとか街としての機能は保たれているが、これ以上人々がおかしくなると生活に支障がでてきて、街が死者で溢れ返ることにすらなりかねないのだ。

「十日前から街から出て行くことができなくなってるし、早く解決すべしって意見もわかるんだ。」

だから殺して解決するのは最後の手段ということになってる」

「じゃあ今はほかの方法を試している最中なんだ」

解決間近じゃないかと幸助は胸を撫で下ろす。

そんな幸助の安堵をボルドスは否定する。

「歪みは逃げたんだ。だから今は探している最中ということになる」「逃げた？」

「俺たちも歪みに会ったのは初めてでな？ 対策が甘かったんだ。一度みつかったことで用心深くなったのかなかなかみつからず、難航してる状態だ」

「一度目はどうやってみつけたん？ なにか特徴でもあった？」

「強力な助っ人がいたからな。」

「今日も一緒に探してきて、みつからなかった」

「今日もって、まだ昼前にもなっていないのに切り上げたの？」

「その子は体力がなくてな、あちこちと引っ張りまわすわけにはいかないんだ」

「もしかして子供？」

「ああ。コースケは会ったことがあるかもしれん。孤児院の子だよ」

「ワイアーレのいる孤児院？」

「やっぱり知ってたか」

孤児院で体の弱い子と聞いて思い出したのは、一度だけ窓を通して見た少年だ。

「一度見たことがある。でも互いに見ただけで話したことはないよ。あの子、そんなことできたんだ」

感心したように幸助は一つ頷く。

「真偽の魔眼持ちだ。魔眼の力をコントロールできず、常に使用状態になっているから体力がないんだそうだ」

「ギフトって体力使うんだっけ。それなら体力がないのも納得だ」

「今も奥の部屋で休んでいる。その看護にワイアーレがついているぞ。」

ああ、それと歪みがとりついてたのはワイアーレだ」

「……ほんと？」

ボルドスは頷いた。

「どっか痛めたり、調子がおかしくなったりしてない！？」

数少ない知り合いに起こった珍事に慌てて聞く。

「俺の見たところじゃおかしいな部分はなかったな。
歪みにとりつかれてるときは……すごかった」

そのときのことを思い出したのか、もう一度感慨深げにすごかったと繰り返す。

「どうすごかったのさ？」

ごくりと喉をならしやや緊張気味に聞く幸助に、ボルドスは真面目な顔で答えた。

「すごい仕事のできる人間になっていた」
「すごいってそっち！？ もっとこうつ変な方向に暴走した感じかと」

「いやいやあれはすごかったけど、おかしくもあった。
普段のウィアーレとギャップがありすぎ。
ギルド員がおかしくなって作業効率が低下してる中、たった一人でミスなくギルドを切り盛りしてたんだぞ？」

普段のウィアーレを知ってる人間から見たら、違和感ありまくりだ」

「あーたしかに俺も自分の目を疑うかも」

その様子を想像して幸助も思わず頷いた。

「あれはおかしくなる方向性と元からの性質がみごとに合わさって起こった奇跡なんだろうな。俺はそう思ってる」

「そこまですごかったんだ」

幸助が乾いた笑い声を上げる。

魔眼の少年を寝かしつけたワイアーレが職員の休憩部屋からでてくる。幸助に気づき、ビクンと体を震わせた。一瞬だけ表情に恐怖の色が浮かんでいた。だが幸助に近づいたときにはそんな様子は微塵も感じられず、むしろ嬉しげな様子を漂わせていた。

「コースケさん！　きてくれたんですね、助かります！」

「期待を裏切るようだけど、助けになるかはわからないんだ。

それはそうと変なものにとりつかれてたんだって？　大変だったねー」

「んー……大変だって言われても、よく覚えてないですよ。私的にはいつもどおり過ごしてただけだし」

軽く笑って答える様子から、本当に苦労とかはなかったのだとわかる。

「そうなんだ。じゃあ、ほかの人たちも同じなのかな？」

「おそらくは」

「俺たちもうじきそうなるみたいだな」

「そなの？」

「コースケとワイアーレと魔眼持ちのタット以外は、あと二日三日ほどでおかしくなるはずだ。

俺たちより先におかしくなっていた連中の様子から、変化する日数を割り出してみた。ほぼ確定って言うていいと思うぞ。

そうなるって事件解決ができるのはコースケとワイアーレだけになる。外からまた新しい奴が入ってこないかぎりは。

もしそうになったら俺の持ってる手帳を見てくれ、対処法とか書いてある」

「そうなる前に解決させたいね。人手は多いほうがいい。時間かけ

すぎると俺もおかしくなるんだろうし」

「そうだな。さっさと解決させたい」

ここで幸助はここにきた目的を思い出す。

「ここって寝泊りできる施設ある？ シディのところに泊まろうとしたら満室で、ほかのところも同じだったし」

「俺たちは仮眠室で毛布に包まってごろ寝してる」

「廊下で寝るのと似たようなもんだね。俺の寝るスペースある？」

どこも似たようなものなら、まともな人のいる場所で寝泊りしたいとボルドスに聞く。

「大丈夫だ」

「料理は自分たちでしないといけません、お風呂とかきちんとかえ付けられますから不便すぎるということはありませんよ」

「ここでお世話になるよ」

よろしくと幸助は二人に頭を下げた。

寝床の確保ができた幸助は荷物を下ろし、二人にこれまでの経緯を聞く。

街がおかしくなり始めたのは幸助が去って五日ほど経ってから。

子供や老人や病人がおかしなことを言い出したことが始まりだ。

親は子供たちの間に新しく流行りだした遊びだろうと少しだけ注意してあとは気にせず、老人を世話していた人たちはボケだしたのかと流し、病人の看護をしていた人たちは気弱になっているのだからと励ましてすませた。

誰一人として歪みが異変を引き起こす前兆と考える者はおらず、そのまま日にちがすぎていった。そして爆発的に異変が広がり、街

から出て行くことができなくなり、今に至る。

ボルドスは最初からベラッセンにいたわけではない。依頼から戻ってきて巻き込まれたのだ。今も正気でいられるのは影響を受けるのが遅かったからだ。

タットがギルドにいるのは、孤児院の皆がおかしくなったことをどうにかできないか、弱い体を引きずりギルドに頼みにきたからだ。そしてタットは外に出て孤児院と外の人間を見たことで、ウィアーレが一番おかしいということに気づくことができた。

タットは魔眼で異変の進行度を見ている。おかしくなっている人間ほど、色が濃く見えている。

孤児院の人間はウィアーレのそばにいたことで誰もが影響を濃く受けていて、ウィアーレ自身の色の濃さが目立つことはなかった。だから外に出て比較し、ようやく気づけたのだ。

普段ならばタットのような子供の言葉など冒険者たちは無視しただろうが、魔眼と現状が否定することを許しはしなかった。

その日からタットと冒険者たちは協力して、一度は歪みを追い詰めたのだった。そのときはボルドスたちは相手が歪みだと確信していなかった。その隙をつかれて逃げられたのだった。

翌日から歪み探しに幸助も同行する。

タットはなるべく疲れないように、冒険者の一人に背負われている。それでも四時間の移動しか耐えることはできないでいた。

歪みがみつからずに時間は流れ、予想よりも一日長くまでもいられなかったが、ボルドスたちも歪みの影響を受けてしまい、問題解決は幸助たちに託された。

「手帳ってのはこれか」

幸助は指示通りボルドスの手帳を抜き取った。ボルドスはポケットから手帳を取られても気にせず、意味があるのかわからない動き

を繰り返している。

「なにが書いてあるのかなっ」と

ソファアに座って手帳を流し読んでいく。手帳には収入や予定などが書かれていた。そこは読み飛ばし、白紙のページまでいったので引き戻す。

「これかな」

それらしき記入をみつけ読んでいく。

そこに書かれていたのは歪みをみつけてからの対処法だ。

歪みをどうにかするにあたって必要なものが一つ。それはボルドスが持っているナイフ。そのナイフに歪みを封印する魔法をかけた。魔法のことはギルドの資料室を使って調べたらしい。

歪みが物にとりついていた場合はそのまま壊すことで大丈夫なので、ナイフの出番はない。ナイフが必要となるのは生物にとりついていていた場合だ。

ボルドスが幸助に話したが、生物にとりついていた場合でも殺して事件解決は可能。だがそれができない場合にナイフを使うのだ。その生物の体から歪みを追い出して、出てきた歪みにナイフをぶつけ、合言葉を言うことで封印でき事件解決となる。

生き物から歪みを追い出す方法は特に決まっていない。一番有効とされている方法で、心底驚かすといったものだ。大きな動揺やショックを与えることができれば、とりついているものから出て行くのだ。

ショックを与えるときに注意すべきは、肉体的なものではなく精神的なものであること。一発殴ったところで追い出せはしない。物理的な方法で追い出したのなら、それこそ拷問なり殺す寸前まで痛めつける必要がある。

追い出す方法が対象によって曖昧なので、一度追い出すことに成功したときが歪みを封印する大きなチャンスだった。

手帳を読み終わり、ボルドスからナイフを回収した幸助はワイアーレとタットのところへと向かう。

「これで残ったのはこの三人だけ」

「さらに人手が減ってしまいましたねえ。私たち皆を元に戻せるんでしょうか？」

「戻さないかね。でないと街一つ滅びかねん」

憂鬱そうな顔で言う。街一つの命運など幸助の肩には重すぎた。

「頑張らないといけませんね！ タットも頑張ろ！」

「うん」

「とりあえず、いつものように街中を歩き回ろうか。」

タットが背中に乗るのを手伝ってやって」

ワイアーレに手伝ってもらいタットを背負う。

街中を歩き回って歪みを探していく。

タットは眼帯を外し、魔眼を晒して街を眺めている。歪みの影響を受け始めたときよりも、街の全体の色が濃くなっている。

「いる？」

「いない」

ワイアーレの問いにタットは首を横に振る。

「今日はこのくらいで帰りませんか？」

タットの疲れ具合を見てウィアーレが提案する。タットは少し息遣いが荒くなっており、幸助も引き上げ時かなと考える。

「そろそろきつくなってる？」

「もうすこしなら大丈夫」

タットの返答に遠回りしてギルドに戻ることにする。

タットを休憩室まで運び、ウィアーレにあとを任せた幸助は一人で再び街にでる。なにか少しでも異変がないか探すためだ。

これまでの探索で異変はみつかっていないが、危険がないことがわかっていく。荒くれ者たちもおかしくなり、暴れることがなくなっているからだ。犯罪も起きていない。おかしいことにはなっていないが、平穏というのが現状だ。

これらの原因となっている歪みってなんなのだろうと幸助は疑問を抱いている。歪みがなにをしたのかさっぱりなのだ。

この疑問には「歪みは歪み、それ以外のなんでもない」としか答えられない。明確な答えを持つ人間などいない。どうして歪みなんでものが出現するのか、神ですら把握していないのだから、人間にわかるはずもないのかもしれない。

どこからか調子外れな歌が聞こえてくる。それが街のいたるところから聞こえて、たりないところを補い調和しおかしいながらも一つの音楽となっている。

「これも音楽新しい可能性の一つ？」

歌を聞きつつ向かうのは街の出入り口だ。

ここには毎日来て、出られるようになっていないか試しているのだ。

門の向こうは普通に見えてる。そこへと向かって足を踏み出し二

三步進むと、いつのまにか反転しているのだ。何度繰り返しても同じで、それならばと空から出ようとしても同じだった。

攻撃魔法はどうなるのかと覚えたての貫通光線を使ってもみた。塀の向こうへと向かった光線は反射したかのように折れ曲がり、地面に穴を空けて消えた。

ちなみに街から出て行くことができないのは正気を保っているものだけで、歪みの影響を受けた者は出入りできている。そのおかげで食料の心配をする必要がないのは助かっている。

影響を受けた者たちは街の外では正気に戻るのだろうか、街の異変に気づいてやってくる者は皆無だ。

「今日も変わりなしと」

いつのまにか街内側へと体の向きが変わっていたことに落胆も感じず、そのまま塀ぞいを歩き続けていく。

しばらく調査を続けて、幸助はなんとなく視線を感じたような気がした。視線を感じるとる感覚はメイドに変装していたときに、培ったものだ。美人に変装していたおかげで男たちの視線が集まり、感覚を磨く訓練になったのだった。

視線の方角を見ずにしばらく歩き続け、視線が外れないことで見られていると確信した幸助は素早くそちらを見る。

何もないように見えるが、視力も上昇している幸助の目は異変を捉えている。風景の一部が歪んでいたのだ。幸助が視線を向けたことで、歪みはなくなった。

「ボルドスたちって見られてるとは言っていなかったよな？」

気配を感じるといったことについては、ボルドスたちのほうが慣れている分上だろう。

「俺が察知できたのにボルドスたちが見逃す？ ボルドス一人ならありえるかもしれんけど、複数の冒険者たちが全員見逃すってのはありえるのかな」

胸中でありえないと断じた。あの視線は見るということを隠そうとしていなかったのだ。

まるで素人が覗き見ているようだった。それをプロであるボルドスたちが見逃すはずはない。

「監視を始めたことに意味はある？」

疑問ははれず、漏れ出た声は消えていく。

これから視線に注意しようと決め、幸助はギルドに戻っていく。

次の日も、その次の日も視線を感じる以外は変化なく、時間は流れていく。あまりの変化のなさに飽きがでてきた幸助だ。

見られているとはわかっていく幸助だが、その視線の中に恐怖の感情が混ざっていることまでは気づいてはいない。

「おかえりなさい、今日も駄目でしたか？」

街の探索から戻ってきた幸助をウィアーレがタイミングよく出迎える。

「いつもどおりだよ。」

タットを見てなくて大丈夫？」

「ええ、今は寝てますから。調味料を取りに行くついでに、少し散歩に行きませんか？」

「いいよ」

近くの店で必要なものを購入し、二人はさらに散歩を続ける。

ワイアーレが顔を横に向けたことで少し歩みが遅くなる。なにかを見ているのだろうと幸助は気にしない。

二人の立ち位置が隣同士から前後になったとき、幸助は背後からなんともいえない気配を感じ振り返る。

「なんだそれ!？」

幸助は咄嗟に体を動かして、突き出されたワイアーレの手を避ける。その手には靄の固まりがある。

避けられたワイアーレは再度手を突き出し、幸助はもう一度避ける。それが何度も繰り返される。

素人の動きなので幸助は考えごとをしながらも、余裕を持って避け続けることができる。

(考えても状況はさっぱりなんだけどな！)

犯人は現場に戻るってことから、歪みはワイアーレにとりつきなおしたってことにする。

歪みがなにをしたいのかはわからない。なんでいきなり動いたのかもわからない。あの靄がなにかもわからない。

分からないづくしだ、まったく！

こうやって相対してわかるのは俺を怖がってるらしいこと)

幸助がすぐわかったように、ワイアーレの表情は恐怖に歪んでいる。

ワイアーレが怖がっているのではなく、歪みが幸助を怖がっているのだ。なぜ怖がっているのか、それは幸助が竜殺しだからだ。

圧倒的な力量差故に間接的な方法では自身の影響を受け付けず、消される可能性が高いと歪みは悟っている。

急に監視を始めたか、このように行動を起こしたのは怖さが高まりすぎたからだ。恐怖が高まる前は息を潜め隠れていた。だがそれ

にも限界があった。

恐怖をどうにかしたくて、直接歪みを叩き込むという一か八かの賭けにでたのだった。

竜殺しという異常性を幸助は理解しきれていないので、歪みが怖がつている理由を思いつかない。

自身そのものを怖がられていたということは、のちのちウィアーレから聞くことになる。

幸助はわからないことを考え続けるほど思慮深い人間ではない。わからないことはほっというて、思考を次に進める。

（これからすべきことは歪みの封印。

ウィアーレがとりつかれていることを、タットに確認してもらったほうが確実？

となるとギルドまで移動してって危なっ!？」

ウィアーレは業を煮やしたのか、靄をいくつも出現させ幸助に投げ飛ばしてくる。

それを必死に避けながらギルドまで移動していく。かすることすら危なそうなので、さすがに必死にもなる。

ギルド入り口が見えた幸助は、速度を上げタットのいる部屋をめざす。

勢いよくドアを上げたことで眠っていたタットは目を覚ました。

「寝てるところごめん！ ウィアーレに歪みがとりついたみたいなんだ！ 確認してほしい！」

ドアの開く音に驚いていたタットは言葉なく何度か頷いた。

タットを抱き上げた幸助は耳を済ませて、部屋の周囲の音を探る。誰もいないことを確認し、部屋を出る。

ウィアーレにみつからないようにゆっくりと移動して、幸助たち

が先にワイアーレを発見する。

ワイアーレはギルド前で待ち受けていた。ただ待ち受けていただけではなく、確実に当てるため靄を数多く出現させていた。質より量を優先させたらしく、靄は小さめだ。だが数にして三百以上の靄がワイアーレを中心として浮いている。

その様子を扉の隙間から見つつ、二人は小声で話す。

「歪みとりついてる？」

「ウイ姉のまわりにあるのがじゃまでよく見えない」
「そうなんだ……」

タットの返答に幸助は溜息を吐きたくなる。
自分しかやるものがないとわかっているので、さっさと腹を括る。

「じゃあ、ちょっと靄を減らしてくるからさ。わかったら大声で教えてくれる？」

そのあとは部屋に戻ってくれると安心できるんだけど、無理ならここでじっとしてて」

タットは頷く。それを見て幸助は飛翔魔法を使って、ワイアーレの横を高速で移動する。

タットに流れ弾が当たらない位置で止まり、ワイアーレと向き合う。

ワイアーレが腕を上げ、幸助を指差す。それを合図に靄が幸助目指し飛んでいく。

それらを上空に飛び上がり避ける。靄は壁や地面などに当たったものは消え、なににもぶつからなかったものはそのままワイアーレの元へと戻っている。

「なにかぶつかって消えるなら剣でもっ！」

腰の剣を抜いて、近くを通った靄を斬る。手ごたえはないが、斬った靄は四散して消えていった。

狙い通りどうにかなったことでグッとガッツポーズをとる。

「これなら確実に減らせる！」

ワイアーレを中心に動き回り、近くを通る靄を消していく。避けるとき急旋回して反動がきついときもあるが止まることはない。止まってしまうと、あっという間に囲まれてしまう。

風をきり服をはためかせ飛び回り、ときおりかすることはあるものの、いまだに一つも当たってはいない。

靄が全く当たらず減っていくことに焦ったのか、ワイアーレは残った二百近くの靄を広範囲に一齐に飛ばす。自身の一部だからなのか、これだけの数の靄を思い通り操りきれている。

先ほどまでと比べ物にならない量の靄に、幸助は剣を振るう余裕がなく、避けることに専念する。避けながら幸助はタットの「ワイ姉にとりついている」という声を聞いた。靄がワイアーレから離れたことでタットの目を阻むものがなくなり、ワイアーレを見ることができたのだ。

「あとは封印だけ。あ、やばい」

後先考えずに動いたことが悪かったのだろう。幸助は周囲を囲まれてしまっていた。

ワイアーレが開いていた手の平をギュッと握る。それにあわせるように靄は幸助へと集まっていく。

幸助は迫りくる靄を集中して見据える。そして迫る靄へと向かった。

このまま留まっては全部を相手取ることになる。それは不可能と判断し、突破することにしたのだ。

一般人には見えないほどの速さで剣を振るい、次々と靄を消していく。それでも進行方向の全ての靄を消すことはできず、いくか体にぶつかった。

幸助にとっては運のいいことに、質より量をとっていたことで十程度ならば、体に入りこんでも多少の気持ち悪さがあるだけで大きな支障はでなかった。

「突破したぞーっ！」

靄の壁を抜け、そのまま地面へと向かう。そして地面に着地せず、急上昇した。反動に小さく呻きを漏らす。

靄も幸助を追って地面に迫っていて、幸助の動きに反応しきれずに多くの靄が地面にぶつかり消えていった。

これで自身の不利を悟ったか、ワイアーレは靄を体に吸収し走り出す。

「逃げる気か!？」

そうは行くかと先回りして、ワイアーレの前に降り立つ。

「あとは封印するだけなのに、ここで逃がしてたまるか！」

剣の切っ先をワイアーレに向け吼えた。

さっさと封印してしまおうと封印用のナイフを取り出す。

幸助はそこで動きを止める。歪みを追い出すには驚かせばいい、けれどもどうやって驚かすかを考えていなかった。

早くしなければまた逃げられると焦り、幸助は頭に浮かんだことを咄嗟に叫んだ。なぜそれだったのか後で考えてもわからなかった。

「一目惚れだった！ 結婚してくれっ！」

幸助の大きな声が街中に響いていった。

「……」

ウィアーレは動きを止める以外なにも反応をみせない。

そのまま一分ほど二人は見合う。

外した？ とだんだん恥ずかしくなっていく幸助。次の手を考えて、恥ずかしさを誤魔化そうとしている。

もう二分経ち、ウィアーレが急に動き出した。

「えええっと、そのですね！？ いいいろいろと世話にはなってますけどっ、けけけっ結婚にはまだ早いのではと愚考するわけですよ！？」

だから、ままままはっ友達以上恋人未満とかそんな関係などっ
いいいいかがでしょう！？」

顔を真っ赤に染めて、わたわたと両腕を動かすウィアーレの体中から、煙が噴出している。

煙は上空に集まって一つになっていく。

「成功？」

幸助はほんの少しだけ、信じられないといった顔をして、慌てるウィアーレを見ずに上空を見る。

「あ、封印しないと」

見てるだけでは駄目だとナイフを手には浮かび、煙の塊の前まで移動する。

下を見て、いまだなにか言ってるワイアーレから煙がでなくなったことを確認して、幸助はナイフを突き出してキーワードを呟いた。いまだ覚えてないせいかな、それとも一般的な言葉ではないのか、キーワードがどんな意味かは幸助は理解できない。

だが効果は発揮され、煙がナイフに吸い込まれていく。全ての煙を吸い込んだナイフが震え出す。まるで歪みが封印から逃れようとしているかのようだ。震えを押さえ込み鞘に納める。この鞘にも封印処理はされていて、二重封印となっている。そのおかげか震えはなくなり、静かになった。

「終わったわけだけど、なにかが変わった感じはしないぞ？」

解き放たれたとか、空気が変わるといった感触は一切ない。靄が体に入ったことで起きた気持ち悪さも、いまだ治まってはいない。ワイアーレならばなにかわかるかと地上に降りる。

目の前に立つ幸助に気づかず、考え込んでいるワイアーレに呼びかけるも反応はない。

頭に軽くチョップを食らわせ気づかせた。

「貯金はどれくらいありますかっ！」

「貯金？ なんの話？」

「結婚するなら住む場所とか探さない！ 私としては小さくてもいいので借家じゃない家がいいです！」

「あー……うん。謝るよごめん」

一言謝ってから、いきなりプロポーズした理由を話す。

「……え？ 驚かせて歪みを追い出すため、ですか？」

意味が脳内に浸透したウィアーレは先ほどの自身を思い返し、今度は恥ずかしさから顔を赤くさせた。

赤くなった顔に両手を当て隠し、しゃがみこむ。

座ったままのウィアーレに、幸助は両手を合わせてもう一度謝る。

「本当、勘違いさせてごめん。驚かす方法を考えて思い浮かんだのがあれだったんだ」

「い、いえ私もいきなりの求婚におかしいなとは思ってたんです！暴走してた自分が恥ずかしすぎる！」

共働きか専業主婦か、子供は何人がいいか、なども声には出さなかったか考えていたりする。

ウィアーレはこの日からしばらく幸助を見て、そういったことを考えたことを思い出し顔を赤くすることになる。

「そのままでもいいから聞いてほしいんだけど」

「は、はい！」

「歪みを封印したはいいけど、街に変化がないんだ。本当に解決したのかわからなくてさ。」

ウィアーレはなにかわかる？」

ウィアーレは深呼吸を繰り返して、落ち着き顔を上げる。動揺は収まったが、顔はまだ赤い。

「まだ影響が残ってるんですよ。あと二日はこのままだと」

「封印は成功してるんだよね？」

「はい。大丈夫です。私の中にいた歪みはほぼ全て出て行って、そのナイフの中に気配を感じられますから」

「気配？ そんなもの感じられるようになったんだ。とりつかれた

せい？」

「たぶん。これもしばらくすれば消えると思います。それまではこういったこともできるみたいです」

そう言つてワイアーレは歪みの残滓を手のひらに集めて、すぐに四散させた。

二人で話していると、異変が治まったと判断したタットが近づいてくる。

ワイアーレがタットを休ませるため、ギルドに戻る。それを手伝つたあと幸助は、再度街を見回る。

上空から街を見て回り、そのまま外に出てみる。飛ぶ方向が勝手に変わりはしたが、無事に外に出ることができた。

ギルドに戻つた幸助はワイアーレと話して、とりつかれていたときの詳しい状況を聞く。

最初に聞いたのは幸助が一度抱いた疑問である歪みの目的だ。なにか大きな目的があるかという点、そうでもなかった。なにせおかしくさせることが自体が目的で、その先のおかしくさせてどうこうしたいといった思いはなかった。目的がないという点から、自然災害に近いのかもしれない。

どうして歪みが現れたか。これは封印が破られたせいだという。詳しいことはワイアーレにもわからない。わかるのは二ヶ月近く前に封印が解かれ、魔法によって生まれる小さな歪みを取りこみ力の回復をしていたこと。そしてある程度回復してワイアーレにとりついて街に影響を与えた始めたこと。

ワイアーレにとりついたことに理由はなかった。たまたまだ。歪み自体はどれほど大きくとも単体で影響を及ぼすことはできない。なにかにとりついて、とりついた対象の性質に従い影響を及ぼすのだ。街がおかしくなったのは、ワイアーレのドジという性質に従ったせいだ。もしこれが残虐な人格を持っている者にとりついていれ

ば、今頃街は血の臭いと色で染まっていただろう。

一度体から追い出された歪みはワイアーレの奥深くに潜んで、すべてがおかしくなるのをおとなしく待っていたらしい。

体に入り込まれたワイアーレは追い出される前は歪みの影響を受けて行動していて、追い出されたあとは自身の意思で行動していた。明確に歪みの体を操られたのは、先ほどと幸助と再会したときのみ。

歪みの行動や知識はワイアーレのものに準拠しており、だからこそ幸助に恐怖した。ワイアーレが幸助を竜殺しだと知らなければ、まだ恐怖は少なく今もなお大人しく潜んでいたはずだ。ただの力の大きな存在というだけではなく、はっきりと正体がわかったがゆえに大きな恐怖が生まれ、それに伴った行動をしてしまった。

歪みの失敗にもう一つ原因があるとすれば、それは生物にとりついてしまったことだ。歪み自体にははっきりとした自我はない。だがワイアーレにとりついたことで感情を得てしまった。喜怒哀楽を感じられるようになったため、恐怖を感じたのだ。

ちなみに歪み復活の原因は幸助にある。依頼で行った庭の岩運び、あの岩が封印だったのだ。

あの封印は街ができる前からそこにあった。だから街の人々は封印のことなど知らない。もちろん依頼人も岩が封印だと欠片も思っていないかった。

今回の事件は誰が悪いわけでもなかった。

事件から二日経ち、ワイアーレの言うとおり街は元通りの姿を見せ始めていた。

事件に巻き込まれていた旅人は、旅の遅れを取り戻すため一斉に出発し、街の総人口は時間が経つごとに減っていった。

それでもおかしくなっていた期間に低下していた機能を元通りにするために多くの人々が忙しい姿を見せており、人数が減ったこと

を感じさせないくらい活気があるように見える。

事件解決に尽力した冒険者たちは、それぞれのグループの代表がギルドに呼ばれ解決までのあらましを聞いた。そして少ないながらもギルドと街を治める貴族から報酬を支払われた。

これで事件の事後処理がほとんど終わりとなる。

最後の問題を話し合うため、ギルドの長と幸助とボルドスとワイアーレが会議室に残っている。

説明に必要なだった歪みが封印されているナイフもテーブルの上に置かれている。

「さてどうしたらいいものか」

本当に困った様子で長が言葉を漏らす。それを聞いてワイアーレが申し訳なさそうにしている。

問題はワイアーレにあるのだが、ワイアーレがなにかをしたわけではないのだ。

「もう一度聞ぐが、まだ消える様子はないのだな？」

「はい」

ワイアーレは頷く。

「ボルドスさん、あなたはこういった事例のことに詳しいですか？」

「いんや、聞いたことない。

歪みの影響が残り続けるなんて、初めて聞いたよ」

問題とはワイアーレの中に残っている歪みのことだ。

街の人々は元に戻ったのだが、ワイアーレの中の歪みは変化する

様子を見せないのだった。

街から歪みの残滓が消えた今、歪みを扱うことはできなくなっている。けれどもナイフを握ると封印されている歪みを使うことができる、前日の実験でわかっていた。

ナイフは王都なりリッカートなりに送り、嚴重に保管してもらうのでワイアーレが歪みを扱うことはないだろうと予想される。しかし万が一を考えると放置もできないでいた。

「私はどうなるんでしょう？」

おずおずと不安そうな様子を隠さずに聞く。

「どっかの神殿が王都に連絡をとるべきなんだろうが、そういった手段をとると君は今後碌な生活を送れなさそうだ。

職員にそんな苦しい人生を送ってほしくない。私はそう思っているし、ほかの職員も同じ意見だ。

しかしなんの対処もなしというわけにもいかない」

今までと変わらずギルドで働いてもらいそのついでに監視する、といった意見もあったが却下された。

ギルドは街の重要組織の一つで、再び歪みの影響を受けることは避けたいのだ。

「とりあえずは歪みの影響が抜けきるまで、一時退職という形になる」

「くびっ!？」

思わず立ち上がったワイアーレの目の端に涙が滲んでいる。

「落ち着きなさい。一時とつけただろう。」

歪みがなくなれば、すぐに再雇用するようになっていく」

歪みがなくなったかは自己申告になるが、嘘をつくような人物ではないとギルド職員全員がウィアーレを信じていた。

「そこまで決まっているのなら悩むことはないのでは？」

「退職したあとの彼女の見張りというか、歪みの影響再発防止のためにはすべきことで悩んでいるのだよ」

幸助の言葉に、長は悩みの焦点を話す。

「そこで君たちのどちらかに依頼したいのだ。

彼女と一緒にいて、異変があれば解決もしくは最寄のギルドまで知らせる役目を。」

監視をつけるというのは問題あるのだろうか、放置してまた同じことが起こるといことになるのもどうかと思うのだ」

「それならばコースケのほうがいいと思うぜ。」

俺は第一印象が悪いこともあって、一緒にいるのには向いてない。その点コースケはウィアーレからの依頼を受けたりと親しい関係を築いているからな」

「「はい？」」

幸助とウィアーレは揃って疑問の声を上げた。

「そうか、ならばその方向でいくとしよう。

最終的に事件解決まで関わっていたから、同じことが起きても経験から、迅速に対処できそうだしね。」

よろしく頼む、ワタセ君」

「ちよっ！？ いきなりそんなこと言われても！？ 俺ずっとこの街にいるわけじゃないし！」

「まあ、常に監視してるとは言わんよ。頻繁に会い行く程度でいい。街の外に出るときは、言ってくればこっちで監視は引き継ぐ。一緒に行くというのなら旅費も出すよ」

まだ悩む様子の幸助に、長は「頼まれてくれないか」と深々と頭を下げた。

年上の人間に頭を下げられることなど初めての幸助は、そうさせていることが申し訳なく感じ頷いた。

能力が高くとも、幸助の感性や性格は普通だ。「偉い」「偉そう」といったものには弱かった。

幸助とウィアーレに若干の問題は残しつつも、これにて事件は解決しボルドスと長は晴れ晴れとした表情で部屋を出て行く。

残った幸助とウィアーレは、プロポーズのことがあとを引きずり、なんともいえない表情で見合って部屋を出て行く。

ウェーイにだけは事情を話すべきだと、ギルドを出て孤児院に向かう。

話を聞いたウェーイの口から「同棲でもするか?」という言葉がでてきて、二人は大いに動揺することになる。

そんな小さな騒動はあるが、事件は解決して街に平和が戻ってきたのだった。

ダンジョンアタック！

歪みによる騒動が終わり、幸助は次々とギルドに舞い込む依頼を順調にこなしていった。街が元通りになるためにはやらなければならぬ仕事がたくさんあり、その仕事には人手が足りず、人々はギルドに人手を求めているのだ。

だから忙しかったのは幸助だけではなく、冒険者たち全員にいう。その中で一番働いていた者はというと幸助だ。名が売れているということもあるが、単純に体力の高さゆえにこなせる仕事量が多かったのだった。

その忙しさは一週間ほど続いて、じよじよに収まっていった。だが街が元の様相を見せるまでには、さらに二週間の時間を必要とする。

その仕事に幸助はウィアーレを同行していた。一緒にいて様子を見るためでもあるが、ウィアーレに収入を得させるためでもあった。ギルドをくびになったことで収入がゼロとなっている、それをウィアーレが気にしていることを知ってから連れ出し始めた。

慣れない仕事にウィアーレはミスを連発する。それを依頼人は致命的なものでなければ気にすることは無い。なぜならウィアーレに報酬は払っていないからだ。二人分を払う必要はないと仕事前に幸助が言うことで、ボランティア的なものとして捉えている。ボランティアならば仕事が遅くとも、多少のミスも流すことはできた。

ウィアーレの稼ぎがどうなっているかというところ、幸助が自身に支払われたものを半分渡していた。

多めに報酬をもらっているかわかっていたため、ウィアーレは差し入れや依頼の手続きやお金の勘定など、サポート的なことを進んでやっている。

そんな稼ぎでも幸助は一週間で半月分の収入を得ていたのだから、こなした仕事量の多さがよくわかるだろう。あまりの忙しさに途中

からウィアーレは体力がもたず、仕事現場についていくだけになっていた。当然報酬は支払われることないのだが、ウィアーレも当然のこととして納得している。

一週間働き続けた幸助は、一日休んで疲れをとる。それで十分疲れがとれた幸助は今日もギルドに向かっている。人々はまだまだ人手を必要としていて、金銭に余裕があってもものんびりとできる雰囲気ではない。そういった雰囲気背を押されギルドへと通う毎日だ。ウィアーレは一日では疲れはとれず、今日も休むことになっているので、今日は幸助一人だ。

ギルドに入り、特設された雑用系依頼ボードに向かう幸助を呼び止める声がある。

「あ、ディアネスさん。おはようございます」

「はい、おはようございます」

レグルスパロウとの揉め事の際に助けてくれた職員だ。ウィアーレを指導していた先輩でもある。

「今日はあの子はいないんですね」

「連日の疲れが」

「ああ、なるほど」

納得したように軽く手を叩いた。

「呼び止めたのはウィアーレのことが気になったからですか？」

「いえ、聞きたいことがありました。」

三日後になにか予定はありますか？」

「ないですよ」

予定があることが珍しいので、深く思い出す必要もなく即答できる。

「でしたら、ボルドスさんとの共同依頼を受けてもらいたいです」「危険すぎるものじゃなければ受けますけど、どんな依頼なんですか？」

「遺跡調査です。この街から徒歩三日の位置にあるゼルダン遺跡について知っていますか？」

「知らないですね」

「そうですか。まあ、そういった遺跡があるという認識でいいですよ。どんな遺跡かは依頼には関係ありませんからね。

そこはすでに探索しつくされていると思われるんですが、最近未発見箇所がみつかりまして。そこに調査団が行く前に、大体の間取りを調べて、あるかもしれない罠を除去してもらいたいです。どうですか、受けてもらえますか？」

「そういった依頼って受けたことないんで、俺は不向きだと思うんだけど」

「ボルドスさんが経験豊富ですし、一緒なら大丈夫だと思いますよ」

それならボルドスだけで行ったほうが効率いいのではと思って、そこでふと考える。もしかしたら自分を行かせたい理由があるのだろうか。

「……危険な魔物でも潜んでるんですか？」

ヴァイオレントバルブを倒した腕を求められているのかと聞く。

「事前調査ではそういった情報はないですね」

「じゃあ入り口が土砂で塞がれてるから、それをどかすために俺が必要とか？」

ではいつもどおりの力仕事なのかと聞く。

「すでに除去されてます」

ディアネスの言葉に首を傾げざるを得ない。

「……俺行く必要ないんじゃない？」

「ボルドスさんがあなたに経験積ませるために連れて行きたいって言っていましたよ。」

ギルドとしても、あなたのできることが増えるのは嬉しいことですから」

この言葉で幸助は納得できた。経験を積ませてできる仕事の幅を増やしたいのだろう。

陰険な裏があるわけでもないようなので、幸助は承諾する。

「わかりました。受けます。」

詳しい話はボルドスに聞けばいいんですか？」

「ええ、同じ宿に泊まっていると聞いてますから、今日明日でもそちらで聞くといいと思います」

ディアネスの話はこれで終わり、幸助は仕事を探すためにボードに向かった。

日が暮れたあと、仕事を終えて宿に戻った幸助はその足で食堂へと向かう。熱々でチーズがいい感じに焦げたラザニアとコンソメスープとオレンジのシャーベットが今日の夕飯だ。よく働いて空きっ腹になっていることもあり、漂ってくる匂いだけでご飯が一杯食べられそうだ。

美味しく夕飯を食べて食器を戻し、食堂を出ようとして足を止め

る。

「ボルドス！」

「よう、コースケ！ お前も夕飯だったんだな」

「うん。もう食べ終えた。」

あとでボルドスの部屋に行くよ。共同の依頼で話すことがあるだろう？」

「ああ、聞いたんだな」

「部屋は前と同じ？」

「同じだ。さっさと食べてくるとするよ」

「ゆっくりでいいよー」

カウンターに向かうボルドスに声をかけて、幸助は自室に戻る。

軽く文字の勉強をして、風呂に入る準備を整えた幸助は部屋を出て、ボルドスの部屋に向かった。

扉をノックして、入れという声を聞いてから扉を開く。

「ベッドにでも座ってくれ。」

共同の依頼をやるわけだが、どんなことをやるかも聞いているか？」

「遺跡内の調査で、罫の解除と魔物退治だとか」

「うん、それでいい。」

コースケはこういった依頼は受けたことないんだろう？」

「ないよ。だから当日はほとんど役立たず」

「それはわかってるから気にしないでいい。」

必要な道具を買い揃えたい、明日か明後日に時間とれるか？」

「予定はないから大丈夫」

「じゃあ明日にでも買いにいくか。金はあるのか？」

「エリスさんにもらった分と稼いだ分で、二ヶ月近く宿暮らしできるくらいは持ってるよ。それで足りる？」

「余裕だな。明日の朝から出るぞ」

「わかった。そういやこの依頼ってワイアーレも連れて行ける？」

無理っぽいとは思ってるが、一応聞いてみる。

「やめといたほうがいいな。ワイアーレが冒険者を目指すのなら、話は別なんだが」

「そういった話は聞いたことないね。」

ただ聞いたただけだし、気にしなくていいよ。

あ、あと最後に一つ。移動って歩き？」

「そうだな。歩きが嫌なら馬の手配でもするか？」

「馬乗ったことないから無理。魔法使って飛んでいけば時間を省略できそうなんだけど」

「俺を抱えて飛べるのか？」

「大丈夫じゃないかな。荷物背負って飛んだとき、ぐらついたり速度が遅くなったりはしなかった」

「そういや小さい頃、姉さんに背負ってもらって飛んだっけ」

懐かしげな表情を浮かべている。

「道中一山越えて、川も渡るからそのとき使ってもらうのもよさげだな」

「そのときに使うってことで、いいんだね？」

「ああ、そうしよう」

話はこれで終わり、幸助は風呂に向かう。

そして次の日の朝、一緒に朝食をとった二人は、孤児院に行つてワイアーレにしばらく仕事で街を離れることを告げてから、必要なものを揃えていった。

昼食頃には買い物を終え、二人はそこでわかる。ボルドスはこれから明日の昼過ぎまで仕事が入っているらしい。

幸助は荷物を置きに宿に戻る。それからギルドに向かおうとして、シディから配達の依頼を受けた。リッカートへの書類配達だ。二日ほど前に転移の魔法を習得したとシディに話したので、ちょうどいいと思ったのだろう。

転移の魔法を使った配達は値段が高くなるのだが、二人とも相場を知らず、八割引の値段で双方ともに納得してしまっている。ギルドの職員が聞いたら、安すぎることに少し説教しそうな話だった。

時間は流れて当日となり、幸助とボルドスは予定通りに出発し、遺跡の前に立っている。

道中変わったことはなかった。山と越えるときと川を越えるときに、飛翔魔法を使ったおかげで半日以上時間を短縮できている。

飛んでいる最中に、強風に吹かれてよろめきボルドスが肝を冷やすといったことはあったが、それ以外は魔物も二度雑魚にあったのみで平穏といえる行程だった。

幸助はその戦闘で約一ヶ月ぶりに剣を抜いた。それを知ったボルドスが、本当に同業者かと突っ込みをいれるなんてこともあったりもした。

遺跡はちょっとした丘の中に埋もれているようで、二人に見えているのは建物全体からみると右側面上部的一部分だ。もともとは地震によって生じた亀裂が遺跡の存在を世に知らせることとなった。

発見された当初は亀裂からロープを下ろし、それを伝い下りていたが、年数が経った今は階段が作られ楽に入ることができる。

長年の調査でわかっていることは、ここは世界神を崇めるために作られた神殿の一つだということだ。当時の人々の残した日記や書類が残っていたりと、歴史的価値もあった。価値のありそうで動かせるものは全て運びだされ、冒険者たちはここを枯れた遺跡と認識している。ここに残っているのは壁画や価値のない古びた家具などだ。

「ギルドから連絡のあった、調査にいらした冒険者ですか？」

遺跡近くにキャンプをはっているギルド職員が、二人に気づいて近づく。

「ああ、俺はボルドス。こっちがコースケ。この二人で調査に入る」
「今日のところは旅の疲れを癒して、調査は明日からということだよ
よろしいでしょうか？」

「それがかまわない」

「では用意したテントに案内しますので、ついてきてください」

二人は案内されたテントで疲れをとり、翌朝準備を整えて遺跡へと入っていく。

遺跡内は外よりも温度が数度下で、空気も湿り気を帯びていた。
これは過去の地震が原因で、地下水脈から水が上がってきて神殿の一部を水浸しにしているせいだ。

入り口は外からの光が入ってきているおかげで明るい。だが奥までは明りは届かず暗い。

「魔法で明りつけても大丈夫？」

「頼めるか？」

幸助は二度魔法を使い、自身とボルドスを中心として明りを灯す。
以前ホルンが使ったものと同じように、いくつもの光の粒が舞っている。

「ここはまだマッピングしないでもいいんだよね？」

幸助の手にはマッピング用シートとボードがある。

「必要なのは発見された場所だけだからな」

場所を聞いて知っているボルドスが先行し歩き出す。

目的の場所に着くまでは魔物に会うことも、罾が仕掛けられていることもなかった。幸助は余裕を持って周囲を見ることができた。

物音のない神殿内は、暴れることを禁じるような雰囲気で満たさ
れているようだ。ここは修学旅行で行った寺院を幸助に思い出させる場所だった。

「ここだな」

「新しくみつかったって感じじゃないね」

二人の目の前にある入り口は壁を壊したもののだが、壊した破片はどこにもない。壊れている部分も真新しいといった感じではない。

「通行の邪魔になるから掃除したんだろうさ。」

「ここからは気を引き締めろよ」

「うん」

二人は部屋に入り、まずは観察する。といってもなにか変わったものがあるわけでもなかった。

「左に扉ありっと。こんなものでいい？」

書き込んだシートをボルドスに見せる。幸助の分からない情報をボルドスが知っている可能性があるからだ。

「とりあえずはそれでいい。でもそれで確定ってわけじゃないから、修正がきくようにもっと薄く書いたほうがいいぞ」

「了解」

二人はドアへと移動し、ボルドスが扉を軽く叩いたり、少しだけ動かしたり、周辺を調べていく。

一通り調べてボルドスは、幸助を呼ぶ。

「このドアに罠が仕掛けられている。

悪質なものじゃなく悪戯レベルといってもいいやつだ」

「ほうほう」

「だから解除に失敗してもたいした被害にはならない。

というわけで調べて解除やってみろ」

「無茶だ！？ 調べ方解除の仕方知らないよ俺！？」

「いい経験になるだろ。よく調べてみればわかるからさ」

そう言ってボルドスは一步下がった。

仕方ないと溜息吐いて、幸助は扉を見る。

見ただけではさっぱりわからない。ボルドスのやっていたことを真似ていけばなにかわかるかと扉を探っていく。

木製の扉を触ってもなにもわからず、軽く叩いてみても同じ、周囲の壁もまた同じ。

あとは眼の届かないところのみとなり、背伸びをしても届かないので、もったいないが飛翔魔法で浮かび上がって扉上部を見ていく。

「これ、か？ ボルドスー薄めの板が挟まってんだけどこれを動かせばいい？」

「正解。じゃあやってみろー」

指を入れる隙間がなく引っこ抜けはしないので、剣の先を入れて向こう側へと押し込んだ。

途端にガラアァンっと、扉の向こうからなにかが落ちた音がした。

「な、なに!？」

幸助はびくんと体を震わせて、ボルドスを振り返る。

こうなることは予想できていたようでボルドスは落ち着いている。

「扉を開けてみればわかる」

扉を開けると、小さなバケツと板が床に落ちていた。扉上部に板を挟み、その板にバケツを置いていたのだろう。

「あ、悪戯ってこのことか」

小学校で子供たちが引き戸に黒板消しを挟む、それを似たようなものだ。

「罠としては悪戯レベルだ。扉を開けても落ちてきたバケツに驚くくらいだろ。中身に有害な液体でも入ってたら危険なものに早代わりだな。」

この罠にはもう一つ特徴がある、わかるか？」

「役割？」

幸助は思いつかず首を傾げる。

「侵入者を知らせる警報にもなり得るんだ」

「おー」

「対処法としては音を消す魔法を使っておく、ほかに出入り口があるならそっちに行く。こんなところか。」

単純な罠だが、動かしただけで発動してしまうから厄介だな。

まあ今回はいても魔物くらいだろうから、警報としてはたいして

意味はないけどな」

どうせ戦うのだからと気楽に言ってボルドスは先に進む。

扉の向こうは二手に分かれた廊下となっている。右は十メートルもなく扉が一つ見える。左は明りが届かず闇だけだ。

まずは近場から調べることにし、右に進む。

「この扉には罠はないはずだ。開けるぞ」

ボルドスは慎重に扉を開く。慎重なのは罠を発見できなかった可能性もあるからだ。

鑑定に間違いはなく、開けてもなんら変化はなかった。

「んーここもなんもない」

「じゃあ次だ」

二人は廊下に出て、先へと進んでいく。

ボルドスが足を止め、幸助もつられて止まった。

ボルドスの視線は床に向いている。

「落とし穴だ」

「あーよく見ると床の色が違う」

暗いということもあるが、幸助はこれにまったく気づいていなかった。

明るければまだわかりやすかったのだろうが、こう暗いと多少の誤差は注意していないと気づけない。こちらへんは経験のあるボルドスに幸助はまだまだ敵わない。

ボルドスが斧で軽く床を叩くと、塞いでいた部分は穴の中に落ちていった。

「このように通路にも罨は仕掛けられていることが多々ある。だから気を抜いてはだめだ。わかったな？」

「はい」

二人は穴を避けて進む。

今度は幸助も気を引き締めている。

そして足を引っ掛けるようにはられたロープを発見し、それをまたぐ。

次の瞬間、幸助は床が少し沈んだことに気づき、頭に衝撃を感じた。タライが落っこちてきたのだ。

「二重の罨だな。一つ目を突破した油断をつくタイプだな。

ちなみに今のは天井を見ていれば気づけたぞ」

指差す先にはタライを固定していた跡がある。

「ひっかかったのは、落とし穴のせいで下にばかり注意を向けていたせいだ。

罨はどこに仕掛けられているかわからないから、全体を見なければだめだ」

怪我をしない罨と気づいていたので、ボルドスは幸助に注意を促さなかったのだ。身をもって体験すれば、次からひっかからないよう注意するだろうと考えた。

「なんだか学ぶことの多い場所だなあ」

「大事にならないうちに学べて運がいいじゃないか。さあ進むぞ」

歩き出したボルドスのあとに幸助が続く。

曲がり角を曲がってすぐに扉がある。

「ここは鍵がかかってんな。これから開けるわけだが、作業するにあたって注意する点は鍵穴を覗かないこと。針とか液体とかでてる場合があるからな」

ボルドスは手鏡と先の曲がった鉄針を取り出し、鏡で鍵穴を覗いて鉄針を入れていく。

かちやかちやと鉄針を動かし、鍵はすぐに開いた。

その様子を見ていた幸助は感心したように口を開く。

「いまさらだけど、ボルドスいろいろできるねー。
なんというか意外？ 戦いが専門って思ってたよ」

凶暴化というギフトもそういう思い込みで拍車をかけているのだろう。

だがそれは逆だ。凶暴化というギフトのせいで誰かと組むことが難しく、一通りのことをできる必要があったのだ。

こういった技術はエリスから教えられていた。

「冒険者になった頃はまだ生存者の称号も持ってなくてな、危なかしくてほとんどの人たちが組んでくれなかったんだよ。

だからこういった罫や鍵の解除も自分でやる必要があって、やっているうちに腕が上がったんだ。

まあ今は戦いの少ない依頼なら、誰かと組めるようになってるけどな」

ボルドスは手鏡と鉄針を幸助に渡す。きよんとした顔の幸助。なぜ渡されたかわからないのだ。

「なんで渡すん？」

「中に入って鍵閉めるから開けてみな。」

やり方はわからんと思うが、最初は適当に動かしてみればいい」

ボルドスが中に入り、かちゃんと鍵を閉める音がした。

幸助はボルドスを真似て、鍵穴に鉄針を突っ込む。そこでふと幸助は気づく、鍵周辺とドア全体の差に。ドアも鍵も古いのだが、その古さに差があるように感じられた。気のせいかなと疑問を流して、作業を始める。

五分ほどかちやちやと動かし飽きた。勝手のまったくわからない者が適当にやったところで開くわけではないのだ。

鉄針を抜いて、ドアを叩く。

「思ったより諦めが早かったなあ」

「まったくコツがわからないから、どうしようもないよ」

「それもそうなんだけどな。たまに適当にやっても開くこともあるんだ。」

帰ったらギルドで練習道具借りよう。コツも教えるよ」

「借りれんの？」

「一通りの道具は置いてあるぞ。罫を仕掛けることもできるし、解除の練習もできる。」

できることはあくまで練習なんだけども。実際に仕掛けられてるものを解くときは緊張感が違う。

本番では思わぬ失敗もするもんだ」

この部屋もシートに書き込み、二人は先に進む。地下があり、階段があつて二階に進み、隠し部屋を発見するなど、次々と踏破していきマップを埋めていく。

魔物は少なかった。こちらを見ると逃げねずみの魔物と水没した部屋に魚の魔物がいたくらいだ。わざわざ水の中に入って戦うの

もめんどくさいと放置した。

先に進むほど、罠の発見や解除の難易度が上がっていく。中には魔法仕掛けの罠もある。

魔法仕掛けのものは解除に自信がないのならば避ける、ということを経験は学んだ。

そして難易度の上がった罠の中には、ボルドスが解除に失敗するものや近づいただけで反応するものもあり、

「危ねえっ!?!」

いくつもの矢が飛び、二人の体を掠めたり、

「あっちゃちゃっ!?!」

ドラゴンを模した彫像から噴出される火炎から逃げたり、

「うおっ!?!」

坂道に撒かれた油に滑ってこけたり、

「こうなったら天井ぶっ壊せ!」

個室に閉じ込められ、吊り天井をぶっ壊したり、とスリリングな体験ができた。

中でも二人が一番焦ったのは溶解液での水攻めで、最初の悪戯レベルの罠とは比べようがなく命を取りに来ていた。

ちなみにこの罠は解除に失敗したわけではなく、ねずみの魔物が偶然作動させたのだった。その場から逃げることに必死で、溶けていく魔物をグロイと思う暇もなかった。

「……おかしいよね」

迫りくる溶解液から逃げきって幸助は言う。

「なにがだ？」

「いくらなんでも罠が多い。順番に難易度が上がってるのもおかしい」

「そうか？　だがおかしくともそろそろ行きつくしたと思うし、さっさと終わらそうぜ」

かき込まれているマップは、全体図から推測して確かにそろそろ終わりのように感じさせる。

首を傾げながらも幸助はボルドスについていき広間に入る。そこには大型の四足獣がいた。高さはボルドスに迫り、顔から尾までは四メートルほどある。飢えているのか、入ってきた二人に視線はくぎづけで、だらだらとよだれを垂らしている。

「やっぱりおかしいって！」

壊れたってより、分解されたって感じの檻があるし！」

壊されたのならば獣が力づくで出てきたと納得も可能なのだが、檻を構成していた部品に小さな傷以外はなく、魔物が力づくで出たとは思えない。

まるで人為的に解き放たれたかのようだ。

「今はそんなことより目の前の魔物をどうにかするのが優先だ！」

それもそうだと幸助は剣を抜いて、ボルドスと共に獣に立ち向かう。

戦いは苦戦することなくあっさりと終わった。そこらの雑魚より

は強かったが、それでもボルドス一人でも十分倒せる相手だったのだ。

「コースケ」

「なに？」

魔物から離れて檻を見ていた幸助を、魔物から牙などを剥ぎ取り終わったボルドスが呼ぶ。

「今回は浮かない顔してないけど、慣れたのか？」

ラッツモンキーなどを殺したときと比べているのだろう。

「慣れ、てはないはずだけど。」

今回は罪悪感といったものよりも、対象が常識はずれで身の危険を感じる気持ちのほうが大きかったから」

「身の危険って、そこまで強くないぞ？」

「生きていてここまで大きくて獰猛な獣を見たのは初めてだよ。本当に強いかというより、見た目に気圧されたってところ」

「雰囲気で格下ってわかりそうなんなんだが」

「それよりもこれ見てよ」

幸助が檻の一部を持ち上げる。

「魔物が暴れてついた傷はあるけど、それ以外は綺麗で力ずくて壊したって感じがしないんだ。」

まるで誰かが仕掛け一つで檻をばらばらにしたみたいだ。

もしかしたら誰かの隠れ家になってるんじゃない？ それなら罠の多さも納得できるんだけど」

「それはハズレだ。隠れ家なら生活感が漂ってそうなものだろ？」

飲み物や食べ物をみかけたか？」

幸助は記憶を探って、首を横に振る。

「隠れ家じゃないなら、その魔物の世話是谁がしてたん？
ずっと昔から飲まず食わずで、あの元気さはないよ」

「俺もあれはないなと思ってる。罠の難易度の高さといい、なに考えたんだろうなギルドの職員たち」

「ギルドの人たち？」

「全部回ったようだしネタばらししてもいいな」

遺跡から出ながらボルドスは話していく。

この遺跡の二人が回った部分は、ずいぶん前にすでに探索しつくされている。ならばなぜボルドスと幸助に探索を依頼したかという、はじめに言っていたように幸助に経験を積ませるためだった。ギルドでできる訓練とは違い、本場の空気に触れさせることで、上達を早めさせるといった思惑だ。

ここまでする必要があるのかと幸助は首を傾げるが、それだけ期待されているということなのだろう。

このダンジョン作成の手間も、のちのち幸助に回すであろうダンジョン内での遭難者救助などの依頼達成に繋がるのなら、たいした苦労ではない。

「本番さながらの練習場ってことか。知らされてないと緊張感持って挑むし、本場と変わらないよね。そこは納得できるけど。

殺しにきてる罠を置いといて練習って」

そこだけが納得いかない様子の幸助。

致死性の罠は溶解液だけではない。発動させなかったが、魔法仕掛けのウォーターカッターや毒を塗った鋼糸もあったりした。

「俺も詳しいことは聞いてないからなあ。幸助をここに連れてきて、教えながら一緒に進んでほしいって依頼だった。罠が仕掛けられてるとも聞いたが、ここまでとは聞いてないぞ。」

外にギルド職員いるし、詳しいこと知ってるんじゃないか？」

二人が外にいる職員に聞いただと、調子にのりすぎたというシンプルな答えが戻ってきた。

罠を仕掛けたのはギルド職員ではなく、専門の者を呼んだ。専門家は、思う存分腕をふるえることが楽しくなり暴走したのだ。その罠の仕掛ける手際が素晴らしく感動できたので職員たちも止めずに楽しみ、死に至る罠が仕掛けられたのだ。

しかも職員たちは今の今まで二人がひっかかるかなと、楽しみにしていたようだった。

「あ・ほ・かああーっ!? ひっかかったら死ぬわっ!」

ボルドスの叫びに、おおっと手を叩き事態を納得し、職員たちはいつきに顔を青ざめた。

ぺこぺこ頭が吹っ飛ぶのではないかと思われるくらいに、勢いよく頭を下げ続ける職員たち。

それを幸助は乾いた笑みを浮かべ呆れた顔で見ている。

こうして幸助の初めてのダンジョンアタックは、予定されていたものよりも大変な思いをして終わった。

だが難易度が高い分、得たものも多い。今回の経験は次からのダンジョン探索にきつと役立つに違いない。

そうでも思わないと半分巻き込まれた形のボルドスはやってられなかった。

古きヒーロー、異郷に参上

「重くないかね？ 手伝ったほうが」

四十代後半と思われる男が三回目の同じ質問を幸助になげかける。それに対して幸助も同じ返答を返す。

「たいした苦勞じゃないんで気にしなくてもいいですよ」

「苦勞じゃないと言われても……やはり重いと思うんですがねえ」

男は幸助を見て、さらにちらりと背後を見て、若干顔を引きつらせる。

周囲の者たちも似たような反応だ。これくらいは当然といった顔をしているのはボルドスクらいだ。

幸助は荷物が多く積まれた荷台を一人で引っ張っている。もともとは馬二匹に引かせていた荷台を人間が一人で、しかも平氣そうに動かしている。一般人からすれば目を疑いたくなる光景だった。

幸助がなぜ荷台を引いているのかというと、話は二時間前にさかのぼる。

遺跡からの帰り道、あと三時間ほどで街にたどり着くといったところで、二人は視線の先に人の集まりを発見した。

「どうしたんだろ？」

「馬車の車輪が外れたかどうかしただんじゃないか？」

近づいて話を聞いてみると、車輪に問題があるわけではなかった。

運悪く腹を減らした魔物の群に襲われ荷台を引いていた馬たちが死亡、もしくは怪我を負っているのだという。

彼らの中にも魔物を追い払えるくらいの实力がある者はいるのだが、数の差で馬を庇いきれなかったらしい。

「怪我をした馬の治療はしたんですが、荷を引くには数が足らず立ち往生してまして。

人間が荷台を動かすことに参加すれば、大半の荷台は運べるのですが、それでも全部が運べるわけではなく」

「そうでしたか。そういうことなら手伝いましょう。コースケ、お前はそっちの荷台を一人で運べるよな？」

ボルドスは荷物のみの荷台を指差す。

疑問系で聞いているが、内心確信している。

「やってみなきゃわからないけど、たぶん大丈夫じゃないかな」

「いや、無理でしょう！？」 馬一匹じゃ運べず、二匹でようやく動かしていたのですぞ！？」

「一度、やってみますよ」

幸助は屈み荷台の下部を持って引っ張る。幸助とボルドスの思惑通りなんなく動いた。

「大丈夫、余裕。このままの体勢でずっとは辛いけど」

「はああーこれは驚きました！ ずいぶんと力持ちなんですねあ」

驚きと感動を混ぜ合わせた表情で男が言う。

「筋力にはちょっと自信があります」

「ちよっとどころではないでしょう！？」

男はロープで荷台を運びやすいように持ち手を作る。
外れないか引っ張り確認し、自分の力ではびくともしない荷台の重さに、改めて幸助の筋力の高さに感心する。

こうして動けるようになった集団は、ベラッセン目指して出発した。

ボルドスも手伝っており、その荷台を押す人数は少なく、ボルドスの筋力の高さも並ではないと示している。

幸助は荷台を運びながら隣を歩く男と話し、彼らのことを聞いていく。

彼らは軽業から演劇までこなす流れの一座で、一定の周期で国内と隣国を回っているらしい。今月はベラッセンとリッカートで興行をする予定だという。

規模としては中規模、総勢三十五人の一座だ。幸助の隣にいる男が座長のラドルフ。いつか大都市の劇場で演劇を行うことが夢なのだ、キラキラとした目で幸助に語った。

「ほんと助かりました」

ベラッセンに到着し、ラドルフが幸助とボルドスに頭を下げる。
ほかの者たちはテントを建て始めていて、夜に備えている。

「俺たちも帰る途中だったし、気にしなくていい。

たいして疲れてないしな」

「そうそう。歩いて帰ったのと、疲れは同じ」

それらの言葉に嘘はなく、本当に疲れはなかった。

「あれだけのものを運んだんですから、そこは疲れたと言ってほし

いすなあ。私たちに体力がないのかと落ち込んでしまいます」

「俺たちは体力が資本の冒険者だからな」

「私の知っている冒険者でもそこまで無茶苦茶ではなかったですよ？
ここまで運んでもらったお礼に、ご家族恋人友人を連れての来場
をただにさせてもらいますので、ぜひお越しください。」

おまけとして特等席も用意させてもらいます」

楽しみにしていると返答し、二人は街の中に入る。そのままギルドへと向かった。遺跡探索の報告と鍵開けの件をすませるのだ。

「二人とも、お帰りなさい。予定より早かったですね」

ちょうど休憩中のディアネスがギルドに入ってきた二人に声をかける。

「ただいまです」

「ただいま。帰りが早かったのは、山と川を幸助に抱えて飛び越えてもらったからだ」

「ああ、そういえば飛翔魔法も使えたんですっけ。それなら時間短縮できますね」

「次からは転移魔法でさらに時間短縮できますよ。行く機会があれば」

「転移もできるんですか」

ディアネスは少し驚いたような顔となる。

「最近覚ええました。短距離でしかも一人のみの転移だけど」

「ですがリツカートなどへの配達も可能になったんですね」

「知り合いに頼まれてすでにやりましたよ」

「そうですか……さらに便利になったんですねえ」

「便利で」

ディアネスの漏れでた本音に、ボルドスが突っ込んだ。

「実際、転移魔法は便利ですし。使うことのできる人はこの街には一人しかいませんから、使える人が増えるのは嬉しいことなんですよ」

「行ける場所は、リッカートと遺跡とヴァイオレントバルブのいるところくらいですけどね」

「リッカートに行けるのなら大抵の配達依頼はこなせます」

転移を使った依頼は、いままで独占状態だったので新規参入は嫌がられるかと幸助は思ったが、もう一人の使い手は十分お金を貯蓄していて、子供も自立しているのでお金はあまり必要ない。むしろ仕事が減ってくれば、孫の世話がより多くできるので新規参入は歓迎すらしている。

さすがに依頼全部を持っていかれると困ることになるが、幸助も全て掻っ攫う気はないので、敵対関係にはならないだろう。

ディアネスの休憩が終わり、二人は報告のため受付に向かう。そこで手続きを済ませ、報酬ももらう。もらった報酬を手にな幸助は不思議で納得しがたいといった顔をしている。

「……訓練だったのに報酬がでるんだ」

「一応依頼って建前があるし、出たとしてもおかしいことではないと思うぞ。」

もらえるものはもらっておこう、そんな考えでいいんじゃないか？

「うん、そう思うことにするよ」

もらったお金をリュックにしまい幸助は、練習用の鍵のある場所に案内してもらう。

ギルドでの開錠の練習は誰でもできるわけではない。得た技術を悪用しようとする者はいつでもいて、そういった者に技術を渡さないため、条件を満たした者のみが練習用の鍵を利用できるのだ。

条件とは、ギルド職員に一定の認識を得ている者。もう一人の認識を得ている者の推薦。そして技術を得ようとしている者がなにか悪事を働いたときのため、推薦者が責任を負うという証明書にサインをする。この三つの条件が必須となっている。

ボルドスはその書類に、報告ついでにサインしていた。

ボルドスは七種類の鍵を幸助の前に置き、右から開錠が簡単な順に並べていく。

「この七つを開けられるようになれば、大抵の鍵には苦勞しなくなる。

世の中の鍵はこの七つを基本として、派生しているからな。これら以外の鍵は魔法仕掛けだと思ってい。

たまにオリジナルの鍵もあったりするが、もうそのときは罠の有無を確認してぶち壊すしかないんじゃないかと思う。

一度そういった鍵と遭遇して俺はそうした。それがこれだ」

ボルドスは右から四番目の鍵を指差す。

「壊した鍵をわざわざ持って帰ってきたんだ？」

「新しい仕掛けの鍵は壊れていても、ギルドに持っていくと高く買い取ってくれるぞ」

警備上の理由から新しい仕掛けの鍵は、ギルドのみならず商店などに喜ばれる。

ギルドに持ち込んだ場合、ギルドの人間が構造を解析し身近な鍵

職人に作ってもらい、商店などに売りに出す。大店に持ち込んだ場合も似たようなことが行われる。

新しい鍵を手に入れたとしたら冒険者はギルドに持ち込むことを選ぶ。大店に持ち込んだ場合は手に入るのはお金だけだが、ギルドだとお金のほかに評価も上がるのだ。

「一つ一つ実践していくから、まずはよく見とけ」

ボルドスは簡単なものから手に取り、次々と開けていく。一番簡単なものは鉄針を差し込みねじっただけで開き、一番難しいものは三本の鉄針を使い十分以上かけてようやく開く。ここにある鍵では何度も練習したので慣れていくといってもいいのだが、それでも一番難しいものは十分の時間がかかっている。

「……こんな感じだ。」

最初にやるのはこの簡単なやつだ。これは見たように入れて捻るだけでいい。注意するのは鉄針の先を捻る位置だな」

鍵を閉めなおして、ボルドスは鍵と鉄針を幸助に渡す。

「入れて軽く動かせばわかるが、一ヶ所だけ引っかかりがあるはずだ。そこで捻ると開く」

「あ、開いた。こんな簡単に開いて大丈夫？」

「こういった鍵は、蓋が開いて中身がでることを防ぐためにつけられることが多い。防犯としての働きは求められてないな」

こういったふうに助言をしながら鍵開け講習は進んでいく。

そして一時間ほどで一通りの助言は終わった。この一時間で、幸助は四番目までの鍵をスムーズに開けられるようになった。残りの三つも訓練を続けければ、近いうちに開けられるようになるだろう。

「俺が教えられるのはここまでだな。あとは一人でもできるだろう」
「ありがと。」

でも魔法仕掛けの鍵は教えてもらってないけど?」

「魔法仕掛けはなあ、教えようがないんだ」

「どうして?」

「開錠条件ってのがあって、それ以外では今覚えた技術では開かない。鍵穴すらないものがほとんどだしな。」

俺がいままで遭遇したものは火であぶったり、水をぶっかけたり、対になっている鍵を持っていつて開いた。

魔法仕掛けの鍵に関して言えることは、ヒントを見逃すなつてことだな。メモを探したり鍵の状態から推測して試していくしかない。こういう条件があったかは職員に頼めば資料を見せてくれる」

「今度見せてもらうことにする」

二人が練習を終え部屋を出ると、ラドルフが受付にいた。

「ラドルフさん?」

「おおっお二人もこちらにいらしていたんですな」

「はい、用事がありました。」

ラドルフさんはなにか依頼にきたんですか?」

「ええ、会場設営の手伝いを」

「へーじゃあ俺受けようかな」

受付の職員に依頼を受けることを伝える。

「力の強いワタセさんが受けてくれるのは助かるのですが、本当に受けるので?」

「いつも受けてる依頼とたいしてかわらないけど?」

「冒険者といえど、もっと報酬が高くスリルのあるものを選ぶのが

普通だと思うのですが。

こういった依頼はお金がないときや暇なときに受けるものでは？
手持ちがないのならさきほどの報酬を払いますぞ？」

「こいつは危険なのを避けて、雑務系ばかり受けているから珍しいことではないぞ。

だからこいつの能力を把握している人間はいないんだよな」

どこまでできて、どこからか無茶なのか判断できずにギルドの間も少し困っていたりする。

「はあ、そうなんですか。

受けることがおかしなことでないのなら問題はありません、明日はよろしくお願いします」

ラドルフは頭を下げた。

そのラドルフに、ワイアーレをボランティアとして同行することを伝える。

なぜボランティアなのかと不思議がるラドルフに理由を伝えて納得してもらい、幸助とボルドスはギルドを出た。

次の日、幸助はワイアーレを伴って一座のもとへと向かう。

ラドルフたちはすでに作業を始めていて、二人はそれぞれ指示をもらい仕事をこなしていく。

幸助は設営を手伝い、ワイアーレは子守や料理など日常的な仕事を手伝っていく。ワイアーレにそういった仕事がりふられたのは、日常的にやっついそうなことならばミスも少なからうというラドルフの判断だ。

この依頼は幸助以外の冒険者も受けていて、五人ほどが一座の人間に混ざって動いていた。

今回は演劇を行うようで、サーカスのような舞台をぐるりと囲む

設営ではなく、舞台がよく見えるように扇状に会場を作っていく予定のようだ。

真っ先に作られたのは舞台で、出来上がったそこで早速役者たちが練習を始め出す。

旅の間にも練習はしていたようで、セリフは暗記しており、今は舞台上での動きなどを確かめている。それに指示をだしているのはラドルフだ。

幸助は杭を打ちつけながら、練習風景を見ていた。

そのうち昼食準備を手伝っていたウィアールが休憩に呼びにきた。

「休憩ですよ、コースケさん」

「りょーかいっと!」

抱えていた杭を地面に打ちつけて作業を一段落させる。

「昼の献立は?」

「サンドイッチ、屑肉と屑野菜のスープ、果物です」

昼食が置かれているテーブルにはすでに人が集まり、食べ始めている。

二人も混ざって食べていく。そこに演技練習を一時中止した役者たちも混ざる。

幸助に気づいたラドルフが隣にやってきた。

「どうですか、うちの味は」

「ここらへんじゃ食べない味付けですね。これも美味しいですよ」

サンドイッチのほとんどに香辛料が入っていていくつもの辛味が味わえる。

辛味がくどくなってきたら薄味のスープや果物が口直しになる。

「そうですか、よかったよかった」

満足そうに頷いてラドルフも食べ始める。

そのラドルフに幸助は話しかけた。劇の内容がどんなものか知りたくなったのだ。

「ルッベキオの花嫁という本をご存知ですか？」

「あ、知ってます！ 小さい頃に読み聞かせてもらった思い出があります」

ウィアーレは知っているらしく、知らないという顔の幸助に説明する。

「仲の悪い貴族たちの息子と娘が愛し合い、それに関わる両家の話なんですよ」

あらすじを聞いてロミオとジュリエットに似たものなのかと、幸助は流した。

実際はおおまかな流れが似ているだけだ。だがロミオとジュリエットをさほど知らない幸助にとっては、話の違いに興味は惹かれないう。大筋がわかったので満足できたのだった。

「私としてはもっと派手な話もしてみたいんですがね」

「派手というと、話の展開が賑やかなのか、演出が騒がしいのどちらですか？」

「演出の方でしょうか。話の展開のほうも捨てがたいですが」

「例えばどんな話が派手だったりするんです？」

「そうですね……英雄セクラトクスの炎巨人退治とかですか」

「セクラトクス？」

首を傾げる幸助にラドルフとワイアーレは驚いた顔を見せる。

「知らないのですかな？ 有名な人物なのですが」

「いやぁ勉強中なものでして」

「うちに本がありますから、今度持ってきてきましようか？」

ワイアーレの提案に幸助は頷いた。

「内容は題名の通り、セクラトクスが人々を脅かす巨人を退治するといったものですな。」

巨人のもとへ行くまでに困難にも遭い、巨人とも炎や爆音を伴った戦闘を行い、全力を尽くして勝つ。

こんなところです」

「子供、特に男の子が憧れそうな話かな？」

「そうですね。男の子に人気があります。」

オリジナルでそういった派手な話ができないものかと思っているんですが。そうそう思いつくものでもなく」

ラドルフはやれやれと首を振る。諦めの表情はないので、いつかはやりたいと心の底から思っているのだろう。

会話はとりとめのないものに移っていき、休憩は終わる。

午後は皆で、客席となる部分の草抜きと小石集めだ。幸助はラドルフの派手な劇をやりたいという話を思い出しつつ、雑草を抜く手は止めない。

生で見る劇など子供の頃以来だなぁと、懐かしい記憶に浸る。親に連れて行ってもらった遊園地でやっていたヒーローショーが頭に浮かぶ。

そしてふと思った。ヒーローショーをやらせてみるのはどうだろうか。ラドルフ好みの派手な演出でこちらではオリジナルだ。し

かもここには魔法があつて、舞台上でCG効果のような演出ができればのではないかと思いつき、見てみたいという思いが湧いてくる。ライダーキックが炸裂する場面を想像し、我慢できなくなった。

「コースケさん？ 手が止まってますよ」

一緒に草を抜いているワイアーレが話しかける。

「あ、ごめんごめん」

「なんだが楽しげな笑みを浮かべてますけど、雑草抜きが楽しくなってきました？」

「いやいや、ちょっと思いついたことがあってねー」

上機嫌なままの幸助を見てワイアーレは不思議そうに首を傾げている。

結局幸助は仕事の終わりまで上機嫌なままだった。

雑草や小石をのけて綺麗になった地面は、一座の中で一番魔力の高い者が使った魔法で盛り上げられ、扇状の緩やかな斜面となった。この斜面が客席となる。

これで設営は終わりだ。あとの舞台装飾は一座の者たちだけで行う。

冒険者たちは依頼を終えた証明紙をもらい、帰っていく。

特にミスらしいミスをしなかったワイアーレも証明紙をもらえ、思わぬ出来事に嬉しげな顔となっている。

「帰りましょコースケさん」

「ラドルフさんに用事があるから、俺はまだ帰らない」

「じゃあ、私は帰りますね」

「うん、また明日？」

「はいっ」

ウィアーレは一礼して街入り口へと歩き去る。足取りが軽く上機嫌だとよくわかる。仕事ぶりを認めてもらえ、証明紙がもらえたことが嬉しかったのだろう。

ウィアーレが門の中に消えるまで見送ってから、幸助はラドルフに会いに行く。

「おや、ワタセさん？ まだ帰らないのですかな？」

「ちょっと劇について提案がありまして」

「提案ですか」

「派手な劇について心当たりがあるんですよ。聞くだけ聞いてみませんか？」

「ふむ」

急な話にラドルフはなにか裏でもあるのかと考え込む。

「……アイデア料を払えと言われても、うちには大金はありませんぞ？」

「アイデア料……その手があったかあ」

「その言い方ではお金のことを考えてなかったように思われるのだが」

「ですね、ただこの目の見ることができるかもしれないと思って興奮してただけですよ。楽しみだっと思いでいっぱいで、お金とか考える余地がなかったっすね」

軽く笑って言う様子にラドルフは裏がないことを感じ取った。

「……ではこちらへ。テントの中で詳しいことをお聞きしましょう」

書類仕事のために区切られたらしい箇所へと案内され、二人は椅

子に座る。

「ワタセさんの提案する劇とはどのようなものなのですか？」

「俺の住んでいるところでは、ヒーローショーと呼ばれていましたね。」

実在の物語ではなく、虚構のヒーローの話です。

名前は仮面ライダー」

「……聞いたことない話ですな」

「でしょうね」

知っていたら驚きだと心の中で呟く。

「子供向けの話で、世界征服をたくらむ悪の組織とヒーローの戦いがメインです。」

子供にわかりやすくするため、深読みしなくてもストーリーがわかり楽しめるようになってます。

進行時間も一回二十五分ほどだから、飽きて騒ぎだすこともないですよ。

盛り上がる箇所は主人公が変身して戦うところと、必殺技を使うところかと」

「変身？ 獣人とか変化のギフト持ちが主人公なのかね？」

ラドルフが変身と聞いて思い浮かべることができるのはギフト関連のみだ。こちらでは特撮ヒーローのように強化服を着て戦う存在はいない。

「いえ、主人公は悪の組織にさらわれて、怪人……化物に改造されて、洗脳される前にそこから逃げだし、自身の力を平和のために使っているんです」

幸助がラドルフに薦めているのは、昭和ライダーのほうだ。仮面ライダーというものを知ってもらうためには、こちらのほうがわかりやすいだろうと思つての選択だ。

仮面ライダー一号のおおまかな設定を話して、一話の流れを話していく。地球にしかないものは、こちらふうに言い直している。バイクも馬と言い換えようと思つたのだが止めて、通じないとわかつていてもバイクで通した。

話を聞き終えて、ラドルフは演出と構成方面のことを質問し始める。戦闘シーン、爆発シーン、ナレーターによる司会進行など、幸助は覚えていることを思い出し答えていく。幸助自身は演劇について素人なので、演出の話はさっぱりなのだが、ラドルフはさすがプロといったところか、幸助の思い出から自身の聞きたかったことを読み取っていく。

「面白そうですが、まだわからないところがありますな。変身でしたか？ それをやったあとの姿や、バイクといった乗り物がどういったものなのか。

あとは金銭的な問題ですか。子供向けということでは大人の関心を買えず、客の集まりが悪いかもしれません」

「変身後の姿とバイクは紙に書き起こせばいいとして。

客の集まりまでは、どうこうできるアイデアないっすねー。あ、美形を主役や準主役に起用したら、親の関心も集まったという話は聞いたことがありますよ」

「綺麗どころを使うのは一つの集客手段ですからな」

ラドルフは少し考え込み結論を出した。

「……一度やってみるだけやってみましょうか。二十五分程度ならば、いつもやる劇より練習時間も短くてすみますかな。

とりあえず、小道具とかどんなものが必要か教えてくれるかね？」

必須なのはライダーや怪人や戦闘員の衣装だろう。

「これらも絵にしておく必要があるかな。上手く描けるといいけど」

その心配はない。今の幸助ならば、練習すればどんどん上手くなっていく。なにも名画を描く必要があるわけでもなく、ただ脳内の画像を紙に書き起こすだけでいいのだから、難しい行為ではないだろう。

だがそんなことをしなくとも幸助は、もっとわかりやすく伝える方法を持っている。そのことに絵を描き続けて上手くなった頃気づくことになる。

紙は地球ほど安くはないので、お金を無駄にしたことに少しへこんだ。練習により絵を描くコツがつかめたので、まったくの無駄というわけでもなかったりする。

ちなみにこの世界の紙は、羊皮紙でも植物紙でもない。とある液体と海水を混ぜ乾燥させてできていた。

「続きは明日ということでもいいかな？」

「明日のいつ頃ここにくれば？」

「朝昼は私もやることがあるので夕方手前、それくらいならば私はここに戻ってますぞ」

「じゃあそれくらいにくることにします。

今日はこれで」

「はい、お疲れ様でした」

テント前まで幸助を見送り、ラドルフはテント内に戻る。そして先ほどまで話し合ったことを詳細に書き残していく。演劇のためということもあるが、旅を続けた自分がまったく聞いたことない話を貴重な情報として残しているのだ。旅で得た情報も彼らの貴重な

収入源となっている。

次の日、依頼を二つ終わらせワイアーレとわかれた幸助はラドルフに会いに行く。顔を覚えていいる一座の人間にラドルフの居場所を聞いて、昨日と同じくテントにやってきた。

「ラドルフさん入りますよー？」

テント入り口から声をかけ、承諾をもらい入っていく。
挨拶を交わした二人は早速昨日の続きを話し出す。

「衣装の件はどうなりになりましたかな？ 詳細なデザインはまだ無理でも、簡単なものならばできたと思うのですが？」

「できてますよー」

幸助は持ってきたデザインをテーブルの上に出す。

「ほう、これは」

描かれた絵を見て、感嘆の声を漏らした。
思っていたよりも上手い絵だったことに加え、顔のドアップ、全体図の正面と横と背面が描かれている。そこには仮面ライダーだけではなく、ショッカーライダーも描かれている。怪人も蜘蛛男や豹男など四体分描かれていた。ついでとばかりにバイクも描かれている。

昨日の今日でここまでのものを出してくれるとは思っていなかった。

「素晴らしいですな！ これほどのものを提出してもらえとは思ってもいなかった！」

「そう言ってもらえると頑張ったかいがありますね」

幸助は嬉しげに笑う。

「見てもらいたいののは、それだけじゃないんですよ」

そう言って悪戯っぽく笑い、幸助は立ち上がる。

「変っ身っ！」

幸助は仮面ライダーの変身ポーズをとると、一秒の間が空いて、本当に仮面ライダーに変身した。

その様子にラドルフは目を見開いて驚いている。

「デザインとの違いはありますかね？」

その場でくるりと回り、全体を見せる。

ラドルフの顔はデザインと幸助を忙しく行き来している。

少しの違いもなかったようで、無言で首を横に振った。絵では表現しきれていなかった色もわかり、文句はなかった。

「よかった。自分じゃ全身は確認できなかったんですよ」

「ど、どうなって？ 本当に変身ベルトを手に入れたか、作ったのかい！？」

「魔法ですよ。幻をまっとうしているだけです」

幸助が持っていた、もっとわかりやすく伝える方法とはこれだ。絵を描き終わり、とりあえず納得できるものが出来上がった。けれどもそれは白黒だったのだ。もっと詳細なものを伝えられないかと考えていたときに、自分が幻をまっとう魔法を使えることを思い出

したのだ。

姿だけ変わるのだから、メイドも仮面ライダーもたいして違いはない。

早速魔法を使い、一発で再現できた。絵を描いてイメージがしっかりできていたので、失敗するはずもなかった。

「魔法！　そうか魔法か！　

変身ポーズというものをとったから、本当に仮面ライダーになったのかと」

幸助が変身ポーズをとると同時に魔法を使ったことを、ラドルフは見抜けなかったのだ。だから勘違いしてしまった。

「役者さんがこの魔法を使えたら、衣装を作る必要はなさそうなんですけど使えますかね？」

幸助は自分が無茶なことを言っていると気づいていない。

この魔法は触ったときの感触も誤魔化せるもので、一般人が使うには敷居が高いのだ。使うとしたら映像を被せるだけの魔法だろう。

「どうだろうか。念のため衣装も作らせておいたほうがいいだろうとは思う。」

だから小道具係たちにその姿を見せておいてほしい。あとその魔法をうちの魔法担当に教えておいてくれ」

それに頷いて幸助は幻を解く。

このあとで話し合いで、必殺技のライダーキックは飛び蹴りが当たった瞬間、音と閃光をそれぞれ発生させる魔法をタイミングよく使うということで決定した。スタングレネードのように、一度にそういった効果を発揮する魔法は作らないと存在しない。だが別々に

ならあるらしい。蹴られた怪人が爆発するという部分も、煙と音を発生させる魔法で表現するようだ。怪人の使う技も小道具と魔法で表現される。

願っていた演出になりそうな劇に、ラドルフは楽しげな表情を隠そうとしない。なにかからやろうかと笑みを浮かべ考え出す。

その日は、衣装作りのため小道具係たちにデザインと変身姿を見せて終わりとなった。

予定している劇の練習と実演もあるため、ヒーローショーのみに専念はできない。それでもラドルフは合間合間に準備を進めていった。

幸助も仕事の合間にアドバイスして、ヒーローショーはどんどん形になっていく。

一応だが完成となったのは予定していた滞在期間をすぎた頃だ。一座がベラッセンにやってきて二十日が経っていた。劇を終えても立ち去ることのない一座に街の住民は首を傾げていた。

「このまま発表する前に、部外者少人数に見てもらって最後リハールと行きませんか？ 観客にあてがあるんですが」

リハールサルを見た幸助はヒーローショーをよりよくするために提案する。

練習時から見ていて見慣れている自分たちとなにも知らない部外者では、また違った意見が出るのではと思ったのだ。

幸助としては直すところはなく、満足できるものとなっていた。

「自分たちでは気づかない問題点がみつかるかもしれないということですね？」

「……そうですね、やってみましょう」

「では明日の朝、子供たちを連れてきます」

一座の滞在地から出た幸助は、その足で孤児院へと向かう。

そこでウェーイに事情を話して、ウェーイとウィアーレが同行し子供たちを連れて行くことになった。

翌日一座のもとへと連れて行かれた子供たちは、ヒーローシヨールが始まるのをいまかいまかとそわそわした様子を隠さずに待っていた。

劇の内容は、荷物を運ぶ商隊が怪人に襲われ、それを仮面ライダーが助けるといったものだ。

ついに劇が始まり、子供たちは目の前で繰り広げられる演技に集中している。進行中は静かだった子供たちも、はりぼてのバイクに乗って現れたライダーにざわめき、ライダーキックの場面では「おーっ」と声を漏らす。最年少二人は突然の爆発音に怯え、近くにいたウェーイとウィアーレにしがみついた。

リハーサルでこれはいけるのでは、といい感触を感じとっていたラドルフの期待を裏切るかのように、子供たちの反応は絶賛というほどのものでもなかった。

どうしてだろうとラドルフが感想を聞いて判明したことは、事前情報のなさゆえに進行が唐突に感じられたということだった。

ラドルフたちは仮面ライダーの詳細な設定を知っているのに、仮面ライダーの行動の説明がなくとも脳内保管ができる。だが子供たちにはそれができず、いくつかの疑問が湧いてもややも感が残ったのだ。

「事前にある程度の設定を説明しておくか、劇中でわかるように場面を増やすべきだな」

ラドルフの言葉に幸助も頷く。

「ですね。自分たちが知っているから、知らず知らずのうちに省い

てたってことなんだよなあ」

「あとは爆発音をもう少し小さくしないと。楽しむどころか、怯えさせたからな。」

子供たちには礼を言わないと。菓子をお土産にすれば喜んでもらえるだろうか？」

「十分だと思いますよ」

こうして問題点を見直すため二日の調整期間を設け、ヒーローショーは完成に至った。

準備を終えた一座の人々は自信満々で宣伝に乗り出す。

子供向けと知らせていたのだが、せっかくの娯楽だからと大人も会場に集まってくる。入場料が格安ということも足を運ばせた要因の一つかもしれない。

登場人物の紹介から始まり、本番に突入。人々はいままでとは違った感じの劇に戸惑い、変身シーンに期待感を膨らませ、激しいアクションシーンに興奮していき、ライダーのピンチにハラハラとして、ライダーキックに驚きの声を上げた。

人々の評価は、劇が終わり役者たちが舞台上に揃ったときの拍手の大きさでよくわかった。

それによりラドルフはヒーローショーをこの一座の主力の一つにできると確信する。

「ワタセさんにはお世話になりっぱなしでしたなあ」

三日間のヒーローショーを終え、一座はリッターカートへと出発することになった。

ラドルフは新たな演劇を教えてくれた幸助に心底感謝し、頭を下げている。

「自分が見たくて協力したようなものだから、お礼なんて必要ないですよ」

「私としてはいくら感謝してもしたくないくらいですぞ！
今回のシナリオだけではなく、ほかのシナリオとアイデアも教えてもらったのだからなおさらです！」

それらは忘れないようにしっかりと記録され、厳重に保管されている。

幸助としては自身のアイデアとうわけでもないのに、ここまで感謝されると恐縮してしまう。

「ほらっ皆さんが呼んでるから。ここで頭を下げていたら、いつまでたっても出発できませんよ」

ラドルフを一座の人々の方へ押す。

ラドルフはもう一度頭を下げ、仲間のもとへ歩き出す。

「いつかまた会いましょう！」

そう言って振り返り、一座の人たち皆で手を振って去っていった。

一座が去った翌日、広場にいる子供たちが見たものを真似て遊んでいる。

「へんしん！」

変身ポーズをとる子供たちを見て、幸助は自身の子供の頃を思い出す。

友達とあちこちを駆け回って遊び、家に帰って親にその日あった

ことを話し、温かいご飯を食べて、両親に挟まれ寝る。

思い出がきつかけとなり、ノスタルジックな思いにかられていく。破格の力も刺激的な日々も郷愁を薄れさせることはできても、なくすことはできない。

「家族に会いたいなあ」

思わず出た期待半分諦め半分の呟きは誰にも聞かれずに、風に流れていった。

人工ではない天然遺跡へ

「おはようございます、コースケさん」

演劇に関して口を挟むことがなくなり、ぽっかりとあいた時間を依頼でもこなそうと考えた幸助。

そろそろ出かけようかとフロントまできた時にワイアーレが声をかけてきた。

そのことに少し驚きながら挨拶を返す。

「おはよーってなんでここまで来たの？ それに隣にいる人は誰？」

いつもの待ち合わせ場所ではなく、前触れもなく宿に来たことと見知らぬ人の両方に首を傾げている。

「この人は私たちの兄のような人です。」

すでに孤児院を出て独り立ちしているんですけど、たまに寄付やお土産を持って皆の様子を見に来てくれるんです」

「ほうほう、そんな人がなんでここに？もしかしてワイアーレの仕事ぶりを見学しにきたとか？」

「違いますよー、そこまで心配されてはないです」

「ですよ？ と隣を見る。」

「いや、少しは心配する気持ちもあるけどな」

男はワイアーレの言葉を否定した。

「まずははじめまして。コンサットと言います。ワイアーレや孤児

院の皆がお世話になっているようで」

「いえたいしたことはしてませんし」

「いやいや、親父に聞きましたよ。子供たちを助けに危険なところに行ってくれたとか」

「ああいった場面なら誰でも行くでしょ」

二人は褒めて謙遜しを繰り返していく。

「話しが進まないから、それくらいでやめとこうよ」

「ん、そうだな。いい加減本題に入りますか。」

今日ここにきたのは依頼があるからなんですよ」

「依頼？ ギルドを通してじゃなくて？」

「ギルドにも頼んでもますが、信頼できる人が確実に一人はほしくて、そういったことを親父に相談したら、親父とウィアーレがあなたを推薦したのですよ」

「しばらくは一座に行かなくても大丈夫そうだと、昨日言ってたよね？」

だからコン兄さんの依頼を受けてもらいたいなあと思ってるんですけど」

ウィアーレが両手を合わせて幸助を見る。

「たしかに今の時点で劇に関することは伝えてあるから、大丈夫って言ったんだけど。」

時間がかかりすぎるものは受けられませんよ？ ほったらかしというわけにはいかないし」

「拘束期間は十日。うち移動が七日で、作業が三日です。」

依頼内容は護衛。行く場所は遺跡です。

私は学者をしてましてね、遺跡に行って調査するつもりなんですよ」

遺跡という言葉聞いて幸助の脳裏に、またギルド発案の訓練を兼ねた依頼じゃないだろうなと疑惑が浮かぶ。

その疑惑は的外れなものだ。さすがにそこまでギルドの人間も暇ではないし、幸助を優先しない。

「未発見箇所がみつかったら探索しろとか言います？」

「みつかったら言うかもしれないませんが、基本的には護衛のみと考えていいですよ。」

拘束期間を大きく越えるようならば依頼はしません。冒険者たちという枯れた遺跡ですから、みつかることもないと思います」

「それなら受けてもいいかな」
「ありがとう」

コンサットは安心したように笑みを浮かべた。ワイアーレも同じだ。

「出発はいつ？」

「今日の午後から」

「早っ!？」

「急ですみません」

「なにか理由でもあるんですか？」

「早く遺跡に行って調べたいという学者魂が、我々を急かせるんです!」

「……そうですか」

知識欲を優先させた答えに、幸助は脱力する。

「旅の準備したら俺はどこに行けば？」

「正門に馬車がいくつか並んでますから、一目でわかりますよ」

「じゃあ、あとでそこに行きますよ」

「はい。依頼を受けてもらって本当にありがとうございます」

そう言ってコンサットは頭を下げてから宿を出て行く。

「ワイアーレはなんで残ってんの？」

「準備を手伝おうと思って」

「ああ、ありがと。」

「そういやこの依頼にワイアーレはついてくる？」

ワイアーレは首を横に振る。事前にコンサットから話を聞いていて、無理だと判断していた。

「私は残ります。護衛依頼だとなんの役にも立ちませんから。」

「雑用も担当の人がいるみたいですし」

「そっか。」

「この先十日間は孤児院で子供たちの世話？」

「クロサーニさんのところで働かせてもらう予定です」

クロサーニとはワイアーレが懇意にしている画家だ。

幸助に付き合っているいろいろな仕事をしていくうちに、ワイアーレは自分が得意な作業を発見した。

それは色に関する仕事だ。

彼女が色彩に関することでスランプに陥っていたとき、たまたま絵の具の材料を届けるためにきていたワイアーレたちに感想を求め、その答えが彼女の意表をつくものだった。それが縁となり、ワイアーレはクロサーニからたびたび感想を聞かれるようになり、色に関するの才を開かせていったのだ。

今回の仕事は、絵の具の種類を増やすことになるだろう。

準備を整えて、二人は宿を出る。準備といってもまとめていた荷物のちよつとした選別しかしていない。のんびりと話しながらでも十分時間に余裕をもたせて準備は終わった。

そのまま集合場所へとは行かずに、保存食を買い、少し早めの昼食を食べてから街を出る。その途中でウィアーレとはわかれた。

一座に顔を出して、依頼を受けてくることを伝えたあと、コンサツトのもとへと向かう。

「こんにちはー」

馬車の御者席に腰掛け書類を読んでいるコンサツトをみつけ声をかけた。

「おや？　もうきたんですか？」

「もう？　出発午後って言ってたじゃないですか」

あちゃーと手で額を叩いて、コンサツトは頭を下げた。

「これは私の言い方が悪かったですね、すみません。

昼食をとったあとに出発準備を始めるんですよ。だから冒険者さんたちは、そのあとくらいに来てもらえばよかった。

仲間もまだ昼食から帰ってきませんからね。出発まであと一時間以上ありますね」

「一時間かぁ。待つには長いし、街をぶらつくには短いなぁ。

……のんびり待つかな。

ああ、そうだ。コンサツトさんは目的地に行くまでにどんな魔物が出るか知ってます？　知ってるのなら聞いておきたいんですけど」

「ここらとたいして変わりませんよ。

ラッツモンキーとファードックに加えて、ダイブホッパーとニードルブッシュがいる程度」

「後ろの二匹のこと知らないんで教えてもらいたいですけど」
「いいですよ」

ダイブホッパーは、兔くらいの大きさのバツタだ。一匹で動きことは珍しく、たいてい五匹から十匹の集団で行動する。頭部が体の中で一番硬く、高くジャンプして落下の勢いでもってその頭部を叩きつけてくる。

百匹近いダイブホッパーがいっせいに飛び、傭兵集団を壊滅に追いやったことがある。そんな記録が残っている。

ニードルブッシュは、茂みのように擬態する魔物だ。獲物が近くまではじつとしていて、間合いに入ると茅のような体毛を針ネズミのように逆立て突き刺す。

茂みの中に、枯れてもいないのに茶色っぽい草をみつけたらこの魔物が待ちぶせている可能性がある。

これらのほかに、遺跡に行くまでの危険箇所などの地理情報も聞いていく。さらに雇った冒険者たちの簡単な情報も聞いた。

そうしているうちに食事に行っていた者も戻ってきて、出発の準備を始めだした。

「あ、ほかの冒険者さんがきたよ。
自己紹介とかしておいたほうがいいんじゃない？」

一時間の語らいで両者の距離は少し縮まって、丁寧すぎる話し方はしなくなった。

「ん、行ってくる」

荷物を背負い、こちらに歩いてくる冒険者たちへと歩いていく。雇われた冒険者たちは幸助を含めて五人。その五人で、コンサッ

トたち八人を守るのだ。

コンサットの話では、三人組と一人にわけられるようだ。三人組のほうは、男二人と女一人。保護者役の年長者とそろそろ一人前になろうかという組み合わせ。一人で依頼を受けに来た者は十四才の少年で、完全に駆け出し。

「こんにちは。一緒に働くことになった渡瀬幸助といいます」

名前に年長者が反応する。

「ワタセっていうと最近噂になってる奴か。

若いと聞いてはいたが、それでも二十は超えていると思っていたんだが」

「これでもそろそろ十八ですからね？」

また下に見られているのかと先制する。

「そうなのか、もう少し下なのかと」

「何度もそう言われてます」

「童顔だから皆間違うんだろうな」

幸助は特別童顔ではない。日本人としては標準的な容姿だ。欧米人から見ると幼く見えることと似たようなものなのだろう。

「俺はトニー。この二人の子守とかそんな役目だ。

こっちがライルで、そっちがイーリアスだ」

トニーは二人を指差して紹介していく。

それにイーリアスは特別な反応は見せずに頭を下げ、ライルは子守という部分に不満そうな様子を見せつつ頭を下げる。

「んで、もう一人は俺の管轄じゃあないんだが、駆け出しらしいんで一緒にいる間は少し世話することになった。

ホールトンというらしい」

紹介されたホールトンは緊張に身を硬くしながら頭を下げた。

「よろしくお願いします」

幸助は四人に向かって再度頭を下げる。

「ちいと聞きたいんだがいいか？」

「どうぞ」

「仕事の説明のために集められたとき、ワタセはいなかったよな？
どうしてだ？」

「説明っていつあったんです？」

「一昨日だ」

「それなら無理ですよ。俺が雇われたの今日ですから。

今日の朝に知り合いとここの学者さんが一緒に宿にきて、依頼されたんです」

「朝で……よく引き受けたな？ そんな急な仕事」

急すぎる話にトニーだけではなく、ほかの三人も驚き呆れている。

「学者さんが、知り合いの兄みたいな人で断りきれなかったってところですね。

それにほかに依頼を受けているわけでもなかったし」

「そうか。依頼人ももう少し人数がほしかったんだろうな。

俺としても人数が増えるのは歓迎できることだ」

「俺は護衛依頼受けたことないんで、どう動けばいいかわからない

んですけどね」

「そうなのか？　いろいろと依頼をこなしていると聞いたんだが」

聞いているといっても本当か嘘か判断つかない噂混じりのものだ。

「雑用系をいろいろとですね。ほとんど街の中でできるものばかりです。

指示してくればその通りに動きますよ。体力は馬鹿みたいにあるんで、好き勝手指示出してください。

トニーさん護衛経験あるみたいですし。経験者に従ったほうがスムーズにいくでしょ？」

「それは助かる。無茶は言うつもりはないが、好き勝手動かれるのは困りものだしな。

ライルも緊急時には指示に従えよ」

「わかってますよ！」

ふんつと顔を背けながらも返事はする。

仲悪いのかと幸助は小声で聞いて、トニーは首を横に振る。

トニーの話によると、本当はこの依頼はライルとイーリアスだけで受けるものだったらしい。だがほかの仲間が心配し、トニーをフォロー役としてつけたのだ。

ライルはそれが気に入らないのだ。ライル自身としては一人前になったつもりなのに、その自信にけちをつけられた思いだった。

イーリアスも似たような思いは抱いているが、フォローしてくれる人がいることに安心感も持っていた。

「頼れる人がいるのは嬉しいことだと思っただけだなあ」

幸助の感想が聞こえたようで、ライルはキッと幸助を睨む。

「いやだって自分が知らない知識を持つてる人がいたら、すごく助かるっしょ？　ほかには自分にはない技術を持つてる人とか」

「そ、それはそうだけどさ……」

「便利な人がいるラッキーくらいに思えばいいじゃん」

便利な人扱いされたトニーは苦笑を浮かべている。

「護衛なら前にもやったことあるし、俺たちだけで大丈夫なんだよ！」

そう怒鳴ってライルは背を向ける。イーリアスが幸助に頭を下げて、ライルを宥める。

ライルにもやる気がないわけではないので、この件については触れないでおこうということになった。一応プロなのだから足手まといにはならないだろうと判断して。

やがて出発準備が整い、学者の一人が声をかけてくる。

「隊列は馬車を中央に俺とホールトンが前方。ライルとイーリアスが左右。ワタセが後ろでいこうと思う。」

これについて異論はあるか？」

隊列に関してトニーが説明する。誰も異論はなく、口は開かない。

「なにか異変をみかけたら、声をかけてくれ。そのとき大声はなしで。」

ホールトンを聞かせにやるから、どんなことがあったか伝えてくれ。

魔物がこちらを目指してきている場合は大声で知らせてくれればいい」

四人は頷き、それぞれの配置についた。
そして一行は出発する。

一行は順調に進む。魔物との遭遇は想定済みなので、予定外にはならない。

遭遇した魔物はでけると聞いていたものしかでてこなかった。
ダイブホッパーのことを聞いていた幸助とそういったものが出る
と知っていたトニーが、上空も見えていたため落下してくるダイブホ
ッパーにも対処でき、奇襲とはならなかった。

目的地につくまでの戦闘で、それぞれの戦闘力は互いに把握でき
ていた。

もっとも幸助は全力ではなかったが。それでもライルの力量をは
るかに超えることに、ライルは嫉妬するような視線を向けていた。

戦闘でまったく問題なかったのが幸助とトニーだ。この二人は遭
遇した魔物に苦戦することもなく一撃で倒していた。

ライルとイーリアスも自分の得意とする間合いであれば、問題は
ない。

ライルは剣を使った接近戦、イーリアスは弓を使った中距離から
遠距離を得意としている。この二人は以前からよく組んで戦い、互
いのことがわかっているのでフォローもスムーズにできていた。

ホールトンは初めてにしては頑張っていたほうだろう。いろいろ
ともたつてはいたが、皆そんなものだとなっていた。トニーの
アドバイスを受けて、少しずつ成長している。

ホールトンの武器は剣で、トニーは槍と大振りのナイフ、それと
魔法を数種類だ。

トニーは魔力はそう高くないようで、威力のあるものは使ってい
ない。主に牽制や体勢を崩す用として使っていた。

「明日には到着らしいな」

「らしいですね。ここまで特に問題なくてよかったですよ」

「そうだな」

幸助とトニーは二人で見張りをしながら話している。二人以外は皆寝ているため小声だ。

本当ならばホールトンも見張りに立つはずだったが、慣れない護衛で体力的精神的に疲れ、二人の薦めもあって昨日から見張り役を外されている。

「お前さんが強かったのも問題がなかった要因の一つだな。おかげでホールトンのフォローに集中できた。

その若さでそれだけやれるんだ、いずれ世界的に名を馳せることもできそうだ」

「世界的とかは興味ないなあ」

「男ならどかんと一発でかいことやって、有名になりたいもんじゃないか？」

「そう思ってたこともありますけど」

地球にいた頃は漠然と大きなことをやってはみたいと考えたこともある。それは明確なビジョンのない妄想にすぎない。

だがここにきて偶然大きなものを手に入れて、妄想ですまなくなる可能性がでてきた。

そうなると思後れしてしまった。努力して得た力ではないので、後ろめたい思いがある。いまだ自身の力に誇りも持っていない。こういうったものが解消されないかぎり、今のまま平凡な日々を続けるだろう。

幸助はそれに不満もない。

「今のところはのんびりといきますよ」

「落ちついてんなあ。もつとはしゃいでもいいと思うぞ？　ライルみたいな」

「そこんところは個性ってことにしといてくださいな」

「そういうことにしとくか」

「暇なんで魔法を教えてもらえませんか？」

風を起こすやつとか便利そうだって思ったんで」

戦闘の際にトニーは落下してくるダイブホッパーに強風をぶつけて体勢を崩した。それだけでダイブホッパーによる被害は激減した。幸助はそれを見て、ダメージを与えず無力化する術も持ちたいと思っただのだ。

「いいぞ。」

俺もお前さんが使えるものを教えてもらいたいな。なにが使えるんだ？」

「飛翔とか転移とか、貫通光線に守護結界、治癒系も。あとは日常で使える魔法といった感じです」

「もしかして魔力資質も高いのか？」

幸助の挙げた魔法に、トニーは呆れたような顔となっている。

一般人だけではなく、かけだし、三流冒険者では使えないものが混ざっているのだ、呆れもする。

「一般人レベルは超えてるよ」

「そんなだけできるんだから、もっと有名になってもおかしくないのになあ。」

なんで雑務系ばかり受けてんだ？」

「その質問は何度もされてるんだ。」

そのたびに安全第一って返答してる。危険な依頼を受けなくても生活はできるし」

幸助自身最近なんとなくわかってきたことだが、無意識的にも命

の危機に関わるようなことは避けようとする傾向がある。それがなぜだかまではわからないが、従うようにしている。そのほうがいいような気がしているのだ。

「それなら冒険者じゃなくて、なにか一定の職につけばいいんじゃないのか？」

「ベラッセンに定住してるわけじゃないから」

「あちこち移動してるなら職につくわけにはいかないか。」

「いやそれでも商売するなりできそうだがな」

「まあ雑務系依頼を受けるのが一番楽だから。」

「商売っていつてもなにすればいいのか」

「あれだけ実力あれば街の外にでも大丈夫だから、狩りにでも出て肉を肉屋に売るとかできるぞ？」

鳥や鹿とかはありふれて買取拒否される可能性もあるが、希少な例えばユエル鳥とかは高めに売れるはずだ。

俺も金がないときはそうやって金を稼いだもんだ。たまに依頼でもそういったものは出てるぞ。

定期的にいい肉を仕入れられるってのは肉屋としてはいいことだと思うが」

知り合いの肉屋からそういった依頼をされなかったのは、実力があるのと知られていなかったからだろう。強いと知られていれば頼まれていたはずだ。

「なるほど、そんな依頼もあるんだ。街中でできる依頼ばかり見たから気づかなかった」

ほかにも商売にできそうな依頼の話聞きながら、見張りの時間は過ぎていった。

二人の話の一部をライルが聞いていたことに、二人は気づいてい

ない。

翌日の昼過ぎに一行は廃墟に到着する。雑草が地面を覆い、建物はどれも朽ちかけている。人の気配など感じさせない静かなところだ。

ここは百年近く前に放棄された場所だ。放棄した理由は飲み水が理由で病気が広まったからだ。十年前に調査があり、再び住むことは可能だと判断されたが、いまさら廃墟に住もうと思う者はおらず、放置されたままだった。国の騎士団が見回りに来るので、野盗などが隠れ家に使うこともない。誰かいるとすれば、旅人が屋根を求めて一泊するくらいか。

そういった旅人と同じように、一行は廃墟の一つを拠点とする。設営をしながら、幸助とコンサットは話している。

「調査は明日から？」

「このあと現場を見に行くけど、本格的な調査は明日からだね」

「護衛は遺跡の中もする必要がある？」

「そうだね。ここには人はいないけど、魔物は入り込んでいる可能性はあるから来てもらう」

「ここが百年前に廃棄された場所ってのはここにくるまでに聞いたけど、百年前の遺跡ってのは遺跡としては若いほうだね？」

調べてそんなに重要なことがわかんのか？」

「廃棄されて百年だけど、この街自体の歴史は三百年ある。」

だから若い遺跡ってわけじゃないんだ」

「あ、そうか。この街自体の歴史のこと忘れてた」

設営をすませた一行は荷物番を残して廃墟となった神殿に向かう。魔物がいるかもしれないので幸助とライルとイーリアスの三人で学者たちを囲んで移動している。残りの二人は拠点護衛として残っている。

この神殿も手入れはされておらず、古ぼけあちこちが崩れている。大きさは練習として行った神殿より小さい。

「これなら調査はすぐ終わりそうじゃない？」

イーリアスの言葉をコンサットが否定する。

「ここは地下がありまして、そちらが広がっています。ですのですぐ終わるということはないですよ。

その入り口まで案内しましょう」

冒険者たちで囲んだまま一行は地下階段へと向かう。

位置を確認して、そのまま神殿内を歩き回る。学者たちはあちらこちらを指差して話し合っている。それを冒険者たちは聞き流し、護衛のため警戒し続ける。

一通り見回って、一行は拠点へと戻っていった。

次の日から本格的な調査が始まる。

といってもその日は、幸助はホールトンと一緒に拠点護衛で地下には行っていない。

「地下ってどんなだった？」

行く前に注意事項はあるかと、昨日行ったトニーに聞く。

「当たり前だが暗い、気温は低い、風の流れがわかりにくい。こんなところだ。

魔物も入り込んでいるようだったぞ。気配はすれど、姿は見せずって感じだったが。臆病な魔物なんだろうさ」

「警戒していたら問題はなさそう？」

「そうだな。昨日はそれで問題なかった。

俺とコースケがついてる、だから緊張しないでいいんだぞ？」

そう言ってホールトンの肩を叩く。

「は、はひっ！」

ガチガチのホールトンを見て、幸助とトニーは小さく笑った。

地下へと移動した幸助は許可をもらい明りの魔法を広範囲に使う。半径十メートルは外と同じくらいの明るさとなっている。その量の多さに魔力残量は大丈夫なのかとトニーが問う。

「こんなに使って大丈夫なのか？」

「大丈夫ですよ。一割も減ってませんから」

「うらやましいな。俺が同じことしたら三割はなくなるぞ」

「これって魔力消費少ないですよね？」

「コントロールが甘くてな、余計に消費しちまうのよ」

「なるほど。塵も積もればってやつかあ」

「二人とも移動するみたいですよ」

話している二人にホールトンが話しかける。

「あ、すまん」

「教えてくれてありがとう」

「いえ」

トニーとホールトンが先頭へ、幸助は最後尾を歩き、一行は今日の調査箇所へと向かう。

到着したのは大部屋だ。倉庫にでも使われていたのだろう。壊れた品物があちこちに落ちている。

幸助たちの目にはがらくたでも、学者たちには違った。重要な歴

史的資料だ。早速それらに近づき、慎重に手にとっていく。

「俺はここを守っているから、二人は周囲を見回ってきてくれないか？」

魔物が隠れているかもしれないんでな」

「了解」

「わ、わかりました！」

未だ緊張気味のホールトンと一緒に幸助は大部屋を出て廊下を歩いていく。

ほかの部屋の中も調べていく。その際にどれが価値のあるものかわからないので、品物には触らないように気をつける。

そして五つ目の部屋を調べているとき、落とし穴をみつけた幸助はホールトンに場所を教えてその近くに行かないよう指示を出す。

だが重い机に足を引っ掛けたホールトンが転び、穴に落ちてしまった。そして大きな悲鳴が上がる。

「大丈夫!？」

「腕がっ異常に痛いですっ」

痛みを耐えながらの返事なのだろう、力の籠った返答だ。

幸助も穴に下りる。

ホールトンは壁に背を預け、痛むほうの腕の上腕部を押さえて、うっすらと汗を滲ませ耐えている。

「腕に触るよ？」

「はいっ」

痛みを我慢できるように歯をくいしばる。

腕は熱を持ち、腫れあがっている。

すぐにどんな状態かわかった。

「折れてるね。でも大丈夫すぐに治療できるから」
「本当っですかっ!？」

即座に頷く幸助を見て、歪んだままでありつつも安堵の表情を見せた。

幸助はホルンから教えられた知識を総動員し、治療を始める。
骨が曲がってくっつかないよう腕を真っ直ぐ引っ張るため激痛が予想される。歯を食いしばり口内を怪我しないよう布を口に含んでもらう。

「いくよ？」

ホルトンは目をぎゅっと瞑り頷く。

幸助が腕を引っ張った瞬間、ホルトンは大きく呻き声を上げる。
それを聞き、幸助も思わず顔を歪める。空いている手で折れている箇所を触診し、骨折箇所がずれていないことを確認して魔法を使う。

治療を終えて、一つ息を吐いた。

「これで終わり」

「ありが、とう、ございます」

「痛みはもう少し続くと思う。」

念のために今日はこっちの腕は動かさないように。また折れるってことはないだろうけど、痛みがぶり返すことはあるから」

頷くホルトンを抱えて、幸助は飛翔魔法を使い、穴をでる。
見回りを終えた二人はトニーの元に戻る。怪我のことを話して、ホルトンを休ませるため拠点まで送る。

その日はホルトンの怪我以外にこれといった出来事はなく、調査を終えた。

次の日もたいした出来事はなかった。ライルが少しそわそわとしていたくらいだろう。なんだろうと幸助とトニーは首を傾げたが、追求はしなかった。そのつけが翌朝に廻ってきた。幸助たちが朝食を食べ終えても、ライルとホルトンが姿を見せなかったのだ。

「おかしいな？」

「引き上げる準備始めてるのに、どこ行っただんでしょね？　しかも朝食も食べないで」

「イーリアス、二人をどっかで見かけなかったか？」

知らないだろうとは思いつつトニーは問いかける。

「え、その、えーと」

明らかに何か知っているという挙動だ。

ただそこらへんをうろついているだけではこういった挙動はみせないだろう。

なにかあると考えたトニーは詳しいことを聞き出す。

イーリアスも絶対に隠すといった思いではなかったようで、素直に白状した。

「実は昨日の夜から神殿の隠し部屋らしきところに行ってます……」

「は？　隠し部屋ってそんな話聞いてないぞ？」

みつけたのはホルトンだ。落ちた穴にそれらしきものがあると気づいたのだ。

壁に背を寄りかけたとき、勢いよく背中を押し付けたのだが、そのときの反響で壁の向こうに空間があるのではと思ったのだ。

幸助は壁に触れていないので気づけなかった。

「ごめんなさい！ ライルに黙っててくれて頼まれて！でも少し見たらすぐに帰ってくるって言ってたんです！」
「昨日見張りをやりたいって言い出したのはそのためか」

トニーは呆れた表情となり溜息を吐いた。

「あの馬鹿っ勝手な行動とりやがって！」

三人は学者たちに事情を話しに行く。
情報を隠し勝手な行動をとったライルのことを謝りながら、迎えに行く許可を願う。

「仕方ありませんね。どうぞ行ってください」

「ありがとうございます！」

連れ帰ったらライルとホールトンにも謝らせます！ 苦情でも報酬減額でもなんでもしてやってください！」

トニーは何度も頭を下げ、感謝を態度で示した。

「コースケ、一緒に行ってくれるか？」

「いいよ」

「私は？」

「イーリアスはここの護衛だ。一人も護衛が残らないというのは問題がある。それに室内じゃ弓は扱いづらいだろ。

今日まで魔物は襲ってこなかったが、だからといって気を抜くなよ？」

「わかりました」

気合を入れた表情でイーリアスは頷いた。

「じゃ、行ってくる」

「二人を頼みます」

神殿に向かう二人を見送ったあと、イーリアスは拠点すぐ近くの屋根に上り警戒を始める。

幸助の案内で、隠し通路のある落とし穴まで走っていく。

「ここだよ。横穴開いてるね。二人がここにきたのは間違いないみたい」

「俺たちも行こう」

飛び降りて横穴に入る。

通路を進みながら二人は小声で話す。

「いまさっきの穴だが、ありや落とし穴じゃないな」

「そうなん？」

「ああ、罠なんてほかの場所になかったろ？ あそこだけにあるのはおかしい。」

たぶんあれはただ穴を隠していただけだ。時間が経って蓋が古くなったことで、落とし穴に見えるようになったんだろうさ。

この横穴が今までみつからなかったのは、みえみえの罠に引っかかる奴がいなかったからじゃないか？」

「そんなもんなのかな」

あ、矢が落ちてる」

床に一本の矢が落ちている。周囲を探してみると、ほかにも何本かの矢が落ちていた。矢のほかに床の一部がへこんでいるのもみつ

けた。これが罨発動のスイッチだったのだろう。

二人は矢を拾う。

「血がついてる。二人が怪我したっぽいね」

「……乾燥して効力落ちているようだが毒が塗られているな」

トニーが爪で鏃を引っかけて付着した粉を見て言った。

「小さな怪我ならライルがどうかできるが、毒まではどうにもならん。急いで合流したほうがいいな」

幸助は頷いて先を急ぐ。

二人はすぐに足を止める。通路が二手に分かれているのだ。床を見て、足跡で行き先を探る。

「右のほうが目印が多いかな」

「だな、この先が行き止まりかなにかで引き返したんだろ」

「じゃ、左だね」

進む二人の前に一匹の魔物の死体があった。

ミミズを大きくした魔物で、トニー話ではそれほど強くはないらしい。

ミミズは畑にとっていい存在だが、こちらは野菜を食い散らかし人も襲う。害にしかない。地中からの奇襲に注意すれば二人ならば苦戦もしないようだ。

「これがあるってことは、壁に穴でもあいてるのかもしれない」

床や壁の材質は石材で、それを食い破るだけの力はこの魔物にはない。

「ほかの魔物も侵入してきたものばかりだと思う？」

「かもしれんな。配置されていたかもしれん人工の魔物は魔力不足だろうし」

「ほったらかされてたから整備する人いないよねえ」

さらに先に進み、ライルたちが避けた罠をみつけ帰るときに急ぐかもしれないので邪魔にならないよう解除したり、ライルたちが倒せなかったらしい魔物を倒したりしながら先に進む。

ほかにも鍵を開けられずに蹴破った跡をみつけたり、価値のありそうな装飾品を見逃すという失態を知ったりと、ライルたちの未熟さを見ていく。

これらを見てトニーは、ライルはまだまだ半人前だという結論をだしていた。

「さっきのはびっくりしたね」

「びっくりしたってだけで済ませられるほうが驚きなんだが」

笑いながら言った幸助に、トニーは呆れた表情を見せている。

少し前に甲殻丸虫という魔物と戦ったのだが、そいつが丸まって体当たりを仕掛けてきたのだ。ダンゴ虫のような外見からそういった攻撃方法は予想できていた幸助だが、予想以上の速度でぶつかってきたことで、呆氣にとられ避けそこなったのだった。

重装備ではない幸助なので、トニーは重傷かそれに近い状態になったかと心配したが、幸助がなんともない様子で立ち上がったことで、心配したことは無駄になった。

「ん？」

「どうした？ やっぱりどこか悪くしたか？」

疑問の声を漏らした幸助に、トニーは尋ねる。

「音が聞こえた」

「そうか？ 俺には聞こえないが」

「んー……やっぱり聞こえる」

耳を澄ませると、やはり聞き間違いではないとわかる。
重いものが動いているような音を幸助は捉えた。

「どっちからだ？」

「ついてきて」

幸助の先導で走る。罨や魔物は無視だ。五分もするとトニーにも聞こえてきた。

「何かが一定の感覚で動いているな。相当に重いものだぞ」

「大物の魔物がいて、ライルたちを追ってるのかも」

「その可能性はあるな。急ごう」

幸助は頷き、さらに速度を上げる。

もう三分ほど走って、二人はふきぬけの広間の上部に到着した。
階下まで八メートルはある。

眼下ではライルたちが、四メートルほどの石像に追い回されていた。無骨な造りではなく、金剛力士像のようにスマートで美術品ともいえる石像だ。

「動きが悪いな、やはり毒が体中に回ってるのか」

「考察はあと、助けに行こう！」

「まあ、待て。なんの策もなく行って俺たちも追い回される羽目になるのは避けたい」

飛び降りようとする幸助を止める。

「倒せばいいだけじゃない？」

「……軽く言うなよ、無理だろう。俺はそんな自信ないぞ」

「やれそうなんだけどなあ」

「やれるのか？」

「負けるっていう感じはしてない」

幸助の気負いのない返答に、トニーは無謀なのか勇敢なのか判断つけかねていた。迷うトニーの背をライルたちの悲鳴が押した。

「……よし！ 時間稼ぎ頼む。無理に倒そうとしなくていい。

俺がここからロープをたらして、二人をここまで運ぶ。それが終わったら声をかける、それまで頑張ってくれ！」

「飛翔魔法使えるから、助けるだけなら俺一人で十分だよ？」

「……そういや使えるって言ってたっけな。

じゃあ、それでよろしく頼む」

「了解！」

魔法を使った幸助はライルたちのそばまで移動しようと飛び出す。そしてそのまま落ちていった。魔法が効果を発揮しなかったのだ。

「え？」

「は？」

どうしてといった顔で幸助は落ち、飛翔魔法使えるんじゃないかったのかと呆気にとられた顔でトニーは落ちていく幸助を見送った。地面に落ちた音でトニーは正気に戻り、急いで下を見る。

「大丈夫か!？」

「大丈夫、すごいびっくりしたけどね！」

服についたほこりを叩き、元気そうに手を振る幸助に、トニーはほっと胸を撫で下ろした。

「さっきの作戦でよろしく！」

トニーに声をかけて、幸助は返事も聞かずに石像に向かって走る。任されたトニーは、急いで鉄の杭を打ちつけ、それにロープを固定、伝いながら下り、壁に足場となる杭を打ちつけていく。

これでよしと振り向いたトニーは、先ほどより動きのよくなった石像をひきつけている幸助を見てから、ライルたちへと走っていった。

「移動させだしたね。もう少し時間かかるか」

迫りくる巨大な拳や足を避け、幸助はちらりと視線をトニーに向けた。

幸助には余裕がある。石像が特殊な攻撃をせずに、パンチやキックといったありふれた攻撃しかないおかげだ。それらの攻撃も特に速いわけではない。遅くもないのだが、よく見ていれば避けることは簡単なのだ。

「このまま避け続けてもいいけど、これだけ落ち着いてるから自分がどれだけやれるのかの確認もしてみたいな」

ヴァイオレントバルブのときのように余裕がないわけではなく、今後こういった余裕のある状況があるのかわからないので、いい機会だと思った幸助は足を止め石像とぶつかりあうことに決めた。

「まずは力比べだっ！ かかってこい！」

剣を持っていないほうの手を前に出し、頭上から迫りくる巨大な拳を受け止める。

重量差で押され床を滑るが、踏ん張ると止めることができた。押されただけで、怪我はなに一つない。

「体重差はどうしようもないけど余力はあるし、力比べに負けることはそうそうなさそうだ」

押している手から力を抜く。石像の拳はそのまま幸助目掛け下ろされる。それを幸助は下がって避け、目の前にある拳を蹴る。

蹴りの勢いは石像の力以上のように、腕は石像に止められることなく、石像の胴体にぶつかった。その衝撃で、腕と胴体に大きくひびが入る。石像に痛みはないようで、欠片が落ちていく腕を庇うことなく振るう。避けるだけでひびは広がっていき、使い物にならないくなるだろう。

「次は運動性能といきますか！」

素早く石像に接近した幸助は、勢いそのままに飛び上がり、石像の膝を踏み、さらに腕を踏み、肩に着地する。

叩き落とそうとする拳を、頭部と両肩の狭い範囲を移動することで避けていく。

「不安定な足場でもこんだけ動けるっ」と

肩から飛び降り、空中で一回転して着地する。

「体力も問題なし」

言葉通り、息切れ一つしていない。

余裕をもって石像を見上げる幸助目掛けて、ひびだらけの拳が迫る。

それに対して幸助もギュッと拳を握り、巨大な拳へと殴りつけた。大きな拳と小さな拳がぶつかり、一秒も耐えることなく石像の拳は砕けた。

幸助は石片が飛び散る中、再び石像へと接近し、両手で剣を振るう。

脛の上部へと振るわれた剣は、不快な音と火花を散らしながらも、勢いを落とすことなく振りぬかれ、皮一枚残してぶった斬った。

近づいた幸助を攻撃しようと石像が動いたことで、かろうじて繋がっていた足はあっさりとちぎれた。

バランスがとれなくなった石像は倒れ込み、じたばたと動くことしかできていない。

「頭を潰せば止まるかな？」

人間とは構造が違うだろうとは思いつつも、弱点は見抜けないので頭を両断した。

制御する装置かなにかが頭にあったようで、石像はその動きを止める。

後日、学者たちの調査で石像が魔力を吸収して動くということがわかった。幸助たちがいる部屋内で使われた魔法の魔力を吸収するのだ。だから魔法が使えないということが起きたのだった。

この調査結果をコンサットが幸助に報告しようとしたのだが、タイムリング悪く幸助は遠出していた。結局魔法使用不可の理由がわかったのは、何ヶ月も先のことだ。

「あ」

剣を見て幸助は声を上げる。
石像を斬った側の刃がところどころ欠け潰れているのだ。

「また修理ださないと駄目かあ」

またクラレスに怒られるかもと溜息一つ吐いて鞘に納め、三人のところへと歩いて向かう。

ロープを使わず、足場にするための杭を蹴って駆け上がる。

「二人の様子はどうか？」

「あ、ああ。怪我は治療した。」

毒は体力を減らすようなものじゃないくて、体を痺れさせるだけだからほっといてもいい。

そっちはどうなんだ？ 暴れまわっていたが」

「俺は……特に異常ないな」

体各部を触って痛みがないか調べてから答えた。

「規格外にもほどがあるぞ。ヴァイオレントバルブ倒したってのは嘘じゃなかったんだな」

呆れここに極まれるといった表情のトニー。

そんなトニーと違い、ホールトンは怯えた表情となっている。逃げまわることしかできず、ここで死ぬのかもしれないとまで思わせた存在をあつさと倒した幸助が怖くなったのだ。

残ったライルははっきりとした嫉妬を浮かべている。強さが羨ましいのだろう。同年代でここまで力の差があるのだからなおさらだ。この気持ちはトニーにもわかるものだった。自分はどこまでもい

けると信じて疑うことのなかった血氣盛んな若かりし頃、強さを追い求め、自分よりも強かった人たちに嫉妬と羨望の思いを抱いたのだ。

ライルを見ながらトニーは、妥協を覚えたのはいつころだったかと懐かしい気分になっている。

「えっと、なにかの気分に浸ってるところ悪いんだけどさ。」

これからすぐに引き戻すか少し休憩するか、聞きたいんだけど」

ホールトンの視線を痛く感じながら聞く。今まで怯えられたことはなく、少しショックなのだ。ライルの嫉妬の視線のほうがましだ。

「そうだな、休憩だな。俺たちは大丈夫だが、二人は歩くのも辛いだろう」

わかったと頷いて幸助は座り込み、リュックを探る。すぐに目的のものをみつけて、ライルとホールトンに渡す。

「知り合いからもらった解毒剤。体の中の毒に効くかはわからないけど、飲んでみて」

これはホルンからもらったものだ。医術に高い技量と知識を持つホルン製の薬だ、なんの効果もないということはないだろう。

実際に飲んで五分ほどで、ライルたちは痺れが少しずつ引いていくのを実感した。二十分も経てば、ほぼ問題なく動けるようになった。

「二人とも動けるようになったみたいだし帰るか」
「そだね」

よつこらしよつと言って立ち上がるトニーに、年寄りっぽいと言った幸助がボディを殴られる。

「……なんの成果もなく帰れるか！」

「な、なに！？」

突然大声を出し立ち上がったライルに幸助は驚いた。

「あー言いたいことはわかるが、勝手に侵入して荒らしまわってんだ。これ以上のわがままを許す気はないぞ？」

「だけど！」

「ふむ……じゃああの扉の先を見るだけならば許そう」

トニーが指差す先には石像が立っていたと思われる台座があり、その奥に扉がある。

「この譲歩すら認めないのなら、ここで気絶させて連れ帰る。その際に骨の一本でも折れるかもしれんがな」

「……わかった」

ライルは渋々といった感じで頷き動き出す。以前も気絶させられたことはあるので、本当にやるとわかっているのだ。

ロープを伝い下りるトニーたちの横で、幸助は飛び降り軽やかに着地した。

それがまた力の差をみせつけられ、ライルはさらに嫉妬心を募らせる。

この仕事が終わったあとライルは幸助と組むことはなかった。だがこのときの思いはいつまでも残っており、糧として成長していき名を上げていくことになる。

「俺は罨はないと思うが、コースケはどうだ？」

「んー……少し違和感があるような？」

「そうか、念入りに調べてみてくれ。」

ホールトン、コースケの様子をよく見とけ、罨解除の参考になるぞ。ライルもな。ここにくるまでに発動した罨を見たが、あれくらい解除できなきゃ一人前とはいえんぞ」

ライルとホールトンに見られつつ、幸助は罨の探査していく。どんな効果の罨なのかはわからなかったが、とうすれば発動しないかはわかったので、解除には成功した。

扉を開き、罨をトニーに見てもらったところ、煙が噴出するようになっていたようだ。ただの煙ではなく、幻を見せる薬物が吹きかけられる罨だったらしい。

粉を調べていたときにホールトンがくしゃみをして巻き散らかし、ホールトンとライルが粉を吸い込み、効果がわかったのだ。

ライルたちはいい夢を見ていたようで、弛んだ笑みを浮かべていた。

二人が夢を見ている間に、幸助とトニーは部屋の中を調べていく。

「おーい、そろそろ正氣に戻れー？」

調べ終えたトニーが二人の頬を叩いて正氣に戻らせる。

「あれ？ イーリアスは？」

「イーリアスさんはどこに？」

二人してイーリアスとのなにかを見ていたのだろう。

「イーリアスは外で護衛中だ。ここには最初からいなかったろう。お前ら幻を見てたんだよ」

幻と聞いて二人は恥ずかしそうに落ち込んだ。

「まあ、どんな幻見てたか知らんが、すっぱり忘れるこった。
それで部屋の調査を終えたわけなんだが」

この言葉にライルは反応し立ち直る。

「なにかあった!？」

「宝石とか装飾の施された鎧とか昔の硬貨とか」

「すごいですね！ 俺ら金持ちじゃないですか!」

みつかったものを聞いてホールトンも立ち直った。

「いや、みつかったものは国のものだから。俺たちの懐には一切入
ってこないぞ。

ここは国の所有物だからさ。

誰にもみつかったない遺跡なら、みつけた奴が好きに持っていっ
ていいんだがな」

「そう……なんですか?」

ホールトンのテンションが目に見えて下がった。

「ライルさんが宝物みつけたら自分のものにできるとか言ってたん
ですけど」

「いや、そうなんじゃないかなあと」

隠し通路があるらしいと聞いたとき、ライルは場所がわからない
ので、どうにかしてホールトンに案内してもらえないかと考え、そ
れを口実にホールトンを連れ出していたのだ。

「ライルは勉強不足か？　こういったことは以前話した記憶があるんだが」

「ど忘れしてたみたいだ。」

それよりみつかったものを見せてくれよ。見るだけならいいんだろう？」

「こっちだ。」

触るなよ？　物の置き方も学者連中にとっては重要な資料になるかもしれないからな」

案内された先に置かれている宝石などを見て、ライルとホールトンは肩透かしを食らったような顔になる。

思ったよりも宝石などの量が少なかったのだ。

ここにあるものを貨幣に換金すると、だいたい一般人一人が三年ほど遊んで暮らせる額となる。ここにくるまでにあった装飾品なども合わせると二年ほどプラスされる。

「その顔は、おおかた量が少ないんじゃないかって思ってたんだろう？」

「あんな門番がいたのに、これっぽっちじゃわりにあわないさ！」

「そうですよ！　死にかけたのに！」

「俺もそう思ったが、事実これだけだからなあ。」

たぶんこの街を放棄するときにはほとんど持ち出されたんじゃないのか？

ここに残っているのは、重量的に運べないから残されたやつかもしれないな」

「どこかにまた隠し部屋があるんじゃない？」

ホールトンの疑問にトニーは首を横に振る。

「俺が調べたかぎりじゃどこにもなかったな。

コースケも調べてるが、期待はできんだろ」

「うん。なかった」

スタンつと幸助が着地して、トニーに同意する。上の方の壁も調べたが、隠し通路や部屋はなかった。

「調べ終えたのか」

「天井も見てみたけど、なかったね。保管されているのはここにある分だけなんだろうね」

「じゃ、帰るか」

ライルとしてはまだ満足していないが、これ以上わがまま言えば気絶させると言われているので、従うしかない。

ホールトンは宝石などを名残惜しそうにみてはいるが、早く出たという気持ちもあるので素直に従う。

二人にとっては、得るものが少なかった遺跡探索だった。命と経験という二つのとても価値のあるものを手にしていることに気づいてはいない。

一方で幸助は得るものが多かった。自分がどれだけやれるか、これまで積み重ねたものの確認ができたのだ。充足感を感じながら地上へと向かう。

だが幸助は今回のことで自身の弱点については把握できていない。いつかそれが致命的なことになる時がくるのかもしれない。

「戻りましたー」

「おかえり、コースケ」

コンサットが幸助を出迎える。トニーたちは代表者のもとに内部の報告と謝罪のために行っている。

勝手な行動を怒られているが、ライルの暴走のおかげで新発見があったので、報酬が減ることは免れた。

「中の様子はどうだった？」

「ああいった遺跡に入るのは初めてだから、ほかの違いはわからないんだけど」

ボルドスと一緒に入った遺跡はノーカンだ。

「罾とか魔物とか門番とかがいたよ」

「門番？」

「倉庫らしきところを守ってたから門番であってと思う」

「……ただの倉庫なら門番など置かない……だとしたらあの資料の裏づけになるか？」

コンサットがなにかを思い出すかのように考え込んでいる。

「ここ何か特別な場所だった？」

「特別といえば特別かもね。」

ここの神殿がこちら一帯の貴重品を保管する倉庫を持っていた、と書かれた昔の資料があるんだ。

でもそれらしき倉庫はないし、資料のミスと思われるいたんだ」
「でも門番の発見で信憑性がでてきたと」

コンサットは頷いた。

「……もしかして門番も貴重な資料になったり？」

「なるかもね」

「……ごめん。門番壊しちゃった」

「壊した？」

「ライルたちが襲われててさ、助けるために」

「まあ、そういった事情なら仕方ないかな。

門番は今どんな状態？」

覚えているかぎりの状態を伝える。ついでに魔法が使えなかったことも伝えておく。

「魔法が使用できなかったか。興味がそそられるね。

石像のほうは、腕と胸が粉々で頭が真っ二つ……。

ま、まだなんとか調査はできるかな」

コンサットが想像しているのは成人男性より少し大きな石像だ。まさか四メートルの巨人を倒したとは思っていない。

石像の調査に向いたとき、その大きさを知って、幸助のでたらめさに驚くことになる。

ライルたちへの説教が終わり、一行はベラッセンへと帰る。

コンサットたちは所属する組織に報告し、すぐに再出発の準備を始めるのだろう。

コンサットとしてはまた幸助に護衛を頼みたかったが、幸助は劇から手が離せなくなっていたので断った。

かわりに魔物や罠の位置など詳細な情報を渡し、調査が少しでも楽になるようにフォローは入れておいた。

そしてコンサットがベラッセンに戻ってきた頃には、幸助は旅に出ているのだった。

行ってみよう隣の大陸

ラドルフたちが去り二日経ち、街は普段通りの風景となっている。幸助は今日から退治系の依頼も受けようと気合を入れていた。

出かける準備を整えて、シディに挨拶して宿を出る。いつもの待ち合わせ場所でワイアーレと合流し、ギルドへと向かう。

二人で仕事を探しているとき、幸助は背中を軽く叩かれた。誰だろうと振り返るとそこには、

「エリスさん？」

約一ヶ月ぶりに会う、エリスが立っていた。

幸助はなんとなくエリスから感じられる雰囲気が変わっていることに気づく。より立ち位置が近く、親密になっているように感じられる。気のせいかもしれないが。

「迎えにきたぞ」

「向こうでの用事は終わった？」

「いや終わってない。そのことで頼みがあるのじゃよ。」

早速旅支度を整えてくれぬか？ 一緒に行こう」

誘いに反応したのは幸助ではなく、ワイアーレだ。

「コースケさん、旅に出るんですか？」

「そうなるね。もともと決めてたことだし。」

ワイアーレも一緒にくる？ 向こうで観光もするとか行ってたし、しばらく帰ってこれないんじゃないかな。

でしょ？ エリスさん」

「そうじゃな。一週間一ヶ月では帰ってこないな。
ところで一つ聞きたいことがある」

口調にほんのりと緊張感を混ぜて問う。本当にわずかな量の感情だったので、幸助は気づかない。気づいたとしてもどうして緊張などしているのか、わかりはしないのだが。原因は幸助にとって未来に起きることなのだから、わかるはずもない。

「その娘さんとはどんな関係なのかの？」

「私もそちらの方を紹介してもらいたいな」

二人の視線が合わさり、パチリと小さく火花が散ったような音を幸助は聞いた気がした。

「こっちはエリスさん。俺がいろいろ世話になってる人。主に魔法とか知識とか教えてもらってる。」

こっちはウィアーレ。この街に住んで、事情があって一緒に行動してる。あと俺の称号のこと知ってる」

「……話したのかい？」

エリスの雰囲気と表情が真面目なものになる。

幸助は首を横に振る。

「人の称号を知るギフトを持ってるらしいんだ」

「私の称号はなにか言ってごらん」

本当か確かめるためだろう、エリスはウィアーレに問いかける。
エリスは有名で名前は広く知られている。だがここ十年表舞台で目立った動きをしていないので、一般人に顔を知られていない。そこから称号を判断されることはなく、それで称号を当てることで

できれば本物だと認めるつもりだ。

「優れたる魔女」

ウィアーレはギフトを使い、簡単に言い当てる。言葉にしてワテンポ置いて、自身の言葉に驚いた。

「優れたる魔女！？ 一夜千殺じゃないですか！？」

「一夜千殺？ なにそれ？」

初めて聞いた単語に幸助は首を傾げた。地球だと中二病とか言われて、からかわれそうだと内心考えている。

「また懐かしい二つ名出してきたものよのう。誰に聞いた？」

「お父さんが元冒険者で当時の話を聞いたときに。お父さんその場にいたらしくて、今でもよく覚えてると」

「あのときいた冒険者たちの一人か、それなら知っていてもおかしくはないな」

納得した様子のエリスに、幸助が再度尋ねる。

「ああ、すまんの。

一夜千殺というのは私が三十半ばの頃につけられた二つ名でね。

ここから一月ほど歩いたところにある街、そこが魔物の群に襲われるという出来事があったのさ。その魔物の大多数を私が一人で殺したことから、一晩で多くの魔物を殺したって意味を込めて一夜千殺と呼ばれるようになったのじゃよ。

魔物の質自体は高くなかったから、できた芸当じゃな」

そう言うエリスの目は懐かしげに細められている。

「数が多くてその場にいた冒険者たちは弱腰になっていたと聞いてます。

そんな中、街を守るため一人毅然と立ち向かったのがエリシールさんなんです。

この出来事がきっかけとなりエリシールさんは名を広げていくようになったそうです」

「すごいね」

守るために圧倒的な数量の魔物に立ち向かったエリスを、尊敬するように幸助は見る。

エリスはその視線を苦笑を浮かべ受け止めた。

「実はそんなカッコいいものじゃないのさ。

ただ暴れてストレスを発散したかっただけじゃ。街を守るといった感情は欠片もなかった」

「……そうなんですか？」

戸惑いの表情のワイアーレに、エリスは迷うことなく頷く。

「あの頃は荒れていたからのう」

「魔物は不運で、街に住んでいた人は幸運だったってだけなのかな」

「そうじゃな。その解釈であっておるよ」

「……お父さんには話せないなあ」

ウェーイは街を守ったエリスに尊敬の感情を持っているのだ。話を聞いているだけでも、その感情がすぐ伝わっていた。

なのに結果的に守ることになっただけで、成した本人には守る気がなかったという事実がいまさら発覚。これは知らないほうがいいとワイアーレは判断し、幻想を守るため心の奥にしまうことにした。

「なにはともあれ、称号を見るというギフトに偽りはなさそうじゃないの。」

誰にも喋ってくれるなよ?」

「はい! 喋りません。そのことについてはボルドスさんにも念を押されています!」

「なんじゃボルドスに口止めされておったのか」

「軽い脅しつきだね。一度うっかり口にしかけてボルドスに止められたけど」

「大丈夫なのか?」

「おっちょこちよいだからねえ」

他人事のように言っているが、話さないだろうと信じている。ウィアーレとも短いとはいえない付き合いだ。信じるに足ると判断するのに十分だった。

「大丈夫です! 口にしかけたのは一度だけです! それ以降は失敗してません」

「本当にばらしてくれるなよ? めんどくさいことになるからのう。口に出せば苦痛を与える魔法でもかけておこうかの」

ウィアーレは勢いよく後ずさり、首を横に何度も振る。

「今のところは魔法を使うことはないが、この先ばらしかけるようなことがあれば躊躇いなく使うからの?」

肝に銘じておけよ?」

「はい!」

実際は使う気はなく、脅しただけなのだろう。それが十分効果を発揮して満足げに頷いている。

「俺のために嫌な役をありがとう。だから脅すのはそれくらいにして、話を進めよ？」

「脅しとばらすでない。」

じゃが話を進めるのには賛成じゃな。いつまでも立ち話というのもなんだから、コースケのとっている宿に向かうとしよう」

宿に向かう前に幸助は、長期間街を出るので指名を他にまわすようにとギルド職員に告げておく。

宿に戻ると、客かと顔を上げたシディが不思議そうな顔をして聞いてくる。

「いらっしゃ、あれ？ なにか忘れ物？」

「違うけど？ どうしてそう思ったのさ」

「帰ってくるにしては早い時間だからね。じゃあワイアーレの隣にいる人は依頼人というわけじゃないのね」

「この人はボルドスの姉だよ」

「ボルドスさんのお姉さん！？」

姉がいるということすら初耳だったシディは、エリスの突然の来訪に驚く。

「いつもボルドスが世話になっているようだな。礼を言う」

「お客様ですから世話するのは当然です！ こちらこそいつも最前にしてもらい、さらにはお客さんも連れてきてもらうなど世話になってます！」

お姉さんは今日はこちらに宿泊なさいますか？ それなら気合を入れて部屋を用意させてもらいますか」

「いやそれには及ばんよ。今日中に街を出るからの」
「そうですか」

「俺も出るから。たぶん一ヶ月以上こっちは戻ってこないよ」

「あなたも？　ボルドスさんも何日か前に、街を長く留守にするって言ってたのよ」

「ボルドスはカルホードに行ったんじゃない？」

「エリスさん行き先知ってんの？」

「うむ。カルホードのユケ連合国に行ったのさ。あと一ヶ月もすればそこで武闘大会が開かれる。それに参加するつもりなんだと以前言っておったよ」

「なるほどカルホードに行くなら長期留守にするのってのもわかるわ。頑張っている成績残してほしいですね」

「まあ、なるようになるさ。暴走しないかが心配だな。」

コースケ、部屋に案内してくれぬか」

了解と返事をして幸助は自室に向かう。

鍵を開け、エリスとウィアーレを招き入れる。

幸助は椅子に座り、二人はベッドに座る。

「それで頼みがあるってことだけど」

「うむ。私がホルンと一緒にホネシングに行ったことは覚えてるおるかの？」

「うん。医者として呼ばれたんだよね」

エリスは頷く。

それを聞いてウィアーレが驚いたように口を挟んでくる。

「ちょっと待ってください。医者のホルンってコルベス家のホルン様ですか？」

「その通りだが？」

「また有名人！？　コースケさんっ！　どんな交友関係してるんですか！？」

「どんなつて」

「二人の関係は簡単に予想つくと思うがのう。」

こやつは竜殺しで、ホルンは生贄だった。ほら、簡単な繋がりじゃろ」

「……コースケさんはホルン様を助けるために竜に挑んだ？」

白馬の王子様のようなロマン溢れる想像でもしたのか、ウィアーレの目がきらきらと輝いている。

「いやいや竜殺しになったのは偶然。細かい事情は話すつもりはないけど、竜を倒そうと思って倒したわけじゃない。倒したって自覚もないし。」

気絶から覚めたらいつのまにか竜殺しになってた」

「いつのまにかなれるようなものじゃないと思うんですけど」

「証人が目の前にいるよ。そんなこともあるんだって納得しといて」「はあ」

納得できていない顔だが、ウィアーレはそれ以上はなにも言わずに頷いた。ここで渋ってもどうにもならないと気づいたのだ。

「んで話を戻すけど、ホネシングに医者として行って、その続きは？」

「医者として行ったのだから当然治療するわけじゃな。そこでちと問題が起きた。」

診察した結果、ホルンが治療できるものだと言明したわけじゃが、薬となる材料が足りなかったのじゃよ」

「買えないような特別な材料だったってこと？」

金で買えるのならば、大金を持っているエリスが買っていると考えたのだ。

「その通り、話が早いの。」

足りない材料はほかに代えのきくようなものでなくてな。

それがある場所はわかっている。だがそのある場所が問題なのじゃよ」

「どこ？」

「神域じゃ」

「たしか神に関する称号持ちじゃないと入れないってとこだっけ」

「うむ。私たちが行ったところには、神関連の称号持ちはホルンしかいなかった。だが戦闘能力のないホルンを行かせるわけにはいかんからの。」

称号持ちの冒険者を雇おうという話になって、私がちょうどいい人材を知っていると話した。ホルンの保証つきだから、あちらも納得した」

「あー頼みつつのは神域に行けてことか。
別にいいよ」

この軽いともいえる返事にエリスは少し驚いた顔となる。

「えらくあっさり承諾するのう。以前の様子だと渋ると思っておつたよ」

「この街で生活していて、いろいろと経験したからね。少しは荒事にも慣れた」

「過信ではないといいが」

「無理を通して危険に挑む気はないから、過信ではないと思うけど。で、その神域はホネシングにあるの？」

「いやカルホードじゃ。さきほど話題に出たユケ連合国、その近くにある」

「移動は船だよね。長期間の船旅って初めてで少し楽しみだ」

「楽しみにしているところ悪いが、移動は魔法で済みます。」

相手側ができるだけ急いでくれと言っておるでな」

冥族側はできるだけ早く治療してもらいたいのだ。急いでくれと注文をつけてくる気持ちはエリスは理解できた。

「ありゃ、そうなんだ。船旅はまた別の機会かな」

「そうなるのう」

「じゃあ早速旅支度をしないとね。」

あ、それでウィアーレはどうする？」

「私は……行ってみたいですけど旅費が」

「ギルドが出してくれるとか言ってたろ？」

近場ならば遠慮なく申し出るのだが、今回は高い金額となりそうなので、さすがに遠慮する気持ちが生まれている。

「どうしてギルドが旅費を出すという話になっておる？」

よほどのわけがなければ特別扱いはせんと思うが」

エリスも以前はギルドに所属していた身だ。ウィアーレの待遇について、普通ではあり得ないものだとわかる。

わけを話していいものかと幸助はウィアーレを見る。ウィアーレは一瞬なぜ見られたのかわからずキョトンとした表情を見せるも、すぐに思い至ったのか自分で事情を話していく。

「歪みが、なるほどな。それならば納得もいく。そういう理由ならば一緒にいたほうがいいかもしれぬの。」

旅費ならば気にすることはない。冥族から依頼の前金と準備金として金貨八枚もらってきている。そこから出せばよからう」

金貨八枚あれば四人家族が一年働かずに暮らせていける。一般人

にとっても冒険者にとっても大金といえる額だ。

「え？ でも私は依頼を手伝うことはできませんよ？」

「このお金は全額コースケのもの。そのコースケが許可を出せば問題ない」

「それなら半分ワイアーレに渡しておくよ。準備っていつでもお金がかかるようなことは……あ、まあいっか。

うん、半分渡すよ」

金貨四枚という大金を簡単に渡すと言われ、ワイアーレは大きく慌てる。

「一瞬詰まったけど、なにか問題があるんじゃない？」

「気にしなくていいよ」

「そういつでも」

気になるのだろう、ワイアーレは話してほしそうに幸助を見る。

「んーこの前の護衛依頼で剣がぼろぼろになったんだ。それを修理に出すの忘れてた。今は使わないだろうって後回しにしてたんだよ。その修理にお金がかかるかもしれないんだけど、今から出しても間に合わないから、お金は必要ないって思ったのさ。

エリスさん、あとで攻撃用の魔法を教えてもらえる？」

剣の代わりの攻撃手段として、新たな魔法を求める。

「いいぞ」

「できれば殺すんじゃなく、多人数を無力化できるようなものがあればそれを覚えたい」

幸助の注文に、脳内でいくつかの魔法をピックアップしたエリスは再び頷いた。

「俺が魔法教えてもらってる間に、ワイアーレは旅の準備してくるといいよ」

「そうですね。あ、でも私旅に出たことないから、どんなものが必要かわからない」

「ウェーイさんが知ってるんじゃない？ 冒険者だったんだし旅はお手の物だと思う」

それもそうだとワイアーレは納得して、部屋から出るため立ち上がる。

「なにか買うかもしれないから、金貨を渡しておいたほうがいいかもね。」

エリスさん、お願いします」

エリスはポケットから金貨を取り出し、四枚ワイアーレに渡す。手の中の金貨をじっと見て、ワイアーレは口を開く。

「……やっぱりこれはもらえないよ。何もしないのにこんな大金」

実際受け取ってみて、さらに遠慮の思いが大きくなる。

「じゃあ貸すってのは？ 無利子で返済は何年かかってでもいい」

「んー……それなら。金貨四枚借りるね。」

でも今は四枚もいらさないから、三枚は二人のどちらかが持っていて私が持っていると落としてなくしそう」

「ありえそうだ」

納得した幸助は金貨を受け取り、テーブルの上に置く。

ウィアーレは準備のため宿を出て行く。

幸助は荷物をまとめて、旅に必要なものと必要ないものに分けていく。必要ないものはシデイにお金を払って保管してもらうつもりだ。そう多くはないので、預かってもらえるだろう。

「準備は終わったし、魔法を教えて」

「よからう。教えるのは衝撃放出と土石槍と火球破裂というものじや。無力化できるのは衝撃放出じやな。土石槍と火球破裂は手加減できん」

「殺傷力の高いものはちょっと」

「念のためにそういったものも取得しておいたほうがいい。」

お前に行ってもらう場所は危険な魔物も住んでおるでな」

「そういや神域ってどんなところ？」

伝え聞いたり、書物からの知識だと前置きしてエリスは話している。

行くところはコラムージ神域という名前で、何人かの神が関わっている神域。

地形としては特殊なものではない。森があり、草原があり、川があり、山がある。動物が住み、魔物が住む。

住み着く人間はいない。だから自然はそのままの形で存在している。だから貴重な植物や鉱石あり、神域外では絶滅している動物がいる。

広さは端から端まで一般人の足で一週間。

神域に入ることができる人間がいるのに、貴重な植物などがいまだ残っているのは持ち出せる量が決まっているからだ。さらに神に許可をもらわないと持ち出すことすらできない。

「許可？」

「どこの神域にも礼拝堂のような建物がある。そこに行って許可をもらうのじゃよ」

「許可をもらえたってどうやって判断するん？　なにか証明書みたいなものをもらえたり？」

「一言声をかけてもらえららしい。」

あとそこに行くまでに試練が与えられる。試練は個人個人によって違うらしいということじゃ。試練を下す神によっても難易度が変わってくるらしい」

「試練かあ。魔物が襲ってきたり、嵐に見舞われたりするのかな？」

「そういった試練もあったようじゃな。死者が出たという記録はない。大怪我を負い気を失った場合は、治療されて神域の外に放り出されるようだ」

この措置は神が人間を優遇しているのではなく、ただ神域内で死なれるのが迷惑なだけにすぎない。神域は弱肉強食の世界だ。それが当たり前のルールなので、死ぬことで恨みを残すものはいない。だが人間など知性のあるものたちは、無念といった感情を残す。そういった残留思念は神域を汚すのだ。神域をありのままに存続させたい神としては、人間たちを放り出すのは当然の措置だった。

そういった理由だと想像もせず、幸助は死ぬことはないと言って安堵する。

「それを聞いて気が楽になった」

「気負いがなくなるのはいいが、失敗すると一年は神域に入れなくなる。それは覚えておくように。」

無理はせず、最大限の努力をしておくれ」

「わかった」

「では魔法に話を戻すでしょう」

エリスは必要とする詠唱と動作、魔法で起きる現象を一つずつ述

べていく。

衝撃放出は手から衝撃を出す魔法だ。手を薙ぐように動かすことで、衝撃を一定方向から扇状へと分散させることができる。

一番威力が高いのは分散させず、近距離で衝撃を当てること。一般人ならばこれで死ぬ。一番弱いのは衝撃を扇状に放出させ、術者から五メートルほど離れた位置で当てること。この威力は一般成人男性を転がすくらいだ。転がすだけならばトニーから教えてもらった風の魔法があるのだが。

土石槍は、その名の通り土石でできた円錐を地面から生やす魔法だ。本数は一本から三十本、出現数は任意。範囲は術者を中心に半径三メートル。円錐一本の大きさは高さ一メートル、最大幅五十センチだ。

これの類似魔法として氷杭という水場専用の魔法もある。

最後に火球破裂。これは直径一メートル弱の火球を飛ばし、対象にぶつかった瞬間もしくは任意の位置で爆発させ、炎を撒き散らす魔法だ。攻撃だけではなく目くらましにも使える。

ちなみに幸助が保有している魔法で一番威力が高いのは貫通光線だ。真っ直ぐにしか飛ばず当てにくいという難点はあるが、当たれば鉄を難なく貫通するといった威力だ。

「こんなところじゃな。あとは実際に使ってみて慣れていくといい」
「ありがとう」

動作と詠唱の再確認をしたあと、部屋を軽く掃除しつつ雑談で暇を潰し、ウィアーレを待つ。そろそろ昼食時かと考えた頃にウィアーレは大きな旅行カバンを持って部屋に入ってきた。

「お待たせしました」

「ウィアーレもきたことだし、出発する？」

「その前に昼を食べていくでしょう。」

「ここの食堂は使えるのかの？」

「使えるよ」

「では案内してもらおうかの」

三人は部屋を出て、食堂へ向かう。

昼食を済ませて、シディに別れを告げる。シディはお土産よろしくと頼み、三人を宿の入り口まで見送る。

エリスは宿の前で転移魔法の準備を始め、十分経った頃二人に振り返る。

「二人とも近くに寄れ。離れていると一緒に移動できんからな」

そう言ってエリスは片手を二人に差し伸べる。その手に二人が触れたことを確認して、エリスは魔法を使う。

転移魔法での移動が初めてなウィアーレは緊張のためか表情が硬い。

幸助がウィアーレに心配することないと声をかけようとした時、魔法が発動し三人は姿を消した。

シディは三人が消えた位置から空へと視線を動かし、無事を祈ってから宿に戻っていった。

のんびり神域ぶらり旅

魔法で移動した三人が来たところは、神域の東徒歩六時間ほどに位置する街、そのすぐ外だ。

アテリオという名で、神域に入れずとも拝むためにやってくる人が集まってくるほかは、特に目立ったところのない小さめの街だ。ここから北に七日行ったところに武闘大会が開かれる予定の街がある。

宿をとるため三人は街に入る。

幸助は今日中に出発するので、宿をとったのは二人だけだ。

部屋に入り、幸助は神域内の詳しい情報を聞く。

「神域に入ったら、北東の森を目指すのだ。そこに礼拝堂がある。

この方角から神域に入ってすぐにあるのは沼地だ。歩いて渡る場合は、深い箇所もあるから気をつけるように。そしてさらに進むと川がある。その川にも魔物が住んでいる。だが飛べるお主なら問題ないじゃろ。川を越えると森じゃな。

注意する点は魔物でも動物でも殺しすぎないこと。植物と鉱石を採りすぎないこと。といっても襲われても逃げるしかないってことはない、自衛のためならば殺してもいい。遊びで殺すということじゃ」

「そういったことするとどうなる？」

「叩き出されたという実例が残っておるよ」

「気をつける。」

んじゃ最後に採ってくる薬草の特徴を教えて」

「名前はイタルミツク、青白い小さな花を咲かせる草じゃ。葉は楕円形でそれが四枚。根元近くに葉があり、茎が五センチほどじゃな。神域の森ならばどこにでも生えておる。

採るときは根っこも採ってくるんじゃぞ」

「わかった。

そろそろ出発する。持って行かない荷物はここに置かせてもらおうよ？」

「いってらっしゃい」

「怪我しないよう気をつけてね」

二人に見送られて幸助は宿を出る。

街を出てすぐに空を飛び、神域へと向かう。神域の方角の空は黒い雲が出ており、一雨くるかもしれない。夏真つ盛りで雨に濡れても風邪をひく確率は低いだろうが、ずぶぬれになるのは勘弁だと考えつつ飛び続けた。

二時間ほど飛び続けた幸助の眼下に、テントと人の群が見えた。そこが神域への境界線なのだろう。

人々を見下ろしつつ、速度を落とし神域へと入る。神域を拝んでいる人々は頭上に幸助に気づくことなく、神域に祈りを捧げている。速度を落としたのは、衝突する可能性があるかもしれないと思ったのだ。実際はかすかな違和感、シャボン玉に触れるくらいの触感があっただけで、無事に通り抜けることができた。

さらに十分ほど飛んでから着地する。神域に入ってすぐに下りると、祈りを捧げている人々に気づかれ騒ぎになるかもしれないと思ったのだ。それと魔力が必要な場面があるかもしれないので、使い切るわけにはいかないという判断だった。

「細々とした道があるのは助かるな」

道というよりは盛り上がった浅瀬が点々と存在しているだけだが、泥の中を歩くよりはだいぶましだ。

さて出発しようと足の前に出そうとしたとき、

「そこいくお兄さん！」

突然声をかけられた。声は幼く、子供のようだ。

これに幸助はびくつと体を震わせ、声のした方を見る。驚いたのは気配が感じられなかったからだ。いままでの経験で、半径数十メートル以内にいる隠れようとしていない生物の気配ならば察せられるようになっていいる。だが声をかけた者のことはまったく感じ取ることができなかった。沼の中の生き物の気配は感じられていたのだ。

細い木の後ろからびよこんと八才ほどの男の子が姿を現す。濃い緑の髪に、同じ色の半袖シャツ、茶色のハーツパンツを着ている。

「ど、どうしたのかな？　小さい子がいるようなところじゃないと思うんだけど」

「僕はお父さんのかわりに薬草を採りにきたんだ。

ここまでは魔物に会うことなくこれたんだけど、この先この調子で行けるとは思えなくて。そんなときお兄さんが空から降りてきたんだよ。

ねえ、ここに來たってことは礼拝堂に行くんでしょ？　一緒に連れて行ってよ、お願い！」

危険のある場所で子供を見捨てられない程度には人のいい幸助は首を縦に振る。

「そりゃかまわないけど、家族にもっと大きな人はいなかったの？」

子供は首を横に振る。

「称号を持ってるのが、僕とお父さんだけなんだ」

護衛がないのは神域に入ることのできる冒険者がいなかったか

らなのだろう。でなければ子供一人で放り込むわけもない。

「ああ、なるほど。」

俺は幸助。幸助でも兄ちゃんでもお兄さんでも好きに呼ぶといい」

「じゃあお兄さんって呼ぶ。」

僕はリン。よろしくね!」

「よろしく」

自己紹介を終え、二人は歩き出す。

周囲は沼ばかりで森や川はまったく見えない。ときおり沼から飛び出てくる鋭い牙を持った鰻っばいものや木の根のような触手を鞘つきの剣で打ち払い、問題なく進んでいく。

そしてちょっとした問題が起こり、二人は立ち止まる。

「道がないね」

「うん、どうしよう。見えるかぎりじゃどこか浅いかなんてわからないよ」

「抱えて飛ぶかな。それでいい?」

「魔力は大丈夫? ここにきたときも飛んできたみたいだけど」

「大丈夫」

魔法を使ったあと、リンを抱き上げて怖がらないと思われる速度で沼上空を飛んでいく。

空に移動して先を見ても川は見えない。恐らく今日は沼を抜けるだけで終わってしまうだろう。かわりに南に木々が遠く見えている。そこに行くだけでも四時間ほどはかかりそうだ。

「先は長いなあ」

幸助の言葉にリンも頷いた。

十五分ほど飛び、道をみつけた幸助は地面に下りる。

歩き続け、沼の終わりが見え始めた頃、ポツリポツリと水滴が沼に落ち始めた。雨は強くはならないが、霧のような小雨状態で降り続ける。空はどこまでも雲で覆われていて、すぐには晴れそうになかった。

幸助は着ていたジャケットをリンに被せて雨避けにさせている。

「沼は抜けたけど、このまま濡れ続けるのはな。」

リンはお父さんから雨宿りできそうな場所から聞いてない？」

「たしか沼の近くに岩の集まったところがあるって聞いた。日が暮れたらそこで寝なさいって」

「そういや見えてたね。そこに行こうか」
「うん」

二人は岩屋のあった方角を思い出しつつ、歩き始める。

岩屋の中は火をつけた跡や休憩した名残が残っており、何人もの人間が使っていたらしいとわかる。

リンにタオルを渡して、幸助もタオルで素早く体を拭いたあと、誰かが置いていったらしい薪に火をつけて濡れた服を乾かす。

「雨強くなってきたなあ。明日まで続かないといいけど」

雨が地面を叩く音が大きくなり、雨が強くなったことを知る。この雨はさらに強くなり、一晩中降り続けることになる。

「今日はとつとつとご飯食べて寝よう。リンもそれでいい？」
「うん。疲れたし」

疲れたというわりには余裕のある声で返事をする。

保存食と鍋を取り出して、魔法で出した水を鍋に入れ、簡単なス

ープを作っていく。朝食用も作っておこうかと思ったのだが、夜のうちにいたみそうなのでやめておいた。

器が一つしかないの、交代で食べる。リンも保存食を持っていたのだが、食器は持っていなかったのだ。

食べ終えたあとは、水洗いで片付けて、その場に寝転んだ。

幸助がリンを横目で見ると、同じように毛布をまとって寝転び目を閉じていた。そのまま幸助も眠りにつく。トニーたちとの護衛依頼のおかげで、異変にあればいつでも起きれるようになっていた。

一度だけなにかが近づく気配があったほかはなにごともなく夜は明け、警戒はほぼ無駄だった。近寄っていた気配は幸助が視線を向けると去っていったのだ。

朝食を食べて出発し、荒地をただただ歩く。昨日の雨のせいで地面は濡れて水溜りもできていたが、昨日の沼ほど歩みを阻害しない。空には薄く雲が広がっており、日差しが弱いことは助かっていた。昼を過ぎて、四時になるうかという頃に二人は川に到着する。川の幅は八十メートルほど。ざっと見渡しても周囲に橋はない。

「昨日の雨のせいかな」

川は増水していて荒く流れている。

「空を飛んでいけたらいいんだけど、今は危ないしなあ」

薄曇りだった空は再び黒く染まっている。雨は降っていないが、ゴロゴロと雷音が聞こえ、稲光も雲を光らせている。うっかり空を飛ぼうものなら雷にうたれてしまう可能性がある。幸助は雷にうたれても一発くらいは大丈夫そうだが、リンには致命傷となるだろう。かといって川を泳いで渡るという選択肢を選びたくはなかった。この流れの強さだと体にしがみつかせたリンが勢いに負けて流される。泳いで渡る場合は魔物への対処も不可能だろう。

「浅瀬を探して、見つからなかったらここらで一泊するけどそれでいいか？」

「うん」

川から五メートルほど離れて下流へと歩き始める。

ぼんやりと川を見る幸助と違い、リンは興味深そうに川を見ている。激しく流れる水に好奇心が刺激されているのだ。危ないとはわかってはいるが、子供ゆえに好奇心が押さえ切れないのだろう。

「ん？ 川に近づくと危ないよ」

「少しだけ近くで見たい」

「いやでもぬかるみに足を取られるかもしれないし」

「駄目？」

「駄目だね」

この答えにしゅんっと顔を俯かせる。幸助は少し心が痛んだが、人様の子を危ない目にはあわせられないと許しを出すことはしない。そのまま五分ほど歩いて、向こう岸まで石が続いている場所を見つけた。川が穏やかならば十分な足場になるだろう。

「十分注意すれば大丈夫かな？」

リン、手を出して」

言われるままに出されたリンの手を握って、川に近づいていく。沈んでいたリンの表情がキラキラとしたものになる。

幸助の空いている手には剣が握られていて、川から魔物が現れた場合に対処できるよう準備されている。

「渡れるかこれ？」

岩はぎりぎり水面に出ているだけで、ときどき波に埋もれている。このような状態でも、幸助一人ならば大丈夫だろう。だが今はリンもいて抱えて移動するとなると厳しいものがある、と幸助は判断する。

幸助が考えている間、リンは水面を覗こうと屈もうとして失敗している。幸助が手を離さないで、座り込むことができないのだ。それでもなんとか見ようとぎりぎりまで屈んで見ている。そのリン目掛けて青白い蛸足が水中から伸びてきた。

「うわあっ!？」

蛸足はリンの手に巻きついて、リンを水中に引っ張り込もうとする。幸助と触手の両者から引っ張られる痛みにリンは顔をしかめている。

「ちっ」

気配を読み損なったことに対して、舌打ち一つ。すぐに幸助の剣は振られて、触手は斬り離された。

リンの手を引っ張り、川から離れる。

本体が出てくるかと警戒したが、出てくるつもりはないようで、川は荒れた様子のままなんの変化も見せない。

「やめといたほうがいいね」

水中の気配を読みづらい現状で、リンを連れて渡るのは得策ではないと、ここで一泊することに決めた。

リンの腕に巻きついていいる触手を外して、赤くなっている部分を見て幸助は心配のためか顔を歪めた。

「リン、腕大丈夫？」

「うん」

「ほんとに？ 痛くない？」

「うん。大丈夫」

腕を振って痛くないと示す。

「そっか。」

川が落ち着くまで、ここらに滞在するから。荷物下ろそ」

二人は川からさらに離れて乾いた地面に荷物を下ろし座り込む。空の雷雲は日が暮れると、次第に静かになっていき午後八時頃にはなくなっていた。雲もすっかりどこかへと流れて、満点の星空が広がっている。

夕食には保存食のほかに斬り取った蛸足の丸焼きもあったが、リンは食べたくないようで幸助一人だけで食べることとなった。日本的な食べ物で、懐かしくなったのだ。

寄生虫対策のため虫殺しの魔法、毒対策のため解毒の魔法をかけておいた。それも最初の一口は用心して小さく食べてみたのだが、意外と美味しくあつというまに食べ終えた。タレかわさび醤油があればもっと美味しかったのになと思う幸助を、リンが信じられないようなものを見る目で見ていた。

そして翌朝。荒々しかった川は、すっかり穏やかさを取り戻していた。水はまだ濁っているが、足場となる岩はしっかり場所を視認できる。

これならば気配を読み損なうこともないだろうと幸助はリンを抱え、軽い歩調で川を渡っていく。途中で昨日の蛸足が襲ってきたが、今回は対応でき斬り払って進むことができた。

「到着っ」と

リンを下ろして振り返る。最後の機会だと襲い掛かってきた蛸足を振り向きざまに斬り払う。斬り飛ばされた蛸足が水に落ちたことをもったいないと考えつつ、幸助をリンを促して川から離れていく。

「礼拝堂は遠くに見えるあの森の中だっけ？」

集中してかすかに見えた緑を指差す。リンも見えているのか頷き返す。

「そうだよ」

「今日中に森の中には入れない、かな？」

歩きだとリンのペースに合わせるので、どうしてもゆっくりとしたものになるのだ。それを踏まえて予想を立てる。

森が逃げるわけでもなし、と幸助はのんびり歩き出す。

昼になり、二人は昼食のため立ち止まる。二人の周囲はむき出しの地面と草、ところどころ飛び出た岩くらいしかない。空には鳥系の魔物が飛んでいるくらいで、雲一つなく暑い。ときおり吹く風と魔法で出した氷を包んだタオルのおかげで、なんとか暑さをしのぐことはできていた。こんな状況でジャケットは着てられず、腰に巻かれている。

「相変わらずの保存食。森の中に入れば、なにか食材手に入るかなあ」

「あるってお父さん言ってた」

「ほんと？　だとしたら大助かりだ」

さすがに毎食保存食は飽きていたのだ。別のものが食べられそう

だと、ほっと一息つく。

食事を終えて、後片付けをしている二人の頭上から鳥系の鳴き声が聞こえてくる。そしてそれは徐々に大きくなっている。

「魔物か？」

剣を抜いて空を見上げる幸助の目には予想通り鳥の魔物が映った。だがすべて予想通りかというところでもなく、一匹だという予想に反して五匹の魔物が幸助たち目掛けて急降下してきていた。さらに魔物たちはばらばらに飛んでいるわけではなく、一列に並んで隊列を組んでいる。

隊列イーグルという連携で狩りを行う魔物だ。神域に入って時々姿は見ていたが、襲いかかれるのは今回が初めてだ。

「リン！ 俺の後ろに！」

リンを背後の隠して、突風の魔法を使おうと思案する。それは一瞬で却下した。間に合わないそうにないからだ。

幸助は剣を構えて魔物を待ち受ける。

数秒後、幸助と魔物の距離が三メートルにまで近づいたとき、魔物は翼の角度を変え進行方向を変えた。無理な体勢変化に体にかかる負担は少なくないはずだが、そこは魔物としての強靱さがものをいうのか、一切のぶれなく飛行を続ける。

そのまま進めば幸助にぶつかっていた魔物たちの行く先は幸助のリュックだ。

先頭の三匹がリュックに突っ込み、爪を引っ掛けて持ち上げた。残りの二匹は進行方向を変えずに幸助に突っ込んでくる。

背後にいるリンを守るため幸助はその場から動けず、リュックは魔物に持ち上げられ、奪われる。

二匹の魔物から身を守った幸助は、リュックを奪った三匹の魔物

へと振り返り、急いで突風の魔法を使って魔物たちを落とそうとする。

風は魔物たちを大きく揺るがせ、一度はリュックを放させることに成功するも、追い払った二匹の魔物が落ちていくリュックを拾い上げ、結局持ちさらわれてしまった。

「やられた！」

速度と空中での動きの違いから、空を飛んでも追いつけそうにない。

「なんでリュックなんか」

「中に入ってた保存食目当てだったんじゃない」

「あの魔物そんなに鼻がいいのか？」

考えても意味ないか、幸いリュックからなにか落ちたみたいだし、それだけでも回収するかあ」

貴重品は宿に置いてあるとはいえ、旅に必要なものはすべてあのリュックの中だ。これからの行程を考えると溜息の一つも出て当然だろう。

回収できたのは鍋と塩と水筒だけだ。現在の幸助の手持ちはこれらと首にかけていたタオル、衣服と剣のみだ。

リンの持ち物は被害がなかった。

「食べ物が無くなったのが一番痛い。

飽きちゃいたが、なくなってほしいわけじゃなかったのにな」

「僕のわけたげる！」

それに森に行けばなにかあるよ」

「それが救いだなあ」

問題は毒消しの魔法が効果を發揮しない毒物があるかもしれないことだ。

体張って見分けたくはないと思いつつ、テンション低く幸助は出発することにした。

その日の移動で二人は森まであと一時間ほどというところまで歩き、そこで野宿することに決めた。その際に保存食の残りを調べると、節約して明日の昼までといったことがわかり、森での食料採取は絶対となった。

「さて今から森に入るわけだけど。ぱっと見た感じじゃ食べ物はないな」

「ないねー」

「そういやリンは礼拝堂がどこにあるか聞いてる？　俺は森の中としか聞いてないんだけど」

「僕も聞いてない。空から見えるほど大きくはないって言ってた」

「そっか。飛んで探せるかもと考えてたんだけど。」

まあ適当に探すしかないか。行こ」

木の葉が太陽を隠すおかげで、涼しい森の中へと足を踏み入れる。道らしいものではなく、藪の少ない場所を選んで進んでいく。剣で斬り払わないのは、無駄な殺生に当たるかもしれないと思ったからだ。獣の気配察知に気を張り、キノコや果物がなっていないか注意深く見渡しながら進んでいく。そのおかげでリンと話す余裕はなくなっている。今まではただ歩くだけでは暇だろうと、話をしたり、歌を歌ったりしていたのだ。リンも食べ物が必要とわかっているので、幸助に相手をねだったりはせず食べ物を探しながら歩いている。キノコなどは簡単にみつかったりいく。食べられるか食べられないかの判断はできないが。けれども兎などの獣は見つけられないでいた。幸助は気配を探ることはできる。だがそれは気配を隠す気のない存在の気配で、ここにいる獣たちは幸助の気配を察知して隠れて

いる。隠れられると探ることが難しく、今の幸助ではみつけることができない。

結局今日の食事は、リンが食べられると知っていたキノコと木の実だけとなった。食べ物があるだけましだが、味気なかった。

次の日も移動と採取を同時にこなしていく。学習能力の高さと満足できる食事をとりたいたいという願望のおかげで、その日のうちに隠れている動物の気配を捉えることができるようになった。

さらに次の日にはどんな場所に隠れているかも学習して、木の実とキノコだけの食事から解放された。

捕らえ方は罠の作り方を知らないのですが、気配のある場所に土石槍を使った。正確な位置はわからずとも、何度も気配のある場所に魔法を使っていればいつかは仕留めることができるものだ。

「食った食った」

お腹をさすり、肉のついていない骨を茂みへと投げる。

塩味だけとはいえ、菜食だけよりははるかにましで幸助は満足げな表情となっている。

捕まえた野ウサギを全部食べることはできず、余った肉は砕いた氷と一緒によく洗った大きな葉で包み保存する。

「ん？」

少し休憩してさて出発といった時、幸助は気配を隠し近づいてくる複数の気配を捉える。

魔物かと考え、結界の魔法を使いリンにそこから動かないように指示しておく。

捕まえた動物の血の匂いにつられてきたのだろうか、と幸助は心の中で考える。魔物や獣を集めないため、血抜きと解体した場所からは離れていたのだが。

一分ほど経ち、茂みが揺れそこから魔物が四匹現れる。さらに二匹は木に登り隠れたままだ。全身灰色の豹のような魔物で、金色に近い黄の目で幸助を睨んでいる。

幸助は剣を振り、威嚇する。周囲は木に囲まれていて動きやすいとはいえない。戦わないにこしたことはないのだ。ここにくるまでに遭った魔物は威嚇で去っていたものもいたのだが、豹たちは去る気がないのでその場から動かない。

「なら先手必勝！」

見えずの打ち手！」

覚えたばかりの魔法を使う。薙いだ手から衝撃が飛ぶ。距離が開いていたため豹たちは、わずかなダメージのみを受け後ろへと飛ばされた。

この攻撃を合図として豹たちが動き出す。四匹がいっせいに幸助へと飛び掛る。

幸助は近くの木を盾として二匹の突進をやり過ごし、一匹の攻撃を避け、もう片方へと剣を突き出す。豹の肩に刺さり、引き抜かれた剣には血がついていなかった。それを頭の片隅で疑問に思いつつ、戦いに集中する。

リンから離れすぎないように幸助は動き回り、豹たちと戦っている。一匹倒した時点で豹たちが通常の魔物とは違うとわかっていた。胴を真つ二つにしたのだが、豹の死体はその場に残らず消えてなくなったのだ。

さらに一匹殺して死体が消えることが見間違いでないことが確定した。

戦いは一方的なものだった。豹たちの攻撃は見切られて当たらず、幸助の斬撃や殴り蹴りといった攻撃は当たることが当然のごとく当たっていった。

「どうなってんのやら」

消えることに疑問を抱きつつ振られた剣は、頭上から襲い掛かってきた最後の一匹を叩き斬った。そしてその一匹も空気に溶けるように消えていった。

時間にして二十分の戦闘だった。リンを守っている結界の効果が三十分なので、のんびり戦うわけにはいかなかったのだ。

周囲の気配を探り、ほかになにか潜んでいないか調べ、問題なしと判断して剣を鞘に納める。

幸助はこの戦闘でかすり傷一つ負うことがなかった。身体能力に精神的なものが追いついてきたからこそその成果だ。四ヶ月ほど前でも無傷で勝ちましたろうが、時間はさらにかかっただろうし、体に触れられることもあっただろう。

「本当になんだったんだろうな。」

もしかして門番とかそんな存在だった？ 礼拝堂に近づくものがあったから迎撃にでた？」

この予想は外れているが、これが正しいかなと勘違いしつつ結論とした。この疑問は、のちのち暇潰しのダンジョンの話を聞いたときにはれることになる。

リンと合流し、荷物を持って出発する。今日中にみつかるだろうという内心確信していた幸助の予想は外れ、礼拝堂がみつかったのは次の日の昼過ぎだ。

「ほんとにちっさいな」

二人の目の前にはコンベニの半分にも満たない狭い建物がある。象牙色のレンガ造りで、常日頃手入れされているかのように建物も周囲も綺麗なものだ。

無人かと思いきや、幸助は気配を感じ取っていた。その気配が玄関に近づき、扉を開く。

「いらっしゃい。待ってたよ」

出てきたのは二十歳過ぎの男。容姿に特別なところはない。茶色の髪に紺色の目で、十人に聞けば六人はかっこいいかもと判断する。ただし存在感はそこらの人間を圧倒する。カリスマというのか、千人の群衆に混ぜてもどこににいるかはつきりとわかるだろう、そんな存在感を持っている。

幸助は気圧されて口も開けない。

「そんなところで立って話すのもなんだ、中に入れよ。茶ぐらいだすぞ」

そう言って男は中へと戻っていく。動けない幸助の隣にいるリンは何も問題ないように歩き、建物に入っていく。

二人の姿が見えなくなりようやく動けるようになった幸助は慌てて中に入る。

男とリンは椅子に座り、幸助を待っていた。部屋の奥には等身大の石像がある。

「いつまでも中に入らないでなにしてたんだ？」

「い、いや動けなくて」

「動けない？ ああそうか、力を抑えてなかったな悪い。これでいいか？」

男から発せられていた圧力が減り、楽になる。

「落ち着いたみたいだな、こっちにきて座るといい」

手招きされ幸助は、ティーカップの置かれている箇所の椅子に座る。

幸助がお茶を飲む様子を見ながら男は口を開く。

「ここに来た目的である薬草採取だが、好きにするといい。

イタルミツクはこの回りの藪に生えてる」

「はあ……ってなんで薬草の名前まで知ってんの！？ リンに聞いたにしても薬草の名前教えてないよ！？」

「見てたからな」

「見てた？」

「おう。俺のほかにもミタラムとかルーマナアとかセミンルーズとかも見てたな」

「ミタラム？ 聞き覚えが……」

なにかを思い出すように考え込み、思い至る。身分証明カードに載っている神の名だと。

「神の名？ ということはもしかしてあんたも神様ってやつ？」

まさかねと思いつつ聞く。神が簡単に姿を見せるわけはないと思っているのだ。

「正解だ。娯楽を司る神コーホックだ」

指差し敬意を払っていないことを気にせず、あっさりと頷いた。あまりに当たり前のように頷いてそこにいるので、幸助は驚けがいいのか動揺していいのか敬意を払えばいいのかわからなくなり、結局そのどれもできずにいる。

「いるとは聞いてたけど、実物を見ることになろうとは」

「俺たちもほいほい姿見せるわけじゃないんだけどな」

「……じゃあなんでここに？ なにか用事があった？」

「一度お前さんと会ってみたかっただけだな。」

ミタラムたちも来たかったみたいだが、ここにこれるのは一人だけ。ゲームで勝負して、勝った奴がここにこれるようになった。んで俺が勝ったわけだ」

「なんで俺に会いたいのか、さっぱりだ」

「まあ暇潰しと考えるといいさ。お前さんを見てたのも暇潰しだからな。」

初めはミタラム一人で、次第に人数が多くなり、そして減っていった俺を含めた七人が今も見ている。

暇潰しという言葉に嘘はなく、幸助を利用しようという思惑は今のところ少ししかない。

見学人数が減ったのは幸助が派手な行動を起こさなかったからだ。異世界からの侵入者などというものだから、どんなことをするのかと期待に胸を膨らませていたら、していることはそこの人間と変わらないことで、神たちの多くは興味を失ったのだ。

《称号変化。ミタラム様が見ているから神々の暇潰しへ》

コーホックの言葉のあとに、脳内でアナウンスのように称号の変化が知らされた。

幸助がカードを取り出し見てみると、確かに称号が変わっていた。以前の称号と同じく、これも特殊な効果はないらしい。

「お前がもっと派手に動けば、面白いものが見られると思うんだけどな」

「派手に動けって言われても、見知らぬ場所に放り出されて慣れる

ことを優先してたから、そんな余裕は」

「じゃあ今後に期待だな。ここにきた頃とは変わってるし、これからどう変わるのかも楽しみだ」

「変わった？」

「思い出してみろ。初めて魔物と戦ったとき躊躇いがあったのに、森で魔物と戦ったときは躊躇いなんかなかったろう」

「それは、たしかに」

幸助はごく自然に魔物を斬り捨てていた。そこに罪悪感などなかった。改めて指摘されて自身が変わっていることを自覚する。こんなに命を粗末に扱うようになっていたのかと気分が落ちこんだ。

こちらの世界ではそれが当たり前で、地球……いや日本とは命の価値が違うだけだ。そういった意味では幸助がこちらに馴染んできたといえるのだ。

魔物にまで命の尊さを感じるのは、モラルが高いどころではなく変人と見られる。

意識を変え、馴染んでしまえば楽になる。精神的負担も減る。だがそれはまだ難しい。過ぎた時間は地球のほうが圧倒的に多い。長時間かけて育んだ価値観を、短時間で簡単に変えられはしないのだ。

こういった思いをコーホックは推測できているが、特に口出しはしない。それらも含めてどのように変わっていくか見ていくつもりだ。

「……好きに見てるといいさ。期待には沿えないだろうけど」

「そんなことないさ。帰ったらワイアーレ関連でハプニングあるぜ？ ミタラムが言ってるから絶対だ。それをどうやって解決に導くのか楽しみだ」

未来を知ることができ偶然を操作可能な神の言葉だ。外れる確率

は低いだろう。

「……これも一種の啓示なのか？」

首を傾げる幸助を無視してコーホックは立ち上がる。

「発破もかけたし、用事も終わったし帰るかな」

「コーホック様」

静かだったリンが声をかける。

「ああ、お前もお疲れ様」

「はい」

「お疲れ様？　どういうこと？」

「こいつはお前さんの足かせ用に生み出された即席精霊だ。ここまでできたからもう役割は終えたんだよ」

そう言ってコーホックはリンの頭にぽんと手をのせた。

精霊という言葉に幸助は驚きはしない。ただの子供ではないと薄々予想はしていたからだ。

「子供にしてはおかしいとは思ってたけど精霊？　しかも足かせつて」

一緒に行動していた間あまり疲れを見せずにいたこと、子供にしては落ち着いたところを見せていたことから、疑問を抱いていたのだ。

大人でも小さく見えるそういった種族の亜人なのかと思っていたのだが、精霊とは予想もしていなかった。

「ここにくるまでに試練が課せられることは聞いているだろ。

お前さん用の試練はどういったものか考えて、役に立たない同行者をつけることにしたんだ。

実際、行動は制限されたる」

「たしかに」

幸助はここにくるまでのこと思い返し、一人ならばもっと楽だったことを認める。

「まあ、足手まといがいてもそれほど苦労はしてなかったみたいだが。

もっと厳しくいけばよかったと思ってる。森で襲わせた魔物もそれほど苦戦するものじゃなかったしな」

「苦労しなかったわけじゃ」

こうは言うが幸助も大変だったとは言い切れないでいる。唯一苦にしたのが食料のこと。

「そうか？ 同行者を気遣いつつ歌まで歌う余裕のある奴は今までいなかったんだが」

普通はここにくるまでに疲れ、歌う体力も惜しむものだ。沼で出てきた魔物も川で出てきた魔物も、幸助には雑魚だったが決して弱いものではないのだ。豹の魔物にいたっては三流冒険者では負けて当然、一流どころも一対六では苦戦する。

「そうなんだ。

それはいいとして、リンの役割は終わったって言ってたけど、リンはこれからどうなる？」

「消えるな。お前さんの旅に同行するためだけに生まれた存在だから」

らな」

「消えるって死ぬってこと!？」

「ま、そういうことだな」

「リンはそれでいいの？ 俺なんかに同行するためだけに生まれて、それが終わったからって死ぬのは」

「僕はそれだけのために生まれたんだから、終わったら消えるのは当然だよ？」

リン本人としては当たり前のことだ。逆に幸助が戸惑っていることに疑問を感じている。

「それは寂しいと思うんだ……そうだ！ これからも一緒に行かない？ 川の流れをみるだけでもあんなに楽しげだった。外にはもっと別の風景が広がってるよ」

「誘いは嬉しいけど、あと三日もすれば寿命だから」

リンは役割を果たせたことで満足した様子すら見せて、寿命が尽きると言葉にした。

もっと寿命があると思っていた幸助は、リンの寿命の短さに自身の誘いがなにも知らないが故の傲慢なものに思われた。

リンの顔を見ると、幸助は自身がわがままを言っているだけだと理解させられ、それ以上にも言えなくなる。

「リン、お前はコースケの力になりたいか？」

「力ですか？」

唐突なコーホックの問いにリンは少し考え頷いた。

「ここに来るまでやここでも気遣ってくれたことは嬉しかったし、歌を歌ったりして楽しませてもらったことは感謝してます」

「よし。じゃあお前は幸助のジャケットに宿れ」

幸助とコーホックに得のある提案をする。

幸助の得はリンがこのまま死なずに済むこと。防御力が上がること。

コーホックの得は将来強い力の部下ができること。ジャケットに宿ったリンは深く眠りにつき、幸助の力をほんの少しずつ取り込み、長時間かけて現在の体を作り変え成長していく。目覚めたときには竜の力を宿した精霊が誕生する。

現状で部下が不足しているわけではないが、竜の力を宿した精霊など珍しく面白そうだと思ったのだった。

「宿ってどうなる？」

「一時的に意識がなくなるが、力が残る。ようはそのジャケットが強化される。

なにか餞別をやるうと思ってたから、ちょうどよかった」

この餞別はセミンルーズから提案されたことだ。セミンルーズは音楽を司る神だ。幸助が神域内で歌った歌は、日本で作られたもの。当然異世界の存在であるセミンルーズは知らない。新たな歌が聴けたことを喜び、なにか礼をしたくなり餞別のことをコーホックに頼んだのだった。

「一時的に意識がなくなるってことは、いつかリンが復活するってこと？」

「最低でも三十年以上はかかるがな。

コースケお前のジャケットを渡せ」

渡されたジャケットを左手に、右手はリンの頭にのせる。

「またね」

リンがそう言って手を振ると、リンの姿は消え、ジャケットがほのかに光る。

「ほれ」

返されたジャケットは袖の部分に翼のような銀線の模様が描かれていた。

「素材と今までの耐斬耐刺耐燃が強化されたほかに、魔法にも耐性持つようになってる。

さらにもう一つ、鳥になるように念じてみる」

言われたとおりに念じてみると、ジャケットが変形していき灰色の体毛と朱色の目を持つ鷹へと変わる。

鷹は幸助を見て、ちょこんと首を傾げる。このとき幸助は自身の視点と鷹の視点の両方で見ていた。

「その鷹はお前の命令を聞くようになっている。あと鷹が見ているものはお前にも見える。左目が鷹の視点だ」

視点共有は幸助とリンに繋がりができたため起きたことだ。この繋がりから幸助が見聞きしたものをリンは寝ながらに見ることになる。生まれたばかりで神域の外を知らないリンにとっては、これから珍しいものばかりを見ることになるだろう。

「世界に一つしかない魔法道具だ。名前をつけたらどうだ？」

「……リンヨウ……」

考え込んだ幸助は三分ほどして口を開いた。

漢字に直すと隣鷹。リンが鷹となっていていつも隣にいるということを意味していた。

「用件はこれで終わったな。

あとは、そうだ。なくした荷物は部屋の隅に置いてあるからな。

じゃ、俺は帰る」

幸助がなにも言わないうちにコーホックは姿を消した。気配はどこにもなく、部屋の中には幸助一人だ。

荷物がここにあるのは、隊列イーグルがコーホックによって生み出された魔物だったからだ。同じように豹型の魔物もコーホックによって生み出された魔物だった。殺したとき血が流れなかったのはこういう理由があった。

もともとから神域にいて幸助に襲い掛かったのは、沼や水中といった自身に有利な場にいた魔物だけだ。それ以外の魔物は力量差から隠れることを選んでいった。

鷹を一撫でして、荷物の中身を確認した幸助はイタルミックを三本回収し、鷹とともに空を飛んで神域をでる。神域に入って礼拝堂まで約六日かけた道のりを丸一日で踏破。

「ただ出るだけで行きより簡単とはいえ一日。魔法の便利さがよくわかるね」

話しかけられた隣を飛ぶ鷹は首を傾げるのみだ。

野宿で夜を過ごした幸助は、次の日の昼前にアテリオへと戻ってきた。

幸助からイタルミックを受け取ったエリスは、すぐにホネシングへと向かう。

残った幸助とウィアーレは武闘大会見物のため、北にある街レゾ

ティックマークに馬車で移動する。エリスともそこで合流することになっている。

そして出発して五日後、二人は大会のため人が集まり賑やかなレゾティックマークに到着した。

遠くでのひみつのおはなし

幸助からイタルミツクを受け取ったエリスは、二度の転移を経てホネシングにある冥族の王都ヴェサミカへと戻ってきた。さきほどまでいたアテリオに比べると少し肌寒さを感じるほどに涼しい。それはここが一年の三分の二の期間雪に覆われる寒冷地だから。

こんな住みにくそうな場所を国としているのは、生命活動を停止もしくは最低限以下の活動をしている体を長期維持するのにちょうどいいから。魔力で維持はできるのだが、相乗効果で楽に維持できるようになるのだ。

この王都を中心に公爵家が治める三都市が三方にあり、さらに外へ外へと侯爵伯爵子爵男爵がそれぞれ治める街が広がっている。

冥族の国はここ一つだ。それは冥族の人口が少ないので、一国で事足りるから。

この世界の知的生物の総人口が四十億、そのうち一億が冥族。一国としては大きいといえるのだが、種族としてみた場合小さな集団、それが冥族だ。

その一億もハーフといった冥族の血を引くものが九割以上を閉めており、純粋な冥族つまり変化の儀式で冥族へと成ったものは一万ほどこいらない。

さらに二親に冥族を持つ者、純血の冥族は一人のみだ。

その一人が現在の王で、エリスが今から会いに行く人物だ。

王に会う手続きに二日の時間をかけ、エリスはようやく王宮に入ることができた。エリスが戻ってくると事前にわかっていてこの日数だが、それでも先日ホルンと一緒にきたときよりも短い。先日は招待状を持っていて五日の時間がかかった。

こういった手続きに時間をかけるのが冥族の特徴の一つだ。無駄を省けばかなりの時間短縮が可能なのだが、これが当たり前になっ

ており変える気はなく、変えようとすれば多くの者が反対の意を示すだろう。

「魔女エリシール殿、入室」

謁見室前に立つ衛兵の声が響いた五秒後、魔法を使う者としての正装に着替えたエリスは謁見室に右足を踏み入れる。そのまま歩き、玉座の五メートル手前まで進んで止まり、片膝をつく。入り口からここまでエリスは王の顔を見ないようにしている。

この五秒と右足から踏み出すといったものなどは謁見室に入る作法の一つだ。ほかにも入室後王から名前を呼ばれた十秒後まで王の顔を見てはいけないなど、細かなしきりがある。

こういった細かすぎなしきりや手続きに時間をかけることは、無意味に存在するのではなく、それなりの理由があった。

それは簡単に言うとはアンデッドとの区別だ。冥族はアンデッドとは違うということを示すため、こういうめんどくさい行いをしている。大昔、人々は冥族とアンデッドの区別がつかなかった。そのときにしつこく間違われた冥族がアンデッドはこんなことできないだろうと、細かなしきりを作り上げたのだ。それが長きに渡り続いて、今なお存在するのだ。

むきになって続けていたら、いつのまにか当たり前のことになったのだった。

「顔を上げよ」

「はっ」

返事のあと十秒後、エリスは顔を上げる。話し方はいつものものではなく、こういった場に相応しいものとしていた。

エリスは五メートル先にある玉座を見る。そこにいるのは十二才になったかならないかくらいの白髪と赤い目を持つ少女だ。この少

女が冥族一億の頂点、現代の王エネーシア・ロディア・ヴェサミカ・ホネシングだ。

見た目は幼いが、優に百を超える年数生きていることをエリスは知っている。

証拠に顔立ちは可愛らしくとも、まとう雰囲気は少女のものではない。笑みを浮かべた表情と違い、目の奥には自信と読みきれない感情が潜んでいる。

声音は耳に心地よい音なれど、そこに含まれるものは長年生きた者の深みのある落ち着いた色だ。

彼女の左右に一番の地位高い大臣二名が立ち、残りの者は部屋入り口から玉座までに敷かれた絨毯に沿うように左右一列に並んでいる。

「我らの依頼、無事に達成してもらったこと感謝する。

件の薬草、渡してもらえるか」

「こちらに」

エリスは懷からイタルミック三本を取り出す。それをエネーシアの右に立っていた者が受け取り、王へと渡す。

エネーシアは指でイタルミックをつまみ、しげしげと眺める。

「これがイタルミックか。聞いていたとおりの外見だな。

確かに受け取った。褒美はのちほど渡そう」

「ありがとうございます」

エリスは片膝をついたまま頭を下げた。

「これを取ってきたのはお主の弟子だったな？」

「はい」

エリスは顔をあげ、しっかりとエネーシアの顔を見て頷いた。

「直接礼を言いたいのだが」

「その言葉だけであやつには十分なものでしょう。あとは褒美を渡せば大いに喜び感謝することでしょう」

「神域に入り、無事に目的を達成する。その者に興味があるのだから」

幸助はわりと簡単に目的を達していたが、それは能力の高さゆえに楽だったのだ。実際は、神域に入り目的を達せられず放り出される者は多い。確実に目的を達したいのなら一流の冒険者五人ほど雇う必要がある。その一流の冒険者でも神関連の称号持ちは、それほど多くはない。

「興味を抱かれる気持ちはわかります。旅の仲間を一人得たとはいえ、それでも二人。その人数で目的を達した者に面識を得て、自陣に引き入れたいのでしょうか？」

同行者が子供だったことは話さない。幸助の評価をさらに上げることになってしまうのだから。

「隠すほどでもないな。そのとおりだ。有能な者はいくらいても困りはしないのだからな」

「あの者は表舞台に出たいとは思っていません。ですので諦めるほかないでしょう」

「それが本人の意思ならばな」

エネーシアはエリスが幸助を隠したがつていることを見抜いている。確固とした証拠はない、勘だ。だがその勘が外れているとも思っていない。

幸助に成り上がろうとする気概があればエリスも隠そうとはしない。だがエリスの知るかぎり幸助にそういった考えは見受けられない。だから隠すように動くのだ。

「本人の意思ですとも。地位権力を得たいと望んでいるのならば、この場に参上し王の面識を得ているはずでしょう？」

「まあ、そうだな。」

それらを得たいと考えているならば、積極的に動き名前が広がっているはず。だが一人で神域に出入りできるものなど、聞いたことがない」

「信じていただけたでしょうか？」

「うむ」

頷いて見せたが、エリスはエネーシアの目の奥に疑いの色を見た。

「我が一目会いたがっていたと伝えてもらえるか」

「承りました」

先ほどとは逆に、今度はエネーシアがエリスの目の奥に拒否の色を見る。それに何も言わず、エネーシアは頷いた。エリスが隠したがつていることはわかっているのだ、きちんと伝言が伝わると思っていない。

エネーシアの両脇にいる者も拒否の意は感じ取っていた。それに無礼だと声を張り上げることはない。主が諾と頷いたのだ。彼らはそれに従うまでだ。なにか策を謀るのならば通達があると理解している。

「次にホルン殿についてだが」

「こちらは以前申し上げたことを守っていただければ、私からはなにも言うことはありません」

「今回のようにこっちのいざこざに巻き込むな、だったな」
「はい」

ホルンへの依頼は公爵家当主の治療だった。当主は暗殺が原因でふせっているわけではないのだが、倒れたことで貴族たちの暗躍が起きていた。

治療するホルンを邪魔に思い、暗殺者を差し向ける者もいるかもしれない。大切な友人が巻き添えをくうことは、エリスには我慢ならないことだ。今後のことを考えると守ってもらいたいことだった。巻き添えを厭うならば、今後一切ここ近寄ることをしなければいい。これが一番なのだが、この手段を取れないのだ。ホルンはここに滞在するとエリスに告げている。ここを第二の故郷にする可能性もある。

こういった状況なので冥族のいざこざと無縁ではられないのだ。だから王に今回のホルンの報酬の一つとして、ホルンを害することなかれといった言質をもらいたかった。

「我としては頷きたい。だが我もすべてをコントロールできるわけではない」

どの王家でも王が貴族を御しきれていることはないだろう。エリスもそれは理解している。

「……わかっております。ですが彼女は大事な友人、無事を祈らずにはいられないのです」

「できるだけ守ることは約束しよう。ヒュッシャー公爵家も今回のことで彼女を守るだろうしな。」

我らとしてもホルン殿の力と各方面へのツテは魅力的だ」

「いざこざに関わらせないでほしいのですが」

「わかっておる。だがちょっとした頼みごとをするくらいの見返り

があってもいいだろう？

頼むのは他国への伝言などだ。これまで色々な人物を助け続けてきたホルン殿の口から伝えられるほうが心象はいいだろうしな。

国内での活動ではないから貴族たちも手出しは自重する、とかさせるのだから

「信じておきましょう」

「これで用件は終わりだな？ 下がってよい」

「はっ」

エリスは立ち上がり、一礼して謁見室を出て行く。

「左大臣」

エネーシアは視線を向けずに隣に立つ大臣に話しかける。

「は」

「ホルン殿の警備を強化しろ」

「承りました」

左大臣は配下に仕事を伝えるため謁見室から出て行った。

「右大臣」

「はい」

「エリシール殿の弟子について情報は集まると思うか？」

「……難しいかと。あの方自体、ここ最近表に出なくなっている人ですから」

「そうだな。だが難しいからと諦めるには惜しい人材だと思わないか？ 知恵の方は判断つかないが、戦闘能力生存能力はおりがみつきなのは間違いない」

「できるだけ情報を集めるように手配しますか？」

「ああ。

それにもしかすると、弟子とやらはとんでもない大物なのかもしれない。気づいていただろう？ エリシール殿にまわりついていた二種類の嗅ぎなれぬ匂いに」

エネーシアが嗅ぎ取った匂いとは、体臭ではない。上位冥族のみが有する嗅覚で、生物の持つ固有の力を嗅ぎ取ることができるのだ。これは他種族には知られていない情報だ。エリスも知らない。知っていれば幸助の匂いを落とすため、一日どこかで時間を潰していただろう。

「ええ、片方に歪みの発するものとわかりましたが、もう片方は私にはわかりませんでした」

「あれは竜だ。以前一度だけ遭遇した竜と同じ匂いだ」

「竜ですか？」

「竜殺しが生まれている可能性がある」

エネーシアの言葉に、今まで静かに二人の会話を聞いていた人々がざわめく。

「それはさすがに突飛なのでは？」

「カルホードにいた竜が死に、神域を踏破できる実力者がいる。

両者に関連はないのかもしれない。だが万が一これが当たっていれば、どの国にも先じて竜殺しを手に入れることができるかもしれない」

「竜殺しが存在すればよし、いなくとも実力者の情報を調べておいて損はなし、ということですね？」

確認するように右大臣が問いかけた。それにエネーシアは頷く。

「エリシール殿に気づかれぬよう、慎重にことを運ぶように」

右大臣は一礼し謁見室を出て行く。

ひとまず竜殺しのことを頭の隅においやり、エネーシアは次の訪問客のこと考え始めた。報告待ちとして推測を止めたのだった。

謁見室を出たエリスはホルンに与えられた部屋へとやってきた。扉をノックして返事が聞こえたのを確認して入る。

「あ、お帰りエリス」

本を読んでいたのだろう、手元に葉が挟まれた本がある。タイトルは冥族の文化と書かれている。

「ただいま」

「薬草は取ってこれたの？」

「女王に渡してきたところじゃ。のちほどお前さんの手に渡るだろう」

「これでバルキオス様を治療できるね」

本格的な治療を始められると、気合を入れている。

「ところでヴァンテスは？ 今日も一緒だと思ったのだが？」

「ヴァンテスさんは急な仕事で出かけていますよ」

「それはよかった。あの性格はこちらの調子が狂うからのう」

「楽しいと思うんですけど」

「どうして相性が合うのか。ましてや恋仲などに」

ヴァンテスのことを語るホルンは頬をうっすらと赤く染めている。

自分がいなかった間にまた仲が進行したのだとエリスは簡単に推測できた。

そうホルンはヴァンテスに惚れている。そしてヴァンテスも同じだ。

きっかけはホネシングへの旅に途中で合流したヴァンテスに、ホルンの実家で起きた事件を解決した礼を言いに行ったことだ。ヴァンテスの独特の性格にホルンは好感を抱いたのだ。

それからというものの、ホルンとヴァンテスは幾度も会話し互いのことを知り、好意を募らせていった。そして旅を最中で起きた魔物との戦いで、守り守ってもらったことが最後の一押しとなり、二人の好感度は最高度まで高まったのだった。

ヴェサミカに着く直前、エリスはどうしてヴァンテスなのか聞いたことがある。幸助に惚れる可能性もあっただろうと思ったからだし、事実幸助に好意は持っていると感じとっていたからだ。

ホルンはたしかに幸助が好きだ。だがそれは異性愛ではない。幸助と初めて会い、エリスの家でもともに過ごした期間で母性愛が刺激され、可愛く手のかかる弟という認識になっている。

ホルンが幸助に惚れるというIFの可能性を語るとすれば、それはホルンがヴァンテスに会わず、一年ほど幸助と一緒に過ごした場合だろう。その期間で幸助が自信を持ち頼りになるところを見せたときホルンの幸助への認識は変わっていただろう。だがこれはIFだ。ホルンはヴァンテスに会い、その自信に満ちた雰囲気魅せられたのだから。

「エリスは、私とヴァンテスさんのこと反対なの？」

「反対はしておらぬ。ただどこがいいのか分からぬだけだ。理解できぬからといって否定はせんよ」

大事な友人が幸せになることに反対する気はまったくないのだ。

「安心した」

ホルンはふわりと幸せそうな笑みを浮かべる。

「幸せにな。一応冥族のいざこざに巻き込まぬよう頼んではきたが、ホルン自身も注意しておけよ」

「はい」

自身の価値はそれなりに理解しており、いざこざに巻き込まれる可能性があることは覚悟している。

エリスが先手を打ってくれたことにホルンは感謝の念を抱いている。

「そうそう。女王たちがコースケのことを聞いてくるかもしれない。

その時はあまり情報を渡さないでくれ」

「わかってます」

口止めが成功したところで、エネーシアの興味が尽きるわけはない。

それをわかっているエリスは、事前に聞いていた成功報酬閃貨三十枚の使い道を勝手に決めていた。エリスが自分のために使うわけではない。幸助のためだ。

報酬の使い道は隠れ家を作ること。幸助の正体がばれたり、追われる身になったときのため、安全に隠れることのできる場所を今のうちから確保しておこうと考えている。

幸助に渡す分の閃貨五枚を引いた残りと竜の鱗を一枚売ったお金で、堅牢かつ立派な設備をもった隠れ家を建てることができる。

ついでに自身の本拠地もそちらに移すつもりだ。ホルンがリツカートにいない今、現在の本拠地を使い続けることに意味はない。それに多くの者にエリスがそこにいると知られており、招かざる客が

来ることもあって煩わしい。本拠地移転は渡りに船なのだ。

エリスは七日滞在し、レゾティックマーズへと飛ぶ。

この七日間で、ホルンが安全でいられるように部屋に魔法を仕掛けたり、女王主催の夜会に招かれたり、魔法についての講義を行ったりと細々とした用事をすませていた。

ヴェサミカを去ったエリスは一度リツカートに寄って隠れ家の手配をしてから幸助たちと無事合流するのだが、この間に一騒動あったことを知りもっと早くに合流すればよかったと思うことになる。

>br<

エネーシアが竜殺しの存在を推測する前に、別の場所で竜殺しのこと話題にしている者たちがいる。

それはコーホックら神々だ。

神域から戻ったコーホックは竜殺し観察組に出迎えられた。

「竜殺し見てきたぞ」

「調査はできたか？」

柔和な様相でくすんだ金髪の男神にコーホックは頷き返す。この神は学問を司る神ケジャス。

「どうしてああいった能力になったのかわかった。結局ミタラムの言うことが正解だった」

コーホックの返答に、五人の男女がそうだったこともあるのかと頷いている。ミタラムの言うことが信じられなかったわけではないのだが、初めての事態に外れていくれという思いもあったのだ。

一人たいして反応を見せない濃紫の長髪を持つ女神がミタラムだ。

未来を見た本人だ。コーホックの報告に驚くようなことはない。

コーホックがあの場合にいたのは、本人が言ったように暇潰しもあるのだが、幸助の調査という名目もあった。

幸助が竜殺しだから調査されたのではない。その能力の珍しさから調査対象になったのだ。結果しだいではあの場合で排除の可能性もあったのだ。

「全能力上昇のギフトなんて初めてよ、まったく」

ギターをいじっている空色のボブカットの女神が呆れ混じりに言う。この女神が、幸助に礼を申し出た音楽を司る女神セミルーズ。

「本当にのう」

スキンヘッドで逞しい体格の男神が頷く。この神は鍛冶を司るドリズ。

カードに載っている能力だけの上昇ならば問題はないのだ。カードに載っている能力どれか一つ上昇というのは当たり前にあるギフトだ。それが全部上昇というのは珍しくはあるものの、彼らは問題視しない。カードに載っていない能力まで上昇の対象になったことが問題視されているのだ。さらに人間としては規格外の力を得てしまっている。今後の成長次第では神々を殺し尽くすことも不可能ではない。成長力も上昇しているのだから。

必要な力が多いので、カード上の変化はまだない。もしステータスが細かい数値で表されていた場合、その上昇度は一般人の数倍だとわかるはずだ。一般人と同じことをしても得られる経験が倍以上など、反則以外のなものでもないだろう。

神殺しが可能かもしれない人材なのに、幸助への神々の関心が減ったのはコーホックたちがそう仕組んだから。神殺しに対して、危機感を抱くどころか成長を煽ってピンチを楽しもうと考える神もい

るのだ。その最筆頭は戦いの神だ。コーホックは成長させることに反対だった。殺されてしまえば娯楽を楽しめなくなるといった自分勝手な思いもあるのだが、世界神に託された世界運営に問題が生じること避けたい。

ここにいるミタラムを除いた神々は成長反対派なのだ。

ミタラムは幸助に手出しすることが反対だけで、神殺しに関しては興味はない。世界神と上級神の四人が存在していれば、自分たちの代わりなどいくらでも生まれてくるのだから。

ミタラムは流離い人という存在が気に入っている。流離い人たちは時にミタラムの見た未来とまったく違う結果をもたらすことがある。ミタラムの関わらない偶然に導かれ、ミタラムにも予想外の結果をもらし、この世界で生きていく様子を見るのが好きなのだ。流離い人の行動を楽しむため、彼らの未来はできるだけ見ないようにしている。

だからミタラムは、幸助には誰も手を出さずにいてもらいたい。そういった意味では、調査のためとはいえ手を出したコーホックたちと一緒にいるのはおかしいかもしれないが、コーホックたちは最小限の干渉ですませるつもりなので、他の神よりもましなのだった。

コーホックが調べたことは、幸助の性格と規格外のギフトの原因。幸助の性格を調べたのは、今後の行動を予測するため。好戦的な性格だったり冒険心に満ち溢れた性格な場合、成長は早く、その能力は神々に届く可能性がある。

神々としてはありがたいことに、幸助の性格は今のところ積極的といえるものではなく、警戒するだけでいい。

ギフトがあのでたらめさを出した原因は、幸助たち人間の生まれに関連する。

この世界と地球の人間にたいした違いはない。臓器の位置は同じ、

魂が存在する点も同じ。違うのは二つ。魔力のあるなしと初めから人間として生み出されたか、人間になるまで進化したかということだ。

魔力の有無はなにも問題ない。問題となるのは人の進化の方だ。地球の人間は今の姿に至るまで、神々の手出しなく環境などに左右され適応しながら長い年月をかけた。こちらの人間も一応は昔の姿から進化はしている。だがその進化は身体強化、病気耐性といったくらいで劇的な変化は見せていないのだ。

進化適応という点から見ると両者には差がありすぎる。その進化適応能力が竜を殺して得たものに影響を与えたのだ。

幸助がただこちらに來ただけでは問題視されなかっただろう。強くなり、能力を得てしまったから問題視されてしまったのだ。

「ある意味、可哀想な人なのね」

同情しているのは銀の長髪を持つおっとりとした雰囲気の女神。

医療を司る女神レーリルだ。

「だな。本当に偶然こちらにきて力を得て、俺たちに警戒されて監視される」

「ホルンが世話になったから、あまり厳しくはしたくないのだけど」

レーリルはホルンのことで、幸助に恩を感じている。

神々は、世界運営と自身の専門以外は世界に関わらないよう自身を戒めている。これによりホルンの生贄に関して、レーリルは手出しできなかったのだ。

今回コーホックが幸助に接触したのは緊急措置だ。上級神にも許可は得ている。

「油断して世界が滅びるなんてことにならないためにも必要だろう

さ」

コーホックの言葉にレーリルは頷く。

「人間たちの動向にも注意しないとな。竜殺しを大きく刺激するようないところがないといいが」

今のところ竜殺しがいると確信しているところは一つ。そこは預言のギフト持ちによって予言されていたのだ。竜殺しが現れる正確な時期も、竜殺しがどのような人物かもわかっていない。ただおおかまかな時期と倒すのが人間の男であること、この二つが予言によってわかっていた。

これらを元に預言者の子孫は、ある依頼のため竜の力を感じ取れる魔法を使い幸助を探している。

この依頼は竜殺しの成長を促すものだが、神々の考えでは神の域までは至れないと判断している。それが読み違えだと知るのは、竜殺しのギフト成長を知ったときだ。

「あそこは言い伝えが捻じ曲がってるのよね」

「一度部族が滅びかけたからな」

「ほかに注意する集まりはあるんじゃないか」
「三つ」

ミタラムが短く答えた。

「一つはギルドだろう。あそこは竜殺しはただの実力ある冒険者と認識しているな」

「もう一つは子飼スパイから情報をもたらされた貴族。面白い発想をする人間といった報告がされてるわ。仮面ライダーなんてこっちはなかった考えだから無理もないわね」

「じゃあ最後の一つは？」

これは誰も情報をもっておらず、皆の視線がミタラムに集まる。

「冥族の女王が竜殺しがいるかもしれないという推測を立てる」

ミタラムは感情の籠らない言葉で予知で得た情報を開示する。竜殺しという部分にだけは、期待といった感情がうつすらと感じられる。

感情が籠らないのはいつものことなので、皆気にしない。ミタラムが唯一感情を見せるのが流離い人のことのみだ。

「冥族か……念のために軽い妨害は入れるべきか？」

「戒めに接触するんじゃないかしら」

「……そうじゃろうな」

話し合いで、とりあえず放置の方向へと決まる。

「ほかになにか問題はあるかしら？」

「問題というか気になることがある。」

力を溜め込んでいるのが気になるんだ。一応精霊の成長に使われるよう小細工はしてきたが

「力を使おうとしないから溜まるのは仕方ないわね。多くの力を発散するというのはなにかと戦う場合でしょうし、それはそれで問題なのよね」

多くの力を使うということを望むのは、それこそ彼らが避けたがっている刺激が発生するということだろう。

魔物と戦い力を吸収するといったことではなく、無駄に力を使ってくれるような事態が発生しないかと、彼らは期待している。

「現状のような甘い環境に浸っているかぎりには、大きな問題は発生しないだろうな」

コーホックの言葉に皆頷く。

幸助はいまだ世界の厳しさに触れてはいない。こちらにきていきなり致命傷を負ったが、理不尽な理由で命を散らすことは珍しいことではない。出会う人間も善良な者がほとんどで、狡猾な者残忍な者など出会ったことはない。

体一つで見知らぬ土地に來た者としては、格別に恵まれている。

今回の話し合いでは具体的な対応策はでなかった。結局、神々がやることは今までと変わらず、監視ということになる。それはそれで暇を潰せるのかまわないのだが、どうせなら純粹に楽しむためだけに見ていたいというのが彼らの正直な思いだ。ミタラムだけは楽しんでるのが。

遠くでのひみつのおはなし（後書き）

書く気はあれど、投稿する気はないというおかしな状態になってました

これも一種の鬱病とか五月病？

このあとの二話ほとんどできてるんで、次回次々回の更新は早いかと

元手なしで始める金策術

「ここで武闘大会があるんだよね」

「参加者っぽい人がいるし、間違いないだろうね」

幸助とワイアーレの二人は宿を探しながら街中を歩いている。幸助の言うように大会参加者らしき者たちがあちこちに見える。

ボルドスもいるかもしれないと幸助は周囲を見渡すが、人が多いので見つかるわけもないかとすぐに探すのをやめた。ボルドスたちはまだ到着もしていないので、見つかるわけもない。

「コースケさんは参加したりは」

「すると思う？」

ワイアーレはこれまでのことを思い出し、

「しませんね」

「その通り」

二人して断言した。

「魔物とは戦ってもいいかなと思いはじめたけど、人間相手はまた別。下手して殺すなんてことは嫌だしなあ」

ボルドスを重傷に追い込んだことを思い出している。ボルドスが頑丈だから重傷で止まったが、そこらの冒険者や格闘家相手ならば殺してしまう可能性があるのだ。殺すということに対する認識が変わってきた今でも、人殺しは依然として禁忌として捉えている。

手加減すればいいという問題なのだが、手加減することに慣れておらずうっかりなんてことになり得ない。

「さすがに殺すなんてことは」

「いやいやわりと洒落になってないから、この力」

「強力ってのはわかるけど、実際どれくらいすごいのかはわからないですね」

戦いのある依頼に同行はしてないので、ワイアーレが知らないのも無理はない。

本人にその気がないのに回りが参加を促すのは余計なお世話ではないと考え、ワイアーレは話題の続行を止める。

二人はぶらぶらとお土産を探したり、露店で軽食を買ったりとんびり観光気分歩いていく。

店や露店は食べ物とお土産のほかに、大会の影響で戦う者向けの物も多い。武具や武具の手入れ用品や傷薬など、戦いの必需品がちここに並び、冒険者たちが足を止め覗き込んでいる。

幸助も少し興味が出たようで、ときおり足を止め見ることがある。今使っている剣の代わりになりそうなものがあれば買ってでもいいかなと思っているのだ。

「あ、あれいいかも」

何度目かの覗き見で目に入ってきたものを見て、幸助は購買欲が刺激される。それは剣ではない。

「なにかいいものあった？」

「うん。投げナイフらしきものを見つけた」

幸助は数メートル離れた露店の一つに歩を進める。

投げナイフに興味を抱いたのは、連隊イーグルとの戦いで魔法が間に合わなかったことが、心に少し引かかっていたからだ。あの場で投げナイフがあれば迎撃が間に合っていたかという、そうでもない。それは幸助もわかっている。いくつかの攻撃手段を保有しておくことが大事なのではないかと思っているのだ。

「いらっしやい」

「これって投げナイフであってる？」

「あってるよ。持ってみるかい？」

主人はナイフを一本幸助に手渡す。

長さ十五センチ、幅二センチ強の細い両刃ナイフ。食物の調理には使いにくそうな、戦い用に用途が決まっているそんな作りだ。

重量はニンジンよりも軽い。効果的なダメージを出すには急所に命中させる必要があるだろう。

「これってどれくらいの品質？ 手荒に扱っても平気？」

「こういうものは手荒に使ってなんぼじゃないか？」

「あ、そうかも」

「まあ、そうさな、使うたびにちよっとした手入れして五度使えるってとこかな。」

もちろん使うたびに劣化していくぞ。硬いものにぶつければ劣化も早い。

品質的には普通といったところか」

「ふーん……六本ほどもらえる？」

「あいよ。ホルダーは持っておるか？ ないなら安くしとくぞ？」
「ください」

「ベルト装着用とそのジャケットの内ポケット用と腕用があるが？」
「ベルト装着用かな」

これから慣れていくので装着する場所はどこでもいいのだ。なんとなく使いやすそうだと思ったベルト用を指定する。

「あいよ！ 合計で銀貨四枚だ」

「意外と安い？」

「これくらいが定価だぞ？」

「私からしたら高いって感じだけどね」

幸助はいまだ金銭感覚がしっかりと固定されていないのだろう。あとは今手持ちで金貨を持っているせいか。銀貨に換算して二百枚ほどあるのだ。その中の四枚を出すだけなので少な目に感じている。ナイフが入れられた十本収容できるホルダーを受け取り、ベルトに固定する。宿の庭で練習しようと考えつつ、主人に礼を言ってその場を離れていく。

小腹が空いたのでアイスクャンデーを買い、食べながら宿を探す。幸助はリンゴ味、ワイアーレはオレンジ味をシャリシャリとかじっている。お金は幸助が出した。どうせ一緒に行動するのだからとお金の管理は幸助任せになっているのだ。

ワイアーレは、自分が財布持っているとうっかり落としそうだと考えている。こう自覚しててもうっかりは治せないの、他人任せにしておいたほうが安全なのだ。

歩いていると不意に幸助の腕が動くことがある。ワイアーレは、一度どうしたのかと聞いて納得した後はたいして気にしなくなっている。

そして再び腕が動く。

「また？」

「また。あちこちと見渡して驚いてるから、隙だらけの田舎者に見えるんだろうね」

「お金の管理をコースケさんに任せて正解だったよ」

幸助はスリが懷に手を伸ばしてくるのを阻止していたのだ。幸助がよほど頼りなく見えるのか、四人のスリが近寄ってきていた。彼らは最低でも腕の打ち身、酷くて骨にひびが入るといふ怪我を負うはめになっていた。

この四人以降は幸助が見た目通りではないと、離れた位置から様子を見ていたスリたちは学習し近寄ることはなくなった。

「視線がなくなった」

「今まで見られてた？」

「うん。人が多くでなんとなくわからなかったけどね。」

この街は治安がいいわけじゃないのかな」

「んー……いいほうだと思うよ？」

ベラッセンよりも大きくて活気があるんだから、多少の騒ぎは起こると思う」

幸助の治安の基準が日本なので、どうしても辛口な評価になってしまう。

こんなことを話しながら歩いて、路地裏へと入る細い道のそばを通りかかったとき、路地から急ぎ足で出てきた男とワイアーレがぶつかる。

倒れそうになったワイアーレを支える幸助の耳に、なにかが割れる音が聞こえた。

「ワイアーレ、大丈夫？」

「私は大丈夫ですけど、あの人の持ってたなにかが壊れたみたい」

「ワイアーレが気にすることないと思うよ。急に出てこられたら大抵の人がぶつかるって」

割れ物が入っていたらしい箱を呆然と見ていた三十後半ほどの男

が、ぱっと顔を上げワイアーレに掴みかかる。

「危ね」

「きゃっ!？」

突然の強制移動にワイアーレは小さく悲鳴を漏らした。幸助がワイアーレの両肩を掴んで持ち上げ、男の進行方向からずらしたのだ。

「べっ弁償！ 弁償しろ！」

男は顔を赤く染め、二人に怒鳴る。

「弁償って言ってもそっちだって悪いだろ。ちゃんと前を確認して歩けよ」

「そ、そんなことはどうだっていい！ 弁償しろ！」

「そんなことってあんた」

男が騒ぎ立て、周囲の注目が集まる。騒ぎを聞きつけたか、近くを歩いていた兵が寄ってくる。

「どうした？ 何事だ」

「こいつらがぶつかってきたせいで、俺の荷物が壊れたんだ！ それなのに言い訳並べて弁償しようとしない！」

幸助たちがなにか言う前に、男は一方的に幸助たちが悪いと強く告げる。勢いよく近寄る男の迫力に押されて兵は後ずさる。

「そ、そうなのかお前たち？」

「違う。確かにぶつかったけど偶然。どうやって曲がり角の向こうにいる見えない人に、狙ってぶつかれるんだよ。」

誰か目撃者がいるはずだから、わざとじゃないってわかるはず」

無然とした幸助の言葉に頷いた兵は周囲の人間に呼びかける。その間も男は弁償だと騒いでいる。その様子が必死すぎて、幸助たちも周囲も首を傾げざるを得ない。

幸助は内心当たり屋なのではと疑っていたのだが、この様子を見て違うようだと考えを改めた。かといって弁償する気はないのだが。ぶつかった時点から時間は経っていないので、目撃証言はすぐに集まった。

証言からぶつかったのは偶然と兵は判断する。

「どちらも悪いわけではなさそうだな。偶然の事故だ。弁償する必要はなさそうなんだが……」

歯切れが悪い。男がはまだ騒いでいるからだ。

「よほど高い物だったんだろうか？」

「大事な物だったのかもしれないよ？」

ウィアーレの言葉にその可能性もあるかと兵は頷く。

「だとしたら少しくらいは弁償してあげる必要があるのかもしれないな。」

とりあえず、鑑定士を呼んでみようと思う。

君たち、ここで待っていてくれないか？」

頷いた二人に兵は礼を言って、鑑定士を連れてくるため離れていく。

騒ぎ続けていた男は今では静かだが、ぶつぶつと呟き続けていて、平常とは思えない状態だ。

十五分ほど経ち、兵は四十才ほどの男を連れて戻ってきた。この男が鑑定士なのだろう。

「ちょっと失礼しますよ」

断りをいれた鑑定士は箱を開いて中身を確認していく。中にあったのは三組のティーカップだ。無事な物は一つもなく、淡い紅色の破片が箱の中に散らばっている。

「どうだ、価値のあるものか？」

鑑定を終えたらしい様子を見て兵が声をかける。

「そうですね。安物ではないですよ。

作者は今から百年ほど前に生きていた工芸家グラヌ・ミッシャー。彼の若い頃の作品で間違いないでしょう。

保存状態も悪くはないので、割れてなければそれなりの値段しますね」

「それなりというത്？」

「私ならば銀貨二十枚出しますね。ほかだと銀貨二十五枚出す人もいるかもしれません」

「ほーティーカップにしては高いな」

男が騒いだことを納得したと兵は頷いている。

兵の頷きとほぼ同時に、男が大声で鑑定結果を否定した。

「嘘だ！ もっと高いはずだ！」

「嘘って私はこれでも二十年以上鑑定しているプロですよ？」

「だってこれは父が金貨三枚出して買った物なんだ！」

父の話だとグラヌ・ミッシャーのトランプシリーズの一部だと！」

「はっ」

男の主張を鑑定士は鼻で笑った。

「これがランプシリーズ？ 馬鹿言っちゃいけませんよ。たしかにこれはランプシリーズと似てはいます。ですが似ているだけで決定的に違いがあるんですよ。

ランプシリーズにはカップの底にクラブ、ハート、スペード、ダイヤのいずれかがうつすらと描かれています」

「これだって底に描かれていた！」

「底といっても、外底でしょう？ 本物は内側の底に描かれてるんです。

これはおそらくランプシリーズの前身なのでしょう。これと同じ物は数多く存在していて、価値はそれほど高くないのです。うちの店だって同じものは十個ほど置いてますよ。本物も一つだけあります。

本物と試作品を見ている私が間違えるわけないでしょう」

「そ、そんな」

鑑定士の断言にショックを受けた男は、体から力が抜けたようでその場に座り込む。

「私はこれで帰りますよ」

「お疲れ様でした」

兵の礼を受けて鑑定士は自身の店へと帰っていった。

「俺も警備に戻るとするよ。

このあとどうするかはお前さんたちが自由に決めるといい。弁償するとしても半額払えば問題ないと思うぞ？」

「お世話になりました」

ワイアーレが深々と頭を下げ、幸助は軽く一礼する。
兵が去り、騒ぎはこれで一段落かと集まっていた人たちも去って
いく。

「じゃあ、銀貨十枚ね」

男の落ち込みようを見て、弁償する気のなかった幸助は憐れに思
い財布からお金を取り出し、座り込んだ男の手にしっかりと握らせ
る。

銀貨十枚ならば懷は痛くないので、気楽に渡せた。
手の中の銀貨を見て、男は泣きそうな顔となる。

「これじゃ足りないですよ！」

払わなくてもいいお金を渡して返ってきた言葉に、幸助は苛立つ。

「どんだけ欲張りなんだ、あんたは！ それ以上はびた一文出す気
はないからな！」

行こうワイアーレっ」

「ちょっと待って」

語気を荒くし幸助はワイアーレに呼びかけるも、ワイアーレはそ
の幸助を押しとめる。

「もしかしてお金が必要な事情があるんじゃないですか？」

ワイアーレがそう思ったのは、男と似たような雰囲気を見知って
いるからだ。今はそうでもないが昔は孤児院の暮らしはギリギリで、

予定外の出費があるとたちまち孤児院経営が苦しくなっていた。そんなときお金を借りに行っていた大人たちと男の雰囲気少し似ているのだ。だから事情があるのかもしれないと思ったのだった。

事情を聞いて必要なお金を用意できるとは思っていない。そもそもウィアーレ自身お金はないのだ。けれども少しは力になれるのではと考え声をかけた。

「こんな行きずりの人間に話せるようなことではないかもしれないけど、少しくらい力になれることはあるかもしれませんよ?」

ウィアーレが下心なく本心から言っているとわかったのか、男はぼそぼそと口を開く。

「……五日前に子供が行方知れずになり、三日前に返してほしければ明後日までに閃貨十枚用意しろという脅迫文が。」

あちこち駆け回り、借金などしてなんとか閃貨五枚は用意できたのです。あとは手持ちの品を売って、少しでも多くお金を用意して、それで勘弁してもらおうと」

「だからあんなに必死だったんですね」

子供の命がかかっていれば必死にもなるかと幸助も納得し、男に感じていた憤りを消す。

「兵士に相談したり、ギルドに搜索奪還依頼出したりしなかったんですか?」

「出した、出したさ! でも兵もギルドも話を聞くだけで、忙しいって言って取り合ってくれなかった!」

「兵士のほうはともかく、ギルドが取り合わないって……」

ウィアーレはギルドに勤めていたので、内部事情は詳しいほうだ。

そのワイアーレが首を傾げていることで、特殊な事情でも思い当たったのかと幸助は考えている。口に出して問わないのは、男の不安を煽りそうだと思い慎んだからだ。

「普通は人殺しの依頼とかよほどのもの以外は受け付けるのに」

「今は武闘大会が近いから、そういうこともあり得るんじゃない？」

「忙しいからって理由で取り合わないことはないと思う。」

ねえ、コースケさんどうにか力になれないかな？」

きたと幸助は心の中で呟いた。ワイアーレがこう提案するとは予想ついていた。そして提案されたら断れないとわかってるのだ。幸助としても子供のことは可哀想だとは思う。けれど積極的には助けようとは思っていなかったのだ。

ワイアーレが以前頼んだ時は子供たちを助けるために即動いたのに、今回は動きが鈍い。両者の差は依頼人と親しいか親しくないからだ。幸助は非道ではないが、無類のお人好しというわけでもない。見知らぬ人間が困っていても、見捨てることもあるのだ。

ここでワイアーレが提案しなければ、彼女も助ける気がなかったのだと言いつののだが、小さい子が身内にいるワイアーレが言い出さないという確率は低いとわかりきっていた。

「力と言ってもね、俺たちの全財産を出しても必要金額にはまったく届かないよ。」

それにお金出すとして、今後の旅はどうする気？」

「じゃ、じゃあ！ ギルドで依頼を請けたら！ コースケさんならあつという間に」

「初めからそういった金額の高い依頼請けられるか、ワイアーレのほうがよく知ってるんじゃない？」

幸助の実力ならば確かに高額依頼を達成できるだろう。しかしこ

の街のギルドでは実績がまったくない。依頼を行おうとしても止められるのが落ちだ。期限までの二日後までに実績を作ったとして、高額依頼をこなしている間に、期限が過ぎているのは簡単に予想できる。

「えっと、ほかになにか……おじさんは思いつきませんか？」

目の前で急に助けたいと言い出した男女をポカンした表情で見ていた男に、ウィアーレは聞く。

「なんでそんな話に？ 出会ったばかりで、不快にもさせたのに」「言う通りですけど、お子さんのことを知ってほおっておくなんて人の所業じゃありません」

関わりたくないという気持ちが少しあっただけに、この言葉は幸助には痛かった。

「ありがとう。その言葉だけで十分だ。さつきは騒いだりして悪かったね。自分のことは自分でなんとかするよ。」

本当にありがとう」

そう言って立ち去ろうとする男を見るウィアーレは残念そうな表情を浮かべている。

それを見た幸助は溜息一つ吐いて、男を呼び止める。可愛い女の子の前でかっこつけたい時もあるのだ。

「おっちゃん。一人よりも二人、二人よりも三人のほうがなにか言い考えが浮かぶかもしれない。」

だから一緒に金集めでも、子供を取り戻す方法でも考えてみない

か？」

幸助の言葉で、沈んでいたワイアーレの表情がぱっと明るいのへと変わる。

「だ、だが迷惑じゃ」

「こっちが勝手に力になりたいって言ってんだから気にすることはないよ。」

それに必ずしも力になれると決まったわけでもないしね」

男は目を潤ませ深々と頭を下げた。

グダナルと名乗った男に連れられて、二人は歩き出す。目的地はグダナルが経営している店だ。その店はグダナル自身のものであるく、借り物なので売ってお金にはできない。それができていればなんとか閑貨十枚用意できていただろう。

休店日と書かれた札のかかった扉を開け、三人は店に入る。店と住居が合体した造りで、商品が置かれている部分はそれほど広くはない。八畳だろう。ところせましと小さめの生活用品が置かれている通り、店の奥へと進む。

リビングに通された二人はソファアに座り、売り物の中でも高めの茶葉を使いお茶を入れているダグラスの様子を見ている。

「どうぞ」

一言札を言って飲み、すぐに本題に入る。

「もう一度聞くけど、お金が手っ取り早く稼げる方法知ってる？」

「いえ、知っていたら試してます。」

あえていうならギャンブルだろうか」

「切羽詰ってるときにギャンブルは悪手じゃないか？」

「ええ、私もそう思っているので、それは最後の手段にしています」

ギャンブルで一度だけ確実に稼ぐ方法があるのだが、三人はそれぞれで理由で思いたることはない。

確実に稼ぐことができるギャンブルとは、武闘大会の参加資格を得るために行われる力試しだ。その結果を予測するという賭け事がある。力試しは駆け出しの冒険者では突破不可能なのだが、幸助ならば確実に力試しを突破できる。ゆえに幸助の突破に賭けると確実に稼ぐことができるのだ。

幸助とウィアーレはそういった賭け事が行われていることを知らない。グダナルはそういった賭け事を知ってはいる。だが幸助が突破できるとは思っておらず、その賭け事のことは除外している。

「ギャンブルじゃなくて、自分にはできそうもなかったこととかあったりませんか？」

「そう言われても」

すぐには思いつかないのだろう、首を傾げ考え込んでいる。

「とりあえず、なんでもいいか短時間でできるお金稼ぎの方法があれば言ってみて。」

もしかしたら俺たちにできそうなものがあるかもしれないし」

「短時間でできそうなもの……。」

武闘大会で入賞。これは指定期限が過ぎる。ギャンブル。これはさっきも言ったように最後の手段。近く草原でも掘って鉱石を見つける。そうそう埋まってないし、掘るのにも時間がかかる。二人の名義で新たに借金。さすがにそんな迷惑はかけられない。新商品でも開発して、そのアイデアを売る。簡単に思いつけたら苦労しない……。」

グダナルはつらつらと考えを垂れ流していく。

その中の新商品という部分で幸助は反応する。こちらになくて、地球にはある物を商品アイデアとして売れないかと思ったのだ。そしてなにかいい品物はないかと考え出す。

まず思いついたのが車。馬車よりも早く、バスならば多くの人々を運ぶことができ、トラックならば多くの品を運送できる。これは没だ。造り方を知らない。材料も見当つかない。アイデアを渡せば魔法を使い、いつか似たものを再現しそうだが、今すぐ利益に繋がるわけではない。

次に自転車。これも車と同じく、すぐに利益に繋がるわけではない。自転車を構成している部品がわかる分、車よりも完成は早いだろうが、それでも指定期限には間に合わないだろう。

ここで幸助は複雑な機構のものは止めて、もっと簡単なものを出そうとする。

仮面ライダー関連のことを思い出し、物語は売り物になるのとは、お金の稼ぐ方法を考えているウィアーレとグダナルに聞くことにする。

「物語を売る、ですか。」

話の内容によると思うが、もしかしたらいけるかも。

ですが一つ問題がありますね」

問題点がわからなかった幸助とウィアーレは、グダナルに続きを促す。

「どうやって売るか。」

私にはツテはありません。お二方は？」

「ツテ？ 俺たちはここに来たばかりで知り合いなんていない。

というかツテに頼らなくても自分で持っていけばいいんじゃない？

持ち込みを待ってる出版社とか近くにない？」

幸助とグダナルの考えた物語を売る方法は一緒ではない。

幸助は自身が考えたものとして、出版社に持ち込み、利益の前借をしようというもの。

グダナルはというと、物語自体を誰かに譲渡し、将来出るであろう利益の一部を受け取るというもの。

この世界での物語の売り方としては、こちらの住人であるグダナルの方が正しい。

この世界には出版社はないのだ。本は国が指定した組織か個人で作られている。国指定の組織が出版社といえるかもしれないが、いつでも作家を待っているということはない。紙がもっと安くなれば、民間の出版社もできてくるかもしれない。

物語を考え出して、それを売り物にする場合は個人で本を作り、それを本屋に持っていき置いてもらい、口コミで評判が広がるのを待つ。もしくは劇団や旅一座に持っていき、演じてもらい、利益の一部をもらうのだ。

作った物語の評判が広まると、国指定の組織から誘いがくることがある。誘いに頷くと前金としてそれなりの金額がもらえ、以後数年お金がもらえる。一度でも誘いがきた者は、直接国指定の組織に作った物語を持っていけるようになる。

幸助たちが誰かに物語を売るには、将来の利益が出ると買い手が判断しなければいけない。そういった予測は簡単にはできるものではなく、買い手を見つけ出しても交渉が大変なものとなるだろう。

出版社がないということを聞き、こちらとむこうとの違いを認識した幸助は物語の売買も却下する。ほかにないかと再び考え始めて、今度は料理はどうかと思いつく。

こちらにきて食べた物を思い出していき、地球にしかなかったものを記憶の中から探っていく。

そして思いついたのがアイスクリームとハンバーガーだ。

だがアイスクリームの作り方で思い出せたのが、卵と牛乳と砂糖を冷やしながら混ぜるといふ大雑把なものだったため、こちらは却下することに。

一方でハンバーガーは作り方は難しくない。手軽に食べれるし人氣が出るのではと思っている。

「料理のアイデアでハンバーガーってのがあるんだけど」

「ハンバーガー……聞いたことないな。ハンバーグに似ていますが関係あるのですか？」

「ちよつと平べったく焼いたハンバーグを、刻んだタマネギとピクルスとレタスとチーズとケチャップと一緒にパンに挟んだもの。」

手軽に食べられるんだ」

「ほほう、ハンバーグをパンに挟む。簡単な手順ですが誰も考えつかなかった代物ですね。発想の勝利というところか」

「これならお金になるんじゃない？」

「知り合いにコックがいるから、アイデアを売ることは可能。初日から数日は物珍しさで売れる、だが作りは簡単。だから真似する人がでてくる。利益は徐々に落ちていくだろう。そこを踏まえてアイデア料としていくもらえるか……」

グダナルは一人呟き考え込み、いくらで売ることができるか計算していく。

五分ほどで結果は出た。グダナルが出した売値は閃貨一枚に届かないというものだ。ネックとなったのは調理法が簡単だということ。これがアイスクリームやプリン、スパゲティといった少しでも手間をかけるものだったならば、簡単には真似できないということ考慮してアイデア料で閃貨二枚以上、さらに利益の少しをもらえるとということになっていたのかもしれない。

「少しくらい料理を覚えておくんだった。」

しっかし難しすぎるのも駄目、簡単すぎるのも駄目。どうすりゃいいんだか。

簡単に作れたものを真似できないように保護してくれる方法ってないのかな」

「そんな都合のいいものあるわけないと思うよ？」

呆れた顔でワイアーレが言う。

しかしグダナルは思い当たることがあるのか、何か言いたそうにするもののすぐに諦めの表情となる。

「グダナルさん、なにか心当たりでも？」

「あるにはあるんですが、無理だろうなと」

「まあ、いいから言ってみて。聞いたことがきつかけとなって、いい案浮かぶかもしれないし」

「娯楽を司る神が、いつでも新たな遊びを探してるのはご存知ですか？」

幸助は知らないと言を横に振り、ワイアーレはそっぴやあつたねと納得している。

「新たな遊びを見つけて報告した者には、閃貨で十枚の褒賞を与える。さらにそのアイデアを使い出た利益の五パーセントを、考え出した者に与え続ける。」

こういった決まりが昔からあるんですよ。

ですが、もう長いこと新たな遊びは発見されていない。最後に認められたのが三十年前のこと。その前が七十年前。

だからアイデアなんかでないと諦めたのです」

「遊びならなんでもいい？」

「ええ、子供の遊びから賭け事になるものまでなんでも」

「今から俺が知るかぎりの遊びを言っていくから、ないものがあつ

たら教えて」

幸助は子供の頃やった遊びを話していく。オニゴッコから始まってかくれんぼ、サッカー、バスケット、トランプなど思いつくかぎり述べていき、それにウィアーレとグダナルはあるなしを答えていく。

まあ、述べたものでないものはなく。名前が違うだけで全て存在していたわけだが。

「ないと思ってたトレーディングカードゲームや羽根突きやケイドロもあるとは」

「賞金目当てに色々と考えられているから」

「ほかはなにかあったかな……オセロなんかはどうだろう？」

「名前は聞いたことないな。どのような遊びなんだい？」

「六十四マスのボードと六十四枚の白黒のコイン状の駒を使う遊びで、中央に白と黒の駒を二枚ずつ置いて……」

言葉で分かりづらい部分は、いらぬ紙をもらい図を描き説明していく。

説明を聞いてグダナルの表情が明るくなる。

「ルールは簡単だけど、奥深い遊びと言われてる。これはどう？」

「私は聞いたことないよ」

「私ですよ。これならいける！　今まで誰も思いつかなかったのが不思議なくらいだ！」

単純なルールだからこそ、深く考えすぎた人々には思いつくことはできなかったのだろう。

身代金を用意できると喜色を浮かべてグダナルははしゃいでいる。心の片隅では、次から次にアイデアを出してきた幸助に疑惑を感じ

てもいるのだが、恩人に無礼はできないとその思いを無視している。今後も追及するつもりはない。

「早速、コーホック様に報告しましょう」

「どうやって？ どこか報告する場所でもある？」

「この場でできますよ。使う道具やルールを思い浮かべて、コーホック様に祈ってください。さっ早く！」

祈れ祈れとグダナルは幸助を急かす。急かされた幸助はどうして自分なのかと首を傾げる。お金を必要としているのはグダナルなのだから、祈るのはグダナルのほうが相応しいと思っているのだ。

「あなた以外に誰が祈るんです！？ オセロについて一番詳しいのはあなたでしょう？ 詳細なイメージを送る必要があるんですよ」

「そういう理由なら祈るけど。祈る時になにか作法とかある？」

「いえ特には」

幸助は目を閉じて、最近会ったばかりのコーホックの顔を思い浮かべ、オセロの報告をする。

幸助の脳内に、称号の時と同じように声が響く。それと同時に頭を一撫でされたような感触があった。

『こういった形でまた話すとは思ってなかったぞ。』

俺たちの予想では、冒険者に勝ったら金貨を渡すという条件の模擬戦を挑んで参加費を身代金に当てるってのが最有力だったんだけどな。

俺の分野で達成するとはな。俺としては嬉しいが。

あ、あと頭を撫でたのはミタラムだ。予想外の行動が楽しかったらしい。今後もその調子で思うがまま動いてくれとのことだ。

新たな遊びオセロ。確かに受け取った。

ではさらばだ』

コーホックの声が聞こえなくなつてすぐに、硬いものがテーブルを叩く音が聞こえ幸助は目を開いた。

目を閉じていた幸助にはわからなかったが、柔らかな光とともに十枚の閃貨と認定札がテーブルに現れたのだ。

「おおっ！　これがあれば子供も無事に帰ってくるし、借金も問題なく返すことができる！

ありがとう！　ありがとう！」

閃貨を手にしてグダナルは何度も頭を下げる。

「あとでこれを商人ギルドに持って行きましょう。定期的な収入が入ってきますよ」

グダナルは認定札を手にとって、幸助に渡す。

「なんで俺に渡すのさ？　そのまま持っておいたら？」

「私に必要なのは閃貨だけ。こちらは必要ないですよ。それに持つべきではないです。持っているのに相應しいのは考え出した貴方でしょう」

考え出したわけではないんだけど、と思いつつ認定札を受け取る。お金はあって困ることはない。生活費が浮くし、あればいつかにかの役に立つかもしれないと思ったのだった。

このお金を受け取るのは観光旅行が終わってからなのだが、その時の金額に幸助は驚くこととなる。予想していた以上に多かったのだ。これだけで一生働かずに済むだけの金額があったのだから。

このあとの話し合いで、幸助はお金を持っていくグダナルの護衛

を隠れてすることになった。隠れるのは身代金を持っていくのは一人だけと指定されたからだ。それでも行くのは、一度関わったのだから最後まで見ておきたいと思ったのと、もしかすると犯人たちはお金だけ奪ってグダナルを殺す可能性もあると考えたから。

期限までの二日間、幸助とウィアーレはグダナルにお礼として家に宿泊させてもらうことになった。

この二日で幸助は、独自にお金の工面に動いていたグダナルの奥さんに会ったり、オセロの試作品を持って商人ギルドに行ったり、投げナイフの練習をしたり、観光してみたりと暇にはならずに過ごせたのだった。

元手なしで始める金策術（後書き）

今回感想というか反響？が多いのでこちらでまとめて返答

ホルンのことがあそこまで反応されるとは思ってたんです。

あまりの反応に笑えました

思わずホルン未亡人シナリオ組み込もうかとか、ワイアーレも似たような展開にしたいなとか、あの話なかったことにしてヒロイン復帰させたらとか、ソードマスターヤマト的に終わらせて新しいハーレム系主人公の話書こうかとか思ってたくらい。やる気はないですが。いえハーレム系主人公のネタはあって書いてみたくもあるんですけど

それらやったらまた別に反応起きそうで面白そうです。いつそのこと全員ねとられ主人公ってのも新しいかもしれません。やる気はないですが

ヴァンテスのホルンへのフラグは屋敷の事件解決で立てたつもりだったんですが、唐突に受け止められたのかあ

二人の会話とか書いていたほうがよかったのかな

書いてる本人がイメージできて、それが当たり前のものとして無意識に読者に押し付けてしまったんだろうなあ

モチベーションが下がるのではと心配されている方がいらっしやったのですが、上で述べたように読者の反応が予想外で笑って逆に一時的に上がりました

三大悪女と聞いたことあるキャラに並ぶとか、アマチュアなのにプロの作ったものと同等の評価ってすごいですね

主人公扱いすて。これについては違うのではないかなと。この主人公必要に迫られなければ積極的に動かないので、誰かから頼まれて初めて物事に関わることが多い。そして頼みを解決し、恩が発生。この恩を依頼人が返さずにいることで、扱いすてされたように感じられたんだと私は推測しました

ですが主人公的にはホルンからしつかり報酬をもらっていて、恩はそれでなくなっていると思っています。報酬は知識や実技です。実際役立っているので、十分働きに応じたものはもらっていると思っています

あれですね。評価点一万超したし、これだけ反応もらえたし、満足してもいいのかもしれない。というかしてしまった感がある

真面目に考えて、読者の求めるものをわかってなかったということ。いえ万人を満足させるものを書けるとか自惚れたことをいいませんが

書いている本人的にはホルンヒロインじゃなかったただけなのによって感じなんですよね

書きたいものを思うがまま書いてるだけでは駄目なのかと思ってしまうわけです。ある意味いい勉強になりました。今回のことを上手く糧にしたい

ちよいと思ったのが、ヒロインという書き方が悪かったのかなと。主人公の近くにいて少しだけいい雰囲気になる役目の人と断言すれば、ここまで反応はなかったのかな。正直どの女性キャラも夫婦になる役とまでは意識してませんし

どれも言い訳にすぎませんね

最後にこれにて読むことをやめる方々、これまで読んでいただきありがとうございます

といっても既に読んでらっしゃらないので、ここに書いても意味はなさげです

成り行き任せの救出劇

身代金を渡す日となり、指定された時刻に着くよう家を出たグダナル。そのグダナルの後ろから離れてついていく幸助。ウィアーレは奥さんと一緒に留守番だ。一緒に来ても隠密行動のできないウィアーレは足手まといでしかない。

人が多くグダナルを見失ないそうになるが、目的地は聞いているので、万が一見失っても急いで移動すれば先回りも可能だ。

目的地につくまでに幸助は、グダナルをつけている者がいないか探ってみたりしている。だが自身に注意が向けられている時と勝手が違い、わからなかった。

そのまま二人は一定の距離を保ち、目的地である街外れの廃墟にやってきた。ここは畑仕事に使う道具や種をまとめて入れておく建物だった。だが古くなって使われなくなったのだ。今は子供たちの秘密基地として使われている。

その建物の前で待つグダナルを、幸助は近くの建物の屋根の上に伏せて見ている。

そのまま五分十分と時間が流れていき、三十分になろうかという頃、二メートルの塀を乗り越えて三十過ぎの男が姿を現した。目立たないようにという配慮か街を歩いている人たちと似たような服装だ。塀から下りる様子を見ていないと一般人と間違う者がほとんどだろう。

幸助のいる位置からは二人の話し声は聞こえない。グダナルが騒ぐ様子が見えるだけだ。

二人の会話は長く続かず、お金を渡し落ち込んだ様子を見せるグダナルを無視して、男は塀を軽々と登り去っていった。

グダナルに詳しい話を聞くため、幸助は七メートルの高さから飛び降りる。なんとなく会話の内容は予想できているのだが。

「どうだった？」

「……もつとお金を持ってこいと」

子供を連れてきていなかったの、幸助はその可能性もありえる
と思っていた。

「もつと言ってもこれ以上は無理だと言ったのに、聞き入れるこ
とはなかった！ 本当に無理なのに！」

「とりあえず子供の様子だけでも確認してこようか？」

「できるのか!？」

グダナルは驚きと期待が混じった表情で幸助を見る。

去った男はゆっくり移動しているようで、その気配をなんとか感
じ取れている。

「今ならまだ誘拐犯を追跡できるから」

「頼む！ こっちは帰って金策考えてみる！」

「じゃあ、ちょっと行ってくる」

誘拐犯よりも身軽に塀を飛び越える幸助を見て、グダナルはもし
かしたら幸助はかなりの実力者なのではと思い始める。

そのような人物に協力してらえることに、まだまだ自身の運は尽
きていないと気合が入る。金策もどうにかしてみせようと、グダナ
ルは走って家に帰っていった。

今幸助はところどころに生えている木に身を隠しつつ、誘拐犯を
追ひ草原を歩いている。数十メートル先にいる誘拐犯はときおり、
周囲を見渡し警戒しているようだが、幸助には気づかず林の中に入
っていく。

「あそこに隠れ家があるのかな？」

呟いた幸助は警戒しつつ林へと近づいていく。気配を探り、見張りがいないか確認した幸助は林へと静かに足を踏み入れた。

林の中には鳴子など侵入を知らせる罠が設置されていた。運よく足元に張られているロープに気づいた幸助は罠にも警戒し、先に進んでいく。

隠れ家までは時間はかからず、二十分弱で木々の間から遠目に確認できる位置にたどり着いた。

幸助はそこから先には進まず、観察を優先し隠れ家を中心に円を描くように移動を始める。

隠れ家はそこその広さを持った二階建ての屋敷で、広さはバケツコート二つ分ほどか。建てられて数十年は経っていそうな外見だ。手入れはされておらず、あちこちと壊れている箇所がある。それを見て、幸助はここは犯人たちの一時的な滞在地なのだろうと判断する。たまたま見つけたここが犯人たちの仮宿にするに相応しく、用が済めばすぐにでも移動しそうだ。

円を描き出して半周を過ぎた頃だろうか、幸助は一瞬視線を感じた。気配を感じたのはその一瞬だけで、今はなにも感じない。相手は隠れるということに優れた技量を持っているのだろう。首をかすかに傾げるも、視線を感じた方向は見ずに移動し続ける。気づいていることを悟らせないためだ。

そのまま歩き続け、反応を待つ。接触してくるのならばそれでもいいし、こないならこないで無視するつもりだ。

さらに五分ほど経った頃、背後でかすかに草が揺れる音が聞こえ、ほかに草木以外の匂いが流れてきた。ここまで近づかれると気配もわかる。動物ではなく人の気配だ。

幸助は後ろから見えないように投げナイフを抜き取り、手のひらに隠し持つ。

意を決したのか気配の主が幸助に近づく。依然として気配は抑え

たままなので、闘いになるにしろ話し合いになるにしろ先手を取るつもりなのだろう。

その意図には気づかず、幸助は気配がある程度近づいてきたところで振り返る。

そこにいたのは軽装の二十半ばの女。黒の長髪を赤いリボンでまとめ、目元から下を布で隠し、腰の後ろにショートソードとバックパックが見える。幸助はなんとなくクノイチという言葉が脳裏に浮かんだ。

「なっ!？」

気づかれているとは思っていなかった女が驚きの声を上げる。

「なにか用事でも？」

「……あなたは何をするためにここに？ はじめはここにいる者たちの仲間かと思ったけど合流する様子はなく、逆に様子を窺っているようでした」

軽く深呼吸し気分を落ち着けた女は幸助に問う。

「ちょっとした知り合いの子供がここに捕まっている。その無事を確認したかった」

「なるほど……中に侵入するつもりはありますか？」

「それに答える前にこっちも聞きたい。あんたはあいつらの仲間なのか？」

「違うわ」

即答した口調に迷いはない。

二割ほど猜疑心を持ったまま、幸助は質問に答える。同じように女も幸助の言葉全てを信じているわけではないのだろう。

「隙があれば行ってみるのもいいかなとは思ってる」

「あなたは潜入といったものを行ったことがあるのですか？」

「ないよ」

一度行っただ変装しての潜入と女が聞いている潜入は違うだろうと判断し、ないと正直に答えた。

「でしたら止めてください。見つかって騒ぎを起こすのがオチです」
「だろうね。潜入は隙あらば行こうと思ってただけで、無理はする気はなかったし」

「ええ、それがいいでしょう。空を飛ぶなど不意をつけるような手段がないかぎり、潜入は厳しいでしょうし」

「空なら飛べるけど？ 転移も使えるから脱出するのは問題ないね、そういえば」

「それは本当ですか？」

ぽかんとした様子を見せ、女が聞く。幸助は頷き、その様子に嘘はなさそうだと考えた女は少し考え込む。

なにを考えているのかわからない幸助は、女に注意を向けつつ、隠れ家の偵察を再開する。

十分ほど経ち、考えをまとめた女は口を開く。

「協力しませんか？」

「協力って？」

「内部調査をしたかったのですが、侵入時に気づかれる可能性がありまして。」

日が暮れて、あなたが私を抱え空から屋敷に侵入。騒ぎになりかけたら、私を連れて転移してくれと助かるのですが」

「さっきも行ったように俺は潜入調査はしたことないよ？」

「できるだけ静かに行動してもらえれば、こちらで索敵や先導はします。」

それにあたなが偵察していた様子から見ると、それなりに大丈夫ではないかと」

今度は幸助が考え始める。

目の前の人物はおそらくこういったことに関して技量が高いのだろう。でなければ潜入調査をしようとは考えないはずだ。

自身の技量は高くない。けれどもプロが共に行動してくれるならば、グダナルの子供を連れ出す機会も生まれるかもしれない。

少しあちらの事情を聞いて、それに答えてくれるのならば信じてもいいのかもしれないと結論を出す。

「協力を願うのならそっちの情報がほしい。全部とは言わない。軽くでも事情を話してもらいたい」

信頼を得ておくのは悪いことではないと女は考え、頷いた。

「……いいでしょう。」

とある高貴な家の子供が囚われてしまったのです。私はその子供の救助もしくはどの部屋にいるか、誘拐犯の情報調査のため派遣されたのです」

「こっちはギルドや兵に協力を拒まれたんだけど、そっちもそういった事情で自力調査に？」

「それについては謝らないといけません」

女の言葉の意図がわからず、幸助は首を傾げる。

「ギルドなどが動かないのは、高貴な家の子供がさらわれたことをできるだけ広めないために、動くなと命令が下っているからです」

「もしかして高貴な家の子供ってすごいお偉いさんの子供だったか？」

女はそれに答えない。だが目が肯定しているように見える。

公爵家とか侯爵家とかの子供かなと幸助は考える。家柄は当たっている。そこに付け加えるのなら、国際問題に発展しそうなことになっているということ。情報が足りず幸助にはそこまで想像できない。

さらわれた子供がこの国に所属しているのなら、ギルド依頼と兵士派遣になにも問題はない。だがその子供は他所の国から武闘大会見学のため来ていたのだ。警備の隙をつかれてさらわれたしまったなどと国の面目を潰すような情報を広めるわけにはいかず、情報制限のため兵士とギルドに動くなという命令が出たのだった。

実際は警備だけが悪いのではなく、子供の不注意と人の多さも問題だったわけだが、さらわれてしまった今では言い訳にしかならない。

兵士たちの動きを止めているうちに、秘密裏に解決するためごく少数が動いている。その中の一人がこの女だ。

この動きで街中と街周辺に居を構えていた盗賊が激減することになるが、幸助にはまったく関係のない話だ。

「それで協力は？」

「するよ。こちらにも益がある提案だし」

「そうですか、助かります」

女は小さく安堵の溜息を吐く。

「とりあえず林から移動しましょう。見回りが出る可能性があります」

幸助は頷き、先導する女について移動を始める。

移動は二人でしているのだが、足音は一人分幸助のもののみだ。どうやっているのだろうと幸助は女の歩き方を見て真似てみようと考えてる。だが今の幸助の目には特殊な歩法には見えず、真似ることはできていない。

歩きながら名前だけ教えあい、女の名前がナガレだと判明する。そうこうしているうちに林を抜け、土が盛り上がり地層が見えている場所に移動し、林から身を隠す。

「しばらくここで時間を潰す予定ですが、あなたは食料を持って……いないようですね」

幸助の体をざっと眺めて判断する。

長期戦を予定していなかった幸助が身に吐けているのは、いつもの剣と投げナイフくらいだ。ジャケットは鷹に変え、ウィアーレのそばに置いている。

「時間があるなら街に戻って買ってくるけど？」

「私が携帯食を持っているので、それをわけましょう」

忍者っぽいナガレが、どのようなものを出してくるか興味が出てきた幸助は頷き同意した。

そして出てきたものに幸助は感動した。出されたのは、味噌に昆布出汁を混ぜワカメを入れて丸めたものと干飯だ。味噌はお湯に溶かし味噌汁に、干飯は水と一緒に食べる。

久々に口にした和食に近いものに、幸助は思わず涙ぐんだ。

口に合うかと思っていたナガレはその幸助の様子に面食らう。決して上等といえる品ではないのだ。それなのにここまで感動することに驚いている。

「ありがとうございました」

食べ終わり、幸助は心の底から礼を言う。

「そこまで美味しかったですか？」

「美味しいというよりは懐かしいといった方がいいかも。たった数ヶ月食べてなかったただけだけど、故郷の味を思い出せて嬉しかった」

「あなたはコウマの出身？」

「違うよ」

「コウマ以外にも、こういった食事を出すところがあるのですね」

コウマという国に興味が出た幸助はどんな国が聞いていく。

コウマはペレレ諸島で三番目に大きな島にある国だ。人口一千万強。江戸時代といった明治以前の日本に近い国柄だ。

季節は四季おりおりというわけではなく、夏が長めで冬が短め。子供は着流しで、大人は平安貴族が着ていた束帯を簡略化したものを着ることが一般的。ナガレが着ているものも和装に近い雰囲気を感じさせる。

食事も和食に近く、そこに行けば幸助は慣れ親しんだものをいつでも食べることができだろう。

「一度行ってみたいな」

「出入国を規制してはいませんか、いつでもいらしてください」

「いつか行くことにするよ。また米とか食べたいし」

出身国のことを好意的に捉えられたことで、ナガレが少し警戒心を解いた。故郷のことを褒められれば、多くの者は嬉しく思う。それはナガレも同じだった。

これにより休憩中も警戒しっぱなしということとはなくなり、ナガレほど警戒心が高くなかった幸助は当然として、ナガレも十分な休

息をとることができた。

そして時間は流れ、日が沈み雲が多くなってきた時、二人は動き始める。

「それじゃいくよ？」

「いつでもどうぞ」

幸助は魔法を使い浮かび、ナガレの両脇に後ろから腕を入れ持ち上げる。そのまま浮かび、林の五倍ほどの高度まで上がり、そこでようやく止まる。初めて経験する高度にナガレは緊張を隠さず、こくりと喉を鳴らす。

館の上空まで移動し、そこから少しずつ高度を下げていく。

「ストップ」

館全体をはっきりと見渡せる高度で、ナガレは幸助を止める。見張りを探し、上空を気にしている者がいないか確認する。

「このまま屋根に着地」

「わかった」

ナガレの指示に従い、魔法を解き屋根に静かに降り立つ。

「ここからは静かに行動するから注意して」

小声で言うナガレに幸助は頷きを返し、それを見たナガレは動きだす。

二人は屋根の壊れている箇所から内部へと入る。ナガレはなにも音をさせずに着地し、幸助は念のため再度魔法を使い浮いて静かに着地する。

事前の提案どおりナガレが先に動く。床や壁に耳を当て、人の移動を確かめていく。静かに扉を開け、廊下の様子を確かめてから幸助に手招きする。

屋敷の二階を移動する二人は、一つ一つの扉を念入りに調べ、誰もいない部屋の中に入っていく。まずは建物内部調査を優先させたのだ。

それでわかったのは寝ている誘拐犯が一人いて、ほかの部屋には誰もいなかったということ。さらわれた者は一階かもしれないが地下にいるのだろう。

二人は入ってきた部屋に戻り、小声で話し合っている。

「一階に俺もついていっていいの？　ここまでは問題なかったけど、これから先は邪魔になるかも」

「それは否定できませんね。ですがあなたの魔法が必要なもの事実。とりあえず一度私が先行して調べてきます。あなたはここで静かに待っていてください」

幸助は頷く。

「では行ってきます」

そう言ってナガレは部屋を出て行った。

幸助は壁を背に座り、ナガレの帰りを待つ。静かな夜で、物音は一階からかすかに聞こえてくる話し声のみ。

暇だと思いつつ三十分ほど経ち、扉が開く。すぐに動けるように腰を浮かせた幸助は、ナガレの姿を見て再び座る。

「どうだった？　さらわれた子たちの場所とかわかった？」

「わかりました。少しあなたに聞きたいのですが、転移で運べる人数はどれくらいですか？」

「知り合いの話だと使用者を含めて三人」

「……困りました」

「なにが？」

「さらわれた者が四人いました。一度に全員連れ出せませんよね？」
「無理だね。全員を運ぼうとすると、最低でも三回の転移が必要になる。ちよつと魔力が足りない」

屋根から部屋に下りるときに使わなければ、ぎりぎり三回分足りていた。

「誘拐犯たちはちよくちよく子供たちの様子を見ていたようですから、いなくなればすぐにわかります。」

子供たちが一人でもいなくなれば、侵入者が助けたと判断し、残った子供たちを人質に私たちをおびき出そうとするかもしれません。

あなたは子供を見捨てることができますか？」

「無理かな」

「私ものです」

二人とも目的の人物さえ無事ならば、ほかの子たちが死んでもかまわないと思えるほど外道ではない。

「ここは一つ、考え方を変えてみましょう。犯人に知られずに連れ出すのではなく、屋敷内の安全を確保し子供たちを連れ出す」

「つまり犯人の殲滅？」

「ええ、付け加えるのなら再犯できないように全員を逃がすことなく、無力化もしくは殺害が望ましいです」

「俺は殺害は無理。無力化も一人二人ならできるかもしれないけど、その際大きな物音立てることになって、ほかの犯人に侵入者がいるって知らせることになりそうだ」

「そうですか、ならばあなたには子供たちの護衛を担当してもらう

ことになります」

「それならできる。防御結界で子供たちを囲めばいいよね？」

「結界があるなら大丈夫ですね。人質にしようにも近づくこともできなさそうです。」

ではこれからの行動を話します。

犯人に気づかれぬよう動いて、各個無力化していき、戦力を削ります。次に子供たちの安全確保。最後に犯人が集まっている部屋の扉の一つを除き開かないように細工して奇襲。なおこれらは変更されることもあります。

以上です。質問は？」

「各個無力化って、犯人が個別にいる場所の確認はできてる？」

「はい、調べてます。寝ている者が四人、書類を書いている者が一人、本を読んでいる者が一人。あとは五人ほど集まって酒を飲んでいます」

「五人と戦いになって勝てる？」

「大丈夫です。あの程度の力量ならば、楽勝とまではいわずとも油断さえしなければ負けはないです。ただ相手が逃げ出す場合があるので、足止めだけでもお願いしたいのですが」

「足止めだけでいいのなら」

「それで十分です。では行きましょう」

先ほどまでと同じようにナガレが先導し、予定をこなしていく。

寝ている者たちには、さらに眠りが深くなる魔法をナガレが使い、紐で縛り、猿ぐつわをかませていく。何事もなく四人を縛り、次に起きて一人でいる者たちのところに向かう。

この二人には眠気を誘う魔法を幸助が使い、十分ほど待ちうとうとし始めたところへ、ナガレが静かに近づき、眠りを深める魔法を使った。起きる可能性があるのに近づいたのは、この魔法が効果を発動するのに接触する必要があるからだ。わずかでも触れればいいので、起こさずに魔法を使うことができた。

この二人も縛り、猿ぐつわをかませて、見つかりにくいように部屋の隅に転がしておいた。さらに布を被せて隠す。これで誘拐犯の誰かが訪ねてきても、少しは時間稼ぎができるだろう。

次に子供たちを結界で守る作業だ。子供たちの下へと向かう際、様子を見るために誘拐犯の一人が部屋からでてきて、鉢合わせになりそうになったが、廊下の角に身を隠し上手く避けることができた。子供たちも騒がれると面倒なので、眠らせておく。結界からでないように、ついでに縛っておく。その中で一人明らかに雰囲気の違い子供がいて、幸助はおそらくその子がナガレの求める子供なのだろうと考える。自身の探し人も確認できた。

結界を張り終え、二人は最後の作業に移る。眠気を誘う魔法を使い、三つある扉のうち二つを閉める。予定では戦闘だったのだが、幸助が睡眠誘導の魔法を使えると知って無力化へと変更した。

ナガレも好んで血を流したいわけではなし。事情聴取出でより多くの情報を引き出すため、生かす方向に変更したのだ。

魔法を使い五分もすると犯人たちは全員眠り込んだ。酒が入っているのだ、眠気に逆らおうとも思わなかっただろう。気持ちよさげに眠る男たちをナガレは次々と縛っていった。縄抜けできないような特殊な縛り方をしなければならず、幸助では手伝えなかった。

全員を縛り終えたあと、刃物は取り上げ、テーブルの上に置きひとまず目的は達せられた。

あとは犯人全員を地下にでも放り込んで、地下入り口を塞いでおくだけだ。

力仕事ならば幸助も役立つことができ、犯人たちは三十分も立たずに地下室へと移動させられた。酸欠にならないように地下室への位置口は少し開けられている。その入り口の上にいると物を置いたソファアに乗ったので、縛られた状態で入り口を持ち上げることは不可能だろう。

「これにて目的達成です。協力ありがとうございました。」

兵への通報はこちらでしておきます。

後日、お礼へと出向きたいので滞在地を教えてもらえませんか？」

グダナルの家のある場所を教えた幸助は、一つ聞きたいことができた。

「さらわれた子供の親がすでに身代金を渡しているんだ。それを回収してもいい？」

「そうですね……かまわないかと。おそらく書類仕事をしていた男の部屋にあると思います。一緒に行きましょう」

ナガレも書類を回収しておきたかったのだ。幸助の提案は渡りに船だ。

ナガレの予想通り、身代金は書類の置かれている部屋にあった。ほかに子供をさらわれた親ですでに渡した者もいたのだろう、閃貨は二十八枚あり、ほかに犯人たちの資金らしきお金も分けられて置かれていた。

「じゃあ十枚取るよ」

「確認しました。この旨を兵に伝えておきます。

さあ子供たちを連れて街に戻りましょう」

二人は子供たちを起こすことなく運ぶことにする。ナガレが自身の助けたかった子を片手で抱きあげ、幸助は三人を運ぶ。背にはグダナルの子を、両腕には見知らぬ子を抱えて移動を始める。見知らぬ子供の扱いが若干ぞんざいだが、置いていかれないだけマシだろう。

木々に遮られ星も見えない真っ暗な林の中を、魔法の明りを浮かべて進む。時々獣が気配が近くが感じ取れるが、流れが空いている手で棒手裏剣を投げると去っていった。

林を抜け、草原を歩き、街の入り口に到着する。日が暮れてからは街の出入りに規制をしている。だがナガレが事情を話すと、すでに話は通っていたらしく街に入ることができた。幸助だけならば確実に締め出され、街の外で一夜を明かすか、塀の低い場所を乗り越え侵入することになっていた。

「コースケ君。両腕に抱えている子供たちはここに置いていってください。連れて帰ってもどうにもできないでしょう?」

幸助はその言葉に従い、兵に子供二人を渡す。親元に連れて行つたときの説明が面倒だと思ったのだ。兵から説明を受けた方が、行きずりの男が説明するよりも親も落ち着いて話を聞けるだろう。二人は助けたかった子供を連れて、兵の詰め所を出る。

「私はこちらですから。」

今日は本当にありがとうございました。

お礼は早くて明日、遅くとも明後日には。

では失礼します」

ナガレは一礼し去っていく。幸助は少しか見送り、グダナルの家に戻る。家の明りはいまだついていた。いつもならばグダナルたちは寝ている時間なのだが、幸助を待っていてくれたのだろう。

「ただいまー」

「お帰りなさい。遅かったですね……後ろの子はもしかして?」

グダナルの妻が幸助を出迎え、背負っている子を見て目を見開いた。

「運良く助け出せた。この子で間違いないんだろ?」

そう言って幸助は背負っている子を見せやすいように体の向きを変えろ。

「あなた！　あなたーっ！　ジュリオがっジュリオが帰ってきましたよ！」

妻がグダナルへと大声で呼びかけると、何かにぶつかると音がした。させつつグダナルが大慌てで玄関までやってきた。

「ジュリオー！」

幸助から息子を受け取り、夫婦は溢れ出す涙をそのままに力のかぎり抱きしめる。

少し遅れてきたワイアーレがその様子を目を潤ませ見ている。ひとしきり抱きしめ満足した夫婦は、ジュリオをベッドまで運び、そのまま寝させる。

「なにからなにまで世話になった。本当にありがとう」

夫妻は深々と幸助に頭を下げる。

「これ取り戻してきたお金」

そう言って閃貨を渡そうとする幸助をグダナルは止める。

「それはもともとは君のもの。私たちが受け取るわけにはいかない。どうかそのまま懐に戻してください」

幸助がジュリオを助け出してきたことで、お金は必要なくなった

のだ。自前で集めていた閃貨五枚を返し、わずかな利子を残して借金はいくらになっている。利子も三ヶ月も商売に励めば問題なく返済できる。これ以上幸助に甘えるわけにはいかないと、グダナルは受け取りを拒否したのだった。グダナルの妻も同意見で、子供を助けてもらったことに感謝しお礼をするべきで、お金を受け取るのは筋違いだと思っている。

夫妻の説得され、幸助は閃貨を懐に戻す。幸助の稼ぎ出したお金なので自然なことなのだが、本人的にはすでに所有権をなくしたお金だったので、自分のものにしてしまっているのかなと考えていた。

「救出でお疲れだろう。日も落ちて随分経つ。休んだらどうだ？」

グダナルの薦めに妻とワイアーレも同意し、ゆっくり休むように薦める。そこまで疲れていなかったりするが、善意で言ってくれているとわかるので素直に従う。軽く汚れを落とした後、ベッドに入る。十分後には幸助は眠りについた。

幸助が眠っている間に、ナガレが報告を済ませ、誘拐犯たちは夜明け前に兵に捕まることになる。それを幸助が知るのは、次の日ナガレに会ってからだ。

当主様はまちぼうけ

夜が明け、目が覚めたグダナル一家は改めて再会を喜びあう。目が覚めたら家に戻っていたジュリオは混乱していたようだが、両親の顔を見てどうして助かったのかどうでもよくなり、ただただ家に戻れたことを喜んだ。

朝食の席で、幸助とワイアーレを紹介されお礼を言ったジュリオは、ほかに捕まっていた子供たちのことがどうなったか聞く。もしかすると自分だけ助かったのではと思ったのだ。だが全員助けられたと知って安心したように笑う。それを見て、心優しい子なのだと幸助とワイアーレは和み、夫妻も育て方を間違っただけでいいなかったと嬉しくなった。

「これでここに滞在する用事もなくなったし、宿を探そうかな」

「そうだね。いつまでも滞在するわけにはいかないし」

「いくらでもとは言えないが、武闘大会が終わるまでは滞在しているってください」

出て行こうと話合う二人をグダナルが引き止める。お礼もまだしてないのだ。もう少し滞在して欲しい。

「もう少ししたら連れもくるはずだから、さすがにその人も世話にはなれないよ。」

「そんなわけだから今日中には宿を……あ」
「どうしたのコースケさん」

何かを思い出したかのように言葉を止めた幸助に、ワイアーレは首を傾げる。

「明日までここにいないといけないかも」

「私たちとしてはかまいませんが、なにか特別な訳でも？」

「助けるときに協力した人がここに来るようになってるんだ」

「救出に動いたのはワタセ君だけではなかったのか。その人にもお礼を言わなければ。」

「詳しい話を聞かせてもらいたい」

幸助はグダナルと別れてからのことを話し出す。

ジュリオは妻に連れられて、散歩を兼ねた買い物に出かけている。誘拐されたことを思い出させることのないようにといった配慮だ。

二人が一番憤ったのは、ジュリオのほかにも誘拐された子供がいたという部分だ

絞首刑にでもなってしまうと気炎を吐くグダナルにワイアーレも同意し、その様子を見て幸助は少しだけ引いていた。

話を終え三十分ほど経ち、出かけていた二人が帰ってくる。

家事と商売の手続きをする夫妻に代わり、することのない幸助とワイアーレがジュリオの相手を始める。主に相手をしているのはワイアーレなのだが。幸助はオセロをしている二人を横から眺めているだけだ。

そうして時間が流れ、昼食を食べ、ジュリオの相手を再開し四時手前といった頃、店にいたグダナルに声をかける者がいた。白の下がさねと青紫色の単といった、幸助の見知っている束帯よりもほっそりとした簡易束帯に身を包んだナガレだ。

「はいはいどちらさまですか？ 店は明日からなのですが」

「申し訳ない、客ではないのです。こちらにコースケという青年が滞在しているはずなのですが」

「あーあなたがナガレさん。」

息子を救出してもらいありがとうございます」

グダナルは深々と頭を下げたあと、家の奥へ声をかける。

「ワタセ君！ お客ですよ」

呼ばれたコースケは軒先に現れ、昨日とは違った姿のナガレに少し驚いた。ついてきたウィアーレも見慣れない服装に目がいつている。

やってきた幸助にナガレは小さく一礼する。流したままの黒髪がさらりと揺れる。

「約束どおり、お礼に参りました。

私の主もお礼を言いたいと言っておりまして、失礼ながらご足労願えないでしょうか？」

「お礼とかいいのに。ありがたく受け取ったと伝えてもらえる？」

その言葉にナガレは困ったような表情を浮かべた。

「主が是非会いたいと申してまして。

お越し願えないでしょうか？」

「絶対行かないと駄目？」

お偉いさんに関わると碌なことにならないのではと思いつつ聞いてみる。

エリスやホルンといった特級のお偉いさんに関わって神域に行ったのだ、これ以上の縁はさらなる困難を呼ぶかもしれないと考えている。

「正直、来てほしいです。

主に報告したとき、あなたのことも報告しました。主はあなたの能力の高さに興味を抱いたのです。主もシズク様も強い方が好きで

すから。

もちろんお礼を言うことも目的ではあるのですが」

シズクというのが、ナガレが助けたかった子供の名前だ。

「コースケ君が来ない場合は主が押しかける可能性もあります。

そうなるどころかまわずに勝負を挑むことになり、被害が出るかもしれません。似顔絵を描いて渡してあるので、間違って他人を襲うということはないでしょうけど」

「自重はしない人なの？」

幸助は呆れを滲ませた声を出す。

「ええ、戦うということについて妥協しない人たちですから、あの親子は」

自分のことを口止めするように頼むんだったかなと幸助は考えているが、口止めされてもナガレは報告していただろうから、あまり意味のない思考だ。

いまだ会っていないナガレの主に対しての心象をマイナスにしなから承諾を口にする。ナガレに対しての評価は保留だ。命じられて脅しなのか、自身の判断での脅しなのかわからないからだ。

「行けば被害はでない？」

「ええ、出てもごく小さなもので済むのではと思われます。それくらい被害ならば、うちのものは慣れておりますので」

「行ったほうがいいかな、これは。」

その前に宿の手配をしときたいんだけど」

面倒ごとを頼まれた場合は時間を引き延ばして、エリスと合流し

逃げればいいやと思いつつ、会うことに頷いた。

「来てもらえるのならば、多少の寄道は問題ありません」

「そういうわけだから、ワイアーレ荷物まとめよ。」

「ちょっと支度してきます」

そうナガレに断りを入れ、幸助たちは家の奥に戻っていく。

グダナルたちはもう少し滞在してはどうかと引き止める。まだ恩返しできていないのだ。だが幸助としても早く宿をとらないと大会が近いせいもあって、宿無しになりかねない。エリスがここにどれくらい滞在するかわからず、下手すると長期滞在もありうる。そうなった場合、長くここに厄介になる可能性もあり、それはさすがに気がひけるのだ。結局いつかお礼をしてもらうということで納得してもらい、幸助とワイアーレはグダナルたちに別れを告げる。

「俺たちここには初めてきたんだけど、ナガレさんは宿のある場所知ってる？」

「ええ、わかりますよ。」

今の時期だと格安はすべて埋まっていると思いますね。それなりな宿も下手すると埋まっているかもしれません。

「確実に空いてるのはランクの高い宿でしょう」

「一人一泊いくらくらい？」

「そうですね……銀貨二枚あたりだったかと」

「銀貨二枚!？」

驚いた声を出したのはワイアーレだ。一般的な宿で一泊銅貨四枚、実に十倍の差があるのだから驚くのも無理はない話だ。

幸助もワイアーレほどではないが、シディの宿との金額の違いに驚いている。

ちなみに最高ランクの宿で一人一泊銀貨十枚払うところがある。

一般人の月収入の半額が一日でとんでしまうのだ。もしそんなところに泊まるなどということになれば、ウィアーレは気絶しっぱなしで過ごすことになりかねない。

「コココースケさん！？　そそそんなところは止めようね！？　ね！？」

我侬と言わなけれ。泊まるのは一日だけではなく数日に渡り、そうになると一般人が気軽に使えるような額ではなくなるのだ。

「一般的な宿が空いてればそっちに泊まるよ。でもなかったら高い方に行くから」

閃貨十枚あるのだから、泊まることになっても問題はない。長期滞在も可能だ。お金はあるのだから野宿という選択肢はない。

一般的な宿空いてますようにと必死にウィアーレが祈る中、三人は宿へと向かう。

その間に幸助は昨日の顛末を聞く。

「彼らはセブシックからカルホードへと流れてきた犯罪組織の一部だったようです。

大元の組織は半年ほど前に壊滅。幹部は軒並み死亡。彼らの多くは下っ端、一番上でも幹部直属の部下のもう一個下。

組織を立て直すため、こちらで資金集めをしていたようです。

下っ端ですので行動も計画も大雑把。綿密な計画を立てられるならば、シズク様をさらうといった目立つ行動はしないでしょう。事実自分たちがさらった子供が、侯爵家の跡取りだとは知らなかったようですよ。侯爵家縁の者だと聞かされ驚いていました」

「大物をさらうつもりはなかったのか。今は雌伏の時だと一応わかってたんだな」

「そうですね。ですがまともな計画も立てられないのでは、近々捕縛されていたと思います」

「これでその組織は完全に壊滅したことになるのかな？」

「それが組織の人間はまだいるようで。あの廃墟に兵たちが向かった時、偶然仲間の様子を見に来たらしい男と鉢合わせたのだと聞きました。その男は兵たちを見て、仲間は捕まったのだと判断し、すぐに逃げ出し捕まえることはできなかったということです」

「またほかの場所で誘拐とかするかもしれない？」

「おそらくは」

「しつこい奴らだねえ」

「本当に」

「そういえば捕まった奴らの処罰ってどうなる？」

「口封じのため、情報を引き出したあと首をはねられました」

命が軽いなど、幸助は心の内のみで思う。

死刑が珍しい現代日本人ゆえの感想だろう。むしろこちらの処罰としては当然の結果だ。手っ取り早く再犯を防ぐことができるのだから。

「あ、見えてきましたよ」

ナガレが宿を指差す。

三人は宿に入る。入った瞬間、幸助とナガレは多分駄目だと予想できた。人の気配が多かったのだ。

幸助が用件を告げると、予想通りの答えが返ってくる。

「申し訳ありません。すでに満室です」

「そうですか。残念です。」

「ここらに空いてそうな宿はありますかね？」

「そうですね……私どものような冒険者や庶民相手の宿ですと難し

いかと。

人がいないように見えて、すでに予約済みなんてこともあるでしょうね」

「ありがとうございます」

「いえ、またのお越しをお待ちしております」

この宿のほかにも三軒ほど訪ね歩いて、どれも同じ返事だった。その返事を聞いたたびにワイアーレの顔色は悪くなっていった。

「これはもう覚悟を決めて高い宿に行くしかないよね」

「そうしたほうがいいでしょうね」

二人は同情を込めた目でワイアーレを見ている。

「あれだよ。滅多にできない贅沢だと思って開き直ってしまえばいいよ」

「一生に一度なような気もする」

「さすがにそれは言い過ぎでは？」

「私のギルド員時代の給料だと、言い過ぎじゃないんだ」

加えて今は無職みたいなもの。そこから考えると、支出の大きさに過剰な反応するもの無理はないのかもしれない。

テンションの低いワイアーレを連れて、幸助たちは高ランクの宿にやってきた。

しっかりとした造りの大きな宿で、華美な内外装というわけではないが、それでも安っぽさは感じさせない。フロントホールは白く光沢ある総石造りで、綺麗に磨きぬかれ、掃除一つにも妥協は見せていない。

フロントいる受付は、やってきた見るからに一般人といった幸助たちを見て、表情を変えるなどということをしてしない。教育も行き届

いているのだろう。

「いらっしゃいませ。宿泊されますか？」

「うん。部屋は空いてるかな？」

「はい。いまだ空きがございます」

「じゃあ個室三部屋、お願いできる？」

エリスの分も取っておくつもりだ。

「三人でのお泊りなら、大部屋もありますが？」

「男女での泊まりだから分けておいたほうがいいと思うんだけど」

「大丈夫です。寝室が個室になっている大部屋ですから」

「それなら大丈夫か」

幸助はウィアーレにそれでいいか聞こうとして止めた。このことについては聞いてもたいして参考にはならないだろうと思ったのだ。

「その大部屋でお願いします。いくらになりますか？」

「一泊銀貨五枚となります。書斎や遊技場使用、マッサージといったサービスをご希望ならば、銀貨一枚追加となりますが、いかがいたしますか？」

「んー……今ここで払わなくてもあとでお金払えばそれらのサービスを受けることは可能？」

「はい、可能です。その場合は、サービスを受ける際にお金を頂くことになります」

「じゃあいいか。サービスはなしで。」

とりあえず十日分先払いしときます」

金貨二枚を取り出し、受付に渡す。

偽物ではないかを確認し、受付はお釣りを差し出す。

その後、食事は朝七時から夜九時までの間ならばいつでも食堂で食えることができる、浴場の使用時間などといった諸注意を話し受付は鍵を渡す。

「あちらに見える階段を登り、目の前にある廊下を真っ直ぐ進み、左にある202と書かれたプレートの部屋がお客様の部屋となります」

「これからしばらくお世話になります」

「お、お世話になります！」

そう言って頭を下げた幸助とつられるように頭を下げたウィアーレを、受付は好意的な目で見る。宿の職員も人格を持つ個人だ、礼儀をわきまえている客には好感を持つ。

「はい。こちら精一杯おもてなしさせていただきます」

受付と別れた三人は指定された部屋に向かう。

このような宿の話はシディにとっていい土産話になるのではと思った幸助は、歩きながらあちこちを見渡し物の配置などを覚えていく。

ウィアーレとナガレからはただ落ち着きがないように見え、幸助も緊張しているのかと的外れな予想をしていた。

「広いし、手入れも行き届いてるな。銀貨五枚取るだけのことはある」

メイド経験でベッドメイクなどの目利きのできる幸助から見ても、手入れは貴族の屋敷と同等のように感じられた。

「本当にここに泊まってもいいんでしょうか」

ウィアーレにとってはこの部屋が眩しく見えるようで、目を瞬かせている。幸助にとっては豪華すぎるというほどでもなかった。日本にいた時、テレビで見たロイヤルスイートの方がよほど豪華だったのだ。

「お金払ったし、十日間ここで宿泊することになるよ」

「孤児院とはあまりに違いすぎて安眠できるか、今から不安」

「そこらへんは大丈夫じゃない？ 人って慣れる生き物らしいし」

この世界に慣れきっていないことを棚に上げ言う。

「これに慣れては駄目な気がする。私の今後の人生に大きななにかを残しそうよ」

「そうかもね。冷たい？」

幸助は水を飲もうとテーブルの上に置かれている水差しを持って、ひんやりとした感触に少し驚いた。

その理由を知っているナガレが口を開く。

「水差しの下に魔法陣が描かれていませんか？ それが常に水差しを冷やしているので、いつでも冷たい水が飲めるのですよ」

「便利だねえ。ほかの宿でも使えばいいのに」

「その陣は一日しかもたないし、誰もが使用できるわけではない。魔力ランクでいえばD＋は必要です。」

そのようなランクの人を気軽に雇えないのですよ」

このような細かなサービスも高いお金を払っているからこそだ。

「なるほど。いつも魔法で冷たい水出してたし、こういうのあるっ

て知らなかった」

「水の温度変化も常人にはできないこと。魔力ランクもやはり常人を超えてるんですね」

二人に聞こえないように小さく呟き、これで一つ実力を探れたと心の中のメモにしっかりと書き込む。当主から事前に実力を探れるだけ探れと命令がでているのだ。

それに気づかず水を飲み干して幸助はワイアーレに問いかける。

「俺はこれから出かけるけど、ワイアーレはどうする？」

「ついてく。今はまだここに一人でいるのはちよっと無理」

「ナガレさん、ワイアーレと一緒にでもいい？」

「大丈夫ですよ。コースケ君さえ来てくれるのなら問題はないです」

いろいろい返事をもらえ、幸助とワイアーレは荷物を置いて、部屋を出る。

受付のいつてらっしゃいませという、言葉を背に宿を出る。

一歩外に出ただけでワイアーレは溜息を吐いた。休まるべき宿で緊張し、外に出たことでその緊張が解けるといふ滅多にできない経験をしていた。こんな経験するなんて旅というのは侮れないと、どこかずれた感想を胸に抱いている。

このままナガレの主のもとへと向かうと思われた一行だが、幸助が武具店の看板を見つけそこに寄ることになる。

「いらっしやい」

店に入った三人を六十ほどの初老にさしかかった男が出迎える。

幸助は男へと近づき、ワイアーレとナガレは棚に置いている武器を眺めだす。

「この修理を頼みたい」

男は鞘ごとカウンターに置かれた剣を手に取り状態を確かめる。持ち上げようとして重さに顔をしかめ、それでも持ち上げ鞘から剣を引き抜く。剣の状態を見て、さらに表情は歪む。

「きちんと手入れせずに使うからここまで酷くなる。いったいどれくらい手入れせずに使い続けたんだ？」

「いや一回戦ったせいでそうだったんだけど」

「一回でここまでなるわけないだろう」

幸助と男の会話に興味を惹かれたナガレで近づき、横から剣の状態を見ている。

「これは酷いですね」

「あんたもそう思うだろう。頑丈に作られたこれを一戦でここまで酷使用することなんざ無理だ」

「私もそう思います」

「いやほんとに一戦でそうだったんだって！ 石の巨像ぶった斬ったらそうだったんだよ」

「石像を斬った？ 斬りつけ砕いたの間違いじゃなく？」

表現の違いを確かめようとナガレは問う。

「斬った」

断言する幸助にナガレはそうですかと呟いた。

石を斬りつけ砕くことのできる者は多い。だが斬れる者はいったいどれだけの数が減る。力任せでは斬ることはできないのだ。そのことをナガレは理解している。なにせナガレの仕える家は武器の扱い

に長けた者が多く、彼らの修行の一つに斬岩があり、その様子を何度か目にする機会があったのだ。そんな彼らでもきちんと斬れている者は多いとはいえない。

実力を一端を知ることができたのは幸運だが、ナガレの想像を超え出した幸助に疑惑を抱き始める。この若さにしては能力が高すぎるのだ。もしかすると特殊訓練を受けたどこかの国の諜報員かもしれないとまで考え始めた。

「石を斬った、か。それが事実ならこんな状態になるか」

「本当なんだけどね。」

「それで修理はしてもらえる？」

「するにはするが、買い換えた方が早いと思うがな。」

「修理して無茶させなくとも、一年もつかどうか」

「買って半年経ってないのに、もう買い換え」

「半年？ 無茶させすぎだ」

「手荒に扱う気なかったんだけどね。」

それを修理はしなくていいから、ナイフに作り変えてもらうことは可能？」

初めて買った剣という思い入れと、半年だけで使わなくなるのもったいないという思いから、日常的に使えそうな物へ作り変えることは可能かと思ひ聞く。

「多少時間にかかるぞ？」

「どれくらい？」

「そうさな……五日、うん五日時間があればいい」

「それでお願いします」

「ああ、任された」

「それじゃあ新しい剣なんだけど、予算は閃貨三枚。それ以上に頑丈な剣ってある？」

「閃貨三枚も予算があるなら、ほかの都市に行ったほうがいいぞ？
うちにあるのはあのハルバードの閃貨二枚が最高額だ」

男は背後に飾られたハルバードをくいつと親指で示す。

件のハルバードは磨きぬかれた白銀の光沢と柄に描かれた朱色の紋様が、ほかの武具とは一線を画した雰囲気を漂わせている。こまめに手入れされているのだろう。埃の欠片もついていない。

「ほかの店もこの品質は似たようなもの？」

「だろうな」

「ほかに行っても同じなら、ここで買ってくよ。まだほかの都市に行く気はないし」

「うちは商品が売れるならそれでいいんだけどな。

値段は気にせず、頑丈なものを用意するぞ？」

「お願いします」

「ちょっと待ってろ」

男はカウンターの奥へと入っていき、がそそと保管している品から注文に見合うものを探している。

十五分ほど経ち、男は二振りの剣を運んできた。

一本は今まで使っていたものと同じ長さで、もう一本は切っ先から柄までで一メートルを少し超えるロングソードだ。

「どちらも頑丈さはあの剣をしのぐ。

こっちのブロードソードは鉄とトレスト鉱石の合金でできている。持っていた剣よりも軽く、刃も鋭い。

こっちのロングソードはトレスト鉱石とシャック銀とブラムル鋼の合金だ。こちらは重さでもって叩き斬るといった扱い方になる。硬度強度ともにロングソードのほうが上なんだが、重さが半端ない。筋力に自信がないのならブロードソードを使うことを薦める」

「ロングソード持ってみてもいいですか？」

男が頷く。それを見て、幸助はロングソードを手に取る。たしかに今まで使っていたものより重い。だがそれだけだ。負担にはならない。

ぶれなく振ってみせる幸助を男は驚いた様子で見る。

「その細腕で持てるとは思ってなかった」

「私も持たせてもらっていいですか？」

幸助が片手で軽々と扱ってみせるので、本当に重いのかと思ったナガレは自分も持って確かめてみたくなる。

「はい」

剣の腹を両手で支えるようにするナガレにそっと渡す。

「重っ!？」

五キロくらいだろうと持った剣は十キロ近く、想像以上の重量にナガレは剣を落としそうになる。そうなるかと思っていた幸助は慌てず、剣を手取る。

「これもらえる？」

「十分使えこなせそうだな。」

ナイフの件とロングソード、合わせて閃貨一枚と金貨二枚になる。ベルトの代金はサービスとしていてやろう」

札を言って閃貨二枚をカウンターに置く。

ロングソード一式とお釣りを受け取り、確認のため聞く。

「ナイフは五日後に来ればできあがってるんだよね？」

「ああ、仕上げておく」

買い取ったロングソードを背中に背負い、ウィアーレに声をかけて店を出る。その背に男は毎度ありと声をかけた。

これで寄道は終わり、三人はようやくナガレの主のいる場所へと向かう。時刻は五時半を過ぎ、夕食目当ての人々や仕事帰りの人々で通りは賑やかになっていた。

流れた涙と影響と

寄道をして時間をくった三人は、ようやくナガレの主の待つ屋敷に到着する。ここはナガレの主がコウマ国に持つ道場の支部だ。

目の前にある建物は周囲とは雰囲気からして違う。時代劇に出てくる道場とほかなにかを混ぜ合わせた、独特な建物だ。それが夕日を受けて、朱色の染まっている。

開かれている門を潜ると、目の前に道場が、右に外で稽古できる広場が、左に住居が見える。その住居も本宅と別宅に別れている。道場生たちは普段は本宅を使い、別宅は今回のようにナガレの主が来たときのみ使われる。

そういった建物の配置などを門近くでナガレが説明していく。

これらを見て幸助は懐かしいようなそうじゃないような気分になる。日本にいた頃の幸助の近くにはこういった武家屋敷はなかったのだ。それに近いものを見て、若干期待はずれのような思いもしている。

「今から別宅の客室に案内します。主にコースケ君の到着を知らせてきますので。そこで少々お待ちください。

ではついてきてください」

ナガレの案内で二人は別宅に向かう。

玄関で靴を脱ぎ、下駄箱に入れる。こういったところは日本と同じなんだなと思いつつ、幸助は板張りの廊下にかかる。

「靴を脱ぐんだ？」

玄関先で靴を脱ぐのは初めてのワイアーレは驚いた様子を見せ、幸助と同じように下駄箱に靴を入れる。

「コースケ君は慣れているように脱ぎましたね」

「故郷じゃ玄関で靴を脱ぐのが当たり前だったからね」

「やっぱりコウマとそっちは似てますね。」

あ、ちよつといいかしら」

近くを通った女中に二人の案内を頼む。

二人は女中に案内され客室へとやってきた。障子を開けて部屋に入る。そこに畳があるかなと思った幸助の予想は外れ、板張りの床に絨毯が敷かれていた。普通っぽい部屋だと思ふ幸助の感想に反し、紙が高価なこの世界での障子は日本よりもお金がかかっていて、わりと高級な屋敷だったりする。

ここでお待ちくださいと言つて女中は一度去り、饅頭と湯のみに入れたウーロン茶に似たお茶を持ってきた。そして一礼し、再び部屋から出て行った。

座布団に座り、慣れた様子でお茶を飲む幸助。ワイアーレはお茶と菓子には手をつけず物珍しそうに部屋の中をきょろきょろと見回している。

芋餡だった饅頭とお茶の相性を堪能して、幸助は長閑な気持ちになつている。

「コースケさん、気分が緩んでるね」

「故郷に近い雰囲気味わえてるからねえ。やっぱり故郷ってのは落ち着けるもんだな」

「たまには帰ったらどうなんです」

「帰れたら、ね。そう簡単にはいかないんだ」

「勘当でもされた？」

「近いかな」

親に勘当ではなく、世界に勘当されているという違いがあるが。

そんなことを話して暇を潰していると、廊下から足音が聞こえてきて、障子が開いた。ナガレが二人を呼びに来たのだ。

「お待たせしました。私の後についてきてください」

ナガレに先導され、二人は当主の待つ大部屋へとやってきた。そこには当主のほかにはシズクなど数人が座って待っていた。

一番奥には黒の束帯を着た男がいる。四十にはなっていないさそうな男だ。どっしりと構えて落ち着きがあるようにも、男盛りで活発的でもありそうにも見える。隣にシズクが座り、薄桃色の生地にところどころ花の刺繍のされた束帯を着ている。ちょこんと座っている様子は可愛らしく、お人形さんといった感想を幸助とウィアーレは持つ。

全員の視線が幸助に集中する。当主の幸助を見る目は鋭く、硬い表情も合わさり、かなり厳格な印象を受ける。

影の薄いウィアーレは、ここが貴族の屋敷みたいなものだといまさらながら思い当たり、宿に残ってるべきだったかと心の底で思う。高級宿に一人と貴族の屋敷に幸助と一緒に。どちらがましかと答えの出ない問いを自身に投げかけていた。

ナガレは二人に空いている座布団に座るように言って、自分はシズクの隣に移動する。

当主は幸助たちが座り、正面から向き合ったことを確認すると口を開く。

「はじめまして、私はルビダシア家の長ゲンオウ・アーマセラ・ルビダシアと申す。

助けてもらったシズクの父だ。

此度は娘の救出に協力していただき感謝する」

言葉とともにゆっくりと頭を下げる。ピンっと伸ばされた背筋を

曲げるだけの動作なのだが、様になっており、幸助とワイアーレは思わず感嘆の吐息を吐き出しそうになる。

平民に頭を下げることに周囲の人間がなにも言わないことから、幸助は家中の雰囲気を良さげなものに感じる。

「本日はお招きいただきありがとうございます。」

救出に関する礼はすでにナガレからもらっているのです、お氣になさらず。

それに力を貸していただき助かったのはこちらも一緒なのです」

場の雰囲気につられて幸助も硬い口調となる。

「それでも何事もなく無事に助け出されたことは、侯爵家といった立場だけではなく親としてとても嬉しいことなのだよ。

だから何度感謝を述べても言い足りないくらいだ。

シズクからお礼を言っておきなさい」

「ありがとうございます」

噛んだことにシズクは少しだけ頬に朱をはしらせ、頭を下げた。

噛んだことを幸助たちは突っ込めず、ゲンオウたちは突っ込まない。噛むことは予測の範囲内だ。シズクだけではなく、ゲンオウが噛むことも予測のうちだ。ここまで噛まなかったことに周囲の人間は若干感動している。

なぜこういった予測ができているかという点、ルビダシア家の長と跡継ぎの持つ性質のせいだ。彼らは戦うといったことに才能の多くを費やしているため、ほかのことは不得意なのだ。驕でどうにかなるようなものでもなく、呪いといえるほどに身に染み付いている性質だった。

一例として、この部屋と廊下のちょっとした段差にこの親子は必ず躓いている。そこにあるとわかっていても、忠告されても、必ず

蹟くのだ。

この性質のおかげで、日常生活をつつがなく送るには他者の協力が不可欠なのだ。特に幼い頃は。

この性質も悪いことばかりではない。普段の頼りなさから、自分達で支えなければと家中の者たちは常日頃考えている。おかげで謀反や謀略などとは程遠い。

「どういたしまして」

幸助はシズクの礼を頷いて受け取る。

「さて、ささやかながら宴を準備させてもらった、ごゆるりと楽しんでいってください」

「ありがとうございます」

部屋の外で待機していたのだろう。家来の一人がそばの戸を開くと、女中たちが次々と料理を運んでくる。楽師も入ってきて、すぐに曲を弾き始める。

それぞれの目の前に置かれたお盆にはいくつもの小皿が載せられ、コウマの郷土料理がずらりと並ぶ。日本の旅館に行くとき出てくる小さな鍋もあり、余熱でいまだくつくつと煮立っている。漂い嗅ぎ取れる匂いは幸助にとって懐かしいものだった。

国外出身ということを考えて、幸助とウィアーレのお盆には箸だけでなくスプーンとフォークも置かれている。

食前の祈りが終わり、ゲンオウが宴の開始を宣言したあと、幸助は迷わず箸を手に取り白米を口に運ぶ。

匂いと湯気が、噛んだ感触が、ほのかな甘みが、干飯では味わえなかった旨みが、それらすべてが懐かしい。五十回近く噛みようやく飲み込んだ。

品質としては日本の米に劣る。だが美味しかった。ただただそう

感じられ、白米だけをいつきにかきこんでいった。

「いやいや見事な食いっぷり。こちらでは米はなじみのないものだが、気に入られたようだなにより。出したかいがあるというもの。それに箸の使い方も上手いものですね」

嬉しげな笑みを浮かべてゲンオウが言う。

「米はうちの故郷でも主食なんですよ。箸も主流です。久しぶりに米を食べることができて、ついいつきにかきこんでしまいました。

無作法でしたか？」

「いえいえ、一粒も残さず綺麗に食べてもらえて作った者も喜ぶことだろうさ。

さあ、おかずのほうも味わってください」

ゲンオウの勧めに応じてふろふき大根に箸を伸ばす。次に塩釜焼きされた川魚と箸は止まることなく、次々と口に運ばれていった。

その美味そうに食べる様子をゲンオウたちは満足げに見ている。

故郷の料理を美味しそうに食べてもらえ嬉しいのだ。

隣に座るウィアールは初めての料理を味わうためゆっくりと食べていた。どれもが初めて見て食べる物ばかりで、新鮮だった。料理を口に含むたびにころころと変わる表情は、なかなか面白いものでウィアールにも注目が集まっていた。

食べることに専念している幸助とウィアールのことを気遣ってか、話しかけるようなことはせずゲンオウたちは身内で会話を交わしていく。話題は大会のことだった。

その話に参加していないシズクはナガレに世話を焼かれながら、料理を食べている。ウィアールと同じくゆっくりとしたペースなのだが、こちらは味わっているというわけではなく、急ぐと料理を落としてしまうのだ。それでもときおり落としてしまいそうになる時

がある。そんな時はナガレが小皿で受け止め、シズクに食べさせている。そういった作業をナガレは喜々として行っている。シズクが可愛くて仕方ないというのが表情を見るだけでよくわかる。

そうして幸助が満足し箸を置いた頃、それを見てゲンオウが大きな徳利を片手に近寄る。

「どうかな、一杯？」

勧める様子に厳格なものはなく、当主といより父親といった側面が出ている。

「あー……」

どうしようかと悩む。幸助の飲酒経験はビールを数度飲んだことがあるだけだ。あまり強い酒は飲みたいとは思っていない。酔っ払ってしまったら、どのような醜態をさらすかわからないのだ。だが当主自らの誘いを断るのは失礼に当たるかもしれない。

結局、少しだけならば酔ったとしても軽い酔いで済むだろうと受けることにする。

「酒は飲みなれてないので、少しだけなら」

そう言って幸助は盆の上に置かれているお猪口を差し出す。

「酒はあまり好きではないのかな」

ゲンオウは注ぎながら聞く。

「いえ、酒を飲める年齢に達してなくておおっぴらに飲めなかったんですよ」

「そうなのか。うちでは十五を過ぎれば誰でも飲んでいいってことになっている。そのつもりで薦めてしまったよ、すまない」

「気にしないでください」

お猪口をくいつと傾ける。口の中へと流れた液体は強い刺激を持つてはいなかった。水に近い口当たりで、わずかな甘みとすつとした爽やかな後味が感じられ、飲みやすい。アルコール度はあまり高くはないが、飲みやすさから飲みすぎてしまい、結果酔っ払ってしまう。そんな酒だ。

「美味しい……のでしょうね」

批評というには稚拙な言葉が出てくる。それにゲンオウは気を悪くせず、もう一杯どうかと問う。

「そうですね、もう一杯もらえますか？」

「気に入られたようでなにより。うちで五本指に入る名酒なのだよ、これは」

注がれた酒を口に運ぼうとした幸助の動きが止まる。隣に座るウィアーレの視線に気づいたからだ。興味津々といった目でお猪口を見ていた。

「ウィアーレも飲んでみたい？」

「え？ あ、飲んでみたいというか、どんな味なのかなと興味があったりなかったり？ でもお酒飲んだことないからやめたほうがいいのかな？ でも少しくらいなら？」

「つまり？」

「……飲んでみたいです」

恥ずかしげに目を伏せて小声で答えた。

その様子を小動物みたいで可愛いなあと思いつつ、幸助はゲンオウを見る。

「飲ませても大丈夫ですか？」

悪酔いなどしないかという含みを持たせて聞く。

含まれたものも理解し、ゲンオウは頷いた。

「お嬢さん、お猪口を出してください」

「いえっ！ 自分で注げますので！」

貴族に注がせるわけにはいかないという遠慮からの言葉だ。

ゲンオウはそれを理解して、緊張を解すような笑みを浮かべる。

「遠慮などしなくてよろしい。

お嬢さんのような可愛い人相手の相手ができるのだから役得というものだよ」

渋く落ち着いた声での褒め言葉に、お世辞とは思いつつもウィアーレは顔を赤らめ礼を言う。

注がれた酒を口に含み、軽く目を開いて驚いた表情を見せる。

「……飲みやすい」

気に入ったというウィアーレの様子に、ゲンオウは笑みを浮かべる。

返杯と称して幸助は徳利を受け取り、ゲンオウのお猪口に注ぎ、三人はゆっくりと味わうように飲んでいく。

徳利の酒がなくなる頃には、シズクも料理を食べ終え、父親のそ

ばに寄ってきた。そして大きな目でじっと幸助を見上げる。瞳の中に強い興味の色が見える。

「なにか用事があるの？」

「あなたは強いのか？」

戦いに多くの才を費やしているだけあつてか、他人の強さにも強い興味を覚えるらしい。

事前にナガレから幸助の情報を聞いて、確かめたくて仕方なかったのだ。これにはナガレの小細工も関係している。強さを仄めかすような情報の伝え方をして、質問するように仕向けたのだ。ナガレやゲンオウが聞くよりも、シズクのような子供が好奇心から聞いた方が警戒されないだろうと考えたのだ。

それが功を奏してか、幸助は怪しむことなく質問に答えようとする。だが幸助を遮ってウィアーレが先に口を開く。

「つよいよ。私たちの地方にいる強い魔物を一人で倒したこともありゆし、神域に入って無事にもくてきを果たして出てきたかりやね」

「ほう」

ウィアーレの言葉にゲンオウの目も強い興味の光を放つ。抑えていた興味が隠し切れなくなったのだ。

その様子に気をよくしたのかウィアーレはさらに続ける。

「それにらなんていったってコースケさんは……」

そこで幸助はウィアーレの口を手で押さえた。嫌な予感がして思わず体が動いたのだ。

その予感当たっており、ウィアーレは竜殺しだと言おうとして

いた。

突然の行動のゲンオウたちは驚いているが、幸助はワイアーレを見ており、その様子に気づいていない。

「……酔ってる？」

「お酒によんだことないのでえ、酔いっていうのがどんなものなのかわかりません。」

でもふわふわとしてるお」

「それ酔ってんじゃないかな？」

頬に朱が走り、呂律も少し怪しいことから、幸助の予測は外れていないだろう。

「初めて飲むせいなのか、それとも酒に弱い体質なのか。

とりあえず、しばらく横になってるといいよ」

「そうしゅりゅう。では失礼して」

言いながらワイアーレは幸助の膝に頭を置いて、目を閉じた。幼い頃、ウェーイによく膝枕をしてもらっていたことをおぼろげに思い出し、なんとなく頭部をそこに持っていたのだ。

このまま余計なことを口走ったり、絡み酒じゃないだけましかと、幸助はワイアーレをそのままにしておく。

「お嬢さんはなにを言いかけたのだろうか？」

「あー……秘密です。」

まあ、それなりに強いらしいってことで納得してもらいたいです」「無理に聞くのも失礼にあたるか。

では一度手合わせしてもらえないだろうか。実はナガレから話を聞いてから、手合わせできないかと楽しみで仕方なかったのだよ」

「模擬戦ってな感じですか？」

「うむ」

どうしようかと考える幸助の腕をシズクが引っ張る。
そちらを見るときらきらと目を輝かせたシズクと目が合う。

「あたしも」

幸助は思わず心中でバトルジャンキー親子と呟いた。

「……いいですよ。ご当主とお嬢さんの二戦のみならば」

道場主との試合はなにかしら得るものがあるだろうと思ったのだ。
シズクとの試合も合意したのは、そんなに苦労しないだろうと思い
サービス気分で領いた。

ついでに言うならゲンオウとの試合も軽い気分で引き受けた。手
加減してくれるだろうと思っているからなのだが、それはバトルジ
ヤンキーと称した親子を甘く見すぎている。

「おおっ！

では明日の朝、食事のあとにでも」

「それでかまいませんよ」

「楽しみだねっ父上！」

「そうだな！」

似たような喜びの表情で向かい合う親子。その様子を見て幸助は、
二人の血の繋がりをひしひしと感じている。

約束をとりつけ上機嫌となった親子につられてか、場の雰囲気も
陽気なものへと変わり、宴会はさらに盛り上がっていく。

一時間もすぎると騒ぎはしだいに治まっていき、宴会は解散とな
る。

「ワイアーレ、部屋に戻るよ」

ワイアーレの体を揺すって起こす。

酔いは醒めたようで、いつもどおりの様子に戻り起き出した。

「部屋に戻って少ししたら女中が風呂に案内してくれるだろうから、準備しておくといい」

部屋を出ようとする幸助たちに、ゲンオウがそう声をかけた。

礼を言って部屋に戻る。部屋には布団が一つ敷かれていて、隣の部屋にも同じように敷かれている。

「私はあっちで寝ていいんですね？」

「だと思ふよ。さすがに同じ布団で寝るわけにはね？」

一緒に寝るところを想像したのか顔を赤らめたワイアーレは、恥ずかしさを隠すため軽く幸助の背中を叩いて隣の部屋に荷物を運んでいく。

そして少しして女中が二人を呼びに来た。

風呂は男女に分かれており、それなりに門下生がいることにあって広めに作られている。広さは二十五メートルプールのだいたい四分の一くらいだろう。今は幸助しかおらず、この広さの風呂を独り占めでき、すぐく贅沢な気分になることができた。

ゆっくり三十分以上かけて風呂を堪能し上がる。幸助が部屋に戻ってすぐに、ワイアーレもパジャマ姿で戻ってくる。

湯上り姿に幸助は少し色気を感じ、視線をずらした。ワイアーレは幸助の様子に気づかず、荷物から薬液などを取り出し、肌の手入れを始める。

食べた物や風呂のことなどを話したあと、話題が尽きた二人は寝

ることにした。

おやすみと言いい合い襖を閉じ、幸助は横になる。隣室から寝返りをうつウィアーレの気配を感じながら、意識がじょじょに沈んでいき、ふっと意識が沈みきった。

ウィアーレは寝息を立て始めた幸助に気づき、自分も早く寝ようと寝返りをうつのを止めた。

朝を知らせる電子音が、頭上に置いてある目覚まし時計から聞こえてくる。

幸助は布団の中でもぞもぞと動いた後、手を伸ばして音を止める。

「うんーっ！」

上半身を起こして、背と腕を伸ばして眠気をとばす。

ちらりと時計を見て、時刻を確認し、次に布団から出てカーテンを開け天気を確認する。

「見事な日本晴れ。昼は暑いかなー」

着替えずに部屋を出て、洗面所で顔を洗ってからリビングに入る。

「おはよー」

すでに朝食を食べ終え朝のニュースを見ている父と、フライパンなどを洗っている母に声をかける。

「おはよー。私達は先に食べたから幸助も食べちゃいなさい」
「あいよ」

食卓には、大根とあげの味噌汁、目玉焼き、焼かれたウインナーがある。椅子に座ると目の前にご飯が置かれた。

頂きますと手を合わせて、ハイペースで食べていく。

「よく噛まないで駄目よ」

母の言葉を聞き流しながら頷き、かきこんでいく。

五分ほどで食べ終わり、ごちそうさまと手を合わせて椅子を立つ。学校に向かうにはまだ余裕があり、父と一緒にテレビを見ることが出来る。

「なにか目立った事件とかあった？」

「試合結果にぶちぎれた野球ファンが騒いで、ファン同士でのちゃんばら合戦にまで発展したってのが一番印象に残ったニュースだな」

「怪我人とか出た？」

「軽傷者ばかりだったそう。新聞紙を丸めたものを得物としていたらしいからな」

「長閑な合戦だったんだ」

「だな」

二十分ほどテレビに映る映像を流し見て、幸助は身支度のため立ち上がる。

歯を磨いて、自室に戻り、忘れ物がないか確認する。

制服に着替え、荷物を持った幸助は両親に声をかけて、玄関に向かう。

「いってきます」

もう一度家の中に向かって声をかけた幸助は玄関を開けて、屋外に出た。

そこは近所の風景ではなく、木々の立ち並ぶ光景だった。
その光景がなんなのか理解した幸助は、振り向いて背後にあった
はずの家を探す。

平凡で平穏な日常があった家はどこにもなく、それどころか森の
風景もじよじよに消えていき、幸助は目を覚ました。

「……夢……夢かあ……」

どうりで味噌汁の味が昨夜飲んだものと同じだったわけだと、ぼ
んやり天井をみつめながら、起きる直前まで見ていた夢を思い出す。
日本に近い文化に触れたことで、軽いホームシックになったのだ
ろうかと考えつつ上体を起こす。

その時、襖がそっと開かれた。

「起きたんだね」

先に起きていたワイアーレがそろそろ幸助を起こそうと、部屋に
入るところだった。

幸助を見たワイアーレは手を口に当て、目を見開いた。今見てい
るものにすごく驚いている様子だ。

「どしたん？」

なにに驚いているのかと首を傾げる。

「……泣いてた？」

「泣いて？」

幸助は目元に指を当てる。濡れていたような感触がする。

泣くほど懐かしい夢だったのかと幸助自身も驚きを覚えた。同時に最近涙もろくなったのかと自身に呆れの思いも抱いている。

「懐かしい夢を見たんだ。それで涙が出たみたい。なんでもないから気にしないでいいよ」

手をひらひらと振り、誤魔化し半分、安心させるための気遣い半分の思いを込めて言った。

「そう、ですか」

考え込むような顔でウィアーレは返事して襖を閉める。幸助の泣く様子はウィアーレに強い衝撃を与えていた。

ウィアーレは今の今まで、幸助を超人と思っていた。だからやらないだけで、なんでもできると考えていたし、解決できると思って頼みごともしてきた。

行うことに間違いはなく、泣いたり落ち込んだりといったこととは無縁なのだと思い込んでいた。

だが泣いているところを実際に目の当たりにしたことで、それは間違いなのだと思い知らされた。

どこか遠いところを感じていた幸助も、自身と同じく悩み苦しむこともある人間なのだと思い至った。

ウィアーレが幸助を超人と思っていたのには、中途半端に情報を得ていたことにいくらかの原因がある。

ウィアーレが幸助について知っていることは竜殺しということ。違う世界からきたということは知らないし、力を得たときに死にかけたことも知らない。

全ての情報を知っていれば、特殊ではあるが力を持った一般人なんだとわかっただろう。逆ににも知らなければ、能力のあるすご

い人と思うだけですんだはずだ。

中途半端に知ったまままでいたから、勘違いする原因になったと言える。

今も全てを知ってはいないが、思い込みは解消された。

そうしてウィアーレは一つ決意する。

（頼りきりな今のままのような関係が続けていくのは、負担をかけるだけだね。

なんでもかんでも頼らないようにして、私自身うっかりをなくせるよう成長しないと！）

両手を胸元にもっていき拳を握り締め、むんつと気合を入れる。

ウィアーレがそんなことを考えていると思いきもしていない幸助は、着替えを済ませて顔を洗うため廊下にする。

身支度を整えた幸助は、洗面所に行く途中で女中から自室に朝食を持っていくと伝言を聞き、自室に戻る。

布団が片付けられている部屋にはすでに朝食が運ばれていて、味噌汁や白米が湯気を上げていた。ウィアーレの分は普段食べているものと同じだ。

ウィアーレも身支度を整えるときに女中に会い、そのときこちらの大陸のものかコウマのもの、どちらの朝食が食べたいか聞かれ普段食べている系統の食事を頼んだのだ。

この支部にいる門下生は普段からパン食で、そういった食事が常備されている。コウマ風の食事はゲンオウたちが来た時に、食べる機会がある程度だ。

食器を下げてきた女中から一時間後に模擬戦を始めたいという伝言が伝えられ、幸助はそれに承諾の返事を返す。

「模擬戦するの？」

「うん。ウィアーレが寝たあと約束してね」

「へー。頼まれても断りそうなのに」

意外といった感情がわかりやすいほど表情に表れている。

「俺も少し酔ってたんだと思う。一二回くらいならやってもいいかなって思えたんだよ。」

「そーいや頭痛する？」

「どこも痛くないけど？」

「二日酔いの心配はないみたいだね」

昨夜酔っ払っていたので、念のため聞いてみたのだ。もし頭痛がするなら酔い覚ましの薬をもらおうと思っていた。

「当主様強そうだけど大丈夫？」

幸助が強いらしいということは知っているが、ゲンオウも強そうなのだ。ギフトで『人間最高峰の剣豪』という称号持ちだと見ている。ウィアーレの理解力を超えた次元にいる二人なので、強さの差がわからず心配する気持ちも生まれたのだ。

「大丈夫だろさ。さすがに模擬戦で本気にはならないだろうし」

大丈夫だと返答し、心配する気持ちを解す。

話をしながら時間を潰し、やがて女中が部屋にやってきた。廊下に面した障子が開けられ、朝の涼しい空気が部屋の中に入ってくる。女中に案内され、二人は道場へと向かう。

いざ勝負

道場の周囲には男女八十人近くの門下生たちが集まっていて、窓や入り口といった道場内を見ることができる位置に陣取っている。

やってきた幸助に気づき、視線が集まる。ひそひそと話し合う様子が見え、幸助の耳には「あいつが?」「腕が立ちそうにはない」といった内容が聞こえている。

幸助たちがやってくる前に、ゲンオウから客人と打ち合うと知らされていたようだ。

幸助は視線や声を気にせず、道場に入る。

道場の奥で、ゲンオウとシズクが入り口に背を向け正座で瞑想している。二人とも、空手や柔道で着るような稽古着に身を包んでいる。外のざわめきから幸助が来たことには気づいているだろうが、集中を解かずにじっと座したままにいる。

「二人とも、おはようございます」

親子のそばにいたナガレが、幸助たちに近づいてくる。

「コースケ君はその服装でいいのですか?

稽古着が必要ならば用意しますけど」

「このままでいい。このジャケット頑丈だから」

「そうですか。」

使う武器は木製です。主とシズク様も同じように木剣を使います。あそこの壁にかけられているものから好きなものを選んでください。

ルールは命を奪わないことのみ。骨折くらいならばこちらですぐに治療できますが、大怪我しないにこしたことはないので上手く手加減してください」

「手加減することに慣れてないんだけど」

「危険と判断した場合はすぐに止めるよう警告しますので、それに従ってください」

「わかった」

「なにか質問は？」

「試合の終了条件は？」

「明らかに決着がついたと思える状態か、もしくはこちらの制止があるまでは試合続行と思っていただいてけっこうです」

わかったと幸助は頷いて、試合で使う武器を選ぶため壁に向かう。

「ワイアーレさんは私のそばで見学してください。」

折れた木剣の破片が飛んでくる可能性もありますから。まあそんなことはそうそうないでしょうけど」

アーマセラ道場で使われている木製武器は頑丈な木材を使い、さらに漆に似たものを塗り込めさらに強度を上げている。

木剣同士で打ち合って壊れたことは一度もないのだ。五日ごとに点検もしていて、脆くなっている物は折れる前に薪代わりとなって燃えてしまう。

「そんなことがあっても、きちんと防ぎますから安心してください」
「その時はよろしく願います」

飛んでくる木片に反応できないと自覚があるワイアーレは、素直に頭を下げる。

こういった会話を背後に聞きつつ、幸助は木剣を何本か選んで扱いやすいものを探す。木剣のほかにも棍や木製短剣もあった。

（木刀はないんだなあ。ぱっと見た感じ竹刀もないし。刀そのもの

がこちらには存在しないのかね)

そんなことを考えながら、一番長く重かったものを選ぶ。軽いと
なんとなく落ち着かなかったのだ。

幸助が選り終えたことを見たナガレは、親子に声をかける。

「準備が整ったようです。そろそろ始めたいと思います」
「うむ」

一つ頷いてゲンオウは立ち上がる。一緒に立ち上がったシズクは
ナガレの横に移動する。

幸助とゲンオウは道場の中央に移動し、向き合う。

「よろしく頼む」

「こちらこそ」

頭を下げ合い、二人は開始の合図を待つ。

すっとナガレが手を上げ「始めっ!」という言葉とともに手を下
ろした。

静かに試合が始まる。

ゲンオウは右手で木剣を持ち、正眼に持っていく。途端に幸助は
風が吹いたような感触を受けた。ゲンオウから発せられる威圧感が
実体を持ったように感じられたのだ。昨日の厳格な雰囲気とはまる
で違う。戦うために意識を集中したゲンオウがそこにいた。構えて
立っている様子を見て、幸助や外野は年月を得た大樹を見ているか
のような気分になる。

対する幸助は右手で木剣を持ち、だらりと下げたままでいた。こ
ちらは威圧感など発してはない。この様子を見て、幸助を大したこ
とないのではと思う者はまだ実力が低い者たちだった。実力の高い
者たちは、威圧感を受けてなんの変化も見せない幸助を見て、風を

受け流す柳の葉を思い浮かべていた。

十秒二十秒と時間が流れるが、動きはない。

幸助は後手に回るつもりで、どんな動きにも対処できるようゲンオウを観察しているのだ。ゲンオウはというと、全身くまなく観察されていることに気づいていて、うかつに動けないでいた。ただ見られているだけならば気にしないのだが、いざ動こうとすると幸助がわずかに反応していることを見抜き、このままいつでも対処されることに気づき、動きを止めることになっていた。

動き出そうとして止まる、これを十度以上繰り返し、三分が経過した。

この静かな攻防に気づいている者も気づいていない者も、場の雰囲気圧倒され、じっと見る以外できないでいる。

（このままではいられないな）

十一度目の動きを止められて、ゲンオウは次は止まらないと決めた。幸助を強いと判断し、仕掛けないのはもったいない楽しめないと判断したのだ。

「うおおおおっ！」

気合をのせた掛け声とともにゲンオウは、大きく足を踏み出し上段から振り下ろす。

足が床を踏んだ音のあと、木剣同士がぶつかりあう音が道場に響く。

手にした剣で岩を砕いてみせよう、といった強い意志すらのせた打撃を軽々と受け止められ、ゲンオウは楽しげに笑った。

見るからに高い威力の打撃を受け止めて見せた幸助に、門下生たちは幸助を見る目をいっきに変えさせられた。自分たちが受けた場合は、押し切られ床に叩きつけられるか膝をつくことが容易く想像

できたのだ。

ナガレはあのロングソードのことで、ゲンオウの一撃が受け止められる可能性はあると予測できていたので、驚くことはなかった。シズクはこの光景を見て、目を輝かせている。早く自分も戦いたいといった思いが、心の奥底から湧き出し止らないのだ。

道場に連続して木剣のぶつかりあう音が響く。ゲンオウが果敢に攻め、幸助がその全てに対応しているのだ。

打撃音が百近くに到達しようかという頃、ゲンオウは幸助から離れる。

弾んだ息を整えつつ、幸助を見る。幸助は特に息を乱しておらず、変わらずゲンオウを見ている。

ゲンオウは木剣をだらりと下げ、左腕を幸助に向け、人差し指をちょいちょいと動かす。次はお前が攻めてこいといった意思表示だ。それを理解した幸助は右足を下げ、木剣を下げて両手に持ち、斜に構える。

「行きます」

一声かけて両足に力を込める。

開いている四メートルを一呼吸に満たない時間でいっきに詰め、木剣を振り上げた。

木剣が風を切り、ゲンオウに迫る。

今日一番大きな打撃音が響いた。木剣が肉を叩く音ではなく、先ほどまでと同じく木剣同士がぶつかり合う音だ。そして数秒して、木剣が床に落ちる音も響いた。

幸助が動き出した瞬間、悪寒を感じたゲンオウは木剣の動く軌道を瞬時に予測して、手にした木剣を軌道上に動かしたのだ。防ぐことに成功したと考えたゲンオウは、木剣を通じて伝わってくる押す力の強さに驚き、このまま受け止め続けては手を痛めると判断。後ろに下がりつつ、木剣から手を放したのだった。

剣を落としたゲンオウを見て、その場にいた全員が驚きざわめく。そこにゲンオウの笑い声も混ざる。

「くっくくく……。」

いいぞっ！ 剣を落としたことは久しくない！

楽しい！ ああっ楽しい！ このような強者に出会えたことを神に感謝するべきだな！

全力でいく！ 今この対決の時間を思う存分楽しもうじゃないか！」

興がのったのだろう。

先ほどまでの落ち着いた雰囲気は消え、全てを薙ぎ払う嵐を思わせる激しい雰囲気をもとっている。

滅多に見せないこの雰囲気は門下生たちは圧倒される。こういった雰囲気を引き出した幸助になにか思うところではない。

ウィアーレとナガレも同じように圧倒されている。シズクはというと、これから起きることを少しも見逃すまいと臆するどころか、真剣な表情で見入っていた。

ゲンオウから叩きつけられる大きな闘志と威圧感に、幸助はげんなりとした気持ちになる。手加減どころか全力全開でくること間違いないとわかり、帰りたくなつたのだ。

だがここで帰る止めると言っても聞き入れられないことはわかってきっており、引き続きゲンオウに集中する。

全員の注目を集めつつ、ゲンオウが魔法を使う。

「本当に本気なのですか！？」

ナガレが驚きの声を上げる。

ゲンオウが使ったのは戦場で使う自己強化魔法だ。これを使えば木剣であろうが、人間を殺すことになるの支障もない。

殺すような攻撃は禁じてあった。それにも関わらず、容易く命を奪える手段を使ったのだ、ナガレが止めるために動こうとするのも無理はない話だろう。

だがナガレは止めることができなかった。背筋に冷たい汗が流れる。ゲンオウの一睨みで動きを止められたのだ。止まらなければ命の保障すらないように感じられたのは、決して外れた予測ではないだろう。

「ゲンオウ・アーマセラ・ルビダシア参る！」

ゲンオウが動く。先ほど幸助がして見せたように、開いた距離を一瞬で詰める。

ゲンオウの横からの一振りを、幸助は受け止めた。

「動けるか！ そうではなくてはな！」

全てを斬り捨てん！ といった雰囲気の中、支障なく動いて見せた幸助に、ゲンオウはさらに笑みを浮かべた。

ゲンオウの動きは、さきほどまでと段違いだ。しかも速いだけではなく緩急がつけられ、フェイントも織り交ぜられ、受け止めることが格段に難しくなっている。

実際に幸助はゲンオウの剣を見失い、幾度か腕や胴に木剣を受けている。

「どうした！ お前さんの本気はそんなものではなからうっ！ 受けてばかりでいないで、反撃してきたらどうなんだ！」

木剣を振るうことを止めずに、ゲンオウは誘いをかける。

（そう言うならやってやろうじゃないか）

痛みはほばないが打たれっぱなしなままは情けないと思い、幸助はやり返してやると戦いに集中する。

「そこだ！」

大振りになった直後のちょっとした隙をついて、攻勢に出る。

それは幸助に打ってこさせるために作った隙だった。

振るわれた剣筋は読めていたゲンオウだが、反撃はしなかった。回避に専念していたからだ。一撃でももらえば、即ダウンすることになると予測できていた。

しばらく攻守が代わり、幸助が攻め続ける。幸助の攻めはゲンオウの服にかすることはあっても、有効的な命中はなかった。

（なんで全部避けられる！？）

それは幸助の攻撃が素直だからだった。剣速は速いが、それだけなのだ。

もちろん幸助もフェイントは使っている。だが幸助が主に目を使って情報を集めているのに対し、経験からくる予測と五感をフルに使って回避に専念しているゲンオウにとっては、幸助のフェイントは拙いと言いつけるものだった。目の動きや足と腕の動き、姿勢や踏み込む音の大きさといった様々な情報からどこを狙っているか、どれくらいの威力なのかすぐにわかる。

これは今まで幸助が、格下のみと戦ってきたことの弊害だろう。並外れた能力のおかで問題なく勝っていたので、攻撃を当てるといった技量の大事さを学んでこなかったのだ。熟練の強者にとって今の幸助は獣と同じ。

攻撃を当てるため、さらに速く剣を振るい、防御も最低限のもの以外は放棄した幸助だが、幸助の癖などを掴んできたゲンオウには

かすらせることが限界だ。

じよじよにゲンオウが反撃に出る。攻勢に出ても避けられると判断できたからだ。

二人の戦いは同じ光景が繰り返されるようになる。避けながら剣を振るうゲンオウと当たる打撃を気にせず剣を振るう幸助といったものに。

当てることに集中している幸助にはこの先の展開は読めていないが、ゲンオウには読めていた。このまま続けばゲンオウの負けだと一撃もらえば即負けという緊張感は精神的にも体力的にも負担が大きい。いずれ動きが鈍り、当てられてしまう。この先十分ほどならば問題なく避け続けることができる。しかし三十分先一時間先はというと絶対の自信はなかった。

（そのような負けは気に入らん。

だから体力のある今、最高の一撃を当てて、決着をつけさせてもらう！）

ルビダシア家の長子のみ使える奥義とも言える一撃を放つことを決意した。

それは、いずれ神すら打倒するという意味を込められ『神討ち』と名づけられたもの。先人の想いが子孫の血と肉に三百年という時を経て脈々と受け継がれ、いつかの完成を夢見て託されていくもの。これを使うのに魔法を使ったり、大げさな構えが必要ということはない。なぜならただの一振りの斬撃だからだ。

ただのというのは間違いかもしれない。一族の長子に現れる才覚を使用前提とし、意思を込め、確かな技量と鍛え上げられた体躯から放たれる心技体が完全一致した一振りだ。

技というよりは、使用者の剣を扱い始めた初期からこれまでの全てを現す『業』といえるものかもしれない。

そういった意味で、この業に完成という概念はない。アーマセラ

流剣術の使い手にとって鍛錬は死ぬまで続く。今日の最高の一撃も、明日の一撃には敵わない。剣の使い手として最高の評価を得ているゲンオウにしても、それは同じだ。

ゲンオウの場合は真上からの斬り下ろしがこの業の型となるが、ほかの者だとそれぞれが得意とする斬り方に依存するので、神討ちに決まった型はない。ここらへんが技と呼べない所以でもある。

ゲンオウが上段に構えた途端、周囲を圧迫していた空気が消え去る。そういったものさえ全て木剣に込めるので、外には漏れないのだ。

急に静かになった道場に、神討ちのことを知らない門下生たちは何事かとどよめく。

「そこまでするのですか……」

ナガレが呆然として言う。ナガレは使えないが、神討ちという業があることは知っている。

ゲンオウが本気中の本気だと悟り、止められる気は皆無となった。代わりにすぐに治療に移れるよう、心体を緊張感で満たす。最悪幸助の死亡という決着もあるかもしれないのだ。

静まり返った道場内で動く者はいない。見学者たちはゲンオウの動きに集中しているし、幸助は近寄ってきたところを当てようと同じくゲンオウの動きに集中している。一番集中しているのはシズクだ。なにかに惹かれるように、ゲンオウの挙動を一心に見ている。

ゲンオウが動く。その動きはさっきまでと比べると遅く、軽いようにも見える。だが初動を見逃しそうなほど、何気ない歩みだ。事実、この場でゲンオウの動きを見切れたのは幸助のみだった。日常生活で行うような、なんの意図も含まない動きで近づいていく。ほかの者たちが気づいた時には、ゲンオウが幸助のそばにいた。

「せいっ！」

掛け声とともにゲンオウは木剣を振り下ろす。

呼吸、力の加減、体全体の動き、振り下ろすタイミング、どれをとっても完璧でゲンオウはこれまでで最高の一撃が放てたと確信が持てた。

鋭く振り下ろされ迫る刃を、幸助は木剣の腹で受け止めようと頭上に掲げた。右手で柄を、左手で剣の腹を支え、ぶつかると瞬間を見る。そこで幸助は目を見張る。ゲンオウの木剣が幸助の木剣をあっさりと両断したのだ。

（は？ なんの衝撃もなかったよ！？）

呆けて、焦って、防御に動くということを一瞬のうちに順に行う。幸助がとった防御行動は腕を交差させ、受けとめるというもの。

これにはゲンオウも驚いた。普通に考えると、木を抵抗なく斬った攻撃を肉体で受け止めるのは無謀なことだ。その行動のおかげでゲンオウの心に若干の乱れが生じ、神討ちの威力が減ってしまう。

ジャケツトごしに感じる思ったよりも軽い衝撃に疑問を持ちながらも幸助は、素早く防御を解いて真つ二つに斬れた木剣の片割れをゲンオウの胴にぶつけた。

「当たった！ ようやく当たった！」

勝ち負けではなく、攻撃が当たったことを喜ぶ幸助。まぐれ当たりのようなものとはわかってはいても、ようやく当たったことに大きく喜びを感じている。

そこで場の雰囲気は緩み、ゲンオウは木剣を引く。

これ以上続ける気がないと理解したナガレが、それまでと声を響かせた。

見学者全員がほうっと息を吐いた。皆試合に集中していて、息が

詰まっていたのだ。

「中々楽しい試合だった、ありがとう」

試合中の険しい顔つきを消し去って満足気な表情となっているゲンオウ。対して幸助は微妙な顔つきになっている。結局一度しか当てることができなかったのだ。悔しいといった思いがあった。

「腕の方は大丈夫かね？ 完全には決まらなかったとはいえ威力の高い一撃だったと思うのだが」

「んー……赤くなってるだけですね。触った感じ骨に異常はないし、少しの間痣が残る程度かと」

「……ほー、頑丈なのだな。念のためうちの医者に診させてもらっても？」

威力が減ったとはいえ、石ならば碎けるくらいの威力はあった。

それを痣だけで済ませる幸助に若干引いている。

今も痛そうな様子は見せていないが、隠している可能性もあるかもしれないと診察を提案する。

幸助は提案を素直に受ける。すぐに診察が始められ、異常なしといった結果が出た。

「本当に大丈夫だとは」

散々打たれたというのに軽傷で済んでいる幸助に、ゲンオウは呆れた表情を隠せない。

「じゃあ次はシズクの番だが、少し休憩が必要だろうか？」

「うん。でもそんなにたくさんはいりませんよ」

「十分くらいでいいだろうか？」

幸助は頷いて、壁際まで移動し、壁を背にして座る。

「どうぞ」

ウィアーレが近づき、よく絞った布を渡す。

幸助は礼を言って受け取る。動いて火照った体を冷ますには物足りないが、汗を拭くだけでもすっきりする。

風が吹いて涼しく思っていると、ウィアーレが扇子で扇いでいた。

「気がきくね。ありがとう」

「ナガレさんを真似ただけだから」

ゲンオウのために準備し始めたナガレを見て、自分もしておいたほうがいいかなと思ったのだ。

率先して準備にとりかかったわけではなくとも、体の熱は下がりの対戦になんの支障もなくなった。そのことに再び礼を言って立ち上がる。

道場の中央にはすでにシズクが待機している。髪は後ろで、リボンで一つにまとめられている。

「よろしくおねがいします」

やってきた幸助にシズクが頭を下げる。幸助も頭を下げ返し、二人は向かい合う。シズクの表情は幼さが少なくなり、凛々しさを感じさせるものとなっている。

ゲンオウ戦と同じように、シズクは構えて、幸助は構えずにいる。違いはゲンオウが片手持ちの正眼だったのに対して、シズクは両手持ちの正眼ということ。

ナガレの合図とともに、試合は動き始める。

シズクはゲンオウのように睨み合うことはせず、果敢に攻めていく。ペース配分は考えておらず、今出せる全てを幸助に叩きつけている。

十才にも満たない子供の動きとしては破格のものだ。同年代では世界一だろう。しかし当然のことながらゲンオウには遠く及ばず、ゲンオウの動きに対処できた幸助にとって対応は楽だった。それでも幸助は攻めることはない。ときおり守りの薄い箇所にも木剣を突き出す程度だ。

遊んでいるわけではない。証拠に幸助の表情は真剣だ。

今幸助がやっているのは、シズクの動きからアーマセラ流剣術の動きを学ぶということ。アーマセラ流剣術のことを知れば、ゲンオウに当てることができるようになる考えたのだ。

ゲンオウを相手していたときに参考にしなかったのは、洗練されすぎていて相手しながらだと学ぶ余裕はなかった。その点シズクはまだ未熟、余裕を持って学ぶことができたのだ。

打ち合いは十分以上続き、次第にシズクの動きが鈍ってくる。肩で息をしており、限界に近くなっているとわかる。それはシズク自身もわかっていて、最後にやりたいことをやって終わらせようと決めた。

その表情を見て幸助はシズク的心情をなんとなく読み取り、跳ねるようにして背後に下がったシズクを追わずにその場にじっと立つ。やりたいことをやらせてくれようとする幸助に視線で感謝の念を送り、シズクは構える。

右足を引いて斜に構え、腰をわずかに落とす。両手に持った木剣は右肩に載せるようにして構える。

その場にいる者たちは既視感を覚えた。型は違うのに、雰囲気はゲンオウが神討ちを使った時と似ているのだ。

もっとも驚いたのはゲンオウかもしれない。神討ちのことはシズクには教えていなかったのだ。

教えられていなかったものをどうやってものにしたのか。それは

先ほどのゲンオウの一撃で理解したのだ。受け継がれている血と肉が、あれは自身にも使えるもので、目指すべきものと認識させた。

神討ちを使うには技量も鍛錬もまだまだ足りない。戦意を完全に消していたゲンオウと違い、シズクは完全に消しきれていない。そういうところからも未熟さを感じ取ることができる。及第点といえるのは心意気のみ。それでも使わずにはいられなかったのだ。

シズクは深く呼吸を繰り返し、息を整え、体力も戻していく。

準備が整うと、シズクは体に入れた一歩を踏み出す。

「やあああっ！」

袈裟斬りに振り下ろされる一撃は、ゲンオウから見て未熟ながらシズクの全てが込められた『神討ち』と言っているものだった。

誰にも教わることなく一子相伝の業を体現して見せた娘に、ゲンオウは誇らしいものを感じ、自然と笑みが浮かび上がっていた。

道場内に木と硬い物体がぶつかるような音が響く。木は木剣で、物体は幸助の左腕だ。

始めから木剣での防御を捨て、幸助から見て左上から迫る木剣を左腕で受け止めたのだった。

ただただ神討ちを放つことだけに集中していたシズクは、幸助が生身で受け止める様子を見ても動揺はせず、神討ちの威力を減らすこともなかった。といっても修練不足ということは変わらず、幸助が感じた衝撃はゲンオウのものにやや劣るといったくらいだった。

「……」

「……」

木剣を止められたシズクと受け止めた幸助はそのままじっと動きを止める。

両者は三十秒ほどそのままだったが、シズクが最初に剣を引いて

頭を下げ、幸助も頭を下げた。

「はふう」

そこが限界だったのか、シズクはその場にペタンと座り込んだ。すぐにナガレがやってきた汗を拭いたり、水を飲ませたりと甲斐甲斐しく世話をしている。

されるがままのシズクは、全て出し切った試合が楽しかったのだろう。疲れた顔はしているものの、満足気な雰囲気を漂わせていた。満足気な雰囲気放っているのはシズクだけでなくゲンオウも同様で、そして幸助もだ。

幸助はこの二戦で思った以上のものを得られていた。シズクからはアーマセラ流剣術のおおまかな動きを、ゲンオウからは洗練された剣術の動きを。ゲンオウの動きは今は理解しきれないが、しっかりと目に焼きついていて、いつでも思い出せる。

これらは幸助にとって価値のあるものになるだろう。

「これで約束の二戦は終わりましたから、戻りますね。

風呂借りていいですか？ 汗流したいんです」

「かまわんが、湯を沸かしていないぞ？」

「汗が流せればいいんで、水でいいですよ」

「うむ。好きに使うといい。」

今日はありがとう。私にとってもシズクにとってもいい経験になった」

幸助はゲンオウに一礼し、ワイアーレに声をかけて道場を出て行く。圧倒的ともいえる力量を見せつけた幸助を見る門下生たちの目は、行きと帰りではまったく違っていた。

二人を見送るゲンオウに、シズクの世話を焼き終えたナガレが近づく。

「コースケ君、どう見ますか？」

「惜しいな」

即答した。

「惜しいですか？ それはどういった意味で？」

「力量が足りないという意味ではない。むしろ下地は十分すぎるほどだ。きつと幼い頃から体力作りと基礎を中心に鍛錬してきたのではないかな。でないとあのアンバランスさは説明つかん」

身体能力の高さと型の綺麗さに反して、実戦経験の少なさからくる勝負勘の不足がゲンオウにはアンバランスに感じられた。

剣を握って半年弱ということをゲンオウが知れば、感心する前にさすがに呆れるほどの才を不条理に思うのではなからうか。

「できることならば私が彼を鍛え上げたかった。ほぼ確実に歴代を超える剣士になっていただろう」

この高評価にナガレとシズク、それと話を聞いていた門下生たちは大きく驚いた。

強いというのは先の戦いで十分理解できたのだが、歴代一という評価まで与えられているとは思っていなかったのだ。

「そこまで強いのですか？ 先ほどの模擬戦では主有利に見えましたか」

「有利といっても、こちらの攻撃はたいした効果を上げていなかった。散々打たれたのに平気な顔をしていたことからわかることだ。ルールを決めた模擬戦ではこちらが有利だろう。だが殺し合いとなると私の負ける確率が高いだろうな」

それを聞いたナガレは幸助に対する警戒度を上げ、ばれない程度に調査してみることを決め、それを頭の片隅に置いておく。

「ところで主が育てられないと判断したのはなぜでしょうか」

「育てられない、とまでは言わんよ。」

彼はすでに我流ではあるが、自身の戦闘スタイルを決めつつあった。それを無理矢理アーマセラ流に強制方向転換させるのはいかなものかと思ったのだ。

もっと早くに会っていればなと思う。そういった意味で惜しいと言ったのだよ」

「我流ですか……奇襲には適したものでしょう。ですが正統な剣術に常に勝るわけではないのですから、手ほどきしたほうが彼のためでもあったのでは？」

ナガレの言いたいことはゲンオウにも理解できた。それでもゲンオウは首を横に振る。

「彼が常人ならばな。」

時をかけ洗練されていった正統な剣術に比べ、我流は動作の端々で隙を大きく生み出すこともある。常人の我流剣術はそこが大きな弱点となるだろう。

だが彼は身体能力の高さを持って、隙を誘いへと転じることができる。剣を振るい隙ができて、そこをつかれても対処可能なのだ。

実際、隙について反撃をくらったわ。

そういったことができるならば、彼にとって我流は十分すぎるほどの武器となる」

「そうでしたか。いらぬ進言をいたしました」

それに対してゲンオウは「よい」と一言発し、心の中で「教える

必要もない」と続けた。

幸助がシズクの動きを見て、学んでいたことをゲンオウは見抜いていたのだ。あれこれ口出しするよりも、自ら進んで学ぶ方が身になることなる。幸助にはそういった学び方のほうがむいていそうだと、ゲンオウは一人思う。

自家の剣術を盗んだことについて、どうこういうつもりはない。今日見せたものが全てではないのだから。鎧を着た場合の動きと今日の動きは別物だし、格闘術といった他の戦闘手段は見せていない。好きなようにアーマセウ流剣術を取り入れた幸助がどのような使い手に成長するのか、それを思うと再びやりあいたいという思いが湧き出し止まらない。

いつかの出来事を楽しみにしつつ、ゲンオウは鍛錬開始と皆に聞こえるよう告げる。

汗を流し、部屋に戻る途中で女中に会った幸助はそろそろ帰るところを告げる。

それに対し女中は当主に伝えてくるので部屋で待つように返答し、足早に道場へと向かう。

幸助とウィアーレは帰り支度を済ませ女中を待つ。

二十分ほど待つと、汗を流し着替えたシズクとナガレがやってきた。

「もう帰られるとか、もうしばらく滞在していただいてもかまわないのですよ?」

「十分におもてなしを受けたし、あまり長居するのもどうかと思つて。」

それに待ち合わせしている人がそろそろ来ると思うので「

「ああ、そういえば宿をとるときにそのようなことを言っていましたね」

ナガレは昨日のことを思い出し頷く。

「わかりました。引き止めることはしません。ですがせめて昼食も食べていてください。その時に別れの挨拶をしたいと主が言っておりました」

「それくらいだったら」

たいしたことではないと、幸助は頷いた。

「ところでシズク……ちゃん？　様？　お嬢様？　がどうしてここに？」

呼び方に迷いつつ問う。昼と一緒に食べようと言うだけならば、シズクがここにくる意味はないのだ。

「貴族なんだからちゃん是不味いんじゃないかな？」

お嬢様が無難だと私は思うけど」

「ええ、ウィアーレさんの言うとおりそれが無難でしょう。

それでシズク様がここにいる理由でしたね。

朝の模擬戦で今日の鍛錬は終わりとなったのです。それで空いた時間を持て余し、あなたがたにお話でも聞かせてもらえればと思い、お連れしました。

シズク様はあまり敷地外へと出ないので、外のことを知らず世間知らずのように育ってしまっ

シズクに外のことを聞かせるというのも本当だが、幸助の情報を得られたらなという思いもある。

シズク本人的には鍛錬での自己鍛錬が楽しく、外の世界にはあまり興味が湧いていなかった。それに身の回りに強い人がいて、その人たちが相手の稽古で十分だったのだ。

しかし今回のことで身内以外との模擬戦の楽しさを知り、それを通して世界各地にいる強者に思いを馳せるようになる。

ナガレに乞われるままに、幸助たちは日常生活や旅の合間に見てきたことを話す。

静かに聞き手に回っているシズクだが、無関心というわけではなく、ときおり笑みを浮かべ頷くなど楽しんでいる様子を見せていた。そして昼食の時間となり、朝食と同じ部屋に移動する。客室には戻らないので、幸助たちは荷物も持っていている。

昼食はコウマ風ではなく、こちらの大陸のものであった。それも十分すぎるほどに美味で、コックがよほど気合を入れたのだろうと簡単に推測できた。

食事を終えた幸助たちは惜しまれつつ、敷地を出る。

見送りにはゲンオウとシズクとナガレの三人が出て、遠巻きに門下生たちや女中たちが見ていた。

「気がむいたらいつでも来てくだされ。大会中はずっとこちらにいるのでな」

「そうですね。一度くらいはゲンオウ様に挑戦するため来るかもしれません。当てる策を思いつけたらですが」

「楽しみにしておるよ」

「また相手して」

シズクの言葉に幸助は頷きを返す。

ウィアーレとともに一礼し幸助は、ゲンオウたちに背を向ける。

三分ほど歩き、ウィアーレが気が抜けたような溜息を吐く。貴族の家から離れてようやく一息つけたのだろう。

それを見て幸助は、これから高級宿に戻るのだということを口に出すべきか迷っていた。結局は話さず、束の間の休息をウィアーレは得る。だが歩いているうちに思い出したのか、緩んでいた表情は引きつったものになる。

幸助は頑張れとも言えず、苦笑を浮かべ歩くペースを落とし、到着を遅らせることくらいしかできなかった。

強くとも勝てないものはある

今幸助とワイアーレの目の前に、レゾティックマーグの冒険者ギルドがある。

アーマセラ道場に行ったあと、一日宿でのんびり過ごした二人は暇になり、ギルドで暇潰しに仕事を受けることにしたのだ。

街の規模がベラッセンよりも大きいので、ギルドの規模もそれに伴うように大きい。大会のおかげということもあるだろうが、人の数もベラッセンのギルドより多い。

「いつもは付き添いとして一緒にいたけど、ワイアーレはギルドに登録してる？」

「してるよ。職員は全員してる」

登録していないのならば、依頼を受けるために登録しなくてはと思っていたのだが、その必要はないとわかった。

ベラッセンは地元ということもあり幸助とワイアーレの事情をギルドは知っている。だから幸助一人で依頼を受け、ワイアーレを連れて仕事をして、人数を増やして報酬上乘せを強要するといった小細工を行ったなどと思われる心配はない。そんなことをしないという信頼もある。

けれどもここでは幸助たちの事情をギルドは知らず、迂闊なことをするとギルドに勘違いされトラブルの元になると思い、登録のことを気にかけたのだった。

「じゃあ、ここで登録しなくてもいいね」

二人は建物内に入り、そのまま雑務系依頼のある場所へと向かう。

暇潰し程度の仕事を探しているので、街を離れるような依頼は受ける気がない。そういった短期で街を離れるような依頼は、大会参加者がウォーミングアップとして持っていき今は数が少ない。

壁に貼られた紙を見て、一つ頷いたウィアーレは決めていたことを話す。

「私にできそうなもの探してみるよ」

「ん？ 一緒にやらないの？」

「うん。一人でやってみようと思って」

幸助と一緒に行動すれば、また頼ってしまうと考えた。だから甘えを消すため一人で行動して、慎重にかつ確実に仕事をこなせるように自身にプレッシャーを与える。

保険もかけるつもりだ。幸助と一緒にやった依頼に似たものを、中心に受けようと考えている。まったくやったことのない仕事よりも、失敗する確率は下がるし、緊張や不安も少ないだろう。

別々の依頼を行うのは、成長のための第一歩なのだ。

こういった理由は話さずに、幸助と一緒にの仕事は力量的についていけないといった建前を話して誤魔化した。なんとなく本当の理由を話すのは恥ずかしい思いがあった。

「お金目的じゃないから、ウィアーレに合わせてもいいんだけど」

「私のことは気にしないで、好きな依頼を受けるといいよ。」

私も考えがあって一人でやってみようと思ったんだし」

このままでは一緒に行動することになるかとも思い、少しだけ理由を話す。

「……それならそうしようか。」

「ちようどいい依頼があるといいな」

「だねえ」

二人は壁に張られた紙を流し見ていく。

幸助は技術として身につけられそうな依頼がないか探し、ウィアーレは自身にできそうなものを探していく。

一枚の依頼書が目にとまり、ウィアーレは立ち止まる。

「これがいかな」

内容は子守の手伝いだ。大会のおかげで忙しくなり、子供たちの世話する時間が少なくなった大人たちが自分たちの代わりに、短時間でも子供の世話をしてくれないかとギルドに依頼を出したのだった。

子供の相手は孤児院での生活で慣れている。手始めの依頼としては慣れているこれではないかと、受けることにしたのだ。

「みつかったんだ？　俺は……これやってみようかね」

幸助がみつけたのは、砥ぎ師からの依頼だ。研いでもらいたいという依頼ではなく、忙しいので伝票整理や客の対応をお願いしたいといった内容だ。いくら忙しいといっても素人に砥ぎを任せはしないだろう。あと前提条件として文字の読み書きができること、とつたものがあつた。このことから雑務をしてほしいのだとわかる。

二人は依頼者の住所を確認し、ギルド前で別れる。

ギルドから歩いて十五分ほど、そこに目的地である砥ぎ師の店はあつた。

「こんにちはー」

挨拶しながら店に入ると、誰もいないカウンターがすぐ目の前に

あった。

カウンターのすぐ後ろには棚があり、砥ぎ終わったらしい刃物がすらりと並べられている。置かれている刃物は、包丁といった生活用品から、剣や槍といった武器まで様々だ。槍や斧といった長かったり重たかったりするものは、立てかけられている。

「留守？ 奥にいるかもしれないか」

大きく息をすいこみ、先ほどよりも大きな声で店の奥へと声をかける。

「こんにちはー！」

「はいはーい」

店の奥からがたごとと音がして、作業服姿の男が出てきた。

「どーも！ 作業に集中して気づくのが遅れました。

イザザキ砥ぎ屋へようこそ。どのような刃物でも砥ぎなおし、新品と変わらぬ切れ味に戻します！」

今日はどのような刃物をお持ちで？」

「客じゃないんだ」

「客じゃない？ だとしたらどんな用事でここに？ もしかして弟子入り志願？ もしそうなら、今は忙しいから大会終わってからにしてほしいんだけど」

「弟子入り志願でもなくて！ お手伝いの依頼をギルドに出したでしょ。その依頼を受けにきたんだ」

一瞬、男はキョトンとしてすぐに手を打つ。その反応にすでに募集は終わっていたのかと幸助は思う。

「あ！ あれね！」

「もしかしてもう募集してない？」

幸助の言葉に、男は勢いよく手を横に振る。

「いやいや！ 今まで全く来なくて、もう手伝いに来る人はいないんじゃないかなと思ってたんだ。

助かった！ これで作業に集中できる」

「じゃあ雇ってもらえるってことですか？」

「うん。」

カウンター内に入ってきて。やってもらおう仕事を説明するから」

男の手招きに応じて、幸助はカウンター内に移動する。

カウンター裏には表から見えなかったが、椅子と机があり、机の上に紙が重ねられている。

「依頼書にも書いたと思うけど、やってもらいたいことは大きくわけて二つ。客の対応と書類整理。

書類整理ってどんなのかというと、使ったお金と収入の計算。二十日前から計算が止まってるんだ。日付とかお金の種類はきちんと書いてあるから、いつの収入なのか支出なのかとは迷うことはないと思う。

これらを一日ごとにまとめて、五日ごとにまとめて、全体でまとめる。ここまでやってくれ。

依頼書に書いてあったと思うけど計算はできる？ 苦手なら一日ごとにまとめるだけでもいいんだけど。それだけでも、とても助かるからね」

「大丈夫です」

話に聞かぎりでは必要なのは算数レベルだ。それならば大丈夫

だろうと頷いた。

「そう？　よかった。」

次に客への対応。品を受け取り、ここにある紙に、名前と品物の種類と受け取った日付を書いてくれ。

預けたものを取りに来た場合は、客から名前を聞いて、こっちの棚から品物を探して渡す。槍や斧といった棚に納まりきらないものは、こっちに立てかけてある。タグがついているから探せないことはないはずだ。そのタグに料金も書いてあるから、その料金を受け取ること。

なにかトラブルがあれば、店の奥に呼びかけてくれれば誰かでてくる。

雇用期間は四日。四日もすれば、作業が落ち着くんでね。

とりあえず、これくらいかな」

ここまで聞いて何か質問はと聞いてくる男に、幸助は少し考え湧いた疑問を聞く。

「お金の単位はどうしたらいい？　ルトで書く？　それとも銅貨とかにしとく？」

「計算の間違いがなければ、どちらでもいいよ」

「基本ルトで書いとくよ。時間があれば銅貨とかにもしとく」

「それでいい。」

じゃあ、早速頼んだ」

「あ、ちよつといい？　頼みがあるんだけど」

「頼み？」

幸助は去りかけた男を止める。

「時間がある時でいいんだけど、作業現場の見学をしたいってのと、

刃物の簡単な手入れの仕方やコツを教えてもらいたいんだ」

「休憩時間の時でいいんなら、こちらとしてはかまわないよ」

そういつて男は店の奥に戻っていく。

残された幸助は店内を見渡し、気合を入れる。

「とりあえず、書類の確認でもしてよう」

椅子に座り、書類を手にとって一枚一枚確認していく。

数えてみると、七十枚ほどあった。下の方から古い順になっているが、収入と支出の区分けはされておらず、手始めにその区分けをやり始める。

その途中、店の入り口に気配を感じ、書類に重しを置いて風に飛ばされないようにしてから、幸助は立ち上がる。

「いらっしゃいませ」

「うおっ!？」

カウンターから視線をずらしていた男には幸助が急に現れたように見え、驚いた表情を見せる。

そんな客の様子に幸助は小首を傾げるが、まあいいやと流す。

「あ、預けてあった槍を受け取りたいんだが」

「名前はなんとおっしゃるんですか？」

「ゲーニス。ゲーニス・フラッカー」

「ゲーニス様ですね。少々お待ちください」

置かれている三本の槍のタグを確認し、該当する一本を手につ。

「御代は銀貨二枚となっております」

「これでいいか？」

男はカウンターに二枚の銀貨を置いた。

「はい。ではこちらをどうぞ」

「ああ」

男は受け取った槍の刃を確認し、満足したように頷いている。

「世話になった」

「ご利用ありがとうございました」

幸助が頭を上げている間に男は店を出て行く。

「お金は……この籠でいいのかな」

摘み上げた銀貨二枚を、カウンター下の籠に入れる。

カウンター上にある、枠が描かれた紙に客の名前と武器の種類と金額を書き込んでいく。ここまでやって、品を受け取りにきた客への対応は終わりとなる。

順調な滑り出しと頷いて、幸助は書類作業に戻る。二つにわけた書類を、古い日付が上にくるように並べかえ、計算を始める。

「電卓があればなあ」

簡単な計算だけとはいえ量が多く、見直しのことも考えると電卓がほしくなってきた。

とはいえ上昇した能力のおかげか計算していくうちに、地球にいた頃よりも計算速度が上がっていき、のんびりやっても明日には終わりそうだと見通しがたった。

ときおり来る客の相手をしつつ、書類を丁寧に整理していき、夕方となる。それほど忙しくはなかったので、体力的にも精神的にも疲れはなかった。

出来具合に満足してなさそうな客の対応は、職人たちがしてくれたので苦勞も感じなかった。

「店は閉めるから今日の仕事は終わりだ」

書類と睨み合っている幸助に、奥から出てきた男が話しかける。

昼食時に少し話し、名前はコランダムだと判明している。

その時、剣の手入れのことについても聞いている。

そこで幸助は初めて、刃物を砥ぐ時に数種類の砥石を使うことを知った。

芸術品としての価値のある刀のように見栄えを気にしないため、複雑な過程を踏まなくともいいが、それでも一種類の砥石のみを使うというわけにはいかないのだ。

もとより期待はしていなかったが、自分で完全な整備をすることは無理だとわかった。一ヶ月ほど集中して学べば、できるようになるかもしれない。だがそういった学習につきあうほど職人たちも暇ではないだろう。

幸助はここにいる間に、血糊や脂の丁寧な取り除き方、刀身の異常の見分け方を学べれば御の字だと思うことにした。

「んんーっ！」

幸助は背筋を伸ばして、書類をわけて椅子から立ち上がる。

「明日はどれくらいにくらいいいですか？」

「二つ目の鐘が鳴る頃にでも」

この街では一つの鐘が朝六時頃に鳴り、二つ目の鐘は九時頃に鳴る。

「わかりました。じゃあ、今日は帰ります」

「お疲れさん」

職人たちは店を閉めたあともしばらく作業を続けるらしく、コラシダムも作業着のまま店の奥へと戻っていった。

店から出ると、幸助と同じように仕事帰りの者たちが道のあちこちを歩いている。

彼らの流れに混ざり、宿へと戻る。自室の扉を開けると、先に仕事が終わっていたワイアーレが暇そうに自身の身分証明カードをいじっていた。

「あ、おかえりー」

「ただいま。先に終わったんだね」

「うん。最後まで残る必要はなかったよ」

ワイアーレ側の依頼人としては、一番子供の多い時間帯に手伝わってもらえるだけで大助かりなのだった。

それに最後まで残ってもらうと、八時過ぎまで拘束することになる。ワイアーレたちバイトをその時間まで拘束すると賃金的に苦しいことになるので、フルタイム働いてもらうのは避けたのだ。

荷を解いた幸助はワイアーレと今日あったことを話し、夕食まで時間を潰す。

この日から契約した期日まで、幸助は何事もなく勤め上げた。

賃金は銀貨三枚で、オマケとして砥石をもらった。これはナイフを砥ぐ用だ。調理など日常生活で使うナイフなので、気合を入れて手入れする必要もなく、一種類の砥石で十分なのだ。砥ぐ時のコツ

も実践解説付きで教えてもらい、もちろん剣の手入れ方法も教えてもらったので、ここで得たものは給料以上といえる。

ウィアーレの方はというと、慣れているということと気合を入れていたことで失敗もなく働くことができた。だがハプニングがなかったかというところでもなく、本人の知らぬ間に商家の遺産相続問題に少しだけ関わっていたりする。

幸助と違い日雇いで契約したので、いつまでという契約期間はなく、幸助の契約期間を過ぎても手伝いに行くようだ。

幸助たちが思い思いに過ごしている一方で、エリスもリッカードで用事を済ませていた。

「では話した内容で頼む」

「ええ、お任せください」

エリスの向かいに座っているのは、建築依頼の請け負いを生業とする者だ。

「完成はいつくらいになるだろうか？」

「そうですね……貴族の屋敷ほど大きくはなく一般的な家よりも大きいですから、最大で半年といったところでしょう」

「事前に聞いていた通りか。」

「わかった。よろしく頼む」

エリスが新居として頼んだ家の大きさは、四世帯が住むことのできるアパート、それよりもやや大きいかといったくらいだ。頑丈さを第一にしたことと家自体の大きさを、通常の一軒家の価格よりも高くなっているが、竜鱗一枚を売り払っているので懐にはまだまだ余裕がある。

竜鱗はリツカートの冒険者ギルドの長に売った。彼は昔からの知り合いで、一ヶ月前冥族の国に行く前に呼び出された時、ついでに竜鱗を渡しておいたのだ。家近くの知り合いで、竜鱗を買い取ることができる財力を持ち、実際に買い取ってくれそうな知り合いは、そのギルド長くらいなものだった。

竜鱗の売却金額は閃貨で百枚以上だ。そんな大金がすぐに用意できるわけなく、時間を置いた今日受け取ったのだ。そのお金と冥族からの報酬を惜しげもなく使い、新居のセキュリティーは万全を通り越して、やりすぎともいえるものになる予定だ。

ちなみにギルド長がエリスを呼び出したのは、手紙を渡すためだった。差出人は過去からのエリス。内容は短く、一文のみだった。その一文でエリスは大切ともいっていい記憶を思い出すことができた。

その記憶がどんなものなのかは、いずれわかるだろう。

「建築場所は郊外ということで変更はないですね？」

「ああ。そこに作ってくれば、完成時に魔法で小さくして持ち運ぶ」

「あとは、書類の不備がないか確認をお願いします」

男が差し出した書類を、エリスは確認していく。

しっかり時間をかけ、間違いがないことを確認し、書類を返す。

「今日のところはこれで失礼する。次は三ヶ月後にでも様子見に来るつもりだ」

「はい。次のお越しをお待ちしております」

店から出るエリスに深々と頭を下げ見送る。上客なので、丁寧すぎるほどの対応でちょうどいいのだった。

「リッカートでの用事はこれで終わりじゃな」

業者の事務所を出たエリスは、予定を確認してすべて終わったことを確認する。

「ではコースケたちのところに向かうとするかの」

街を出たエリスは二度の転移魔法を使い、レゾティックマーグへとやってきた。

二度も使ったのは、一度で移動できる転移魔法を使えないからだ。移動距離に関係なく世界中好きに移動できる転移魔法は難易度が高く、神や高位の精霊のみが使用可能なのだ。エリスが使おうと思ったら、二十年ほど魔物退治を行い実力を伸ばす必要がある。といってもエリスは今の転移魔法で十分だと思っているので、修行することはない。

「さて二人はどこにおるかのう」

探知の魔法を使い、幸助たちの居場所を探る。使ったのは、魔力波動を四方に飛ばし一瞬のみ知人の魔力を探知して居場所を探るもの、いわばソナーのような魔法だ。効果範囲は徒歩一週間の距離にも及ぶ。

「おや？ この反応は」

二人の反応を探知したエリスは、視線を街からずらす。幸助たち以外にボルドスたちの魔力も探り当てた。

ボルドスたちは、エリスがいる位置から六日ほど離れた場所にいる。

「後日会いに行くでしょうかね」

ボルドスのいる方向を見たあと、エリスは街に入り幸助の反応を辿っていく。

もう一度街中でソナー魔法を使い、エリスは幸助のいる砥ぎ師の店にたどり着いた。

「いらっしやいませ〜ってエリスさん!?」

幸助は入ってきたエリスを驚いた表情で見ている。

「元気にしておったか?」

「元気は元気だけど、どうしてここにいてるって?」

「人探しの魔法があるのさ。」

幸助は仕事中美たいだね」

「うん。大会まで暇で、その間に仕事の一つでもやってみよう」と

「そうか。ここで話すと仕事の邪魔になるのう。とってる宿の場所を教えてもらえる?　そこで待つてることにするよ」

幸助は頷いて、滞在している宿の名前と場所を告げる。

「覚え違いじゃないなら、そこって高級宿じゃったような?」

「あつてるよ。ちょうどいい宿が空いてなくて、そこにしたんだ」

「お金大丈夫かの?　私がくるまで足りてればいいって考えていたのか?」

幸助の財布の中を思い出し、ワイアーレと一緒に高級宿に泊まる余裕はないのではと思ったのだ。

「宿代稼ぐためにも仕事しておるのか?」

「いやさつきも言ったように大会までの時間潰し。

お金は大丈夫なんだ。閃貨十枚手に入れたから」

「待て、生半可なことでは閃貨を十枚も手に入れられはしないだろう。私がおらん間に、いったいなにをしたのだ？」

「いやあとで聞くことにしようか」

エリスの背にひやりと冷たい汗が流れる。今すぐ問い詰めたかったが、思いなおした。ここで話すのは商売の邪魔になるからだ。

「宿に行ってるぞ」

「う、うん。多分ワイアーレが戻ってると思うよ」

「そうか。ワイアーレから話を聞いておくことにしようか。」

「楽しみじゃな、お前さんがなにをしでかしたのか知るのは」

エリスの表情は笑顔なのだが、幸助はその表情のまま受け取ることができなかった。ほかに目撃者がいれば、同じような感想を持つことになるだろう。

エリスが去り、幸助は仕事が終わる宿に戻るのが少し怖くなった。けれども時間が止まるということはありえず、仕事を終え技術を学んだ幸助は恐る恐る宿へと向かうことになる。

今日でこの手伝いは終わりなのだが、達成感を感じる暇などなかった。そんな幸助の様子に、職人たちは首を傾げるだけだった。

「ただいまー」

思わず小声になりつつ幸助が扉を開くと、変わらぬ笑顔のエリスが出迎えた。その後ろでワイアーレが幸助と同じように怯えた様子を見せていた。

「おかえり、ずいぶんと活躍したみたいじゃな」

温かみのない言葉に、幸助はあとずさる。

「えっと、どれのことを言ってるのかなと思うわけで」

「新たな遊びを発表したことでルビダシア家と繋がりができたこと」

「……誘拐に関してはなにも言わないの？」

「そういったことは冒険者ならば関わってもおかしくはないからの。事件解決自体にはなにも言う必要はない。

問題なのは、名を売るような行動したこと。名を知られるような行動をしたこと。この二点じゃ。

せっかく私が、冥族関連でそうならないように苦心して動いたというのに」

なんとか冥族が積極的に関わらないよう動いたというのに、合流してみたら行動を台無しにするようなことが二つも起きていた。怒るなというのが無理だろう。

実際のところエリスは怒ってはいないが、なにしてくれてんだという思いはおおいにあった。

「世界に名を広めたいのなら言ってくれ、そういった方向で動けるよう人を紹介してやる」

「そんな気はさっぱりないんだけど」

「ならば自重してくれ」

「いやあの、ごめんなさい。

……一つだけ言い訳したいんだけど」
「なんじゃ？」

「誘拐された子の中に、貴族の子がいるとは想像もしてなくて。そこは情状酌量の余地はあるかと」

「まあ、それはそうだが……」

そこで溜息一つ吐いて続ける。

「今後は自重してくれぬか？」

「善処します」

予測できないことがありえるので、素直に頷けない幸助。

そこはエリスも理解しているので、フォローしてやればいかと考えている。昔のエリスと比べてみると、すごく甘い判断なのだが幸助とウィアーレがそれを知るはずもない。エリスが丸くなったと知る機会はあるが、それはまだまだ先のことだ。

「明日、商人ギルドと一緒にきてもらう。いいな？」

「反対はしないけど、どうして？」

「口止めじゃよ」

幸助が新たな遊びだと提出したオセロは、誰にでも遊べるものだ。誰にでも遊べるということは、それだけ多くの者に受け入れられるということ。

オセロを遊ぶには道具があったほうが便利。つまり多くの者が遊ぶⅡ道具が多く必要ということになり、お金が多く動く。そしてその利益の一部が幸助に入ってくる。一部とはいえ世界規模で売られるのだから、入ってくる金額は多額と言えるもの。そんなにお金が集まれば、下心を持った者が集まってくる可能性が極めて高い。ほかに別アイデアがあると期待して集まる者もいるだろう。

幸助が目立つ気がないのならば、そういった者は邪魔でしかないのだ。だから極力幸助の名が出ないように、商人ギルドに口止め料を払っておく必要があった。

商人ギルドに情報を渡し、すでに数日経ってはいるが、やっておくにこしたことはないのだ。

「わかったかの？」

口止めの必要性を説明され、こくこくと幸助とワイアーレは頷く。このほかにルビダシア家の方にもなにか手を打ちたいと、エリスは考えている。

ルビダシア家はそれなりに有名で、各国に門下生を派遣したり、各国からコウマ国に学びにくる人がいたりして、貴族や王族とも繋がりを持っている。そういった者たちと出会ったとき、話題の一つとして幸助のことを話さないとはかぎらない。そうすると世界でも有数の実力を持つゲンオウに評価されている幸助に、興味を持つ者が出てくるだろう。

そういった動きは幸助や周囲の者の生活を阻害するだろう。そうならないよう手を打ちたいと思っているのだ。

だがエリス自身はルビダシア家やコウマ国にコネはなく、手が出せない。エリスの持つコネを使い、幸助のことを広めないよう動いても、優れたる魔女が保護に動いた人物として、その動き自体が人々の興味を引きかねない。

よって対応策の一つでも思いつくまでエリスにできることは、ゲンオウたちが幸助のことを広めないよう祈るのみだ。

「頭が痛いわ」

眉間を揉み解すエリスに、原因である幸助は申し訳なさに緩い笑みを浮かべることしかできなかった。

部屋に入り、お茶を出したり、肩を揉みリラックスしてもらったりと、エリスの雰囲気がある程度落ち着いた頃、ようやく幸助とワイアーレから怯えが消える。

その後は自分たちのことは話したので、エリス側の話を聞き、夕食までの時間が過ぎていった。

結局参加だよ！ やったね幸助

ベッドから身を起こした幸助はのろのと着替えて、寝室から出る。ウィアーレとエリスの部屋からは動いている気配はなく、二人ともまだ寝ている。

身支度を整え部屋から出て、キッチンへ向かう。朝食を作るためだ。コックが作るので客が作らずとも朝食は出る。だが自分で作るうと思えば作ることもできる。

材料はコックや食堂にいる従業員に声をかけると準備してくれる。量が多すぎると別料金を取られるが、大抵は食事料金を前払いしているとしてタダでもらえる。

幸助が朝食を作るのはエリスの注文だ。ここに泊まって三日間は宿の料理を食べていたのだが、飽きがきたのだろう。久しぶりに幸助の料理を食べたいと言い出し、作ることになったのだ。

キッチンの前までくると、ふわりと料理の匂いが鼻をくすぐる。

食堂ではコックがすでに働いている。包丁がまな板を叩く音や食材が焼ける音を聞きつつ、テーブルを拭いていたメイドに声をかける。

「おはようございます。食材もらいたいんですが」

「おはようございます。なにが必要ですか？」

「切つてあるパンとジャムとバター。次にサラダ用のレタス、キュウリ、トマト、ドレッシング。卵と薄切りしたハム。」

「これらを三人前いいですか」

朝食は、パンとサラダとハムエッグという簡単なものに決めた。ウィアーレもエリスも朝からたくさんは食べないので、これくらいが丁度いい。

注文を再度確認し、メイドは調理場へと向かう。そしてすぐに材料をカートに載せて戻ってきた。

「こちらでよろしでしょうか？」

「はい、ありがとうございます」

「お客様用のキッチンが食堂の隣にあります。」

使い終わった調理器具は、軽く水洗いして一まとめにしておいてください。

食べ終わったあとの皿も、お客様用のキッチンに持って行って一まとめにしておいてください」

「わかりました」

そう言って幸助は教えてもらったキッチンに行って、調理を始める。

調理する様子は堂に入ったもので、誰かが見ていたら年単位で調理し続けた経験があると思うだろう。それくらい慣れた様子に見える。

実際はエリスの家で、料理したくらいだ。上がった学習能力のおかげで、手際がよくなっていた。

さらにはホルンとエリスの好みも的確に掴んでおり、二人が幸助に料理を任せる回数が徐々に増えていったなんてこともあった。ポルドスとベラッセンに行く前で既に、ホルンの料理の腕を軽く上回っており、エリスに迫る勢いだったのだ。一流どころにはまだ敵わない、けれども三流どころには負けないくらいの腕前だ。

トントンとリズムよく包丁を使い、野菜をしゃきつとした歯ごたえが残るような切り方をする。ドレッシングを一舐めし味を確認し、少し別皿に取り分け、調味料を付け足しエリス好みのものを別に作る。目玉焼きも一つだけ別に焼いていく。それがエリス好みのものだ。

ウィアーレの好みは知らないの、今回は幸助自身の好みと合わせている。

自身の好みも把握して、それにそった料理が思い通りにできるの

で、料理の腕が上がったことを幸助は嬉しがっている。

「完成っ」と

出来上がった料理をトレーに載せて、手早く料理器具を洗っている。

部屋に戻るとまだ二人は寝ているようで、リビングは静かだ。

今日も仕事があるウィアーレを先に起こすことにする。三度扉を叩いても反応がなく、幸助はやや緊張しつつ扉を開く。

「おはよー」

声をかけながら近づくと、もぞりと掛け布団が動く。もう一度声をかけると、反応が返ってきた。

「うあ？ コースケさん？」

「朝だよ。ご飯もできてる。起きて」

「朝……あーおはようございます」

「うん」

リビングに来てと声をかけ、幸助は部屋をでた。

次のエリスも同じように扉を叩き、反応がなかったので中に入る。こちらは声をかけても反応はなく、肩を揺する。

「おはよーございます」

「むう……なんじゃ朝か？」

「そうですよ。ご飯作ったから起きてくださいな」

「……そういえば頼んでいたな。起きようかの」

エリスの寝室から出て、緊張から力んでいた体から力を抜く。

リビングではパジャマ姿のワイアーレが三人分の水を入れていた。顔を洗って眠気はとれたらしい、すっきりとした顔をしている。

「その小皿にドレッシングを取り分けている席は、エリスさんのところだから。座るならそれ以外にね」

「わかった」

顔を洗ってきたエリスもリビングに入ってきて椅子に座り、祈りを捧げ、食事が始まる。

「美味しい」

エリス専用のドレッシングをかけたサラダを食べ、好みにぴったりのあった味に思わずといった具合に感想を漏らす。

「腕は鈍っていないようじゃな」

「そうらしいね。美味しくてよかったよ。」

ワイアーレはどう？ もっと甘めがいいとか辛めがいいとかない？ 次回の参考にするけど」

「不満はないなあ。あえて言うならもう少し薄味のほうが？」

「薄味ね、了解了解」

ワイアーレの嗜好をしっかりと覚え、リングジャムを塗ったパンに噛り付いた。

私よりも料理の腕、上？ と呟いているワイアーレの言葉は聞き流した。

食事が終わり、二十分ほどのんびりしたあと、食器を戻しに行く幸助とこれから仕事のワイアーレと一緒に部屋を出る。幸助は砥ぎの仕事をやった以外は働いていない。これ以上厄介事に巻き込まれないよう、エリスの近くで待機するように言われているのだ。

エリスが教師役で講義してくれるので、暇ではないし、色々知識が得られるのでなんの不満もなかった。

「いってらっしゃい」

「うん、行ってくるね」

玄関へと向かうワイアーレを見送り、幸助は客用キッチンに食器を持っていく。その帰りに玄関ホールを通った時、ナガレがやってきたのを見て足を止める。

ナガレも幸助を発見し、軽く頭を下げて近づいてきた。

「おはようございます」

「おはようございます。なにか御用ですか？」

「ええ、ちょっと頼みごとが」

「ここでの立ち話もなんですから、部屋の方にどうぞ」

エリス立会いの下で話した方がいいと思い、幸助は部屋に移動することを勧める。

「どちらさまかな？」

扉が開きそちらに視線を向けたエリスは、幸助と一緒にいる見知らぬ人を見て問う。

「助けた貴族の子の世話役。

話したよね、ナガレさん」

「ああ、たしかに聞いたな。

初めましてエリシールという。コースケとは師弟の間柄だな」

ナガレはエリスのに名にわずかに反応を見せる。エリスの本名は

有名でナガレも知っている。だが容姿は知らず、聞いていた年齢とも違ったので、有名人と同じ名前なだけと思いい気にしないことにする。

「初めまして、私はナガレと申します。コースケ君にはお嬢様がお世話になりました」

「そこらの話は聞いておるよ。」

まあ、玄関先で話すのもなんだ、中に入りなさい」

「では失礼します」

エリスは先に椅子に座り、幸助に茶の用意を頼む。ナガレに椅子を勧め、軽く雑談を始める。エリスの口調は普段のものではなかった。幸助がティーカップをそれぞれの前に置いて、椅子に座って本題に入る。

「今日はコースケに会いに來ただけなのかな？」

「少し頼みごとがありました」

「……頼みごとね。それはどのようなもの？」

「大会の特別枠に参加してもらえないかといったものです」

一拍置いてエリスは問う。

「どうしてそのような特別な扱いに？」

「なんと言いますか、私どもとしてはコースケ君は大会に参加するものと思っでまして。」

それで主から、コースケ君の大会スケジュール調査を頼まれました調べたところ、どこにも名前がないことがわかりました」

「そりゃ当然だよ。参加者としてじゃなく、観光する者としてここに來たんだから」

幸助からしたら当然と言える言葉に、ナガレが苦笑を浮かべた。

「あの實力だからってつきり大会に参加するものとばかり。

です。で今大会は盛り上がるぞと、皆楽しみにしていたのですよ。主も同じで、参加していいとわかれると、参加させて戦いぶりを見たいと言ひ出しまして」

「なるほど、それでここに來たのか」

「はい。参加の依頼に來ました。

大会関係者にはこちらから話を通してますので、あとはそちらの了承を貰えればどうにでもなるのですが」

氣乗りしていない幸助の表情を見て、ナガレはこれは駄目かなと心の中で呟いた。

無理強いをするつもりはないので、断られてもなにか問題があるわけではない。主たちの説得に少しだけ苦勞する、それだけだ。

なのでエリスの肯定的な言葉には驚いた。

「特殊枠というのはどういったものなのかな」

「予選なし、ベスト64からの参戦という条件での参加になりますね」

参加者が六十四名に減ってから、一対一のトーナメント戦になる。それまでは十人総当りなのだ。

「……条件付で参加させてもいいと思ってる」

「条件ですか？」

参加させるという言葉に幸助も驚いているが、問い質すことはしない。エリスのことだからなにか理由あってことだろうと、会話を静かに聞いている。

「コースケの存在をおおやけにしないこと。

これはこの大会だけではなく、今後お前さんたちの口から、ほかの貴族王族にコースケのことを話さないということも含まれる。

書類にその旨を書いて証拠として残すこと。

これが守られると確約されるならば、コースケの参加を認めよう。私もコースケも目立つつもりはないのよ」

エリスはこの大会参加という事柄を利用して、コースケの名がルビダシア家から広まらないようにするつもりだ。

この話を聞いてチャンスだと思った。ルビダシア家周辺にはコネがないので手が出せなかったのだが、向こうから頼みにきてくれたのだ、ルビダシア家にとって不利益にならないよう気をつけて条件を出せば、上手いこと話を運べると考えた。

事実ルビダシア家にとって、コースケの情報を隠す程度どういったこともない。今後のことはともかく今のところ、コースケという存在は利益も不利益も生み出すことはないのだから。

「それは私が今すぐに返答しなければならぬことでしょうか？」

「いや主と話して決めるといい」

「そうですか、では今日のところは帰ります」

ナガレは椅子から立ち上がり、一礼して扉へ向かう。

立ち止まり、振り返る。不意に、なにかを思いついたような表情だ。

「コースケ君の存在をおおやけにしないと言われましたが、大会に参加すれば多くの人の目につきますよね？」

その人たちにも黙ってもらおうというわけにはいかないでしょうし、そこらへんはなにか考えが？」

「コースケには変装の魔法を教えてある。それを使って姿を変え、名を偽ればよいのさ。」

お主らは、コースケの戦いぶりを見ることができればそれでよいのだろうか？」

「それはたしかに」

「ならば事前にお主らだけに変装し名を変えていることを伝えておれば、なにも問題はないだろう？」

「納得致しました」

そう言っただけで今度こそナガレは出て行った。

実のところナガレも変装という案は思いついていた。それを実行し騙しきるだけの実力があるのかと、情報を集めるつもりで付け足すように聞いたのだった。

そのナガレの考えをエリスは見抜いていて、ばらしても問題なしと判断し話したのだ。元より伝えるつもりの情報だったので、隠す必要もなかった。

「そういうわけだから、参加するようにな」

「面倒って言いたいんだけど」

「ここで起こした出来事を丸く治めるためだ、我慢しなさい」

自身が原因なので、そう言われると痛い。

幸助は参加に頷き、どういった変装で参加しようかと考え始める。すぐに思いついたのはライダーだ。必殺技のように見せかける映像の魔法も覚えていることだし、お披露目するのも面白そうだとライダーで行くことにした。

帰ってきたウィアーレに、大会参加を告げると驚かれる。行かないと宣言していたのだ、当然の反応だろう。

突然の参加の理由をエリスが説明し、大変ですねと幸助に若干の同情をしつつも納得した。

次の日、条件を受け入れることを告げに来たナガレに偽名を登録してもらい、幸助の大会参加が決定した。

約束を守ると書かれた書類はゲンオウの直筆サイン入りでかつ、正式な書式で書かれており、それをギルドにお金を払って保管してもらおう。書類を出す際には、両者立会いであればならないといった念の入れようだ。

時は流れて大会当日。

街は人で溢れかえっていた。それらの人々全員が会場に向かっているかというところでもない。

映像の魔法により、会場に行かなくとも試合は見るができるのだ。期間限定でテレビが設置されていると思えばいい。

テレビといっても音声はない。画面が大きいので、迫力はそれなりにあるのだが。

会場に行くのは、生の臨場感を味わいたい人で、とりあえず見ることができればいいという人や人ごみは苦手という人は街中で見る。幸助たちは会場組だ。参加する幸助が行かないという選択肢はないし、エリスとウィアーレは指定席のチケットをルビダシア家から贈られていた。

幸助は大会参加が三日目からなので、初日と二日目までは幸助も指定席で見学することになる。

会場は歴史を感じさせる古さだ。エリスの話だと幾度か改修工事も行われているとのこと。大きさは地球の野球ドームより小さい。似たような建物のコロッセオよりも小さく、収容人数も少ない。満席になり、立ち見客も合わせて三万人収容が限界だろう。

飲み物と食べ物を屋台で買っていき、三人は指定席に向かう。

行った場所は舞台に近いベンチで、前後左右の指定席とは少し間隔が開いており、狭さを感じさせない。

王族貴族が使うような特等席は、会場の上部に設置されている。

「私こういった大会を見るの初めてだよ」

ウィアーレが物珍しげに周囲を見ている。

「私は何度かあるな。まあここ十年は見えていないが」

「俺は一回だけかな？」

幸助が見たのはプロ野球で格闘とはほど遠いのだが、雰囲気は似ていると言ってもいいのかもしれない。

始まるのはいつかなと待って三十分、銅鑼が大きく鳴り響いた。それは会場だけではなく会場外にまで遠く鳴り響き、大会が始まったのだなと街中の人々はわかった。

舞台に数人が上がる。その中にゲンオウもいた。どこからかアナウンスが聞こえてくる。

「大会責任者からの開始宣言です」

これにより会場は静かになる。

年長の老人が、三十才ほどの男に声量上がる魔法をかけてもらい口を開く。

「これより個人武闘大会を始める！」

十秒もかからず手短に終わり、老人は頭を下げた。会場中から歓声と拍手が聞こえてくる。

それらが治まるとアナウンスが聞こえてきた。

「前回個人の部優勝者による、優勝旗返還。
リタイ・ムーゼッツ殿どうぞ」

声に従い、二十半ばの男が手に持つ小さな旗を大会責任者へと渡す。

大会責任者は旗を受け取り、リタイになにか話しかけるが、その会話は会場までは聞こえてこなかった。

アナウンスが舞台上の人々に退場を促し、去っていく間に大会参加者へ注意事項が流れる。

簡単にまとめると。殺しは駄目。事故ならば罪に問うことはしない。だが過剰ともいえる攻撃は殺意ありとみなし、裁かれることになる。

負けはギブアップを認めた場合と気絶した場合と石造りの舞台から落ちた場合。空を飛ぶ場合も舞台から離れすぎた場合は負けとなる。

武器は好きなものを使っていいが、壊れた場合の責任は持ち出した己にかかり、相手に弁償を求めないこと。

怪我也同じで、どんな大怪我也相手に治療費を求めないこと。この大会で負った怪我は、大会側が治療すること。

これらが伝えられ、一回戦第一試合開始間近だと伝えられた。

「選手が上がってきたぞ。そろそろ開始のようじゃ」

控え室で促された選手達十名が舞台に上がり、それぞれ間隔をあけて立ち、開始宣言を待っている。

「えー、準備整いましたか？」

先ほどまでとアナウンスと違う声が、舞台上の選手達に確認のため聞いている。

選手達は問題ないと頷く。それをどこかで見ているのだろうアナウンス役が開始を宣言する。

「一回戦第一試合……始めっ！」

選手たちが一斉に動き出す。それぞれがそれぞれの考えのまま動いていく。

身近な者に突進していく者、魔法を使おうとする者、様子見と体力温存のため舞台の端に引く者、動かずに周囲を見ている者、様々だ。

結局第一試合を勝ち残ったのは、体力を温存していた者だ。観察力の高さ視界の広さが、勝因に繋がった。

次からの試合も第一試合と似たようなもので、二十分ほどで決着がついていく。十分以内で試合が終わったのは、昼まで見て二試合だけだった。

戦いは幸助の予想を裏切るものもあった。できないのではと思えるような動きを、ギフトや魔物を倒し強化された身体能力に任せて行う者がいたからだ。まるで特撮のようで、思った以上に楽しめた。それとそういった動きは幸助の常識を壊し、戦いの幅を広げることになる。見ているだけで更に強くなった幸助だった。

「ボルドスはまだ出てこないな」

「見落としてない？」

「その心配はいらんよ。きちんと見とるからのう」

幸助たちは、ボルドスとは会っている。

街に到着し、宿をとったボルドスの魔力をエリスが捉え、三人で会いに行ったのだ。

三人が着ていると思っていなかったボルドスは驚いていた。そしてこの街で一番の宿に泊まっていることも驚き、そのお金を出したのが幸助と知りさらに驚いた。

ボルドスは一人で来ていたわけではなく、仲間たちと来ていた。その中にクラレスもいた。大会に着てみたかったらしく、ボルドス

について来たらしい。武具店の店番は従兄弟に任せたとのこと。

ボルドスの同行者の中にもう一人女がいて、その人を見た幸助はクラレスが以前言っていたことを思い出し、この人がボルドスに惚れているもう一人だとわかった。名前を聞いて間違いないとわかる。こちらはボルドスと違い、見学らしい。

ちなみにエリスがボルドスの育て親と聞き、ボルドスに惚れている二人は緊張に身を硬くしていた。

ボルドスは幸助に参加するのかと聞き、それに対して幸助はほんの少し迷い首を横に振った。どこから情報が漏れるかわからないので、ボルドスにも参加を秘密にしたのだ。

昼食の休憩が終わり、午後の部が始まる。一時間ほど経ちボルドスの姿が見えた。

「あ、いた」

「どこ？」

見つけられていないワイアーレに、幸助は指差してボルドスのいる場所を教える。

ボルドスは三人に気づいていない。わりとわかりやすい位置いるのだが、指定席にいるとは思っていないので探すことすらしていない。声をかけても、歓声にかき消されて届きはしないだろう。

「さて、あやつは勝ち残るかの」

エリスは楽しみだと笑みを浮かべ、試合開始を待つ。

ボルドスは愛用の斧を使うつもりだ。刃にはカバーをかけていて安全には気を使っているようだ。それでも当たり所が悪いと、簡単に骨折させてしまうだろうが。まあ、それはボルドスの武器だけにいえることではない。

試合が始まる。

ボルドスは近くにいた選手に突っ込んでいく。そこで三回四回と武器を打ち合わせて、相手を気絶させ、次の目標に向かっていく。このグループには突出した者はいなかったようで、極普通に選手同士が潰しあい、最後はボルドスと魔法の使い手の一騎打ちとなる。結果は、範囲型の魔法に耐えながらボルドスが相手に接近し、その勢いのままシヨルダータックルをぶちかまし気絶させた。ボルドスの二回戦進出が決まり、観客から拍手が送られる。それを背にボルドスは疲れた様子で、舞台から降りて控え室に帰って行った。

「ボルドスさん、勝ってよかったね」

「うん」

「よくやったけど、あの様子じゃ優勝は無理じゃなあ」

「無理かな？」

ウィアーレが聞き返す。

「まあ、コースケに勝てないわな」

「あ、そっか」

「会っていない間になにか奥の手でもできたのなら話は別なんじゃないの」

そんな都合よくいかないだろうと、エリスは確信を持っている。付き合いの長さから、突出した成長はしていないと見抜く。

「明日勝ち抜いてベスト64に入って、そこから一回でも勝ったら健闘したって言っていんだろうの」

「ボルドス、強いのにそれだけで健闘って言えんの？」

「ギフト使えないし、発動しないよう気をつけなきゃいけない分、ハンデになっとるしなあ」

暴走するようなギフトはこういった場では使いにくいだろう。暴走している間は全力で、手加減もできない。殺しては駄目だという注意事項に触れてしまうこともありえ、結果使えないと判断することになる。

不利を承知で参加したのは、本選に出場しベスト64に残ると出る賞金目当て、それと自身の実力を確かめるためだ。

ついでにベスト64にでも残れば、冒険者として箔がつく。

ボルドスの思惑をエリスは二人に説明し、次の試合までの暇潰しとした。

試合は次々と消化されていき、午後七時を持って一日目の試合は全て終了となる。

会場から出ていく人々の流れにそって、三人も出ていく。

人々は今日一番の試合はどれか言い合ったり、賭けで儲けた負けたと表情を変えたり、大会の熱気に当てられてただただ騒いだりと同様な反応を見せている。

その騒がしさは夜が更けても続き、例年の如く警備たちを出動させた。

次の日も三人は飲み物、食べ物を買って指定席に座る。

今日の試合も十人総当たりだが、さすがに振るいにかけられただけあって、昨日よりも熱い試合が多く見られた。

選手が健闘するたびに、観客も応援に熱が籠る。

ボルドスは今日も勝ち抜いた。強い相手が複数いて、戦い終わったあとは疲労困憊といった感じだった。

ほかの選手と同じように治療担当に治療してもらい、たっぷり休息して、明日の試合に備えるのだろう。

そして三日目、幸助の参加当日がやってきた。

「先に出るから」

「いつてらっしゃい」

「途中で変装するのじゃぞ。帰ってくる時も同じようにどこかの物陰で変装を解いて、正体や滞在宿がばれないように気をつけること」
「了解」

頷いた幸助は、必要書類を持って宿を出る。

会場に向かう途中で、ふらりと脇道に入り、そこでライダーへと変装する。ついでに全身を覆うローブの幻も重ね、脇道から出る。

観客用入り口とは別の選手用入り口で、そこで立ち警備兵に書類を渡す。

姿を隠し怪しいのだが、念入りに調べた書類は本物で、警備兵たちは首を傾げつつも幸助を通し、個室に案内する。

そこで呼ばれるまで待つことになる。備え付けのお茶やお菓子を食べつつ待っていると、扉がノックされる。

どうぞと言った三秒後に扉が開く。

「ナガレにシズクお嬢様？ なにか伝え忘れたことでも？」

「いえ、ただ様子を見に來ただけですよ。

すでに変装しているのですか？」

ローブ姿の何者かにわずかながら警戒していたナガレは、幸助の声を聞いて警戒を緩める。

「正体隠すためにね」

「どんな姿なのか見たい」

とことこと近寄ってきたシズクがローブの裾をくいと引こうとして、掴めず不思議そうな表情となる。

「これ幻だから掴めないよ。

ちょっと待って」

幸助はローブだけ幻を解く。

シズクとナガレは、現れた見慣れない姿に目を開いて驚いた。

特に二人を驚かせたのは仮面だ。こういった種類の仮面はこちらにはないのだから。

「その変装はコースケ君が考え出したもののなの？」

「完全オリジナルかってこと？」

その問いにナガレは頷きを返す。

「違いますよ。」

俺の故郷に伝わりとある英雄の姿。彼は平穏を乱す何体もの化物と戦い、ついに化物集団の首領を倒し、平和へと導いたんだ」

「聞いたことないですね。目立ちそうな話なのに」

「知ってたら驚くよ」

「この姿ってなにかとくべつなところがあるの？」

「ないよ。これも幻だしね。」

戦闘は、魔法でちょっとした演出を加えながら戦うことになる。

でもその演出もただ光ったりするだけ。

素手で戦うことと同じ」

そうなんだと頷きつつ、シズクは幸助の体にペタペタと触る。

幻に下にある服に触れるのだろうと思っていたのだが、感触の違いに首を傾げる。

「こっちの幻はちょっと高等な魔法だから、感触も誤魔化せるんだよ」

こっちの幻の魔法を使うのは、戦っている最中に幻を纏っている
と疑問をもたれないようにするためだ。映像のみだと殴ったときに
グローブの感触ではなく、素手の感触とわかり、そこから幻を纏っ
ているとばれる可能性がある。念を入れるに越したことはないとい
うことで、この魔法を使っている。

この部屋に來た目的を果たした二人は、部屋から出て自分たちの
見物席に戻っていく。

それから三十分ほど経ち、大会関係者が幸助を呼びに來た。

部屋に入った関係者は、幸助の姿を見て動きを止めた。数秒経っ
て動き出し、ついてきてほしいと告げた。

舞台が見える通路まで案内され、ここで待つように言って関係者
は近くにいた同僚と話し出す。

ここにはこれまで勝ち残ってきた選手もいて、異様な姿の幸助は
彼らの注目を集めている。

注目されているのは姿が珍しいからだではなく、これまでの試
合に出ていなかった者がここにいるからでもある。この姿は目立つ
ので、見落とすことはない。なぜいるのかと不審に思っているのだ。
ボルドスもその姿に珍しそうな視線を送っていて、首を傾げてい
る。どこかで見たようなと記憶を探り、仮面ライダーの演劇を思い
出した。ここでさらに首を傾げることになる。劇中のヒーローが、
なぜここにいるのかと思ったのだ。

あの劇に幸助が関わっていると知らないボルドスは、これが幸助
の変装とは気づくことができないでいた。

ちくちくと刺さる視線を幸助が無視していると、外からアナウン
スが聞こえてきた。

「これよりトーナメント抽選会を始めます。

ここからは勝ち残った六十二名、そしてシード二名を加えた六十
四名による勝ち抜きトーナメントとなっております。

戦う順番は、これから選手自らくじを引いてもらい決まります。それでは選手一同の入場です！ 盛大な拍手を送ってあげてください！」

会場中から大きな拍手が鳴り響く。

その拍手に負けない声で関係者が、選手に入場するよう声をかけた。

そろそろ選手が舞台上がる。拍手は止まらずまだ鳴り響いているが、どよめきも起きている。

原因は幸助だ。選手たちが思ったように、観客もいまままでいなかった幸助に疑問を持ったのだった。

その観客の疑問を無視してアナウンスは、参加者にくじを引く順番のことを話していく。

「呼ばれた選手の方は箱を持った係員のもとへ行って、くじを引いてください。

順番はトーナメント出場決定が早かった方からになります。なおシード二名は最後となります。

では一番、南国出身の獣人クリス！

ギフトは持っていないませんが獣人特有の身体能力を生かし、危なげなく勝ち残りました。俊敏な動きから繰り出される短槍の連続突きは、一回戦二回戦で他の選手を寄せ付けませんでした！ 今後也要注意の攻撃でしょう！」

呼ばれた獣人がくじを引く間に、アナウンスは選手紹介を行っていく。

どのような選手が把握していない客もいると判断し、ある程度の情報を知らせていく。それを観客だけではなく、選手も聞き漏らさないようにしている。対戦相手の貴重な情報なのだ、聞き逃すといったもったいないことはできない。

次々と選手が紹介されていき、ボルドスの出番がくる。

「次は東の大陸からの参加者ボルドス！」

ギフト持ちながら、それがルール上で不利になるということ、ギフト使用どころか発動を抑えつつ戦うというハンデを抱えながらもここまで勝ち残ってきました！

ハンデを抱え、どこまでいけるのでしょうか！」

おおーっというどよめきがそこかしこから起きる。

ボルドスがくじを引き終わり、次の選手の紹介へと移る。

そしてシード組まで順番が回ってきた。

「シード組一番手！ 言わずと知れた前回前々回の覇者！ 今回で殿堂入りとなるか！？ リタイ・ムーゼッツ！

鉄壁を打ち破る選手はいるのでしょうか。非常に楽しみなところですよ」

紹介とともに一際大きな拍手と歓声が起こる。それにリタイは片手を上げて応え、くじを引く。

トーナメント表の空白は、ボルドスの対戦者とアーマセラ流ではない剣術の使い手の対戦者だ。

ボルドスとしては、リタイよりはもう一人の方がまだましだろうと考え、リタイがこっちにこないよう心中で願っていた。願いが叶っても叶わなくとも、厳しすぎる戦いになるとは予想だにしてい

ない。リタイは引いたくじを係員に見せ、トーナメント表に名前が表示される。対戦相手はボルドスとなった。

ボルドスは九割がた一回戦敗退となることを予測し、呆けた表情でトーナメント表を見ている。

指定席から見ているエリスも、くじ運のなさを笑っている。

「最後となりました！」

謎の選手の紹介です！」

いよいよ幸助の紹介となり、会場はざわめきが引いていく。聞き逃すまいと一人一人が声を小さくしているのだ。

「名前はライダー・ワン。出身地、男なのか女なのか、年齢、得意な戦法、少しも情報はありません！」

数少ない情報では、ルビダシア家当主からの推薦を得て、急遽参戦が決定したとのことでした！

それだけ実力があるということなのでしょう。大会で波乱を巻き起こしてくれることを期待します」

こういった情報を得て、幸助を見るとその立っている様も堂々としたものに見える。

ゲンオウからの推薦を得ているという発表で、選手たちは幸助に驚きの視線を向け、観客は大会が楽しくなりそうだと歓声を上げた。一人リタイだけは面白そうな視線を向けている。手応えがありそうなのが嬉しいのだ。

唸れ！ 必殺ライダーキック！

アナウンスにより、一試合目の選手以外は控え室へと戻っていく。幸助の出番は順調に進行しても午後だ。

午前中の試合は用意された個室で見ることができ、昼食や飲み物も大会側が用意する。なので幸助は出番まで個室に籠るつもりだ。部屋に戻ると早速、試合前の様子が映し出されていた。

第一試合は、魔力吸収のギフト持ちと速度強化のギフト持ちの戦いだ。

魔力吸収はその名の通り、魔力を取り込むことができる。ただし使われた魔法の効果は無効化するには三段階目まで育てなければならず、それ以前の成長段階だと効果を減少させ、減らしたことで余った魔力を取り込むことになる。

速度強化は肉体的行動速度の強化のみならず、思考も高速化される。成長の一段階目で肉体的には5%増し、思考は一秒で三秒分の思考ができる。最終的には肉体速度20%増し、思考は一秒で十分の思考が可能となる能力だ。

この試合は速度強化のギフト持ちが勝った。魔法を使わずに攻めたので、相手のギフトは無駄になっていたのだ。

この勝利は、アナウンスがもたらした情報を覚えていたおかげだろう。

順調に試合は進み、昼の休憩を挟み、幸助の出番がくる。

午前中にあったボルドスとリタイの試合は、リタイの勝ちで終わっていた。ボルドスは少々やけくそながらも果敢に攻め、何度も強烈な攻撃を当てていた。だがリタイはそれらを気にせず反撃し、ボルドスを下したのだった。

リタイの装備はブレストプレートと薄い鉄板が張られた硬革の手甲と足甲だ。それらでボルドスの攻撃を受けきれはらずはなく、な

んらかのギフト持ちなのだろうと簡単に推測できる。

「さてついよいよ謎のボールを脱ぎます！　ライダーとシェディンの入場！」

通路で待機していた二人は、アナウンスの呼びかけで舞台へと上がり、向き合う。

多くが謎とされていたライダーの戦いがとうとう見れるとあって、会場の雰囲気は盛り上がっている。

「これで負けたら俺はかませ犬もいいとこだ。
そんなのはまっぴらだからな、この勝負勝たせてもらおうっ」

びしっ和幸福を指差しシェディンが宣言する。

観客まで届くような声ではないが、仕草で挑発に近いことをしたのだろうと判断した観客達は湧き、それぞれ勝手な声援をシェディンに送る。

シェディンに対し幸助は無言で、くいくいつと人差し指と中指を招くように動かす。

「どうやら始まる前から両者挑発しているようです！
皆様も待ちきれないでしょう。私もです！

これよりライダー対シェディンの試合を始めます……開始！」

開始の合図で動いたのは幸助だ。まずは様子見とそれなりの速度で殴りかかる。それなりといっても幸助の主観であって、周囲から見れば大会上位といえる速度だ。

それをシェディンは、焦らずに体を少しだけ動かし避ける。続けて放たれた蹴りも、軽いバックステップで避けた。

「高速で動くライダーとそれを軽やかに避けるシェディン！
ここからどう動くのでしょうか！」

アナウンスの解説を聞き流しながら幸助は、攻撃し続ける。攻撃は真つ正直なものだけではなく、フェイントも入れられている。だがそれすらシェディンは避け続けている。ただし避けるだけで精一杯なのか、反撃はいまだない。

動き続けながら、幸助は考える。

（これが未来予測なのか）

それはシェディンのギフトの名前だ。

アナウンスにより紹介された時に、ギフトのことも言っていたのだ。といっても詳しいことは言っていない。なので情報収集も兼ねて攻め続けている。

これでわかったことは、シェディンは幸助の攻撃をただ見て避けているだけではなく、体各部の動きなど正確な情報をもとにして避けているということ。

最初に攻撃した時で例えると、幸助が一步前に進んだ時には既に横に動き出していた。初動のわずかな動きを見切ったのだらう。

過程から情報を集め、予測しきって結果に反応し、フェイントの有無すら見抜いている。

もう一つわかったことがある。それは遠くから見ているアナウンスや観客からは余裕があるように見えているのだが、近くでシェディンの表情を見ている幸助には、集中している様子がわかり、余裕があるようには見えていない。

（試してみないとわからないけど、この速度以上だと反応しきれないのかも）

試しに少しだけ速度を上げると、シェディンが着ている硬革の鎧に攻撃がかかる。

考えがあっているとわかった幸助は、笑みを浮かべ自重することを止めた。

動きを止めた幸助は大きく後ろに跳ぶ。それをシェディンは見送った。

ギフトが予知ならば追撃に動けたのかもしれないが、シェディンのギフトは初動、視線、これまでの動きといった細かな情報を集めて判断する未来予測。予測外の動きには対応しきれないのだ。下がるということはわかっていたが、なにを狙って下がったのかはわからず、警戒から追わなかった。

今度はシェディンが様子見となる。

幻の仮面の下、幸助の口が動く。仁王立ちから意味のない構えを取った幸助の右足に、光の粒が集まっていく。

それをアナウンスは見逃さなかった。

「ライダーの足が光に染まっていく！ これは大技の前兆なのでしようか！？」

この光は幻でしかなく、当然の如く光っている以外は何にも効果はない。

しかしアナウンスの言葉と同じ判断を下したシェディンは、発動を阻止しようと突っ込んでくる。

それを幸助は大きく前方に跳んで避ける。そして空中にいる間に、カッと光が強い輝きを放った。

今度は渦巻くように青光の粒を撒き散らす様子が見え、会場の誰もがなんらかの技が完成したと捉えた。

着地した幸助は止まらずにシェディンへと今日一番の速度で近づき、飛び蹴りを放つ。

この時幸助は小声でライダーキックと呟いていた。

来るとわかっていても反応できなかったシェディンは、胸部にまともに蹴りを受ける。

その瞬間、眼に痛いほどの強い閃光と会場内に収まり切らない爆音と舞台を覆い隠す煙が、舞台上で同時に発生する。もちろんその全てが幸助の演出だ。

度肝を抜く光景に、会場は静まり返る。

シェディンは舞台から落ち、倒れて動かない。

「……だ、誰か!? シェディンの安否を!」

我に返ったアナウンスがシェディンの様子を見るように指示を出す。

アナウンスの声で観客も我に返り、ざわざわとどよめきがそこかしこから聞こえてくる。

幸助の演出によって、彼らはシェディンが死んだかもしれないと考えたのだ。演出過剰だったのだ。

待機していた看護要員が急いでシェディンに駆け寄る。怪我具合、脈、呼吸を調べて出した判断をアナウンスに伝える。

それを聞いてアナウンスのほっとした溜息が会場に響いた。

「診断を伝えます。」

胸部の骨にひびが入っているくらいで、命に別状はないとのことです!

というわけで勝者っライダー!」

途端に大きな歓声が上がる。

さすがは推薦を受けただけはあると、誰もが納得し今後に期待している。

拍手や声援に片手を上げて応え、次はライダーパンチにしようかと考えながら幸助は控え室に戻る。

この後の試合もつつがなく終わり、トーナメント一回戦は終わる。今日一番の試合は、皆の度肝を抜いた幸助の試合だった。ほかに滅多に戦う様子を見せない妖精族シルフの戦いや、獣人对獣化のギフト持ちといった興味深い試合もあったのだが、ライダーキックのインパクトに全部持っていかれたのだった。

ちなみに宿に帰った幸助はエリスにどういった技なのか聞かれ、演出を加えたなんの変哲もない飛び蹴りと答え、呆れられていた。

次の日の試合は二回戦と三回戦があり、そのどちらも幸助は苦戦することなく勝ち上がる。

二回戦では身体制御のギフト持ちと戦い、三回戦では二刀流のハイゴ布林と戦った。ハイゴ布林は小柄なゴ布林とは違い、二メートル近い体躯を持つ。

身体制御のギフトは、体を思ったとおりに動かせるといったもの。成長させると、関節や慣性や重力すらも無視する動きができる。ただし肉体にかかる負担は完全には軽減されず、無茶な動きをすれば自爆もありうるギフトだ。

試合では相手が自爆覚悟で勝負をしかけ、対する幸助もそういった動きができると学び、同じとまではいかないがこれまで以上の動きで対抗した。中々アクロバティックな試合となり観客が大いに楽しめた試合となった。

ハイゴ布林戦では全ての攻撃を避け、隙について近づいてハイゴ布林を掴み、片手で舞台外へと投げて勝った。

今までの試合に比べると地味な試合だったが、速いだけではなく筋力も高いと知らしめた試合だった。

次の日はいよいよ最終日。

四回戦では簡略のギフトを使うアーマセラ流剣士と戦い、ライダーキックを皿にして煙幕を作り出し、稼いだ時間で拳に幻を纏わせライダーパンチで勝ちを得た。

簡略のギフト効果は、動作の省略を可能にするというもの。極めると準備動作なしで魔法を使うことも可能になる。今まで極めた者がいないので、神の証言でそうなるかわかっているだけだが。

この剣士は極めていたわけではなかったが、剣を振る際に動作の一部を省略し、相手が防御や回避するタイミングをずらしていた。幸助は攻撃を受けても大事にはならなかったので、タイミングをずらされても気にせず攻撃を受けていた。

これまでの試合によって、力が強く、速く、堅いといった三拍子揃ったステータスだと判明し、優勝候補じゃないかと囁かれている。

そして準決勝。誰もが今大会一番の試合だと確信していた。

ライダー対リタイの試合だ。

両者は舞台に立ち、向かい合って試合開始の合図を待っている。

リタイは不適な笑みを浮かべて、幸助を見ている。これからの戦いが楽しみで仕方ないのだ。

「いよいよこの時がやってきました！ 前評判でも事実上の決勝戦と噂されており、私も同意見です！

小耳に挟みましたが、賭けの割合はほぼ五分。二度の優勝経験を持つということで、リタイに賭けた人がやや多めということです。

皆さんっ待ちきれないでしょう。私もそうです！

なので早速いきましよう」

ここでアナウンスは大きく息を吸い込んで、気合と期待を込めて開始を告げた。

「試合、開始っ！」

動いたのは幸助。リタイはこれまでの試合と同じように待ちの態勢だ。

幸助の拳がリタイへと真っ直ぐ突き進む。それをリタイは、腕を交差させたクロスガードで受ける。ボルドス戦を見て、生半可な力の意味がないとわかっているので、わりと遠慮なく力を込めている。ガズンッと肉体と肉体がぶつかったとは思えない音が響く。これを本当の試合開始の合図を捉えた者も多い。

一瞬止まったあと幸助は、その場で連続して殴っていく。それをリタイは時に避け、受け流し、防御していく。有効打と呼べるものはないが、これまでの試合相手ならば防御されても十分なダメージを与えられた攻撃だ。

だがリタイは平然とした表情を浮かべている。

「驚いた。少しダメージが入ってきてる」

驚いた様子を少しも見せないで言う。

（物理ダメージに対して絶対的な防御を持つギフトなのかな？）

そう考えた幸助は、ならば魔法だとリタイから離れる。

それをリタイは追わず、いまだに待ちの態勢を崩さない。

ライダー一号に遠距離攻撃は似合わないと考えた幸助は、ちょっとした工夫で魔法をぶつけることにする。普段ならばやらないことだが、自重を忘れた幸助はむしろノリノリで行う。

まずは握った右の拳を頭上に掲げる。次に左手で、右手の拳から肘までをゆっくりと撫で下ろす。なんらかの技の準備のように見せて、実は袖を下ろしているだけだ。最後に小声で、火炎球の魔法を使い、掲げた右拳の位置の出現させた。燃える拳の完成だ。

初めてやることなので、火傷くらいはするだろうと思っていたのだが、実際のところチリっともせず、熱いだけだった。その熱さも少し沸かしすぎた風呂と同じくらいで、我慢できるものだ。実際は普通の炎の温度と同じくらいなのだが、耐魔の高さで我慢できるよ

うになっている。

（いくぞ！ 炎の正拳突き、変則ライダーパンチ！）

勢いのついた攻撃を、リタイはその場から動かずどっしりと構え、再びクロスガードで受けた。

炎が両者を巻き込んで広がり消えていく。

炎の向こうにあるリタイの余裕の表情を見て、幸助は魔法も駄目なのかと驚いた。

これまででわかったことは、防御系のギフトということのみだ。

（これは対人での全力で相手したほうがいいのか？）

再度離れて思考する。

その隙についてリタイが手に持った無骨な剣を叩きつけてくる。切れ味よりも重さと頑丈さを優先した剣だ。これまでの対戦相手は、これを使っただけのカウンターもどきで沈んできた。カウンターと呼べないのは、相手の攻撃を受けた後、隙のできた相手に攻撃を仕掛けていたからだ。まさに肉を斬らせて骨を断つ、この諺が似合う戦い方だ。

この攻撃を幸助は全部は避けずに、いくつか受けていく。

（攻撃力は特出したものはないね。

厄介なのは防御面か）

上段からの袈裟斬りを左腕でガードし、そのまま一歩踏み出して掌打をリタイの胸に当てる。

ダメージはないが、勢いは消しきれず背後へと移動させられるリタイ。

もっと強く殴るなりすればダメージは与えられるかもしれないが、

それじゃあ盛り上がりには欠けると考えている幸助。ライダーごっこに夢中になり始めていた、いやとつくになっていた。

その様子を悩んでいると勘違いしたか、リタイが口を開き、ギフトの効果を説明し始める。

「普通の攻撃じゃ俺にダメージは与えられないぞ。

俺のギフトはダメージ減少。ありとあらゆるダメージを減らすことができる。」

可能性があるとするれば、あの光る蹴りくらいだ」

ギフトのおかげでただでさえ防御力が高いのに、きっちりと防御しているのに受けるダメージが最小限となっているのだ。

説明したのは、ばらしても問題がないからだろう。

この場での対処法は高い攻撃力を準備するくらいだ。こういった大会でなければ、罠や毒などの捌め手が使えるのだろう。

「あれでこい。」

俺も相応の技で迎え撃とう。

ルビダシア家当主用に準備していた技で、今ここで使うことになろうとは思ってなかったがな」

（そっちがその気なら使おうじゃないか。

ただし演出に付き合ってもらおうけど）

幸助は構えを取り、幻で足を光らせる。リタイは剣を両手で持ち、左下段に構える。口元が動き、なにかしらの魔法の準備をしている。どちらともなく一歩踏み出す。

幸助はそのまま真っ直ぐ進み、飛び蹴りを放つ。リタイもある程度走ると、飛び上がり剣を振り上げる。そして自身の背後に爆発の魔法を使い、その衝撃で勢いを増す。ダメージ軽減できるリタイならではの加速法だ。

(ライダーキック！)

「一刀大両断っ！」

幸助の飛び蹴りと、リタイの勢いののった振り下ろしがぶつかり合う。

今までと同じように閃光と爆音と煙が発生する。

そのすぐあとに煙をまとった幸助が吹っ飛び、床に倒れ込む様子が見えた。

倒れた幸助へと、走り寄ったリタイが追撃する。スイングされた剣に再度吹っ飛ばされて、舞台端まで転がっていく。

リタイは大ダメージを与えただろうと考え、観客も同じ考えだ。実のところ、大したダメージは入っていない。ゲンオウの神討ちの方が痛かった。

一度窮地に陥って、そこからの逆転劇、そのためにぶつかり合いで負けたのだ。

よろよろと立ち上がる演技をする幸助に、リタイは近づいて連続して剣を振るう。

「ラッシュラッシュ！ リタイに形勢が傾いた！」

なんとかライダーは防いでいるが、このまま勝負は決まるのか！

？ もしくは逆転するのか！？」

アナウンスが加速した状況を興奮して話していく。

ある程度防いだり、食らったりした幸助はもういいかと距離を取り、突風の魔法でリタイの接近を妨げる。

大きく肩で息をする演技をしつつ構えをとった幸助を見て、リタイは進むことを止め、その場に踏みとどまる。

「最後の賭けに出たか！」

いいだろう、その一撃耐えてみせよう。そして俺の勝利を観客に見せつけてやる！」

演技に気づかず最後の悪あがきと勘違いしたリタイは、腕を交差させ防御の型を取る。

それに幸助は幻の仮面の下でにやりと笑みを浮かべ、いままでとは違う幻を創造する。

「これは！？ 虎か！？ ライダーの足元に虎を模した紋様が描かれております！ ライダーの大技なのでしょうか！？」

さらに今まで青かった光は赤くなり、そして片足ではなく両足が光に染まっていく！」

飛翔魔法を使った幸助はジャンプしたかのように飛び上がる。頂点に達したとき、体を錐揉み回転させてリタイへと突っ込んでいった。

突き出した右足の先から、赤い光の帯が現れ、回転に沿って渦巻いていく。

「竜巻だ！ 赤光の竜巻がリタイ目掛けて突き進む！」

（これぞハリケーンライダーキック！）

迫り来る赤い塊のプレッシャーに、これは早まったかとリタイは冷や汗が流れた。

すぐにリタイの交差させた腕に、幸助の蹴りが命中する。

幸助の回転は止まらず、受けているリタイは少しずつ下がついていく。その表情に余裕はない。

回転は十秒ほど続いたのち止まる。右足の光も消えうせた。

「耐えたっ耐えたぞ！」

にやりと笑みを浮かべ、久しぶりに感じる大きな痛み耐えつつリタイは吠えた。

観客も最後の攻撃を耐え切れ、これで幸助の負けかと考える。それらの考えを裏切り、幸助はリタイの腕を踏み台にして再度飛び上がる。

（こんなこともあるのかと！）

「ライダー再び飛び上がったあつ！ 攻撃はまだ終わりではなかったのでしょうか！？」

飛び上がった幸助は前転するようになると回り、リタイ目掛け落ちる。

「これはまさか！？」

アナウンスがこの後の結果を予測し、声を張り上げる。

（ライダー踵落とし！）

「そのまさかだった！ 決まったっ踵落としだあーっ！」

まだ光を放っている左足での、回転で勢いをつけた踵落としがリタイの肩に命中する。

風が吹き煙が晴れた舞台上では地面に倒れ伏すリタイと、そのそばに立つ幸助という図が見える。

風にたなびく赤いマフラー、激戦を乗り越えてしかと地に立つその姿に憧れを持った者も少なくなかった。

一撃目でギフト効果を突き抜けてダメージを受けていたリタイは、一撃目よりは弱いとはいえ、しっかりとダメージを与えてきた二撃目に耐え切れなかったのだ。

「審判確認を！」

たっぷり十五秒ほど待って、リタイが少しも動かないことを確認したアナウンスは舞台外にいる審判に呼びかけ、状況を確認してもらう。

審判は幸助を三メートル以上下がらせ、リタイの状態を確認する。立ち上がった審判は腕を交差させ、リタイが気絶していることを示した。

「決まった！ 決まりました！」

優勝は、じゃなかった決勝進出はライダーで決定だぁーっ！」

大きな歓声と拍手が会場を包む。会場外からも盛り上がっている声が聞こえてくる。

アナウンスが間違えたように、観客も幸助の優勝を疑っていない。中にはさらなる大番狂わせを期待している者もいるが、それは少数だった。

決勝戦は休憩を挟んで一時間と三十分後……のはずだったが、相手が辞退し幸助の優勝が決まった。

辞退した選手は準決勝戦を見て、自分ではライダーにもリタイにも勝てないと思い知ったのだった。けれどもこれからさらなる修行を自身に課して、次は勝つと気合を入れている。

観客もその判断を責めることはなく、仕方ないかと納得している者がほとんどだった。

リタイを破り優勝したことで、ライダーの名はカルホード大陸に広く鳴り響くことになる。

こののち、カルホード大陸とセブシック大陸の人間がライダーの話をして、選手として実際にいるライダーと演劇として想像上のライダーの話題の食い違いに、首を傾げるなんてことも起こったりす

る。

リタイが目覚めてから表彰式が始まる。

舞台上には、幸助、リタイ、決勝進出を辞退した選手、その選手に負けた選手と大会関係者たちが並んでいる。

それぞれに、大会責任者の老人から祝いの言葉と賞金を手渡される。優勝した幸助には関貨五枚、以下三枚、一枚、金貨五枚と減っていく。

トーナメントに出場したボルドスにも賞金は出て、負けて控え室に帰ったとき金貨一枚が手渡されていた。

幸助は賞金のほかに優勝旗も渡されたが、これは大会側で保管してくれるので荷物にはならない。

表彰式が終わってあとは帰るだけと思っていた幸助だが、大会責任者が選手に打ち上げに参加するよう呼びかける。

（参加していいもののかな、これ。

参加しないとルビダシア家に迷惑かかるかもしれないけど、参加したらしたで面倒事発生とかしないか？）

どうしようか考え込んだ幸助は、エリスに指示を仰ぐようと急いでトイレに向かい、そこで変身を解いて、エリスたちがいるはずの指定席に向かう。

アナウンスが帰る者たちに注意事項を伝えている。その内容は街から東に一日行った場所にラフドワームという魔物の女王がいて、徒歩や馬車での移動をしばらく止めるというものだった。

ラフドワームというのは、以前ウィアーレの兄の依頼で行った遺跡にいたミミズの魔物の亜種だ。あつちは人も食う肉食で、こちらはミミズと同じように土を食べる。ただし土を肥えさせるミミズ違って、土の栄養をすべて吸収してしまう害獣指定されている魔物だ。

その女王は一般的に体長七メートル、四つ首二つ尾という巨体で、特殊な攻撃はしないがしぶとさが並外れている。過去には六つ首五つ尾という女王もいて、街一つを滅ぼしたという記録が残っている。

指定席に向う途中で、幸助は運良くエリスとワイアーレに鉢合わせする。大会が終わって見るものもなくなったので、帰ろうとしていたのだ。

「あ、コースケさん！　すごかったですよ！」

「どうした、なにか急いでいる様子じゃな？」

通行の邪魔にならないように、それと話す内容を聞かれないようにするため、二人と通路の端で話す。

幸助はざっと事情を話して、どうすればいいのか聞く。

相談されたエリスは少し考え込む。

「参加して、早めに帰りなさい。」

そうすれば、ルビダシア家の顔を潰すことにはならないでしょう。それと喋る場合は変声の魔法を使いなさい。喋らないですむならその方がいいがの」

「わかった。じゃあ、控え室に戻るよ」

「ちよっと待って。怪我とかない？　それだけ聞きたい」

押されていたことはエリスから演技だと教えてもらったが、それでも心配だったワイアーレ。

そのワイアーレに擦り傷くらいだと笑みを浮かべて答え、幸助は人の気配のない廊下で変装し、控え室に戻る。

「あ、ライダーさん」

控え室に戻ると大会関係者がいて、困ったような表情からほっとした表情へと変えた。

「これから移動しますので、ついてきてください」

幸助は頷いて、先に進む大会関係者のあとをついていく。

会場の前に数台の馬車を用意されており、それに選手と大会関係者が乗ることになっている。

幸助の乗ることになっている馬車まで案内した大会関係者は、少し待つように告げて去っていった。移動する者が全員揃ってから出発する予定なのだ。

全員が揃い出発するまでそう時間はかからなかったのだが、姿に特徴がありすぎる幸助は目立ちまくっていた。出発する時に、馬車が動かしづらかったほどに人が集まっていた。

気後れしているのか、近づいてきたり話しかけてきたりはしないのだが、指差したりひそひそと話す声が聞こえたりと幸助は少しだけ煩わしく感じていた。

馬車はゆっくりと進み、十分と少しかけて目的地である街の代表者の屋敷に到着した。

打ち上げ会場は屋敷の庭で、いくつものテーブルが並び、そこに食べ物と飲み物が並んでいる。朝から準備していたため、早めに大会が終わってもなんとか会場設営は客が到着する前に終わった。

ほとんどの客は庭で自由に過ごし始める。今回の大会について話し合ったりする者もいれば、目をつけた選手にうちに来ないかと声をかけている貴族もいる。

会場にはボルドスの姿もあった。トーナメント一回戦で負けたボルドスはあまり注目はされていなかったようで、気楽そうに打ち上げを楽しんでいるように見えた。

幸助も声をかけられたが、簡単な受け答えだけをしておいた。一

応誘いはない。すでにルビダシア家に属しているのだろうと思われるからだ。それでも自身の家に招きたいと思っている者は多い。料理を食べて空腹を満たした幸助は、ゲンオウかナガレを探す。長居するつもりはないと、一言言っておく必要があるからだ。

その場から動かずに、一分ほど会場を見渡し、ほかの貴族と話しているゲンオウとそばにいるシズクとナガレを見つけた。

「ライダーさん」

近づく幸助に気づいたナガレがシズクを連れて近づいてきた。

ゲンオウと話している貴族がちらりと幸助に視線を向け、すぐにゲンオウへと戻す。

「お疲れ様でした。それと優勝おめでとうございます。優勝すると思っていましたよ。」

ただ私たちが予想していた戦い方ではなかったことには驚きでしたが」

「観客と自分が楽しめるように戦ったから」

付き合う対戦相手のことまでは考えていなかった。

「すごかったよー」

幸助の戦いをエンターテイメントとして楽しめたシズクは、満足そうに笑っている。

その様子を見て、楽しんでもらえてよかったと幸助も笑みを浮かべる。幻のおかげで見えないが。

もっとも真剣に戦いに臨んでいて、エンターテイメントに巻き込まれた選手にとってはたまったものではないだろう。

「この打ち上げ最後まで付き合わないから。ある程度時間が経ったら帰るよ。」

これを言うために探してた」

「そうですか。いえ、それがいいでしょうね」

目立つ気がないと聞いているので、それも仕方ないと考える。

「それでは今日でお別れですね。」

次に会えるのはいつになるかしら」

「会えなくなるの？」

「会えなくなるなんてことはないと思うけど、簡単には会えないだろうね」

「二年後の次の大会で会えるのを楽しみにしておきましょうね、お嬢様」

そのシズクの言葉に幸助は首を傾げた。

「次の大会？ 参加しないよ？」

「え？ 参加しないんですか？」

きょとんとした顔になるナガレ。次も変装して参加するのだろうか
と思っていたのだ。

「今回も参加するために来たわけじゃないし。」

一度大会を見て満足できたから、もう来ないんじゃないかな」

「そ、そうなんですか。だとしたら次に会えるのは本当にいつになるのか」

「まあ、一度くらいはコウマに行ってみたいと考えてるし、その時に会えると思うよ」

「ほんとにコウマに来るの？」

聞いてくるシズクに頷きを返す。

それを聞いてシズクは懷から布を取り出す。触り心地の良さげな材質の布で、綺麗な紫色に染められており、端にワンポイントとして白の花びらが一枚浮いている。

「でしたらこれを。」

ルビダシア家の家紋が入ったハンカチです。当家に来たとき門番に、私の名と共に渡してもらえれば屋敷に入ることができますよ」

広げられた布の中央に薄紫の家紋が描かれている。

「行くのはいつになるかわからないけど、それでもいいの？」

「ええ、どうぞ」

「ありがたく、借りることにするよ」

用件を伝え、用事がなくなった幸助はゲンオウに一言挨拶した後、もう一度軽くなにか食べようとテーブルに向かった。満足したら帰るつもりでいる。

新たに運ばれてきた料理を食べている時に、大会責任者が無事に大会が終わったことなどの挨拶をしていたが、幸助はそれを聞いてもすぐに忘れた。

料理を食べている間に、何名かの貴族や選手に話しかけられ簡単に受け答えをする。

そしてある程度の時間も経ち、料理にも満足した幸助は会場をこっそりと抜け出した。

その幸助をつける者たちがいる。会場内では多くの視線にまぎれて特定の気配は気づけなかったが、今いる場所は高級住宅街と言っている場所です。人通りは少なく、つける者がいればすぐに気づくことができました。

幸助は小路に入り、物陰に隠れる。足元にあった小石を別の小路へと投げて、そっちに行ったようにみせかける。

小路に入ってきた男は音を頼りに、そちらへと小走りで行った。

その男を追ってさらに男が小路に入っていく。周囲にはほかにも追ってらしき気配がある。

その男たちを逆につけてみようかとも思った幸助だが、関わらないでおこうと思いなおし、転移の準備を始める。変装を解いて歩いて帰っても、つけてこられるかもしれないと思い、ここから直接宿に帰ることにしたのだ。

幸助がその場からいなくなった後、しばらく周囲をさがしていた男たちは完全に見失ったと判断し、帰っていった。

彼らはライダーに興味を抱いた貴族たちが、少しでも情報を得るために出した偵察役だ。

情報を得られなかった貴族たちは、ライダーという正体不明の強者がいるというのみを持って自国に帰る。そしてそれぞれの王に伝えた。

次の日、幸助たちはボルドスたちと会い、ラウドワーム退治に参加するという彼らに別れを告げて、その日のうちに三人は南回りで東へと向う馬車に乗り出発する。

寄道しながらセブシック行きの船が出ている港へ向かう予定だ。

移動の日々の出来事

ガタゴトガタゴトと馬車は揺れる。三人がレゾティックマーグ出発して既に十二日の時が過ぎている。

乗合馬車も乗り換え三度目だ。この十二日間ずっと馬車に揺られ続けたわけではなく、観光に適した街で滞在もしていた。

今同乗しているのは、二十歳ほどのメガネをかけた男と商品と一緒に載せている商人の男。前者がスタッドで、チントンという名前だ。

同乗した三日間で、その間に会話をするくらいには親しくなった。馬車の中で一番の暇潰しなことは会話だろうし、よほど偏屈でなければ会話するくらいの関係にはなる。

「スタッドは役人試験を受けてる真っ最中なんだ」

「おう。今は三次試験の課題にされた品を取りに行った帰りなんだ。これともう一つの試験を合格できれば、末端の役人になれる」

大事そうに抱える荷の中に、課題の品が入っているのだろう。

「三次試験か、ここらでそんな形式の採用をしているのはゼルピア王国くらいじゃったか」

「そうだぜ」

エリスの言葉にスタッドは頷いている。

「はあーすごいですなスタッドさん、勉強よりも体を動かす方が得意そうに見えるのに」

見かけによらないもんだ、とチントンが関心している。

そういったことを言われ慣れているのだろうスタッドは苦笑を浮かべている。

「ゼルピアの採用試験ってどんなの？」

「三年に一度ある試験で、最長で一年かかるのじゃよ。」

最初の四ヶ月で知識と礼儀と行動力と発想力を試す。これらは政に関わるのならば最低限必要とされるもの、とゼルピアの者たちは考えている。

そしてその先は毎年課題が変わる。受験者同士で戦ったこともあれば、用意されたお金を十倍にしろと言われたこともあれば、試験官の質問に答えるだけの課題もある。

規則性のない課題を出すことで、受験者の底を測ろうとしているのだろう。

四ヶ月目までクリアすれば誰でも役人になることができる。貴族でない者も国政に関われるのじゃよ。

珍しかろう？」

「そう？　うちのところじゃ平民でも国政に関われるのって当たり前のことだったよ。努力する必要があるけど」

身分がひぼ関係なくなった国出身の幸助にとって、身分によってできる仕事に制限がかかるということの方が違和感あった。

「そっちではそうなのじゃな」

「私の常識だと政治は貴族の専門だよ」

ウィアーレの言葉にチントンも同意している。

「ここ最近では最後の試験まで到達した受験者はいないって聞いているんだが、それは本当なのか？」

あと四ヶ月目まで到達しなくても採用される奴がいるらしいとも聞いたけど」

疑問に思っていたいたことの答えをエリスが知っているかもしれないと、スタッドは聞く。

「私の覚えているかぎりでは、約二十年前に全問突破した者がいたが。それ以降は突破した者がいるとは聞いていない。

ちなみに全問突破したのは今の宰相で、小規模な商家の三男だったとか。家を継げるわけもないから、役人になろうと思って受験したら全問突破したらしい」

宰相本人もその結果には驚いた。末端に属せばいいなと思っていたのだ。それがそのような結果を残し、エリート街道にのることになったのだから、人生なにが起るかかわからないと今でも部下や同僚にしみじみ話すらしい。

「四ヶ月目まで到達しなかった者でも、それまでに特異な結果を残せば採用されることはあるらしいな。

まあ、その採用は本当に特殊な例だ」

「あんたゼルピアの出身？」

「いや違う」

自国のことをよく知っているエリスに、スタッドはぽかんとしながら聞く。

「他国のことなのによく知ってなあ」

「友に情報通がいるからの」

あとは長く生きている間に自然と入ってきた情報だ。

「今回の試験内容はどんなものだったんですか？」

三番目だから行動力の試験だったと思うんだけど」

「歩きで十日離れた街の特産品を持ってこいって試験だ。十日離れていれば、街はどこでもいいんだと。」

冒険者に雇って行ってもらうって方法もあるみたいだったが、そんな金はないから俺は自分で買いに行ったのさ」

「人に行ってもらったら行動力を示せないと思う」

ワイアーレの疑問にエリスは首を横に振る。

「自分で動かなくてもいいのさ。あくまで行動力、誰でもいいから動いた結果試験を突破できる物を用意できればいい。」

ワイアーレの言う行動力を調べたいなら、受験者を一人で行動させずに、どのように動いたか観察する者をつける必要がある。

まだまだ難易度が低く受験者の多い試験に、そこまで労力を使わないさ」

「でもさっき言ってた特殊な例の採用って、その行動内容を知らないで採用不可能じゃない？」

「観察するまでもなく派手な行動すればいい。」

金をばらまいて、自分の元に特産品をたくさん持ってこさせるとかね。そんなことをすれば噂になるだろう？　そこからその受験者は財力という力を持っていて、必要な時に使うことを躊躇わない度胸を持っていると判断するのさ」

「それって真似する人出てくるんじゃない？」

幸助の疑問に、ワイアーレの疑問と同じようにエリスは首を横に振る。

「一度合格者を出した方法は、そのままだとどれだけ労力を払って

も失格になると聞いたな。

知らずに同じことをした場合や工夫した場合は、話は変わってくるがのう」

なるほどと皆が関心していると、馬車が止まった。御者から聞いていた止まる予定の場所ではまだない。不思議に思ったチントンが御者に声をかける。

「それが道を塞いでいる奴らがいまして」

「どくように声をかければ？」

「ええ、やってみます。」

おーい、そこを通りたいんだ、ちょっと端によってくれないか」

近寄ってくる四人の男たちに、御者は声をかけた。

それに特に大きな反応をみせず、端に避けることもなく男たちは寄ってくる。

「ん？　なんだあいつら？」

「どうかしました？」

御者の出した声を気にしたワイアーレが聞く。

「あいつら一つだけに野菜を持ってんですよ」

「野菜？　収穫したものじゃないんですか？」

「収穫したなら、籠や台車にたくさん入れて運ぶと思うんですけどね。」

あいつら一つだけしか持っていないんですよ」

「なんですかそれ」

「俺に言われてもね」

どういった意図でそんなものを持って近づいてくるのかわからず、御者は馬車を止めたままだ。彼らが盗賊らしい格好でもしていれば止めずに突っ切ったのだが、剣の一つも帯びていない彼らがなんなのかさっぱりわからない。

四人が十分近づいて来た時、御者はもう一度話しかける。

「そこに立たれていると通れないんだ。すまないが避けてくれないか？」

「ここは通さん！」

四人は横一列にならび、その中でカボチャを持っている者が声を発した。ほかにニンジンを持っている者、大根を持っている者、ゴボウを持っている者がいる。

「通さんって、通してもらわないと困るんだが。」

無理矢理通ると怪我させるかもしれない」

とはいえ無理矢理通れば、さすがに避けると思っている。怪我などさせたくはないので、穏便にすまそうとしているのだ。

「ここを通りたければ有り金置いていけ！」

「……は？ あ、あんたら盗賊なのか？」

「その通り！」

「あんたら自分たちが持っているものに疑問を覚えないのか？」

「いい出来だろう？」

自慢げに持っている野菜を掲げる男たち。

たしかに色といい、形といい、中々の出来だと御者の背後から見ていた幸助は思う。

幸助に同意なのか御者も頷きつつ言う。

「出来の良さは否定しない。

でもそれと盗賊行為となんの関係が？」

「これはカモフラージュにして武器なのだよ。

現に俺たちが近づくまで、お前は逃げるようなことは考えなかっただろう？」

「逃げる必要性なんか思いつきすらしなかったな」

「そうだろう、そうだろう」

カボチャ男は深く頷く。

「これが剣や斧や弓を持った男たちならば、警戒されここまで近づくことすら難しかっただろうな」

そういった意味から考えると、カモフラージュという面では男たちの考えはいい線をいっているのだろう。

感心しつつも、普通は障害物のある場所で待ち伏せするものではないか、と御者は思っている。

そういった場所では御者も警戒し駆け抜けるので、近づくだけならばこっちは有効だ。後の展開まで有効な状態が続くかはわからないが。

「カモフラージュには納得するとして、武器ってのは？　　というか武器にならないだろ」

「野菜を舐めるな！」

男は真剣に怒っている。だがその真剣さが滑稽に思ってくる。

「例えばこのカボチャ！　これで頭を叩けば痛い！」

「当たり前だな」

「十分な凶器だろう？」

「普通に剣とか使えよと思うってしまったのはいけないことなんだろうか」

御者が思ったことは、幸助たち全員が思ったことだった。

「ふっ俺たちほどの上級者になれば剣など。

脅しついでに証拠をみせてやろう」

そう言ったカボチャ男は近くの木に近づいていく。その木の幹の太さは、電信柱より少し太いくらいか。

その木に向かってカボチャ男は、片手に持ったカボチャを斜めに振り下ろす。

カボチャが砕けて終わりだろうと馬車側の人間は考えるも、その予想は外れた。カボチャには傷一つつかず、木の幹が振り下ろした角度に沿って、挟れている。

「はあっ!？」

驚きの声を上げた御者。その光景を見た幸助たちも驚いてた。

次にニンジン男が、人差し指と中指に挟んだニンジンを木に向かって投げる。ニンジン男は、鉄砲の弾丸と同じような回転をしながら真っ直ぐ飛び、幹に突き刺さった。

さらに大根男が、木に向かって走り、大根を突き出す。見事に幹は穿たれ丸い穴を開けた。槍を使って同じように穿つのは、わりと高い技術を要するだろう。

最後にゴボウ男だ。片手に持ったゴボウをその場で振り下ろすと、軌跡に沿って地面が斬れていた。

どの野菜にも傷一つついていない。

「な、なんなんだあんなら!？」

言葉に驚きと怯えを混ぜて御者が叫ぶ。

「俺たちや農業盗賊団野菜組!

神聖なる大地の恵みを使って悪事を働く、最高の悪よ!

恐れ慄け! 命乞いしろ! 金目のものさえ置いていけば許してやる!」

「うっ」

見た目はおかしいが、実力は本物な彼らに御者は受け入れを考え始める。この道は盗賊や魔物がほとんどでないので、護衛は雇っていない。それを御者は後悔していた。

いつのまにか彼らは馬車を囲むように移動している。逃げるそぶりを見せると、攻撃されるかもしれないと考えた御者は大きな溜息を一つ吐いた。

「皆さん、ここは大人しく」

御者は振り返り、そう告げた。

「俺は反対だ! せっかく特産品手に入れることに成功したってのに!

こんな奴らに奪われるなんて!」

「私も仕入れた商品を奪われたくは……」

「しかしですね、彼らの実力は本物で、こちらには護衛すらないのに」

ウィアーレがちらりと幸助を見る。それに気づいた幸助が動こうとして、エリスがそれを止めた。幸助が動くほどではなく、自身が

動いても大した労力にならないと判断した。
そしてエリスは小声で御者に話しかける。

「魔法を使って追い払ってやろう」

「……大丈夫なんですか？」

「それでも元冒険者じゃよ。仕事の指名もされておったな」
「本当ですか？」

エリスの見た目が若いため、それほど実力が高いのか懐疑的だ。
実力がなく早期引退したのではと思ったのだ。

「仕方ないのう。ほれ」

エリスは懷から証明カードを取り出し、ステータスを誰にでも見られるようにして御者に突き出す。

カードに表示されているデータを見て、御者は再び驚いた。

自身はおろか、知り合いの冒険者を凌駕するステータスだったのだ。

「もももも申し訳ありません！」

土下座する勢いで、御者は顔を青くしている。

「大声を出すな。それと謝らずともよい。それよりも魔法の準備をするのでな、少し時間を稼いでくれ」

「わ、わかりました！」

無事に帰ることができそうだと希望を持てた御者は、自身に与えられた任務をこなすため、カボチャ男へと視線を戻し話しかける。

「な、なあ」

「どうした？　早く金目のものを出せ」

「中で渋っている奴がいるんだ。ほかの人が説得してるから少しだけ待ってくれ」

「む……ま、いいだろう」

スタッドが反対する声は馬車の外まで聞こえており、本当に反対する者がいるとわかっている。なので説得しているということも本当だと思ったのだった。

「ただしそれほど長くは待たないからな」

「わ、わかった」

振り返り馬車の中を見て、時間がないと言ったように見せかける。

「と、ところで、あんたたちはここでずっと盗賊家業しているのか？
ここらには盗賊はいなかったはずなんだが」

「盗賊行為自体は何年も前からやっているが、ここにきたのは十日ほど前だ。」

前いた場所は警戒度が上がったからな」

「どおりで。」

そういえばさっき野菜組と言っていたが、ほかにもいたりするのか？」

時間を稼ぐついでに、ふと疑問に思ったことを聞くことにした。

「穀物組や果実組などいるな」

「あんたもだが、ほかの奴も自分で野菜とかを育てて？」

「当たり前だろう。俺たちは農夫だ」

「農夫？　盗賊なんだろう？」

「農夫でもあるし、盗賊でもある」

「なんで盗賊なんか？ 農夫だけでも生きていけるはずだ」

「ふんっ！ 事情を知らないからそんなことを言えるのだ！

俺たちの地元は土地がやせていて収穫は多くない。それでも領主は他の土地と変わらない税金を取っていく。貧困にあえぐ俺たちなど知らぬとばかりにな！

このまま搾取されるだけで終わるのかと思っていた時、お頭が現れ俺たちを誘ってくれたのだ！」

「そのお頭も野菜を武器に？」

「お頭のソラマメ指弾は世界一だ！」

飛ばした際に不規則な軌道を描くので、すごく避けにくかったりする。

「トップからしてそうなのか。なんで野菜を武器にしようなんて考えたんだろう」

御者は真剣に悩んでいる。

その時、突如馬車を中心にして前後左右に衝撃が広がった。木々を大きく揺らし、盗賊たちを吹っ飛ばす。

すぐにエリスの魔法だと気づいた御者と違い、なにがなんだかわからずただ吹っ飛ばされるだけの盗賊たち。突然だったので防御すらできずにまともに攻撃を受けた。

血は流れているようだが、皆起きようともがいており死んではないとわかる。

「どうなったかの？

お、無力化できたみたいじゃな。

さてどうするね？ このまま放置するか、それとも役人に突き出すか」

「役人に突き出しましょう。仲間の居場所を吐いてもらって、こちらの安全を維持してもらいたい」

御者の言葉に頷いたエリスは、馬車の中の者たちに声をかけ、盗賊たちを縛ってもらおう。そのあと軽く手当てをする。魔法でずっと寝かせておくつもりなのだが、その間うめき声を上げられ続けるのは精神的によくはない。

問題が解決し、盗賊たちを馬車の隅に置いた一行は再び馬車での移動を開始する。

目的地に到着した彼らは事情を話し、兵に盗賊を渡す。その後、拷問にかけられた盗賊たちは仲間のことを話すも、多少捕まえることができただけで全員逮捕はいかなかった。幸助たちが思っている以上に大きな組織だったのだ。搾取に喘いでいる者たちが多いということなのだろう。

兵たちは調査の過程で、ほかの地域でもその組織による被害が出ていることを知り、ほかにも似たような組織が二つあることを知った。

一つは畜産盗賊団、育てた動物や取れた卵などを使う集団。牛による突進、卵で目潰しをされたと報告が上がっている。

もう一つは漁業海賊団、魚だけではなく貝など海で取れるものを使う集団。鰹で殴られた、貝を手裏剣のようになげられた、ウツボで鞭のように叩かれたと報告されている。

彼らは育てる時期や収穫する時期は仕事に専念し、時間ができると盗賊行為を行うため、組織の大きさの割りに被害が少ない。活発でないので、情報も集まりにくい。

またお金を蓄えたいというよりは、搾取で失った財産を補填しまともな暮らしをしたいと思っている者が多い。そのためお金など金目の物させ手に入れば、手荒なことはしない。

一見なんでもない農夫や漁師が盗賊一味だったりして、とても犯

人を捜しづらい。

農夫を片っ端から捕まえるというわけにもいかず、兵たちは少々困っていた。

こういった状況に変化を加えたのは三柱の神だった。

幸助が以前出した演劇のアイデア、その中に戦隊物も混じっていた。それをヒントに農業畜産漁業を司る神が、ランダムに人間一人ずつを選び出し、力を与えたのだ。

その力はライダーのように変身するというもので、先の三つの荒くれ者たちを相手にする場合にのみ効果が発揮される。

力を与えられた者たちは、収穫スラッシュ、解体クラッシュ、釣り上げヒットと名乗り、荒くれ者たちと戦っていくようになる。そして運命に導かれるように出会い、一次産業戦隊ワーカー3を結成する。

さらには競りのマネーや道具作りのクリエイトと名乗るサポート仲間も増えていく。

その様子を神々は楽しんで見る。荒くれ者たちから無辜の民を守るためではなく、ワーカー3の行動とその影響を面白がっているのだ。

まさに自分たちの興味を優先した所業だった。

これは世界に関わらないという戒めに反しているのだが、いい暇潰しにもなるし、これくらいは良かろうと見逃されていた。世界に危機をもたらすようなことではないし、神々にとって大したことはないからだ。

そんな影響を与えたとは知らず、幸助は馬車に揺られている。ワーカー3なるものがあると知るのは、何年か先のことだ。

そのまま旅を続け、セブシック大陸へと渡る港に到着し、船に乗りカルホード大陸に別れを告げた。

そして船に乗って五日後、幸助は一人でカルホード大陸南方にあるエゼンビア大陸にいた。

砂浜に頭から突き刺さっているところを助けられる。そんな状況がセブシツクへの帰還旅の始まりだった。

竜にさらわれ、捨てられて

暗い林の中を男が一人。鳥や動物が眠る深夜、黒の外套をまとい足音を忍ばせて目立たないように移動している。小さな物音がすればそちらへと素早く視線を向けるほど、周囲に気を配っている。その様子は何者から逃げ隠れているようだ。

林の向こうから吹き込む風には、潮の匂いと波打ちの小さな音が混じっている。ある時、波の打ち寄せる間隔にずれが生じた。それを男は高波なのだろうと気にせず、前へと足を動かし続けた。だがその後に聞こえてきた、砂に何かが落ちる音には足を止めた。

音がした方向をじっと見る。けれども木々に邪魔され浜辺はよく見えない。

男は少し考え込み、なにかしらの結論を出した。進む方向を変え、足は浜辺へと向かう。

「なんだこれ？」

静かだった男が思わず声を漏らした。男の視線の先には、頭から砂浜に突き刺さりじたばたと暴れる人間らしきものがいた。生まれ初めて初めて見る光景に思わず、戸惑いの声を漏らしたのだった。

「とりあえず引っ張り出すか。そうした方がいいって勘が告げてるしな」

男は突き刺さっている人間の足を掴んで引っ張る。突き刺さっている人間も引っ張られていることがわかったのだろう、腕を突っ張り砂か体を出そうとしている。

二人がかりだったのがよかったのか、すぐに引っ張り出せ、砂ま

みれの青年が姿を現す。

「助かったあ」

助け出された男は安堵した様子で砂浜に座り込む。息を整えると手を貸してくれた男の方を向いた。

「どなたかは存じませんが、助けてくれてありがとうございます」

「どういたしまして。」

助けた札にどうしてあんな状況に陥ったのか聞いてみたいんだけど」

助けた方の男は改めて助けた男の全身を見る。

衣服だけみれば旅人風だが荷物はなく、あんな状況になった経緯がいまいち想像し辛かった。

「俺も聞きたいことあるんでいいですよ。」

その前に名前だけでも言っておくよ。俺の名前は幸助、セブシツク大陸に帰る途中だった旅人」

幸助は目の前の男が自身よりも少し年上らしいと見て、丁寧な言葉遣いで応える。

「俺は……」

ここで男は言葉を止める。少し迷った感じを見せるも、再び口を開く。

「俺はシャイト。ムバラント山へと向かっている最中だ。浜辺から大きな音が聞こえて気になって来てみたらお前がいた」

「ムバラント山？　ここってどこなんでしょ？」

「知らないのか？　ここはエゼンビア大陸北部カリバレッテ公国だ」

「エゼンビア……カルホード大陸の南だっけ？」

「それであってる。もしかしてカルホードから来たのか？」

幸助は頷く。

セブシックに帰るにすればずれた方角にいる幸助に、シャイトは方向音痴なのかと疑いを持った。

このまま浜辺で話すのは少し寒いということで、二人は移動しながらここにいる理由を話す。

幸助はここに来るまでの経緯を思い出しつつ、口に出していく。

カルホードの港を出発した幸助たち三人は、嵐などに合うことなく順調に航海を続けていた。

乗っている船はキャラベル船に似た、三枚の帆のある中型客船だ。客と船員合わせて六十人が乗っている。現代日本の船と違い安定性を欠く船で、ウィアーレが少し酔った様子を見せた以外は変わったことはなかった。

そうして出発して四日目、することもなく暇な幸助は日光浴でもしながらまどろもうと甲板に出ていた。

「ウィアーレ、ここにいたんだ」

「部屋の中にいるよりも風に当たってた方が気分良くて」

酔いが治まったようでウィアーレが嬉しげに答える。

「酔い止めの薬も効果あったのかも」

酔う客用に有料ではあるが、船に薬が常備されていた。エリスが

そういった葉のことを思い出し、船員に売ってもらったのだった。

「もっと大きな船なら揺れも少ないんだろうけどね」

幸助は何度か乗ったことのあるフェリーはたいして揺れなかったことを思い出す。

「そうなの？ 私は船の乗るのこれが始めてだから、そこらへんの知識はないんだよ。」

「そういえばコースケさんはなにしに甲板に？」

「暇なんで日に当たりながら昼寝でもしようかと」

「天気いいし、それもいいかもしれないね」

船員用なのか、そういった寝転べる椅子もある。今は誰も使っていないので、一言断れば使ってもいいはずだ。

甲板掃除をしている船員に言ってから、幸助はそっちへと向かう。ウィアーレも昼寝しようと思ったのだろう、幸助についていく。

椅子に座り、目を閉じようとした時、頭上から大きな声が聞こえてきた。

マストの見張り台に上がり、周囲を見張っていた船員が遠くに異変を見つけ注意を促していた。

「海竜って言ってない？」

「私もそう聞こえた」

二人は椅子から立ち上がり、人々が集まっている甲板の端に向かう。

何人もの人が指差す方向に、巨大な蛇みたいな生物がいた。まだ遠くにいるはずなのに、巨大だとわかる。遠近感覚が狂ったのかと幸助は目を擦ったが、大きさが変わることはない。

誰かがあれは青海竜だと言っている。たしかに視線の先の竜は青い鱗を身にまといっている。

「逃げるとか、刺激しないように止まるとかしないのかな？」

騒いではいるが、怖がったりはしていない船員たちを見て幸助はふと疑問に思う。

そのことを近くににいる船員に聞くと、海竜に攻撃をしかけないかぎりは船に近づいてくることはないといった返答が返ってきて、彼らが落ち着いていることに納得した。船乗りたちは航海していて何度も経験しているのだろう。

「黒竜以外の竜って初めて見る」

ウィアーレたちピリアル王国の民は、頭上を飛ぶ竜は何度か見ている。いつ自分たちのいる場所に襲い掛かってくるか幾度も怯えた。だからウィアーレの視線には、黒竜ではないとわかっていても今も怯えの色が見て取れる。

「俺は生きている竜は初めてだ」

せっかくだからと二人は、海竜を見物する。ウィアーレにとって恐怖以外の感情で竜を見ることが初めてで、少し腰が引けながらも視線は竜から外れない。

「あれ？」

幸助が首を傾げる。幸助の優れた視力が海竜の動きの変化を捉える。

海竜の首が船の方向へと向き、進行方向を変えたのだ。

「どうしたの？」

「海竜の動きが……」

「動き？ あ、こっち来てる？」

ウィアーレはなんとなく大きくなっているように見える竜を見て、近寄ってきてるのかと思う。

「こ、攻撃なんか仕掛けてないよね？ なんでこっち来てるの？」

少し不安の混ざった声で幸助に聞くが、幸助も答えは持っておらず答えられない。

船員たちもこの変化に気づき、動揺が徐々に広がっていく。

あの大きさの生物が近くに来るだけで、波に揺られ船が沈む可能性があるのだ。

この事態にどうするか話し合う声があちこちから聞こえだす。ある者は船長へと知らせに走り、ある者は少しでも離れるため帆を調整しようとし、ある者は考えが浮かばず右往左往している。

甲板の騒ぎに誘われるように、他の客と共にエリスが二人の元へとやってきた。

「騒ぎの原因はあれか」

視線を海竜から離さず、納得したようにエリスは言う。

幸助は同意し頷いた。

「あれだね」

「誰か攻撃しかけるなんて馬鹿なことしたのかの？」

「いや誰もそんなことはしてない。なんでか近づいてきてるんだ」

「どうしたもんかのう。飛翔魔法は陸が遠すぎて使いづらいの。」

転移魔法を使うには時間が足りるか？」

竜の實力は身に染みてわかっているため、エリスの考えは逃げに偏っている。間違っても戦おうとは思わないだろう。戦うには準備が足りていない。黒竜に挑んだ時は十分な準備してから行っただ。それでなんとか死ななかった。

「二人ともどうして落ち着いてるの!？」

のんびりと話しているように見える幸助とエリスに、ワイアーレが驚いている。

「どうしようもないから？」

「そうじゃの。いざとなれば飛翔魔法で空中に逃げるつもりだが」

今から使えて一番強力なシールドの魔法でも、体当たりには耐えられそうにない。二人ともそれをわかっているのだ。もうあとはワイアーレを連れて、空へと逃げるのみと考えていた。それからあとのことは何も考えていない。

一キロ先にいた海竜が五百、三百と近づいてくる。距離に比例して波が荒れ、船は揺れ始める。

「おっと」

倒れそうになるワイアーレとエリスの腕を掴み、幸助が支える。幸助自身は揺れる船上でもしっかりバランスを保ち、倒れる様子は皆無だ。

近づいてきた海竜は徐々にスピードを落とし、五十メートルほど離れた場所で止まる。しだいに波も治まり、船の揺れもなくなる。

「でっかいなあ」

二人の腕を放して、船よりも大きな海竜を見上げる幸助。水面下の体も合わせると黒竜よりも大きいだろう。そこにいるだけで、人間には勝てないと思わせる雰囲気がある。気の弱い者ならば気絶してもおかしくない。

他の者たちも初めての距離で見る海竜に、畏怖を抱き黙って見ている。余裕があるのは、幸助とエリスだけだ。

海竜からは敵意は感じられない。全員が恐慌状態に陥っていないのはそのおかげだろう。

なにかを探るように海竜の目が動き、見上げている幸助と目が合い止まる。

「なんだ？」

幸助は体が引っ張られるような感じを受ける。そしてそれはどんどん強くなっていく。足を動かしていないのに、縁へと動かされていく。幸助自身は止まろうと足を踏ん張っているが、止まらない。我に返ったワイアーレが手を引っ張っても力負けし、エリスが魔法で干渉しても弾かれた。

「呼んでるのか？」

敵意がないことで、力に身を任せてみようかという気になった幸助はワイアーレとエリスへと振り向く。不用意な判断かもしれないが、引っ張る力に抵抗できない以上、そうするしかないともいえる。

「ちょっと行ってくる。自力でなんとか帰るから」

「敵意はないのはわかるが、目的はさっぱりじゃ。十分に気をつけるのだぞ」

「うん。ワイアーレもそんな心配そうな顔せんでも大丈夫」

泣きそうな顔で何も言えないでいるワイアーレに声をかけた幸助は、縁からも離れ空中に浮かび海竜へと引っ張られている。そのまま海竜の頭頂部に下ろされる。

幸助を手に入れ目的を果たしたのか、海竜は首を船の方向とは別へ向け、移動を始めた。高速で移動を開始して、船がかなり揺れた。だが転覆するようなことはなく、船員たちはほっと胸を撫で下ろした。どうして客の一人をさらったのか不思議に思いつつ、船に異常が出ていないか調べるために調査を始める。

一時間ほどで点検を終え、再び航海を始める。さきほどのようなハプニングはもうないだろう、と思っている彼らに海の魔物が襲い掛かるのは八日後のこと。彼らのほとんどが船乗り辞めようかと少し考えたらしい。

甲板から人が減った後もワイアーレとエリスは海竜の去った方角を見ている。ワイアーレは幸助の無事を一心に祈り、エリスはどうしてさらったのかと思いつつ。完全に海竜の姿が見えなくなったら二人は客室に戻っていった。

海竜の頭に移動させられた幸助は、そのまま頭に固定され動けずにいた。動かせるのは頭と手足が少し。落とさないようにという配慮なのだろうが、ずっとそのままというのは辛かった。かといって固定化を解かれると落ちる可能性もある。乗っていた船を軽く超える速度で移動しているのだ。以前幸助はスクーターで時速五十キロほど出したことがあるが、その時の体感速度に近い。

周囲の風景が変わらず変化が乏しいためわかりづらいが、実のところ百キロをはるかに超える速度が出ていた。普通ならば体に当たる風に耐えられないが、海竜がある程度ガードしているので五十キロほどの風に晒される程度ですんでいる。

「おい、どこに連れて行くつもりなんだー？」

幸助は返事があるかどうか知らないながらも、問いかけてみる。反応はなかった。予測できていたことなので、どうとも思わず力を抜いて寝そべる。昼寝するつもりだったから、このまま寝てしまえと目を閉じた。

幸助が寝息を立て始めても、海竜はそのまま進み続けていく。

そして移動し始めた日の夜、寝ていた幸助は陸に近づいてたことに気づかず、そのまま竜にさらわれた時と同じように、陸地へと放り投げられた。

これが幸助が砂浜にいる理由だ。

シャイトが気にしなかった波の変化は、海竜が大陸に近寄ったことで波に乱れが出たことが原因だ。あの時すぐに浜辺に行っていれば、遠くに見える海竜の黒い影を見ることができただろう。

実のところ海竜は、幸助を狙ってさらったわけではない。実力がある者ならば誰でもよかったのだ。海竜が感じ取れる範囲にいる力の強い者が幸助だっただけのこと。

さらった理由もアバウトだ。エゼンビア大陸には、青海竜のお気に入り人間がいる。その人間が近頃困っている様子だったので、なんとかできるような人間を探していた。青海竜は力の強い人間を、お気に入り人物の近くにやればあとはどうにかなるだろうと大雑把に考えて、幸助を連れてきたのだ。

会話を交わしていない幸助がそういった事情を知るわけもなく、幸助はセブシック大陸に帰ることを第一としている。なんらかの理由があるのだらうとは幸助もわかっているが、ノーヒントではどうしようもない。

青海竜としては幸助が失敗しても、また別の人間をさらってくれば良いと考えているのだが。

詳しい事情を幸助は話さず、適度に誤魔化しつつシャイトに説明した。

乗っていた客船が魔物に襲われ難破。木切れに捕まり海流に乗ったまま漂流し、陸地が見えたところで海中にいた魔物に弾き飛ばされた、といった具合だ。竜のさらわれたというよりも、信憑性がある。

海流に乗ったというところを、海竜に乗ったと言い換えられることに、上手いこと言ったと幸助は思わず笑みを漏らす。そんな幸助をシャイトは変な奴だと思っていた。

シャイトは幸助の説明に疑いを持っている。それは漂流していたにしては、幸助の服がずぶ濡れではないから。多少濡れてはいるが小雨に打たれた程度、衣服のまま泳ぐはめになったのならばもっと濡れていてもいいはずなのだ。

シャイトはそこを指摘しない。少しでも仲良くなっておきたいから。

「それは散々な目にあっただんだな」

「まったくだよ」

「そんな状況なら食べ物とか飲み物にも不自由しただろ？ 手持ちがあるから食べるか？」

漂流したと言っているので、数日くらい飲み食いしていないのはと提案する。

「いいの？」

「ああ、困った時はお互い様だ」

ただよりも高いものはないという諺を忘れて、幸助は提案を受けた。

水とパンと干し肉という簡単な食事だったが、夕食抜きで空腹だったのでそれなりに美味しかったようだ。

「コースケはこれからどうするんだ？」

空腹を満たし一息ついた幸助に問う。

「帰る」

「だろうな。でもお金はあるのか？」

「あ」

幸助を懐を探り財布を出す。入っていたのは銀貨二枚と銅貨数枚だった。ほかのお金は鞆に入れてある。その鞆は当然船の中だ。

「……帰る前に旅費稼がないと」

身分証明となるカードは財布に入れていたので、依頼を受けるのには不自由しない。

「儲け話があるんだが、のらないか？」

「大金は必要ないんだけど？」

本当に儲かるのなら他人に明かすことはない、日本にいたとき聞いたことのある幸助は怪しんでいる。

「怪しむのはわかる。俺だって甘い話は警戒する。

でもその儲け話は俺一人だと厳しいんだ」

「俺が加わっても変わらないんじゃない？」

「ところが俺の予感がコースケを連れて行けと言ってる。一緒に行った方がいいってな。」

予感のギフトを持っているんだ俺」

ほら、とカードを見せてギフト持ちだと証明する。

シャイトは自身のギフトを信賴している。今まで危ないことがあった時も、予感に従えば怪我は負うものの死ぬことはなかった。その予感が連れて行けと命じるなら、シャイトは幸助を連れて行くことに全神経を傾ける。

「ほんとに持ってるね」

予感が竜殺しってことに反応したのかと、幸助は小首を傾げた。

「……とりあえず話を聞いて判断するってのはどう？」

「まあ、それでもいいさ」

なんの情報もなしに領けというのはシャイトも無理があるかと思
い、幸助の提案に同意する。

「向こうに山が見えるだろう？ あれはムバラント山って行って、
いくつかの魔物の巣窟になっている山なんだ。」

その山頂近くに泉があって、その泉が山から流れる川の源流に
なっている。まあそれは関係ないけど。

その泉から少しだけ離れたところに日当たりのいい場所があって、
何種類かの薬草が生えているんだ。その薬草の一つが目的の品物。
といってもその薬草自体が必要じゃなくて、咲いた花の花粉と朝露
の混ざり合った薬水が必要なんだ」

「どんな効能があるのそれ」

「喉にすごくいい」

「喉？ それを取りに行くってことは欲しがってる人が喉を悪くし
てる？」

「いや悪くはしてない。喉がすごく大事で、常にその薬水を募集しているんだ。

世界一とも言われる歌姫のこと知らないか？ この国の王女なんだが」

聞いた覚えはないなと幸助は首を横に振る。

「わりと有名なんだけどな。

そういった人がいてその人のために必要とされてる。だからその薬水は高値で取引されてるってのはわかるよな？」

「高値なら冒険者たちが採りつくしてるんじゃない？」

シャイトは三本の指を立てる。

「三つの原因で常に品薄の状態なんだ。

一つ目。あの薬草は高所でないと育たない。二つ目。花粉と朝露が混ざり合ったものなんて量が少ないし、取れるタイミングも限定されてる。三つ目。あの山の魔物たちはここの魔物とは一つ二つランクが上」

「三つ目のせいで、冒険者たちの乱獲はないってことか」
「その通り」

シャイトの予感当たっているんだろうなと幸助は思う。魔物が強くとも逃げ切る自信はある。逃げつつ薬水回収はできそうだと頭脳が結論を出した。

幸助は悩む。お金が必要なのは確かだ。でも一攫千金を狙う必要はない。断ってもいいのだけれど、なにかが心に引っかかっている。それは先ほどの食料をもらったことだ。親切にもらったというところが、断ることにためらいを感じさせている。そしてそのためらいはシャイトが狙ったものだ。いきなり頼み込んでも承諾されな

い可能性が高い、と予想していたシャイトは手を打っていた。

「……一つ条件を受け入れるなら行ってもいい」

「どんな条件だ？」

「ちよつとした事情があつて目立ちたくないんだ。だから俺が関わつたっていう情報を流さないでほしい。

この仕事では、手伝ってお金をもらうだけ。これをお願い」

拍子抜けした顔となるシャイト。思っていたよりも軽い条件だったのだ。

「それだけ？ 別にそれならかまわない。

じゃあ改めてよろしく」

「うん。よろしく」

握手した二人は近くの村へと向かう。そこで幸助の漂流での疲れを取り、薬水を取りに行く準備を整えるためだ。

「そういやシャイトはなんで薬水を取りに行きたいんだ？ 俺と同じでお金目的？」

「いや俺は歌姫を間近で見てみたくて」

幸助に悟らせないほど短く動揺したシャイトは、口調を平凡なものから変えずに答えた。

「薬水を持って行ったら歌姫に会えるんだ」

「自分のために危険を冒してくれた人に直接礼を言いたいんだと」

「ほー、出来たお姫様だねえ」

「歌い手としてあちこちから呼ばれて国から出てるし、世間ずれしてないんだろうな」

カリバレッテ公国は小さな国なので、王族としての意識も低いのもかもしれないとシャイトは考えている。

そんな状況にシャイトは文句などない。むしろ王族に直接会えるのだから、目的のあるシャイトとしては好都合だ。

「あ、見えてきた。あそこが目的の村？」

「そうだけど、よく見えたな。俺は指摘されてようやくおぼろげに見える程度なのに。」

それでも目の良さには自信があったんだが」

夜目の利く幸助に素で驚く。

「俺も目の良さに自信があったから」

「月の出てないこの暗さで、そんだけ見えれば立派な特技だな」

特技という言葉でシャイトは、幸助がギフト持ちか聞くのを忘れていたことに思い至る。

だが目立ちたくないという幸助の言葉から、詮索するのはよしておこうと口を閉ざす。今は確実に薬水を手に入れる必要がある。関係に余計な亀裂を入れるようなことは止めたほうがよいと判断したのだった。

気楽で危険な山登り

「準備はいいか？」

「いいけど、ほんとによかったの？」

少し申し訳なさそうな顔で幸助が聞いている。

「いいと言っているだろう」

十分休みを取って準備もすませた二人が村から出ようとしている。今の二人は山歩き用に分厚い長袖長ズボン、厚手のブーツを着込んでいる。それにシャイトは昨日と同じように外套をまとい、幸助は腰に大振りのナイフを帯びている。

幸助が申し訳なさそうな顔になっているのは、準備にかかるお金を出してもらったからだ。今いる村は大きな村ではないので品揃えがいいとはいえない。万全な準備を整えたというわけではなく、かった費用もそこまで高いものでもない。

それでも宿賃から山登りの装備まで全て奢りというのは、幸助に十分遠慮の思いを抱かせることだった。

この村で手伝いをして稼ぐという方法を幸助が提案したものの、できるだけ早く王都に行きたいシャイトは却下していた。

「そこまでお金はかかっていないんだ。手持ちの四分の一がなくなっただけだ。」

それも今回の依頼を成功させれば、出て行った金以上の収入がある。正直準備を怠って失敗したくないから、当然の行動なんだ」

シャイトのこれは本心だ。今回は恩を押し付けようとは思っていない

ない。それだけ成功させたいのだ。お金のことなど気にしていない。王都に行くまでのお金が持てばいいと考えている。

「じゃあ報酬が手に入れば返すよ」

「別に返さなくていいんだけどな」

好きにすればいいと言って、シャイトは歩き出した。それを追って幸助も隣に並ぶ。

目的地の山までは順調にいつてこの村から半日ほど。そして麓から泉までさらに半日だ。

そこに行くまで幸助は、シャイトからこの大陸のことを聞いていく。

道中平穩無事というわけではなかった。野盗などはいなかったが、二度ほど魔物が襲い掛かってきた。幸助にとっては雑魚といえる魔物で、よそ見しながら魔法で容易に殺すことができた。

目の前の敵を見ないで誰を見ていたかというシャイトだ。戦いぶりを見て、どれくらいの強さなのか知ろうとした。

シャイトの戦い方は、ショートソードを使い相手の隙を突いていくものだった。魔物が弱いということもあり、怪我を負うこともなくさっさと殺していた。

そういった動き方を見て幸助が思ったのは、ナガレに少し似てるということ。真正面からぶつかり合うような戦い方ではないということ。詳しい強さはわからなかった。少なくとも全力を出しているようには見えなかった。

「今日はここで野宿だ」

日が暮れて、山の麓に到着した二人。暗くなった山の中を歩いたり野宿するより、ここで休息取った方がいいと二人の意見は一致した。

野営の準備を済ませて、調理の仕上げをしつつ幸助はこの山について聞く。

「この山にどんな魔物がいるかわかってる？」

「ああ、いるのは三種類の魔物だ」

一匹目は肉食い巨蜂。カラスほどの大きさの蜂だ。硬い外殻に、一刺しで猪を殺す毒針、木の幹も簡単に噛み砕く強い顎を持っている。

二匹目は岩猪。大きさは猪と同じだが石のような殻を身にまとい、すごい勢いで突進を仕掛けてくる。

三匹目は隠れ燕。空色や森色の体毛を持った二種類がいる。大きさは通常の燕の三倍弱。翼は刃状になっており、擦れ違いざまに手首を斬り落されたなんて話も聞く。

「肉食い巨蜂に関する注意点は巣に近づかないこと。奴らの巣は土と石を唾液で固めた土塚で、その中に五十から百匹の肉食い巨蜂がいるんだ。巣に近づくとそれが一斉に襲い掛かってくる」

一匹ならば危険度は魔物の中でも下の上といったところだ。しかし集団になると中の上に跳ね上がる。

「それは怖い」

幸助はその様子を想像してみて一度体を震わせた。

「そうだな。でも逆に一匹なら怖くないんだ。硬いといっても岩石までとは言わないし。」

奇襲に注意すれば駆け出し冒険者でも十分倒せる」

「一匹倒したら、仲間を呼ぶとかは？」

「それはない。まあ巢の近くで倒したらそのかぎりではないと思う。次に岩猪の注意点。こいつは突進の進路上に立たないこと。突進をまともに受けて骨折で済めば儲けもの。」

ただ纏っている殻の構造上、突進中に曲がることはできない。だから一対一なら、突進して勢いなくなったところを転ばすなりすれば殺すのは簡単。一対複数なら、一匹のみに集中せずに全部の進路を把握すること。一匹の突進を避けた後、背後や横から突進を受けることがある」

「わかった。」

ん、そろそろかな？うん、できた」

味見して出来たと判断し、十分煮込み終えたスープを器に入れ、シャイトに渡す。

シャイトはそれに礼を言っ、一口飲んでから続きを話す。

「最後に隠れ燕だけど、これはテリトリーに近づかないってことくらいしか注意点はない。」

姿の見えにくい素早い飛行を察知して避けるってのは難しいんだ。ただ翼もさすがに金属の鎧は斬り裂けないから、がちがちに装備を固めて対応するって方法もあるけど、そういった方法をとると動きが鈍くなるしな」

「空飛ぶ魔法もってんだけど、使って山頂まで行ける？」

ショートカットできるんじゃないかと聞いてみる。

「蜂や燕のいい的じゃないか？ 飛ぶ速度や機動性は向こうの方が上だろうし」

「確かにそうだなあ。」

一人で行こうとしてたんだから、魔物たちへの対策は練ってるんだよね？」

「ああ、肉食い巨蜂には虫除けの匂い玉を何個も持ってきてある。隠れ燕は奴らのテリトリーの反対側から山に入ることによって遭遇確率を減らす。猪はこれといって対策してないが、近くに寄れば物音が立つからわかりやすいって情報を手に入れている。

あとは慎重に進むってだけだな。ついでに神に幸運を祈ることもしておこうか」

面白がって遭遇確率上昇させそうだなと幸助は思ったので、祈るのは止めておこうと決めた。

どこからか、そんなことするわけないじゃないか、と聞こえてきたような気がするが、シャイトが特に反応を見せていないし気のせいだろうと幸助は流す。

夜は更けていき、先に幸助が寝てシャイトが見張りに起きるということになる。

山の魔物の領域には近づきたくないのか、ほかの魔物が襲ってくるようなことはなく。山の魔物たちも山から出てくることはなかった。

そして夜が明ける。

隠れ燕を避けるため、野宿していた場所から山沿いに南へ一時間歩いてから山に入る。

山の中は、風に木の葉が擦れる音や虫の鳴き声が主な音だった。

鳥の鳴き声が聞こえてこないことに幸助は首を傾げる。他の森では鳥の声も聞こえたことを覚えている。

「そーいやこの山って魔物のほかに危険な獣っていないの？」

「いないな。小動物くらいならいるだろうが、大きな獣は蜂の餌になる」

鳥の鳴き声が聞こえないのは餌になったからだろう。

「じゃあ気をつけるのは本当に魔物だけか。

蜂は羽音に注意して、猪は足音にと」

「蜂は木の枝とかに止まって周囲の観察していることがあるらしい。だから羽音が聞こえないからといって油断は禁物だ」

「了解」

ふと幸助はかすかになにかが風を切る音を捉えた。音がした方を見ると同時に、腰のナイフをシャイトの前に突き出す。そのナイフに鳥がぶつかったのをシャイトは驚きの表情で見ている。

今シャイトは二重の意味で驚いていた。一つ目は隠れ燕に少しも気づかなかったこと。二つ目は幸助が気づき対処までしたことだ。いつもならば命の危機に関しては予感が働くのだ。そして今の状況は命の危機だった。それなのに全くと言っていいほど予感を感じられなかった。

「これが隠れ燕？ 確かに緑の羽毛で見づらい。でもこっちはテリトリーから外れてるんじゃない？」

「テ、テリトリーから外れても遭遇する時はする。確率はゼロじゃないんだ。

……しかしよく気づけたな？」

去った危機に感じる恐怖を抑え込み、疑問に思ったことを聞く。

「翼が風を斬る鋭い音が聞こえたんだ。んでそっちを見たら緑の塊がこっちに飛んできてるところだったんで、思わずナイフを進路上に突き出した。

ところでこれの売れる部分って刃状の翼くらい？」

「ああ、肉も売れないことはないが、特別高いってことはない」

ちなみに肉食い巨蜂は傷ついていない毒針と羽が売れ、岩猪は肉

が美味しく同じ重さの牛豚肉よりも高く売れる。

嬉々として翼を切り取っていく幸助の余裕ある様子を見て、シャイトの脳裏に一つの仮説が浮かぶ。

それは幸助がいるから予感が動かないのではということ。シャイトの予想以上に強い幸助が共にいることで、普段ならば命の危機になることも心配いらなくなる。だから予感が動かなかった。

この仮説が正しければ、シャイトは本当に心強いボディガードを得たことになる。

シャイトは心中に大きな希望が生まれたことを感じ取った。それを表に出さずに、仮説が外れていることも念頭に置いて気を引き締めた。連れが強いからといって油断して、失敗しては目も当てられない。

「回収は終わったか？」

「終わったよ」

「先を急ぐでしょう。」

あ、それと礼を言うのを忘れてた。助けてくれてありがとう」
「どういたしまして」

二人は慎重に歩を進めていく。

その後、木の枝に止まっている肉食い巨蜂に幸助が気づき、拾った石を投げて打ち抜くといった芸当を見て、シャイトは自身の仮説に信憑性が増すのを感じていた。

開けた場所で静かに三時間ほど長い休憩を取った後は登り続け、二人は目的地の泉に到着していた。道中これといったトラブルはなかった。遠くに岩猪を見つけやりすごしたり、肉食い巨蜂の巣を見つけ迂回したくらいだ。

時間は昨日山の麓に到着した頃よりも遅い。なので夜だ。目的の薬水は朝でないと手に入らないのですることがなく、薬草が生えている場所を確認した後は魔物に見つからないよう静かに待機となっ

た。

火の明かりで魔物が近寄ってくる可能性があるので、暖かい物は食べられず味気ない食事を終えた後は本当に暇になった。

夜風で体を冷やさないよう、体を温めるために酒をちびちびと飲みつつ時間は流れていく。つまみは少量の香辛料をまぶし炒った豆だ。

「なあコースケ」

「なに？」

ぼんやりワイアーレとエリスなにしてるかなと考えてた幸助は思考を止めて、シャイトを見る。

「お前さんどこかの近衛騎士だったりするか？」

シャイトは幸助を見ずに、空を見上げながら聞く。

「まったく違う。なんでそんなことを思ったって感じなんだけど。

俺の行動のどこかに騎士を感じさせるものなんかあった？」

「いやないんだが、あれだけの能力持っているとただの冒険者とは思えなくてなあ」

「あいにくただの冒険者なんだなこれが。地元では雑務系依頼ばかり受けてた」

「もっと儲かる依頼あるだろうに。なんでそんな仕事を」

シャイトは言葉に呆れを滲ませている。

「お金が一番の目当てじゃなかったから。どんな仕事があるのか体験してみようってな感じだった。

あと荒事は気後れしてたから」

「あれだけの強さがあって怖がるって、どんだけ周りの奴ら強いんだ」

シャイトは幸助の周囲の状況が厳しいので気後れしたのだと思っている。平和な異世界から来たので荒事に気後れしたのだとは、さすがに想像もできない。

幸助が間違いを訂正しなかったので、シャイトは厳しい環境に揉まれて強くなったと解釈した。

「どんなステータスなのか気になるな。よければカード見せてほしいんだが」

「あーごめん、勘弁して」

「……なら一番高いものか低いものを教えるのは？」

「んーそれならいいか。一番低いのでD＋」

竜殺しの称号で一段階アップしている分を差し引いた精神のステータスだ。一応嘘ではない。称号やギフト分を上乗せでと言われてないと強引に屁理屈をかましている。一番低いのでCーというよりはましだと思ったのだ。

それでも十分すぎるほどに驚けるものなのだが。

「それは……強いはずだ」

驚く様を隠さずに、幸助へと視線を移す。表情から見るに本心から驚いているのだとわかる。

シャイトの最高値である器用さD＋と精神D＋の同値が、幸助の最低値というのは予想してなかった。

「俺がどれだけ戦えばそこまで行けるんだろうな」

「それは……わからないね」

「たくさん魔物を倒す必要があるってのは確かだな」

雑談はステータスのことから離れて、何気ないことに変わっていく。

その雑談からシャイトは幸助についての情報を集めていく。どこに住んでいるのかなどをしっかりと覚えておく。強い人物とのコネを逃すつもりはなかった。

昨日と同じく交代で見張りをして、夜が更け明ける。

太陽が昇る前に二人は起きて、朝露にまみれた毛布をはたき、簡単な朝食を食べた後、薬水回収の準備を整えていく。準備といっても大仰なことをするわけでもない。小瓶をリュックから取り出しただけだ。そして二人の手にはコルクで栓をしている小瓶が握られている。

「露溜まってるな？」

シャイトの問いに、花の一つ一つを覗き見て幸助は頷く。動いたことで起きる振動や風で露が零れ落ちぬよう慎重に動いている。

「じゃあ、回収だ。回収の仕方は特別なものじゃない。花を傾けて、小瓶の口に露を落すだけ」

「素人でもできる簡単な仕事だね」

「素人じゃここまで来るのは無理だけどな」

二人は露が虫に吸われてしまう前に、回収していく。ポタリポタリと露を小瓶に落していき、十五分ほどで全て回収できた。分量はどちらの小瓶も半分近く溜まっている。

これだけあれば商家に叩き売っても金貨三枚分はある。王家ならばもっと少し色をつけてくれるだろう。

「しっかり栓はしたな？」

「零れたらもったいないからね」

きつめにコルクで栓をして、小瓶が割れないように布で包み、リユックにしまう。

「あとは山から出るだけと」

「魔物に注意しながらな」

幸助の言葉に付け足し、シャイトは歩き始める。

帰りにも魔物に遭遇しかけたが、回避することができ戦闘は一度もなかった。

この状況にシャイトは上機嫌だった。なにしろ事前に予想していたよりもずっと楽に終わることができたのだ。

だから気が緩んだのか、可能性として考えていたことが起きたのにも関わらず、一瞬動揺してしまった。

二人の目の前には冒険者らしき物たちが四人。無言で武器を構えて、森から出てきたばかりの二人に襲い掛かってきた。

幸助が彼らに気づけなかったのは、彼らが気配を隠していたというのと森に主な注意を割いていたからだ。先日の野宿で特に危険がなかったということも理由になる。

襲撃者に意識が向いたことで、シャイトの動揺の仕方が突然襲われたからではなく、襲ってきた者を見て驚いたものだったことに幸助は気づかなかった。

戦いは静かに始まり終わった。

被害はシャイトが軽傷を負った程度で、幸助は無傷だ。襲撃者は気絶して地面に倒れている。使うかもと持ってきてた細いロープで縛り上げた。

「こいつらなんだったんだろう？」

「物取りだろう。自分たちでは山に入る実力はない。だけど薬水はほしい。だから薬水を取ってきた者たちに奇襲でもしかけ、奪い取ろうとしたってことだろ」

その説明に幸助は納得したように頷いた。

「それにしてもシャイトなんか動きが鈍くなかった？」

「いきなり襲われて動揺したんだ」

幸助の疑問に答えつつ、懷から出した丸薬を飲み込むシャイト。

「そう。うん？ それってなに？」

飲んでいる丸薬を指差す。

「あいつらの剣に毒っぱいのが塗られたから、念のために解毒剤をな」

「ふーん。それが効かなかったら、魔法使うから言って」

「その時は頼む」

「それでこいつらどうしよう？」

「……近くの村に連れて行っても拘留施設はなさそうだし、ここに放っておいていいんじゃないか？」

「なかったっけ？」

幸助は村の様子を思い出し、見えていた部分でそれらしきものがなかったことを思い出す。けれども村全部を回ったわけではないのだ。もしかしたらあるかもしれない。

そう言おうとして幸助は止めた。シャイトの顔を見て、なんとなく言っほしくなさそうに見えたからだ。確信はなく気のせいかもしれないのだが。

「ま、それでいっか。これから向かうのは王都？」

襲撃者から視線を外して、幸助は歩き出す。

襲撃者たちは運が悪ければ魔物に食われて死ぬだろう。運が良ければ魔物が来る前に目覚めて、地面に落ちているナイフを使ってロープを切るはずだ。

幸助としてはどちらでもかまわなかった。

「ああ。その途中にある町で補給して到着は遅くて四日ってところだな」

「どころでこの国の特産物とか有名な場所とか成り立ちって知ってる？」

もしかしたら帰り道港に行くまでに有名どころに寄るかもしれないのだ。その時のための前知識として聞いてみた。無駄知識になるだろうが、暇潰しにはなる。

シャイトは知っていることを思い出し話していく。

「この国ができたのは百五十年くらい前か。この国の南西にある国で大きな手柄を立てた侯爵が、褒美としてこの土地と建国許可を与えられたことがこの国の始まりだ。

始めの立場は属国というもので、国政にも口を出されていたらしい。でも建国して数十年の間に優秀な王や役人が何人か出て、そいつらが外貨を稼ぎ、大量の金額を払うことで半独立を認めさせた。半独立なのは有事が起った時、いいように使える駒がほしかったかららしいな。完全な独立はできなかったものの、あからさまな国政関与はなくなり一国として独り立ちできた。

大雑把な歴史はこういったものだ」

「侯爵が立てた手柄ってのは？」

「地震と津波が起きて沿岸部が壊滅したんだと。その復興に大きく活躍したのが当時の侯爵だと聞いた」

「国もらえるほどだから、相当に活躍したんだろうな」

「それもあるかもしれないが、壊滅した地域を押し付けられたっていう説もある。」

復興したとはいえ、農業や商工業は以前ほどじゃないだろう。治安も悪くなっているはずだ。しかし自国の建て直しに力を注いでいる最中で、それらにかまう暇はなかったから治安は悪化していった。そんな地域を治められる人物はその侯爵以外いなかった。そこをどうにさせるため、好条件をつけて領地を移動させたと。復興資金もそれなりに出たんじゃないか？ 近場が荒れていては自国に悪影響が出るし、さっさと解決させるためにな」

シャイトは知らないが、優秀すぎるので国から放り出したという説もある。土地勘のないところで悪戦苦闘させて、出身国に関わる暇をなくさせる。いくら優秀でも、荒れ果てた土地を一から国として成立させるのは難しいだろうという判断だ。

これは当時の王に疎まれていたという記録が残っているところから立てられた推測だ。

「好条件なのか？」

「一国の主になれるんだ、野心持ってる奴にはいい条件なんじゃないか？ その侯爵が野心持ってたかは知らんが」

「王家にその侯爵の日記でも残ってたらわかることかもなあ。」

成り立ちはわかった。この国の特徴はなにかある？」

「歌姫だろうな」

シャイトは即答する。

それは幸助も聞く前にわかっていた。だがシャイトの次の言葉に首を傾げることになる。

「歌姫が生きているかぎり、この国が壊滅の脅威にさらされる確率は低い」

「なんで？ 歌姫が政治的にもやり手？」

「いや、そうじゃない。歌姫は青海竜に気に入られているんだ。歌姫の歌を聞くために青海竜は三ヶ月に一回川を遡るほどだ。」

「歌姫に害をなそうとしたら、その青海竜に制裁くらうことになる」「護国竜って聞いたことあるんだけど、それと同じことしてる？」

「あれとは違うだろう。あっちは国全体を守っている。こっちは歌姫以外はどうでもいい。歌姫が死ねばこの国に興味をなくすだろうさ」

事実、青海竜のことを勘違いした軍が戦力として使おうとして大きな被害を受けた。

歌姫が頼めば少しは国のために動いてくれるかもしれないが、それをする周囲の国の警戒心を上げ、刺激することになりかねない。青海竜の活躍が期待できない以上、無闇な刺激は国の不利益にしかない。歌姫に危険のない程度の武力行使や経済制裁など実行されては国の危機だ。

なので歌姫が移動する際の護衛として頑張ってもらう以外に、軍は青海竜に期待していない。

「……青海竜が歌姫にねえ」

もしかすると海竜が自分をここに連れてきたのは歌姫関連なのかもな、と幸助は考える。

それがわかったところで、ここですべきことはいまだ不明なのだ。だから幸助の目的は帰還から変わらない。

このあとも美味しいもの、有名どころと聞いていき旅は順調に進んでいく。

任務と音楽教室

予定は狂うことなく二人は三日目に王都に到着した。

王都の規模はそれほど大きいものではない。メイドとして滞在したホルンの実家のあるリッカートよりも、やや小さいように幸助は感じている。

都の造りは、王城を中心に建物が並び、都を守る二メートルの高さの塀がグルリと囲んでいる。塀には三つの大きな入り口があり、それらと城を真っ直ぐ大きな通りが繋いでいる。遠目に見える城は華美ではなく、質実剛健といった造りに見える。

鷹の門と呼ばれる入り口を抜け、二人はまずは宿を目指す。

なぜ鷹の門と呼ばれるのかという幸助の疑問に、シャイトが観音開きの扉を閉めると鷹の絵が描かれているからと答える。

ほかの門の扉には薔薇と馬の絵が描かれている。これらは初代国王が好きだったものだ。

宿を決めて荷物を解いたシャイトは小瓶を取り出す。幸助からも渡してもらう。

「じゃあ俺は城に行ってくる」

「いってらっしゃい。俺は観光してるかもしれない」

「ん、わかった」

ひらひらと手を振る幸助に見送られシャイトは宿を出る。

露店などには目もくれずシャイトは真っ直ぐ城を目指す。

近づいてくるシャイトを視認した兵が槍を持つ手に力を込め警戒する。

「薬水を持ってきたんだが、通してもらえないだろうか」

門番に小瓶を見せ、城内に入る許可を願う。

「薬水を渡してもらえますか？ 本物か調べますので」

そういつて門番は手を出してくる。門番に渡すと、すぐ近くの待機部屋までついてくるよう指示される。

その部屋で門番は棚から取った瓶の中身を小皿に移し、薬水入りの小瓶のふたを開ける。次に針に薬水を付着させ、小皿の液体と混ぜ合わせる。すると混ざった液体からフワリと甘い匂いが漂い出した。

その匂いを嗅いだ門番は頷いて、シャイトを見る。

「本物のようですね。薬水の回収お疲れ様でした。

ここで身体検査をした後、城内へと案内します」

兵士によって入念に調べられ、全ての危険物をこの部屋に置いたシャイトは別の兵の案内で城内へと入る。

城の中も多くの飾りはなく、華やかさよりも重厚な雰囲気を感じられる。

「ここでお待ちください」

待合室に通され、どれくらい待たされるかと考えていると予想よりも早く呼び出しの兵がやってきた。

「王と王女がお待ちです。くれぐれも失礼のないように」

「はい」

兵が先導し、謁見室に入る。

王冠を被った五十手前の男と淡い青のドレスを着た二十過ぎの女が、簡略化された玉座に座っている。二人とも凡庸な顔つきで、そこだけ見れば平民と変わらない。着ている服の質を落せば王族には見えないかもしれない。けれどもまもっている雰囲気ではないと気づかされるだろうが。

王はじつとシャイトを見ているが、王女はシャイトの周囲を見て小首を傾げている。誰かを探しているようだ。

二人のほかには護衛の兵が六人と文官らしき人が二人いる。

シャイトは絨毯を少し進み、片膝について顔を伏せる。

「顔を上げるがよい」

「はっ」

「薬水の回収ご苦労であった」

「お疲れ様でした」

王の後に王女も礼を述べる。歌姫と呼ばれるだけあり、耳心地の良い声だ。

「報酬を渡そう。金貨六枚だ。異論はないかね？」

一般家庭の生活費半年分以上だ。十分といえるだろう。

「恐れながら申し上げます」

シャイトの言葉に王は片眉をピクンと上げる。

「言ってみるといい」

「この薬水の回収には二人で行きましたので報酬のお金は半額にして、私への報酬は別にしてもらいたいのです」

「もう一人はどうしてここにこなかったのですか？」

王女が問う。その表情にはどこか納得しているようなものが見える。

「お金さえもらえればいいと言って、城には来ず宿で休んでます」

「そうですか。頼めばここに来てもらえるでしょうか？」

「王族に頼まれれば断れる者はそうはいないと思います。」

ですがコースケに会いたい理由でも？」

「それは後で話すことにしましょう。今はあなたの願いを聞きましようか」

シャイトは周囲を一度見渡し、少しだけ間を置いて口を開く。

「私はシダルン王国の諜報人員でした」

王と王女、護衛役の兵が大きく反応を見せる。王と王女は視線がやや強まったただけだが、護衛は敵意にも似た強い視線を送っている。シダルン王国とは、ここカリバレッテに隣接する国で、規模はカリバレッテよりも大きい。隣接するといってもかつての主人国ではなく、別に隣接する国だ。あちらは南西にあり、シダルン王国は南東にある。

「でした、ということは今はそうではないということだな？」

「はい。近年の強引な政策に嫌気が差しまして、逃げ出しました」

「当然追っ手はあったのだろう？　よく生きてここまで来ることができたものだ」

山から出た時に襲われたのが追っ手だ。彼らの失態は無言を通したこと。少しでも事情を漏らしていれば、幸助は少しだけ得た情報に翻弄され、戦う手が鈍った可能性もある。その上でシャイトのみ

に標的を絞れば、抹殺任務は成功していたかもしれない。シャイトは仲間を置いて逃げたことに後ろ暗さを感じて、動きが鈍かったのだから。

「予感のギフト持ちでして、それのおかげで危機を回避し無事ここまで辿り着くことができました」

「なるほど。それで願いとはなんだ？」

「保護してもらいたいのです。暗殺の危険なく、暮らせるようにしてもらえないでしょうか」

「……どうしてうちに保護を求めようと？」

王はすぐに答えず、少し考え込んでから別の質問をする。

「ここを選んだのはいくつか理由があります。」

王族と直接出会え、意思を伝えられる。強力な守護者がいる。そしてシダルンにちょっとしたいをかけられ困っている。最後の問題に少しばかり手をかける術を持っている。

これらの理由で、ここカリバレッテを選びました」

王族ではなく、力の強い貴族でもいいのではなかったのかというと、そうでもない。

そういった貴族だと使い捨てられる可能性があった。王族でもありえるのだが、頭を悩ませている当人に直接顔を合わせることで、少しでも自身の有用性をアピールすれば、使い捨ての可能性は下げられると考えたのだった。

「ちよっかいをどうにかできると？」

「いえ、私の持っているものを使いどうにかするのはあなた方です」
「持っているものはなにか聞いてもいいかね？」

「情報です。シダルンの諜報組織で私が手に入れられる情報を持っ

てきました」

「ふむ……内容にもよるが確かに役立つかもしれぬな。
最後に一ついいかね？」

「はい、なんなりと」

王は眼光を鋭く問う。シャイトは全身に重りを乗せられたようなプレッシャーを感じた。

外見は凡庸でもさすがは一国を背負って立つ人物ということか。

「君がシダルンのスパイではないかと疑っているのだが、それを否定できるか？」

王としてシャイトの話を全て信じ受け入れることはできない。

自分の国は弱小国と知っている。だから小さな失態でも国存亡の危機になりかねないということも理解しているのだ。

「違いますとは言いますが、それを証明することは」

そう言って首を振るシャイトに王は頷いた。

「であろうな。持っている情報が偽物という可能性もあるわけだしな。翻弄されているように振り回され、隙を突かれる可能性もある」
「信じてもらうためには、この国の為になり、あちらの不利益になることをすればいいのでしょうか？」

王の考えを先読みしてシャイトは聞く。

「それ以前だな。まずはこちらで話し合い、その結果僅かたりとも信じられると思った時、その依頼をするだろう」

「それまで私はどうなるでしょうか？」

「拘束させてもらう。牢獄に入れるとかではなく、監視つきで城内で寝起きしてもらうことになるだろう。もちろん武装はなしだ」

これはシャイトの最悪の予想よりいいものだ。牢獄へと入れられる可能性や拷問もありえると考えていた。

念のため、それらを防ぐ術として薬水を探ってくるという手柄を立てはしたのだが。そのことに絶対の信頼はしておらず、保険の一つとして考えていた。

シャイトへの対処が和らいだのは、その保険が功を奏していたのだから、やっておいて損はなかったということなのだろう。まあ、王族に会うために、やらねばならぬことであっただが。

「一つよろしいでしょうか」

「ほかに言いたいことがあるのか？」

「私と共に薬水を探ってきたコースケは、私とは無関係の冒険者なので拘束や報酬なしということは止めてもらいたいのですが」

「それならば問題はない。コースケとやらについては手出ししにくいのだ」

「手出ししにくい？」

「どうということだと、シャイトは疑問を抱く。」

「それについては私からお話しましょう」

沈黙を保っていた王女が口を開く。シャイトの視線が自身に向いたことを確認し、王女は続きを話し出す。

「驚かれるかもしれませんが、今日薬水を持ってくる者がいることは知っていました。」

山を監視しているわけではありませんよ。

実は昨日セミンルーズ様からお告げがあったのです」

「セミンルーズというと確か音楽を司る神でしたか？」

「そうです」

音楽の神からのお告げでどうして自分たちの来訪がわかるのだろうと、シャイトは再び疑問を抱く。

「お告げの内容は『薬水を持ってくる二人のうちコースケという者は、お前の知らない歌を多く知っている。その者を招き、歌を聴くといい。お前の芸風が広がることだろう』というものでした」

「コースケが神から指名、ですか。それはまた」

驚きから乾いた笑いが出そうになり止めた。

これで何度目か幸助に驚かされたのは、とシャイトは内心呟く。

シャイトは不意に悟る。自分が謁見室に入ってきた時、お告げでは二人来るはずだったのに一人で来た俺に王女は首を傾げたのだと。

「コースケの安全が保証されるのなら、もう言うことはありません」

「ではちよつとした仕事を頼むとしようか。」

なに簡単なことだ。監視と一緒に宿に戻り、コースケ殿を城まで案内してくれ。荷物を取りに行くついでだ」

それにシャイトは異論なく承諾し、兵の一人と城を出る。

おそらく宿には幸助はいないだろうと考えつつ、シャイトは宿に戻る。だが予想に反して幸助は宿にいた。

「あ、おかえり。その人は知り合い？」

手に持っている本を置いて、シャイトたちの方を見る。

シャイトの知るかぎり幸助は本を持っていなかった。この街で買

ったのだろう。お金は魔物を殺して手に入れたものを売って得ていた。

「ただいま。コースケ、出かけるんじゃないかったのか？」

「でかけたよ。さすがに今日一日で全部を回ってはこない。今日は近くを見てきただけ」

「そうか」

「んで、同じ質問するんだけど、その人は？」

「もう一度城に行くことになってな。それ関係で同行してるんだ」

「ふーん。帰ってくるの遅くなる？　なるなら先に夕飯食べてるけど」

「夕飯は城で食べることになりそうだ。おそらくコースケもな」

最後に付け足された言葉に幸助はきよとした顔になっている。

「俺も？」

「ああ、王族から直々に呼び出し受けてるぞ」

「なんで？　別にいいことも悪いこともしてないよ？　呼び出されるわけないと思うんだけど。」

薬水回収の件で？」

コースケには思い当たることがそれしかない。

「いや、王女が昨日セミnlルーズからお告げを受けたらしくてな。

そのお告げの中にコースケの名前があったんだと」

「セミnlルーズ……音楽の司る女神様？　ますますわけがわからな
いんだけど」

「王女の知らない歌を、コースケが知っているから聞かせてもらえ
と言われたってさ」

「あー、なるほど」

ようやく幸助は納得できた。幸助の知る歌は地球産の歌だ。自分だけが知っているのは当然で、聞かせたいのなら自分を呼ぶしかない。

竜殺しとばれたわけではないし、歌を歌うだけなら行ってもいいだろうと判断する。ここで断った方が怪しまれる。歌い手として呼ばれたのならば、その役目だけ全うしていればいいのだ。

コースケは貴重品をリュックから出して、出かける準備を整える。その横でシャイトは解いた荷物をまとめなおし持つ。

「全部持っていくんだ」

「必要なんだ。ちよつと城に泊り込むことになってな」

「城で過ごせるってのはすごいね。でもせっかく払った宿代が無駄に」

「まあ、仕方ないさ。準備終わったな？ 行こう」

兵に連れられていることで住民の注目を集めつつ、幸助たちは城へとやってきた。

三人は城入り口で立ち止まる。

「俺たちはここから別行動だ。コースケには案内役が来るはずだから少し待ってるといい。だろう？」

シャイトが兵に問いかけると、兵は頷きを返す。

「じゃあな」

「またねー……って何日くらいかかるんだ？」

「んーわからん」

王たちの話し合い次第だ。シャイトにはそれがどれくらいかかる

のかさっぱりだ。下手すると二度と会えなくなることもある。その被害が幸助にまで及ばないことを祈っていた。

そんな祈りのことは露知らず、幸助は離れていくシャイトの背をぼーっと見送っていた。

待つこと十五分弱、壁に寄りかかって周囲を見ていた幸助にメイドが話しかけてきた。

「ワタセ様でしょうか？」

「あ、はい。案内役ですか？」

「はい、その通りです。着いてきてもらえますか、王女様がお待ちです」

メイドに先導され城内部を進む。この城はそれほど大きくはなく、迷うということはない。王女が待っているらしい部屋に着くまでに寄り道も混ぜて四回ほど曲がっただけで、一人で帰れと言われれば道を間違えることなく城から出ることができる。

先導していたメイドが止まる。幸助は到着したのかと思っていたが、メイドの言葉で違うとわかる。

「ここで身体検査を受けてもらいます。中に人がいますので、その人の指示に従ってください」

「身体検査？」

「はい。危険物を持ち込んでないかという検査です」

「ああ、そういうこと」

健康診断のようなものをするのかと思ったのだ。

中には男の使用者がいて、ポケットの中の物を出すようになどといった指示をしてくる。

今幸助は危険物など持っていないので、すぐに検査は終わった。幸助が隠しておくような武器など、投げナイフくらいだ。それも今

は荷物と一緒に海の上だ。

部屋から出て、再びメイドの案内で、今度こそ目的の部屋に到着した。

ここで待つように言われ、出されたお茶を飲んでいると十分もせずに王女がやってきた。

初めて会う王族にちょっとした期待があつた幸助だが、特別な感じがしないことに肩透かしを感じていた。

「お待たせしました」

「そんなには待ってないから。いや待ってませんので」

思わず普通に返し、言い直す。王女は気にするそぶりを見せず、幸助の前の椅子に座る。

「まずは自己紹介から。」

私はカリバレッテ王女フルール・ロスマリヌス・カリバレッテといます」

「私は渡瀬幸助、こちら風に言うとかウスケ・ワタセになります」

「コウスケですか？ セミンルーズ様からはコウスケとお聞きしていたのですが」

「どちらでもいいと思います。発音を伸ばしているかないかの違いですから」

「ではセミンルーズ様からお聞きしたようにコウスケさんと。」

本題に入りましょう。お呼びした理由は知っていますか？」

「はい。歌を歌えばいいんですよね？」

「ええ。十分なお礼はしますのでお願いします。」

あ、その前に薬水のお礼をしましょう。こちらをどうぞ。金貨三枚が入っています。

私のために危険な山に入つての薬水回収ありがとうございました」

札と共に差し出された小袋をポケットにしまう。中身の確認はしなかった。王族にとって金貨銀貨ははした金だろうから、ケチることなどないだろうと思ったのだ。

これで帰るに必要なお金は手に入った。金貨三枚もあれば多少の贅沢しても帰り着くことができる。

「お金が必要だったんで、こちらこそ助かりました。

それで歌なんですが、ここで歌うんですか？」

「いえさすがにここでは、専用の部屋がありますからそこで歌ってもらうことになってます」

そこへ行きましようと言ってフルールは立ち上がる。そのフルールを守るように護衛も動く。

三人の護衛に守られることを当たり前のこととして受け入れている様子を見て、やはりお姫様なんだなと思いつつフルールの後ろをついていく。

階段を上がり、少し進んだところにある部屋に入る。ここは様々な楽器が置かれた広めの部屋だ。窓は部屋の南壁の上部にだけあり、今は閉まっている。扉を閉めると外から切り離されたように、静かで押し込められたような窮屈感を少し感じる。

「ここは音が漏れない造りになっているんですよ。ここならどれだけ大声で歌っても大丈夫です」

「普段フルール様はここで練習をなさってるんですか？」

「はい。でも歌声を聴きたいから、ここじゃない部屋で歌えと言われることもありますね」

作業が止まる人が続出してそうだなと、幸助は考えた。

「早速お願いします」

「んー……」

歌えとだけ言われても少し迷うものがある。学校で習ったもの、テレビやCDで聴いたもの、色々あるのだ。改めて思い出してみると本当にたくさんさんの歌を覚えていたものと、音楽に溢れていた世界に幸助は感心した。

なにを歌おうかと考えて決まることがなかったので、リクエストを取ることにした。

「どのような感じの歌を聴きたいですか？」

「そうですね……とりあえずは落ち着いた感じのものを」

そのリクエストに幸助は歌う方向性を決め、三つほど選び出した。

「歌姫と呼ばれるお方にお聞かせできるほどのものではありませんが、始めたいと思います」

すうつと息を吸い込み、歌い始める。

その歌は確かにフルールの知らないものだ。ところどころわからない言葉があるものの、それについては今はスルーし聞き入る。

そして幸助が歌い終え、余韻もなくなる。

パチパチとフルールの拍手を聞きつつ、幸助は口を開く。

「次はなにか別の感じの歌を歌いますか？　それともまた落ち着いた感じのものを？」

「同じ感じのもので」

「それでは二つほど続けて歌いますがよろしいですか？」

フルールが頷いたのを見て、幸助は再び歌い始める。

二つ目を歌い終わり、別の方向のリクエストを受けそれを歌う。

似た方向性の歌を何度か歌い、別の方向の歌に変える。そういったことを繰り返し、夕食前まで歌い続けた。一時間に十曲近く歌って、合計三十曲以上歌ったことになる。

メイドがそろそろ夕食だと呼びに来なければ、もっと歌っていただろう。

歌い終わった頃には幸助は、フルールからは全く知らない歌ばかり聴けた感動を向けられ、護衛たちからはぶっとおしで歌い続けたことへの賞賛を向けられていた。

「セミンルーズ様の言ったとおり知らない歌ばかりでした！世の中にはまだまだたくさんさんの歌があるんですね」

フルールはとても嬉しそうに笑顔を浮かべている。

「喜んでいただけでよかったです」

「ほかにも色々知っているのですか？」

「そうですね。歌えと言われれば、まだまだ歌い続けることはできません」

「よければ明日も来て、歌ってもらえないでしょうか？」

断る理由もない幸助は頷く。

「かまいませんが、いつごろ城にくれば？」

「朝は仕事がありますので、昼過ぎにでも。門番には話しておきますので、名前を言ってもらえれば案内役を呼びに行ってくれるでしょう」

「わかりました」

「よろしければ夕食を準備させましょうか？一緒に食べることはできませんので、始めに行った部屋で一人で食事することになります」

この提案に幸助はどうしようかと悩むが、一食分浮くことと城の料理に興味があったので申し出を受けた。

夕食を楽しんでくださいとフルールは言い去っていく。幸助はメイドに先導され、客室に戻る。

三十分ほど待ったところで、料理が運ばれてくる。料理は海の幸で構成されてた。ふんわりと磯の香りが漂ってきそうで、ほどよくお腹のすいた幸助の食欲を刺激している。

メニューはアサリのパスタ、タイラギのミニグラタン、鯛の塩釜焼き、蟹と卵のスープ、焼きたてパン、果物。それに喉にいいドリンクだ。ドリンクには採ってきた薬水はさすがに使われていないが、それでも研究されたものでフルールも常飲している。

いただきますと手を合わせ、スープを飲む。濃厚な蟹の出汁が出ているスープが口中に広がり、食欲を後押しする。手と口を休めずによく味わい食べ続け、三十分後出されたものを残さず食べ終わった。

「食べた食べた」

「お下げてよろしいでしょうか？」

「どうぞ」

給仕のために静かに立っていた使用人に、ごうそうさまでしたと告げ立ち上がる。

使用人にこのまま帰っていいのかと問いかける。入り口まで送り届けるので少し待つようにと、言われた幸助は片付けが終わるまで椅子に座りなおして待つことにした。

その部屋の近くをシャイトが通りかかる。すぐ近くに監視役もいる。シャイトの気配に気づいた幸助は部屋の扉を開けて確認する。

「コースケ？」

「やっぱりシャイトか」

「なにしてるんだ、こんなところで」

「夕食をご馳走になったんだ。すごく美味かったよ」

「俺はこれからなんだ。まあ俺のは普通なんだろうけどな」

「歌った報酬も兼ねてるんだろうからねえ」

「だろうな。じゃあ俺は行くな」

軽く手を振り去っていく。わりと自由に散歩しているようで、王の言った通り理不尽な拘束はされていないようだ。

片付けはすぐに終わり、幸助は案内され城から出る。そのまま真っ直ぐ宿へと帰らず、遠回りして街の様子を眺めつつ賑やかな喧騒に包まれながら帰路に着いた。

幸助の城通いは、フルールに乞われて二日三日四日と続いた。歌ったものは幅広く、邦楽と少しの洋楽で、童謡アニソン演歌などなど。

最近の生活スタイルは午前中のうちに用事をすませ、昼からは城で歌を歌い、城の食堂で無料で夕食を食べて宿に帰るという繰り返しになっている。

午前中の内に観光目的で街を歩き回り、ついでに帰りの船などの情報を集めた。

集めた情報によるとカリバレッテの港からセブシック大陸へ向かう船はないことがわかった。これは時期が悪いせいだ。今の時期、エゼンビア大陸とセブシック大陸直通の航路は嵐が頻発し海が荒れているので、出航は避けるのだという。

なのですぐに帰るつもりならば、カルホード大陸を経由する必要がある。

そろそろ帰ろうと思いながら幸助は今日も城へとやってきた。

「こんにちは」

「やあ、今日も姫様のお相手か。失礼のないようにな」

何度も通えば、門番の数人くらいとは顔見知りになる。

案内役が来るまで話し相手になってもらい、時間を潰す。そしていつも案内をしているメイドがやってきて、城へと入る。

音楽室に直行し、見張りの兵と雑談しながら待っているとフルールがやってくる。

「こんにちは、フルール様」

「はい、こんにちは」

幸助はフルールともある程度は親しくなり、名前で呼べるようになっていた。これはフルールが親しみやすいおかげでもあった。

軽く雑談をして、リクエストを聞き歌うことを始める。

初日と二日目は幸助が歌うだけだった。しかし三日目からは、フルールが気に入った歌を歌いたがり、一緒に歌うといったこともしだした。

歌い手として超一流ということもあり、幸助が歌うよりもずっと聞き応えのあるものだった。

そのついでにフルールから歌い方の指導を受け、幸助の歌う技術は上昇していった。この時に『歌姫の弟子』という称号が手に入っていた。

竜殺しの称号のおかげで上達は早かったのだが、技術が上がっても歌姫と呼ばれるフルールとの差は明確的なまでに大きかった。それは技術的経験的なものだけではなく、歌に思いを込めるなどの表現力の差だった。技術ではなく資質や天賦に属するもので、そういったものはいくら竜殺しの称号でもなんともしがたいようだった。

それでもいづれ一流歌手相当ならば追いつけそうなのが、この称号の恐ろしいところだった。

「今日も楽しい時間でした」

「満足していただけ光栄です。」

フルール様に言わなければならないことがあります」

「なんででしょうか？」

「そろそろ帰ろうと思っていまして、歌の授業はこれにて終了とさせていただきます」

フルールの顔に残念そうな表情が浮かぶも、すぐに消えた。

「わかりました。今までありがとうございました。」

本当はもっと歌を教えてもらいたかったのですが、コースケさんにも予定がありますから仕方ないですね」

「もう少しくらいはいてもよかったです、日に日に視線が強くなっていくんですね」

「あら、気づいていたんですね」

「まあ、感覚は鋭い方なんです」

「お父様が抑えてはいるんですけど、神様からの指名を受けた人物に皆さん好奇心があるようで」

フルールは好奇心というが、そんな生易しいものではなかった。

どうにかして近づき甘い蜜を吸えないかという、下心満載の視線だ。王が抑えていなければ、官僚に囲まれ動けなかったかもしれない。

彼らは青海竜に近づき失敗したという前例を思い出すべきだろう。

「歌をたくさん知ってるってだけでなのに、どんな利益を見出したのかねえ」

「歌をたくさん知ってるだけというわけでもないのでは？ シャイトさんから入ってきた情報によるとすごく強いらしいと聞いてますよ」

「たしかにそれなりの実力は持ってます。でも世界一というわけでもないですから」

それとなく特別でもないと言魔化す。

「山に行って帰ってくる人は他にもいますから、そうなのでしょ
ね。」

話は変わりますが、出立はいつなのですか？」

「明日にでも出ようかと思っています」

「こちらに来た時はまた顔を見せてくださいね。また歌を教えてください」

「確約はできませんが、来た時は必ず」

少なくとも一年二年はこちらに来る予定はないだろう。フルールもそれはわかってる。そうだったらいなと思っただけだ。初めてできた弟子なので、これっきりの少し寂しいという思いもある。

フルールは胸につけていた宝石のブローチを外し、幸助の前に置く。

「これは歌の授業の報酬です。金貨三枚相当の価値があるそうですぞ」

山登りと同等の報酬だ。それだけフルールにとって価値のある日々だったのだろう。

「ありがたく頂戴いたします」

宝石部分に指紋をつけないように持ち、間近に見る。

幸助は正直困った。王族から直接貰ったものを売り払っていいも

のかと。出た結論は、本当にお金に困った時に考えようというものだった。今は潤沢な資金があるので、売らなくともなんとかなるのだから。

「じつと見てどうしたのですか？」

「いえ、保管をどうしようかなと。布で包んでおけば大丈夫でしようか？」

「そういったことはメイドに任せてあるので、おそらくしか言えません」

「そりゃそうですよね」

幸助はとりあえずハンカチに包んで、ポケットにしまった。そして椅子から立つ。

「そろそろ帰ります」

「そうですか……今日くらいは見送りたいのですけど」

そう言っつてフルールは護衛を見るが、護衛たちは首を横に振る。

「ごめんなさい」

「気にしないでいいですよ。」

あ、そうだ。シャイトのいるところに行ってもいいですか？ シャイトにも挨拶していききたいんで

「大丈夫？」

フルールは再び護衛を見て問う。それに対して少し考えた護衛たちは互いに視線を交わし、一人が口を開く。

「我らの監視下でもよいのならば」

「ということですが。どうします？」

「それでいいんで、お願いします」

口を開いた護衛が頷いた。

フルールに別れを告げた幸助は、護衛の先導でシャイトが滞在している部屋に向かう。

部屋の前には兵が二人立っており、やってきた幸助たちに何用が問う。それに護衛が目的を告げ、部屋に入れてもらう。

部屋の中ではシャイトが鞆を触っていて、扉が開いたことで作業の手を止めた。

「誰かと思えば」

「やあ、シャイト。今日は別れの挨拶に来たよ」

「別れ？ ああ、帰るのか」

「うん。港の位置とかも調べたし、旅の予定も立てたから」

「そうか、帰るのか……」

少し考え込むシャイトに幸助は首を傾げる。

考えをまとめたシャイトはまっすぐ幸助を見て、口を開いた。

「ちょっと頼み事をしたいんだけど、いいか？」

「内容による」

「そりゃそうだな。」

実はな？ 俺はシダルン王国からの脱走兵なんだ。んでかつての仲間から追われている」

「……へ？」

いきなりの発言に幸助は理解が追いついていない。

「山で襲われたろ？ あれは物取りじゃなくて俺を追ってきた元仲間だ」

「……そうなるにあの時一緒にいて追い払った俺も要注意人物になつてたり？」

「可能性はなくはないと言っておこう」

「ちょっ!？」

「まあシダルン王国に行かなけりゃ問題はないさ」

「ほんとに？」

「ああ。それでどうして俺がここに來たのかというと保護を求めてだ」

シダルン王国の強引さなどを付け加え、詳しい理由を話していく。嘘を混ぜることなくぱっと話していく。話さなくともいいだろうと思ったところは略したので、そう長くは話していない。

「話は最初に戻る。頼みたい事があると言ったろう？」

その頼みというのは王から出された課題の手伝いを少ししてほしいんだ」

「手伝うかは置いといて、シャイトの課題に俺が手を出していいのか？」

「特に制限は出されてないな。この国の不利益になるようなことをしたり、捕まった時にこの国の名前を出さなければ、やばめの手段も許されるだろうさ」

「やばめの手段をやる場合は俺は手を貸さないぞ？ 巻き込まれたくない」

「大丈夫だと思うがな。やってもらいたいことは夜闇に紛れて、空から敷地内に下ろしてほしただけだ。そのままコースケは離脱して港を目指せばいい。」

飛翔の魔法を使えると言ってたろう？ それを思い出して頼めなかって思ってたんだ。

今日会いに來なかったら、頼むために明日会いに行くつもりだった」

「タイミング良かったってことかな、シャイトにとって」
「それでどうだ？」

犯罪には手を貸したくないというのが幸助の正直な思いだ。しかし国からの命令で動くシャイトに、少しくらいは手を貸してやりたいと思う。幸助にとってはシャイトは世話になったいい人という認識だ。そんな人が落ち着いて暮らせるようになるなら、魔法の一つは使ってもいいかなと思いついた。

「俺の情報をこれ以上出さないって約束できるなら。王様たちにも話しただろ？」

「王族に聞かれたら話さざるを得ないだろう。たいしたことは話してないさ、それほどお前のこと知らないし。」

それはそれとして約束か。ん、約束しよう。二度と情報は漏らさない」

課題が上手くいけば荒事には関わることはなくなるのだ。幸助の情報が役立つことはかぎりなくなるだろうと思って確約した。

「どこかの屋根に下ろすだけだね？」

「ああ」

「わかった。」

「そういやどこに行つて魔法使えば？」

「シダルン国の都市ザカメドン」

行く場所を聞いた幸助はじと目でシャイトを見る。

「シダルンに行ったらやばいってさっき」

「目立つような行動する気はないさ、俺も見つかりたくはない。それに都の外から魔法で侵入するつもりだからな気づかれないはず」

「本当に大丈夫なのか？」

「そこに行くまで街をできるだけ避けるから野宿が多くなる程度だ。関所とかも避けることになるな」

「念を入れるならそれくらいは当然なんだろうね」

ザカメドンという場所だなにをするつもりなのか、少し好奇心が湧くが巻き込まれる可能性も考え、聞かずにいた。

聞けばシャイトは答えるつもりだ。けれども聞いてくる様子がないので、話すことはなかった。

出発は明日ということになって、幸助のいる宿にシャイトが迎えに行くと決め、幸助は部屋を出た。

護衛の監視はここで終わり、幸助は食堂でただ飯を食べてから宿へと戻った。部屋を片付け、荷物まとめいっつでも出られるようにしてから寝る。

寝る間に、帰るために調べた港の位置とか無駄になったなど思い浮かびつつ、意識は沈んでいった。

朝になり、朝食を食べている時、シャイトはやってきた。

宿の主人はようやく戻ってきたのかと思っていたが、泊まることなく出かけていったシャイトになんのために宿をとったのかと首を傾げていた。

二人は国境までは馬車で移動し、国境を越えてから歩きで移動している。事前に街には寄らない方向で行くと言っているため、食料は多目に持っている。そのため荷物が重くなっているが、幸助にとっては気にならない重さだった。シャイトは少し辛そうな感じだが、進んでいくうちに荷物が減って軽くなっていくので、すぐに辛さはなくなった。

途中で獣を狩り野生の野菜を採り、食料をもたせ一度も村や町に寄ることなく、目的地へと到着する。ここに来るまでに十二日ほどかかっている。街道を避けるなど慎重に進んだため進行速度が遅くなっていた。

「あれが目的地？」

林の中から見える街影を幸助は指差す。

「そうだ。あそこを治めている貴族にちよいと用事があるのさ」

「とりあえず夜まで待機か。詳しい場所は知ってるんだよね？」

「知っている。だから指示通りに飛んでくれればいい」

ならば問題ないだろうと幸助はその場に座り込んで休む。

シャイトは侵入のための準備を始める。鞆から荷物を取り出し、必要なものそうじゃないものとわけていく。必要なものをポーチに入れ、必要ないものをリュックに入れて足元に置く。街に行く時に木の上に置くつもりだ。

時々、街から出入りする人が林の近くを通る。林に人がいるとは思っていないのか、気づかずに通り過ぎていく。

護衛に冒険者らしき人もいたが、林を軽く見渡しただけで気にするそぶりは見せなかった。気配を抑えた二人に気づかなかったようだ。

そして夜がきた。

「そろそろ出発？」

「準備は終えた。いつでもいける」

幸助は魔法を使い浮かぶ。シャイトの背後から脇下に腕を通し持ち上げ、空高く飛ぶ。眼下に街全体が一望できるくらい上がってから、ゆっくりと移動を始める。

雨ならば侵入するのにベストコンディションだったのだろうが、あいにくと少し雲があるだけで晴れている。風もあるが、飛行に問題ない微風だ。

「こっから入る家見える？」

「さすがに高すぎて難しいな、もう少し高度を下げてくれ」

「了解」

シャイトの指示に従い高度を下げていき、ストップと声をかけられ止まる。

「あれだな。まずは北に進んでくれ」

「北ね」

「ストップ。次は東だ」

「次は東っと」

「ストップ。このまま高度を下げてくれ。それで目標の屋根に下ることができる」

「最後に高度下げる」

ユーフォーキャッチャーみたいだなと思いつつ、高度を下げていく。

警戒しているシャイトはもちろん幸助も視線を巡らせ、ばれていないか探っていく。

シャイトを屋根に下ろし、幸助はその場から離れていく。ある程度離れてから振り返ると、シャイトが窓を開けて屋敷に入るところが見えた。

少し迷った様子を見せた幸助は屋敷近くの高い建物の屋根に下り、屋敷の様子を伺い始めた。

このままわかれてその後がわからないというのも気になるので、シャイトが街を出るまで見ていこうと思ったのだ。

十分二十分と時間が過ぎていく。屋敷に変化は見られない。シャイトは上手く動いているのだろう。

さらに時間は流れて、一時間後。一階の窓が開き、人影が出てく

る。シャイトなのだろうと思った幸助は首を傾げる。出てきた人影は二つあったのだ。

「シャイトなのか？」

暗がりにいるため判断しづらく、よく目を凝らして見てみる。二人の背格好や動きを観察し、片方はシャイトだと判明した。

どういふことなのかと、シャイトたちを追いつく空を飛ぶ。来た時と同じく高度を上げての移動なので、シャイトは幸助に気づいた様子を見せない。

シャイトたちは影から影に移動し、目立つことは避けている。

「あれは……」

その二人の周囲に似たように移動する者たちがいた。数は七人。

「尾行？」

街を出ることに集中しているのか、シャイトたちは気づいてはいないようだ。もしくは気づいているけれども相手に悟らせないために、そういった様子を見せないのか。

シャイトたちは建物の屋根に登り、そこから塀へと飛び移る。さらに塀のでっぱりに足をかけて街外へと下りていく。

尾行していた者たちは二人が塀に登ろうとしているのを確認してすぐに近くの門へと走る。そこにいた門番に話しかけ、門番専用の出入り口を通して街の外へと出た。

シャイトたちと尾行は街と林の中間点で合流する。

シャイトたちは止まり、そんな彼らを囲むように尾行たちは動く。少しの間、両者は話し合うようなそぶりを見せていたが、話し合いは失敗したのか武器を抜き、戦闘に入った。

「加勢はどうしよう」

明らかに劣勢なシャイトたち。知り合いが死ぬかもしれないのを見て見ぬふりをするのは忍びなく、悩んだのは少しだけだった。けれども指名手配されるのも避けたかった。

なので幸助はこっそりと集団からほどに離れた位置に着地して、集団に向かって眠りの魔法を飛ばす。正体を隠したいのならば、全員の意識を狩ればよしと思ったのだ。その後シャイトたちを移動させればいい。これならば正体を明かさずに加勢できる。

空から見ていて、この七人のほかに尾行していた者はいなかったとわかっているのも、警戒するのはこの七人だけでいい。

使った魔法は念を入れて二種類。眠りを誘発するものと、眠らせる魔法だ。眠らせる魔法を確実に効かせるための二段構えだった。

幸助が魔法を使ってすぐに全員が倒れる。倒れた衝撃で起きる可能性があるかもと少し心配していたが、誰も起きることはなかった。

「さて運ぶか」

シャイトを右肩に担ぎ、もう一人も左肩に担いだ時、体の柔らかさと胸の膨らみに気づいた。

「女？」

意識なくうなだれている横顔を見ると、間違いなく女だった。

「セクハラになるのかこれ？」

でもほかにどうやって運べばいいのかわからないし、少しの間我慢してもらうしか」

役得だと一回頷いて、林へと走り出す。

そこでシャイトの荷物を回収し、飛翔魔法を使いカリバレット方面へと飛ぶ。一時間ほど飛び続け、眼下に見える森へと下りた。

二人を下ろした幸助はシャイトの頬を叩いて起こす。

「痛いんだが」

「おはよ。といっても真夜中だけど」

「……なんだよ交代の時間か？」

「寝ぼけてる？」

「寝ぼけ……あ。なんで幸助がここにいるんだ？ まさか一緒に捕まったとか？」

「現状把握できてないのは仕方ないから、説明するよ？」

把握できている方がすごいのだろう。

「シャイトと分かれた後、その後の経緯ってやつが気になったんで屋敷がよく見える位置に陣取って見てた。

そしたらシャイトが誰かと一緒に出てきた。二人の頭上を飛んで尾行してた。その位置からだと言シャイトを追ってる人たちがよく見えてた。

街外に出たら追っ手に囲まれたから助けようと思って、全員眠らせてここまで二人を運んだ。

簡単にまとめるとこんな感じ」

「助けてくれてありがとう。ムロンも一緒に運んでくれたのもありがとう」

まだ眠っている女を視界に入れたシャイトは、ほっと安堵の溜息を吐いた。

「どういたしまして」

「だがシダルの奴らにお前のことばれたんじゃ？」

「ばれないために全員眠らせたんだよ。眠ってる間のことなんかわかりようがないだろう？ 周囲に見張りがいないか探ってから行動したし、俺のことはばれてないよ」

「お前さんがそういうのなら大丈夫なんだろうな」

一緒に行動して、実力は自身以上とわかっているので幸助の言葉を信用できた。

「ここはどこなんだ？」

「戦ってた場所から、カリバレッテへと一時間ほど走ったところにある森の中」

「……あーそこか？」

シャイトは頭の中で地図を広げ、現在地を予測した。

「結局、任務は成功した？」

「ほぼ成功だな。あとは無事カリバレッテ王の下へと届けるだけだ」

シャイトがしたことは、フルールを手入れようとしている者たちの中心人物の家に忍び込み、情報を得てくることだ。その情報の中に弱みがあればなお良い。だがそこまで上手く事が運ぶとはカリバレッテ側も思っておらず、情報収集のみを命じた。

これはシャイトが属していた組織から持ち出した情報のおかげで行われた任務だ。カリバレッテ側は、シダルン側の誰が主導してフルールを手に入れようとしているのかさえわかっていなかったのだ。幸助が詳しいことを聞かなかったこの任務は、のちのちフルール婚姻交渉にカリバレッテ側へという影響を与えることになる。これによりフルールの悩みは解消される。

青海竜の目的は果たされたといっていいたいだろう。幸助にその手助

けをしたという自覚は皆無なのだが。

「それを聞いて安心だ。じゃあ俺は港に行くとするよ」

「ほんとに世話になったな。生活が落ち着いたら手紙でも出すよ」

「俺の住んでるとこ、街の外にあって届かないと思うんだけど」

「家の近くのギルドに届くようにしとく。あとはギルド職員から受け取ってくれ」

「わかった。またいつか。そこの寝たふりしてる人も」

そう言って幸助は空を飛び、カリバレット方面へと去る。

幸助の姿が見えなくなっすぐに、シャイトにムロンと呼ばれた女が立ち上がる。ムロンは二人が話している途中目を覚ましていたのだが、幸助を警戒し寝たふりを続けていたのだった。

立ち上がり土などを払ってからムロンはシャイトに話しかける。

聞くことは現状や幸助のこと。それにシャイトは答えて、十五分後には移動を開始する。

ムロンを連れ帰ったことでシャイトにもう一騒動起こるのだが、ここから先は完全に幸助とは無関係な二人だけの物語となる。そのことを幸助が知るのはかなり先のことだ。その時にはシャイトとムロンは結婚していたりする。

肉を求めて

シャイトと別れた二日後に幸助はカリバレッテの港に来ていた。乗ろうとしていた船はすでに出港していたが、別の船が四日後に出るということなのでそれに乗ることにし、余った時間で調べていた観光名所や美味しいものを食べるため出かけていった。歩きよりもはるかに速く飛べるため色々なところへと出かけることができ、満足できた観光旅行となった。

予定通りに船に乗った幸助はカルホード大陸南西の港へと向かう。今回の船旅ではハプニングは皆無で、無事に到着できた。

そこから今度はセブシック行きの船を探し始める。そして無事見つかりはしたのだが、すぐに出港とはいかなかった。

「出発は十日後かあ」

昨日一昨日とセブシック行きの船はすでに出ていて、しばらく出ないということだったのだ。ぽっかりと空いた時間に幸助は困る。十日は長かった。

「また観光でもして待つかな」

財布の中身を確認し、贅沢しなければ持つだろうと現状を確認した幸助は、港町周辺の情報を集めるためのんびりと動き出した。

船生活だと海産物が多かったので肉が食べたい、特産の肉とかあるといいなと思いつつ露店の主人に話しかける。

「美味しい肉かい？ それならある。セブラ森鳥ってのが美味しいね。特に丸焼きが最高だ。」

皮はパリっと、胸肉は噛まずとも崩れるほどに柔らかく、腿肉は

ブリツと柔らかい。どちらの肉も旨みをたっぷり含んでいる。

ただの丸焼きはこの街でも食べられるけど、本場をどうしても食べたいのならこの街の北にある森に行くといい。勧めはしないが。そこには獣人の村がある。その村がセブラ森鳥丸焼きの発祥地だ。あそこのは丸焼きの中にハーブや山菜を詰め込んだ後、秘伝のタレに漬けて焼く。その調理法がさらに肉の旨みを引き立てるんだ。一度だけ食べたことがあるが、絶品だったよ」

美味さを思い出したのか、どこかうっとりとした表情になっている。

「そんなに美味しいなら真似してるんじゃない？」

「してるんだが、どうしてもあの味には届かない。取れたてを調理してるからなのかなんてコックたちは首を捻ってるよ。」

だからこの街の料理屋では真似せずに、素材の味を生かすといったこの街独自の方向性を模索している」

「じゃあまずはそっちを食べようかな」

「それが無理なんだ」

「どうしてさ」

「予定日を一週間ほど過ぎても鳥肉が入ってこないんだ。だからどこの店でも出せない」

「狩りに行けばいいだけじゃ？」

「森は獣人の住処だしな」

「そこに住む獣人は危険ってこと？」

だとしたら行くのは止めよう考える。

「いや危険だったら持ってくる鳥を買い取りはしないな」

「じゃあなんで行かないの？」

「なんでって言うってもな」

言いづらそうな様子を見せたあと、主人は続ける。

「やっぱり獣人だからだな」

「それが理由だって感じて言われてもよくわからないんだけど」

「そうなのか？ この街の住人にはこれで通じると思うんだが」

これは人間が持つ世界共通の偏見みたいなので、理解できない
幸助の方がずれている。

獣人は獣から進化した種族だ。なので肉食獣から進化した者もいて、その肉食獣の中には人を食う者もいる。進化した後も人を食うことはあるが、積極的に襲ったりはしない。けれどもそういった種がいると考えてしまうせいで、人を食わない獣人に対しても敬遠の情を持ってしまふのだ。

そういった理由で、この街の住人もすぐ近くにいた獣人に対して積極的に近づくことはしていない。

日本人といえば忍者芸者天ぷら、アメリカ人といえばカウボーイウェスタンハンバーガー、インド人といえばカレーヨガ。こういった思い込みと似たようなもので心から拭い去るのは難しく、森に住む獣人に人食いはないとわかっていても接することに躊躇いを持つてしまふのだ。

一度腹を決めて接してしまえば、危険ではないとわかる。事実、仲良くなった者たちにはいる。

「とにかく食べたければ行くしかないってことでいい？」

「そうだな。止めることはしない。ついでになにがあったのか教えてくれれば助かる」

「ギルドに行けばそういった依頼出てそうだ」

「かもしれないあ」

肉を食べたい幸助は森に行くことに決める。お金の心配はないので、ギルドに行くことはなかった。

主人に情報の礼を言ってその場から離れ、保存食などを少し買い、北の森を目指し街を出た。街で集めた情報で、歩きで一日もかからない距離にあることがわかったので気楽なものだ。

歩みを進めるほどに潮風の匂いがなくなり、草木の匂いが濃くなっていく。そして完全に潮の匂いがなくなった頃、森に到着した。

「森のどこら辺に住んでるのか聞けなかったんだよなあ。
うろついてたら獣人が見つけてくれるかねえ」

街の者たちは森に近づかないので、住处に関して詳しい情報は知らなかったのだ。薪や薬草を拾いに来る者もいるのだが、そういった者たちも森の最外縁部をうろつくだけで、森に足を踏み入れることはない

歩きで村が見つからないのなら空から探すという手段が取れるので、集まらない情報を気にせずやって来たのだった。

足を踏み入れ、あてなく歩く幸助は首を傾げている。

「この森もムバラント山と同じで静かなんだな？」

聞こえてくるのは風で揺れる草や木の葉の音のみなのだ。時々小さく鳥の鳴き声が聞こえてくるくらいだ。

獣人以外に危険な生物がいるとは聞いていない。森の内部の情報が少ないので、信憑性は低いのだが。それでも危険すぎる生物がいれば、街に来る獣人から話くらいは聞いているだろう。

「鳥肉を卸しに行かなかったこととなにか関係あるんだるか」

気配を探りながら歩を進めていると、草木の擦れる以外の音を耳

が捉えた。

何の音だろうかとそちらへと進路を変え、歩いていく。一分ほど歩いた頃だろうか、音の中に悲鳴が混じっていることに気づいたのは。

その声が子供のものだったと気づいた幸助はいつきに速度を上げ、現場へと急ぐ。現場に着くまでに十秒ちよつとだったのだが、その際視界の隅にレモンイエローの物体が見えた。それを気にしている暇はないと即座に意識から切り捨てた。

音の発生源に到着した幸助が見たのは、三メートルほどの翼のない西洋竜に似た何かが、口を大きく開けて子供を襲おうとしている場面だ。

「やらせるか！」

走ってきた勢いそのままに幸助は飛び蹴りを放つ。飛ぶ矢に迫ろうかという勢いで飛んだ幸助は、竜っぽい生物の両鎖骨の真ん中に蹴りを命中させた。蹴りは見事に首元の骨を碎き、一撃で竜っぽい生物は息絶える。

動き出さないことを確認し、幸助は十歳ほどの少年を見る。その少年は赤い目の兎の顔で、一瞬コスプレの一種かと思ったのだが、森に住んでいる獣人の子供だろうと思い直す。

「大丈夫か？」

声をかける幸助に、体を震わせながら無言で頷く。すごく怖かったのだろうと思い、もう大丈夫だという思いを込めて頭を撫でる。柔らかな髪の撫で心地がよかった。

撫でる感触から震えが小さくなっていき、これならば答えてくれるかもしれないと考え、話しかける。

「どこか怪我は？」

「ないよ、大丈夫ぴよ」

「ぴよ？ ああ、そういえば」

ホルンから獣人の子供は独自の語尾で話すと聞いたことを思い出す。語尾からそういったものがなくなれば、成人へと一歩近づいた証なのだという。これがそうかと納得し話を続ける。

「君はこの森に住む獣人の子なんだよね？」

「うん」

「俺は君たちの村に行く途中だったんだ。良ければ案内してもらいたいんだけど、いいかな？」

こくりと頷いた少年は立とうとして、すぐにしりもちをつく。

怖い目に遭って腰が抜けたのだろう。

幸助はしゃがみこんで、少年を抱きかかえた。

「進む方向を指差さしてくれる？」

少年は頷いて、指差した。幸助はそちらに行く前に倒した魔物に近づく。

魔物の姿をよく見て、その特徴から知識からこれはドラゴニスという魔物じゃないかと予測する。

ドラゴニスとは竜もどきとも言われる魔物で、竜に近い姿と名前を持つように魔物の中でも上位に属する強さを持つ魔物だ。中堅どころの冒険者がパーティーを組んで挑んでも勝率は一割を切る。本来ならば幸助も負けはしないが、楽に勝たせてもらえる魔物ではない。今回は当たり所がよかったのだ。

こんなものが近くに住んでいるとなれば、絶対噂の一つもあるはずなのだが、街では噂の影もなかった。

「この森ってこんなのが住んでるの？」

幸助の問いに少年は首を横に振った。

「二十日くらい前から、いろんな魔物が少しずつ森に集まりだした
びよ」

「集まりだしたか。そんなことが定期的にあってる？」

少年は首を横に振る。

「ううん。初めて。皆どうしてかって不思議がってるぴよ」

「そっか。」

「そういやこんな魔物が集まってて危険ってわかってるのに、どう
して村から出たんだ？」

「世話してた鳥のことがどうしても気になって」

「それで君が怪我したら親御さんが悲しむだろう？」

「ごめんなさいぴよ」

「謝るのは俺じゃなくて心配かけた人たちにね」

頷く少年の頭を一撫でして、幸助は動かないドラゴニスの尾を掴んで歩き出す。せっかく倒したのだから、売れる部分は回収しておきたいのだ。ここでの解体作業は血の匂いでほかの魔物を集めかねず、少年を危機にさらしそうなので止める。一度村まで持って行き、そこで解体できるのならして、駄目なら村から離れた場所でやろうと思ったのだ。

「やっぱりすごいんだぴよ」

キラキラとして眼差しで幸助の顔を見上げて、そう言う少年の言

葉に首を捻る。やっぱりという言葉遣いはおかしくないかと思っている。

「やっぱりって？」

「竜を倒したんでしょ？」

「……なんでそれを知ってるのかな？」

幸助は歩みを止めて少年の顔をまじまじと見る。

「僕は称号が見えるぴよ」

「ウィアーレと同じギフトか」

称号を見るというギフトは珍しいギフトではあるが、世界に一つというわけではないのだ。ウィアーレのほかに持つ者がいてもおかしいことではない。

エリスからもそのように聞かされていた。

「俺が竜殺しってことは秘密にしてくれるかな？」

「どうしてぴよ？」

「騒がれたくないんだ。頼むよ」

「よくわからないけど、誰にも言わない」

「ありがとう」

ギフトでばれるのは防ぎようがないなと思いつつ森を歩いていると、目指す先から気配と物音が近づいてきた。

少年がいなくなったことに気づいた村人たちだろうと思いつながら歩く。

「ジェルド！」

近づいてきた者たちの一人が少年を見るなり名前を呼ぶ。近づいてきた男からは薬の匂いが微かに漂っていた。袖や首元には包帯が見え隠れしている。それは男だけではなく、ほかの者たちも同じだった。

ジェルドというのが少年の名前なのだろう。ジェルドを探しに来た者たちは獣人ではなく人間だった。獣人の村に人間も住んでいるのだと思う一方で、幸助は目の前の人間たちに見覚えがあるような気がしていた。

微かな違和感を覚えつつ、ジェルドを地面に下ろす。

「心配したんだぞ！」

「ごめんなさい」

がっしりと肩を掴んで怒鳴る男にジェルドは素直に謝る。

怒っている男のそばではかの男たちもジェルドの無事を喜んでい

「無事だからよかったものの」

「ほんとに怪我なくてよかったよ」

「そっちの兄さんがジェルドを連れてきてくれたのか？　　というかそのドラゴニスどうしたんだ！？」

幸助の背後に転がっているドラゴニスを見て、男たちは驚く。

「ジェルド君を食べようとしてたんで倒した」

「はぁードラゴニスを倒すとは兄さん強いんだなあ」

驚きと呆れと恐れを混ぜた声が漏れる。自分たちでは敵いそうにもない魔物が死んでいるのだ、そういった感情があって当然だろう。

「どうしたんだ？」

ジェルドを叱り終えた男が幸助たちを見る。

「いやドラゴニスを倒したっていうから驚いていたんだ」

「ドラゴニスをか！？　　とうかそんなものまで集まってきたのか！？　　こりゃギルドへの依頼を真剣に考えるべきなのか？　　まあそれは後で話し合えばいいか」

男は視線を幸助に向けて頭を下げる。

「ジェルドを助けてくれてありがとう」

「子供が襲われそうになっているんだ、見過ごせなかっただけ。礼を言われるほどのことじゃない」

おもいっきりその場の感情に従って動いただけなので、本当に礼を言われるほどではないと思っている。

「それでもジェルドが助かったんだ。礼は言わせてくれ……ん？」
「どうしたイーガン？」

幸助の顔を見て、首を傾げたイーガンと呼ばれた男の仲間が問いかける。

「どこかで見たような？」

幸助も持った違和感をイーガンも持つ。

それを受けて幸助は二人がそう思った思いを持ったのだから、どこかで会ったのだろうと考え、思い出そうと記憶を探る。

そして思い出す。それはこの世界に来て三ヶ月も経っていない頃

の記憶だ。

「……記憶違いじゃなければレグルスパロウって言ったはず」

「それは俺たちのパーティー名だが、それを知ってるってことは会ったことあるのか？」

「一度だけ。俺が雑事系依頼受けようとした時、強引に自分たちの依頼を手伝わそうとしたろ。」

ギルド員から警告受けた時だ」

「「「あ！あの時の！？」」「」」

イーガンたちも記憶を辿り、思い至ったらしい。

色々と複雑な思いがあるようで、幸助を見る目に感情の色が混ざり合っている。

だがそれも溜息一つで消えた。覆い隠しただけかもしれないが、それを知るのは当人たちだけだ。

「あの時はすまなかったな」

「謝るんだ」

今度は幸助が驚いた。あの時のことを振り返ってみると、到底謝るような人たちではないと思ったからだ。

「謝って驚くのか……まあ仕方ないといえば仕方ないな。以前の俺たちを知ってれば」

「今にして思えば、冒険者としての評価が低かった理由はよくわかるもんな」

「思い返すのも恥ずかしい」

こうまで変わったのは、ここ数ヶ月でよほどのことがあったのだろう。きっかけでもなければ変わることは難しい。

この変化は良いものではなからうか。幸助はそう思う。

「俺たちのことはいいとして、お前はこんなところに何しに来たん
だ？」

「鳥の丸焼きが美味しいって聞いたから、それを食べるに」

「あれか、たしかに美味しいが……今は食べるのは難しいぞ」

「魔物騒動で？」

「ジェルドに聞いたのか。その通りだ。」

こんなことになった原因を探ることと、村の防衛で余所者に料理
を作る余裕はない」

「だろうね。どうしようか、忙しいだろうし帰った方がいいのかな」

美味しいものを食べられないのは残念だが、迷惑かけるのも悪い。

滞在しても邪魔になるだけだろうと思い、引き返そうかと考える。

それをイーガンが止めた。

「待ってくれ。村の問題解決に手を貸してほしい。この通りだ頼む」

頭を下げたイーガンを見て、ほかの者たちも同じように頭を下げ
た。

「できるなら村の人たちは俺たちの手で守りたい。でもドラゴニス
なんて怪物まで集まってきたんじゃ、俺たちの手に余る。」

恩あるあの人たちを助けたいんだ、頼む！」

言葉には心が籠っていて、本当に村の獣人たちを守りたいのだと
わかる。そのうち土下座しそうなくらい必死な思いが伝わってくる。
イーガンたちが変わったきっかけは獣人たちにあるのかもしれない。
い。なんとなく幸助はそう思った。そしてそれは正解だった。

だが声色の中に悔いるものが混じっていることには気づけはしな

かった。

四人の熱心に押されて、幸助は頷く。竜殺しだと知っているジェルドも頼もしい人が来てくれると嬉しそうだ。

「いいよ。手伝う」

「そうか！　ありがとう！」

村はこっちだ着いてきてくれ！」

嬉しそうに笑うイーガンたちに先導され獣人たちの住む村に到着する。

獣人たちが魔物対策か村全体を木製の柵で覆っている。

村は獣人特有といった感じはなく、どこにでもある村の風景だった。土の道に、レンガと木の家、いくつかある井戸、遠目に柵で囲まれた畑も見える。

村の規模からみて村人は百人もないだろう。

村に入ってきた幸助たちに獣人たちが気づき、一緒にいるジェルドを見て騒ぎ始めた。村中に聞こえるように大声でジェルドが帰ってきたことを知らせる。

「ジェルド！　無事でよかったにゃ！」

あつという間に人が集まり、猫顔の女が目には涙を浮かべてジェルドに抱きついた。すぐそばに立つ白山羊の男もほっとした様子を見せている。

ジェルドに抱きついた大人の語尾が獣人独自のものになっているが、これは感情が高ぶると年齢に関係なくでるのだ。

「こちらの人たちは？」

「ジェルドの両親だ」

幸助の問いにイーガンの仲間イエルツと名乗った男が答えた。

「えっとジェルドは兎の獣人だね？ あの人たちはどう見てもタイプが違わない？」

「知らないのか？ 獣人は同じタイプで子供を作っても違うタイプの子が生まれるんだ」

「そうなんだ」

これは何世代にもわたって違うタイプと子を成してきたせいだ。遺伝子の中に様々なタイプな因子が眠っていて、最も強い因子が生まれてくる子のタイプとなる。

親と同じタイプとなることの方が珍しいくらいだ。兄弟姉妹でも違うタイプとなるが、双子の場合は同じになることがある。一卵性双生児にかぎってのことだが。

昔、それも大昔は親と同じタイプで生まれていた。獣人という種族が生み出されたばかりの頃のことだから、世界誕生にまで時代を遡る。

「イーガンさん、ありがとうジェルドを連れて戻ってきてくれて！」

ジェルドの父親がイーガンに頭を下げようとする。それをイーガンは止める。

「礼はあっちに言ってくれ。ドラゴニスに襲われそうになっていたところを助けたそうだ」

イーガンは幸助を手で示す。

会話を聞いて語尾になにもついてないなと思っていた幸助は、イーガンの紹介に一拍遅れて頭を下げる。

「息子の危ないところを救っていただきありがとうございます！
ほんとに感謝の思いが尽きません。」

しかもドラゴニスなどという危険きわまりない魔物と戦ってくれて、さぞ苦勞なさったことでしょう。私たちで出来うるかぎりの礼をさせてもらいたい」

「気にしないでいいですよ。不意打ちが決まって苦勞しなかったですから」

「不意打ちが決まろうと楽に倒せるような魔物ではないでしょう？」

「いえ、ほんとに不意打ちで首の骨が折れて、反撃を喰らうことなく終わったんですよ」

「それは……すごく運が良かったんですね」

幸助が竜殺しと知らない父親は、幸助の実力をそこの冒険者と同等と考えている。だからドラゴニスを倒した経緯を聞いて、本当に運に恵まれたのだなと思っている。そして実力差のある相手に向かっていって、息子を助けてくれたことを心の底からありがたく思っている。立ち向かってくれたことすら感謝の思いを抱くのに対応しい。それほどに一般人からすればドラゴニスは脅威なのだ。

「ええ、運が良かったんだ。だから礼なんていらないよ」

「そういうわけにはいきません！ 息子を助けてくれた、それは本当にありがたいことなのですから」

「そうは言われても、ドラゴニスをさばいて売ればかなりの儲けが出るから。それで十分なんだ」

「しかし！」

父親は気がすまないのだろう、さらに言葉を連ねようとする。

それを遮ったのはイーガンだ。

「それなら森鳥の丸焼きを食べさせたらどうだ？ こいつは丸焼き

を食べるために来たと言っていたからな」

「そうなのですか？」

「うん。食べるのをすごく楽しみにしてたよ」

「では！ 村の皆に協力してもらい美味しい丸焼きを作らせてもらいます！」

「それは楽しみだ」

本当に楽しみだと幸助は笑みを浮かべた。

「俺たちはまた見回りに行ってくる」

話が終わったことを確認し、イーガンたちは再び森へと足向け
る。

「待ってください！ 連日の見回りで、ろくに怪我也治せないで疲
れ溜まってるはずです。今日はこのまま休んでください！」

見回りなら私たちでもできますから」

「戦えないだろ、あなたたちは。そんな人たちを危険な森の中へ入
らせるわけにはいかない」

「それでも狩りで土地勘があります。だから逃げ切るくらいは
できます」

「逃げ切れないような魔物がいるかもしれないんだ、行かせるわけ
にはいかない」

「でも魔物のことはこの村の問題です。私たちがなにもせず、あな
た方にまかせっきりというにはあまりにも無責任すぎる」

獣人たちの総意でイーガンたちに押し付けているわけではなく、
イーガンたちが率先して見回りに出ているのだ。

自分たちも出るという獣人を押し留めていたのはイーガンたちだ
った。よほど強い思いで、今回の出来事に挑んでいるのだろう。

「俺たちがそうしたいんだ。気にしなくていい」

それでも、と続けようとする父親。それを聞きつつ幸助が口を出す。

「怪我の治療なら俺ができるから、ちょっとした休憩を兼ねて治療受ける？」

「治療できるのか？ それなら頼む！」

自分たちでは治療できなかったイーガンがありがたそうに言った。この村にも医師はいるのだが、病氣治療寄りで怪我治療系魔法は簡単なものしか使えない。なのでイーガンたちは簡単な治療のみを受けて、見回りを続けていたのだ。本来ならば安静にしておいた方がいい状態なのだが、鎮痛剤で誤魔化していた。

「じゃあどこか屋内でやりたいから、利用できる部屋を貸してもらえませんか？」

「でしたらうちでどうぞ」

ジェルドの父親が提案し、幸助は頷いた。

集まっていた村人たちは、ジェルドの無事とイーガンたちがきちんと治療を受けることができることに安堵の溜息を吐いて、各々の作業の戻っていく。

父親の先導で家に到着した一行。居間に通してもらい、早速診察が始まる。

全員に鎧を脱いでもらい、一人ずつ服を脱がせて全身を見ていく幸助。

「できることはしてるんだね。薬での治療だと俺にできることはな

いから、怪我してる部分に魔法かけるだけにしておくよ。

イーガンさんと右肩のひびと左腕の裂傷くらいか、魔法での治療が必要なのは」

「治せるか？」

「大丈夫。これよりひどい状態の人の治療したことあるから」

ヴァイオレントバルブに襲われた冒険者たちのことだ。彼らの方がもっとひどい怪我だった。

治療魔法を使った際に出る発光を患部に当てて、イーガンの治療を終える。

「どう？ 楽になったと思うんだけど」

聞かれたイーガンは腕や肩を動かし状態を調べる。治療していない打ち身から痛みがはしる、しかし一番痛かった部分からは痛みがなくなって楽になっている。

「治った、完全に治った！ これならまた戦える」

「怪我の治療はしたけど、疲労は回復してないから無理はできないよ」

「怪我が治ったんだ十分だ」

「いや十分じゃないだろうに」

幸助はイーガンを椅子に座らせ、次の患者を呼ぶ。

全員どこかしら骨にひびが入っており、相当に無理を重ねているとわかる。これはきちんとした休憩をとらせないとまた大怪我すると考えた幸助は、最後の仕上げと見せかけて不意打ちで眠りの魔法を使う。疲れが溜まっていたおかげか、イーガンたちは抵抗できずに眠り込んだ。

ぐったりとしたイーガンたちを心配そうに覗き込んでいるジェル

ド。

「イーガンさんたちになにをしたびよ？」

「疲れが溜まってたから眠らせて、強制的に休憩をとらせたんだ」

幸助は父親に視線を向けて、イーガンたちの宿を教えてもらう。

この村には宿はなく、空き家となっていた小屋を使っていたらしい。そこまで案内してもらい、イーガンたちを運び込む。よほど深い眠りなのか、動かした時に起きる様子はなかった。

全員をベッドに寝かせた幸助は交わした約束を守るため、森へと足を向ける。それを見て父親が声をかける。

「どこへ？」

「ちよっと見回り行ってきますよ。村の守りを手伝うってイーガンさんたちと約束したんで」

「それなら私も行きましょう」

「ついでにドラゴニス捌こうと思ってるんで、匂いにつられて魔物が近寄ってくるかもしれませんから危険ですよ。」

「ここで彼らの看病してもらいたいんですけど」

「しかし」

魔物と対峙するかもしれないと聞いて二の足を踏む。臆病というなかれ。これまでこの森には魔物は少なく、その魔物も弱いものでしかなかったのだ。獣人たちは戦うことなく日々を過ごしていた。そこに強い魔物が集いだし、実力不足経験不足な獣人たちは一方的にやられてばかりだった。死者が出ていないのは、防衛に徹していたということとイーガンたちが戦ったおかげだ。

「ちよろっと見回ってくるだけですから」

「……よろしくお願いします」

自身が情けないのかギュッと手を握って頭を下げる。

森へと入る幸助をせめて見送ろうとした父親が思い出したように告げる。

「黄色い猿をみつけたら捕まえてみてください」

「黄色い猿？」

それはジェルドを助けようとした時に見かけた物体のことだろうかと思う。

「はい。イーガンさんたちが探していたようなのです」

「騒動に関係してんのかな？」

「かもしれません」

イーガンたちが話し合っていたのを偶然聞いただけなので、確証はない。しかしまったくの無関係でもなろうと思っている。

アドバイスを受けて幸助は、ドラゴニスを引きずりながら森に足を踏み入れる。進む方向はジェルドを助けた場所だ。

十五分ほど離れた場所に小川をみつけ、そこでナイフを使い解体していく。ドラゴニスの売れる部位はほぼ全部といていい。一番高いのは順に角爪牙骨皮だ。それ以外の部位も希少性から使い道が決まってなくとも売れるのだ。内臓や脳などは通常の店では持て余し、売りたいのならば研究機関にでも伝が必要になる。肉も食用として売ることが可能。そのままでは臭くて食べられたものではないが、特定の薬草と一緒に水に長時間漬け込むことで臭みが消え、高級牛に劣らぬ肉となる。

「肉は村の人たちに食べてもらえばいいかな」

爪などで十分すぎる収入があるので、肉は渡すことにして、内蔵は土に埋めて処理した。匂いを嗅ぎつけた獣や魔物が掘り返さなければ土にかえるだろう。

血で濡れている部位を洗った後、手とナイフを洗う。このまま見回りに持ち歩くのは邪魔だと思った幸助は、皮で爪などを包み、木の上に置く。肉は獣たちに持っていかれるかもしれないので、皮に包んで持っている。隙間から血が漏れているがしばらくすれば血も抜けるだろう。

解体を終え周囲を警戒しつつ、目的地に向かう。血の匂いにつられてか、熊と虫の魔物に襲われるも怪我なく撃退。剥ぎ取りはせず、ほったらかしたままにした。これ以上の収入は必要ないと判断したのだ。

「いない、ね。当たり前か」

見かけた場所に到着し、周囲を見渡す。移動しているだろうと予測できていたので、気落ちはしない。

「なにか痕跡とかないかな？」

痕跡といっても体毛が落ちている程度で、なにがわかるでもないのだが。

足跡でも残っていれば最良なのだが、対象の足の形なんぞ知らないので探すようがない。

ここでわかることはないものと判断し、幸助は村を中心にして時計回りで動き出す。

二十分ほど歩いた頃だろう。重なる木の葉の向こうに黄色が見えた。一度その場に止まり見間違いはないか確認した後、気配と足音を抑えて進み、黄色の猿を視認した。

猿は幸助に気づいておらず、枝に座り毛づくろいをしている。

（捕まえないと駄目なんだっけ？ このまま静かに移動してばれずにすむといいけど。いや眠りの魔法使えばいいか）

木陰に隠れ、小声で魔法を使う。

毛づくろいをしていた猿は動きを止め、木の幹に寄りかかる。

「効いたみたいだな」

気配を隠すことを止めて、木の下まで移動し、そこから飛び上がって猿を捕まえた。

「なんだこの匂い？」

幸助は猿から漂う匂いに首を傾げる。臭いわけではなく、良い匂いというわけでない、独特な匂い。獣特有のものだろうかと疑問を抱いたまま歩き出す。

わりと簡単に捕獲できたなと思いながら、猿の首を掴み村へと足を向ける。左手にはドラゴニスの肉、右手には猿。両手がふさがり、置いてある骨とかの回収ができないので、一度村に帰ろうと考えた。

「うっとおしい！」

歩き出して十分ほど経ってから幸助は魔物に襲われ続けている。今も豚顔のオークを蹴倒した。その前は一本角のオーガを木々の向こうへと蹴飛ばした。手が使えず、蹴りしか攻撃手段がないのだ。ドラゴニスクラスの魔物はいなかったので、蹴りだけでも十分対処できている。だが次から次へと集まってくる魔物に、休む暇なく相手させられている。

森に入ったばかりの時や見回りを始めたばかりの時とは遭遇率が

違いすぎる。この森にはこんなに魔物がいたのかと驚いている。

「原因は猿だろうなあ」

猿を捕まえてから遭遇率が上がったのだから間違いないだろう。気配を抑えても魔物は集まってくるのだから、偶然というわけもないだろう。

「魔物を引き寄せるフェロモンってどこか」

魔物がこの森に集まりだしたのは、この猿がやってきたからだろう。現状からそれはすぐに予想がついた。

しかしわからないこともある。猿を捕まえる前、猿が毛づくろいしていた時は魔物が近寄っていなかった。フェロモンを出しているならばあの時も狙われていたはずだ。

「いや待てよ？ あの時匂いはしてなかったような」

観察していた時のことを思い出し、僅かながら匂いを嗅ぎ取っていたか思考する。答えは否だ。

「自在に放出できるってことなのかも？ 自在ってのはおかしいか、今眠ってたんだから。つまりは眠ってる時だけフェロモン出す？ なにそれ」

眠っているということは無防備ということだろう。そんな状態の時に自身を危機に陥れるような真似なんかしてなにか利益あるのかと、幸助はさらに首を捻る。

寝ている時に魔物を集めるなんぞ、襲ってくれと主張するようなもの。考え違いしてるのだろうと、幸助はこれまでの考えを否定し

た。

「まあ考察は後でするとして、どうしようか。このまま村に戻ったらあそこに魔物が集まることになる」

村を危険にさらすつもりはないので、このまま帰るのは却下。かといって魔物に襲われながら森を彷徨うのも嫌だった。

少し考えて、殺して埋めてしまおうとも思ったのだが、捕まえてほしいと言われていたのでそれも躊躇う。

「あ」

悩んでいたのが馬鹿らしいと閃いたことがあった。

「起こせばいいだけじゃん。さっきの考えが合ってるなら、起きてる間は匂い出さないんだから。」

起きてる間に、どうすればいいのか対処法を聞けば問題ないだろ」

早速起こそうと片手の荷物を下ろす。

魔法が効き過ぎていたのか、先ほどまで魔物と戦って動いていたにもかかわらず、猿は起きていない。その猿に魔法で呼び出した冷水をぶちまける。これには驚いたようで、目を覚ましキーキーと鳴き暴れている。

「これで匂いはなくなるはず」

暴れる猿に構わず、地面に置いた荷物を持って場所を移動する。

五分ほどして周囲からあの匂いが消えたことを確認し、魔物との遭遇率が減ったところから予想が当たっていたことがわかった。

これならば戻れるかと足を村へと向けた。

村に戻った幸助はジェルドの家を訪ねる。そこで猿を入れておける檻がないかと、ジェルドの母親に聞いてみた。猿は暴れ疲れたのか、おとなしくなっている。

自分の家にはないが、皆で一緒に使っている倉庫にはあったはずだと聞いて、ジェルドの案内で向かう。ついでにドラゴニスの肉の処理も頼んでおいた。母親は処理の方法を知らないので、知っている人に頼むことになった。

「この中にあるぴよ」

二人の目の前には扉のない、この村で一番大きな建物がある。四メートルを超える高さで、入り口は縦三メートル横二メートルと大きい。入り口からは錆びた斧や台車といった農具などが見える。

「勝手に入っていいの？」

「うん」

中に入って探し、五分も経たずに見つけることができた。

木製の檻で、猿の力程度ならば壊される心配もなく閉じ込めておけるだろう。

猿を放り込み、檻ごとイーガンたちが使っている小屋に運ぶ。小屋の中を覗くとイーガンたちはまだ眠っていた。

「これからどうするぴよ？」

「森の中に置いてきた物があるからそれを取りに行くよ。その後は宿をとって休もうって思ってるよ」

「この村に宿はないぴよ」

「そういやそうだった。たしか空き家借りれるんだよね。あとである場所教えてもらおう」

「空き家もないと思うぴよ」

「そうなの？ それはちよつと困つたな」

「うちに泊まればいいよ。部屋は空いてるぴよ」

「いや迷惑になるだろうに」

「お父さんもお母さんもきつといいって言うぴよ！」

まずは聞いてみようと思つてジェルドに腕を引っ張られ、家に到着する。ちょうど母親も肉を届けて帰ってきたばかりだった。その母親にジェルドが用件を伝える。話を聞いた母親は「それはお困りでしょう。好きなだけ泊まっていてください」と嫌な顔を少しも見せずに即答した。少しは迷つても思えるくらいに即決した。あまりの迷いのなさに幸助は思わず、よろしくお願いしますと頭を下げる。下げてからほんとにいいのかと思ひ直した。今夜はご馳走を作りましょうと張り切る姿を見て、いいみたいだと思う。ついでだからだと母親はイーガンたちの分も作ろうと気合を入れていた。

森から荷物を取つて帰つてくると父親も帰つてきていて、幸助が泊まることに賛成していた。

暇な幸助はジェルドにせがまれ森の外の話をする。話したのはこれまで行つた場所や会つた人のこと。

幸助がそうしている間に父親はイーガンたちを誘いに空き家に行つていた。

いい匂いが家中に漂いだした頃、父親はイーガンたちを連れて戻つてきた。

「よく休めた？」

「お前っ！」

幸助に勢いよく詰め寄るイーガンたち。手を突き出して彼らを押し留める幸助。父親も止めるのを手伝っている。

「休んでいる暇なんかないんだぞ！」

「治療した者として疲労している状態を見過ごすわけにはいかなかったんだ。また怪我することになる」

「そうですよ、イーガンさん。あなたたちが疲れているのは見ていた私たちにもわかることでした。あのまま休まずにいたら近いうちに倒れてしまっていましたよ」

「代わりに見回りに行つて、猿を捕まえてきたんだからいいじゃないか。」

魔物が集まつてる原因はあれのせいなんだろう？」

幸助の問いにイーガンたちは頷いた。

「ご飯できたわよー」

トレイにいくつもの皿を載せ、母親がやってくる。それにより力みがなくなったのか、イーガンたちは一つ息を吐いてジェルドたちに誘ってくれたことへの礼を言う。

「いえいえジェルドを探しに行つてもらったことへのお礼を兼ねているんだから、気にしなくていいんですよ」

皿をテーブルに置きながら答える。

献立は牛乳のまろやかさと野菜の甘みと鹿肉の旨みが凝縮されたシチュー、取れたて新鮮山菜と果実のサラダ、焼きたてふわふわのパンダ。魔物が跋扈し、狩りや採取が制限される現状ではたしかにご馳走といえる献立だった。

それをわかっているのだらうイーガンたちは恐縮そうに、されど嬉しそうに食べていた。

救う者と救われた者

和やかな夕食が終わり、幸助はイーガンたちに話があると連れ出される。

その途中でイーガンの仲間の一人ベズが、幸助に近づき隣を歩く。そして小声で話しかける。

「強制的に休ませてくれてありがとな」

「いや必要と思ったからやっただけだけど」

「でも礼は言っておく。俺も休まないといけないとは思っていたんだが、中々言い出しづらくてな」

「言えればいいのに」

「ちよいと事情があつてなー。俺自身も休んで時間を消費することに忌避感がある」

ベズは言いながら苦笑を浮かべた。

どういうことかと首を捻る幸助が理由を聞こうとする前に、空き家に到着し聞きそびれる。

空き家のすぐそばに置いていた檻の中には猿はいない。

「猿は？ まさか逃げた？」

「いや殺した。殺してしまえば魔物を集めることもなくなるからな」

ただ殺すだけでは駄目なようで、土に埋めて手出しされないようにするか、燃やし尽くす必要があるらしい。あの猿の肉は食べると凶暴化する作用があるらしく、そこまで後処理をする必要があるのだという。

「あの猿のことに詳しいね？ この大陸だとわりという魔物？」

「……こちらで一般的というわけじゃあない。ただ俺たちが知っていただけだ」

「そうなんだ」

次からは猿を捕まえたら持って帰らず処理してくれと頼まれ、幸助は頷いた。

この後、明日からの行動を話し合い、村の警備にイーガンの仲間二人が残り、幸助と残り二人が見回りになった。三人で見回りに行くのではなく、幸助と二人組に分かれて行くことになる。幸助は一人で大丈夫だからだ。実際、一人で行動して無事でいるのだから、イーガンたちも納得して任せてきた。

話はこれで終わりというので幸助はジェルドの家に戻る。イーガンたちは休むと言いつつ交代で見張りに立つことにしていた。幸助を見張りに誘わないのは、休息を削っての行動なのでまた強制的に休まされと思ったからだ。

見張りだけならば村人も十分役割を果たすことができる。けれどもイーガンたちは村人に頼まず、何日も前から自分たちだけで見張りをしていた。これは村人が頼りにならないからというわけではなく、イーガンたちが自分たちの役割だからだと思っただけの行動だった。

翌日、朝食を食べた幸助はジェルドたちに見回りに行ってくると告げて村を出た。

出くわす魔物を殺しつつ、森を歩き猿を探す。午前中は猿を見つけることができなかったが、かわりに野うさぎや野鳥を狩ることができる。良いお土産ができたとホクホク気分ですぐに村に戻った。

持って帰った肉を母親に渡すと昨日のドラゴニスの分も合わせれば、村の皆で肉のスープを食べることができそうだと言い、急遽村人全員での食事が開かれることになった。これは魔物騒動で滅入った気分を盛り上げるのにもいいと、長期的立場の人が賛成したことで実現した。

じゃあもつと肉あったほうがいいよね、と幸助は今度は狩りを主目的として森へと入る。籠も借りて山菜や茸も取っていき、四時間ほどで籠半分以上の採取を終えた。生憎と肉は取れなかったが、川でガチンコ漁法を行い魚を三十四手に入れ村に戻った。

村では人々が賑やかに宴会の準備をしていた。幸助は調理の準備をしている人にと取ってきた物を渡し、少し離れた場所に座り人々の様子を眺める。そこに見回りから帰ったきたイーガンたちが近づく。

「これは何事なんだ？」

「宴会だってさ。俺が狩ってきた動物とかを皆に振舞って、魔物騒動で盛り下がった雰囲気吹き飛ばそうとかなんとか」

「見回りしないで、狩りしてたのか？」

咎めるような視線を向けられた幸助は、違う違うと首を横に振る。探すついでに見かけた動物を狩っただけだと説明し、納得してもらう。

「そっちは猿探しに進展あった？」

「いや魔物と戦っただけだ」

「怪我は？」

そう言って幸助は四人を見る。ざっと見たところ大怪我と思われるものはなかった。小さな切り傷がところどころにあるのみだ。

「念のために診察したいから、この村の医者のところまで連れてってほしいんだけど」

「今日はたいした怪我してないから必要ない」

なあ、とイーガンは仲間に語りかけ、仲間たちも同意し頷いた。ほんとに？　と言ってじっと見る幸助の視線に動揺することない

イーガンたち。本当らしいと判断した幸助は、小さな傷の水洗いくらいはするようにと言って視線を外した。イーガンたちは頷いて幸助から離れていく。

傷の手当を終えたイーガンたちは準備を手伝おうとして、疲れているだろうと止められている。

賑やかに準備が進んでいき、日が落ち、村のあちこちに松明と魔法の明かりが設置されて、宴会が始まる。

料理のメインはドラゴニス肉の焼肉だ。村人全員に行き渡ってなお余るほどの量がある。この村の名物である鳥の丸焼きに使うタレとは違ったタレに漬けられ焼かれた肉は、そのまま食べて良し、パンに野菜と一緒に挟んで良しの高評価を得た。酒が進むと酒飲みにも好評だ。

ちなみに今回の宴会に鳥の丸焼きは出ていない。仕込みが間に合わなかったからだ。明日、取ってきた幸助に出されることになった。宴会は目論見どおり、最近の硬い雰囲気はなくし柔らかくさせた。誰もが笑顔を浮かべている。イーガンたちも村人に押し寄せられ、今は魔物のことを忘れているかのように見える。

幸助もフルール直伝の喉を震わせて、盛り上がりをさらに大きくさせた。

今夜は魔物も空気を読んだか、村に近づくことはなかった。ただ賑やかさに気圧されただけかもしれないが。

賑やかな一夜は過ぎて、日常が戻ってくる。幸助とイーガンたちは森へと出かけ、猿と集まった魔物を殺していく。

目的だった丸焼きは、昼食と夜食に出てきた。昼はサンドイッチに入っていて、夜は腿肉丸ごととサラダに入っていた。どの食べ方でも美味しいと思え、評判は嘘ではなかったと満足できた。ついでに残った骨も出汁をとって朝食のスープとして出た。それもまた美味だった。

村に来てから五日経過しており、魔物の数も減ってきたかなと思いつつ幸助は歩いている。そこに魔物の以外の気配を感じ幸助は足を止めた。

イーガンたちと担当区域を決めて森へと入っているので、この気配はイーガンたちのものではない。旅人なのだろうと思った幸助は、この森は危ないと注意しようと気配のする方へ向かう。

すぐに気配の主を見つけることができた幸助は、彼らの姿を見て足を止める。旅人といった感じではなかったのだ。

馬車で森の中に入ってきている彼らは馬車の荷台に檻を載せており、檻の中には黄色い猿がいる。

幸助が見ていると気づかず、彼らは檻から三匹の猿を出し、森に解き放つ。

（なんの目的でこんなこと？）

動き出す彼らを追えば抱いた疑問が解けるかと、幸助は気配を抑えて後を追う。

放たれた猿を放置するのに少し気が咎めたが、原因がわかればこの騒動も解決するだろうと考え尾行を優先する。

合計十五匹の猿を解き放った彼らは、森から出て行く者と一人残る者に分かれた。

どちらを追おうか迷った幸助は、この森でまだなにかするつもりかもしれない残った者を追うことにした。

（しかしよく一人で残ろうと思ったな）

猿を解き放ったのならば、森には魔物がいるとわかっているはずだ。それなのに一人で行動するのは危険でしかない。観察するかぎりではすごく強いという感じでもなく、幸助にさらに疑問を抱かせる。

男は危険などないという感じで最低限の警戒のみで歩く。そして時々止まっては魔法を使う。

使っている魔法は幸助も知っている。探し人を見つける魔法だ。

（ここらで人がいるとしたら村なんだけど。村にこいつの関係者がいるってことなのか？

お人好し集団とも言える獣人たちに、こいつとの繋がりはないさそうんだけど。

となるとイーガンたち？）

しかしイーガンたちは村を守っている側で、攻めている側との繋がりは想像しにくいものがあった。繋がりがあるとするならば、守る意味がわからなくなる。

獣人の村は小さな村で、恩を売ったところで大した見返りはないだろう。

幸助は自分が知らない秘密があのか村にあるのだろうかと思いつつ、尾行し続ける。

やがて男は見回りを続けていたイーガンたちを見つけ近づいていく。

彼らの会話を聞き逃すまいと幸助は耳を澄ませた。

「どういった状況になっている？ 猿たちは魔物を集めているんだろう？」

「ああ、集めている。雑魚から大物まで勢ぞろいだ」

男の問いにイーガンが答える。

「大物とは？」

「俺の知るかぎり一番の大物はドラゴニスだ」

「ほう？ たしかに大物だ。だがそれが来た割には森の被害が少な

いように思えるんだが」

「森に来てすぐに倒されたからな」

「倒したのはお前たちなのか？」

「いんや、俺たちはドラゴニスに手出しできないさ。倒したのは獣人の村の名物を食いに来た冒険者だ」

「そいつは獣人からの依頼でほかの魔物も倒して回っているのか？」

「よくわかったな」

「魔物の数が少ないように思えたからな」

「俺たちもねぐらがなくなると困るから、村に来ようとしたのは倒したからな。数が少なくて当然だ」

かったるいとイーガンたちは疲れた表情になる。

「まあいいさ。集めた魔物に特別な用事があるわけじゃない」

邪魔したともいえるイーガンたちの行動に、男はさしたる反応も見せない。

「そうなのか？　そういやこんなことする目的は聞かなかったが、聞けば答えてもらえるのか？」

「俺も詳しくは知らんよ。ただ猿を解き放ち、それによって起こった状況を知らせるだけだ」

男もまた別の存在から依頼を受けているだけなのだ。

「なにがしたいのかさっぱりだな」

「わからなくとも依頼を果たせば金が出るんだ。どうでもいいことだろう？」

ああ、それと依頼はそろそろ終わりだ。今回猿を十五匹解き放った。これによって起きたことを、俺たちが会った酒場まで知らせに

来てくれれば依頼料の閃貨二十枚を渡そう」

閃貨二十枚という金額を聞いてイーガンたちは歪んだ笑みを浮かべた。得た大金でなにをしようか、会話に参加していない三人が楽しそうに話し出す。

そういった金額をぽんと出せるということは、彼らのバックにはそれなりの大物がいるかもしれない、と幸助は考える。

「十五匹か。今までで一番の多くて、集まる魔物も多くなりそうだな。」

まさか魔物を使って口封じしようってんじゃないだろうな？」

イーガンの探るような視線に、男は動じることはなかった。

「そんなつもりはないさ。金もきちんと用意してある。」

大金を得るためには多少のリスクを負う必要がある。これは最初会った時に言っただろう？」

「たしかにな。まあいい。生き残ってやるさ」

「がんばんな。今回の用事はこれだけだ。無事に生き残ることを祈ってやるよ」

祈るだけならただだからなと言って話を終えた男は、イーガンたちを背を向け去っていく。

その男の背をイーガンたちは侮蔑の表情で見送っていた。その表情は大金をもらえると喜んでいたものとは全く違ったものだった。

男の姿が木々の間に消えてからイーガンたちも動き出す。

幸助はその場から動かず、彼らの会話から得た情報をまとめていく。

「獣人の村に特別な何かがあるってわけじゃなくて、ただ実験の場

に選ばれただけなのか？

そしてそれにイーガンたちも協力していると。でも最後の表情が引つかかるんだよなあ。それにジェルドを怒っていた時の表情は本物だったし」

情報を得たことでわかったこともあるが、わらないことも出てきて幸助は頭を抱えている。

とりあえず今後イーガンたちの言動には注意する必要がある。心底イーガンたちを信じている獣人たちの前で糾弾するのはよそうと決める。今そんなことをすれば、魔物騒動のほかに問題を抱えることになる。それによって獣人たちにさらなる危機が発生するかもしれないのだ。

優先すべきは魔物退治だと考え、幸助は動き出す。

イーガンたちの密談から三日経ち、森の中の雰囲気は明らかに変わっていた。猿が増えたことで、呼び寄せられる魔物の数も増えたことが原因だ。

その夜、幸助はイーガンたちに呼ばれた。

「疲れているところ呼び出して悪いな」

「そこまで疲れてないから別にいいんだけど」

「体力あるんだな」

イーガンの仲間の一人ビゼンが羨ましげに見る。そういう彼は疲れた表情だ。

これまでの生活でさえ疲れるものだったのだ、戦闘回数の増加は彼らの体力を大きく削るものなのだろう。

「ここ数日の変化は気づいているだろう？」

イーガンの問いに幸助は頷く。

「俺たちは猿の数が増えたからなんじゃないかと思っているんだ」
「そうかもしれないね。急に魔物の数が増えたし、なんらかの変化はあったんだろうな」

イーガンたちの考えを探ろうと話を合わせる。

「そこで行動を変えてみようと考えた」

「どんな風に？」

「猿を殺さず一箇所に集める。そうすると魔物たちはその一箇所に集まるよな？ それを迎撃してある程度魔物の数が減ったら、猿たちを殺す。あとは森に残った魔物を倒していけば森は元通り。」

こんな感じでどうだ？」

「猿を一箇所に集めても魔物がぞくぞくと集って数は減らないんじゃない？ ずっと迎撃することになると思う」

抱いた疑問を口に出す。それに対する答えを持っているのか、すぐにイーガンは返答する。

「集めた猿は少しずつ殺していく予定だ。そうすることで猿から発せられる匂いも少なくなつて、集まる魔物も減るだろうさ。一匹残してあとは殺そうとも思ったが、それだと捕まえてない猿のところにも魔物が行って効率が悪いと思ったんだ。」

だから猿をほとんど捕まえたと判断するまでは、猿は三四匹は生かしておいて囿にする」

「かなりの持久戦になりそうだけど、そっちの体力持つのか？」

「持たせてみせる」

強い意志が籠った言葉が発せられる。ほかの三人もイーガンと同

じ思いなのだろう、目に強い意志が宿っている。

それを見て幸助は内心首を傾げる。この思いは本物なのだろう。けれども村を害する者と繋がりがあるのも事実。どういった考えでイーガンたちは動いているのか。そこがよくわからない。イーガンたちの気合に水を差すようで、幸助は聞けずにいる。

翌朝から幸助たちは動き出す。効率よく猿を集めるため、イーガンたちも一人ずつ行動することになった。魔物との戦いは避けることになっている。猿集めが第一だ。二組での探索が三組に増えただけだが、そのかいあってか、それとも猿の数が増えているせいか、猿を見つける頻度は増える。素早い身のこなしのため、見かけた猿全てを捕まえるといったことは無理だが、それでも集まりは悪くなかった。

猿が集まるということは魔物も集まるということで、迎撃に人数を割く必要があった。それは幸助の役割となる。ぞくぞくと集まってくる魔物の相手など、幸助以外に不可能だったのだ。探索人数が減ることになるのだが、そこは村の守りに残っている二人が少しだけ村から離れて猿を探すことで代わりとした。

対策を変えて七日、殺した猿は十二匹以上、囷としている猿は四匹となっている。この七日間、幸助たちは村にほとんど戻っていない。

囷としている猿がいる広場には、焼却処理した魔物の残り滓が積もっている。焼けた肉の匂いと地面に染み込んだ血の匂いで、気分の悪くなる場となっている。感覚がすでに麻痺している幸助たち以外の者がここにくれば必ず体調を崩すだろう。

「今日から交代しよう。俺たちが迎撃する。魔物が減ってきている今なら俺たちだけでも迎撃はなんとかなる。」

お前は森の中の魔物を殺しながら、猿を探してくれ。俺たちは逃

げながら猿を探すことしかできなかったが、お前なら殺しながら探せるだろう？」

三日前と比べて魔物の数は減ってきているというのが、猿を探し森を走り回っているイーガンたちの感想だ。

ならば猿探しよりも、魔物退治を優先したほうがいいと考えたのだ。

「数は減ってるって言っても、集まってくる魔物はまだ多いよ？連日走り回って疲れてるあんたらじゃ相手しきれないんじゃない？」

「疲れているのはお互い様だろうが」

イーガンの返答に幸助は反論できない。さすがに七日間昼夜間わすの迎撃戦は、竜殺しといえども疲れを感じさせるものだった。

魔物が強くて相手に疲れたというわけではない。十分に休息する時間を取れなかったことが疲れの原因だ。

猿の眠る時間がばらばらで、匂いが常時発散されているといってもいい状況だった。

忙しさのピーク時には、三十分から一時間休んで十五分から二十分戦うということの繰り返しだった。イーガンたちも迎撃には立ったが、押し寄せる物量に対応しきれず幸助を起こすということになり、休めたものではなかった。

使っていたナイフはすでに折れ、拳と蹴りと魔法を使つての戦いになっていた。

馬鹿みたいに体力のある幸助が疲れているのに、イーガンたちが疲れていないわけがない。それなのに動いているのは、魔物を殺して得た力を活力に換えているからだ。

これは無意識にやっていることだった。少なすぎる休息で動き続けていることに体が危険を感じ取つての生存本能だ。

「とりあえず最低六時間は寝てから動けよ。まともに休みとれなかったんだから」

村に戻った幸助はジェルドの家ではなく、空き家の方へと向かう。軽く汚れを落とした後眠る。こっちに来たのは土や血で汚れているので、お邪魔するのは悪いかと思ったのだ。

五時間が過ぎ、そろそろ六時間が経とうとした頃、幸助は目を覚ます。体調は快調で、ここ数日の疲れはすっかり取れていた。

「七日間の疲れが半日も寝ないで取れるのはすごいな」

半年以上付き合ってきた自分の体に、改めて驚く。

保存食で腹を満たした幸助は、イーガンたちの様子を見るため村を出る。

広場ではイーガンとイエルツが七匹の魔物化したゴブリンを相手に奮闘していた。この戦いの前にも激戦があったのだろう。使っている武器は刃こぼれし、鎧の一部がなくなっていたり凹んでいる。イーガンの剣は先端が折れている。イエルツは骨に異常があるのか、左腕が腫れ上がっている。

そういった怪我や武具の破損のせいかな、通常ならば楽な部類のゴブリン相手に互角の様相を見せている。

幸助は戦闘に加勢し、ゴブリンたちを蹴り殺していく。加勢があったおかげで、五分ほどで戦闘は終わった。

ゴブリンを焼却して、二人を治療しながら幸助は話しかける。

「四人がさ、獣人の村を守りたいってのは、こんな怪我してまで戦っていることからよくわかる」

イーガンたちの考えを知りたくなり聞くことにしたのだ。

ここまで苦勞して守っているのだから、その思いは本物だと確信し、聞いても答えが返ってこないかもしれないが、防衛を止めることはないだろうと思ったのだ。

「なんだよ急に」

「でもなんで猿を放した連中と繋がりがあるのさ」

この言葉に二人は体を硬くし、動きを止める。

「……なんのことだか」

「この前見たんだよ。猿をばら撒いている人たちを、その後ばら撒いている人の一人とあんならが会ってるのを」

「……見てたのか」

現場を押さえられたことで観念し、二人は深い深い溜息を吐いた。

「あいつから猿が入った檻を受け取って、最初にこの森にばら撒いたのが俺たちだ。」

その後経過を観察するために獣人の村に滞在して、今に至る」

「共犯者ってのはなんとなく予想ついてた。でもそれなら見てるだけでよかったはず。ここまでしてどうして守ってるのかわからないんだ」

共犯者というところで二人の顔つきが苦いものになる。

「……俺たちが依頼を失敗すれば以後半年ギルドを使えなくなるってのは聞いていたから知ってるな？」

「覚えてるよ」

「俺たちはあの後失敗して、ギルドはそれを実行した。」

ベラッセンは当然として、リッカートや王都ピリアルまで連絡は

行き届き、セブシック大陸のほかの国でも俺たちは依頼を受けることができなくなった。

ギルド連中から逃げるように、なけなしの金でセブシックから出てカルホードに来たはいいが、セブシック大陸側にある街では俺たちのことが知られてて遠回しに拒否された。

移動して遠くの町に行こうにも金は残り少ない。やけになった俺たちは近くにあった酒場で、逆恨みしながら酒を飲んでいた。

そこにやってきたのがあの男だった。

今にして考えれば、いつでも捨て駒にできると思って近づいてきたんだろう。酒場でうらぶれてくだ巻いてる冒険者なんぞ碌なものじゃないしな。

その男から話を聞いて、獣人の村なんぞ知ったことかと思い、金目当てで引き受けた。

そうして猿をばら撒いて獣人の村に滞在してたんだが、余所者でも嫌な顔一つ見せずに受け入れて、あれこれと世話を焼いてくる。気まぐれに簡単な手伝いの一つでもすれば、大げさに礼を言ってくる。寝床がなくなるのは困るからと、村に来た魔物を追い払えば村人全員が次から次へと礼を言ってきた。

礼を言われて嬉しかったのは久しぶりだ」

本当に嬉しかったのだ。自分たちのやったことに罪悪感を感じるほどに。

獣人だからと偏見を持ち、どんな被害があってもいいと考えていたことが恥ずかしくなった。

善行を成して礼を言われる、当たり前のことだがイーガンたちには久しぶりのことで、とても暖かかった。

決して特別ではないそういった出来事が、ささくれていたイーガンたちの心を落ち着かせていき、相手を思う余裕を取り戻させた。

イーガンたちも最初から素行が悪かったわけではないのだ。上手くないかないことがあり、それが元でズレを見せ始めてしまった。そ

のズレを獣人たちが正したのだった。

「それからだ。俺たちが獣人のために動こうと思ったのは。

それで全部の猿を退治して、平穏を取り戻せたら謝るつもりだ。

正直、怖いけどな」

イーガンたちは獣人たちが好きになっっているのだろう。その獣人たちの信頼を裏切り続けていたことを白状し責められるのがとても怖い。獣人たちをなんとも思っていないければ怖がることもないので、それだけ大事ということか。

「そこらへんは俺からはなんとも言えないなあ」

「だろうな。俺たちの問題だ」

「まあ、なんで守っているのかわかったよ。獣人たちのことを気に入って、やったことを悪いと思っているからだね」

その思いが本物だからここまでやれているのだろう。

納得した幸助は、自分に課せられた仕事を果たすため立ち上がり、茂みへと向かう。

木々の間を駆け抜けて、猿と魔物を探していく。丸一日かけて森全体を駆け抜けた。魔物には遭遇し殺したが、猿に出会うことはなかった。

「もしかしてイーガンたちが全部捕まえたのかもな」

そんなことを考えつつ、もう一周回る。明らかに魔物の数は減っており、考えは当たっているのかもしれないと思う。

これで滞在も終わりかなと思いつながらイーガンたちのもとへと戻り、囿の猿を殺して燃やす。

あとは明日明後日、皆で森を探索して終わりということになった。

村まであと五百メートルという場所で、幸助の耳は破壊音を捉えた。聞こえてきた方角は村だ。

「村の方角からなにかが壊れる音がした」

「俺は何も聞こえてないが。イエルツはどうだ？」

「俺もだ」

「なにもないならそれでいいけど、なにかあったら大変だろう？
急ごう」

この意見にイーガンたちは異論なく、全速力で走り出す。

先に村の近くに着いた幸助が見たのは、村を襲う魔物たちの群れだ。

「なんでこっちを襲ってんだ!？」

幸助が疑問を抱いてすぐに、イーガンたちも追いつき目の前の光景に愕然とする。

すぐに立ち直ったイーガンとイエルツは、村の中へ走り出していった。

「俺もぼーっとしてる暇ないな」

幸助も後を追いつき走り出す。向かった先はジェルドの家だ。

見えた魔物を片っ端から殴り蹴り、すぐにジェルドの家に着いた。

そこでは父親が背後にジェルドと妻を守り、農具を両手持ちして、必死に二体の魔物を追い払っていた。

「大丈夫ですかと!」

魔物の一体を蹴って別の魔物にぶつけて対処し、父親に近づく。

「コースケさん！」

「怪我とかは!？」

「小さいものでたいしたことには」

「ジェルドたちですか」

「はい」

「それはよかった。

どうしてこんなことになってるのかわかります?」

「いえ、まったく。一時間くらい前、おかしい匂いがどこからともく漂ってきたかと思うと急に魔物が集まってきて、ビゼンさんとベズさんが応戦していたのですが、数の多さにすぐに押し切られて村の中まで」

「ほかの人たちはどうなって?」

「……わかりません。家族を守るのに精一杯で」

これは責められることではないだろう。戦いが得意というわけでもないのに、農具だけで耐え続けてきたことがすごいのだ。家族愛が父親に膝をつかせなかった、と考えるのはロマンチストだろうか。

「ほかのところを見て回りたいんですけど、着いてきますか? それとも家の中で待ってますか?」

近くに魔物の姿は見えないんで、たぶん無事でいられると思うんですけど」

幸助としては一緒に来てもらった方が安心できる。気配から察するに強い魔物はいないみたいなので、守りきれなのだ。

「……ほかの人たちが気になるから一緒に行きたいんだが、負担にならないだろうか?」

「大丈夫ですよ。回りに注意しながら行けば不意打ち喰らうこともないし、強い魔物もないみたいだし」

「ではお願いします」

四人は歩いて移動を始める。一軒一軒家の中に呼びかけていき、隠れていた住人と合流していく。

そしていると七十人以上の村人が集まって魔物と相対している場面に出くわした。そこにはイエルツとビゼンとベズがいて、村人のフォローを受けながら戦っていた。

ジェルドたちをその集団に任せて、幸助は固まっている魔物たちに魔法を飛ばした。

「切り裂け氷の飛刃！」

いくつもの三日月状の氷刃が魔物たち目掛けて飛び、蹴散らしていく。

幸助はもう一度同じ魔法を使い、この場にいる魔物は全滅した。

「助かった」

イエルツが礼を言うてくる。ビゼンとベズは長時間の戦闘の疲れから地面に座り込んでいる。

「イーガンは？ 一緒に走り出しただろ？」

「俺をここの援軍にして、一番魔物の多いところに突っ込んでいった」

「多いところって？」

「食料庫だ。ここからだ西になる」

「ちよっとなって来る」

「頼む」

幸助ならば一人でも大丈夫だとこれまでの付き合いでわかっているイエルツたちは、イーガンを頼むと告げて見送る。

教えられた方向へと向かうと確かに魔物が集まっていた。そこまですきくない食料庫に魔物が集まり、食料を食べるでもなくうろついている。周囲には猿から発せられる匂いが濃く漂っている。

幸助がたどり着いたタイミングで、イーガンは三メートル弱ほどのトロールに殴り飛ばされていた。地面を転がり止ったイーガンは、折れた剣を杖にして立ち上がり、吼えながら再び突撃していく。土にまみれ、血を流し、何度打ち倒されてもただ前だけを見て動き続けるその姿は、すごくかっこいいとは言えないものの、決して馬鹿にできないものだった。

少しだけ見惚れていた幸助は、そんな場合じゃないと魔法を使う。手のひらを空にかざし、イーガンが離れたタイミングで発動させる。

「打ち碎け紫電の雨！」

かざした手のひらからいくつもの雷光が空へと放たれ、それはすぐに折れ曲がり魔物たちへと降り注いでいく。

雷はこの場にいたほとんどの魔物を殺し、残った三体の魔物も幸助の蹴りですぐに息絶えることとなった。

「これで村に入り込んだ魔物は全部かな？」

「……おそろくな。建物に入り込んで一匹や二匹はいるかもしれないが」

「あとで点検すればいいさね。」

「そういや匂いが濃かったってことは食料庫の中にでも猿がいるんだろか」

魔物の死体を押しのけて食料庫に入る。食料庫の中にも魔物は入

ったようで、小麦などが散らかっている。そういったものと一緒に猿の死体が転がっていた。

猿がここにいるのは、イーガンたちから逃げたためだ。灯台下暗し、でイーガンたちはここに猿がいるとは気づかなかった。

食料がたくさんあり誰も来ないここに留まり続け、その結果発せられる匂いが溜まりに溜まって、保存していたものを取りにきた獣人が戸を開けたことで今日の事態になった。

それに近いことを推測しつつ幸助は外に出る。外にいたはずのイーガンの姿がなく、視線を動かすとよろよろと村人たちがいる方向へ歩く姿を見ることができた。

「怪我治療するから止まって」

差し出した幸助の手を払ってイーガンは首を横に振る。

「それは後回しだ。先にすることがある。こんなことになったんだ、すぐにでも謝らないと。許してもらえるかはわからないが、怒りのぶつけどころにはなれるはずだ」

村や獣人たちに被害がいくことを避けようとしたのに、結局はこうなってしまったことを悔いているのだ。

幸助にはどう言えばイーガンを止められるかわからず、後ろをついていくだけになっている。

獣人たちの近くまで来たイーガンは立ち止まり、土下座する。そしてこんなことになった原因を話していき、イエルツたちもイーガンの隣に移動し土下座をする。

話が終わり、辺りには静寂が満ちた。

獣人たちの長が進み出て、イーガンたちに話しかける。

「顔をお上げなさい」

イーガンたちの表情は怒られるのを怖がっている子供のようなのだ。

「許しますよ。ねえ皆？」

慈愛に満ちた声で長は皆に声をかけ、皆は頷く。誰一人として責める者はいなかった。

それを信じられないものを見たかのような表情で、イーガンたちは見ている。

「あなたたちが毎日懸命にこの村を守ってくれたことを知っているのです。」

いい加減な気持ちでは、あそこまで疲れ果ててもなお動こうとする思いは生まれないでしょう。

たしかにショックは受けましたが、それ以上に感謝の思いを抱いているのですよ。

だから許します。そしてありがとう、私たちを守ってくれて、好きになってくれて」

村に被害を受け、獣人にも怪我をした人はいる。それでも許すことが出来るのはすごいことでありつつ、かなりのお人好しだろう。幸助も度を越えたお人好し集団という感想を持っている。だがそのお人好しにイーガンたちは救われていた。一度踏み外した道に戻してもらったのだ。

イーガンの漏らす嗚咽が周囲の響く。イエルツたちも涙を流している。そんな彼らに獣人たちは寄り添う。

「一件落着かな」

生き残りの魔物を警戒しつつ、イーガンたちと獣人たちの様子を

見ながら幸助は平和な光景だと笑みを浮かべた。

この後幸助は全員の治療を行い、村の復興も手伝った。骨折などの重傷患者はいたが、幸いなことに死者はいなかった。

三日も経てば獣人たちの頑張りもあり、ある程度の修理はできた。乗ろうと思っていた船はすでに出発しており、いくらでも手伝える時間はあった。

イーガンたちも獣人たちに混ざって木材を切り出したり、運んだりと手伝っていた。ほかには殺した魔物たちから売れる部位を取り、街へと売り行った。それらは駄目になった食材の代わりや釘などの購入資金となった。

復興五日目、怪我人もいなくなり、復興にも自分がいなくて大丈夫と判断した幸助は村を出る。獣人たちは引き止めたのだが、幸助にも帰る場所があるので納得してもらった。

イーガンたちは村に定住することにしたようで、獣人たちと一緒に見送る側だ。好きな人たちを守り続けると気合を入れていた。その思いがあれば、今回のことで実力を上げたこともあり並大抵の困難には対処できるだろうと、思わせるものがある。

思いのほか長く滞在することになった村に別れを告げ、幸助は街を目指す。村人全員がその背を見えなくなるまで見続けていた。

その三日後、幸助は船に乗りカルホード大陸を出たのだった。

後のセブシック大陸を騒がせる事件は、この時すでにその芽を芽吹かせてた。

そのことに気づけるはずもなく幸助は、エリスとワイアーレに会うことを楽しみにしながら、甲板で海風に吹かれていた。

日常の始まり

セブシック大陸に戻った幸助は徒歩や馬車ではなく、転移魔法で帰ることにした。今まで散々徒歩での移動をしたのでさっさと帰ろうと思ったのだ。

馬車を使っても二日や三日で帰ることのできない距離を、四度の転移魔法のおかげで二日で帰る。

久々の家だなと思いつつ最後の転移魔法を使う。エリスの家で幸助の実家というわけではないのだが、帰る家と認識していた。

前はエリスがおらず締め出された形となった。もしかしたらまた同じことがあるかもなどと思っているうちに魔法は発動し、家の前に転移する。

「ただいまー……って家がない!？」

見慣れた家を一瞬幻視するも、見間違いで目の前にはなにものもなかった。

転移場所を間違えたかと周囲を見渡すと、以前幸助が作りかけた畑があった。手入れしていないので雑草が大きく育っているが柵にも見覚えあるので間違いない。

「ちょ、え？ 追い出された？」

おろおろと戸惑っている幸助の近くにエリスが転移してくる。一目見てよくわかるほど上機嫌な様子で幸助に話しかける。

「お帰り。待っておったよ」

「エリスさん!？ 家がないんだけど!？」

詰め寄る幸助を手で押し留めて、深呼吸でもして落ち着けと一声かけた。

「秘密にしておったが、引越し準備を進めていたのじゃよ。」

七日前に引越しが終わり、今まで使っていた家は魔法で縮小させて持っていた。だから家がない。納得したかの？」

「……魔法ってそんなことまでできるんだ」

「いろいろとできるのじゃよ。では家に帰ろうか」

そう言っただけで悪戯めいた笑みを浮かべエリスは手を差し出す。エリスの手をそっと握り、幸助は新しい家に思いをはせる。

二人はその場から消え去る。あとにはちょっとした広場が残るが、ここも一年と経たずに草に覆われ森の一部となるだろう。二人はここになんの用事もないので、その様子を知ることはない。

ちょっとした浮遊感の後、二人は新たな家の前に姿を現した。

家の周りは木の種類が違うが、環境としては似たようなものだ。

家は新築なので当然のごとく汚れなど見当たらない。頑丈に作ってもらったのでどっしりとした雰囲気だ。前の家と同じように魔法でいろいろと強化もしてあるのだろう。

「前のより大きいね」

「コースケの部屋とか専用の作業室を作ったからのう。その分大きくなった。それと作業室には一通りの道具を置いておるよ」

「自分の部屋は嬉しいけど、作業室ってよくわからない。大工道具とかそこらへんの道具を置いてるの？」

「ああ、違う違う。魔法の実験をしたり道具を作るための部屋じゃよ。物作りも可能ではあるがの」

「そんな部屋まで……ありがとう。でもお金かったんじゃない？いくら出た方がいいかな？」

「出さんでいい。というよりは既にもらっておる。竜の鱗や神域へいった依頼料から」

「あ、そうなんだ。じゃあいいね。でも作業部屋って使うかなあ」

勝手にお金を使われたことに対して幸助は思うところはなかった。貰ったお金が大金だったので、引かれて渡されていたと聞いても気にならなかったのだ。

「あつて不便ではなかる」

「まあ、そうかも。」

「そういえばこつてどこになんの？」

「ベラッセンから徒歩二日弱の森じゃよ。ベラッセンから離れ過ぎるとボルドスが困るかもしれんからの。」

「さあ、いつまでも立っていても仕方ない中に入ろう」

中に入ると大きめの玄関があつて廊下が左右に分かれていた。正面には二階に上がるための階段もある。左の廊下の端には地下への階段がある。

「一階にはリビングと台所と風呂とトイレと応接間と書庫、そして先ほども言った作業室を置いてある。二階は私室と客室だ。地下は倉庫と大きめの実験を行う部屋がある。」

あとで確認しておくといい」

「うん」

「お前さんの荷物は部屋に運び込んである。ついでに家具もある程度買い揃えてある。足りないものがあれば買い足せばいい」

「ありがとう。じゃあ荷物置いてくるよ」

「うむ、旅先での話を聞きたいから下りてくるようにの」

二階のどこに自室があるのか教えてもらって上がっていく。

建物を正面から見て左側が住人のスペースで、右側が客室といった造りになっている。部屋の広さは十畳強で、日本人の感覚だと広いと思えるものだ。

自室の中のもののほとんどは新しいものだ。服や下着やタオルはベッドの上に畳まれていて、ほかの雑貨品は机の上と机横の床に置かれている。船に置いたままだった荷物も一緒だ。もともと持ち物は少なかったもので、部屋の中はまだ広々としている。

幸助は荷物を置くついでに、置かれている物もしまっていく。置き方などに特にこだわりはないので時間はかからなかった。

「これでいいかな」

見苦しくないだろうと判断して、幸助はエリスに買ったお土産と洗い物を持って一階に下りる。

お土産はなにを欲しがっているのかわからなかったので、行った先でみつけた染物のハンカチだ。特殊な染料で作られているらしく、温度で柄と色が変わる。

「これお土産。エベルレス染めってやつらしいよ」

「変化するという染物だな。ありがとう、大切に使用してもらおうよ」

リビングにいたエリスにお土産を差し出す。エリスは一度ハンカチを広げて模様を見て、丁寧に畳みポケットに仕舞う。

テーブルにはお茶と茶菓子が置かれている。ハーブ系のお茶のようですっきりとした匂いが漂っている。

エリスの正面の椅子に座り、洗い物を床に置く。

「竜にさらわれた後の話を聞かせてもらえるかい？　竜はどうしてコースケを連れて行ったのか気になっていたのじゃよ」

「あの後はエゼンビア大陸に行ったんだ。大陸近くまで行ったら放

り投げられて砂浜に埋まった。そこを通りがかったシャイトっていう元情報機関所属の人に助けてもらって、一緒に近くの山まで喉にいい薬を取りに行った。薬を手に入れた後はカリバレット公国の首都に行つて、歌姫に歌を教えて、ちよつとした用事をすませた後カルホード経由でセブシクに帰ってきた。カルホードで名物料理を食べるため獣人たちの村にも行つたね。

簡単に説明するとそんな感じ。

竜が俺をさらった理由だけど、よくわからなかった。もしかするとお気に入りの歌姫関連でなにかあったのかもって感じかな」

「さらつと聞いてだけでも突っ込みどころが多すぎる。一人で行動させると相変わらず厄介事に関わるのう」

呆れた表情で言う。

「でもシャイトが厄介事を抱えてるって知らなかったし、まさか王族に会うために動いてるとか予想もできなかったよ」

「そのシャイトというやつに最後まで付き合わず、適度なところでわかれようと思わなかったのか？」

「お金貰ったらそうしようと思ってたんだけど」

「だけど？」

「歌姫に神様から神託があったらしい。俺が来るって」

「はあ？」

どうして幸助が行くことを知らされたのかわからず、エリスは疑問の声を上げる。

「歌姫に異世界の歌を教えて欲しかったみたい」

「なるほどのう。それなら呼び寄せるか」

「断ると後ろ暗いことがあると思われると思って会いに行くしかなかったよ。あ、その時に称号増えたんだ」

カードを見せる。

「歌姫の弟子か。なにか効果はあるのか？」

「なにも」

「そうか。また微妙に使いにくい称号が増えたものよ」

エリスの言葉を否定できず、幸助は苦笑を浮かべた。

この称号は王族にコネがあると宣伝するようなもの、目立つつもりがないのなら見せびらかすわけにはいかない。よってほかの称号のように得たことを隠しておいた方がいいのだ。

「歌姫はコースケのことについて、神からなにか聞いていたのか？」

「歌姫の知らない歌を知ってるってことだけ。竜殺しって言葉は一言もなかった」

「ならばいいが」

エリスはお茶を一口飲み、同時に吐きたくなった溜息を飲み込んだ。これからも厄介事についてはハラハラさせられるのだろうかと思いついてきた疑問に、そんなことないとは思えないエリスだ。

「これからなにをするのか決めているのかの？」

「いんや、決まっているのはお土産を渡してくるくらい。たまにギルドで仕事請けようかって思ってる」

「そうか、まあのんびりするといい。」

ああそうだ。今日はコースケが料理作ってくれんか。久々に美味しい料理を食べたいしの」

「了解。じゃあ洗濯してくる。エリスさんはなにか洗濯するものある？」

「今日の分は既に終わっとる。物干し台へは台所そばの扉から行け

るぞ」

エリスに教えられた方へと歩き洗濯を済ませた後、幸助は家の中を探索する。

台所の横には冷蔵庫の役割を果たす冬と同じくらいの温度の食料庫があり、中は六畳ほどの小部屋で壁に棚が作られていた。棚の一番上には冷凍の魔法陣が描かれていた。

書庫には当然ながら本が並んでいる。何冊が手にとってみると、魔法関連だけではなく、様々な種類の本があった。だが危険と思われる魔法についての本はなく、それらはエリスの部屋に保管されている。

地下実験場はまだ一度も使われていないようで、綺麗なままだった。

地下倉庫の方は二種類に区分けされていて、日用品は手前、魔法関連は奥に置かれている。魔法関連はエリスの許可をもらってから触ろうと今は近づくこともせず離れた。

大体見て回り、庭に出る。引越す前に作りかけていた畑をこっちで作ろうと思いいい良さげな場所を探していく。

そうやって時間を潰し過ぎていった。

次の日、幸助は朝食を食べた後、お土産を持ってベラッセンに向かう。シディの宿の前に転移して、宿の中に入る。シディはすぐにみつかった。カウンターでなにか作業をしていたからだ。

「いらっしやいませ……あ、コースケ君！ お帰り！」

誰か入ってきたことに気づき顔を上げたシディが、その誰かが幸助だと気づき顔を綻ばせる。

「ただいまです」

「わりと長い旅だったね。空き部屋あるけどどうする？」

「家から通ってるから」

「あらら。お客さん一人いなくなるんだね。」

家ってどこらへん？ 新しく建てたって話は聞かないんだけど」

「街の中じゃなくて外に」

この返答を聞いて凄く驚いた表情となったが、すぐに落ち着いたものへと変わった。

「外！？ 危ないんじゃない？……ってコースケ君強いから大丈夫なのかな？」

それに頷きつつシディの分のお土産を取り出す。

「魔法で守っているんで危険は少ないよ。」

これ旅のお土産です」

買ってきたのは細やかな細工の施された木製の櫛と、旅先で泊まった宿の感想だ。

感想の方はこれからの宿経営に役立つかなと、簡単なレポートを作っておいたのだ。

どちらもシディには嬉しいものだったようで、満面の笑みで礼を言う。

「ありがとね！ 嬉しいお土産だよ！ 今度宿に泊まることがあったらサービスしてあげる」

「いつになるかわからないけど、楽しみにしてる」

「そうしておいて。」

あ、そうそう。もうギルドには行った？」

行っていないと幸助は首を横に振る。

「ギルドの人から、コースケ君を見かけたら来るように伝えてくれて頼まれたんだよ。」

暗かったり、思いつめたような顔じゃなかったから悪い話ではないと思うよ」

「ギルド？ 後で行ってみる。じゃあほかにお土産持って行くから」「ん、またね？」

ひらひらと手を振ってくるシディに振り返し宿を出る。

その足で孤児院へと向かう。時期は春。雪はすっかりとけ、暖かな陽気に道行く人々の表情も緩んでいる。

お土産は特に親しくしている人の分しか買っていない。この街だとクラレスも該当するが、クラレスも旅に出ていたことは知っているので必要なしと判断したのだ。食料品が買えればギルドにも思ったのだが、賞味期限がもたないことはわかっていたので止めておいた。

「こんにちはー」

挨拶しながら入っていくと、庭先で遊んでいる子供たちの様子を見ているウェーイを発見した。

「おや、コースケさんお帰りなさい。今ウィアーレは買い物に出かけていていないんですよ。もう少ししたら帰ってくるかと」

「少し待たせてもらっても？」

ウェーイの座っているベンチに座らせてもらう。

「ええ、構いませんよ。」

「そういえば竜にさらわれたと聞きましたが、本当ですか？」

「はい。どうしてさらわれたかわかりませんが。エゼンビア大陸まで運ばれました」

「……大変な経験しましたね」

「たださらわれただけで、攻撃されるといったことはなかったですから、珍しい経験したと思うことにします。

これ子供たちにお土産です。旅先でみつけた玩具をいくつか買ってきました」

「これはこれは、本当にありがとうございます。子供たちもすごく喜ぶことでしょう」

積み木や人形やパズルなどが入った布製の袋を渡す。孤児院のお土産はこれだけだ。子供たちが喜びそうなお土産が一番ではないかとウィアーレと相談し決めたのだ。

出されたお茶を飲みながら雑談していると、ウィアーレが買い物から帰ってきた。お菓子を買ってくる約束をしていたようで、子供たちに群がられている。幸助には気づかず、食堂に向かい買ってきたお菓子を与え、ほかに買ってきた物をしまいなにをしようかと考えている時、ウェーイに声をかけられようやく幸助に気づいた。

「来てたのなら声かけてくれればいいのに！」

「いやぁ子供たちの世話で忙しそうだったし」

いつ気づくかなとウェーイと二人で少し楽しんでいたりもした。いつまでも気づく様子がなかったたので声をかけたのだ。

深呼吸して気持ちを落ち着かせたウィアーレは、幸助をしっかりと見て頭を下げた。

「お帰りなさい」

「ただいま」

「心配したんですから。無事で本当に良かったです」

「ちょっとしたハプニングに巻き込まれはしたけど元気に旅してたよ。美味しいものとか食べてきたし」

「どんな旅だったのか聞きたいです」

「いいよ」

エゼンビア大陸に着いてからのことをざっと話していく。シャイトを手伝った潜入のことは話せないの、そこはぼやかした。それでも有名な歌姫に会って一緒に歌ってきたと知り、ウィアーレとウエイイは大いに驚かされた。

それと獣人の話はウエイイにとって懐かしいものだった。なぜなら昔の仲間に犬の獣人がいたからだ。ここ十年ほど会っていないようで、元気になっているのかと懐かしそうな表情となっていた。

話はそれなりに長くなり、昼食をご馳走になった。

「そろそろお暇するよ」

「これから用事があるんですか？」

「ギルドに行かないといけないみたいで」

「ああ、なにか呼んでいるらしいですね。私にも会ったら来るよう伝えてくれて頼まりました」

「なんで呼ばれてるか知ってる？」

「依頼を頼みたいんじゃない？ どうしてもコースケさんに頼みたいと依頼する人が多かったとか？」

ウィアーレも詳しいことは聞いていないので推測するしかない。

「そうなのかな。一緒に行く？」

「いえ、今日は掃除をしようと思っていたから。また今度誘ってください」

「わかったよ、じゃあね」

孤児院を出て真っ直ぐギルドへと進む。

ギルドに入って、顔見りを探す。受付はよく知らない人で、周囲を見渡すとウィアーレを指導していたディアネスがいた。

「こんにちは」

「はい、こんにちは……ってワタセさん!？」

声をかけられ幸助を見たディアネスはとても驚き、周囲の注目を集める。回りに騒がせたこと咎び、幸助へと向き直る。

「呼ばれてるようなので来たんですけど」

「こちらへどうぞ!」

この場では話せないことなのだろう。幸助を引っ張り、客室へと向かう。

幸助に椅子に座ってもらい、ディアネスは幸助に渡すものがあるため席を外す。

客室に戻ってきたディアネスは、緊張した様子で手に袋と書類を持っていた。

「こちらをどうぞ」

「中を見ても？」

「はい。ワタセさんのものですから」

袋の中身は閃貨だ。十枚二十枚ではない。幸助が何枚あるのか数える前にディアネスが教える。

「全部で五十枚あります」

閃貨のほかに銀貨や金貨でも送られてきたのだが、ギルド側が両替しておいたのだ。

「閃貨で五十ですか！？ ……大金ですけど、なんで俺に？ ギルドに貢献したからという訳でもないでしょうし」

「これは冒険者ギルドからではありません。商人ギルドからの預かり物なのです」

「……もしかしてオセロの」

商人ギルドとの繋がりはおセロ関連くらいしかなく、それ以外で大金を送ってくるような用は幸助は思いつかない。

「聞いた話ではその通りです。オセロという新しい遊びを思いつき、遊ぶための道具売買を商人ギルドへ頼んだと。」

その売り上げのワタセさんの取り分がその閃貨です。
こちらの書類に受け取ったとサインをお願いします」

差し出してくる書類に名前を書く。

それを見てディアネスは安堵の溜息を吐いた。その様子を不思議そうに見る幸助に理由を話す。

「閃貨五十枚は大金です。それこそこのギルドの予算半年分と同じくらいに。」

そんな大金がそばにあって職員全員心乱される思いでした。魔が差すような思いをした職員は少ないと思いますよ。

だからそばからなくなってほっとしているんです」

お金が送られてきた当初はそうでもなかったのだ。最初は十五枚ほどで、大金だなと思うくらいだった。だが時間が経つごとに貯まっていって閃貨に緊張感が増していった。銀貨一枚くらいと思わず心

揺れる職員も多かった。

「ちなみに好奇心からなんで答えてもらわなくともいいんですが、その使い道って決まっているんですか？」

「今のところはまったく。住むところはあるし、装備も不自由してないし、特別贅沢したいってわけでもない。

使い道を思いつくまでは、筆筒の中に入れっぱなしだと思います。これだけの大金いきなり使えって言われても思いつきませんよ」

「そうですね。私もちょっと思いつかないわね」

と言って十日もせずに使い道を思いつくことになろうとは思っていない幸助だ。

「そういえば……」

「どうしたんですか？」

なにか思いついた様子の幸助にディアネスが問いかける。

なんでもないと言助は首を横に振る。

思いついたことは税金のことだ。これだけの収入、日本では税金で多く持っていかれる。だがこちらではそんな様子はなく、そこらへんどうなっているのだろうと思ったのだ。

ここで聞くのも変だと思い、尋ねることはしなかった。帰ってエリスに聞くことにした。

税金はある。けれども現代日本と違い、収入によって支払う額が違ふというものではなく、一定額を支払うというものと買い物をする時に含まれているものの二つ。

幸助は前者を払ってはいない。違法というわけではない。前者の税金は町や村に住んでいるものが支払うものなのだ。昔の地球の税と同じように外敵から守ってやるかわりにお金を払えというものだ。

なので町村に住んでおらず、守られていない幸助やエリスは税を払う必要がない。

二人のように税を払っていない存在がいる。それはギルドに登録した冒険者たちだ。彼らは町村に住んでいても税を支払わずともよい。優遇されているというわけではない。税を免除される代わりに、領主からの拒否不可の徴兵があるのだ。しかもその兵役に給金はない。

戦い慣れた戦力を容易に確保するための手段としての税免除なのだ。一般市民からの徴兵には給金が出るので、優遇されているとはいえない。

もし徴兵が嫌ならば、税金を払えばいい。ウィアーレのように武力に自信のない者はそうしている。

徴兵から逃げ回る者は全ギルドに情報が回され、ギルドの使用を拒否されるようになるし、要注意人物として指名手配される場合もある。

「いえ、なんでもないです。それより呼ばれていた用事ってお金のことだけですか？」

「いえ指名の依頼もあるのよ。ほとんどはほかに信用できる人に回したけど、どうしてもあなたがいいって人もいる。そういった依頼を受けてもらいたくて」

「べつにかまいませんけど、今日は依頼の確認だけでもいいですか？ 大金を持ったまま依頼を受けるってのはさすがに」

「受けてもらえるのなら大丈夫よ。」

「こちらが依頼になります、確認をお願いします」

枚数にして三十弱といったところだろう。これで減らしたのだから元々は何枚あったのか。

置かれた依頼書の一番上から見っていく。

いらぬ家具を捨てたいので手伝ってくれ、といった雑務系依頼

が多いのだが、その中に風変わりなものがいくつかある。

「宴会芸の代行……こんなものまで依頼してくるんですね」

「そういった依頼も時々あります。さすがにそれは受けなくてもいいとは思いますがね」

「歌でもいいのなら受けてもいいんですけど、そこんどこどうなんでしょう？」

「一度依頼人に会って確認してみてもどうでしょう？ 歌でもいいと許可が出れば受けてみては？」

「そうしますか」

一時保留と書類に書き込む。

「次は新商品の開発案を出してほしい、か。冒険者に頼むことじゃないですよね？」

「はい。私もそういった依頼は初めて見ました。おそらく身内などとの話し合いで煮詰まって、外からの考えを取り込もうとしたのではと私たちは考えています」

「これも話を聞いてみないとわからないと」

この依頼も一時保留枠だ。

「最後に弟子入り志願……」

「どうします？」

ギルド依頼経由で弟子入り志願する、始めこの依頼を受けた職員は耳を疑った。直接本人に頼めば済むことなのだ。どうしてギルドを通すのか思わず聞いた職員に依頼者は、断られにくいようにと答えた。ギルドを通せば絶対受けてもらえるわけではないと説明したのだが、ギルドを通せば弟子育成を途中で放り出せないからこれで

いいと言ったらしい。

「依頼の途中放棄となって、違約金と信頼の低下というマイナス面が発生しますから上手い手かもしれません。

もしこの依頼を受けるのなら、こういった手段を使わなければならぬほど手を焼く人物かもしれないと考えた方がいいです」

「これは断る方向でいいかな」

「それがいいかもしれませんね」

ギルドを出てから幸助は気づいたのだが、弟子入りを認めると相手の称号に『竜殺しの弟子』とでる可能性がある。『歌姫の弟子』という称号を持っている幸助にとって外れた予想とは思えず、この依頼は受けないことにした。

「今日はこれで失礼します。この依頼書は持っていいんですか？」

「物をよくなくすタイプですか？　もしそうなら預かりますが」

こちらに来て竜にさらわれたこと以外で手元から物がなくなったことはない。それを踏まえて幸助は首を横に振り、持つて行くことにした。

ディアネスに別れを告げ、ギルドを出た幸助は家に帰る。

その後、弟子入り依頼を持ってきた女性が依頼はどうなったか聞きに来た。ディアネスが断る方向で考えていると答えると、一度本人に直接交渉させてほしいと頼み込む。熱心さと煩わしさからディアネスは渋々それを聞き入れ、また明日来るように告げた。

日常の始まり（後書き）

夢語り

夢を見る。

遠い底から聞こえる声の夢。

呼ばれているわけではなく、ただ聞こえてくる。

怖い声でありながら、ほんの少しだけ親しみに近いものも感じる。
そんな夢を時々見る。

夢を見る。

少しだけ未来でありつつも、過去の夢。

封じていた記憶が解き放たれて、懐かしい記憶が夢となる。
もう少ししたら起こることと知りながら、それを待つ。

待ち遠しい思いを抱いて今日も夢を見る

夢を見る。

いつか来る日の復活の夢。

明確な輪郭ではない、見知らぬ誰かを見る。

それに出会うために眠り続ける。

起きる日が近いと知らぬまま、おぼろげな期待が夢となる。

夢を見る。

望んだ光景が叶う夢。

それはすべてをなぎ倒し、すべてを飲み込んでいく。

その光景は素晴らしく、夢とわかりつつも心が踊る。
早くそれを見たいと夢から覚める。

>br<

なにをしよう。

目の前に広がる道は多く、すぐには決められない。

迷う間にもさらに道は見つかっていく。

いつかは一つを選ぶのだろうけど、今はただ回りを見るだけで精一杯。

いつか踏み出すその日まで、手探りを繰り返し立ち尽くす。

※本編に載せるのもどうかناと思ってあとがきに

この部分は読まなくても本編に大した影響はないかと

いづれ消すかもしれません

弟子ではなく生徒でもないなにか

しばらく依頼を片付けることを優先するとエリスに告げて、幸助はベラッセンへとやってきた。

特に予定があるというわけでもないのに、エリスも反対意見はなく適度に頑張ってこいと見送る。

報酬の閃貨はタンスの中に放り込まれた。立地上、泥棒にあう確率はかぎりなく低いので粗雑な扱いでも問題ない。

始めに宴会芸の依頼人に会い確認を取った後は、短時間で終わる雑務系依頼をこなしていく。

倉庫の荷物移動、家具配置換え、木材の単純加工を終わらせた頃には午後三時過ぎといった感じで、切り上げるには早いかもしれないと幸助は考えたが、もう一件いくと今度は夕飯に間に合わなくなるかもしれないと思い、今日のところはこれで終わることにした。

「こんにちは」

今日はディアネスが受付の一人だったので、そこで報酬をもらうことにした。

「こんにちは。どの依頼を終わらせたんですか？」

「今日はこの三つです。あ、あと宴会芸の確認もしてきました」

「わかりました。依頼人からの確認もありますね。少々お待ちください」

ちゃちゃつと書類に終了したことを書き込み、報酬を準備する。

「こちらが報酬の六百ルト、銀貨一枚銅貨十枚となります」

「確かに」

報酬を確認し財布に入れた幸助に、ディアネスが話かける。

「この後時間ありますか？」

「はい、大丈夫ですけど？」

もしかしてデートのお誘いか！　と思うもすぐに既婚者と思い出して、ないかと否定した。

「実は弟子入りの依頼の件なんですが」

「ああ、あれは断ることにしましたよ」

「はい。こちらもそのつもりだとわかっています。

それで依頼人にその旨を伝えたところ、一度会って直に頼むと申されまして」

「直接会っても断る方向なんですけど、それで構いませんよね？」

「はい。もちろんです。

依頼人を呼んできますので、客室で少々待ってもらいたいのですが、よろしいでしょうか？」

受付を交代したディアネスは、領いた幸助を昨日と同じ客室に案内し、職員の一人に使いを頼む。

二十分ほど経ち、使いに出た職員と依頼人がギルドに入ってきた。また受付を交代したディアネスが依頼人を連れて客室に向かう。

「ワタセさん連れてきました。こちらが依頼人のロイシーン・モンテアさんです」

ディアネスの隣にいる四十近い女性が、紹介を受けて頭を下げた。予想以上に年をとっている人の登場に幸助はやや呆けた表情を見せる。

「えっとこの人が弟子入り志願してんですか？」

「いえ、違います。モンテアさんの息子さんを弟子にとってほしいのだそうです」

「あーなるほど」

依頼書には息子の世話をしてほしいといったことが書かれていなかったので勘違いしていたのだ。

「あの、あなたがこのギルドで上位の冒険者でよろしいんでしょうか？」

「上位？」

そうなのかと首を傾げ幸助は視線をディアネスに向ける。

視線の意味をきちんと読み取ったディアネスは、肯定し頷いた。

「そうらしいです」

「えと、らしいって？」

「自覚がないからですよ？ 依頼を受けてこなすを繰り返してきただけですから」

「こちらのワタセさんは仕事ぶりが評価され名が知られていったのです。どのような仕事でもコツを掴むのが早く、丁寧な仕事が高評価に繋がっていきました」

幸助の言葉の足りない部分をディアネスが補足する。

「戦いの方はどうなのでしょう？ もしかして仕事ができるだけで、実力的には低かったりするのでしょうか？」

「いえそのようなことはありません。ここらでトップランクの魔物を一人で倒したという実績がありますので」

「そうですか。でしたら安心ですね。息子のことお願いできないでしょうか」

「それについてはお断りします」

決めてあった通り、幸助はきっぱりと断った。

「そこをなんとか」

「どうして俺なんですか？ 俺じゃなくてもいいと思うんですが？」

「強い人に預ければ息子も強くなると思いますし、育つまでの身の安全が保障されると思いますから」

ロイシーン自身は戦いのことなど知らない一般人なので強くなる方法など詳しいことは知らない。だから強い人に預けて鍛えてもらえば、息子もその人と同じくらいまで強くなれるのではと思っています。

あとは元冒険者の知人が幸助のことを薦めてきたのだ。冒険者の世界についてはなにも知らないロイシーンはその薦めに従い、幸助を指名したのだ。

「そんなものか？ まあ、それでも断るんですが」

「どうすれば受けてもらえるんですか？」

「どうすればっていうか、ちょっと事情があって弟子を取るつもりはないんですよ」

「事情といいますと？」

気になったのかディアネスが問いかける。

「話せるようなことではないので。」

それに依頼という形で弟子入りとなるとお金をもらいますが、払えるんですか？ 最初の一度支払うだけで済むってことはないです

よ」

弟子をとると長時間そのことに拘束される。それなのに最初の一度お金を支払うだけというのは、幸助側に利が少ない。

「あまり高額だと支払えないんですが、どれくらいになるんでしょうか？」

幸助は相場を知らないので答えることはできず、ディアネスに視線を向ける。

ディアネスは少しだけ考え込み口を開く。

「そうですね……強くなるために通う道場は一ヶ月に銀貨一枚。

今回の場合は専属で教えるということになりますし、ワタセさんの実力も加味すると月に銀貨三枚といったところでしょうか」

「銀貨三枚ですか……切り詰めればなんとか出せるかもしれません」

難しい顔をしていることから、資金的余裕があるわけではないのだろう。それでもなんとかするといった表情を見せている。

「一人で決めていますけど、旦那さんはなんて言っているんですか？」

「夫は十年前に依頼先で魔物に殺されてしまいました」

「あー……思い出させてしまいすみません」

幸助の謝罪に、大丈夫ですと答えを返す。

「でもそのような経験をしたのならば、息子さんを戦いに出すようなことは止めたいのでは？」

このディアネスの疑問は、幸助も感じたものだ。

「私は止めたのですが、息子がどうしても冒険者になりたいと。夫の仲間さんたちから聞いた話で憧れを抱いたようで」

「仲間がいるんなら、その人たちに鍛えてもらえばいいと思うんだけど。」

そこんどこなんですか？」

「その方は国外に住んでまして、遠いところに預けるのは私が嫌なのです」

夫が遠くで死んだので、息子を長期間遠くにやりたくはないのだ。また消息がわからないうちに死んでしまうのではないのかと心配している。冒険者になることは承諾しても、近くにいてほしいという部分は譲れない思いなのだ。

「どうかよろしくお願いします」

深々と頭を下げて頼む。雰囲気的に土下座も厭わないといった感じだ。

「んー……そうですね、弟子にする気はやはりありません」

「……そうですか」

諦めたような溜息を吐くロイシーンに、幸助は続ける。

「ですが、ちょっとしたアドバイスをするくらいならいいですよ。お金も必要ありません」

子を大切に思う母心に、少し心を動かされた幸助は態度を緩める。これくらいならば称号を得るといったことにはならないだろうと判

断した。

先の話だが、結局ある程度の付き合いをしてしまい、称号を得るに足る関係を築くことになってしまう。

しかし称号が発現することはなかった。

それは神々がちよつとした小細工を行ったからだ。

称号発現システムは神々が生み出したもので、今は自動化されていて神々の手を離れている。たまに神々自身が称号を贈ることがあるが、本当に稀なことだ。

自動化されているとはいえ、元々が神々お手製のもの。称号発現阻止といった細工は大した苦労もせずに行えるのだ。

幸助の行動を見て暇潰しできた神が、その礼として細工を施したという背景があった。

この細工が困難なものならば、神々は手を加えることなく称号が発現していただろう。簡単だからこれくらいはやってやろうと考えたのだった。

「本当ですか!？」

喜色に満ちた表情でロイシーンは幸助の手を強く握る。その迫力に押され一歩下がる幸助。

「ありがとうございます!」

「注意してほしいんですけど、弟子にするわけじゃないから息子さんが俺から離れていけば追うことはありませんし、指示に従わなくても命令する強制力もありません。あと必ずしも強くなるわけではありません。いいですね?」

報酬受け取り拒否しているので、依頼という形にはならなく、依頼の途中放棄は意味をなさない。

ロイシーンは幸助の言葉に迷う様子を見せるも、ここでごねると

少しの助力も得られないと判断し領いた。

「いつ息子に会ってもらえるんでしょう？」

「明日からでもいいですよ。朝の九時頃ここに来てもらえれば。あ、息子さんの特徴を教えてくださいますか？」

身体的特徴を教えてロイシーンは帰っていく。

幸助はディアネスに少し聞きたいことがあり残った。

「これってギルドを通しての依頼って形にはならないですよね？」

「はい。お金が動いていませんから。紹介の手助けをしたただけという形になるかと。まあ、それも大して意味はありません。」

ボランティアというのが一番当てはまると思います」

「ボランティアか、それなら育成を優先しなくてもいいですよね？」

「問題ないでしょう。誰かの意思ではなく、自らの意思で動き行うのがボランティアだと思いますから。」

「お聞きしたいのですが、息子さんをどのように育てるつもりですか？」

「本人がどんな風にやっていきたいのかっていうのを聞いてないからなんとも言えないけど、とりあえず体力上昇とかの基礎トレーニングをやってもらおうかなと。最低限の実力がついたら簡単な雑務系依頼を受けてもらって、お金を貯めさせて装備を整える。あとはここで見ることでできる資料で勉強させる。」

「こんな感じですね」

「外に連れて行って魔物と戦わせないのですか？」

「しないかな。既にある程度の実力があるならそれでもいいけど」

「ロイシーンは安全第一に考えていましたし、その方向性でいいのかもしれませんがね」

この世界での弟子育成の方法は、ディアネスの方が主流だ。とり

あえず武器の扱いを教えて、その後雑魚相手に実戦を経験させて、戦い方を学ばせる。魔物を倒すことで力は上昇し、すぐに強くなっていく。

幸助のようにトレーニングをさせる者たちは少ない。トレーニングよりも実戦で得るものの方が多いからだ。駆け出しのうちは、トレーニング一ヶ月で上昇した力と三日の実戦で得た力が同等だったりする。

こういったわかりやすい差が、基礎能力上昇のトレーニングをさせるという考えをなくさせていった。

しかしながらトレーニングがまったくの無意味かというと違う。知られていないがトレーニングにも意味はある。トレーニングをした者としていない者では魔物を倒して得られる力の量が微妙に違ってくるのだ。

もし実験として、事前に一年トレーニングした者としていない者が同時に魔物との戦いを始めてまったく同じ魔物と戦ったとして、一年後に両者の力を計測してみると、その差は明らかになるだろう。実力が上なのはトレーニングをした方だ。

トレーニングしていない者の得られた力の量を100と仮定すると、トレーニングした者が得られた量はそれに+20される。

トレーニングすることで力の吸収率が上がるのだ。

一戦一戦ではほんの少しの違いだが、蓄積していくと馬鹿にできない量になる。

これに気づかない者たちは多い。幸助も気づいていないのだが、強くなるにはまず基礎トレーニングという考えが浮かんだのだった。ロイシーンの息子がトレーニングを受け入れるのならば、彼は強くなる確率が高い。

幸助が依頼を受けて弟子に取っていれば、訓練の指示に逆らえない彼は強くなっただろう。けれども幸助が選んだのはアドバイスするという一歩離れた立ち位置で、トレーニングを強制させることは無理だ。

未来の強者が生まれるかどうかは、まだわからない。

夜が明けて、幸助はギルドの中でコーヒーを飲みつつ時間を潰していた。ロイシーンの息子コキアが来るのを待っているのだ。待っているといってもコキアが遅刻したわけではなく、幸助が早めに来ているだけだ。

九時前五分といった頃、ミルクチョコレート色の髪に深緑の目を持つ、ロイシーンから聞いた特徴そのままの少年がギルドに入ってきた。着ている物は頑丈そうな革製の服とジーンズで、腰には木剣を下げ、誰が見ても駆け出しとわかる風情だ。

雰囲気的には好奇心と緊張が入り混じったものだ。初めて入るギルドの中を目を輝かせて見回している。その場に立ち止まっているせいで、通行人に注意され謝りつつ歩を進める。

「おはよう。君がロイシーンさんの息子でコキア？」

近寄り話しかけた幸助に少し驚いた表情を見せた後、すぐに言葉の内容に気づいたコキアは頷く。なにに驚いたかというのと、思っていたよりも若い人物だったということにだ。

コキアの年齢は十四で、顔には微かに幼さが残っており、驚いたりとそれが強く出る。

「あんたがワタセさん？」

「うん。アドバイスする程度の付き合いだけど、よろしく」

差し出された手を握り返し、コキアは頭を下げた。

幸助は椅子に座るように勧め、自分も椅子に座る。そしてコキアが座ってから話し始める。

「まずは初めまして、名前は知っていると思うから自己紹介は必要

ないよね？」

「はい」

「んーなにから始めようか……そうだねカードは持ってる？」

「持っていないです」

「じゃあカードを作ってギルドに登録するところから始めようかね」

嬉しげに頷くコキアを連れて、カウンターに向かう。

そこでカードを作り、登録を済ませる。その時に幸助はカードを作るのにお金が必要なことを知った。幸助はエリスに作ってもらったので、お金が必要になるとは知らなかったのだ。

お金はコキアの手持ちでは足りず、餞別として幸助が出しておいた。

ちなみにコキアのステータスはEとE+とE-が並ぶ平凡なものだった。一番高いのは精神のE+で、低いのは頑丈のE-だ。この情報から魔法が得意になるかもしれないと読み取れる。

「これでギルドの一員となったわけだ。説明にあったようにルールを守ればギルドに迷惑をかけることもないし、おかしいことにもならないだろうさ」

「これで依頼を受けられるんだ……早速なにか受けよう」

「まあ、待って」

依頼書コーナーへと行こうとしたコキアを幸助は止める。

首後ろの襟を掴んだので、苦しそうな声を上げた。振り返り恨めしげな目を向ける。

「依頼を受ける前に、コキアのこれからのことを考えよう」

「……俺のこれから？」

「俺はコキアを強くするために助言を求められたんだ。そのためにはコキアのことを知らないといけない。だから今日はそのために時

間を取る。わかった？」

幸助は始めからそのつもりで、自身に来ている依頼書は家に置きっぱなしにしていた。

未練があるように依頼書コーナーを見ていたコキアは、渋々といった感じで頷いた。

二人はギルド内にある小さな訓練場に移動する。もともと利用者が多くはないことに付け加え、まだ朝なためか訓練場には誰もいない。

「冒険者として一步を踏み出したわけなんだけど、コキアはどういった冒険者になりたい？」

「魔物をかつこよく倒せて、すごい依頼もバンバンこなせるような冒険者！」

ずっと考えていたことなのだろう、幸助の問いに即答する。

「夢に満ち溢れてるねー。目標を高く持つことはいいらしいから、それでいいと思う。」

んで、その目標に到達するためには戦闘能力は高く、どんな依頼が来てもこなせるだけの判断力と知識を持つ必要があるのはわかる？」

幸助の言葉にキョトンとして、その後考え込むコキア。漠然としたイメージを持っていて、そこに到達するための工程が抜けていたのだろう。

コキアの様子から、明確な道筋をイメージできているわけではないと幸助は察する。

「ただ依頼を受けているだけじゃ、その目標には届かない。」

目標通りの冒険者になりたいのなら、日々の絶え間ない訓練や貪欲なほどの知識の吸収が必要なんだ。

努力なしですごいことができるのは天才の中でも一握りくらいだよ。

俺が言いたいことはわかる？」

「うん。つまりはいつまでも努力しろってこと」

「そうだね。あとは信頼できる仲間をみつけること。一人ではできないことも、二人三人と集まればできるから。

チームの作り方まではアドバイスできない。俺はどこかのチームに入っていないし、作ってもないから」

この会話でコキアのイメージしているものが明確になればと思いつ話した。

「まあ、こういった考えがあると頭の片隅にでも置いておけばいいよ。

それじゃ次はちょっとした実技だ。

体力が尽きるまで、攻撃してきて。反撃はしないから防御のことは気にせず、攻撃のことだけ考えればいいよ。ただし、止まれと言うまで剣は振り続けること」

さきほどの会話について考えていたコキアに指示を出し、幸助は鞘をつけたままの剣を手を持つ。

考えることを止めたコキアは腰の木剣を持ち、すぐに振り回してくる。

洗練されているとはお世辞にも言い難い攻撃で、誰かに指導を受けてはいないとわかる。

その攻撃を受けながら幸助は悪いと思われる箇所を覚えていく。指摘は後だ。今はどこがどのように無駄になっているか知ることに集中している。

コキアはペース配分を考えず最初から全力だったため、五分も経たずに剣の動きが鈍り始めた。十分も経てば息は上がり最初の勢いはなくなった。それでも幸助は合図を出さず、コキアは剣を振る。

さらに十分経ち、勢いのない剣の重さだけの威力の斬り下ろしを受けて、止めるように言った。

コキアはその場に座り込んで体力回復に努める。少し落ち着くのを待ってから幸助は口を開く。

「最初にやってもらいたいののは体力作り。

実際に動いてみてわかったと思うけど、体力ないと攻撃し続けるのも難しい。ほかにも長く動き続けるためには体力が必要。護衛の依頼を受けた時とかずっと歩きっぱなしで、そこに戦闘も加わると疲れ果てる。体力不足で依頼の途中で力尽きるとかなったら、報酬減らされることになりかねない。最悪依頼を解除されて放り出されることもある。

そんなことにならないよう、体力はきちんとしてほしい。

具体的には毎日町の外周を体力の続くかぎり走る。一ヶ月も走り続ければ、今以上の体力は絶対つく」

「体力が大事っていうのはわかったけど、もっとこう派手ないうか鍛えてるってわかりやすい方法はないの？」

「水泳とかかねえ。あれは結構きついし。でもまだ春になったばかりで水に入るってのもな？」

あとは一か八かで魔物を退治してみるとか？ 一回の戦闘でどれくらいの力が手に入るかわからないけどねー。それに必ずしも弱い奴と戦えるってわけでもないし、弱い奴でも群れでこられると対処できないんじゃないか？」

「魔物退治が賭け？ 危なくなったら助けてもらえるだろうし、確実なんじゃ？」

「助けるって誰が？ 一緒に行く人いるの？」

「え？ ワタセさんが一緒に来てくれるんじゃない？」

「行かないよ。俺がコキアにするのはアドバイス。基本的にそれ以外はするつもりないけど？」

ロイシーンさんからそこらへん聞かなかった？」

最初の戦闘、最初の依頼くらいはついて行ってもいいかなとは思っているのだが。

「母さんからは俺を鍛えてくれる人がみつかったとだけ」

「まあ、鍛えるって部分は間違っていないよね。」

でも弟子にするわけじゃないから、何もかも面倒みることはない。言っておいた方がいいことがあるね」

双方の勘違いをなくすために幸助の立場を説明する。

「俺はアドバイザーという立場にすぎない。コキアを弟子にしたわけじゃないから、コキアに命令する権限はない。」

だからコキアは俺の言葉に必ずしも従う必要はないんだ。俺の言ったことに納得がいかなければ、それを無視してもいい。俺のことを嫌だと思えば、俺から離れていてもいい。

俺たちの関係ってこんなものだよ」

二人の関係は師弟というより、家庭教師と生徒といった方が的確かもしれない。正確には家庭教師よりも一歩離れた感じだが。

前者は一生繋がりがありそうだけれど、後者は繋がりは一時的とあった感じだ。

「ギルドを通して弟子入りを依頼したんじゃない？」

「それは断ったし、このアドバイスは依頼に関係なく、ボランティア感覚なんだ。」

ロイシーンさんの熱心さに、少しくらいなら助言してもいいかな

と思った。こんなところ」

「なーんだ、弟子じゃないのか。緊張して損した」

コキアから幸助への敬意が薄くなる。弟子という立場だと思っていたので、無理にでも敬わなければならないと緊張する思いがあったのだ。

「で、どうする？ 俺のアドバイスを受け入れる？」

「それは一応やってみる。ギルドに入ったっていつでも、俺はまだ冒険者になれてないと思う。そんな俺が先輩にあたるワタセさんのアドバイスを否定はできないと思う」

「そう。まあそれならロイシーンさんがギルドに来たのも無駄にはならないか」

ここでコキアが幸助から離れていけば、ロイシーンの熱心な行動はまったくの無駄骨になっていたところだ。

それが少々それてはいるが報われたと感じ、幸助は安堵していた。

「母さんも過保護だよ。いつまでも何も考えられない子供じゃないんだから、弟子入り先まで探さなくていいのに」

「俺もそうは思うけど。親として心配だったんじゃないかな。親にとっては子供ってのはいつまでも子供らしいし」

幸助も親の気持ちよりも、コキアの気持ちの方がわかる。だからといってロイシーンの思いを否定はできない。

「そんなものなのかな」

納得いったとはいえない表情でコキアは首を傾げている。うざいとか言って反発しないだけましなのだろう。

コキアは意味のない反発はできない。ロイシーンが一生懸命自分を育ててくれたことを知っているの、コキアはロイシーンを突き放すことは心情的に無理なのだ。あれこれと余計なほどに世話を焼かれても、口で文句を言うのが精一杯だろう。

「んじゃ十分休憩したところで、次にいこうか」

「次はなにをすんの？」

「剣の振り方を教えようと思う。さっき見て悪そうなところはたくさんあったし」

幸助の剣の基本はアーマセラ流に近い。なので修正されたコキアの剣の扱いもそれに近いものになる。剣の扱いのいろはも知らなかったコキアには、垂流といえるそれでも十分なものだ。

斬り突き払いの三動作をさせて、よくなるように指摘していく。一つの動作がよくなるまで繰り返し、よくなったら次といった具合に進める。休憩もいれて、二時間ほど時間をかけた。

「とりあえず、その三つの動作を繰り返すこと。応用はその三動作が体に染み付いてからでも遅くはない」

はず、と心の中で付け加えた。幸助自身は地道な訓練をしたわけではないので確証はないのだ。

指摘と修正に手を抜いてはいないので、反復し習得すれば使い物にはなるだろう。

「腕があ」

「明日は筋肉痛でもっとひどいかもね。風呂に入ってる時に揉んでおけば多少はましになるんじゃないか？」

実技はこれくらいにして、あとはギルドで見ることができる資料を見て勉強だな」

「どんなことを知ればいいのさ？」

「そうだねえ」

幸助はこれまで受けた依頼のことを思い出し、そこらに関連する知識をピックアップしていく。

「地理、ここらにいる魔物の知識、森とかに生えてる薬草と食べられる植物の知識、あとは武器の手入れ方法とか野宿の際に注意することや応急手当の方法、簡単な罫の解除と仕掛け方。

最低限これくらいはほしいな」

「うええ」

頭に詰め込むことになりそうな情報量の多さを想像して、コキアは嫌そうな顔になる。

「まあ頑張れ。今日のところはこれくらいにって忘れるところだった、魔法は使える？」

「明かりと風を起こす魔法くらいは」

「……小さな傷を治す魔法と火打ち石の魔法と水を出す魔法は覚えておくと便利だし、教えとこうか」

この三つはよほど才能がないかぎりには誰にでも使え、あったら便利な魔法だ。

完全に制御しようとするとは一日では覚えきれない魔法ではあるものの、逆に言えば不完全でもいいなら一日で習得可能なのだ。

早めの昼食を食べ終えた後、訓練場に戻ってきて魔法を教える。治療魔法に少してこずった以外はすんなり習得し、三時過ぎには三つとも一応使えるようになった。

「これで今俺が教えることは終了。あとは自分で練習するだけだ。

進行状況の確認をしてほしいなら、十日後の朝九時にここに来るけどどうする？」

「それをお願い。その十日の間に依頼受けてもいいの？」

「自分の実力を踏まえてこなせると判断できたら、やっていいと思うけど。やるなら雑務系が一番だろうね。さすがに町の外に出る依頼は無謀だと思うな」

「いいのがあったらやってみる」

「やるなら依頼者に対する態度は丁寧だね」

今日はこれで終わりと幸助はコキアから離れていく。そのまま夕飯の材料になりそうなものを探し、家に帰った。

残ったコキアは必要そうな資料を探して、見つけた本の題名を覚えて後、家に帰る。次の日は幸助の言ったように筋肉痛だった。

アイデア売ります、買いますか？

溜まっていた依頼の半分以上を終わらせて、ギルド職員の勧めから一度休憩を取ることになった。オーバーワークではないかという配慮からだだったが、幸助的にはまだまだ余裕があった。そんな幸助を見てギルド側も心配する必要はなかったかと認識を改める。

一日のんびり畑作りの下準備をして、依頼解決を再開する。

この間に特別なことはなかった。エリスに魔法の道具を作る初步を教えてもらったり、ウィアーレと仕事したり、遠くからコキアの様子を見たりだ。

ほかにはエリスの魔法実験の失敗で、頭上から紙くずが落ちてきたり、テーブルに置いてあったリングが消えたくらいだ。どんな実験なのか聞いてみた幸助に、エリスは近いうちにわかると答え具体的なことは話さなかった。

町に到着し、その足で職人街へと向かう。

今からやろうとしている依頼は、アイデア募集という変り種依頼だ。依頼人は鉄工職人たち。

なにかを切ったり叩いたりといった音が満ち溢れる工場のそばを通り、目的のロイゼン鉄工所に到着した。規模としては大きくはないように見える。腕が悪いのか、オーダーメイド専門で大きな店を必要としないのかは、外から見ただけではわからない。

「こんにちはー」

店入り口から声をかけると、すぐに人が出てきた。三十過ぎくらいの男で、がっしりとした体を持つ職人っぽい雰囲気だ。

「はいはいー。なにかご注文ですか？」

「いえ、アイデア募集の依頼でしたんですが」

「あ、ワタセさんですね？　どうぞこちらへ」

男の案内で客室に通される。

水とクッキーをテーブルに置きながら、軽く自己紹介しトオリと名乗った男も椅子に座る。

「こんなものしかなく」

「おかまいなく。それで依頼についてなんですけど、もう少し詳しく聞いても？　新商品の案を出してほしいとのことですが」

「はい。私たちは鉄工所としては規模が小さくて、なにか主力になるような品を持ちたいと思ってまして。

それで皆で話し合っではみたんですが、新商品の案など簡単に出るわけはなく。外部に頼ることに」

「外部に頼るのなら、俺を指名しなくてもいいと思うんですけど？」

もっと大々的に募集するという方法もあったのではないかと、暗に問う。

「指名したのは推薦があったからなんです」

「推薦？　誰からですか？」

「ラドルフです。以前この町で新しい劇を披露した人です」

「ああ、あの人か。ラドルフさんと知り合いなんですか？」

「はい。出身地が同じでして、故郷の様子を手紙で教えてもらってるんです。

ラドルフにも新商品の相談した時、自分よりもそういうことに向いてそうな人がいると。

あの劇の発案者なんでしょう？　ああいった新しい発想ができるなら、俺たちの仕事にもなにか助言ができるんじゃないかと思って

指名させてもらいました」

この説明に納得した幸助だが、特撮は自分の発想ではないので少し居心地が悪かった。

「んんっそうですね、とりあえずこちらでどのようなものを作っているのか知りたいんですが」

咳払いして気持ちを切り替え話を進める。

どんなものを作っているのか聞いて、技術レベルが推し量れないかと思つての質問だ。案は出しても実現不可能だと意味がない。

「ここで作っているものですか。金槌と小型の杭を主に作っています。どちらも鑄造です」

「鑄造って型に溶けた金属を流し込んで作るってやつですよね？金属を鍛えて作るっていう鍛造の方はできないんですか？」

「できますが、鍛造は時間がかかるので量産できる鑄造が主流になるんです。そうしないと経営が立ち行かなくなるんですよ」

「ちなみにどれくらいの物を鍛造で作れるんですか？あとどれくらいの質にまで仕上げることができるんですか？」

トオリは職人たちの腕を思い出すため少し考え込む。

「そうですね、ここに職人は俺を含めて五人いますが、全員一人前の腕は持っています。」

ですが一流の腕を持っているかと聞かれると、首を横に振らざるを得ません。

鉄で作ることができる小型の物はほとんど作成可能ですが、専門にされている方々には敵いません。大型の品物は作成不可能です。

こんな答えでいいでしょうか？」

「例えばハサミを作ってほしいと頼めば作成可能ですけど、品質はそこまで高くないということですよね？」

「はい」

実力不足を指摘するような問いだが、トオリは気分を害した様子なく頷いた。外部に協力を要請している時点で、そういったプライドは捨てているのかもしれない。

「ふむ」

幸助はなにかいい案が出るかと考え込む。

真っ先に思いついたのは品質を上げてブランド化するというものだが、それはトオリの言葉で無理だと否定されている。

次に思いついたのは本来の用途に付け加え、ほかの機能を持たせるというもの。

例えば果物ナイフに缶切りでも、と思った幸助はこの世界に缶詰がないことを思い出し没にした。

ならば缶詰自体を作らせたらと思い、どうやったら缶詰を作れるのかわからず、また没。

次に思いついたのは金属製ではないものを金属で作るというもの。頭に浮かんだのは鉄下駄。そこから鉄靴を作ってはどうかと発展させ、重くて使い勝手悪いだろうと没。さらに考えを進めて、全部ではなく金属補強するのはどうだろうと思い、すでにあるじゃないかと思に至る。

ここで考えることを止め、口を開く。

「すぐに案は出せそうにないです。何日か時間を貰いたいんですが」「かまいませんよ。もとから時間はかかるだろうと思っていましたので」

この場でポンッと案を出されると、トオリたちが凹む可能性があった。

今日のところはこれだと工場から出て、ほかの依頼に向かう。依頼をこなしつつ、なにかいい案が出るかなと考えていた。

そうして出た結論は、地球にあってこっちない物を提案するということありきたりなものだ。

ありきたりといっても探し出すのは簡単ではない。二日かけて、ない物を探すということに意識を傾け生活し、これはという物を二つ探し出した。

それは爪きりとピーラーだ。爪きりはハサミかナイフで切っているのを見たことがある。調理補助の依頼をした時、ピーラーがないことも覚えていた。

どちらも行える魔法は存在するのだが、作業速度は道具を使った方が早いし、あれば便利だろうと思いついた。作り方は缶詰同様わからない。しかし多方向から見ただけで細かな絵を描いたもので、そこからどうにかしてくれと思っている。部分部分の説明も書いてあるので、口頭のみよりはわかりやすいだろう。

「こちらが思いついた物になります」

二枚の紙をトオリに渡す。

「爪きりと皮むき器ですか」

「はい。どちらも行える魔法は存在しますが、代用できる物があれば便利ではなからうかと思ひまして。

どうでしょう？　これが没だとしばらく案はでないんですが」

「没だなんてとんでもない！　十分な結果ですよ！　ありがとうございます！」

二枚の紙をありがたそうに手に持って、トオリは頭を下げる。

「早速、仲間に見せてきます！」

「では依頼はこれで達成ということだ」

「とんでもない！ 完成品を確かめてもらわないと。これの完成イメージはワタセさんの頭の中にしかないでしょう？ できた実物とずれがないか確認してもらいたいのです」

「だとすると俺はこれからどうすれば？ 毎日ここに来る必要が？」

「それはさすがに負担になるでしょうから。そうですね……どちらかの試作品を五日で作ってみます。なので五日後にここに来てもらいたいんですが」

「わかりました五日後ですね？」

「はい！ 本当にありがとうございます」

何度も頭を下げてくるトオリに見送られ、幸助は工場を出る。

幸助が見えなくなるまで見送っていたトオリは、仲間たちの元へ駆けて行く。すぐに工場の奥から嬉しげな悲鳴が響き、周囲で仕事していた者たちを驚かせた。

この五日後にトオリたちは苦心して爪きりの試作品を作り上げた。洗練されているとはいえない形の爪きりを前にして、二つの部品を繋げる箇所に苦労したと嬉しげに語るトオリたちに、幸助は彼らの職人魂を見たような気がした。

実際に使ってみてきちんと機能したことで幸助から言えることはなく、あとは職人たちの創意工夫だけと伝えたことで職人たちの気合はさらに上がった。

そのモチベーションのままピーラー作りに突入し、こちらも問題なく仕上げることに成功した。

できあがった両試作品を研究し、さらに質を上げた物をトオリたちは商人ギルドに持ち込む。

それを商人たちは認め、一定期間の独占生産を許可した後、大量

生産を依頼した。

トオリたちの工場は以後規模を拡大することになる。

幸助への報酬は二つの売り上げのそれぞれ3%が五年間渡されることになった。

このお金はオセロで得たお金と違い、すぐに使われることはない。使われるのはずっと先のことで、幸助がしたいことを見つけた時に使われることになる。

時間は遡って爪きりとピーラーの案を提出した次の日。

ギルド職員に頼まれて、リッカートへと急ぎの書類を配達した幸助は昼食を食べるためよさげな店を探している。ついでに少し観光もしている。以前メイドとして滞在していた時でも、あちらこちら全てを見て回ったとはいえず、まだまだ見所はあった。

ベンチの据えられた広場を通りがかり、幸助は見知った人を見つけた。ホルン専属だったメイドのメリイールだ。私服姿でベンチに座り、ぼうっと空を見上げている。どことなく悩んでいるように感じられる。

会うのは久しぶりだし世話になった人なので、声をかけてみよう。と足をメリイールへと向けて、幸助としては面識がないことに気づいた。このまま声をかけても不審人物扱いはいらない、一度広場から離れることにした。

物陰でユイスに変装し、もう一度広場に入る。メリイールがいなくなっていたら無駄な行動だったが、いまだベンチに座ってぼうっとしていた。

「こんにちは、メリイールさん」

「……え？ あ！ ユイス!？」

とても驚いた表情となるメリイール。

「お久しぶりです」

「久しぶり、半年以上ぶりかしら」

「それぐらいだと思います」

「どうしてリツカートに？　なにか用事だったの？」

「はい。用事が済んだから、お昼ご飯を食べようと思ってぶらぶらしていたら、メリイールさんを見つけました」

「あ、そういえば私もお昼まだなのよ。一緒にどう？」

「喜んで」

メリイールお勧めの店があるというので、幸助はそこに連れて行ってもらった。

値段は少々高めだったが、旬の食材を上手く使い、大変満足できる料理だった。互いの近況を話しながらゆっくりと味わって食べた。再会記念に奢るといふのを丁重に断り、店を出てそのまま散歩へと移っていく。

甘い物を食べたり、小物屋と服屋をのぞいてみたりと友達と遊ぶように過ごしていく。

そうして日が傾き始め、幸助はそろそろ帰ろうかと思い、そのことを告げる。

「そろそろ帰りますね」

「もう？　……いつまでも付き合わせるわけにはいかないわね。

ありがとう。いい気分転換になったわ」

「お役に立てたのなら嬉しいです。

それで最後に聞いてみたいことがあるんですけど」

「なにかしら？」

「なにか悩んでいました？」

浮かんでいた笑みは消え、再会した時に近い表情へと戻る。

「あーうん、ちょっとね」

「愚痴くらいなら聞けますけど？」

「それはいいわ。ここまで付き合ってもらって助かったし、迷惑はかけられないわ」

「迷惑ではありませんよ？ お世話になった恩返しですから気にしなくていいんですよ？」

メリイールは迷う素振りを見せて、溜息を吐いた。

「同僚に愚痴るよりは、部外者に聞いてもらおうほうがましかしら：もう少し時間もらえる？」

「はい」

二人は移動して、再会した広場に戻ってきた。ベンチに座り、話し始める。

「私が悩んでいるように見えたって言ったわね？ それは間違いじゃないわ。仕事にやりがいを感じられなくなってしまったの。」

あなたが去った後、お嬢様は遠くへ嫁入りしてしまった。急なことでお別れもお供もできなかったわ。

お嬢様専属だった私とセレナは、ほかのメイドと同じような仕事を与えられて首になることはなかった。

でもすっかりお嬢様に慣れてたから、ズレが生じてしまったね。

少しずつやりづらさが生まれていったの。それにレーテル様よりもお嬢様の方が好きだから、仕事に気合も入りづらいし。

そんな雰囲気が周囲にもわかるのか、人付き合いもぎくしゃくしちゃって。

いっそのこと止めてしまおうかとも思ってるんだけど、せめて次の仕事を見つけるまではと惰性で働き続けているのよ」

ホルンもメリイールとセレナのことは一応気にかけていた。だが他種族が支配し環境も違う国にまで連れて行くのはどうかと思い、声をかけるのは止めたのだ。

実際、一緒に来てと頼まれても二人は迷っただろう。

「そうだったんですか」

幸助は苦い思いを抱きながらメリイールの話を聞くことになった。メリイールの現状を生み出した原因は幸助たちにあるのだ。多少の罪悪感を感じてしまうものなのかもしれない。

そういうわけで自然と相談に親身になる。

「働きづらいのならいっそのこと職場を換える、というのはいいかもしれませんね。」

今のままだと回りにも悪い影響を与えそうですし。

お茶入れるのやお菓子作りが上手だったから、喫茶店に勤めるとかできそうですか」

「喫茶店かあ」

「もしくは自分でお店を開いてみるとかどうですか？　好きなようにやれて、やりがいが出てきそうです」

「興味はあるけど、お金がないわよ。そこそこ貯蓄はあるけどね、お店を開けるほどには持っていないわ」

「お金、かあ」

幸助はすぐにタンスの中にある閑貨のことを思いつく。使い道はないし、メリイールたちのために使うのも一興かと思う。

あれで足りるのかと思い、どれほど必要なか聞いてみる。

「お店を開くとしたらどれくらい必要なんでしょうね？」

「そうね……私も詳しいわけじゃないけど閑貨十五枚もあれば十分

だと思うわ。建物を借りて改装して、必要品を集めるところまで含めてね。建物を買収するのならもっとお金がかかるんでしょうけど」

「十五枚……実はですね、知り合いの冒険者さんに大金を手に入れて、使い道がないと言っていた人がいるんです。

その人にお金を出してもらえないか聞いてみようかと思います」

「出してもらえるのなら助かるんだけど、信じられるのその人？調子のいいこと言っただけあなたを騙そうとしたんじゃない？」

あなた可愛いんだから、邪なことを考える人は多いと思うわ」

心配してもらえるのはありがたかったが、自分自身に邪なことを考えることを想像し、苦笑を浮かべそうになる。

それをぐつとこらえて、大丈夫だと伝える。受け取ってもらいたいので、説得には力が入った。

「そこまで言うならそのワタセさん？ その人に一度会ってから判断しようと思うわ」

「帰り道で会いに行って、ここへ来るよう伝えておきます。

どこか待ち合わせに適した場所がありますか？」

「できれば一緒に会ってほしいんだけど」

分身の術を会得しないかぎりは無理な話なわけで、幸助はほかに用事があると言って丁寧に断る。

待ち合わせの場所と日時を決め、幸助は宿に帰ると言ってメリイルと分かれた。

去っていくメリイルの背に、力強さのようなものが湧き出しているように感じ取れたのは幸助の気のせいだろうか。

三日後、幸助はまた休日を取りリツカートへとやってきた。

予定時間の前に待ち合わせ場所の喫茶店へと行くと、すでにメリ

イールがそこで待っていた。メリイールのほかにもう一人いて、懐かしい顔パート2のセレナだ。

「すみません。メリイールさんでしょうか？」

初めて会うといった感じを装い声をかける。

振り返った二人は驚きを表情に出し、すぐにそれを消す。驚いたのは姿を見せた人物が思った以上に若かったからだ。本当にお金を持っているのか不安が湧いてもきた。

「あなたがユイスの知り合いでコースケ・ワタセさん？」

「はい。お店を出す資金提供の件でやってきました」

「その話は後にして、とりあえずは自己紹介からしませんか？」

どうぞと薦められ椅子に座った幸助に、店員が注文を取りにくる。コーヒーを頼み店員が離れると、メリイールが口を開いた。

「初めまして、私はコルベス家に仕えるメイドでメリイールといいます」

「私はセレナよ」

「コースケ・ワタセといいます」

互いに一礼し、話を進める。

「早速ですが、お聞きしたいことがあります。

ユイスとはどういった関係で？」

メリイールの質問を予想していなかった幸助は一瞬固まる。そこらへんの設定は考えていなかったのだ。

頭に浮かぶまま答えることにした。

「以前依頼を受けたことがありまして。護衛の依頼でした。

ちようどお金に困っていた時の依頼だったのでとても助かりました。以来暇をみつけては何度か会いに言っています」

「お金に困っていたのなら、無駄遣いというか予定外の出費は止めておいたほうが。今後も似たような状況に陥ることがあるのかもしれないですよ？」

「定期的な収入のあてがあるので、その心配はいりません。今回のお金もそういった収入が貯まったものですし」

「どういった経緯の収入なのか、お聞きしても？」

犯罪に関わっていたら嫌だなと考えての質問だ。

「新しい遊びを提案したら閃貨がもらえるじゃないですか。それ関連で収入が入るようになったんです」

「たしかにあります、新たな遊びを考えついたんですね。もう長いことアイデアが出ることはなかったのに」

「運が良かったんですよ、きっと。」

それでこちらからも聞きたいことがあるんですが」

「はい。なんでしょうか？」

「そちらの方はどうしてここに？ ユイスさんからはメリイールさんのことしか聞いてなくて」

「今日会うようになった経緯はユイスから聞いていますか？」

幸助は頷く。

「この子も私と同じように感じていまして、ユイスと会った時のことを話すと一緒にやりたいと言いつい出しまして」

「ああ、なるほど。それですか」

「えっと私の参加は不都合だったりします？」

わずかに不安そうな表情を見せるセレナ。それを見て幸助はすぐに首を横に振った。

セレナが参加してくることは幸助にとって喜ばしく、なんの不都合もない。会った日のことを話したメリイールに、グッジョブと心の中で声援を送った。

「いえ、そんなことはありません」

「そうですかあ」

セレナは安心したように表情を緩める。

「ほかになにか聞きたいことはありますか？」

「ええと」

少し考えたが一つのことしか浮かばない。

「資金提供受けます？」

この質問にメリイールとセレナは顔を見合わせ小さく頷いた。

二人で考えていた質問を聞いてから、その答えによって結論を決めることにしたのだ。

「私たちがお金を貰い、喫茶店を開くとします。それで順調にけばいいけれど、失敗する可能性もありますよね？」

そうなった場合、私たちはどうなるのでしょうか？ 借金を抱えるだけなのか、それとももっと悪い扱いになるのか。

この答えによって、お店を開くかどうか決めようと思います」
「どうなるか、ですか」

お店を開かせることだけを考えて、潰れた場合のことは考えていなかったのだ。

だから失敗してもそれを追及するつもりはなかった。

「特にこれといってどうにかするつもりはありません。

今回の話は借金としてお金を貸し与えるというものではなく、ちよつと変わった共同営業の提案です。ですのでお店を開く際に使ったお金、営業して行く上で使った経費を請求することはありません。俺も経営者の一人なので、お金を出すのは当然ですよね？

失敗した時の負債全てを引き受けることはしませんが、その負債全てをあなた方に背負わせる気はありません。

こんな答えなんですが、どうでしょうか？」

幸助の言葉に納得いかなかった部分があるのだろう、二人は小首を傾げていた。

メリイールが口を開きかけたが、セレナが先に問う。

「ちよつと変わった共同経営ってどういうものなの？」

「俺がお金を出すオーナーで、二人が経営を担当する店長と副店長。俺も少しは経営方針に口出しするけど、基本的にお店の舵取りは二人の担当って考えてる。

俺はお店にかかりきりになる気はないから、お店のことは二人に任せる」

「似たような話を聞いたことがあります。その話はお金を出したオーナーがトップで経営を担当し、店長は技術を提供するだけといったものでした。

今回ののは店長にもつと力が与えられるといった感じですね」

「その認識でいいと思う」

どうするかと幸助は目で問い、メリイールは少しだけ考え込んだ。

「……私はお店開くの協力してもらおうと思います。

ここまでの話が本当ならば悪い話どころか、好条件といってもいいですし」

「私も賛成！」

二人の了解が得られて幸助は内心安堵の息を吐いた。

「ではこれからの行動を簡単にでも計画立てませんか？」

「私たち側にすることがいくつかありそうですし、それでかまいませんよ」

幸助の提案にメリイルは頷いた。幸助のすることはお金を渡すだけでもいいのだ。実際に店を動かすのは二人なので、店に関することは二人が決めた方が今後動きやすい。

「まずは辞めるってことを告げることが最初にすることかな。すぐに屋敷を出て行ってもほかの皆の迷惑になるかもしれないから、少しは残って仕事を片付けないと」

「辛い仕事が変わってそれほど経ってないし、仕事に関しては苦労はなさそうね。

止めるまでの間に空き店舗も見つけたいわ。商人ギルドにいい場所がないか、頼んでおきたいわね」

見つけたら次は改装だ。そのまま使えばいいが、ぼろくなっているところがあるかもしれないし一度点検してもらう必要はあるだろう。調理設備も揃える必要がある。

そして必要備品の収集、従業員の募集、商人ギルドとの交渉といったところか。

「開くのは喫茶店？ それともほかになにか案がある？」

「喫茶店ですね。料理よりもお菓子の方が得意なので」

「私も」

予想していた回答だったので、幸助は用意していた腹案が使えるかどうか判断する。

「それならちょっと変わった喫茶店を開いてみませんか？ お二人だからできる喫茶店を」

「「私たちだからできる喫茶店？」」

「はい。貴族喫茶という名前です」

メイド喫茶からアイデアを引っ張ってきた。始めはメイド喫茶そのものをやってはどうかと思ったのだが、そのセンスにこの世界の人々がついてこれるかわからなかったので、やめて少し改変したものを提案したのだ。

貴族生活に憧れを持つ人はいると思い、そういったことを体験できるシチュエーションサービスの喫茶店は流行るかもしれないと考えた。

「どういったものなのでしょう？」

「貴族のお茶会を体験できる喫茶店です。ただお茶を飲むことができる場所というのはありふれているでしょ？そこにサービスを付け加えて精神的にも満足してもらおうと。」

いわゆるゴッコ遊びみたいなものですけど、適度に本格的に行えばそれなりに楽しめるものだと思いますよ？」

「私たちが貴族生活を知っているからこそできるやり方ということでしょうか？」

「その通りです。で、やってみます？」

「私としてはこれまでやってきたことを生かしていいと思う」

セレナの意見にメリイールも頷けるものはある。だが二つ疑問が湧き出た。

「通常の喫茶店を行うよりお金がかかりますよ？ 茶葉や食材はいいものを使うことになるでしょうし。その高くなった費用を取り戻すために値段設定も上がります。値段の高い喫茶店に客は集まるでしょうか？」

「いいものといっても最高級品を使う必要はありませんから、高すぎる値段になることはないんじゃないかな。

あくまで雰囲気を楽しむためのお店だから、本物の貴族が飲み食いしているものよりランクが落ちても問題はないでしょう。

客を集める方法としては、最初の一ヶ月は開店記念として最大四割引くらいしましょう。物珍しさと割引された値段に惹かれて集まるかと。

その一ヶ月でリピーターを獲得します。味が良ければまた来たいと思う人はいるでしょうし、ゴッコ遊びを気に入る人もいるかと。

あとは宣伝もしておきましょうか。ポスターを作って店先や人の多く集まるところに貼らせて貰いましょう。

最初の一ヶ月は赤字でもかまいません。宣伝期間として利益は捨てます。その後ゆっくり黒字を目指せばいいと思います。

どうしてもゴッコ遊びが人々に受け入れなければ、普通の喫茶店に戻せばいいだけです」

その回答に一応納得し、もう一つの疑問を問う。

「準備金が足りますか？」

「閃貨五十枚持ってきたけど」

メリイールとセレナが口を半開きにして呆けた表情を見せている。

いつも凜としていたメリイールのこういった表情を見るのは、初めてな幸助だった。

「ほほほ本当？」

声を震わせて聞いてくるセレナに、閃貨の入った袋を渡す。それを覗き込んで目を見開いた。

メリイールはそのセレナの表情を見て本当のことだと察し、冷めた飲み物を飲んで心を落ち着かせる。

「見苦しいところをお見せしました。

大金を稼いだといっても、精々これの半分以下だろうと思ってましたので」

「足りる？」

「十分すぎると思われるます」

これだけあれば何もかも準備して、さらに半年赤字でも問題なく運営していけるだろう。

半年も赤字が続くようならば、それまでに普通の喫茶店に戻したほうがいいと判断するだろうから、かかる費用が下がる分さらに運営期間は伸びるかもしれない。

「それじゃあメリイールさんの判断はどちら？」

「やってみようと思います」

よろしくお願いしますオーナーと頭を下げ、セレナも一拍遅れて頭を下げた。

こちらこそと幸助も頭を下げた。

この後三人は商人ギルドへと行き、店舗探しを依頼した。一日あれば資料の中からよさげな物件をピックアップできるというので、

明日の午後四時頃また来ることに決め、今日のところはこれで解散することになった。

翌日、午後三時前までに依頼をこなした幸助はリツカートへとやってきた。

商人ギルド前で待ち合わせすることになっているが、さすがにまだ早いと露店でおやつを買って軽く街をぶらつき時間を潰す。そして待ち合わせ十五分前にギルド前に移動した。

待ち始めて五分を少し過ぎた頃、二人が姿を見せる。仕事の途中が終わってすぐ来たのか、メイド服のままだ。

お待たせしました、いえいえ来たばかりですと言いつけてから中に入る。

受付の一つが空いていたので、そこで用件と昨日話した職員の名前を告げる。あちらでお待ちくださいとドアのない個室を示され、そこで待つこと十分、資料を持った男の職員がやってきた。

「お待たせしました。こちらがお求めの物件となります。とりあえず五つ探しました。この中で気に入るものがなければ、もう少し時間をい

ただくことになります」

「それぞれの簡単な説明を聞きたいんですけど」

幸助の言葉に、にこやかに頷き職員は説明を始める。

用意されたのは敷地が小さめの物件二つ、普通の物件一つ、やや広めの物件一つ、大きめの物件が一つ。大きさ的にはやや広めのもので、ファミレスより少しだけ小さめといった感じだ。やや広めの物件と大きめの物件は二階建てで、ほかは平屋だ。倉庫の高さは平屋を超えているが、ロフトっぽいものもついておらず、一階だけとなっている。

どれも周囲に民家や店があつて、人氣が少ないせいで客が集まらないということはないだろう。

そして高級住宅街や危険そうな場所から離れた位置にある。

小さめの物件の一つは元民家で人が住まなくなり二年ほど経っている。元々の持ち主だった老人が死んで、売れずに残っているのだ。老人の死は老衰で、怪しい事件に関わったなんてことはない。

もう一つは倉庫だ。隣の家の持ち倉庫だったのだが、家を改築した時使わないしいらないと手放した。

普通の物件は元料理屋だった。商売が上手くいかず、手放すことになった。設備はそのままなので大きな改装はしなくていい。

やや広めの物件は商人の持ち家だ。本宅は別の街にあり、こちらは一応持っているだけといったもので、使わないから手放しても問題ないということだ。

最後の物件は商人の持ち家だった。十五年前にいた豪商の家だったが、商売に失敗し資金繰りのため売られたのだ。建てられて五十年近く、五つの物件の中で一番古く、あちこちにがたがたしている。

「といったところです。気に入った物件はありましたか？」

「俺としては小さいやつと大きなやつの三つは除外していいと思う」

職員の話聞き、資料を見てメリイールたちも幸助と同じ判断を下す。

「では二つの物件を実際に見てみましょう」

職員に連れられて三人は普通の物件に向かう。

そこは人通りに面した場所で、ここで開店すれば休憩で入ってくる客もいそうだ。だが近くにすでに喫茶店があるのが不安材料か。客の取り合いで苦労があるかもしれない。

職員が言ったように調理設備は揃っており、改築期間は短くて済

み、費用も節約できそうだ。

建物の隅々まで見て回り、次に向かう。

次の物件は、通りからは少々外れた場所にあった。周囲にある建物は主に民家で、ライバルとなりそうな喫茶店などはない。人が住むための建物なので、喫茶店を開くには大幅な改築が必要となる。もともと改築は考えていたことなのでマイナスの判断材料にはならない。

二つの物件を見て回った一行は再びギルドに戻ってきた。

「どうでしたか？ どちらか気に入られましたでしょうか？」

「二人はどう？ 実際に使うのは二人だし」

「私は二番目に行った方がいいかもしれないと思いましたね」

「私もかな。近くにライバル店がないのがよかったよ」

意見が一致し、やや広めの物件が選ばれる。幸助もその意見に反論はない。

「では二番目に行った方で決定ということですか？」

三人が頷き、職員は二件の物件情報をしまい、別の書類を取り出す。

「あの物件を使うということですが、賃貸にしますか？ それとも買い取りにしますか？」

賃貸の方は当ギルドに一ヶ月銀貨二十五枚支払うことになります。買取価格は閑貨十二枚ですね」

「喫茶店に改築する費用なんかもわかりますか？」

幸助の質問に少し考え込む。

「……そうですね、客席やテーブルや調理設備を揃えるといったことまで含めると最低でも閃貨六枚はほしいところですね。おそらく十枚は必要ないでしょう」

椅子やテーブルは質のいいもので揃えることになるので、閃貨六枚は確実に超えるだろう。

「買取でよろしくお願いします。改築業者と家具業者でいいところがあれば教えてください」

「すぐ調べてきますので、少々お待ちください」

そう言って職員は席を離れる。

「二人は改築内容を考えてくださいね？ 貴族っぽくという方向性で」

「コルベス家に似せるって感じでいいかしら？」

「それでいいと思う。というか私たちにとって貴族の家ってコルベス家しか知らないし」

完全に同じにしてしまうと客が雰囲気気圧されてしまう可能性があり、以後近寄りづらくなるかもしれない。だから似せるという方向性はゴツコ遊びを目指す貴族喫茶にはいいのかもしれない。

必要そうなものをメモリアルとセレナが話していると、職員が戻ってきた。

「こちらが業者さんの住所になります」

そう言いつつ住所が書かれた紙を差し出す。

「ありがとうございます」

一括でお金を払えるんですが、閃貨十二枚ぴったりですか？ それともほかになにかお金が必要になります？」

「必要になりますね。商業権利金というのを、ギルドに毎月銀貨五枚払ってもらうことになります。」

商業権利金というのは、この街で商売をするために払ってもらうお金で、払っていない場合はモグリとみなされます。モグリだとなにかトラブルがあった場合、その解決にギルドの協力を得ることはできません」

「今払わなければいけないのは閃貨十二枚と銀貨五枚？」

「はい」

財布の中を見て手持ちの銀貨が五枚はないことを確認し、閃貨十三枚を出した。

「確かに受け取りました。物件所有書とお釣りを取ってきます」

今日お金をもらえるとは思っておらず、それらを用意していなかったのだ。

すぐに戻ってきた職員はお釣りを幸助に渡し、書類に必要事項を書き込んでいく。

「サインをもらえますか？」

「誰がサインする？」

「ワタセさんでいいのでは？」

メリイールの返答に、同意見のセレナも頷く。

書類の確認を三人でした後、職員の指示に従い幸助は数箇所サインをしていった。

「これである物件はあなた方の物となりました。」

なにか困ったこと聞きたいことがあればギルドまでお越しく下さい。いつでもお待ちしております」

「ありがとうございます。俺たちはこれで失礼します」

「なにかあれば伺わせてもらいます」

「よろしく願います」

幸助たちは一礼し、職員から離れていく。

三人を見送った職員は一仕事終わらせたと満足し、個室を片付けていく。

ギルドから出た三人はそのまま改築業者の元へ向かう。時間にして午後五時を過ぎていて業者も店じまいを始めている頃だろうが、少し話を通すだけでもしておこうと考えたのだ。

案の定、店を閉める準備をした業者に改築してほしいとだけ伝え、詳しいことは明日にということとなった。

明日までに大雑把な内装を考えておくというメリイルとセレナに別れを告げて、幸助は家に帰る。

翌日は一っだけ依頼を終わらせて、爪きりの試作品を見に行った後、リッカートへとやってきた。

午後二時前に来たので、また観光をして時間を潰す。今回の待ち合わせは業者の店の前にある小さな広場だ。

昨日と似たような時間に来た二人と店に入ろうとして幸助は止められる。

「改築に関してお話があるんですが」

「改築は二人に任せるってのは言った気がするけど」

言ったよね、と昨日発言を思い出す幸助。

「二階に関してなんですが」

「二階？」

「事務所にしようとセレナと話して、その時に私たちがそこに住むようにもできたらという話題が出まして」

家から通わないのかと言おうとして、メリイールの実家は他所の町にあると聞いたことを思い出す。

コルベス家で働いているうちは屋敷で寝泊りできるが、辞めてしまふと宿屋暮らしだ。だが買った物件を見ると二階に居住スペースを取れそうなのだ。それならいつそ店で寝泊りできようにしたいとメリイールは考えた。

セレナはというと、家はリツカートにあるが屋敷で働き出した時点で家を出ており、いまさら戻るのもなと思ったのだ。

「別に構わないとは思うけど、それほど広くはなかったよ？ 大丈夫？」

六畳少しの部屋が四つだ。私室の確保はできるが、事務所も作ることを考えるとそれ以外の部屋は難しい。

「台所やトイレとかは店のものを使えるので、それほど困ることはないと思うのです」

「二人がそれでいいなら反対しない。職場と住居が近いと便利そうだしね」

「ありがとうございます」

嬉しげな表情で二人は幸助に礼を言う。

話は終わり、店へと入る。

そして待っていた業者と一緒に買った物件を見に行く。

「どういった感じに手を入れるか考えています？」

「一階部分は喫茶店にしたいので、大部分を作り変えてもらうことになりますね。二階は居住区と事務所を確保といった感じでお願いします。」

階段も今の位置から移動をお願いしたいですね」

業者との交渉はメリールたちに任せていて、幸助の出番はない。することがなく暇そうにしているので来る必要はなかったように見えるのだが、お金はまだ幸助が持っているのだから来る必要がある。それと一度くらいは来て業者に顔見せしておいた方がいいと思ったのだ。

「ちょっと家の中見てきます」

暇すぎるので、点検でもしようと家を見て回ることにした。昨日粗方見て、見るところは大してないが暇しているよりはましだった。同じくあまり出番がないセレナが来たそうにしていたが、時々意見を求められることがあり離れられないでいた。

「隠し金庫や隠し部屋でもあったら面白いんだけど」

あまり期待していなかったそんな思いが的中し、そのようなものはみつからない普通の物件だった。

家の中には以前の持ち主の家具が残っている程度だ。価値のあるものは運び出されていて、掘り出し物があるというわけでもない。

家具にはそのまま使えそうなものがある。それらをどうするかはメリールたちが判断するだろう。明らかに使わないだろうという物を捨てる時に持ち出しやすいように一箇所にとめていけると、幸助を呼ぶ声が聞こえてきた。

「呼びました？」

「おおよその費用が出たので一緒に聞いてもらいたいと思ひまして」

費用は入れる家具も含めて閃貨十一枚だった。一般的な喫茶店だと七枚弱にまで減る。高級志向なのでどうしても高くなってしまうらしい。その分、出来上がる建物の価値と頑丈さはそこの喫茶店と比べ物にならないのだが。

「今日一括で払えるんですけど、この場でお渡しします？」

「でしたら店の方に戻って書類を作ってしまひましょう」

一度に全部支払われると聞いて嬉しげな笑みを浮かべる。大金が一度に手に入るのが嬉しいのだ。分割でも最終的には同じだが、気分の問題だろう。

金貨一枚までの予算オーバーならサービスするというくらいには上機嫌だ。

「着工は明日からでよろしいですか？」

「はい。大体どれくらいで終わりますか？」

「多めにみて一ヶ月強といったところでしょいか」

メリイールたちが仕事を辞めるまで、あと十日といったところだ。それまでに終わればと思っていたが、無理そうなのでしばらく宿暮らしになりそうだとメリイールは小さく溜息を吐いた。

書類を作り、お金を渡し、店を出た。

「これで俺にできることは終わったかな。残ってるのは食材入手ルート確保、人材募集と育成、宣伝依頼くらいだね。それは俺がいなくても大丈夫でしょ？」

確認のため少し考えたメリイールは頷いた。

「そうですね……あとは私たちだけでも大丈夫かと。あ、あと一つやってもらいたいいことが」

「なにかある？」

「人を募集した時に面接を行うので、その時に一緒にいてください」

「俺がいる必要ないと思うんだけど」

「トップがいらないのは問題あると思うよ？」

セレナの言葉にそんなものなのかと、了承の意味を込めて頷いた。

「あとはそう、五日に一回午後五時くらいに店に顔出すから、その時なにか問題があれば言って」

「わかりました」

なにか忘れてないか考えて、お金のことが気にかかった。

「なにか入用になった時のためにお金持っておかないと」

お店用に持ってきたお金を渡そうとする幸助をメリイールは止めた。

「なくすと大変なので、ワタセさんが持っていてください。必要になればワタセさんが来るまで待ってもらいますから」

「それにそんな大金持っていると落ち着かない」

セレナ的にはこっちの理由の方が大きかったりする。

セレナの言葉に幸助は少し笑ってお金をしまう。

それではまたと言って街の出入り口に向かう。

その背を少し見送って、二人は屋敷へと足を向ける。

「この数日で思ったんですけど、ワタセさんってユイスに似てないですか？」

セレナの言葉にメリイルはそうねと返す。

姿形は当然ながら似ていないのだが、ちよっとした口調や歩き方や飲み食いする仕草からユイスに通じるものを二人は感じていた。

「ただの知り合いとかじゃなくて、親族だったり、もしかすると恋人なのかも！」

「どうでしょうね。似た者同士ってだけかもしれないわよ。恋人なら私たちのためじゃなくて、ユイスのためにお金を使うでしょ？」

「それはそうかも」

気になるのなら今度会った時に聞いてみたら、というメリイルにセレナは頷く。

後日実際に聞かれ、二人の観察力の高さに幸助は驚くことになる。ついでに恋人といった勘違いには大きな困惑を抱くことになる。

弟子と共にやってきたハプニング 前

開店準備に一段落つき、溜まっていた依頼も片付け、落ち着いた日々が戻ってくる。

することがなくなったかと思った次の日が、コキアと会って十日目だったので、うっかり二度寝しそうになりながらもベラッセンへと向かった。

今日も依頼を受けにきたのかというディアネスに、コキアの様子見と答え雑談に興じているとコキアがやってきた。

「おはよう」

「ども、おはようございます」

挨拶を交わし、早速訓練場に向かう。

「まずは剣を振ってみて。ズレとか変な癖がついてたりしたら指摘するから」

コキアは頷いて、腰の木剣を抜く。

上段からの振り下ろし、袈裟斬り、横薙ぎ、払い、突きと数回ずつ実演していく。

真面目にこなしていたのだろう、十日前より様になっている。特に指摘するような部分はなかった。

「直すようなところはないね。今後もその調子でいけばいい。

でも一つだけ注意してほしいことがある」

「なに？」

「戦闘になると実際に使うのはその木剣じゃなくて、金属製のものになると思う。そうすると重さが違うってのは予想できるだろう？」

「それくらいは」

簡単に予想ついたコキアは頷く。

「その重さの差で、振り方にズレが生じる場合があるってことを覚えておいて。

重さが違うってことは振り回すたびに使う体力が違う。木剣のつもりで振り回して、予想してない隙が生まれるかもしれない。そこから大怪我に繋がるかもしれない。

金属剣を使い始めたらそこを意識しとくように、わかった？」
「覚えとく」

その返答に幸助も頷き返す。

「次は回避と防御をやってみよか。反撃はなしで、避けること受けることだけを考えるように。

最初はすぐゆっくり振って、そこから徐々に速度を上げてくよ」

幸助は鞘に納めたままの剣を構える。

鞘から抜いて殺傷可能武器を向けられる怖さも兼ねた訓練しようかと少し思ったが、コキアが予想もつかない避け方をして怪我させることになるかもしれないと止めた。ある程度避けられるようになったらやるつもりだ。

「じゃあいくよ」

最初は本当にゆっくり、子供でも避けられる速度で振っていく。

コキアは余裕を持って最小限の動きで避けていく。始めて三分までは避けのみで、そこから先は剣を使って受けることもでてきた。五分経つと余裕はなくなってきた呼吸が荒くなり始めた。七分後に

は余裕はなくなっており、剣は手放していて避けることのみに集中していた。五分以降、幸助は剣の速度は上げていない。ここらが今の限界だろうと判断したからだ。

避けることに失敗したのは、体力が尽きかけよろけた時だ。避ける距離が足りず、幸助の剣が肩に軽く当たった。

時間にして十分はもっていない。

「はい、終了。避け続けるのも攻撃するのと一緒に体力ないとやっ
てられないからね。」

体力底上げはさばらないように」

「避けるコツとかってある？」

息も絶え絶えな状態でコキアは聞く。

「訓練して慣れるのみだと思う。」

あとは相手の動きをよく見ることに。最初の頃はゆっくりだったから、見て避けきれたでしょ？ 早くなくても相手の動作に気をつけていればわりとなんとかなる。

フェイントされることもあるけど、これの対応も慣れるかよく見るかだと思うね。

あとは一対一なら相手の動きを見るだけでいいけど、複数の場合は回りのことも気にしてないと不意打ちくらうから気をつけて」

対複数の訓練はできないので、こう言うしかない。ボルドスがいれば一度くらいは協力してもらえたかもしれないが、いないからどうしようもない。

「少し休んだら、まだ避ける訓練する？ それとももう止めとく？」
「やる」

慣れるという言葉を意識したコキアは頷いた。

五分ほど休憩して避ける訓練を再開する。今度は最初からある程度の速度で始める。

休憩と訓練を十回ほど繰り返し、最後にはフェイントも混ぜて訓練を終えた。フェイントに関してはまったく慣れていないので、面白いくらいに引っかかっていた。

「実技はこれくらいで、知識の方に行こうか。といっても調べたこととでなにか疑問があったか聞くぐらいだし、俺も知らないことは答えられない」

なにかあったかとコキアは首を捻っている。

「罠の解除について本を見たんだけど、実際にやってないから本当に理解してるのかわからないってのがある。

あと鍵開けについてはさっぱりわかんない。やり方とか本に書いてないし」

「鍵はここに置かれてるやつを使えばいいよ、と言いたところだけどちよつとした条件があってコキアには使えないんだ」

「どうして？」

幸助はギルドから評価、悪用しない、推薦者が必要といった理由を話す。

「どうしても練習したいなら鍵を買って練習するしかないんじゃないかな」

「そこまでして練習するつもりはないよ」

「じゃあ依頼がある程度こなすのが一番の近道だね。その時には俺がサインするよ」

コキアは納得し解錠については後回しにすることにした。

「ほかになにか聞きたいことはある？」

「今はない、と思う」

「じゃあ、俺は行くよ。また十日後に来た方がいい？」

コキアは頷く。

十日後に来ることを約束し幸助は家に戻る。

また一度か二度は様子を見に来ようとこの時は考えていたのだが、ハプニングが起きてコキアのことを頭から抜け落ちた。

そしてハプニングが治まって約束の十日目が来て、幸助はベラッセンにやってきた。

いつものようにギルドで待つ。今日はディアネスは休みのようで、依頼を見ながら時間を潰す。

そうしているうちにコキアもギルドにやってきた。右腕をしつかりと包帯で巻き、動かせないように首にかけた布で吊っている。コキアの隣に幸助と同年代か少し上といった感じの女もいる。

その女は明るい茶色の目で幸助を睨んでいる。幸助はなにか恨まれるようなことをしたかと疑問を抱くも、まったく見に覚えがない。どこかで会った記憶すらない。

白っぽい黄色の髪をショートカットにして、黒のバンダナで頭部を覆っている。体は脂肪が少なくほっそりしている。顔は可愛い方だと思われるものの、今は不機嫌なようで愛らしさは消えている。

「おはよう、でどしたのその怪我。それに隣の人は誰？」

「おはようございます。この怪我はえつと……」

言いづらそうに口ごもるコキアを見て、横にいる女が口を開く。

「森で魔物に襲われてたのよ。それを偶然通りかかった私たちが助

けて一緒に街まで帰ってきた。それが一昨日のこと。

こんな未熟な子を一人で森に行かせるなんて無責任もいいところでしょ！　なにを考えてるの！」

女が怒っているのは、幸助がいい加減な判断で外に行かせたと思っ
っているからだ。

幸助は女のことをスルーしてコキアに話しかける。

「あー、森に行ったんだ？」

「……はい」

「どんなやつと戦った？」

「フアードッグってやつ、三匹」

ギルドにあった資料で、自分が戦った魔物がどのようなものかは知
っているのだ。

「あれか。懐かしいな。

いきなり複数との戦闘はきつかったろ？」

聞かずとも見ればわかる状態だ。

「怪我はどんな感じ？」

「切り傷は自分で治療したり、治してもらったりした。骨にひびが入
ったのは、魔法での治療費が高くて払えなかったから普通の治療
をしてもらった」

「その怪我治療してしまうから、腕をこっちに出してくれる？」

「治せるんですか？　というかお金持っていないけど」

「今回は無料サービスってことで」

ちゃちゃっと魔法で骨の治療をしてしまう。

動かしても痛みのなくなった腕を、感動したように何度も触っている。

「この魔法覚えたいんだけど」

「実力が足りないから無理。魔力が最低でもD＋必要だから」

「治療できるからって落ち着きすぎでしょ！ 万が一ってこともあるの！」

仲間が怪我をしたのに、全く慌てる素振りを見せない幸助に女の苛立ちはさらに増す。

「万が一があるのはわかってるけど、それはコキアの自己責任だよ」

「自己責任って！？ 師匠には弟子を守る責任があるでしょ！」

「俺はコキアの師匠じゃない」

「はあ！？」

幸助の否定に信じられないことを聞いたといった顔になる。

「この子の指導してるんでしょう？ だったら師匠でしょうに。

責任逃れするのもいい加減にしろさい！」

「……コキア、もしかしてこの人会った時からこんな感じで話を聞こうとしなかった？」

その推測にコキアは苦笑を浮かべて頷いた。

おそらくこの女は善人に分類されるのだろう。だが思い込みが激しくもあるようで、その思いのまま行動してしまっているようだ。

こういった行動がいい具合に働くことはあるのだろうか、今は幸助にとってマイナスでしかない。

しばらくギルド内で幸助は師匠役として適さないという噂が広がるだろう。

弟子をとるつもりのない幸助は、そのことについてはどうこう言うつもりはない。むしろ助かることだ。

「どうしました？」

ギルド職員が騒ぎとなっている場へやってきた。

騒いでいることで他の冒険者たちの注目が集まっていたが、ギルド職員が近づいたことでどうにかなるだろうと関心は薄まった。

その職員に女は事情を説明する。職員の幸助を見る目が厳しくなるが、一方の主張を鵜呑みにしないといった判断力があり、幸助にも話を聞いてくる。

その職員に一時的な教師役ということ話を話す。

幸助とコキアの間に利害が発生していないこと、コキアもこの関係に同意していることを知り、一方的に幸助が悪いわけではないと職員は理解した。

「正直感心できる話ではないですが、同意を得ているのですから回りの人間がどうこう言う話ではないと思いますよ？」

「しかし無責任すぎるでしょう!？」

「無責任というか、責任自体が発生しないでしょ？」

積極的に戦わせたというわけではなく、むしろ安全に育てようとしたみたいです。

大きく騒ぐほどではないと」

幸助に非が少ないとわかった職員は、騒ぎにならないように女を宥める。

幸助にマイナスイメージがつくことは、ギルドとしては避けたいことなのだ。今回の噂を厭い実力者の一人がどこかへ移動といった事態になるのかもしれない。

噂が真実ならばいなくなっても仕方ないし、ギルドも警告を出す。

間違いで出て行かれた場合はギルドにとって損だ。

「注意するどころか、庇うのですか!？」

この人に任せていれば、この子が死ぬことになりかねませんよ！
いいです！ 私が戦い方を教えます！ 行きましょう！」

コキアの手を取っていこうとする女の頭を鞘に入れたままの剣で軽く叩く。パコンといい音が響いた。

思いつきり怒気が籠った目で幸助を見る。

「なにをするのよ！」

「一人で突っ走りすぎだと思うよ。コキアに着いてくるのか聞いてもないし」

「聞くまでもないわ。一緒に来るよね？」

ちらりと幸助を見て迷った素振りを見せるコキア。

そのコキアに幸助は助言というか既に言ったことをまた言う。

「好きなようにすればいい。最初に言っただけど、俺の言うことを聞く必要はないんだ。ついて行きたいか行きたくないか、自分で考えて決めるんだ」

「……両方に教えを受けるってのは？」

悩んだ末の結果は、どちらも選ぶというもの。いろんなことを知るという点では間違っていないのだろう。

幸助はその考えに反対意見はなく、女は不満そうだ。

「どうしてこんなやつにまだ教わろうと思うのよ！」

「どうしてって……無茶は言われてないし、今のところ間違ったことも教えられてないと思うから？」

「怪我するようなことになったじゃない」

「それは自分のせいだから、ワタセさんを責めるのは間違いだってわかってるし」

魔物について調べた時、近くの森の魔物はそれほど強くないと知り、行ってみたいという好奇心が湧いた。近頃は剣も最初の頃より長く振れるようになり、少しくらいなら大丈夫だろうと油断し街を出た。

そうして怪我したのだから自分のせいだとコキアもわかっているし、幸助に町から出るのは無謀と言われたことも身に染みて理解した。

ちなみに自分のせいだと女には説明したのだが、幸助を庇ったか恐れているかのどちらかだろうと女は聞き流したのだ。

「わかったわ。こいつより私の方が実力が上ならば教わることもないわよね？」

そういうわけで勝負よ！」

「なんでやねん」

強引と思える言葉に、幸助はおもわず突っ込む。

これにはコキアも職員もさすがに無茶苦茶だと呆れている。

「勝負内容はそうね……なにか依頼を共同で受けて、それを解決する様子を見学させて決めてもらうってのは？」

疑問系でありながら、その場にいる者たちはそれで決まったんだろうなと考えが一致した。

「それってまだまだ未熟者のコキアを依頼に同行させるってことだろう？　それで怪我したらどうするんだ？」

「私たちが守ればいいじゃないの」

ここまで当然のように言い切るとそれだけの实力があるのだろうかと思えてくる。

「簡単に言うね」

「護衛依頼と一緒に。何度も経験してるわ。だから大丈夫」

「どうするコキア？ 俺としてはすぐめんどくさいんだけど」

本音だ。いますぐ帰りたいと思っている。

「賛成というか、一度ワタセさんの实力を見てみたいです。悪いとは思ってるけど」

「これで決まりね！ ちょっと待ってなさい。相方を呼んでくるから。逃げたりなんかするんじゃないわよ！」

ビシッと幸助を指差し念を押して、女はギルドから出て行った。

「勢いある人だったな。そういや名前も聞いてない」

「ジェルムさんっていうらしいです。悪い人じゃないみたいけど……」

「思い込みが激しいよね。相方さん苦労してそうだ」

苦労してそうだという部分に、コキアも職員も頷いた。

職員は幸助に頑張ってくださいと告げて去っていく。目には同情的の色が見えていて、心の底からの言葉だとわかった。

十五分経ち、ジェルムはメガネをかけた女を連れてきた。

濃い灰色の長髪と黒の目で、手には五十センチほどの杖を持ち、空色の厚手長袖シャツに白く染められた革の軽鎧とロングスカートという動きを考慮していない姿で、魔法を中心にした戦闘スタイル

だろうと予測できる。

幸助やエリスは使っていないが、魔法を増幅する物がある。ジェルムの相方が持っているような杖型、本の形をとっている物、腕輪指輪の形をしている物が主流だ。中には剣や弓といった形もあるが、それらは少ない。

この増幅器の原型は、神が報酬として冒険者に与えた杖だ。神器と呼ばれているそれを元に研究し、レプリカが世に広まっていった。所詮はレプリカで増幅率は原型に遠く及ばない。神器は増幅率二倍以上だったという記録が残っている。その一方で人が作った物は最高傑作と呼ばれる物で一・五倍だ。平均的な冒険者が使っている物は、一・二倍が常だ。

値段としては一・一倍の物が銀貨三枚、一・三倍が閃貨一枚、一・五倍で閃貨三十枚の値段がついた。神器については値段付け不可能となっている。

神器を手に入れたいのならば、カルホード大陸にある暇潰しのダンジョンと呼ばれるところに行くのが一番手っ取り早い。

そこは神が造っているダンジョンで、最奥まで到達した者には期限付きの神器を与えられている。半年から一年のスパンでダンジョンの内容は変わるので、クリアした者が出てもしばらくすれば再挑戦できる。

ダンジョン踏破の他にも、変わったダンジョン探索をすると神器が贈られることもある。最近では全部の戦闘を回避し続けた者たちに、魔物避け効果を持つ鈴の神器が贈られた。

現在、世界で一番冒険者が集まる場所だろう。

「依頼を探しましょ！」

「ちよっと待ってジェルム。自己紹介させて？ 一度きりとはいえ一緒に依頼するんだし、名前知らないと不便だよ」

「名前……そういえばあんたの名前知らないわ」

ジェルムは幸助を見て言う。

「そりゃ自己紹介なんかする暇なかったし。それにそっちも名乗ってない」

「……ジェルム」

呆れたように相方はジェルムを見る。

「思い込んだら一直線っていうのいい加減直してよ」

「今回は私は悪くないよ!」

「いやコキア君の話を聞いてたらそんな結論にはならないでしょうに。それに今回は特にひどいように感じるよ?」

溜息一つ吐いて幸助たちを見る。

「コキア君には名乗ったけど、そっちの人は初めてだからもう一度名乗るわね。」

テリアといいます。よろしくね、そしてつれが迷惑かけてすみません」

「幸助・渡瀬といいます。手綱取るの大変でしょうが、めげずに頑張ってください」

テリアは苦笑いを浮かべて頷いた。

「ジェルムよ。」

これで自己紹介はすんだわね。依頼を探すわよ」

ついてきなさいとコキアの手を取ってジェルムは依頼探しに向

かう。

「あとう」

「ん？」

テリアが幸助に近寄り話しかけ、頭を下げる。

「もう一度謝らせてください。

ジェルムには私からよく言っておくので、今回だけ付き合っただけませんか。それでたぶん気がすむと思うので」

「いや、まあ気にしてないって言ったら嘘になるけど、そんなに謝らなくていいよ。たまにはこんなこともあるって思っただけだよ」
「ありがとうございます」

テリアはほっとして力を抜き、微笑みを浮かべる。

「ちょっと聞きたいことがあるんだけど。

さっき今回は特にひどいって言ってたよね？ 最近なにかいらくことでもあった？ 誰かと喧嘩したとか、依頼で嫌な思いしたとか」

「いえ、そんなことはありませんでした。野宿が続いてゆっくと休めなかったといったことはあったけど、そんなことは何度もあったし、今回のような様子を見せたことはなかった」

当時のことを思い出し、首を横に振って否定する。

「なにも原因がなく、あんな感じになったってことなのか？」

「さすがに原因なく荒れるといったことはないと思うんですけど…」

心当たりがないかテリアは考えてみる。

「……もしかしたら」

「心当たりあった？」

「八つ当たりか妬みなのかも？」

自信はないのか疑問系となる。それでもいいので幸助は先を促す。

「ジェルムって師匠に恵まれなかったみたいです。戦える人に剣の扱いを教えてもらおうとして断られ続けて、ようやく了承をもらえた人からは、教えを受けられずセクハラを受けてたらしいです。

それで師匠という存在にマイナスイメージを持ったのかなと思う」

「でも俺は師匠じゃないよ？」

「そうなんですか？」

ジェルムにも説明したことをテリアにも説明する。

「それでもいい加減な指導はしてないんでしょ？」

「手を抜くことはしなかったつもり」

「だとしたら師匠という存在に近いものを感じ取っても無理はないと思います？」

むしろそんな関係なのに、自分よりましなことに羨ましさを感じたのかも」

推測にしかすぎないんですが、と締めくくった。

テリアの推測は当たっている。そういった半ば無自覚な思いと元々の性格が合わさって今回の幸助への反応となったのだ。

「その二人！ よさげな依頼見つけたからこっち来て」

タイミングよくジェルムから声がかかる。

「この依頼を受けるわ！」

ジェルムが突き出してきた依頼書には魔物退治と書かれている。ベラッセンから徒歩四日の位置にある村からの依頼で、出されて三日が過ぎているものだ。

内容は、草原に最近住み着いた魔物を退治してくれというもの。草原の動物を食べ、畑を荒らし、家畜にも被害が出ている。人間は近寄らずにいるので、今のところ被害は出ていないらしい。しかしこの三日の間に被害は出ているかもしれない。

依頼者から聞いた魔物の特徴から、ギルドはこの魔物をウォックームという魔物と判断した。

ウォックームとは、二足歩行の昆虫の魔物だ。一メートルほどのカナブンやカブトムシといった甲虫が、二足歩行しだした様子をイメージするといيدらう。

強さは、コキアが負けたファードッグより強く、ヴァイオレントバルブより弱い。これだと範囲が広すぎるので範囲を狭めると、幸助が獣人たちの村で戦った魔物たちよりやや弱いといった程度だ。駆け出しのコキアには強敵だが、イーガンたちレグルスパロウには物足りなく感じる魔物だ。

この依頼を受けたということは、ジェルムたちは中堅と呼ばれる位置までは達していないということだろう。

幸助はこの魔物のことを知った時、一つの疑問が浮かんだ。どうして二足歩行しだしたのかということだ。二本足よりも多足の方が安定性がある。機動力も空を飛べば解決する。空いた足が腕となることもなく、足のまま。

その変化になにか意味はあったのかと幸助は思ったものだ。

これは虫系統の魔物たちの願いを聞き入れた、虫関連の神が起こした変化だ。

勢力を増してきた人に勝てるようになるには、人に似ればいいと虫たちは考え、それを神は叶えたのだった。

結果としては中途半端で、ある程度の強さを持つ冒険者には勝てない失敗作になってしまった。

一度起こした変化は取り消しはできず、こうしてウォックムという魔物は世界に誕生した。

「出発はいつにするつもりなんだ？」

「すぐにでも！」

「ジェルム、準備とかあるんだしすぐは無理だよ。せめて明日。ただでさえワタセさんに無理言ってるんだから急がせちゃ駄目」

「……わかったわよう。じゃあ、明日の朝八時ギルド前に集合よ」

テリアの言葉に口を尖らせて渋々といった感じで頷く。

旅の準備のやり方を教えてあげるとコキアを連れて行こうとするジェルムを幸助は止めた。

「どうして止めるのよ」

「コキアにどういった感じで準備させるつもりなのか知りたいんだ。つまり戦うことも意識させた準備なのか、旅に出ることだけを考えて準備なのか」

「戦うことに決まってるじゃない」

なにを当たり前なといった感じで幸助を見る。

「それには反対。今のコキアはファードッグにも勝てないんだ。それなのに戦うことを意識した準備ってことは、ウォックムとも戦

わせるつもりに思える。それは無謀だろう？　また大怪我負わせるつもり？」

「ま、守るから怪我なんて負わないわよ！」

説得力の薄い返答をするジェムルから視線を外し、テリアに視線を向けて聞く。

「テリアさん、あんたらは複数のウォックム相手にコキアを補助しながら殲滅できる？」

「……無理です。私たち二人だけで、相手が五匹程度なら軽い怪我しながら勝てるといった感じだと思う。

そこにコキア君が入ると、戦うといったことに集中できなくなつて私たちも大怪我を追う羽目になりかねません」

自分たちの命に関わることで、テリアはジェムルを庇うといったことはせず正直に答えた。

「というわけだからコキアには戦いに参加しない準備をしてもらう。反論は聞かないよ。そもそもコキアに大怪我負わせるようなことをさせたって怒ってきたのはそっちだから」

ジェムルは納得せざるを得ない。それでも反論はある。

「依頼をこなす時はコキアに村にいろつての！？　どうやって依頼内容の判定を出してもらうのよ！」

「コキアに遠見の魔法を教えるよ。離れた位置から俺たちの行動を見てもらえばいいんじゃない？」

一応護衛もつける」

「護衛って？」

自身のことだから気になるのだろう。コキアが聞く。

幸助はジャケットを脱いで、久々に鷹に変化させた。上げた腕に止まったリンヨウを撫でる。

着ている物が魔法の道具とは予測していなかった三人は驚いた表情を見せた。

「リンヨウって名前なんだけど、この子をつける。そこらの雑魚なら追い払えるくらいの力はあるから」

「そんな便利な物があるなら、どうして常日頃つけてあげないのよ！ 外に出た時だってその鷹がいれば！」

「弟子じゃないから、そこまでする必要はない」

付け加えるならば、急がしくて様子を見れない時に森に行くとは思っていなかったのだ。

言い切った幸助に再び怒りの視線を向けるジェルム。

「明日絶対ここに来なさいよ！」

怒りのままコキアを連れてギルドを出て行く。言い残したことはないの、今度は幸助も止めなかった。幸助と騒いで迷惑をかけたギルドそれぞれにすまなさそうに一礼して、テリアも去って行く。

リンヨウをジャケットに戻し、幸助は椅子に座る。

今回のことは冒険者の仕事ぶりを見学できて、コキアにはいいことなのだろう。

いずれ教えることが早く来ただけと結論付けて、幸助は納得することにした。

「そーいや依頼の手続きしたのか？」

ジェルムたちが受付に行った様子はなかったことを思い出す。確

かめるために受付に行き、依頼番号がわからないので内容を言っ
て受ける手続きされているか聞く。

ジェルムは手続きを忘れてギルドから出たようで、まだ誰も受け
たことにはなっていないかった。

誰かに受けられるようなことになる前に手続きをすませ、幸助は
ギルドを出た。家に帰る前にリツカートへ飛び、お店予定地で作業
してる人たちに、メリールたちへの伝言を頼み家に帰る。内容は、
依頼で出かけるため次の様子見には来れない、といったものだ。

エリスにあったことを話すと、面白いことに巻き込まれたなど笑
われたのだった。

翌日、時間前にギルドに到着した。十五分前についたのだが、コ
キアはすでに待っていた。

遠足を楽しみにする子供のようになり、参加できないとはいえ、初め
ての依頼に興奮して早く着いたとのこと。

もう一度戦闘には参加しないように言い含めているうちに、ジェ
ルムとテリアもやってきた。

互いに挨拶を交わし、ジェルムは幸助に対して渋々といった感じ
だったが、早速出発する。

街から離れるとジェルムの表情からは不機嫌さは消える。いつ魔
物に襲われても不思議ではないので、私情を抑え込み周囲を警戒し
ているのだ。

一行のペースは、旅慣れていないコキアがいるため若干遅めにな
っている。

薪を拾ったり、食べられそうな野草や小動物を採ったり、遠見の
魔法を教えたりして進み、時間は流れていく。やがて日が傾き始め、
今日の移動は終わりとなる。

食事は調理のできる者で作るということで、幸助とテリアの交代
制となった。コキアとジェルムは後片付けとなる。

昼はテリアが作ったので、今度は幸助の番だ。ホットケーキと昼

に狩った兎肉と野草の炒め物で簡単にすませるつもりだ。

「ワタセさん、フライパンとナベの両方持ってきたんですね」

「できる料理の幅が広がるしね」

通常ならば重さを減らすためどちらか持ち物から外すものだ。テリアも鍋を外して、底の深めなフライパンを持ち歩いている。だが幸助の場合は高い体力と筋力のおかげで外さずにすむ。肉に下味をつけ、野草のあく抜きをすませて、手早く作っていく。手馴れた様子に、そばで手伝えることはないか見ていたテリアは感心していた。

「ジェルムも料理覚えてくれると本当に助かるんだけど」

「まったくできないの？」

「私の方が上手くできるって言って任せきり」

「将来困りそうだねえ、ちょっと味見してくれる？」

皿に取った炒め物をテリアに渡す。

野草と肉を口の中に入れたテリアは軽く目を開いた。よく咀嚼してから口を開く。

「……美味しい、美味しいですよ」

「ありがとう。じゃあ、これで完成だね」

四人分を皿に分けて、先に作っておいたホットケーキをまとめた皿を持ってコキアたちの待つシートまで移動する。

祈りを捧げて食事が始まる。

炒め物を一口食べたジェルムの動きが止まった。

「どうしたのジェルム？」

「な、なんでもない」

料理に文句の一つでも言っていてやろうと思っていたのだが、意外と美味しく文句をつけられないでいた。

偶然美味しくできただけと自分に言い聞かせ、全部食べたのだった。

次こそは文句を言っと思ってやると思いつつも毎回美味しく、この旅でジェルムが食事に文句を言うことは一度もなかった。

食事の後は見張りの順番を決めていく。この見張りからコキアは除外した。慣れない長距離移動で疲れているのでゆっくり休ませることに、三人一致で決まった。

順番はジェルム、幸助、テリアとなる。中途半端な睡眠でも十分体力が持つ幸助が立候補したのだ。

幸助とテリアは見張りに備え、さっさと寝る。コキアはまだ眠くはないので、ジェルムに付き合い起きていた。

時間が経ち、ジェルムに起こされて幸助が見張りに立つ。乱暴に起こされることはなく、言葉少なにだが普通に起こされた。すでにコキアは眠っていて、幸助はパチパチと炎の中で枯れ枝が爆ぜる音を聞きながら、一人で周囲を見張っていた。

空は曇り、星明かりも月明かりもなく見張りはやりづらかったが特に異変はなく交代の時間がきた。テリアを起こし、また眠る。

夜が明けて、テリアは朝食の準備を整えていく。その匂いで幸助が起き、次にジェルムが起き出してきた。まだ寝ているコキアをジェルムが起こし、軽く身支度を整え朝食となる。

後片付けも終え、一行は目的地へと再出発する。

道中こんな感じの繰り返しだった。

魔物が襲ってくることもあったが、問題なく追いついていた。その時に幸助が働かずジェルムが文句を言ったのだが、コキアの護衛だと答え一蹴した。

幸助はただ護衛をしていたのではなく、ジェルムとテリアの実力を調べてもいた。

その結果、今まで会った冒険者の中では下の方じゃないかと結論付けた。

テリアの方は魔力が低いから戦術に幅が出ない。逆に言うところからの成長で順調に育っていくだろう。

ジェルムはまともな師につけなかったということが戦いに響いていて、剣の扱いが荒い。我流故に変な癖がついていて、威力が分散されてしまっている。天性のものを持っているというわけではなさそうなので、我流を発展できず、成長しても思うようには動けないだろう。

もしジェルムがコキアを指導するとなると、コキアも剣士としては歪んで育ってしまうのは確実だ。

そうなるかわかっていて放置するのもどうかと幸助は思うが、弟子としていない以上手を出すのも躊躇うものがあり、なにも行動を起こさないでいる。

整備された街道を進み、途中から整備の荒い道にそれて目的の村に到着した。

問題の草原そばを通ったのだが、運がいいのかウオックームには遭遇することはなかった。その代わりに元々この草原に生息しているらしいサーベルバニーという凶暴化した兎と戦った。

余所者ということで注目を集めつつ、ここに来た用件を告げ村長の家を教えてもらう。

村長に依頼内容と目撃証言と依頼達成条件を確認して、幸助とジェルムとテリアの三人は早速草原に入る。今日のところは村回りの偵察だけを目的としている。

コキアは村から幸助たちの様子を見ることになっている。冒険者としてではなく見学者として来たことは、村長にも告げていて了承

を得ている。リンヨウはコキアの近くにある建物の屋根で待機状態だ。

依頼内容に変化はなかったが、目撃証言で一つ気になることがあった。二体ほどほかのウォックムよりも大きな個体がいたというのだ。幸助の記憶ではウォックムに大型種がいるという知識はない。ジェルムとテリアも同じだ。

依頼達成条件はウォックムの殲滅、条件つきで。条件がついたのは、殲滅確認など難しいからだ。だからある程度倒して、見回りをして出くわさなければ依頼達成となっている。

弟子と共にやってきたハプニング 前（後書き）

プロット時点で影も形もなかったジェルムとテリア

どこから来たのかと記憶を探ると、先の方でコキアとチームを組むことになるキャラっぽかった

つまり出番を求めて自己主張

おかげで予定の二倍の文量となったし、コキアとの関係もちよっと変わった

こういうのがキャラが動いたというのだろうか

弟子と共にやってきたハプニング 後

初日の成果はなしだった。

畑仕事をしている人たちにも話を聞いて、一度野菜畑が荒された以外は畑に被害はなしと情報を得たくらいだ。被害が出なくなったのは、畑を直す時また被害が出ては敵わないと早めでも収穫できるものはして、畑に野菜が残らないようにしたからだ。食べる物がなくなった畑にはもう用事はなかったのだろう。

村に戻り一夜明け、今度は目撃証言のあった方向へと三人は向かう。

目撃された場所はわりと偏っていて、もしかするとそっちに巣があるのかもしれないと三人は判断した。

「ストップ」

幸助の声に二人は止まる。

「なに？」

ジェルムは言葉短く問う。

「こっちの方向に二匹、大きめの魔物がいる」

幸助の指差す方向を二人は目を凝らしてみるが、なにも見えない。それでも疑うことはしなかった。この数日で幸助の感覚の鋭さはわかっていたからだ。

「ウォックームでしょうか？」

「もう少し近づいてみないとわからないね」

「じゃあそっちに行くわよ」

警戒を上げ幸助の指差した方向へと歩き出す。そして五分ほど歩いてジェルムとテリアにも遠くに動く物体を見ることができた。

「ウォックーム？」

ジェルムの確認に、幸助は頷いた。

「気づかれてないから、魔法で奇襲」

それでいいだろ？ と幸助はテリアに尋ね、テリアは頷きを返した。

使う魔法はなににするか手早く話し合い、雷系に決めた。炎では草に燃え移り、テリアの手持ち魔法の風や土や氷では外殻に弾かれる可能性がある。雷は外殻を無視して内部にダメージを与える、とった理由だ。

二人は魔法を使う準備を整え、さらに近づき使う。

「サンダースプレッド！」

「ライトニング！」

幸助の魔法はいくつもの細い雷が束になり真っ直ぐ進み、テリアの魔法は一条の太めの雷が真っ直ぐ進む。

どちらもその場に留まっていたウォックームに命中する。幸助が当てた方は倒れ動かなくなり、テリアが当てた方はよろめきながらもまだ立っている。

それを見たジェルムは走り寄り、斬りつける。一太刀では倒れなかったウォックームも、三太刀目で息絶えた。

「ありゃー俺が倒した方は剥ぎ取れないわ」

ウォックームの売れる部位は外殻だが、幸助が倒した方は焦げてぼろぼろになっており使い物にはなりそうにない。

これにジェルムはもう少し考えて魔法を使いなさいと軽く文句をつけ、テリアは杖の先でウォックームを突き焦げ具合を確かめていた。

軽くに留めたのは、過剰攻撃で駄目にするのはよくあることで責められるようなことではないからだ。それと目標に一步進んだのに責めるのはさすがに的外れだとわかっている。わかっているのなら文句はつけるなというところだが、心情的に無理だった。

「これって私でも使える魔法？」

「テリアはたしか最近魔力Dになったんだっけ？」

「はい」

「じゃあ使えるよ。教える？」

「お願いします」

銀貨一枚という幸助の言葉に、テリアは頷いて交渉成立となった。

「それくらいただで教えたらどうなのよ」

「それくらいってDクラスの魔法だよ？　銀貨一枚は安い方なんだよ？」

コキアに教えた火打ち石の魔法ならばただでも構わないが、今回の魔法はただというわけにはいかない。

五つほどDクラスの魔法が載っている書物は、銀貨十枚近くする。それだけの価値のある物をただで教えるのは商売人を馬鹿にする行為だし、需要を潰す行為だ。場所によっては罰せられ罰金を払うことになる。

エリスが幸助に魔法を教えるのも家事の報酬として教えている、といった方便を使っている。一応労働の対価という形式だ。ジェルムは魔法を使わないのでそこらへんには疎かった。

剥ぎ取りも終えた三人は目撃のあった地点に向かい、そこを中心にウォックームを探していく。

その日の成果は五匹だ。大型種は発見できなかった。次の日は同じ地点で探し、三体倒すことができた。大型種はまたいなかった。

また次の日、今度はさらに先に行ってみようということになる。先に進むと草原ではなく、石や岩が転がる荒地に変わる。

「あ、一匹いた」

今回はみつけてすぐに倒すのではなく、帰っていく方向を知ると決めていた。そこに巣があるはずだ。

離れて後を追いつ、すぐに巣らしきものを突き当たった。蟻のように地面に穴が掘っており、大型種が通るためか人一人余裕で歩くことができる大きさの穴となっている。

「ここから油撒いて火を放てたらどれだけ楽か」

「どこか別に出口あったりしたら意味ないですから」

テリアの返答に、そうだねと心の中で呟いた。

光量を落とした明かりの魔法をテリアが使い、三人は巣へ入る。蟻の巣のようにいくつも部屋があるかと思いきや、入り口から勾配の急な坂道を三分も進まないところに大きな穴が掘られているだけだった。天井部分にいくつか穴が開いており、光が差し込んでいて巣の中は真っ暗というわけではない。高さ三メートル、直径十五メートル弱の円柱状の部屋だ。

幸い気づかれずにすんだので、三人は入り口の影に隠れて奥を見る。

「でかいな、あれ。二メートル超してるんじゃない」

「ぼいすねえ」

証言通り二匹のでかいウォックムがいる。カミキリ虫のようなタイプとダンゴ虫のようなタイプだ。カミキリ虫タイプは強靱な顎を持っていて木の幹など簡単に噛み砕きそうだ。ダンゴ虫の方は目立った箇所はない。足の数が少なくくらいだ。

大型種の回りには普通サイズの二匹のウォックムがいて、壁際には白く丸いものが二十個以上見える。

「あれって卵？」

「だろうね」

ジェルムの目には見えてないが、幸助は殻の中で動きを見せるなにかを捉えている。

「どうやって戦う？ 私は突っ込むくらいしかできないけど」

「派手な魔法は使えそうにないよね？」

テリアがそういうのは、巣が頑丈に作られてないせいだ。蟻などが巣を作る時、唾液で巣を補強することがある。それをウォックムたちはしていない。そんな場所で派手な魔法を使えば、生き埋めになる可能性が高い。幸助とウォックムたちは這い出ることができるかもしれないが、ジェルムとテリアはおそらく脱出できないだろう。

「取れる方法としては、派手すぎない威力の魔法を使った後に突っ

込む、待ち伏せる、おびき寄せるくらいか。

あいつらの好物知ってる？」

聞かれた二人は首を横に振る。幸助も知らないのでおびき寄せをするとしたら、幸助かジェルムが囹になる必要がある。

三人は話し合って、ほかに出ているウォックームがいるかもしれないので、様子見も兼ねて外で待ち伏せしようと決めた。

穴入り口の見える少し離れた岩陰に待機して、ウォックームたちの動きを待つ。

そうして四十分ほど経ち、獣を引きずった一匹戻ってきて巣の中に入ってしまった。その十分後、一匹出てきて巣から離れていく。

幸助だけが後を追い、巣から五分ほど離れた位置で攻撃を仕掛けた。頭部を剣で一振り、それだけで殺せ、今度は外殻を剥ぎ取ることができた。残った体は遠くへと投げ捨てた。50キロを優に超す体はよく飛び五百メートル先に落下した。人間離れしすぎた筋力の成せる技だ。

その後三時間かけて四匹殺し、さらに一時間待っても戻ってくるウォックームがいないことから、あれで普通サイズのウォックームは全部だったのだろうと考えた。

残るは大型種の二匹。おまけで卵複数。この数ならばテリアの護衛を考えずに戦えると、三人は再び巣の中に入る。

今回は特に気配を抑えるなどしなかったので、入ってきた三人に大型種は気づいた。

すぐにダンゴ虫タイプが動き出す。三人に向かってこようとして、途中で丸まり勢いよく体当たりを仕掛けてくる。足場としていいとはいえない地面など関係ないとばかりに、小石を跳ね飛ばし転がる。三人はそれを避ける。ダンゴ虫は止まらず壁にぶつかった。その衝撃で天井からパラパラと土が落ちてくる。

「何度もぶつかられると巣が潰れるな。」

ダンゴ虫は俺が倒してくる。二人はあっちを頼む」

幸助は返事を聞かずにダンゴ虫へと走る。ジェルムとテリアは互いに見合ってから、苦笑を浮かべカミキリ虫へと視線を移す。二人ともダンゴ虫のうごうごと動く足が気持ち悪く、近寄りたくなかった。なので幸助の提案に少しほっとしていたのだ。見合った時そんな互いの気持ちかわかり苦笑が漏れ出たのだった。

ダンゴ虫の相手はすぐに終わった。時間にして一分もかかっていない。

壁から身を起こし、近寄ってくる幸助に向きを変え、転がろうと動きたダンゴ虫を丸まる前に斬ったのだ。頭部を上から真つ二つだった。硬い甲殻といっても、幸助には関係なくさっくりと刃を通したのだった。

虫の生命力高さゆえか、頭を潰されても動いてはいたが、横から蹴って横倒しにしてしまえば起き上がることなく、足を動かし続けるだけとなった。

こっちはこれで終わりと判断し、幸助はカミキリ虫を相手取っている二人を見る。

ジェルムが前衛、テリアが後衛。これは当然のことだろう。

テリアが威力低めの魔法を使い、カミキリ虫の顔を狙い、注意を引く。そうしてできた隙にジェルムが近づき、一撃見舞って離れる。注意はジェルムに戻り、テリアが再び魔法を使う。そういったヒットアンドウェイを繰り返していた。

カミキリ虫の攻撃は足を振るものと噛み付きだ。そのどちらもジェルムは避けていたが、空振った噛み付きが地面を抉った際に飛び散る小石までは避け切れていない。

ジェルムの攻撃は大した成果を出せていない。威力が足りず、足や胴に小さな傷をつけるので精一杯なのだ。普通のウォックムならば通っていた攻撃が大型種に通らないのは、単純に甲殻が分厚く

硬いせいだ。

両者共に小さな傷をつけるだけとなっている。傷で痛みを感じず血も流れないカミキリ虫に対し、わずかながら痛みも血も出ているジェルム。状態は似ていても、身体に受ける影響に差が出ている。テリアが教わったサンダースプレッドならば攻撃が通るのだろうが、外した場合壁にぶつかり巢に大ダメージを与える。習ったばかりでコントロールは甘く、命中率にも不安がある。生き埋めにはなりたくないので大きな威力の攻撃はできないでいた。

結果、なるべく同じ箇所を狙うという小さな積み重ねの攻撃になっている。

この戦い方は上手いものではなかった。体力の差があるからだ。殺したダンゴ虫のように虫は生命力が高い。そこにちまちまとした攻撃を加えて倒そうなど無茶もいいところだ。先に二人の体力が尽きる。

高威力の魔法が封じられている現状では、わかっているけど選ばざるを得なかったのかもしれないのだが。

このままではいつまで経っても終わらないと思い、気配を抑えカミキリ虫の背後に回ろうとする。広くはない空間なので隠れて移動することなどではしないが、二人よりも目立たなくしようと考えて気配を抑えようと思ったのだ。

そう幸助が動く前に、戦闘に変化が起きる。

飛び散った中にあった大きめの石をジェルムは避けようとして、躓き地面に倒れた。

この好機を逃すほど馬鹿ではなくカミキリ虫は、ジェルムに大顎を突きたてようと頭を振り下ろす。

テリアのフォローは間に合わない。魔法を使うよりも早く、顎が刺さる。

「ジェルムっ！」

テリアは叫び、ジェルムは防御の体勢を取り強く目を閉じる。

その場面を見た幸助は考えるよりも先に体が動き、剣をカミキリ虫へと投げていた。縦回転しつつ凄いい速さでカミキリ虫へと飛び、投げた次の瞬間にはカミキリ虫の頭部を砕いて、若干勢いを衰えさせたものの地面に落ちることなく壁に突き刺さった。

カミキリ虫はビクンっと大きく体を震わせ倒れ、ダンゴ虫と同じように足を振るわせるだけとなった。

「ふう、お疲れさまー」

あっさりと倒した幸助に、呆然とした視線を送る二人に声をかける。

二人は攻撃が通じず、不安を抱えながら戦っていた。大したことできずに、逃げることも視野に入れていたのだ。二人にとってカミキリ虫は強敵だった。特にジェルムは死の影が脳裏にちらついていた。

そんな存在をなんでもないかのように軽く倒されれば、信じられない思いを抱くのも無理はないだろう。

「……私たちより強いとはわかってたけど、ワタセさんすごく強かったんですね」

「まあ、ね」

「同じくらいの年齢なのに、どうしてここまで差があるのよ？　ずるいじゃない！　やっぱりきちんとした師匠に習うことができなかったから!？」

憧れを感じたテリアと違い、ジェルムはその強さに嫉妬する。死の恐怖から感情が乱れ、心情を隠さず吐露する。

「ずるいって……俺も師匠はいないけどね。少し教えてもらった程度。」

俺とジェルムの差は運じゃないか」

「私が運がなくて、そっちは運が良かったってこと！？　そんなのじゃ納得できないわよ！」

「俺の運がいい？」

幸運不運と言いたかったわけではない。運がいいならば来てそうそう死ぬような目にも合わないし、そもそもこの世界に来るといったこともなかったはずだ。

力は得たが、力と元の世界のどちらかを選ぶかと聞かれれば、幸助は元の世界を選ぶ。家族も友達もいるし、幸助の常識がそこにある。

「良かったらここにはいないよ？　死にかけもしたし。」

運っていったのは運勢。アクシデントが起きるかどうかって意味で言ったんだ。

現状に不満はないけど、それでも以前の暮らしを恋しく思いことはある」

「それでも強くなれたんでしょ？」

幸助のことを知らないが故に簡単に言えるのだ。

「なれはしたけどねえ。」

まあ、アクシデントなくても少し実力伸ばすだけなら簡単だけど」
「実力伸ばすって私の？」

疑わしそうな目で幸助を見る。

「剣を振る時、もう少し腰を使って振ると力が乗る。早く振るのが

癖みたいだけど、そのせいで腕だけで振るのに近い状態になった」

「腰って言われても」

確認のためにその場でジェルムは剣を振る。自身ではいまいちわからないのか、振りながら首を捻っている。

ジェルムが練習している間に、幸助は大型種二匹から外殻を剥ぎ取る。いまだ足がピクピクと動いているが、それ以上の反応は見せず、もう無害だった。

二人がそれぞれのことを行っている間に、テリアも卵を壊していた。威力の低い魔法でも簡単に壊せ、育ちかけのウォックームもその魔法で死んでいく。

「ねえ、よくわからないんだけど」

幸助の作業が終わったことを確認して、ジェルムが話しかける。

「わからないって言われてもね。じゃあ振り方を真似てみせるよ。その次に修正した振り方をする」

そう言って幸助はゆっくりと一回振る。そして次に癖を修正した方で振る。

「違いがあった？」

「もう一回お願い」

再度、二回振る。また頼み、なんとなく理解でき頷いたジェルムは違った箇所を意識してゆっくりと振る。

こんな感じかと幸助を見て、幸助は頷く。

もう一回振ろうとしたジェルムをテリアが止める。

「二人ともこんなところでやらないで、村に帰ってからやれば？
私もう帰って休みたい」

「卵全部壊した？」

幸助の確認に頷きを返す。

卵の残骸を見て動いているものがないか確認して、じゃあもう
用事はないかと転移の準備を始める。集めた外殻は足元に、二人に
は肩に触れてもらう。

「転移が使えるってことは魔力D＋以上確定。剣も使えて魔法もい
ける、どんだけですか」

憧れを通り越してテリアは呆れの視線で幸助を見ている。

転移準備中なので幸助は苦笑を浮かべるだけに留めた。

リンヨウのいる場所に移動したので、一緒にいるコキアが突然現
れた三人に驚く。

「お、おかえりなさい」

ただいまと返し、コキアを誘い村長の元へ向かう。

巣を潰したことを告げて、明日の見回りでウォックムが見つか
らなければ依頼達成ということになった。

「さっきの続きよ！」

そう言ってジェルムは幸助を引っ張り外に出る。

「続きって？」

「ワタセさんがジェルムの剣の悪いところを指摘したんだよ。それ

でちゃんと直ってるか確認してもらってるの」

「嫌ってる風だったのによく習おうって気になったね」

「ワタセさんがすごく強いからじゃない？ 気に入らなくともアドバイスはもらいたいって感じかな」

「そんなに強かった？」

遠見の術では巣周辺は効果範囲外で、そこであった出来事を見れなかったのだ。だからあそこでの戦闘を知らず、幸助の強さもいまいちわからないままだ。

「私たちが苦戦して勝てないかもって思ってた魔物を一撃だもの。私たちなんかとは比べ物にならないわ」

「……一撃」

テリアから聞いても、なんとなく凄いとわかっただけで詳細がわからずもどかしくなる。

「武器の差もあるのかな？」

「それも少しは関係する、かも？ ジャケットが特別製だったしありえない話ではないと思う」

「聞いてくる」

「私は宿に戻ってるわ。疲れたしね」

ジェルムも疲れているはずなのだが、強くなれるという思いが疲れを一時的に忘れさせていた。

一心に剣を振るジェルムの様子を見ている幸助にコキアが近寄り話しかける。

「ワタセさんの剣ってジャケットと同じで特別なの？」

「どうだろう。特別な効果はないよ。ただ重くて頑丈」

「持ってみていい？」

幸助は持っていた剣をコキアに渡す。幸助があまりに軽そうに扱うので、コキアは普通の剣より少し重いくらいなのだろうと考える。だが受け取った剣の予想外の重さに、剣を支えきれず地面に落とした。

「重い！」

「そう言ったよ」

コキアは落とした剣を拾い両手で持つ。持つて構えることはできるが、剣として扱うことはできそうになかった。まして幸助のように片手で持ち続けることは不可能だ。

「コキア、そんなに重いのもそれ？」

好奇心が刺激されたのかジェルムは素振りを止めて聞く。

「えっと、一歳を過ぎた赤子と同じくらい」

どれくらいの重さか伝えようとして、隣の家の赤子を抱いた時と同じくらいと思い出した。

ジェルムは赤子を抱いたことがないので、どれくらいかわからなかった。

「私にも持たせて」

実際持ってみればわかるだろうとコキアから受け取る。自身の使っている剣の二倍以上の重さが手にかかる。

「……重いね」

何度が振ってジェルムもコキアと同じように使いこなせないと判断する。

剣を幸助に返し、ジェルムは頭を下げた。

「これまでの失礼な態度を謝ります。謝って許してはもらえなだらうけど」

これだけの力量差や具体的な指導を見せ付けられれば、自分が間違っていたと思い知る。

「謝ってもらえるなら許す気はあるよ」

「そ、そうなの？　ありがとう」

許したのは、いつまでも睨まれるのはめんどくさいからといった理由なのだが。

「今日は疲れてるだろうし、宿に戻ったら？」

「そうする」

コキアも戻るようで、一緒に宿へと去っていった。

残った幸助も特になにか用事があるというわけはなく、ぶらぶらと散歩してから宿に戻る。

翌日、幸助とジェムルテリアの二組に分かれて、草原を見て回りウォックムがいないことを確認した。

その途中でジェルムは魔物に遭遇し戦う。アドバイスを意識して剣を振るうと、いつもより剣が魔物の体を深く裂き、多くダメージが入っていることがわかった。

このことでジェルムは一つの決意を抱いだ。

依頼を終えたその晩、ジェルムは幸助に弟子入りを頼み込んだ。都合のいいことを言っていると自覚があったのだが、少しのアドバイスでわかりやすい成果が出たことで、今後もし師事していけばさらに強くなると確信を抱いた。

恥知らずだとはわかっている。しかし我慢できないし、する気もなかった。

「断る」

幸助はジェルムの懇願を一言で斬って捨てた。

「やっぱりあんな態度取ったから？」

謝っただけでは駄目なのだと言表情を曇らせる。

「そのことはもう気にしないって言ったよ。弟子入りを断っているのは別の理由。」

コキアを弟子にしていなかったから、なれそうにないって予想はついてたと思うけど？」

「それは、わかってたけど……でも！」

「ワタセさん、その理由ってなんなんですか？」

理由を知れば、相方の願いを叶える糸口を見つけることができるかもしれないとテリアは尋ねる。

以前理由を聞かれた時は答えられなかったもので、再び聞かれた時のために幸助は偽の理由を考えていた。

称号を『竜殺し』から『歌姫の弟子』に入れ替えて、カードに表示させる。

「広めたくない理由なんだ。秘密にできるのなら答える」

信憑性を持たせようともったいぶる。

三人は間を置かず頷いた。それを見て、少しだけ考え込む素振りを見せた幸助は、カードを三人の目の前に差し出す。

「この称号が理由」

「歌姫の弟子」

読み上げたコキアはまだわからないという様子だが、ジェルムとテリアはなにかに気づいたような表情となる。

「歌姫というと、もしかしてフルール様？」

「この称号の歌姫ってカリバレッテの姫を示してるんですか？」

二人の疑問に幸助は頷きを返す。

フルールは積極的というわけではないが世界を舞台に活動していて、知名度はそれなりに高い。二人が知っていてもおかしくはないのだ。

「ちょっとした出会いをして、こんな称号をもらえるような関係になった。」

俺は立ち位置がフルール様に近い。俺がなにかしでかせば、その影響がフルール様に及ぶ可能性が高い。

そんな俺が弟子を取って、その弟子がハプニングを起こすと、そのせいで迷惑がかかる可能性もある。

だから俺はカリバレッテから離れて、この大陸を活動の場として大事には巻き込まれないようにしているんだ。

弟子を取らないのも迷惑をかける可能性を減らすため」

実際のところはそんなことを考えていない。称号のことは広めてないし、称号を使おうとしなければ隠し通せる。なのでフルールに迷惑がかかる可能性はそこまで高くない。

ウィアーレのギフトのように称号を見て操る者がいればばれる。しかしながらそういったギフト持ちはそう多くはない。だから神経質に隠す必要はない。

「そういった理由ならジェルムを応援できないわ。王族に迷惑といった話じゃあね」

糸口なんか見出せずテリアはギブアップだ。

ジェルムも同じ思いで、諦めるしかないと思う。そこにコキアが自覚なく支援を送る。

「俺と同じじゃ駄目なの？ 定期的にアドバイス受けるだけでもプラスになると思うけど」

ジェルムにとってはその言葉は天啓のようだった。すぐに幸助へと頭を下げて乞う。

「コキアと同じでお願いします！」

「同じって言われても。コキアは一人前になるまでって約束でアドバイスしてるんだ。」

ジェルムはほとんど一人前でしょ？」

強さや性格にはやや不安があるが、依頼者に対する対応や自分にあつた依頼を選ぶといった点では間違つたことをしていない。

ウォックームに負けそうになったのは、突然変異がいるという情報がなかったせいだ。

こういった前情報から変更があり、依頼の難度が上がった場合は、

依頼者の証言や証拠品があれば報酬の上乗せをギルドがしてくれる。
今回は村長や村人の目撃証言と剥ぎ取った外殻が証拠となる。

「そこをなんとか！」

「諦めてほしいんだけど」

「いえ、諦めません！」

「今日のところはこれで終わりにしよう？ 騒ぐと家の人に迷惑になるし」

泊まっているところは正式な宿ではなく、広めの民家が民宿として提供している場所だ。防音にはそこまで気を使っていない。

「認めてもらうまで諦めない！」

そう宣言してジェルムはテリアと共に自分に与えられた隣の部屋に戻る。

この言葉に嘘偽りなく、ことあるごとに頼み込んだ。この時、断られても決して感情的にならずにいたのが、そばで見えていたテリアとコキアには印象深く感じられた。

街に帰っても続いたしつこく粘り強い懇願に、ついには幸助は折れることになる。生徒っぽいなにかの一人追加だ。

師匠という存在に不信感があるのは、以前の経験が元になっている。なので感情を裏返すともともな師匠への憧れという部分が出てくる。だからか巡り合ったまともそうな師匠的人物を逃すようなことはしないのだろう。

ちなみジェルムの訓練にテリアもついてくることになるが、弟子入り志願はしなかった。師匠に自主練習のやり方は聞いていて、それに不満はなかったからだ。時々、新しい魔法を教えてもらうくらいだった。

翌朝、十分休んで疲れをとった三人とコキアは村を出る。行きと違って帰りは転移魔法を使い、村を出たその日の夜十一時頃にはベラッセンに帰ることができた。

夜でもギルドには緊急に備えて人はいるが、依頼終了の受付などはしてないため、四人は明日の昼ギルド前に集合することにして街の入り口で解散した。

幸助は泊まり慣れているシディの宿へ、コキアは実家へ、残る二人は幸助について行った。この街で最初に泊まっていた宿は依頼に出る前にすでに解約していた。なので宿に泊まるという幸助と一緒のところに行けばいいやと、ついていったのだ。

シディはすでに寝ており、ほかの従業員が受付にいた。その人も顔見知りだったので、軽く挨拶してお金を払う。幸助は一泊、二人は三日分払い、それぞれの部屋に入ってさっさと寝た。

朝、泊まっていたことに驚いていたシディと話したり、客を連れてきたことを感謝されたりして時間を潰し、ギルドに向かう。

「依頼達成、お疲れ様です」

「報酬の追加について話がしたいんですが」

幸助の言葉に受付を担当していた職員は、背後で書類仕事をしていた職員にそのことを告げて、四人を小部屋に案内させる。

「報酬増加の話をしたということですが」

「依頼だとウォックム討伐となっていたんですが、行ってみるとウォックムの大型種がいたんです」

「待ってください。ウォックムに大型種ですか？」

そんな魔物は聞いたことないと幸助たちの報告に怪しさを感じる。

「これがその大型種の外殻。依頼主の証言もある」

「それを預かって調べても？」

「売るつもりだから、壊されると困るけど」

「それならうちで買い取りましょう」

幸助はジェルムとテリアにそれでいいか問いかけ、二人は頷いた。

「今回の報告が本当だとすると、これで七件目になるな」

思わずといった感じで職員は呟いた。

「七件目ってなんのことですか？」

「未知の魔物に関する事件の数。」

世界中で見慣れない魔物が暴れて発見されるといったことが起きているですよ」

テリアの問いかけに職員は隠すことでもないのか答えた。

「七種類の魔物が新発見されたってことでいいんですね？ 大騒ぎするようなこと？」

「七種類という数だけで見ると少なく感じるんですけど、突然変異や新種の発見という面から見ると多すぎるのです。」

「だいたい十年で一種類見つかると言えば、今回のことが異常に思えてきませんか？」

通常ならば未開地に冒険者が行き、そこに住む新種や突然変異を見つけるのが普通なのだ。今回のように向こうから人のテリトリーにやってくるということは、ここ百年記録に残っていない。

それが七種類全部、人のテリトリーで見つかっているのだから怪しんで当然だろう。

「そういやカルホード大陸でも魔物を集める猿を見つけたっけ」

エリスにその話をした時、そんな魔物は聞いたことがないと言っていた。長生きしているエリスの知識にない魔物なので、新種や突然変異の可能性はある。

「その話は聞いてませんね。八種類目ということでしょうか」

武闘大会の後でボルドスたちが倒しに行ったラフドワームもこれ関連の出来事だったりする。

ただどこがおかしかったというわけではなく、通常よりもやや強力だったというだけなので珍しさは少なく、今回の出来事と関連があるとは思われてはいない。

「でもその猿は冒険者が森に解き放ってたんだよなあ」
「詳しく聞かせてもらっても？」

職員が目が強い好奇の輝きを放つ。

獣人の村で起きたことをプライバシーに関わらない程度に話していく。

レグルスパロウが猿を解き放っていた者たちと関わっていたことは話さないでいた。

「猿を解き放っていた冒険者たちを探したいな。ですが顔がわかりませんから難しいですね」

「似顔絵描けるかも？」

「本当ですか？」

紙を一枚もらい、あの時のことを思い出し書いていく。書いては修正しと繰り返し、十分後別の紙に満足いく似顔絵ができた。

書いた絵はレグルスパロウに依頼した男だ。

似顔絵をじっと見て、職員は世界中のギルドにこの男の情報を流しておきますと懐にしまう。

「話がそれましたね。報酬の増額ということですが、話を聞くかぎりは信じられますし、そこまで大金になるわけでもないので、この場で認めましょう。

元が銀貨五十枚で、外殻買取も考慮して銀貨八十枚、お一人銀貨二十枚でどうでしょう？」

「あ、コキアの分はなしでいいので、三人分計算でお願いします」「えっと、いいのですか？」

職員が確認するようにコキアに聞く。事前にこのことを知らされているコキアは頷いた。魔物討伐に参加していないのに、報酬をもらおうと思うほど厚かましくはなかった。それに報酬は出ないが、旅費は幸助が出していたのだ。お金は使わず、冒険者として経験が積めた、それで十分だった。

「でしたら銅貨十枚減らして、お一人銀貨二十六枚と銅貨十枚では？」

銀貨二枚を三人できっちり分けようとするときりが悪くなるので、幸助はそれでよかった。ジェルムとテリアもその報酬で十分だったので頷いた。

「そうですか。では報酬をすぐに用意しますが、銅貨十枚分の情報をなにか聞きたければ答えますよ？」

四人とも特に思い浮かぶことはなかった。首を横に振る四人を見て、職員は報酬を取りに部屋から出て行く。

ジェルムとテリアの価値からすれば、多い目な報酬に二人は嬉しげな表情を見せている。貯金に回し、装備を新調するための資金にしようと話してるのを聞いて、幸助は聞きたいことができた。

「こちらが報酬となります。ご確認を」

トレーに三等分され載せられている報酬を幸助たちの前に置く。財布に入れて幸助は職員に聞く。

「さっきの情報のことなんですけど」

「はい」

「ぼろくなって使わなくなった剣とか鎧って置いてます？」

「置いてますよ。ある程度溜まったら廃材屋に売ります。売れないほどにぼろぼろな物は捨ててしまいますが」

「そういうのって貰ってもいいんですか？」

「そうですね……職員に許可をもらえれば大丈夫かと。ですがあなたは必要ないのでは？」

「俺じゃなくて、そっちの子になにかあればと思って」

コキアを示す。ぼろくなっても服や木剣よりはましなものがあるだろうと考え聞いてみたのだ。

装備の整っていないコキアを見て納得した職員は廃材置き場を幸助に教えて、置き場近くにいる職員に事情を話せば大丈夫でしょうと許可を出す。

職員に別れを告げた幸助は、早速コキアと廃材置き場に向かう。ジェルムとテリアは廃材には興味ないので、依頼を探すため分かれた。

廃材などを置いてある倉庫を管理している職員に事情を話し、持ち出し許可を貰う。ただし売れそうな物は認められないとのことだ。廃材置き場には折れた武器、錆びついた武器、破損した鎧、破け

た革鎧などそれなりの数の武具があった。その数は十や二十ではない。どうしてそんなにあるかというところ冒険者たちが置いていくからだ。鍛冶職人などに売りに行く冒険者もいるのだが、そういったことをめんどくさがる冒険者もいるのだ。

「とりあえず好きに何個か探してみな」

「はい！」

コキアの目が輝いている。まともな装備を持っていないコキアにとって、ここはちょっとした宝の山だった。折れた剣でも木剣より攻撃力は高い。色々楽しそうに手に取り出す。

その様子を横目に幸助も武具を手を取っている。使おうと思っっているわけではない。修理できるものがないかと思っているのだ。家に自分の作業部屋ができたのだ。そこを使えば修理や金属塊に戻して一から作り直しもできる。本格的な鍛冶の経験はないが、どんな感じなのかやってみようかと少し好奇心がうずいた。

コキアは二本の折れたブロードソードと壊れた硬革の鎧を手に入れた。

ブロードソードは半ばから折れていて、ダガーといった感じになっている。ついでに刃も欠けていたり潰れていたりしている。

鎧は左肩辺りが無く、大きめな胸当てといった感じだ。小さな傷や血や土の汚れもついている。この汚れは布で拭けば落せるだろう。幸助はいかにも使い物にならなさそうな剣と斧を貰った。

職員に礼を言って二人はギルドから出る。

「コキア、剣を研ぎなおそうか？　今よりましになるけど、どうする？」

「じゃあ、こっちお願いします」

一本、幸助に渡す。十日後に持ってくると言って幸助はコキアと

分かれ、家に帰る。

その日から幸助はリッカートに行く以外は家から出ずに、鍛冶に挑戦することした。

やったことは溶かして板状に固め、熱して叩き、折り曲げ叩くといった地球にいた時テレビなどで見た鍛錬方法だ。十分鍛えたと判断して、研ぎ刃と成す。そして出来た刃物を見て、首を傾げることになる。

正式な手順を踏んでいないので、まともに剣ができるわけもない。出来上がったものは重心の狂った切れ味の鈍い刃。

今回のことでわかったのは、鍛冶職人に手順を聞いてから再挑戦した方がいいということだ。

それでも第一作ということで記念に取って置くことにして、鍛冶挑戦はひとまず終了となった。

知っている知らない人

幸助がコキアのことを放置していた期間になにがあったかという
と、エリスと一悶着あったのだ。

喧嘩したというわけではなく、初めて会うエリスと共同生活することになった。初めて会うという言葉に間違いはない。

どうしてそんなことになったか。それは一つの魔法が原因だった。

コキアにアドバイスして家に帰った幸助は、自分の部屋に転移した瞬間、大きな力の波動を感じ取った。

エリスがなにか大規模な魔法を使ったのだろうと判断し、ここまですべきな力を発する魔法とはどんなものなのか興味を持ちエリスの部屋を訪ねる。

「エリスさん」

声をかけながら扉をノックする。気配は中にあるのだが返事はない。

魔法に失敗して気絶でもしたのかと扉を開く。先ほどの波動は、制御に失敗して周囲に散った力といわれても納得できるものだったのだ。

扉を開けると、普通に立っているエリスの姿が目に入る。振り返る姿に失敗はしてなかったのかと幸助は首を傾げた。

「エリスさん？」

自身を見るエリスに幸助はさらに首を傾げる。違和感があるのだ。幸助が感じている違和感は視線と外見だろう。

幸助を見るエリスの目には親愛の情はなく、そこらに落ちている物を見るような目だ。今のエリスは幸助のことをなんとも思っていないのだとわかる。

そして外見は十才ほど若返っている。朝までのエリスは二十後半で、今のエリスは二十手前だ。

「えっと？」

なんの反応も返ってこないことに幸助は戸惑う。

そんな幸助からエリスは視線を外し部屋の中を見渡す。まるで初めて見るかのような反応だ。そうしてテーブルの上に二通の手紙を発見した。

一通はエリシール宛、もう一通はコースケ宛と書かれている。

エリスは自分の名の手紙を手に取り読み出す。

内容が良いものだったのだろう。表情に薄く笑みが浮かんだ。それをすぐに消し、幸助宛の手紙を手取る。

「コースケというのはあなた？」

感情の籠らない声での問いに頷きを返す。

差し出されてくる手紙を受け取り、幸助は目を通していく。

『コースケへ。』

目の前の私は、あなたを知らない私です。

私は若い頃にとある大きな魔法の実験をしました。それは今と未来の自分を入れ替えるという魔法です。

その魔法は成功し、私は未来に行きました。目の前に立っている私が、コースケにとって過去から来た私です。

どうしてこんな魔法を使ったかは、いずれ目の前にいる私が話すでしょう。

コースケに一つ頼みがあります。難しいことはありません。今まで通り過ごしてくればいいのです。多少迷惑をかけるかもしれませんが、よろしく願います。

この魔法の効果は七日ほどでなくなります、それまでお元気で。

追伸。

魔法を使って一度会ったことがあるのに、ホルンに連れてこられた時初めて会ったという反応を見せたことに疑問を抱くかもしれません。

あの反応はあれで正しいものです。魔法の反動か最近まで当時の記憶がなくなっていたからです。

詳しいことが知りたいのなら、帰ってから話すことにします』

手紙を二度読み直し幸助は違和感がなにか気づくことができた。手紙から視線を外し、エリスを見る。

「初めまして、でいいですかね？」

「ええ、そういった反応だと助かります」

未来の自分と知り合いだと言っても、自身は知らない。それなのに馴れ馴れしくされても困るし、いい感じはしない。

いつもと違う口調を新鮮に感じつつ、幸助は続ける。

「そろそろ昼なんですけど食べます？　こっちに来る前に食べました？」

「いいえ、もうわ」

「じゃあ準備してきます」

できるまでここにいろわ、というエリスの声を背に幸助は部屋を出て行く。

エリスは再度手紙を読み、最後に書かれた部分で止まる。

そこには『欲しいものは手に入る』と書かれていた。

それを期待、疑惑、諦めといった感情の入り混じった目で見続けた。

部屋にフワリとほどよく焦げたチーズとホワイトソースの匂いが漂う。昼のメインはグラタンだ。できたてだと示すように湯気が上がっている。ほかには昨日作ったクルミパンと一口サイズに切られた果物がある。

祈りを捧げてエリスはグラタンを口に運ぶ。熱さに顔をしかめ、息を吹きかけて冷ます。少しだけ動きを止め、幸助が口に合わなかったかと思っているうちに、フォークを動かし始める。どうやら美味しかったようで、皿が綺麗になるまで動きは止まらなかった。

食事を終え、食器をトレーに載せながら幸助は話しかける。

「エリスさんは午後からなにをするの？」

「……特に用事はありませんが。」

一つ頼みごとがあります」

「俺にできることなら」

「エリシールと呼んでください。エリスと呼ばれるほどにあなたのことを信じてはいないので」

幸助はエリスのことを知っているが、若きエリスは幸助のことは全く知らないのだ。エリスと呼ばれることに抵抗があった。

「わかりました。次からはエリシールさんで」

「はい。ワタセさんは昼からなにを？」

「俺は畑仕事でもしようかなと」

「それを見てみてもいいですか？」

「かまわないけど、特別なことをするわけじゃないですよ？」

エリシールは頷く。

食器を洗って、倉庫から鍬などを出し、畑に向かう。

すでに六畳分の広さの畑を作っており、三列野菜の種と苗を植えている。今日はその隣にも畑を作ろうと思っている。

始めは畑にちょこちよこと生えている雑草を抜き、次に今日作る畑予定地の雑草を抜き、石をのけていく。急ぐ理由もないので、のんびりとしていった。

そんな幸助をエリスは近くにあった岩に座って、時折雑談しながら見ていた。どこか上機嫌なようにも感じられる。

途中で一休み入れて、夕方には畑はできあがった。なにを植えるかはまだ決めていない。

夕食はなにか食べたいかエリスに聞き、なんでもいいという困る返答を受けつつ道具をしまっていく。

川魚のムニエルをメインに、ジャガイモのポタージュ、サラダを夕食とした。

夕食の後、明日の朝食に出すパンの下ごしらえをすませて、風呂を沸かす。

幸助が家事をすませて風呂に入るまでエリシールはじっと幸助を観察していた。

幸助が風呂から上がる前に部屋に戻り、ベッドに入った。大魔法を使った疲れがあり、早めに眠ることにしたのだ。

日が昇り、幸助はいつものように過ごします。朝食を作り、洗濯して、掃除をこなす。そうやって十一時前になる。

昨日と変わらずエリシールは幸助を観察していた。洗濯をする時に、自身の下着を洗われて少し反応していた。エリスはどうも思わないし幸助も慣れたが、エリシールは恥ずかしさがあった。

午後からは勉強に当てる。本を読んで知識を詰め込んでいくだけなのだが。分かりづらい表現をしているところがあると、エリシール

ルに聞く。エリスならば答えられることも、エリシールは答えられないことがあった。生きた時間の差なんだなあと幸助は感心する。

エリシールの様子に変化が出始めたのはここからだ。

ここまでの幸助とのやりとりで、エリシールは気づいたことがある。それがエリシールの期待に沿うものではなかった。

その日も前日と同じように幸助の観察をしたのだが、翌日から観察はしなくなり、なにかを考えるような様子を見せ始めた。それと幸助が話しかけるたびに微かに苦い表情を見せる。

そして四日目、エリシールはほとんどの時間を部屋から出ずに過ごす。体調が悪いのかと幸助は考えたが、食事は普通に取るし、顔色が悪いということもなく、大事な考え事なのだろうと判断した。

五日目も似たようなものだ。ただエリシールのまとう雰囲気重い。これには幸助も心配し、どうしたのかと問いかけるも、なんでもないといった硬い返事が返ってくるのみだった。

ベッドに寝転がって扉の向こうから聞こえてくる声を聞く。

感情の籠らない返事をして、扉の前から遠ざかっていく足音を聞き流す。

「結局は無駄だったか」

大きく溜息を吐いて起き上がる。

求めていたものが手に入ると期待して、手に入ったと勘違いして、それが今の自分ではなく未来の自分のものと気づいた。

未来に手に入ることを喜ぶのではなく、今この場で手に入れたかった。

喜びに震えた心を思い返すと、大笑いしたくなるほどに滑稽だった。

「早く時間にならないものかな」

もうここには用はないと帰還を望む。帰ったところで希望すらないのだが。

なにもする気が起きずにぼんやりとして、そこで幸助が声をかける。

もう幸助に関心をなくしていて、放っておいてほしい。声をかけられるたび、心に不快感が溜まっていく。

やがてその蓄積したものは、無関心の域を超え、爆発する。

六日目もエリシールは部屋に籠ったきりで、幸助はちよこちよこと声をかける。

午前十時を過ぎて、四回目の話しかけのために扉をノックする。

返事がないことに幸助は首を傾げた。これまでは短めながらも返事はあった。

もう一度ノックして反応ないことを確かめ、扉を開く。

瞬間、真っ直ぐ飛んでくる光弾が目に入り、しゃがんで避けた。

背後から壁にぶつかった音が聞こえてきた。

「いきなりなに？」

魔法を使ったままの体勢のエリシールに問いかける。
が、返事はない。

「黙ったままだとわからないよ。俺に原因がある？」
「うるさい！」

エリシールはもう一度魔法を使い、幸助も防ぐための魔法を使う。
氷の槍が幸助目掛けて飛び、幸助が差し出した手のひらの十センチ

チ前で碎けて消える。

「このっ!？」

あっさりと防がれたことが気に障ったのか、次々と魔法を放つ。それらは必要魔力D一あたりの魔法で、効果範囲は小規模なので部屋に被害を与えることが少ないですんでいる。

幸助は防ぎながら、どうしてこんなことになっているのか考える。そんな幸助の思考に意味はない。既にエリシールの頭から原因は抜け落ちて八つ当たりになっているからだ。いや原因は幸助にあるので、八つ当たりという言葉は間違いなのかもしれない。

「表に出ろ!」

そう言ってエリシールは窓から外へと飛び出す。無視しては駄目なんだろうと思いつつ、幸助も同じように外に出た。

着地のタイミングを狙い光弾が迫る。幸助はそれを威力を低いと判断し、踏み潰す形で着地した。

はいているズボンに汚れと小さな傷が入った以外は被害はなかった。それを見てエリシールは幸助の実力を測る材料とした。

「もう一度聞けどなんでこんなこと?」

「答えるつもりはない!」

すぐにエリシールは魔法を使い、頭上にバレーボール大の二つの光球が浮かばせる。さらに魔法を使う準備を始める。

幸助はどうすればエリシールが落ち着くかわからなかった。だからある程度好きにさせよう考える。

余裕があるのはさすがに死ぬような攻撃はしてこないだろうとい

う思いがあるのと、手紙に注意事項が書かれていなかったからだ。エリスはこういった事態になると知っていたはずだ。幸助がなにか特別なことをしなければならぬのなら、ヒントかなにか書いてあると考えたのだった。そういったことは書いてなく、だったら自身の思うように行動すればいいのだろうと判断した。

場所が広くなったからか、エリシールの使う魔法に幅が出る。テリアも使った雷の魔法が幸助を狙い、

「えいや！」

いくつもの石が飛び、

「よつと！」

火の波が地面を流れ、

「とりゃ！」

地を削る風の塊が乱舞する。

「おっと！」

幸助はそれらをことごとく避ける。場所が広くなって助かったのはエリシールだけではないのだ。

苦労する様子のない幸助に、エリシールは舌打ちをする。先ほど当たった攻撃で無傷なことから、少なくともD+の魔法を使う必要があると考える。現時点でのエリシールの魔力ランクはC-。それも最近上がったばかりでそのランクの魔法制御は上手いとはとても言えない。上手く当てるには幸助のことを気にしないで集中する必要がある。

「行け！」

エリシールは頭上で待機させていた光球二つを前進させる。それがある程度幸助に近づくと、大豆ほどの粒を幸助へと射出した。もともとは接近戦を挑んできた者に対する、迎撃用待機魔法なのだ。それを使って時間稼ぎするつもりなのだ。

光粒の乱舞が幸助を襲う。数が多く避けきるのは無理だろう。雨を避けるというのと同じだ。

だが当たったところで幸助にダメージを与えるほどではない。目に当たれば危険かもしれないが、それ以外では被害はない。洋服が破けるくらいか。

この攻撃は無限に続くというわけではなく、じょじょに光球が縮んでいる様子からあと二十秒も続けばいい方だ。

なので幸助は目の当たりに腕を上げて耐え続ければいい。

もともとこれでダメージを与えられると考えていなかったエリシールは、幸助の動きを鈍らせることを目的としていた。それが足を止めてくれるという幸運が舞い込んできて、使う予定だった魔法よりも一段階上の魔法を準備できるくらい集中できた。

「縛り上げろっアースチェイン！」

じつと光弾の乱舞が収まるのを待っていた幸助に、地面から飛び出した土や石や根でできた鎖が幾重にも絡みつく。熊や象も簡単に行動不可能にする束縛魔法だ。これから使う魔法を確実に当てるために、確実に動けなくする魔法を使ったのだ。

「おお！？」

巻きついた鎖に驚きの声を上げる幸助。常人ならばその重さで倒

れるところだ。

そんな幸助の様子に、この縛りでも完全ではないと思いエリシールは焦りを抱きながら、奥の手ともいえる魔法を使う準備を始める。

「炎よ！ 雷よ！ 風よ！」

次々に最初使った魔法を発動させていく。それらは幸助へと向かわず、塊となってエリシールの傍に漂う。

その三つの塊を自身の目の前まで移動させ、広げていた両手を叩く。同時に三つの塊は一つの塊となった。

これはエリシールの持つギフト『魔法融合』で行っている。効果は名前通り魔法の合成だ。このギフトを使わずとも魔法は合成できる。だがそれは事前にそういった魔法を作る必要がある。一方でこちらはエリシールがやってみせたように、即座に合成できるのだ。

「三魔混合！」

一つとなった塊は、三色が入り混じり完全に一つになることを拒絶するかのように暴れてぶれを見せる。

制御するエリシールの体全体からサウナに入ったかのように汗が噴出す。歯は食いしばり、砕けはしまいかと思えるほどだ。

十秒二十秒と経つごとに塊の振動はなくなっていく、一分後には振動はなくなり色も混ざり合った状態となった。

「……ちよつとやばいかな？」

初めて見る現象に見入っていた幸助は鎖を解こうともがき始めた。塊から伝わってくる威圧感がドラゴニスを見た時よりも大きいのだ。あれを受けて死ぬことはなさそうだが、まともにくらうと大怪我ぐらいはしそうなのだ。さすがにそんな怪我は負いたくなかった。

少しもがいてみてわかったが、鎖は外せないことはない。けれどもあっちの魔法が発動する前に動けるようになるかと難しかった。そこで幸助は少しはダメージを負うことを覚悟して、体全体を覆うシールドの魔法を使う。防ぎきれはしない。しかしダメージを減らすことは可能だろう。

「ミックストルネード！」

「キューブシールド！」

同時に魔法が完成し、縛り付けられている幸助の近くに雷と炎でできた竜巻が現れる。

竜巻はシールドを瞬く間に削り、幸助を飲み込む。

竜巻が現れて盾は四秒で効果を減少させ、熱気が幸助を襲う。七秒で完全に盾を砕き、雷と炎に晒される。十秒後竜巻は消え、朱色の視界が普通に戻る。竜巻は盾だけではなく、鎖も消し去っていた。

「……うぐっ」

自由にはなった幸助だが動き出さずその場で痛みを耐える。体のあちこちに軽度の火傷を負い、血も流している。こっちの世界に来て竜に特攻した以外ではもっとも重い怪我だ。

魔法を放ったエリシールはその場に倒れ伏していた。幸助にどれだけダメージを与えたか見てから意識を失う。思っていた以上に軽度ですんだことに悔しげな表情を隠さず。

エリシールが気絶したのは無理をしたからだ。今のエリシールのギフトでは三つの魔法を合成することは無理なのだ。それを無理矢理行っただから消費する体力は多く、極度の集中も必要としたため精神的な疲労も多い。即座に意識を失わなかったことは賞賛に値する。

「早く治療しないと」

いつまでも痛がっても仕方ないと、顔から順に足まで魔法を使っていく。

「あゝーっ落ち着いた」

治療を終え、痛みは完全になくなった。髪の毛は燃えて切り揃える必要がある。服もジャケットの下に着ていたシャツが燃えてしまっているし、ズボンが半ズボン状態になっていて捨てるか雑巾にすればいい状態だ。ジャケットは特製なおかげで無傷だった。

体の点検を終え、エリシールに近づく。いつまでも地面に寝かせているわけにはいかない。

「うわっ汗びっしょり。簡単にでも拭いた方がいいんだろうけど……まあ胸とか股間以外を拭くだけでもましになるよね」

お姫様抱っこでエリシールを運び、ベッドに寝かせて顔首腕足腹背と拭いていく。

拭きながら軽く診断した結果、疲労と推測。このまま寝かせて問題ないだろうと拭き終わり、散らかっていた部屋を手早く片付けてから出て行った。

三時間おきに様子を見ていて午後八時を過ぎた頃、エリスの部屋から微かに動く気配がした。

幸助はノックして反応を待つ。だが反応はなかったので、気にせず入る。エリシールはベッドから身を起こしている。

「ご飯食べる？」

返事はなかったが、お腹の鳴る音が聞こえた。

恥ずかしかったのかエリシールの顔がほのかに赤く染まる。

「オニオンスープ作ったから持って来るよ」

返事を待たずに部屋から出る。

冷めかけていたスープを温めなおし、深皿に盛る。

パンを入れたオニオンスープなので物足りないということはないだろう。

「どうぞ」

テーブルをベッドそばまで持っていき、そこに置いてから勧める。
スープをじっと見て、手をつけずに幸助を見上げる。

「なにも聞かないのか？」

口調が丁寧ではなくなったのは、こちらが地だからだ。出会った当初は警戒し、観察していた。自分を隠し丁寧に接していたのだ。出会う者全員に対してそういった対応をしている。

「答えてくれるなら聞きたいよ」

くだらない理由ならば怒るつもりだ。怪我を負わされてそれを流せるほど幸助の心は広くない。

「まずは先にスープ飲んでよ。冷めると美味しくないと思うから」
「わかった」

素直に頷いてスプーンを手取る。しっかり味わうためかゆっくり咀嚼していく。

食べる様子を見るのも失礼かと思った幸助は本棚から本を取り出し読んでいく。内容は物語集で昔実際にあったことを脚色してある。演劇の題材にも使われる英雄セクラトクスの活躍、知性ある魔物と子供の交流、願いを叶えるため神の試練の挑戦した者といった内容が書かれている。

セクラトクスが大黒虎との戦いに向かうといったところでエリシールが食べ終わり、幸助は本を閉じる。

視線を下けたままエリシールは黙っている。三分ほど経ち、幸助が話す気はないのかなと思いついた頃、エリシールは口を開いた。

「私には欲しいものがあつた」

視線は下げたまま、どういった思いで話し出したのか感情を読み取りづらい。

「それが手に入ると手紙には書いてあつて、内心期待していた。けれどもそれは私のものじゃなくて、未来の私のものだった。

向けられる言葉、感情、全てが私ではなく未来の私に対してのものであった！」

「原因が俺にあるみたいだけど、ほしいものってなに？」

「そ、それは……」

言いづらそうに口ごもる。そして小さくポツリと漏らした。

「……」

「聞こえなかったんでもう一回」

「信用とか信頼とかそういった感じのものだよっ！」

怒鳴るように大声で言う。

それに対して幸助は首を傾げた。幸助にとって、それらは当たり

前にあるもので欲しがるものではない。だから理解しづらいのだ。

「私の生まれは知っているだろう？」

「いや知らないけど？」

詳しいことは聞いたことがない。異世界だからエリスみたいな長命な種族もいるんだなと納得していたのだ。

知らないと答えた幸助にエリシールは意外そうな顔を見せた。自分のことを話していると思っていた。そうした上でないと真に誰かと親しくなれない、とエリシールは考えている。それは未来の自分も同じことだと思っていた。

「……私は魔族と人間のハーフだ」

「それで？」

「魂石がないから魔族として扱われず、成長速度の違いから人間とも扱われなかった。

両方から違うのだと爪弾きにされ続けた。いつかは状況が変わると思っていた、でもいつまで経っても変わらないっ。

そうやって育った私は人間不審になって、対人関係はさらに悪化した」

エリスの親嫌いはそういった経緯の大元が、自分を捨てた両親にあると考えているからだ。

エリスの母は人間の娼婦で、父は魔族で客。一夜の遊びでエリスは生まれ、母親は産んだ方がいいが育てる気はなく孤児院前に捨てたのだった。

その孤児院は人間のみで構成されていて、ハーフという珍しさが仇となったのだ。

「ある程度大きくなった時には、一人で生きていけるって思い込む

ことで周囲を威嚇しながら生きてきた。心の底で誰かと笑い合いたいという願っているのを見ないふりしながら」

「えっと、つまり」

未来にやってきて幸助と一緒に暮らし、向けられる心地よい親愛が自分ではなく、未来の自分へと向けられたものと気づき荒れた、羨ましくて。溜まった鬱憤を晴らすための攻撃だったのだろう。エリシールが言っていた八つ当たりというのに違いはなかった。

「それで私のことを知ったお前は どうする？ 理不尽に攻撃をしかけた私に対してどう思う」

投げやりでいながら、それでも微かに本当に小さな期待混じりの声で聞く。

いい加減な返事は駄目な場面と幸助は理解し、真剣に考える。

「……正直なところ八つ当たりされたのは理不尽だとは思う」

そうか、と沈んだ声の返答がくる。

「そういった差別される思いは想像しにくいです。でもなんとなく荒れる思いはわかる。」

だから以後八つ当たりしないのなら水に流すよ」

「水に流す？」

慣用句がわからないのだろう、エリシールは首を傾げる。

「ああ、気にしないって意味です」

「気にしないって死ぬような攻撃しかけたのに」

「まあ、生きてるし。話聞いたらこっちにも非があるようなないよ

うな、そんなもややとした気分になって責められないよ」

エリシールにエリスとして接していたのは事実なのだ。それがいらつかせていた原因ならば、怒れなかった。

かといって完全に自分に非があるとは思わない。勝手に期待してそれが裏切られたといっただけで暴れたのだ。迷惑とは思えど、自分が悪いとは思わない。だから次はないと考え忠告した。

「まずは自己紹介からしなきゃいけないかな」

既知の人ではなく、初めて会った人として接するのだから当然なのだろう。

「初めまして幸助・渡瀬と言います。この家の居候みたいなものは十八。出身地は異世界。流離人というやつで、こっちについて色々エリスさんやホルンという人に教えてもらった。二人のおかげで今こうしてられるんだ、感謝してる。

んで竜殺しの称号持ち」

エリシールの表情は少し呆けた後、驚きと疑いの二色となった。流離人という部分も驚かされたが、一番驚かされたのは竜殺しということだろう。

証拠として差し出されたステータスと称号の表示されているカードを、エリシールは驚愕の表情で見ている。

「……竜を、殺したの？ 殺せたの？」

「偶然だけど」

事情を説明する。事情を隠さないのは手紙に忘れると書いてあったからだ。

「奇跡？」

「かもしれない。次はエリシールさんの番」

「私はエリシール。家名はない。年は三十五になったのか。冒険者としてギルドに所属し、ずっとソロで動いている。

称号は細々としたもので、特にこれといったものはない」

「優れたる魔女とか一夜千殺とかはまだなんだ」

「それは私が得ることになる称号なのか？」

「一夜千殺は称号じゃなくて通り名らしいよ。三十半ばに得た通り名だっけ」

「ほかに未来の私についてないか知ってる？」

「ボルドスっていう子供がいる。捨てられていたのを拾ったとか、母じゃなくて姉って呼ばせてる」

「……子供を拾ったの……」

エリシールには子供を拾い育てるという気は起こらない。みつけても見捨てるだろうと言い切れる。

未来に至るまでに自分にながあつたのか、思いを馳せてみても想像つかなかった。

姉と呼ぶせることについては容易に共感できるのだが。

「そういえば異種族とのハーフということに思うところはないの？」

「異種族っていわれてもよくわからないし、ほらそんなのいない異世界から来てるから俺」

「異世界ってどんなところなんだろう」

幸助は簡単に説明していく。

「神も魔物もない世界って想像できない」

「うん、俺も神や魔物がいる世界って言われて驚いたし無理ないん

だろうね」

「でも平和なんじゃないかって思う」

「俺のいた国は平和だったけど、外国だと物騒なところもあるよ。魔物がいなくても人間同士で争って危険な場所はある」

「どこも変わらないってこと」

溜息一つ吐いて、エリシールは話題を変える。幸助がこっちに来てからどのように過ごしてきたのかというものに。幸助もエリシールがどのようなことをしてきたか聞き返し、時間は流れていった。

夜更けまで会話は続く。そんなに長く誰かと話したのは初めてで、エリシールは楽しい雰囲気を楽しませていた。時折、笑みもこぼれて警戒心はほぼなくなったのだとわかる。

この会話で、リングがなくなったり紙くずが突如現れていたのは魔法実験のせいだとわかった。いきなり使って未来に来るというのはさすがに危ないので、まずは未来に送ったり、未来から取り寄せたりしていた結果だったのだ。

朝になり、眠そうに目を擦りながらキッチンにエリシールがやってくる。

すでに幸助は朝食の支度を整えていた。ピザトースト、コーンスープ、果物がテーブルに並ぶ。今日で最終日なので、豪華にいかうかと昨日聞いたのだが、普通でいいとエリシールは答えていた。

「いつごろ帰るのわかる？」

「いや、夜前には帰ることになるだろうが」

「お土産のお菓子でも作ろうか？」

「頼める？」

「了解」

今ある材料を思い出し、なに作ろうかと考える。

「……ナッツクッキー、パウンドケーキ、芋餡の饅頭、果汁で作った餡くらいかな。

どれがいい？」

「饅頭って初めて聞いた。どんなの？」

「パンに近いかな？ 今から作ってみよう」

材料を集めてちゃちゃっと下準備を済ませる。

雑談しながら、調理を進め昼頃に完成した。

ほかほかと湯気を上げる真っ白な饅頭を皿に載せエリシールの前に置く。作った饅頭は酒蒸し饅頭のような外見をしている。

「熱いから少し冷ましたほうがいいよ」

幸助の忠告に従い、エリシールは饅頭を半分に割ってふーふーと息を吹きかけ冷ます。ぱくりと噛り付いてよく味わい飲み込む。芋餡はこして繊維をとってあるので、舌触りはさらりとしている。

「パンに近いけど、パサパサしてないのか。うん、美味しいよ」

「それはよかった」

幸助はそのまま昼食を作る。饅頭を作りながら、ペペロンチーノを作ろうと決めていた。パスタマシーンはないので、手打ち麺だ。少しだけ遅めの昼食も終え、そのままのんびりと過ごし二時を少し過ぎた頃、エリシールがなにかに気づく。

「そろそろ時間みたいだ」

ほらと手を出す。指先から透明になりだしていた。反対の手にはお土産の饅頭を入れた紙包みを持っている。

「また会おう」

「うん。まあ、俺はすぐに会えるけどね」

「そうだな」

エリシールは小さく笑みを零す。すぐに全身が薄れていき、完全に消える前に幸助へと手を一振りする。幸助も振り返すが、エリシールに見えたかどうかはわからない。

エリシールが消えて十秒ほど経ち、二階から扉が開く音が聞こえた。

すぐに疲れた顔のエリスが下りてきた。

「えっと、おかえり？」

「ただいまー、それと久しぶり」

エリスは気の抜けた声で返答し、テーブルに突っ伏した。

「なんでそんなに疲れて？ 向こうでなにか大変なことがあった？」
「いやいや、やることはあったが、疲れるようなことはなかったよ。此度の特殊交換魔法で、魔力を多く使ったのが原因じゃ」

エリス側から干渉し、エリスが多めに魔力を消費するようになっていたのだ。それでもエリシールも疲れ果てるのだが。

「じゃあ、エリシールさんも向こうでぐったりしてる？」

「したな。疲労困憊じゃった」

懐かしそうに話す。

「なにか飲み食いする？ 芋饅頭余ってるけど」

「もらおう。あれを食べるの久しぶりじゃな」

エリスの目の前に饅頭と水を置く。

まずは水で喉を潤し、饅頭に齧り付く。何度か頷きつつ嬉しそうに食べる。

「そうそうこんな味だったのう」

「エリスさんに作ったの初めてだっけ？」

「うむ。作ってもらった記憶はないのう。今度から作ってもらえばいいだけじゃがな」

「そんなに美味しかった？」

「思い出の味というか、たった一つの証拠というか、な」

過去に戻ったエリシールはほとんどのことを忘れていた。行って帰ってきたという確信はあるものの、どんなことをしてきたのかわからずにもやもやとしたものが心に生まれていた。ただ悪いことはなかったという思いがあった。

そんな状態で持っていた芋饅頭のその味だけが記憶に残ることになった。味に付随するのは喜怒哀楽の中の喜びと楽しさという感情。その二つの思いが、思い出せないという言いようのない感情を逆撫ですることになる。

そうやって溜まった感情のはけ口となったのが、一夜千殺と呼ばれる原因の出来事だ。

感情を撒き散らして暴れて疲れて虚脱状態となったところへ、守られた形となった人々たちからの賞賛が届いた。いつもは心に壁を作り届かないその声は、なにも考える余裕がなく壁が剥げた精神状態だったが故に届いた。自身に感謝を向ける者がいると知った瞬間だった。

これを機にエリシールの人嫌いは少しずつ小さくなっていった。そうして多くの人々と知り合い、ボルドスに会い、ホルンに会い、

幸助と再会した。

「……今に至るのに必要で大切な代物だったのじゃよ」

とても思いの込められた言葉だったが、事情を知らない幸助は首を傾げざるを得ない。

そんな幸助を見て、エリスは笑みを浮かべる。理解されなくとも、自分がわかっているのだからそれで十分だった。

「よくわからないけど、また作るよ。」

そういえば向こうでなにかしたって言ってたけど何をしたの？」

「向こうで？ ああ、知り合いのギルド長、当時はまだ一職員だった男に手紙を渡したのだよ。」

数十年経ったら、私にそれを渡してくれと頼んでな。

それのおかげで空白となっていた記憶が数ヶ月前に戻った」

記憶が戻ってすぐに昔会ったことがあると伝えなかったのは、信じてもらえる可能性が低かったからだ。

それと自身が体験したことで違いがでないようにするためでもある。知らせてズレが出てしまうと、なにかまずいことが起こるかもしれない。うかつなことはしない方がいいと判断したのだ。

「これからもよろしく頼むの」

「こちらこそー」

「甘え倒すつもりじゃから、覚悟しておいてくれ」

「甘え？」

「魔力ないからのう、魔法使いだった身としてはなにをするにも不便でなあ」

甘えるということに他の意味合いも込められていた、なんてこと

があるのかもしれない。

それを知るのは上機嫌なエリスのみだ。

「ああ、そういうこと」

了解と返し、二人は雑談に興じ出す。

平穩は続く

幸助はいつものようにメリイルとセレナに会いに来た。今日はエリスも変装して一緒に来ている。変装したのはホルンの実家に見つかる厄介なことになるからだ。魔法を使つての変装なので、声も変わっておりメリイルたちに気づかれることもない。

「ここがコースケの店なのじゃな」

改装途中な店を見てエリスが言う。

「俺のつて言つてもそこまで干渉する気はないし、お金出すだけなんだよね。ついでに俺に入る利益もそれほど期待してないんだよ。メリイルさんとセレナが暮らしていければそれでいい」

恩返しの意味でこの場を提供したのだ、自分に入る利益はそこまで期待していなかった。商売人が聞けば、呆れるか怒るかしそうなセリフだ。

ここにはほかの役割を求めている。それは定期的に入ってくるオセロや爪切りなどのお金を保管してもらつておこうと思つていたのだ。自身で定期的に取りに行つて家に置いていた方が盗難の危険はないのだが、取りに行くのが少しめんどくさかった。簡単に言うとすぐお金をかけた貯金箱ということになるのか。

それに店の経営が悪くなつたら、置いてあるお金を使うように言うつもりなのだ。お金に困つたらすぐに使えた方がいいだろう。大金がここにあると知られたら盗賊などの的なので、そこらへんは気をつけないといけない。

銀行がこの世界にあればいいのだが、物を預かる職や金貸しはい

ても銀行はなかった。商人ギルドが似たようなことはしているものの、あくまで一時的に預かっておくだけで長期間保管や融資などはしていない。

いっそのこと商人ギルドに銀行のことを話してしまえば、また飯の種になるのかもしれない。

幸助自身はそれほどお金を必要としていない。エリスが食費も家賃も取らないおかげで、受ける依頼で入ってくる収入で十分だ。

「こんにちはー」

店に入ると顔見知りの大工たちが挨拶を返してくる。

「オーナーさん、上にお客さんがきてやすぜ」

「お客？　どんな人だった？」

「商人でしたね。奴隷も連れていたんで、開店してからの労力として売れることを見込んで連れてきたんじゃないっすかね」

「奴隷かあ。ありがとう」

礼を言って階段を上がっていく。そのまま上がりきらず、エリスに問いかける。

「奴隷ってこっちじゃ普通なの？」

「元いたところだと普通じゃなかったのかの？」

「いなかったよ。昔はいたっばいけど、俺が生きてた時代にはいなかった」

「そうなのか。道理で渋い顔になっているのじゃな。こっちだと当たり前のようにおるよ」

「奴隷って聞いて俺が思い浮かべるイメージは、給料もなく、こき使われて、替えが簡単にきく命のすごく軽い存在なんだけど」

「前半は合っておるよ。じゃが後半は違うな。」

長く生きるようにそれなりの扱いをする者たちが多い。お金を出して買ったのだから、元を取る前に死なれては損じゃろう？」

「扱いは悪いけど命の保障はされてると思っていいと？」

エリスは頷く。

「奴隷になる人ってどんな人たち？」

「どんな奴らか……さらわれてきたり、親に売られたり、自身を売ったりじゃな。」

奴隷商人が一般人に売る奴隷は売られたり売ったりした者じゃな。さらわれてきた者たちは目立たぬように売られる。そういった者を扱うのは犯罪となっておる」

「犯罪者も奴隷になってるって思ってたけど」

「奴隷になるまで犯罪を犯すような奴は、大きな罪を負った奴らじゃ。そんな危ない奴らをお金を出して買いたいと思うか？」

「思わないね」

買った後、暴られたり他の奴隷を扇動されたら迷惑極まりない。犯罪者は奴隷として売りに出されずに鉱山など隔離された場所に放り込まれ、そこで一生働かされ使い潰される。奴隷よりも下の位置づけとなっている。

奴隷が主人に奴隷から解放されることもあるのに対し、そういった犯罪者は稀な例外を除き釈放はない。

「奴隷は一目で見えてわかるように、左手の甲に刺青を彫られておる。これを故意に隠すことは重罪じゃ。」

手を保護しないと危ない仕事や、すごく寒い場所では隠すことは許されておる」

「そーいや手に刺青している人を時々見たっけ」

解放された奴隷は刺青に罰印が入れられる。解放された奴隷を元奴隷といって差別することは犯罪になる。

表向きでは守られ、裏ではなくなならない差別だが、この決まりごとができたことにより差別は確実に減っていた。

この決まりごとは、元奴隷で商売を成功させ大富豪にまで上り詰めた人物が、財産の大半を使い国々に認めさせたことだ。もう千年以上も昔の人物だ。

その人物は奴隷という存在をなくしたかった。しかし長く考えた末にそれは無理だと判断し、せめて少しでも奴隷の力になれるようにと尽力したのだった。

「奴隷が解放される条件って主人の許しだけ？　買われたお金分だけ働いたら解放とかはない？」

「許しだけじゃな。真面目に働いておれば、情に絆され解放する者が多いらしい」

幸助の思っていたよりも緩い状況な奴隷だったが、やはり渋い感情は湧き上がる。

しかしこれは日本の知識を元にした感情なので、こちらに照らし合わせていいとは言えないと考えた。

関わらないのが一番だなと結論を出し、ふと湧いた疑問を聞く。

「そーいや値段っていくらくらい？」

「買うつもりか？」

「いやそんな気はまったくくない」

命に値段をつけるのならば、いくらくらいなのかと思ったのだ。

「年齢、健康状態、身体能力、保有技術で変わってくるが……そうさな、コースケと同年代で病気なし、平均的な身体能力、技術なし、

これで閃貨三枚くらいか」

「やすっ!？ 一般家庭の生活費約三年分？」

「まあ、その年齢ならなんらかの技術は身につけておるからもって値段が上がるじゃろうな。閃貨五枚を超すこともあるだろうさ。

あとは国がまとめて買うことがあるな。買って未開の地に送り、そこを開墾させる。大抵は行った先で魔物に喰らわれて一生を終えるのじゃが」

「見張りとかも一緒に？」

「見張りはずけないのじゃなかったか。行きは兵がついていき、道具と食料と一緒に奴隷を放り出す。そして後は奴隷任せ」

「それって意味ないんじゃない？ 逃げる人絶対いるよね？」

「いるのじゃろうが、無事に逃げられても左手を隠しながら生きていればいつか奴隷だとばれる。」

「選べる道は、賊になり冒険者が兵に殺されるそんな感じじゃない」

「国に買われる時点で終わってるって感じ」

エリスは頷き肯定する。

噂として、開拓目的より生贄目的で奴隷を買っているというものがある。強大な魔物と取引をして、定期的に餌を送るかわりにその魔物が国内に入ってこないようにと。

それが本当なのかはわからないが、強い魔物が大きな動きを見せることは少ない。

いつまでの立ち止まり話していても仕方ないと、二人は事務所に入る。

大工たちには二階から先に仕事をしてもらっているので、メリイールたちは最近ここで寝泊りできるようになっている。

「あ、オーナーいらっしやいませ」

誰が入ってきたのか顔を向けたメリイールの表情が微かに顰められる。オーナーという言葉聞いた商人の目が笑みに曲がる。

間が悪かったのかと思いつつ、幸助は挨拶する。

「こんにちは、メリイールさん」

商人にも頭を下げる。商人のそばには護衛なのか冒険者のように武器で身を固めている男が二人、顔の整っている男の奴隷が二人いる。

「オーナーさんが来たのなら、そちらと交渉といきたいのですが」

「経営は私たちに一任されておりますので」

「しかしお金を出し、決定する権利はあちらにあるのでしょうか？」

「それは、否定できませんが……」

「話してみるだけ話させてくださいな」

とメリイールを押し切った商人が幸助へと視線を向ける。

実のところ、この時点で商人は商売する気はなくなっていた。情報収集に切り替えたのだ。メリイールたち相手だと状況は芳しくなかったが、幸助相手ならば違った状況も望めるのではない、相手がなにを求めているか知ろうとしているのだ。

この商人は幸助たちが店を開くにあたって、大金を動かしどこでも一括払いしたことを知っている。

このことは商人ギルドが誰にでも公開している、というわけではない。むしろ情報漏洩には罰が与えられる。だがどこにでも金や酒に弱い者はいて、そういった筋から情報を得たのだ。

この行為を卑怯だと言う者はいない。商人ならば情報を集めるのは当たり前のことだ。商売に対する嗅覚が鋭いと褒められることはあっても、謗られることはない。

そんな情報を元手に派手に動いて、漏洩のことがばれるとばらし

た本人とばらさせた者にとって不利益が発生するので、よほど上手くやらないと強引な手段は取り辛かったりする。逆に言えば無茶なことをしなければ、目を瞑って見ないふりしてもらえる。

「初めまして。私はゴライオと申します。商いをやっております、本日は商売の話をしにきたのです」

「初めまして、幸助といいます」

「失礼なことをお聞きますが、あなたがこの店のオーナーというのは間違いないのですか？ お若いので少々信じられないのですよ。貴族につてがあったりするのでしょうか？」

オーナーの思った以上の若さが、ゴライオに一抹の不安を抱かせた。この店を建てることだけに無理をして、経営のことまで頭が回っていないのではないかと。

無理な資金繰りですぐに潰れてしまうような店と商売はしたくない、確認を入れる。

「間違いないですよ。大金を手に入れる機会に恵まれた運のいい人間です」

「たしかにお店を開けるほどの大金となると、いやはや羨ましいものですな！

ちなみにどうやって得たのか、お聞きしても？」

少しだけ幸助は迷いを見せるが、犯罪を犯したわけではないのかまわないだろうと判断する。

「アイデアを売ったのです。それが大当たりしましてね、利益がいくらか入ってくるようになりました」

「なるほどなるほど、よほどお売れになったのでしょね。

おっと話が進んでいませんな。商売の話に來たのです」

これはいけないと頬をかき、ゴライオは笑みを浮かべる。おどけて見せることで、警戒が少しでも解けてくれればと計算済みの行動だったりする。

「今日はこっちの奴隷たちを労力として買わないかと思い連れてきたのです。

どうです、体力健康ともに保証しますし、十九才と二十一才でこれから先長く働いてくれますよ」

この二人は対メリイルとセレナ用に連れてきていた。外見の良さ、保証する優良さで金持ちに売ろうと思っていた奴隷たちだ。優良品を始めに売り、印象を良くしようとして連れてきた。

ゴライオの調査では、ここにはまだ男手がおらず従業員としても使え便利だろうと考えている。結果は駄目だったが。

「いえ、必要ありません。

これから始めようとすることに奴隷はそぐわないので」

元から買う気がなかったことに加え、貴族を真似ようとしているのに奴隷は使えないだろうと思って断る。費用が抑えられるからと奴隷を使えば、安っぽさが出てしまい店の雰囲気合わない。

「そうですか残念です」

残念そうな表情はしたが、予測できていたので心の中では売れないことを受け入れている。奴隷がそぐわない喫茶店とはなんぞやと思いつつ、答えてはもらえないとわかっているので聞かない。

商売のアイデアはどのようなものであれ、他人にばらすようなものではない。誰かに話し先に使われても、話した本人の落ち度だ。

ちなみに二人の奴隷が十にも満たない子供だと、幸助は同情心が湧いて心動かされていたところだ。

いずれ夜伽に向いた奴隷でも紹介してみようかねと考えながら、ゴライオはこの場に持つてきていない商品のことで探りを入れてみる。

「では食器や食材はどうでしょう？」

「そういうのは店長であるメリイルたちに一任していますから、彼女たちがいらないと判断したらそれを支持しますよ。

ただうちは質のいい物を扱うつもりなので、こちらが使っている物よりいい物ならば買うのではないしょうかね」

幸助がメリイルに視線を向けると、頷きを返す。

だがメリイルは伯爵家が使っている品物を紹介してもらい、卸してもらえるよう交渉し承諾を得た。ゴライオが仕入れ先としている地域から、その品を超える物を持つてくるのは困難だろう。

頷きはしたが、ほとんど買い取り拒否が決まっているようなものだ。

「少し頑張って探してみましようかね。

では今日のところはこれでお暇いたしましょう。失礼します」

護衛と奴隷を連れてゴライオは去っていく。お金は手に入らなかったが、今後の交渉はメリイルとする、品質のいい物ならば大丈夫、この店以外に収入があるという情報は手に入ったので良しとしていた。

ゴライオが出て行き、メリイルが大きく溜息を吐く。

「お疲れですか？」

「そういうわけではないのですが、最近ああいった商人が続けて来

るもので。

全てオーナーがいなくて判断できないと断っているのですが、よろしいでしょうか？」

「かまわないよ」

「では今後もそう言って断ることにいたします」

子供の言い訳のようなものだが、そう言いたくなるほどひっきりなしに来るのだ。状況が落ち着けば、多少は契約先以外からの仕入れも考えられるようになるだろう。

「その話はこれで終わりとしまして、お隣の方はどなたでしょう？」

「この人は……」

答えようとして、名前をそのまま言うわけにはいかないことに気づく。

「この人はリズ。同居人で魔法を教えてもらっている人でもある。

今日はここを一度見てみたいと言って一緒に来たんだ」

「そうでしたか。初めまして、私は店長を任されることになりましたメリイールと申します」

「初めまして、先ほど紹介されたようにリズだ」

手短に済まされた自己紹介にメリイールは口数の少ない人なのかなど考える。

幸助とユイスの類似性を見抜いたメリイールだが、エリスとリズのことは見抜けなかった。この先も見抜けないままだ。それはエリスが目立たないようにしていたことと、行動の節々を変えていたからだ。

「セレナはいないんですか？」

「今日は実家に顔を出しに行っています。なにか用事でしたか？」
「いやいなかったからどうしたのかなって思っただけ。」

最近はお金が入用になったとか、なにか困ったことはありませんか？」

「そうですね……特に、いえ虫やネズミ避けをしたいなと思っています。ここに住むようになって何度か見かけまして」

開店して一階で虫などがみられるようになるのは困るだろう。衛生問題や雰囲気的に。

「虫避けの薬とかないの？　　というか貴族の屋敷ではどんな風に対策してるの？」

「そういった部分是对应していませんでしたので、わかりません。申し訳ありません」

メリイールが頭を下げて身を起こした時に、エリスが口を開く。

「貴族などの屋敷では、害虫害獣避けの魔法を使っているはずだ。殺虫薬もあるが、魔法と比べて一長一短だな。」

薬は匂いが出るし死骸も残る、一度仕掛ければ十五日は長持ちする。魔法は匂いでないが、毎日使用する必要がある」

「死骸がでないのは嬉しいことですね。その魔法は難しいのでしょうか？」

「魔力Eあれば十分だ」

お湯を沸かしたり、火種を生み出したりと日常生活に使うものに属するものなので必要資質は高くはない。魔物避けの魔法の劣化バージョンといった感じだ。

「ではお金を払うので教えてもらいたいのですが」

「早めの開店祝いということでした。紙があれば説明をそこに書くが？」

「ありがとうございます」

札を言つて紙とペンを準備する。

さらさらつと書いていき、注意点を口頭で説明していく。

注意点は時間と範囲についてだった。持続時間は十二時間強で、範囲はこの広さだと二階までフォローできない。なので使う場合は日に二回、一階と二階それぞれに使う必要がある。それと時々魔法に耐性を持った小動物がいるので、ネズミ捕りは仕掛けておいた方がいいということだった。

「今日はこれくらいかな」

「こちらから言うことはありません」

「じゃあ、また今度」

「はい、またのお越しをお待ちしております」

メリイールに見送られ、二人は外に出る。

「俺の用事はこれでおしまいだけど、エリスさんはなにかある？」

「一箇所行きたいところがある」

「どこ？」

「冒険者ギルドじゃ。コースケとそのギルド長を会わせておこうと思つてな。コネを作っておけば、なんらかの役に立つじやろ。」

あの店のことも気にかけてもらえるかもしれないな

「ありがたいけど、私的なことにそういったコネ使っているのかな？」

「頼れば貸しが生まれるが、こっちで難しい仕事を二三こなせば借りは返せるし、実力を知らしめることもできる。」

難しいといつてもお前さんならわりと楽な方じやろ。繋がりは持

っておいて損はない」

このまま平穏に暮らしたいなら、幸助の正体をばらすのはNGだし、貴族に繋がりを持つのも危ない。

だがこのままどこの有力者にも繋がりを持たないのは、権力が必要になった時のことを考えると少々不味いと考えたのだ。

コースケは今まで派手に動いたということはないが、わりと目立つことはしている。冥族の女王を始め、それなりに目をつけている人たちは多いと考えられる。

だからエリスは後ろ盾になってくれるような信じられる者を紹介しておくことにした。ギルドの長は大きな権力は持っていないが、蔑ろにされるような小さい者でもない。無償で動いてくれるような甘い人物でもないが、働けばその分きっちり返してくれる。

「エリスさんがそう言うならそうなんだろうね」

幸助は納得し頷く。

二人はリッカードのギルドに入る。エリスはもちろん、幸助もこのギルドには何度か来ている。依頼で届け物を届けたことがあるのだ。

エリスはギルドに入る前に変装を解いている。

「すまんが、ここのギルド長に取り次いでもらえないか」

話しかけられた受付嬢はエリスを見て軽く反応を見せる。

「あなたは……わかりました。名前はエリシールさんでよろしかったですね？」

「ああ」

「少々お待ちください」

この受付とは以前手紙を受け取りに来た時に会っていた。そのことを覚えていたのだろう。約束の有無を聞かずにエリスの要求を呑む。

今時間が空いているか聞きにぱたぱたと走り去り、三分ほどで再びぱたぱたと走り戻ってくる。

「お会いになるそうです。長の部屋まで案内は必要でしょうか？」

「いや、いいえ」

「ではこちらの札を持っていってください。職員に止められた場合、この札を見せれば通してくれますので」

「ありがとうございます」

札を受け取り、幸助を促してギルド長の執務室に向かう。

近くを通る職員に札を見せ、止められることなく進み、部屋に着いた。

エリスが扉をノックして、返事を待たずに開ける。

「返事を待って開けるのがマナーってもんだろがよ」

六十才ほどの老人がエリスに言葉を投げかける。

ほとんど白髪になっている短髪と同色の口髭を持ち、顔や手などに皺ができて始めており、もう若くないと思わせるが、それを否定するかのように意志の強い夕焼け色の目が特徴的な人物だ。

「返事を待たないのはいつものことじゃろ、気にするでない」

「そうだがよ。たまには人様に合わせるってことをしてみろや」

「めんどろなことはせぬ」

呆れたように長は溜息を吐き、入るように促す。

二人の間には気安さが感じられ、仲の良い友人に相当する関係なのだろうとわかる。

「ん？ そいつは？」

「おぬしに紹介するために連れてきた。同居人じゃよ」

「ほー人嫌いの気があるお前さんが、コルベス家の嬢ちゃんやボルドス以外と一緒に暮らしとるとはな」

「初めまして、コースケ・ワタセといいます」

頭を下げる幸助に、長は「ああ！」と大きな反応を見せた。

「コースケのこと知っておるのか？」

「ベラッセンの有力株だろう？ 報告が上がってきている。こういった形で会えるとは思ってなかった。

俺はガレオン・ノジュール。この長で、エリス婆とはそれなりの付き合いだ」

「婆？」

「婆で間違いじゃなかる。俺より十も上だぜ？」

「見た目若いから婆って言われると違和感が。というかエリスさん怒らない？」

隣に立つエリスを見てみると少しも感情を動かしていない。

何年も前から言われていて、慣れているのだ。自身でも若いというつもりはなく、年齢のことを指摘されても気にならなくなっている。

「事実じゃからの。気にせんよ」

「そうなんだ」

「そういうこった。今更取り繕ったところで、年取ったってことは変えようがねえしな。」

んで、今日はワタセの紹介だけか？」

二人を椅子に座らせ、用件を問う。

「お前さんにコースケの後ろ盾になってもらおうと思ってな」

「俺にねえ。まあ、かまわないが大したことはできないぜ？」

「わかっておるよ。じゃがな、まったく後ろ盾がないよりはましじやろうて。無理を通してコースケを守れとも言わんよ。時間稼ぎやちよつとした盾になればいい」

「そこんとこわかってんならいいが。」

ただで後ろ盾にならせようってわけじゃないだろ？ 出せる条件があんだろ？」

「ここのギルドで難易度が高く消化できてない依頼を二つ三つ回せ」

「お前さんが依頼をこなしたところで、俺が恩を感じるのはお前さんにだけ？」

「わかっておる。依頼をこなすのはコースケじゃ。大抵のものならば問題なく終わらせることができるぞ？」

「噂が本当ならできるかもしれんが、失敗しましたじゃ済まんぞ？」

そう言いつつガレオンは机の引き出しからファイルを取り出す。

そのファイルにはリッカードだけでなく国中の難易度の高い依頼ばかり記されている。

「これから好きなものを選べや」

エリスが受けとり、それを幸助が横から覗き見る。

しばらくペラペラとページを捲る音のみが響く。

依頼内容は魔物を倒してくれ、どこぞにある薬草を取ってきてくれ、届け物をしてくれ、といった普通の依頼と変わらない。

だが倒す魔物が強かったり、薬草のある場所が魔物の巣窟だった

り、届け先が現在抗争中の街だったりする。

あとは明らかに無理だろうと思われる依頼もあったりする。一例としては、北の戦争の原因を探れ。ギルドへの依頼として出すようなものではない。

「これとこれがいいか」

エリスは二枚の依頼紙を抜き出す。近場で難しすぎないものを選んだ。

「なにを選んだんだ？」

「ウッドオーガ討伐とノシスボア肉入手」

ウッドオーガとはオーガという魔物の派生種だ。

大元となっているオーガは体長三メートルの巨人型の魔物。怪力、高い体力を武器に暴れまわる。雑食性で動植物はおろか、岩や土や毒物なども食べてしまう。食べては暴れて、疲れては寝てを繰り返す、なにかを壊すことしかできない魔物だ。

ウッドオーガは植物ばかりを食べていたオーガが変化した種だ。全身を木の皮で覆い、あちこちから枝や草が生えている。主食はもちろん植物で、放っておくと森林を食い尽くしてしまう。

重傷でないかぎり、植物を食べることで急速に怪我が治ってしまうところがやっかいだ。

もう一つの依頼のノシスボアは、湖をテリトリーとする猪だ。湖に住む魚や水草を主食としている。強さ的には下の上といったところで、強い魔物ではない。

この猪の肉は非常に美味だが、殺して一日が消費期限だ。一日過ぎるとどのような保管をしようが途端に肉は硬くなり異臭も放つようになる。熟成などしようものなら人が食べられるものではなくなってしまう。

この依頼が高い難易度になっているのは消費期限が原因だ。この街から一日の範囲にノシスポアはいない。近場で三日の移動が必要となる。食べたいのならば、こちらから向かわねばならない。だがわざわざ出かけるのは嫌だと言う名家の人間がいて、高い依頼料を出している。無茶な願いを叶えろというのが、難易度が高くなった原因だ。

「できんのか？」

エリスは確信を持って頷いた。

ウッドオーガは幸助が倒したドラゴニスより劣るし、肉の運搬も転移魔法を使えば簡単に終わる。

「お前さんはいいのか？」

幸助は迷うことなく頷いた。

「できなかったじゃすまされないんだぞ？」

「エリスさんができるって言うんだからできる」

幸助もまた確信を持って答えた。

それを受けたガレオンは依頼紙にサインを書き込む。

ガレオンが聞いた噂が真実ならば、たしかにこの依頼は無理ではないのだ。後ろ盾になればとやってきたのだから、これくらいは問題なくこなしてもらわなければ困る。そういった思いを込めて、依頼紙を幸助に渡す。

強い視線から目をそらさず、幸助はしっかりと依頼紙を受け取った。

迷惑なレアすぎる称号発生

ガレオンから依頼を受けた三日後には、幸助は依頼を終わらせていた。

というのも二つの依頼の行き先が同じ方向で、それはホルンと一緒にエリスの家へと向かう時に立ち寄った場所で、移動が楽だったからだ。

転移で跳んだ先からウッドオーガのいる森へと空を飛び、その日のうちにウッドオーガの首をはね、依頼のあった村に泊まり、翌朝ノシスポアのいる湖に飛んで向かい、ノシスポアが現れるまで潜み始めて一日経って、出てきたノシスポア三頭を仕留め、リッカートへと転移魔法で帰った。

こんな速度で終わらせるとは思っていなかったガレオンは、驚きを露にして幸助の実力を認めることになった。

疑おうにも、ウッドオーガの外皮とノシスポアが証拠にあるのだから、そんなことは無理な話だった。

ガレオンを驚かせたことはもう一つある。それは依頼にエリスが同行していなかったこと。保険としてエリスが同行するだろうと考え、それならば幸助が失敗してもエリスがこなすだろうと思い、依頼を出したといった思惑もあったのだ。

同行していないということは幸助を信じているということ。エリスがそこまで深い信頼をよせる幸助に興味が湧くが、ガレオンは何者かと問いかけることなかった。後ろ盾を必要とするくらいなのだから、下手に手を出すとやばいということくらいは思いつく。いずれ機会があるだろうと聞くのは止めた。

「まさか三日とはなー」

「ウッドオーガ退治の依頼紙に急ぎって書いてから急いだんですけど」

「いやいや文句を言うつもりはまったくねえよ。むしろ褒める。よくやってくれた!」

言葉に嘘はないのだろう上機嫌に笑っている。

「後ろ盾が報酬だから、依頼をこなしたことの金は渡せねえ。だがウッドオーガの外皮と余分なノシスポア肉を売った金はお前のもんだ。受け取れ」

「ありがとうございます」

少くないお金をもらい、リュックの中に入れる。メリイールとセレナに美味しいお菓子の情報を聞いて、エリスへのお土産でも買って帰ろうと考えていた。

「ちよいと聞きたいことがあるんだがよ」

「はい?」

「ウッドオーガと戦ってどうだった?」

「どうって言われても、そこまで強くはなかったかな。ウッドオーガの強さよりも、その食欲に驚きましたね」

幸助が森に着いた時、野球場よりも広い森の半分が一匹のウッドオーガの胃へと消えていたのだ。依頼紙に書かれていた情報によると、ウッドオーガが木を食べ始めて五日だった。

その旺盛な食欲に、急ぎでという指定が出るのは当然だなと幸助は思ったものだ。

「あれを強くないって言い切れんのか! すごいな!」

「ガレオンさんは戦ったことあるんですか?」

「戦ったことはないが、同行して戦いを間近で見たことはあるぜ。」

三人の腕利きが苦勞して倒していたのをよく覚えている」

古い記憶なのだろう、懐かしげな表情となっている。

若い頃、とある事情でギルド職員だったガレオンがウッドオーガ退治に同行することになった、そんなことがあったのだった。

「そんだけ強いのならいろんな国から引く手数多だろうに」

「いやーのんびり暮らす方が性に合ってるんで」

「ま、どう生きるかは人それぞれだよな。」

今後も頼みごとするだろうが、よろしく頼むな」

「……頷いていいんだろうか？」

「無茶すぎることは頼まねえよ。断ることも可能だしな。実力者がいない時に代理として頼むって感じか」

「できる範囲でいいなら協力はしますけど、貴族に仕えろとか護衛をしろとかそういうった感じの依頼は断りますよ？」

「そっち方向を望んでないのはわかってるさ。名を売りたい奴がのんびり暮らしたいと言わないからな。」

「そういう連絡をつけたい時はどうすればいい？ ベラッセンのギルドにでも連絡しておけばいいのか？」

エリスが街暮らしをしていないことを知っているのだ。だから同居人の幸助に連絡をつける難しさもわかっている。

「それでいいと思います。あとは俺がオーナーの店がリッカードにできるんでそっちでもいいかな。」

ああ、お店に護衛をつけたいで引退して暇な元冒険者を見繕ってもらいたいんですけど」

警備に現役を雇うことも考えたが、長期間常駐してもらうならば現役は不向きだろうと思ったのだ。

引退したとはいえ、そこらのチンピラなんかよりもはるかに強い

だろうし、安定した収入を欲している者には助かる提案だろう。

「ん、いいぜ」

どのような者がいいか聞き、条件を聞き出していく。

幸助の求める方向で十人ほど探し、あとは面接でということになる。

「その年で店持ちとはな」

「一生働かずに暮らせるお金が手に入ったんで、それをお店作りに使ってみました。」

そのお金がなくとも、依頼を受けて暮らしていけるんで」

「今回の依頼がこなせるんなら、金には困らんだろうなあ」

今回の二つの依頼料を合わせると、一家族が三年近く働かずに暮らしていけるものだった。

「さっきの頼みを聞くかわりなんだが、一つ頼みごとを聞いてくれねえか」

「依頼ですか？」

「いんや違う。俺も知人から頼まれたんだが、今ちようどいい奴らがいなくてな」

「どんな頼みか聞かないと答えようがないんですけど」

「ドワーフが一人冒険者になるんだが、そいつをまっとうな冒険者のパーティーに加えてくれってな」

ドワーフと聞いて幸助は髭のすごい小さな男を思い浮かべる。

年寄りならばそういったドワーフもいるかもしれないが思い込みだ。人間よりも身長は小さめだが、平均の十センチから二十センチ小さいだけだ。身長が低い分が筋肉に回っているのか、力はドワー

フの方が強い。

ほかには人間の1・5倍の長生きということや、なにか一つのことに飽きずに集中する気質のおかげで優れた職人が多い、

「俺と組ませたいってこと？」

幸助の言葉に、首を横に振る。

「実力が違いすぎだ。俺が求めてんのは初心者に近い実力のパーティーだ」

「心当たりはあるけど……」

幸助の頭に浮かんだのはコキアたちのことだ。

「どんな奴らだ？」

「一人はまだ冒険者になっていない鍛え途中。一人は思い込みが激しいところがあるけど真っ直ぐな性根。一人は穏やかで、少し苦勞人氣質？」

一人目と二人目をちよつと指導してる」

「……一度会わせてみるか。ベラッセンにいるのか？」

「はい。俺の拠点がそこなんで、あの三人もそこを中心にしてます。そのドワーフさんってどんな人なんです？」

ガレオンは指を顎に当て思い出す仕草をしながら話し出す。

「男で、年は二十二才。人間でいうところの十五才に当たるらしい。薬剤師で、技術は一通り修めていて総仕上げのために冒険者として動く必要があるんだと。」

なんで冒険者なのかってーと、一人前になるための試験に提出する薬の材料を自力で集めるためだ。それと地元だけじゃなくて外の

ことを知るためでもある。多くのことを知っている方が作品の幅が広がるって聞いたな」

冒険者にならずどこかの工房で働いて材料を買うお金を貯めてもいいのだが、将来のことを考えると冒険者は都合がいいこともある。納得いく材料を集めるために自分で山に入ると魔物に出会うことがあるだろう、その時に冒険者の経験が生きる。ドワーフは凝り性な気質故か、材料集めを人任せにしないことが多いので戦闘経験はあった方がいいのだ。

薬剤師には関係ないが、鍛冶師ならば体力や筋力が鍛えられる。患者が多い場合、長く治療を続けられる体力は必要だろうから、無関係ともいえないかもしれない。

あとは外に出た時に得たコネで、希少な材料が得られることがある。

「名前は？」

「ウドリガっていつてたっけか」

「これからすぐに会わせます？」

「故郷を出てまだここに着いてないんだ。距離的に考えると明日にでも到着するはずだ」

「迎えに来た方がいいですかね？」

「そうしてくれると助かるな。夕方前には着いてるはずだ」

「じゃあそれくらいにここに来ます」

「頼む」

ちょうど明日コキアたちに会う日だ。いつもより長く指導して時間を合わせれば、とここまで考えてコキアたちを連れてきた方が手間が省けると思いつく。

ウドリガを迎えに来て、ベラッセンに帰って、互いに合わないということになったら、また送り帰してと余分に転移魔法を使うこと

になる。

「迎えに来るより、あっちを連れてきた方が手間が省けるんでそうしたいんですけどいいですか？」

「別にかまわねえぞ」

「じゃあ、そういうことで」

今日のところは用事がなくなったので帰ることに。

幸助が扉の向こうに消えて、ガレオンは背もたれに体重を預ける。

「冥族から関心を持たれ、一部の貴族からも情報を探られている、か。」

懐にいられてしまえば毒にもなりかねるが、あの戦闘力は魅力的だ。正体がなにかわからないのがマイナスだが、探ろうにも知っていないのがエリス婆くらいだし、下手に触ると火傷するって勘が告げてんだよなあ」

リックカートの冒険者ギルドは周囲の冒険者ギルドのまとめ役だ。そんな場所の長なのだから、入ってくる情報は多い。詳しくはわからないが冥族や貴族が幸助に関心を持っていることも、そういった経路で入ってきていた。それぞれが関心を抱く理由までは知らないのだが。

「利用し利用されて関係で行くしかないな」

幸助の人格自体は悪辣ではないのだ。ガレオンが卑劣な真似をしなければ、幸助もガレオンを害することはないだろうと見ている。それは見当違いの推測ではない。

「恩を売るための仕事をするかねー」

そう言ってガレオンは引退した冒険者のリストアップを始める。それなりに有名な冒険者は引退した後も貴族や商家に請われて、その警備や家庭教師として雇われることがある。ホルンの家にも警備の相談役として元冒険者がいた。

だからガレオンが残った冒険者の中からこれはという者を選んで、既に雇われていたということが何度かあった。

翌日、ベラッセンにて幸助はコキアたちと合流する。

「おはよう」

三人がおはようと返してくる。テリアは来なくてもいいのだが、一人でいるのも暇ということで毎回来ていた。

「いつもの訓練前に少し話がある」
「話？」

コキアが首を傾げ、幸助が頷く。

「三人に会わせたい人がいる」

「ご両親ですか？」

「なんで親を会わせないといけないんだ」

テリアのズレた返答に思わず脱力する。

テリアがこう答えたのには深い理由はなかった。ぼんつと頭に浮かんだのがそれだったのだ。言った後で自分でもないなと思っている。

「で誰なの？」

ジェルムの問いに気を取り直し、続きを話す。

「ドワーフなんだけどな。三人とパーティーを組ませてみようかなと」

「もう少し詳しく。それと絶対組まないと駄目？」

「絶対ってことはない。互いに気が合わないとギクシャクするだけだろうしね」

名前年齢とガレオンから聞いた話をそのまま伝えていく。

「回復役がいるのはいいことだと思うよ。だから積極的に考えてもいいんじゃないかな」

「会ってみないことにはなんとも言えません」

「そりゃそうだね。というわけで昼過ぎに転移魔法でリツカートに行くから」

そのつもりでと告げて、指導を開始する。

コキアは素振り走りこみを真面目に続けているようで、僅かながらも成長の跡が見て取れる。

ジェルムも癖が半分抜け、一振り一振りに力が余すことなく伝わるようになってる。

そんな二人と手合わせし、直した方がいいところを指摘していく。自主練に移った二人を見ながら、幸助とテリアは魔法に関して話し合っていく。新しい魔法を教えるといわけではなく、既に使えるものを工夫するといった話し合いだ。これについては幸助が教師役ではなく、互いに意見を言い合うという形になっている。

昼近くになり、四人で食堂に行く。運ばれてきた料理を食べ一息ついたジェルムが口を開く。

「昼からはなにをするの？」

「ちよっと変わった模擬戦もしようかなと。テリアも参加するよ」

「そうなの？」

「うん」

ミートスパゲティを食べる手を止めて頷く。

コキアとジェルムが自主練している時に、幸助から提案され内容を知っているのだ。幸助と二人で話し合った工夫を実践するのにちようどいいと参加を決めた。

「コースケさん」

「ん、なにコキア」

「基本は大事とは思うけど、そろそろ技の一つくらい教えてもらいたいんだ」

「技？」

「あ、私も教えてほしい」

と言われても幸助は困る。技など持っていないのだ。高すぎる筋力から繰り出される攻撃が常人から見れば必殺技なのだ。基本を技に昇華すると言ってもいいのだが、幸助はふと思いつく。

「いいよ。二人ができるかどうかかわからないけど、奥義を見せてあげよう」

「ほんと!？」

「奥義!？ いいの!？ そんなの見せてもらって」

奥義と聞いた二人は今から楽しみだとはしゃいでいる。

完全に嘘でちよっとした思い付きの実験体と思うっていたので、とても嬉しいが二人の様子に幸助は少し気が引けた。

すぐ行こうと急かす二人を落ち着かせる。テリアがまだ食べてい

る最中なのだ。

食堂を出て、街の外へと向かう。街中では見せられないだろうとコキアとジェルムが気を利かせたのだ。

もう少しで門に着くといった時、突然幸助は横からの衝撃に襲われる。敵意や殺意がないので接近する者がいるとわかって、自身に用がある者とは思わず気にしていなかったのだ。

「よがっだー！ やっど会えだー！」

安堵に目を潤ませたワイアーレが勢いよく抱きついてきたのだった。

周囲から集まる視線を無視して、ワイアーレの両肩に手を置いて離す。

「どうしたのさ。いきなり泣いてるし、また子供たちが無茶した？」

これにワイアーレは首を勢いよく横に振る。目の端に溜まっていた涙がこぼれ落ちる。

置き去り気味なコキアたちは、ワイアーレが誰で幸助とどんな関係なのか小声で話している。

「泣いたままだとわかんないんだけど」

「ここだと話せないから」

「今から外に行くつもりだったからついてくる？」

うんうんと何度も頷く。

おいでと手を差し出してワイアーレと手を繋ぎ、コキアたちを促して外へ向かう。

コキアたちの聞きたげな様子を察し、幸助は簡単にワイアーレの紹介をする。

外に出て、先にコキアたちの用事をすませることになる。終わった後ならばウィアーレも落ち着いているだろうという判断だ。

「さて奥義披露といこうかね」

「「よろしくお願いします」」

幸助は剣を抜き、何度か素振りを始める。少しずつ剣を振る速度を上げていき、それで起こる周囲の状況をよく見て、思い描いていることがなんとかできそうだと素振りを止めた。

「んじゃ始めるよ。そうだね、あそこの草むらをよく見てて」

剣で七メートルほど離れた草むらを示した後、棒立ちのまま居合い抜きをするかのごとく構える。本当ならば腰を落とし、その場にどっしり構えたかった。しかし狙いにそぐわないのでしない。

表面上は気軽い様子を見せ、心の内や服の下など見えないところでは真剣に。

「いく」

言葉と共に剣を振りぬく。言葉が発せられた二秒後、生えていた草は盛大に千切れ舞い散っていく。

その様子にコキアたちは驚きの声を上げ、実は幸助も起こした結果に驚いていたが、表面に出すことはなかった。

コキアたちは示された草むらを見ていて気づかなかったが、見ていたとしたら振り抜いた後しか認識できなかっただろう。それほど速く力を込めた振り抜きだった。そしてその振る最中に、幸助がやった小細工も当然見えないものだった。

「これは俺の故郷で、遠当て、飛び斬り、風流しと呼ばれるもの。」

一見ただ剣を振りぬいたように見えて、刃に魔力と斬るという意思を込めて混ぜ合わせ、剣を振るのに合わせて込めた力を飛ばすんだ。その一振りは岩をも切り裂く。

今は全力で振るう時じゃないから、草を散らすことで止めておいた。

魔法のように遠距離を攻撃できて、剣を振ることですぐに行うことができる。ただ剣を振っただけで衝撃が飛ぶっていうのは意表を突くよ。覚えておいて損はない」

思いつくままに嘘を吐く。

「これって習得するのにどれくらいかかる？」

目をキラキラさせてコキアが聞く。それに幸助が答える前に同じく目を輝かせたジェルムが口を出す。

「馬鹿！ 奥義だよ！ 簡単に習得なんてできるもんですか！ きつと何年も剣を振り続けてようやく使えるようになるんだよ」

早速真似するように剣を振り始める二人。
テリアも興奮した様子を見せ、幸助に話しかける。

「コースケさん！ すごいです！ あれって詠唱とかを略した魔法と言ってもいいじゃないですか！

今までたくさんの人たちが試行錯誤して、叶えることができなかったことですよ！？」

「少しついてきて」

「はい？」

剣を振ることに熱中している二人から幸助とテリアは離れる。静

かなワイアーレも一緒に離れる。

「テリアの勘違いを正すために言っとくよ。あの二人には内緒にね？」

「はあ」

「さっきの奥義は真っ赤な嘘なんだ」

「嘘？ でも実際にやってみせましたよね？」

「あれには俺も驚いた。思った以上に威力があったから。もう少し練り上げたら本当に一つの牽制技にできそうだ。」

あれを簡単に解説すると、うちわと同じで剣の腹で風を起こしただけなのだ。力任せの技ともいえないもの。

コキアたちの目で捉えられない速度で振ったのは、振る途中で寝かせていた剣の角度を変えたところを見えないようにするためだった。魔力や意思など込めておらず、込めたのは成功させるという気迫だ。

それを伝えるとテリアとワイアーレはなんともいえない顔となる。

「なんで嘘を？」

「始まりは嘘でも、熱心に練習したら実現できるかもと思ったんだ。その実験体になってもらおうと思って。」

実際にやってみて『あれ？ できそうじゃね？』と思ったわけなんだけど」

地球と似て非なる法則を持つファンタジー世界だから、多少の無茶は再現できそうだとも考えた。

真剣な様子と難しそうな様子を見せなかったのは、二人に再現が困難だとは思わせたくなかったからだ。

「正直なところ、技っていいってもないんだよ。だからこんな手を使

ったというわけ」

「無駄に終わるかもしれないですね」

「終わるかもね。」

代わりといったらなんだけど二人が諦めるまでに、技の一つでも開発するかさっきの技に似たような魔法を開発しとくよ」

技の方はまだイメージはないが、魔法の方はなんとなくイメージがあるのだ。

短い詠唱で剣などの武器に風をまとわせ、振った方向へと風を飛ばす。幸助が自力で起こした現象と同じなので、魔法として作る際にそのイメージは多いに役立ってくれるだろう。

「一応フォローは考えているんですね」

「まあ、努力が無駄になるかもしれないから、フォローなしってのはさすがに気が引けるし。」

テリア、二人の方に行ってくれる？ ウィアーレの話を聞こうと思ってるんだ」

「はい。話し終わった後に模擬戦します？ 今日止めておきます？」

「んー……話の内容によるんだけど、すると思ってる」
「わかりました」

ウィアーレに一礼し、ジェルムとコキアの方へと歩いていく。
それを少し見て、幸助はウィアーレに向き直る。

「少しは落ち着いた？」

「うん。さっきはいきなりごめん」

「驚いたよ、それで事情話してくれる？」

「うん……何日か前から変な夢を見るようになってね。始まりは水の上にいるんだよ。そこから水に入ってたぶん海の底なんだろうけ

ど、暗くてよくわからないところまで行くの。そこから声が聞こえる。なにを言っているのかわからないけど、すごく大きいなにかつていうのはわかる」

「海の底の大きなもの？」

頷き続ける。

「それは怖くて、でもほんの少しだけ親しみも感じる」

「俺が思いつくのは竜かな。大きく怖いって部分は当てはまるところ」

「たぶんだけど竜じゃないと思う。」

その証拠といえるかわからないけど、夢を見るようになってから見えるようになったものがある。

あれはたぶん歪み」

ウィアーレがそう思ったのは魔法を使った人の近くで必ず見えるからだ。魔法を使えば歪みが発生するというのは誰もが知っている。

「歪み!？」

久々に聞いた単語に驚きを隠せない。とっさにコキアたちの方を見てみるが、聞こえていないようでほんと胸を撫で下ろす。

「それとね」

「まだあるんだ」

「うん、ごめんね。」

時が経つにつれて使えなくなっていた歪みが、また使えるようになったんだよ」

ほらと手のひらを幸助に向け、歪みを発生させすぐに消した。久

々に見たそれは、以前の見たものと寸分の違いもない。

「最後にね」

「もうお腹一杯になってきたよ?」

「ほんとに最後だから」

そう言ってウィアーレはカードを取り出す。ここ見てと指差したところには、

「歪み使い?」

と記されていた。

「カードに載るくらいだから、世界にそういうものが認識されてるってことなんだろうねえ。」

俺はそんなの聞いたことないんだけど」

「私も初めて聞いた」

戸惑う二人にどこからともなく声が届けられる。幸助は聞き覚えがあり、ウィアーレは初めて聞く声だった。

『久しぶりだな? お前を見ていると本当に飽きないな』

「コーホック!」?

「誰なの!」?

久々に聞く声に幸助は驚き、誰か知らない人の声が突然頭に響いたことにウィアーレは驚いた。

大声を出したことで、離れた位置にいた三人は何事かと二人を見る。それになんでもないと幸助は手を振る。

「どうして話しかけてきたんだ？」

「知ってる人？」

「神様だよ。娯楽を司る神」

大声を出しかけたワイアーレの口を塞ぐ。

『今日、話しかけたのはコースケじゃなくて、ワイアーレに用事があったからだ』

「私にですか？」

『そう、歪み使いのお前さんにだ』

「神様は歪み使いについて知っているのか」

『知ってるさ。俺たちにとっては重要なことだからな』

神に重要と言われたことにワイアーレは戸惑いの表情となっている。

神の役割は世界の運営だ。世界を安定維持させるため、人の知らないところで動いている。

その仕事に歪みは邪魔でしかないのだが、神には歪みに捕らわれた者を処置することはできても歪み自体には手出しできない。しかし歪み使いは歪みを消すことができるのだ。

『歪み使いとは、周囲に漂う歪みを消費し魔法のような事象を起こせる者たちだ。』

世界運営に邪魔な歪みを消すことができる唯一の存在と言ってもいい。

神にとってはとてもありがたい存在なんだ』

どんどん高まっていく評価に、ワイアーレはあわあわと落ち着かない様子となる。

『ワイアーレよ』

「は、はい！」

出会った頃の軽さのない真面目で威厳に満ちたコーホックの呼び声に、背筋を伸ばし返事を返す。

『いまはまだ未熟なそなたには頼めはしない。

一年後、五年後、十年後でもいい。歪み使いとして一人前になった時、我らの依頼を受けてくれるだろうか？』

「……はい」

自信少なげに、けれども断ることなどできないと頷く。

真面目な雰囲気解き、コーホックは話しかける。

『そこまで緊張しなくていい。危険なことではないのだから』

「はあ」

『歪み使いとしてできることはわかっているか？』

「いえ、いまでできることといったら歪みを集めることくらいで。あとはこれをぶつけるくらいでしょうか」

『それが基本にして、全てだ。ただし成長すればぶつける対象が人だけではなく、無機物や空間にまで及ぶ』

こう聞いて幸助は歪みにとり憑かれていた時のことを思い出した。

あの時はベラッセンに入ると出られなくなっていた。あれが空間にまで歪みの影響が及んだ状態だったのだろう。

このことを伝えると、その通りと返ってくる。

「そんなことできるまで成長できるんでしょうか？」

『歪みを使い続ければ至れる。過去の歪み使いはそうやっていた。

あとは注意点を二つ言っておかないといけない』

「注意点ですか？ なにか副作用があるとか!？」

『副作用はないから心配しないでもいい。』

神にとっては歪み使いはありがたい存在だ。しかし人間にとってはいい感情を持たれない。歪みに捕らわれた者との区別がつかないからな。だから歪みを使う場合は誰もいないところで使うか、ばれないように使うことだ』

「たしかにあの時のワイアーレも正気を保ったまま歪みに捕らわれてたし、区別つきにくいか」

「もしかして厄介な称号を得たんじゃ？」

引きつった表情で聞くワイアーレ。

『否定はできない』

返ってきた返答にさらに引きつった。

過去、人々から理解を得られず爪弾きにされたり、リンチを受けて死んだ歪み使いがいる。だから隠せと言ったのだ。

保護して手元で育てればいいと考え実行したこともある。失敗したことは現在それを行っていないことからわかるだろう。失敗した原因はプレッシャーによる短命化。神々から発せられる強い力が負荷を与え続けたのだ。

『二つ目の注意点は偽神信仰者に気をつけろということだ』

「彼らですか」

いい思いは抱いていないようで、ワイアーレは顔を顰める。

いまいちピンとこなかった幸助は、ホルンに教えてもらった偽神信仰者のことを記憶から掘り起こす。

『コースケは偽神のこと知らなかったか？』

「いやホルンから聞いている」

偽神とはその名の通り、偽の神。人間が生み出した神だ。

本物の神は人間を特別視しない、数多くいる種の一つと見る。それに不満を持った人々が、ならば人間を優遇してくれる神を自分たちで生み出そうと考え実現させた。

偽神は信仰者を慈しみ守る。甘い言葉でお前たちが大事だと言いつける。それは催眠とも洗脳ともいえ、信仰者たちは自分たちは愛されているのだと選ばれたのだと歪んだ誇りを抱き生きていく。

彼らのコミュニティーで自己完結していれば問題はないのだ。ウィアーレのように嫌うこともないだろう。

彼らが嫌われるのは、他の生物を下等とみなし略奪を繰り返すからだ。奪われた物を取り返そうにも、偽神が信仰者を守る。記録に残る偽神の強さは下級神にも劣るB-。だが人間から見れば圧倒的に差があり、手が出せない。

神は偽神に手出ししない。それは偽神が世界を乱そうとしていないからだ。略奪など偽神信仰者にかぎらず、他の人間もやっていることだ。手を出す気すら起きない。

神は偽神に手出しづらい。それは偽神が捨て身で己が力を神に叩き込むと、歪みに捕らわれた神『邪神』が生まれるからだ。神と偽神が敵対すれば、まず間違いなく偽神は捨て身でくる。

『偽神の大元は歪みに捕らわれた人間だ。だからか俺たちと同じように長命というわけじゃない。それでも人間に比べたら三倍近く生きるんだけだな。』

偽神を維持するには新しい体を準備する必要がある。ここまで言えば、俺がなにを言いたいかわかるな?』

「ウィアーレが狙われる」

『その通り。偽神は歪みに捕らわれた者を感知できる。大まかにだがない。既に奴らは動き出しているだろう』

不安に染まった表情でワイアーレは幸助の手を取る。

「俺に話を聞かせたのは守らせるため？」

『ああ、知ってしまったえば断れないだろう？』

「まあ、ね。全く知らない仲ってわけでもないし、不幸になるのは見過ごせないよ」

そう言っ握られる手に力を入れる。頬に微かに朱をはしらせたワイアーレが幸助を見つめている。

『借り一つにしとく、いつか返す』

「生きてるうちに頼むよ」

寿命の違いで時間感覚に差がありそうだと思い返す。

心配するなど笑いを含んだ返事と共にコーホックは去っていった。二人は同時に大きく溜息を吐いた。

「大変なことになったね？」

「迷惑かけます」

神が話しかけてきたり、期待をかけられたりで、ワイアーレはどうして自分が歪み使いになったのか聞くことすら思いつく余裕もなかった。

ちなみに歪み使いになる条件は、一度歪みに捕らわれ、そのまま染まることなく助かった生物が、邪神といった強く歪みに捕らわれた存在に近づき影響を受け、自身の中にある歪みを活性化されることになる。

ワイアーレは幸助が海竜にさらわれた後、海底に邪神が封じられている場所の真上を通ったことで歪み使いとなる切欠を得た。その

場ですぐにならなかったのは、影響を受けるには少し遠かったため。その後、ウィアーレの存在を感知した海底の邪神が仲間と勘違いし、いると知らせるため波動を送り続けたことによって歪み使いとなったのだ。

「まあ、俺と同じでなりたくなつたわけじゃないから、なぜ？
どうして？　そう思う気持ちはわかるよ」

「……わかる？」

本当にわかるのか疑心を抱いている。

だが本当に、自分の選択ではなく押し付けられたことに戸惑う気持ちはわかる。この世界に來たことや竜殺しになったこと、それは幸助が望んだことではないのだから。

「世界は誰にでも公平だけど、時として望まないことを押し付けてくる。

それは俺の身に起きたことにも当てはまるからね」

空を見上げ言う幸助の横顔にウィアーレはなにを見たのか、同じように空を見上げた。不安な未来を暗示するかのように、遠くに黒い雲が見える。

迷惑なレアすぎる称号発生（後書き）

お待たせしてすみません

更新再開です

飽きたわけではなく、逃亡もしてないので最後まで書きます
完全に最後が見えてますしね

託されたもの

話が終わったと判断したテリアに呼ばれ、幸助は模擬戦を始める。幸助とテリアが組み、コキアとジェルムと戦う。ただし幸助はテリアの護衛のみで攻撃は不可。コキアたちの勝利条件は幸助を抜いて、テリアに触ること。

コキアかジェルムのどちらかが幸助を足止めすれば簡単に終わるかと思われた模擬戦は、幸助たちが優勢のまま進む。

攻撃できないといっても組み合わせ力の差で押し切られ、二人と比べ物ならない体力で動き回られる。そうして幸助が守りに徹している間にテリアも魔法を使ってくるので、コキアたちはぼろぼろになっていく。

コキアたちが苦戦した原因はもう一つあり、それは連携不足。互いの意図を汲まずに動くといったこともあったのだ。

最後には拙いながらも連携を発揮しジェルムが幸助を抜くことはできたのだが、テリアの魔法によって吹っ飛ばされ、そこで終了となった。

コキアたちが汚れを落としながら休憩を取っている間に、幸助とウィアーレはこれからについて話す。

「ウィアーレを守るように言われたわけだけど」

「はい」

「守るってそばにいるのが一番やりやすいんだよね」

冒険者として受けたこれまでの依頼でそれを学んでいた。

護衛対象から離れていて護衛を名乗るなどおこがましいと言っているだろう。

絶対安全の場所があるなら、そこにいてもらって害となるものを潰していくなんて手段が取れるが、そんな場所はない。

護衛を増やせるなら似たような手を使えるが、一般人なウィアーレに物々しい護衛をつけるときとその理由を問われる。軽々しく歪み使いだと言ひ触らすことなどではしないし、危険を増やすような行為だ。

「というわけで一緒に暮らす？」

エリスに許可を取ってないが、話せば承諾を得られるだろうと考えている。

守りの拠点として、孤児院よりもエリスの家の方が優れていて、幸助はベラッセンで暮らすことを始めから選択肢にいれなかった。

「い、一緒に!？」

なにを想像したか顔を赤くして一步下がる。

うわーうわーと言いつつ赤い顔に両手を当てているウィアーレを見て、幸助はなにか勘違いとか考え過ぎているのだろうと思っている。

異性と一緒に暮らすということはエリスで慣れているので、幸助にとっては今更どうと思うこともない。

エリスはすぼらなところがあり、バスタオル一枚でうろつくこともあるのだ。慣れもする。

「エリスさんがいるんだから二人つきりってわけじゃないよ？」

「あ、そういえば。」

プロポーズのことといい、今回のことといい、私を勘違いさせて楽しいのっ？」

「プロポーズのことは謝るけど、今回のことは勝手に勘違いしたんだからね？」

「うっ」

事実なので言い返しようがなく詰まる。

「それでどうする？」

「私としては助かることだと思う……うん、お願いします」

深々と頭を下げる。

「誘っというてなんだけど、ウェーイさん反対しないのかな？ 年頃の娘を外に出すことに」

「今まで何人も孤児院を出てるから。むしろ私の年齢まで残ってる方が珍しいんだよ。」

だからなにも問題ないの、少し寂しくはあるけどね」

「出るって言っても遠くに行くわけじゃなし、いつでも会えるから難しく考えることもないかもね」

幸助の気遣いを察しウィアーレは小さく笑い頷く。

「ウェーイさんにだけは事情話しておく？」

「どうしよう。急に出て行くことになるし、理由は必要だよね……」
「正直に話すってわけにはいかない？」

ウェーイのことは当然ながらウィアーレの方がよく知っている。
事情を話せば信じてくれるか聞く。

「話を信じるだけなら大丈夫、カードにも刻まれてるし。でも……」

ウェーイに家族に拒絶されることが怖かった。コーホックに歪み
使いは人々に理解されないと言われたばかりだ。

ウィアーレの浮かべた表情を読み、幸助はおおよその心情を察す

る。方向性は違うが称号について知られたくないという思いは同じだからだ。

「適当に嘘ついてもねえ。どこに住むか聞かれるだろうし、そしたら……あ！」

ぽんっと手を叩く幸助。

「どうしたの？」

「あったじゃん言い訳にいいところ。本当のこと言いたくないのならなんとかするよ」

「ほんと？」

「リッカートに店を作ってる最中なんだ。そこの店員に雇うってウーイーさんに言えばいいよ」

「お店を作ってる？」

「オセロ関連で大金が入ってきたんだ。今も入ってきてる。

それを店開業に回した」

「ベラッセンで作ればいいのに、どうしてリッカート？」

「そこはちよっとした理由があって」

貴族の屋敷で女装して働いていた時にお世話になった人への恩返し、女装の部分が引っかけり言えないでいた。

恥ずかしいということもあるのだが、メリイールたちに変装していたと知られないようにするためだ。最近は少なくなっているが、ウィアーレのうっかりではれないようにと考え黙ったのだ。

「とにかく言い訳はできたし、家に帰って荷物をまとめておいて。準備はどれくらいかかる？ 迎えは明日の方がいい？」

「うん、そうしてもらえると助かるかな。落ち着いてお別れしたいし」

話がまとまり、幸助は休憩している三人に声をかけベラッセンの街中に戻る。

いや戻ろうと門まで来た時、幸助は再び呼び止められた。

「ちょっとそこのあなた！ 模様の入った黒のジャケットを着ているあなたです！」

女の声のした方向を振り向くと、旅装姿の男女が急ぎ足で近づいてきていた。

女の手にはなにか握られており、近寄って来たことで方位磁石に似ているものとわかった。それが発光していることも。

またなにかハプニングなのかと、ややうんざりした気持ちを抱き幸助は近づいてきた二人を見る。

女の方は二十前半で、青の長髪に群青の目を持つ美人だ。目はやや釣りあがり気味で、鋭い雰囲気を持っている。仕事のできる女といった感じだ。

男の方は二十半ばで、明るい茶の短髪に黒の目を持ち、こちらも美形。女の方と違い、男はゆったりとした雰囲気をもとい、人のよさげな感じを受ける。ニコニコと笑っている表情がよく似合っている。

「ジス、間違いないわよね」

女は方位磁石のようなものを幸助に突きつけたまま、ジスと呼んだ男に聞く。

「これだけの反応を見せているんだから、間違いの可能性の方が少ないと思うけどね」

「そうよね」

二人だけで納得し合っている。

「なにがなんだか、わからないんだけど？」

幸助の問いかけに二人は顔を見合わせた。

男がすぐに口を開く。

「事情を説明したいので時間をいただきたいのですが」

「この後も用事があるんだ」

「んー……では明日ではどうでしょう？」

「ジス！」

焦れたように名を呼ぶ女に、ジスは落ち着くように手を向ける。

「僕たちに僕たちの事情があるように、彼にも彼の事情があるんだ。お願いするのはこちら。ならば彼の事情に合わせる事が礼儀だろう？」

「……そうだけど！」

「ようやく見つけたんだから焦る気持ちはわかるけどね。」

では明日の昼過ぎに、ここの門でお会いするってことでお願いしたいのですが」

「いいよ。明日の昼ですね」

「ありがとうございます」

頭を下げたジスは、女を落ち着かせつつ街に入っていく。今日の宿を探すのだろう。

「なんの話なのかな」

「さあねえ」

首を傾げるコキアに、わからないと幸助は答える。また厄介事な
んだろうと心の中で予測しながら。

ウィアーレを送り、四人はリツカート入り口へと移動する。

初めて来る街にコキアは興味津々な様子で、ジェルムとテリアは
大きな街ということに好奇心が刺激されている。

ガレオンとの約束まで少し時間があるので、幸助はメリイールに
ウィアーレのことを伝えておくことにした。実際に働かせることは
ないが、孤児院の関係者が訪ねてくることもあるかもしれないので、
話しを合わせてもらおうと考えたのだ。

すぐに終わるからと店の前で三人を待たせて、十五分ほど話を
終わらせて戻ってくる。

「なにか凹んでいます?」

少し沈んだ様子の幸助に気づいたテリアの言葉に、苦笑を浮かべ
て頷く。

「ちょっとした用事を頼んだんだけど、断られてね。しかも少し説
教されたよ」

「どんなこと頼んだんです?」

「お金を預かって欲しいって」

「それだけ?」

「金額はいくらなのさ?」

たのんだ金額が少しだけなら断られることもないだろうと思いジ
ェルムは聞いてみる。

「そだねーいっきに手に入るわけじゃないけど閃貨が五十以上は確
実」

「多すぎるわよ!？」

店の売り上げだけならばメリイールたちも領いていたのだ。だがそこにオセロと爪きりとピーラーの分も加わるとなると難色を示さざるを得なかった。そんな大金を保管するのは腰が引けるし、万が一があるかと思うとストレスが溜まる。

小会議の結果、取りに行って一時的に預かりはするものの、すぐに取りに来るようになってしまった。そのためにお金を受け取りに行く日を月の始めと決め、その日から三日以内に店に行くことになった。

「どうやったらそんな大金を稼げるように……もしかして秘密にしている称号に関連して？」

ジェルムは活動資金として送られてきてるのかと推測する。

「称号とは全く関係ないよ。三つアイデアを売ったら定期的に収入が入ってくるようになっただけ」

「強くて、お金にも困らないってどんだけよ。羨ますぎるわ。装備の充実化にも困らないじゃない」

「断る気持ちわかりますねー、そんな大金持っていてくれって言われでも困りますよ」

幸助も日本円で渡されれば気持ちがわかるだろう。軽く一億を超えるのだ。

三人のメリイールたちへの同意に、そんなものかなと思いつつ幸助はギルドへと足を向ける。

「ここがリツカートのギルドかぁ。ベラッセンより広い」

コキアが周囲を見ながら言う。

「街がベラッセンよりも大きいし、周囲のギルドのまとめ役でもあるらしいから」

受付に用件を告げて、約束してあることを確認してもらい客室に通される。

通常ならば冒険者が入れないところへ入っていく四人に、依頼を探していた冒険者たちの視線が集まる。

幸助は気にせず、気配を察することが鍛えられていないコキアは気づかず、ジェルムとテリアだけが緊張していた。

「ギルド長をお呼びしますのでお待ちください」

一礼し職員が去り、ジェルムが口を開く。

「ギルド長ってどういうこと？」

「ウドリガを預からないかって言い出したのがギルド長なんだ。だから会うのに同伴してもおかしくないだろう？」

「なんでギルド長の相談受けてるの？ いや受けちゃいけないって意味じゃなくて、普通なら知り合う機会もないよね？」

「俺の同居人がギルド長と知り合いで、紹介してもらったんだ」

そんなことを話しながら二十分ほど経ち、扉が開く。

「よう待たせたな」

「どうも、連れてきました」

「そいつらか。悪そうな面構えはしてねえな。入っていいぞ、ウドリガ」

にやりと笑ったガレオンが部屋に入り、その後ろから身長160に少し届かない男が入ってきた。

深緑の短髪に、黒の目、コキアよりもやや年上に見える少年と青年の間のような容姿のどこか長閑な感じのするドワーフだ。

「どんも、ウドリガと言います。よろすく」

少し訛りつつ頭を下げる。この訛りだが、幸助には訛っているようには聞こえていない。翻訳の魔法が訛りも翻訳しているのだ。

幸助とガレオンは部屋の端に寄り、早速パーティを組む予定の三人と話し合いをさせる。

互いの自己紹介から始まり、戦闘のスタイル、得意な得物、戦闘経験と続き、私生活のことも少し話していく。

ウドリガの得意なことはやはり治療行為で、一応戦闘技術も仕込まれているらしい。魔物との戦闘経験はあり、今は金属補強された大木槌を使っているとのこと。

今のところは互いに悪い印象を持ってはいないように見える。

「どうなると思います?」

「ふむ、相性的には問題ないように見えるな。あとは実際に組んでみないとわからんってところか」

「回復役がいるなら、薬草集めとかの依頼は受けさせてもいいかなー」

コキアには魔物退治系はまだ早いが、戦闘がメインではない依頼ならば大丈夫そうだと判断する。

戦闘メインな依頼を受ける場合は、コキアを留守番させて受けてもらえばいいだろう。

握手を交わす四人を見て、とりあえず決まりだなと幸助とガレオンは頷いた。

その後、荷物をまとめたウドリガと一緒にベラッセンに戻る。
解散する前にコキアに依頼について話してからわかる。

「ただいまー」

「おかえり」

幸助がリビングに入ると、ふんわりとバターと甘い匂いが漂っていた。

テーブルの上には琥珀色に焦げ目のついたスイートポテトがある。

「それ作ったんだ」

「たまには料理せんと勘が鈍るからのう」

「食べても？」

「もちろんかまわんよ」

手を洗って戻ってきた幸助に、ほれと一つ手渡す。

早く食べてもらいたくて、幸助が椅子に座って食べるまで待ちきれなかったのだ。

一口サイズのそれを口に放り込み、よく味わって食べる。

正直なところ店売りのものよりは下だが、それでも美味しいと思えるものだった。

「うん、美味しいよ」

「そうかそうか」

その感想に満足げに頷く。

もう一つ食べてから幸助はウィアーレについて話し出す。

「頼みがあるんだ」

「なんじゃ？」

「ワイアーレをここに置いてやってほしい」

「理由は？　ただ一緒にいたいからというわけではないのだろう？」
「うん。エリスさんは歪み使って聞いたことある？」

エリスは首を横に振る。

コーホックから聞いたことを一言一句間違えず話していく。

人々から虐げられる可能性があるという部分で、幼い頃の孤児院暮らしのことを思い出したか、エリスの眉間に皺が寄る。

「そういうわけなら断れないわな。連れてくるといい」
「ありがとう」

よいよいと手を振り、エリスはお茶を飲む。

「しかし神はワイアーレになにをさせたいのかのう」

「俺には厄介事という以外わからないよ」

「歪み使いに頼みというのだから、歪みをどうにかしたいのである。少々の歪みならば神から声がかかることはあるまい。

となると、どこかに問題になるほどの歪みがあるのじゃろうが、私は聞いたことない」

問題となるほどの歪みがあるのなら、少なからず噂になっているはずだ。それはエリスも幸助も聞いたことのある場所にある。だが二人とも教えられるまで、そこがそうだとは思いつかなかった。

幸助はエリスの言葉を聞いて一つの考えが浮かんだ。

「……どこかで密かに問題が進行してたりする？　もしくは将来問題となる？」

「その可能性があるのう」

「危険なことはさせないっていう神様の言葉を信じるしかないかな

あ
」

その言葉がワイアーレだけに適用されないように幸助は心の内で祈っておいた。

祈りの対象は神ではなく、運命とかそういう抽象的なものだ。

「話はもう一つあって、こっちもよくわからないんだ」

「どんな話だ？」

「俺を探している人たちがいた」

「コースケを？」

探している人がいると聞いて、目を細めたエリス。

「方位磁石って言ってわかる？ 船乗りが使う羅針盤でもいいけど」

「わかるぞ。それがどうした？」

「それに似た道具を使って、俺を探していたみたいなんだ。俺に近づけると光ってた。」

「そういった人探しの道具ってある？」

「聞いたことない。」

だがわざわざそんな道具を使って探していたということは、人違いの可能性は低そうじゃな。

お前さんが竜殺しと知っていそうだったか？」

「どうなんだろう？ あの二人の口からは竜殺しって言葉はでなかったよ」

翌日、幸助は朝のうちにワイアーレが入る部屋を掃除して準備を整える。新築とっていいのでほとんど汚れておらず、時間はかからなかった。必要な物があれば、後日一緒に買いに行けばいい。

昼食を家で食べてからベラッセンに移動し、門近くで待つ。早く着きすぎたか三十分ほど門番兵たちにじろじろと見られつつ待つこ

となる。

「ああ、先に来ていたんですね」

お待たせしましたとジスが頭を下げる。女も無言で同じように下げた。

「話があるってことだけど、どこで話します？」

「よければこのまま外に出て」

交渉や説明はジスがすることになっているのだろう、女は黙ったままだ。

「いいですよ」

提案に頷き、歩き出す。

十分ほどのんびり歩き、門が遠く小さく見えるようになったところで足を止める。

「ここらへんでいいでしょう。」

まずは会話に応じていただきありがとうございます。

僕の名前はジスフィード・セクトクルンといいます。エリガデン島に住む人の依頼で動いています。

どこにあるかはご存知で？」

首を横に振る幸助に、ジスは説明する。

エリガデン島はペレレ諸島の最西端にある島で、広さは諸島の中でも下から数えた方が早い。クワジツト王国というところに属していて、特に有名どころや特産品があるわけではない静かなところだ。

「次はリーゼ、自己紹介して」

「リゼス・セクトクルン。出身地はエリガデン島」

ジスが呼んだ名と自己紹介の名が違うが、リーゼとは愛称だ。愛称なのだろうなと思いつつ、幸助は家名の方に注目する。

「家名が同じですけど、ご家族で？」

「いえ、彼女の島では皆同じ家名を名乗っているのです。人口が多いわけではないので誰も彼も家族みたいに思っています」

僕が同じファミリーネームなのは昔島を出た人の孫だからです」
「なるほど。」

次はこちらの番ですね。名前はコースケ・ワタセ。この街を中心に活動している冒険者です」

「自己紹介も済みましたので、話を始めていいですか？」

頷く幸助を見て、ジスは続ける。

「彼女たち一族はずいぶんと前から一つの使命を受け継いでできました。」

聞いた話によると、軽く千年は続く使命だそうで、一族の者は皆使命が果たされることを望んでいます」

「千年はすごいな」

古い使命だと感心した様子を見せる幸助。

実際は千年どころか、二千年以上も昔だったりするわけだが。そのことはジスもリーゼも、他の者も知らない。それは幾度かあった戦乱に巻き込まれ、口伝も文書もほとんど失われてしまったからだ。

「はい、長い使命です。」

そしてその使命とはエリガデン島に封印されているものの封を解

くこと。

なにが封印されているかはわかりません。危険なものであれば、むしろ封印を解くなど伝えるでしょうから、邪神やそれに関連するものではないと思うのですが」

「私がかぎりでは、なにか力の強いものというだけ」

説明に付け加えるようにリーゼが口を開いた。

「力の強いもの……漠然としすぎてますね。それに封印を解けつても珍しい、普通は封印を解くなつて言い伝えられてそうなのに。本当に資料はないんですか？」

封印とはなにかを封じるためにするものだろう。危険のないものならば封じる必要はなく、外に出したくないから封じることが一般的なはずだ。それなのにいつか封印を解かせるために封印をするということに幸助は首を傾げる。

一族のためになるものが封印されているのならば、一族の者に封印を解かせる役割も持たせればいい。そうすれば困った時、すぐに封印を解ける。

力の強いものということは、一族が危機に陥った時にすぐ役立つもののはず、それがすぐに開封できない状態となると一族のためにある封印ではないのかもしれない。

「はい。あとほかに残っているものといえば、封印を解く鍵を探すための道具くらいで。封印を解けと伝わっているのは間違いないです」

「昨日の光ってたあれな」

「一年前から反応を見せ始めて、昨日ようやくみつけることができました」

「つまり用件は、封印を解くのに協力してほしいってこと？」

幸助の言葉に二人は頷いた。

「断る理由はないんだけどなあ……」

どこか乗り気ではなさそうな幸助の様子に、リーゼは苛立たしげに問う。

「断る理由がないのなら頷いてくれてもよろしいのでは？」

「なんとなく嫌な予感がするんですよ」

確信のない漠然とした予感で気にしないことも可能ではある。

「謝礼はしますし、島までいく費用もこちらで持ちますので一緒に来てもらえないでしょうか。」

「どうかお願いします。ほらリーゼも」

「……お願いします」

やや渋々といった感じで頭を下げた。

「すみません。リーゼは使命を果たしたいという思いが強くて、順調に話が進まないことにイラついているみたいで」

お願いする方の態度ではないと、ジスは非礼を詫びる。

特に気にしていない幸助は頷いて詫びを受け入れた。

「ペレレ諸島だっけ、たしかコウマって国もそこにあるんですよね？」

「ありますね。うちの所属する国より大きな国ですよ」

「いつか会いに行くって約束したし、ちょうどいいのかな」

ルビダシア家の面々のことを思い出す。一年も経たずに顔を合わせる事になるろうとは思っていなかったが、こういうことがなければ中々行かないだろうとも考える。

「あ」

「どうかしました？」

「いや、そちらには関係ないことを思い出したただけだから」

パタパタと手を振ってなんでもないと示す。考えていることは、移動すれば偽神信仰者たちの追っ手を戸惑わせることもできるかなということだ。

「出発はいつにします？」

「来てもらえるんですか！　すぐにでもと言いたところですが、そちらも準備があるでしょうし明後日くらいでどうでしょう？」

明後日の朝に門で」

了承の言葉にジスはもとより、表情の硬かったリーゼも安堵で表情を緩めた。そんな顔もできるんだなと見ている幸助の視線に気づき、すぐに真剣なものへと戻った。

「同行者がいるんですけど、それでもいいですか？」

「来てもらえるなら同行者くらいかまいませんよ！」

そういうジスの表情を見るに本心から言っているように見える。

「じゃあ、そういうことで」

話はこれで終わり、三人は街に戻る。同行が決まったことが嬉し

いのだろうジスとリーゼの足取りは軽かった。

宿に戻るという二人とわかれて、幸助は孤児院へ。

建物近くで遊んでいる孤児院の子供たちに声をかけると、微妙な視線を向けられる。幸助はなにかしたかと首を傾げる。子供たちにとっては姉のような者を連れて行ってしまう存在だ。心穏やかならぬ思いを抱いても無理はないだろう。

家事をしている大人にウィアーレの居場所を聞き、そこに向かう。ウィアーレがいるのは私室で、年の近い女の子と二人部屋らしい。扉をノックすると、すぐに返事が返ってきて扉が開く。

「コースケさん」

ばつの悪そうな顔で幸助を見ている。

「迎えに来たんだけど出られる？」

「その前にお父さんに会いに行かないと」

「別れの挨拶？」

「いえ……ばれたので、そのことについて話があると」

「……ばれた？ 歪み使いのこと？」

こくんと頷いた。

「うっかりで？」

その言葉に勢いよく首を横に振る。

「違うよ！ 今回ばかりは違う。」

なんというか育ての親には敵わなかったって感じ」

「あー、嘘をつく仕草とかで見抜かれたってことでいいのかな？」

「うん」

どこか嬉しげな雰囲気で頷く。嬉しいのは当然だろう。嘘だと見抜けるほど自身を見ていてくれたということなのだから。

「行こうか」

二人はウェーイのいる院長室に向かう。

「こんにちは、コースケさん」

「はい、こんにちは」

椅子を勧められ、幸助とウィアーレはウェーイと向き合うように座る。

ウェーイは視線を下げ、両手を膝の上で重ね合わせ、少し黙ったままだった。話しかけられるような雰囲気ではなく、幸助はウェーイが口を開くのを待つ。

「……昨日話を聞いて信じられない思いでした。

歪み使い、神、偽神信仰者。これらにウィアーレが関わることで今でも信じたくありません。今も夢ならばと思っています」

「そう、ですね。関わっていいことなど一つありませんから」

幸助に頷きを返す。

神とってはありがたい存在でも、人間にとっては呪いも同じ。得て喜びを抱くものは少ないだろう。

ここでウェーイは視線を上げ、強く思いの籠った目で幸助とウィアーレを見る。

「思い返せば色々な子たちがここにいました。その誰にも愛情を注いできたつもりです。」

あの子らは大きくなり巣立っていきました。幸せな家庭を築いた子がいます、商売を頑張っている子がいます、無茶をして死んでしまった子がいます。

そういった子の中でもウィアーレは手がかかる方で、でもそんな子ほど可愛いとはよくいったものです」

そう言った時だけ慈愛の籠った視線に変わり、すぐに元に戻る。

ウィアーレが孤児院に来て、今日までのことが思い起こされたのだ。

「死んでしまった子もいますが、孤児院に関わった誰にも幸せになつてほしいと常に思っています。当然ウイアーレにも。」

ですがここには幸せになることは難しい。偽神信仰者から守る力などここにはないのだから。

もつと私が若く戦える力があれば！　とも思いますが、私程度の力でどうにかできることではないのですよね……。

だからお願いします！ 頭を下げるしかできない不甲斐ない私の
願いです。どうかウィアーレを守ってください！

幸せにしろとまでは言いません！
悲しみに歪む顔を見ることのないよう、どうかどうかつ」

頭を下げるウエイから強い思いが感じ取れる。

軽々しく守るとは言えない雰囲気の中、幸助は迷いの表情を見せる。守らないというわけではなく、今まさにウェイから渡されようとしているものの重さに気づいたのだ。

「……ウェーイさんはすごいですね。多くの子どもたちの命を抱え込み、生きてきたんだから。」

俺は今ここで一人を抱えるということの重大さに気づきました。さっきまでの俺も軽く考えていたわけではないんですけど、考えが足りてなかったのがよくわかります。

ワイアーレをたしかに引き受けました。ウェーイさんが守ってき
たように、俺もワイアーレが泣くことのないよう頑張っていきたい
と思います」

幸助なりに真剣に気持ちを込めてウェーイへと伝える。

ありがとうと言、ウェーイは微笑みを浮かべた。

幸助は体に心にずしりと重さが加わったように思えた。この重さ
が一人の重みなのだろうと考える。いくら力があるうが関係ない。
耐え切れずに潰されることもある重さ。家庭を持った者、子供がで
きた者たちが感じているであろう、時に強さの源にもなる重さ。

これをたくさん抱えてきたウェーイは尊敬に値すると、幸助はつ
くづく頭が下がる思いだ。

三人で一緒に院長室を出て、孤児院入り口まで移動する。子供た
ちも全員集まっている。

子供たちは口々に別れを惜しみ、泣いている子もいる。けれども
引き止める子がいないのは、これまでに同じことが何度もあったか
らだろう。

「いつでも帰ってきなさい。ここもお前の家なのだから」

「はい。今までお世話になりました」

頭を下げる。足下に数滴の水滴が落ちていく。涙を拭ってから顔
を上げ、目が赤いながらもワイアーレは笑顔を浮かべていた。

「いってきます！」

孤児院の皆の声を背にワイアーレは歩き出す。時々振り返って手
を振り、見えなくなるまでそれは続いた。

「大丈夫？」

「……うん、いつかは出て行くと覚悟はしていたから」

死に別れたわけじゃないんだし、いつでも会えると新生活に向けて気合を入れる。

「じゃあ、新居となる家に帰りますか！」

「まあ、明日明後日過ごしたら出ることになるんだけどね」

「え？　もしかしてエリスさんに許可もらえなかったとか？　私いきなり住むところないんですか！？」

「違う違う。また旅行に行くことになったんだ。昨日話しかけてきた二人組に頼まれてペレレ諸島までね」

「また遠出？　帰ってきて一月くらいしか経ってないよ？」

「俺も落ち着きないと思う。」

でも特に用事はなかったし、偽神信仰者の追っ手を攪乱できればなど」

自分の事情もあるのだと、ウィアーレは申し訳なさそうに頭を下げた。

「コウマに行くついでだし、気にしないでいいよ」

「シズクちゃんやナガレさんもペレレ諸島に住んでいるんだっけ」

「いつか行くなって約束したからね」

「会うのが楽しみ」

話しながら歩き街の外に出て、家に移動する。

ウィアーレは今日から過ごすことになる家を見上げた後、周囲を見渡す。

「ここってどこら辺なの？」

「ベラッセンから二日離れた森だとか」

幸助も詳しい位置は知らないのだ。いつも移動は魔法任せなので、ベラッセンから東にあるのか西にあるのかさっぱりだ。

「ただいまー」

「私もただいま、なのかな」

「二人ともお帰り。ウィアーレは災難じゃったのう」

「ええと、はい……」

神からはありがたられたものを、災難と言い切ったエリスの言葉に頷いていいものか、迷いつつも頷いていた。

「部屋に案内するよ。荷物置きに行こう」

「うん」

二階に上がり、部屋に荷物を置く。

ずっと誰かと二人で部屋を使っていたウィアーレは、初めての一人部屋に少し気持ちが浮き上がる。

「荷物少ないけど、それで足りる？」

ウィアーレが孤児院から持ってきた私物は旅行鞆と風呂敷に入るだけだ。

女の子の私物はもっと多いと思っていた幸助は、荷物を始め見た時拍子抜けした。

「足りるよ。お皿とか食器は持ってこなくてよかったんだよね？」

「この家に十分あるしね」

「じゃあ、これで全部でいいんだよ」

贅沢できるような環境ではなかったので、荷物は少なめになってしまふのだ。そのことにウィアーレは不満を抱いたことはない。小さい頃からそれが当たり前だったから。

「下に行ってる。終わったら下りてきて」

「すぐ行くよ」

衣服などをしまう際に下着も同じく仕舞うだろう。それをエリスとは違って見られたくはないだろうと考え、手伝うことも提案せずに幸助は一階に下りる。

「エリスさん、ちょっと話したいことがあるんだけど」

「なんじゃ？」

「明後日からペレレ諸島に行くことになった」

「いきなりじゃのう。」

昨日話した二人組に関してか？」

遠出を要するような出来事はそれ以外に考えられないと聞く。

「そう。一族の使命を果たすために俺を探してたんだと」

ジスたちから聞いた話を伝えていく。

「ふむ、エリガデン島か。初めて聞く島じゃな。」

それに封印、鍵。謎ばかりじゃ。

一番気になるのは、なぜコースケなのか。コースケという個性に反応したのか、流離い人に反応したのか、竜殺しに反応したのか」

コースケという個性に反応したという線は一番可能性が低いだろ

う。個性に反応する意味がない。そんなわけのわからない条件を鍵にするなど、この先二度と封印が解けないようにと思い、封印したと考える方が自然だろう。

この場合、封印を解けと伝言を残すことはない。

流離い人という部分に反応したとすると、この世界の人間には封印を解かれたくなかったと考えられる。封印されているものはこの世界の人間には扱いきれず、異世界の者であれば使用可能なものと仮定してみる。だが異世界といっても様々で、残した遺産を扱える異世界の人間が来るとはかぎらない。扱えない者が来て、暴走させてしまう可能性もあるわけで、そういったことから考えると流離い人に反応した可能性もそう高くはないかもしれない。

最後に竜殺しに反応したとすると、封印されているものは厄介な魔物なのかもしれない。当時の人々では倒しきれず、封印だけが精一杯な魔物が封じられている可能性がある。永遠に封印はできず、封印が解ける前に未来に現れるであろう竜殺しに希望を託したのだ。ほかの二つよりも説得力があるのではないだろうか。幸助の感じた嫌な予感というのも、そんな魔物と戦うことになることを予感したものだっただのかもしれない。

「私も一緒に行こう。助けになれるかもしれんからな」

「ありがとう」

「ペレレ諸島ならば、大陸の反対側から船に乗った方が一番早いな。東側の港は行ったことないが、海から少しばかり離れた街にた昔行ったことがある。そこまで転移魔法で移動できるから、旅行日数はかなり減らせるぞ」

「ずっと馬車に揺られるより楽できるね。」

「そういや移動が楽になる魔法の道具ってないの？ 空飛ぶ絨毯とか故郷の物語には出てきたよ」

「個人用の物はいくつかあるが、大人数を運ぶ物はないのう」

空を飛ぶ道具は、羽つきの靴や偽翼や波に乗って移動するのではなく風に乗って移動するボードといったものがある。幸助の場合はそれらを使うよりも飛翔の魔法を使った方が速く長く移動できる。

馬車の乗り心地を改善したいのならば、高級馬車に乗るという選択肢もある。そういった馬車は魔法仕掛けで振動をなくしているのだ。馬車に乗っているということすら感じさせない。見た目は移動する部屋といった感じだ。

旅が盛んというわけでもないのだ。移動を快適にする道具はそれほど多くはないし、地球と同程度のものを求めるのは無茶だった。

「出発が明後日ならば急いで準備する必要もないのう」

「一日あれば十分だしねえ」

下りてきたワイアーレも交えて、家の間取りを教えつつのんびりと過ごす。

家賃や家での役割分担などの話も出たが、ワイアーレが特にすることはなかった。家賃を必要としているほどお金に困っていないし、家のことは幸助がさっさとやってしまうのだ。

なにもせずに過ごすというのは恐縮ということで、家事の手伝いをする事で決まる。

エリガデン島への旅路

穏やかに時間が流れていき、出発の日となる。

昨日のうちに、幸助はコキアやメリーイルに遠出するのでしばらく留守にすることを話しておいた。

幸助が出かけている間、ワイアーレは歪みを使った練習をして、エリスはその練習風景を見ていた。

最初ワイアーレにできたことは歪みを真っ直ぐ五メートルほど飛ばすことのみ。五メートル飛ぶと、歪みは消えていった。一日かけた練習で軌道を曲げることはできるようになった。

歪みにとり憑かれていた時のように、複数の歪みを自在に操れるようになるまで、もうしばらく時間がかかりそうだ。

エリスは制御に関してのアドバイスはできなかったが、色々と質問することで歪みを使いできることをワイアーレに自覚させていった。

門の近くには旅の準備を整えたジスたちが、幸助をいまかいまかと待ち受けていた。

エリスとワイアーレの同行を事前に聞いていたことで動じる様子は見せず、反対することなく受け入れる。

「さあ馬車に乗りに行きましょう」

「待って、エリスさんが魔法で途中まで送ってくれるってさ。だからここでは馬車を探さなくていいんだよ」

「本当に？」

ジスの問いにエリスが頷く。

「それは助かります。ありがとうございます」

早速、エリスは皆を周囲に集めて転移魔法を使う。

到着先は港まで馬車で五日という距離にある街だった。ジスたちは幸助たちに喫茶店で待つように言い、すぐに馬車を探し出す。

待ち始めて十五分ほどで困り顔で、二人は戻ってきた。

「どうしたんじゃ？」

「馬車が出られないそうで」

ジスは悩みながら答える。その横でリーゼは旅が順調にいかず不機嫌そうだ。転移で距離を稼ぐことができ喜んだ分、ここでの邪魔は余計にいらついたのだろう。

港への道はこの街から東に見える山脈を越える必要がある。だが今はその道が使えない。

ここら一帯は一昨日まで強い雨が降り続いていたらしく、馬車の通り道が土砂と倒木で塞がれているのだという。復旧までしばらくかかる二人は聞いてきた。

南に山を迂回する別のルートもあるが遠回りになるようで、そっちを通るかここで待った方がいいのかジスには判断がつかないのだ。

「それは困ったのう」

「俺が見てみようか？　ここから見るに山までは馬車で半日くらいだろうし、空を飛べばそう遠くない距離だよ」

一度現場を見て進路を決めた方がよさそうだと、幸助が提案する。

「それもいいかもしれんの。行ってくるか？」

「ん、ちよっと行ってくる」

「まあ、待て。そう急ぐな」

すぐに行こうとする幸助をエリスは止める。宿を取ってから行けと。

滞在することになるなら宿を決めておいが方がいい。帰ってきたらどこに宿を取ったか知らずに探し回るはめになりかねない。

納得し、宿に荷物を置いた後、幸助は宿を出る。

「ちょっと待って」

さて飛ぼうと思っていた幸助をリーゼが止めた。

「リゼスさん、なにか用事？」

「私も連れて行って」

「リゼスさんも自分の目で確かめたいの？」

「ええ」

「背負っての移動になるけど大丈夫？ それに高いところ飛ぶよ？」

「自分で言い出したことだから、文句は言わないわ」

それならと幸助は魔法を使い、リーゼに背を向ける。乗ったことを確認し、幸助は宿の上空に上がっていき、山へと飛んでいく。

初めての高さにリーゼは緊張するようで、幸助の肩を掴む力が強くなる。

「しっかり捕まってるよ」

「わかった」

速度を上げ飛び続けること三時間、土砂崩れの現場上空に到着し下りていく。

飛び始めて一時間もすれば慣れたようで、リーゼは周囲の風景を見る余裕もできていた。

現場には復旧作業のために人が来ており、空から下りてきた二人

は注目の的だった。

「こんにちはー」

「……ああ。こんなとこになにか用か？」

「どれくらいで復旧するか見に来たんですよ。長くかかるようだったら、ここを使わずに別のルートを使おうと思って。

復旧どれくらいかかります？」

幸助の言葉に工夫は土砂に視線を向ける。

「んーそうだなあ……順調にいつて八日かねえ。街で工夫を募集しているんだが、それに人が集まればもう少し早くなるかもな」

「攻撃魔法で土砂を吹っ飛ばす……ってわけにもいかないか」

振動で違う場所が崩れる可能性があると言いながら気づいた。

「道を塞いでいるものを爆破することもあるが、今回は地盤が緩んでいるからな」

「そうですか。ありがとうございます」

工夫に礼を言って少し離れる。

「八日らしいですけど、遠回りした場合ってどれくらいかかるんですか？」

「たしか十三日だった」

「工事日数プラス移動日数で十三、移動するだけで十三。どちらもほぼ同じかあ」

どちらを選んでも同じで、幸助もリーゼもジスと同じように悩む。

「……手伝いが増えればもっと早く終わる可能性もある、か。手伝ってみようかな」

ここで必要とされているのは力仕事のできる者だろう。どうせ暇なのだ、自分にピッタリだと考え、手伝うことにする。

「私も手伝うわ。少しでも早く終わって通れるようになるなら、その方がいい」

「力仕事になると思うけど」
「それでも筋力はD一あるわ。そこらの男よりも上よ」

たしかに一般成人男性より上ならば十分だろう。
リーゼは流したままだった髪を、ポケットから出した紐で縛り作業の邪魔にならないようにする。

「すみませーん。街の募集を通さずにここで即決で雇用を決めてもらうことってできますか？」

さきほどの工夫に聞くと、できると返事が返ってきた。

「じゃあ、よろしく願いします」

幸助と一緒にリーゼも頭を下げる。

「人手が増えるのはこっちも助かるしな。
早速、どこせるものからどかしてくれ」

「「わかりました」」

工夫たちに混ざって土砂に手をつけ始める。十人いる工夫たちの多くは一般人で筋力ランク的のE+がほとんどだ。だから本

人の言ったようにリーゼは十分な働きを見せる。男が一人で持つのに苦勞しそうな石を運ぶ様子を見て周囲が驚いた、といったことはなかった。なぜなら一本だけでも数人かがかりで運ぶ倒木を両脇に二本抱え、平気な顔で運ぶ幸助の方が目立っていたからだ。むしろリーゼも驚く側だった。

工夫たちが考えていたよりもハイペースで作業は進み昼になる。

「兄ちゃんたち昼にしようや」

工夫の呼びかけに二人は手を止める。

「兄ちゃんたち昼持ってきてないだろ？」

俺たちの拠点で一緒に食べよう。全員分を一度に作ってもらってるから、兄ちゃんたちの分も出せる」

「ありがとうございます」

「いいってことよ。」

それにしても姉ちゃんもすごいが、兄ちゃんはそれ以上だな！あんなに軽々と作業をこなす奴初めてみたぜ。ここの作業が終わっても一緒にやつてもらいたいくらいだ。

そんだけ力がありや、あちこちから呼ばれてんだろうな。仕事に困らなさそうで羨ましいな！」

工夫が幸助の背中をばしばしと叩きつつ笑い言う。

カラカラと笑う工夫の明るさに、幸助もリーゼも好感を抱く。

「力は有り余ってますからね。地元でも似たような依頼受けてますし」

「その力のおかげで作業が捗ったな。兄ちゃんたちがこのまま手伝ってくれば、予定よりも早く終わるな」

「どれくらいですか？」

期待に目を光らせたリーゼの質問に少しだけ考え口を開く。

「雨が降らなきゃ、五日後の昼には通れるようになってんな」

「ほんとですか？」

「おう！」

自信を持って頷いた。それにリーゼはやる気に満ちた顔になる。

「頑張ります！」

「気合入ってんなー」

頑張るということは作業終了までここに来るということだろう。

着替えを持ってきていないので泊まり込みということはない。

移動手段はリーゼにないので、幸助かエリスに頼む必要がある。

毎日来る気はなかった自分も来ることになるんだろうなと、幸助は気合の入ったリーゼの横顔を見ている。

力仕事で体力を使うためか、聞いたように料理は多めに用意されていて幸助たちももらっても問題ないくらい量があった。

具沢山スープと小型のフランスパンらしきものを貰い、食べ始める。硬めのパンだが、スープに浸すことで食べやすくなる。具からよく出汁のでたスープを吸ったパンはジャムやバターをつけるのに負けないくらい美味しいものだった。

ベラッセンで食べるものとは少し違った味に、幸助は土地柄を感じる。

食事と休憩が終わり、作業を再開する。石や木をどけた後、土をどけるを繰り返し、日が傾き始めた。

今日はここまでということになり、幸助とリーゼは工夫たちに別れを告げ、転移魔法で街の入り口に移動する。

そこから宿に移動しながら二人は話す。

「熱心に働いてましたね」

「当然じゃない。働くんだから手は抜けないわよ」

「早く通れるようにしたいから熱心に作業してたわけじゃない？」

リーゼが熱心なのはこっちが理由だと思っていた。

「それもあるけど、今言った理由も嘘じゃないわ」

「もしかして真面目ってよく言われます？」

「言われるわね」

幸助はこういう人なのかと少しリーゼのことを少し理解できた。

「使命を果たすのに熱心なもの、そういった性格から？」

「それはちよつと違うわ。私自身は封印に強い関心はない。

でも私は故郷の皆が好きで、皆が使命が果たされることを望んでいる。好きな人たちが喜ぶ顔を見たいからというのが理由よ」

「真面目なだけじゃないんだ」

故郷のことを話した部分のみ、リーゼの表情と雰囲気は柔らかなものになった。本当に好んでいるのだろうとよくわかる。

きりつとした表情も美人といえるものだが、そういった柔らかな表情も魅力的だった。

いいもの見れたなど、幸助はこれからの行き来の運賃に十分な対価をもらったと感じた。

「どうしたんです？ ニマニマして」

「なんでもないですよ。明日も頑張って働きましょかね」

「ええ、是非頑張ってください。私よりもあなたの方が作業に貢献

してますからね」

「美人さんの応援もらいましたから、頑張ってみますか。」

……頑張るといえば、ジスフィードさんが俺を探しにきた理由もリゼスさんと同じ？ いい人そうだから頼まれれば断れずに旅に出そうでもあるけど」

「ジスのことはよくわからないわ。ジスは島出身じゃないから」

「そう言ってたっけ」

「島の関係者ではあるけどね。島の外に慣れてない私たちの案内役について紹介されたのよ」

幸助を探しに出たのは二人だけではない。探す役割を持っているのは二人だが、二人の補助として何人か一緒に出た。

その人たちは依頼をこなして路銀を稼いだり、情報を集めて世界の情勢を探っていた。その人たちは幸助が見つかった時点で、ジスから連絡を受け先に島に帰っている。二人に同行しなかったのは、大勢で押しかけて威圧感を与えるような形にならないようにとジスが説得したためだ。

現在は転移で移動したため、その人たちよりだいぶ先行する形となっている。ここで足止めをくらっても、追いつける距離ではない。

「ジスは依頼で同行しているのかもしれないわ。だから島のことはあまり関心はないのかもしれない。人がいいから依頼ということ忘れて、親切心で動いている可能性もあるけど」

そうやって話していると宿が見えてきた。

部屋に入ると、帰りが遅くなった理由を聞かれ。事情を話す。帰りが遅いことを心配していたのはウィアーレとジスで、エリスはなにかあったかもしれないとは思っていたが心配はしていなかった。

その後は夕食を食べ、疲れたリーゼがすぐに眠り、ほかの四人は思い思いに過ごしていった。

次の日もその次の日も幸助とリーゼは復旧作業に向かう。二人だけ働かせるのは悪いとジスも同行し、懸命に働いていた。残ったウィアーレは歪みを使う訓練を街の外で行い、エリスは護衛として一緒にいた。

作業は順調に進む。一日だけ雨が降ったが、小雨で長く降ることもなく作業に支障はなかった。

四日目の作業が終わり、帰ろうとした三人を顔馴染みとなった工夫が呼び止める。

「あんたらはここまででいい。明日の作業はちよつとした補強と確認だけだからな。」

今日中に馬車ギルドに連絡しとくから明日から運営再開だ。ギルドに口利いとくからすぐに乗れると思うぞ」

礼を言い、三人は頭を下げる。

「それとこれ報酬だ」

三人に銀貨十五枚ずつ渡してくる。

手に載せられた十五枚の銀貨にリーゼとジスが驚いている。四日の給料としては多いのだ。

「こんなにいいんですか！？ 多すぎますよ？ 通れるようになったて助かったのはこちらなんですから、いくらかお返ししますが」

ジスの言葉に工夫は首を横に振る。

「返さんでいい。早く終わったことで商人ギルドからボーナスが出ることになったんだ。これだけ出しても俺たちにも利益がある」

流通経路の早期回復は旅人だけではなく、商人にとってもありがたいことだ。運ぶ予定だった生鮮商品の損失が少なくなる、期日までに間に合わなくなるはずだったものの搬入ができるようになり仕入れ金が無駄にならなくて済んだといった利益がでる。

土砂崩れが起きた時に商人たちは悲鳴を上げただろうが、今回の早期復旧にも嬉しい悲鳴を上げていることだろう。

「そういうことならありがたいです」

ジスの言葉に同意し、リーゼも頷く。

工夫たちに別れを告げて、三人は街に帰る。エリスたちに出発できることを伝え、旅の準備を整える。

翌朝、馬車乗り場で名前を出すと、連絡が来ていたのかすぐに乗せてもらえることになった。

馬車に乗って山へと向かう途中に、撤収準備を終えた工夫たちと擦れ違う。といっても互いに気づくことはなかったのだが。

馬車の旅はハプニングなく、無事に港に着いた。船もタイミングよく二日後に出るものがあり、それに乗ることができた。

船乗りの話によると、到着先の港まで十六日。その間に幸助はエリスに魔法を習い、暇を潰す。そのそばでウィアーレも魔法のように見せかけて、時々歪みを使う練習をしていた。することのないリーゼはそんな三人の様子を見て暇を潰し、ジスは昼寝したりほかの客と話したりして過ごしていた。

十六日間ずっと魔法を習い続けたわけではなく、ほかに日光浴や釣りといったこともしていた。

その暇潰しの中で他の客や船員に好評だったものがある。それは音楽だ。

以前の客が忘れていったぼろいギターを幸助が見つけて修理し、甲板でのんびりと弾いていた。始めはエリスとウィアーレだけが聞

いていたのだが、次に船員がそしてリーゼとジスが集まりといった具合に観客が増えていった。時間が余っていたのは皆同じだったのだ。フルールの指導のかいあっていい評価をもらえ、そのうち船長から依頼されてきまった時間に甲板で弾くようになる。船を下りる時にはおひねりと報酬で金貨一枚分稼いでいた。ついでにギターももらった。このまま船に置いていても誰にも使われないのだ。また埃を被らせるのも可愛そうだと渡されたのだ。

船が到着した先はクワジツト王国内の港ではあるが、エリガデン島ではない。エリガデン島に直通で行く船がなく、島近くの港から船ごと雇い、島へと出してもらう必要があるのだ。その港へはまた船に乗っても馬車で行ってもたいしてかわらない。

いい加減陸が恋しくなっていた一行は、馬車で進むことにする。馬車でも暇つぶしにギターを弾いていた幸助に、客の一人が話しかける。

「いやー上手いですな」

「ありがとうございます」

「それにそのギターも味があっていい。名のあるものですか？」

「いえ、ただ古いだけですよ」

名のある楽器ならば、忘れ物にはならないだろう。

「そうでしたか。実は私も楽器を使うのでよ」

そう言ってハープを荷物から出す。軽く手を動かすと、澄んだ綺麗な音が馬車の中に響く。

「いい音ですね」

「ありがとうございます。十年以上付き合っている相棒なのですよ」

「長いですね。俺のは最近もらったばかりです」

「いい付き合いになるといいですね」

幸助は笑い頷いた。せっかく手元にやってきたのだ、この出会いを大事にしたいという気持ちになる。

「それですな。あなたが弾いていた旋律が聞き覚えがなくて、どんなものを知りたく思い話しかけたわけなんですが」

「ああ、それで。俺の故郷の音楽ですよ」

教えてほしいという男に幸助は頷き、しばらく音楽教室が開かれる。

一曲分の指導が終わり、雑談に移って行く。

「目的地はエリガデンですか。今あそこでなにか発見でもあったのです？」

「俺たちはちょっとした用事で行くだけなんだけど、エリガデンになにかあったんですか？」

「いえね、数日前に王国兵が動いて、エリガデンへと向かったという話を耳にしたのですよ」

「それ本当ですか!？」

なにげなく二人の会話に耳を傾けていたリーゼが勢いよく聞く。

「ほ、本当ですよ。百人とそれほど多くの兵ではないんですが動いたのか確かです。なにか魔物が発生したのかと噂になってます」

ほかの客も聞いた話のようで頷いている。

「魔物? 少なくとも一年前は問題になるような魔物はいなかった

し、これまで問題になったこともないのに……。

そうだ！ ジスっ

「なんですか？」

「島と連絡取り合ってたでしょ？ その時なにか聞いてない？」

「そうですね……最後に連絡取ったのは十八日ほど前ですが、その時は平和そのものといった感じだった」

ジスの声にも心配そうな色がある。

島と連絡を取り合っていたといっても、直接島と情報のやり取りをしているわけではなく、相手は島から出て大きな村まで移動し、このギルドを利用して連絡をしていたのだ。だから今すぐに島の情勢を知ることが難しい。

「なにか問題があったとしたらその後よね、なにがあったのかしら。軍が動くなんて並のことじゃないわ」

「船を借りる時に情報を集めればいいじゃろ。島に近いならばなにかしらの情報はあはずじゃて」

なにかを考えながらといった感じでエリスが口を開く。

軍が動いたことにエリスは疑いを持っている。魔物が発生しただけならいい。しかしタイミングが良過ぎる。封印が解けるとわかり、その鍵が島に向かっている。国にとっては強い力というものは魅力的だ。その回収に軍が動いたのだとすれば厄介でしかない。

この疑いを持ったのはエリスだけではなく、ほかの者も大なり小なり嫌なものを感じていた。

「妙な雰囲気になってしまいましたな。なにか気分の晴れるような曲を一つお願いしたいのですが」

「……いいですよ」

男の頼みに頷いて、幸助はギターを抱える。こっちの世界の曲でテンポいいものを弾き始めた。

これで幸助たち以外の気分は上向きになる。幸助たちも多少は気分が晴れるも、心の隅に消えないもやっとしたものが残る。

漁村に到着し、船を借りる前に情報を集める。軍が動いたという話に偽りはなく、この漁村の人間たちは国の船が島に向かうのを見ていた。

五人は浜辺で集めた情報を元に話を進める。海から吹く風はまだ冷たさを含んでいて、遠目に目的地であるエリガデン島が見える。

「目新しい情報は入っておらぬが、一応情報をまとめようか。

村人から証言で兵が動いたのは確定した。兵たちの目的はわからぬまま。

ここ二十日ほど島からの情報は入ってきていないし、島からやってきたという人もおらぬ」

「島で魔物が暴れているなら、一時的に島から離れるように兵たちが誘導すると思う。

それをしてないなら魔物が暴れている可能性は低いのかも」

情報を聞いたワイアーレが思ったことを言い、それにエリスが頷く。

兵たちが誘導する余裕がないほど、魔物が強かったり数が多かったりした可能性もある。だがその場合は応援を呼ぶだろう。島に向かったの移動が一度あった以外は、漁村の者たちは兵たちの移動を見ていない。兵たちが使う船は立派で目立つので、見過ごしたということはないだろう。

「魔物の線はほばないと見ていいのね？」

リーゼの問いにエリスは頷く。

「じゃあ、兵たちの目的はやっぱり封印なのかしら」

それ以外に島に行く目的はない。封印以外はどこにでもある島なのだ。

「島の人々は兵たち拘束されている。これで決まりですかね」

顔を顰めつつジスが言う。

「兵たちと手を組んでいなければな。リーゼよ、聞きたいことがある」

「なに？」

「島の者たちは封印を解いたその後はどのように考えておるのじゃ？利用しようとか明確な指針があるのか？」

その問いには即座に首を横に振る。

「私の知るかぎりだと、封印を解くことだけ考えているわ。その後のことを聞いたことはない。

封印されているものを神聖視している人もいるし、利用なんてことは考えてもない可能性もある」

「兵たちの目的が封印されているものの入手ならば敵対関係になり、ジスの言うように拘束されている可能性があるのう。

目的がわからんから封印のことを知り調査に来ただけとも考えられるが、念を入れて慎重に動いた方がよいじゃろうな」

これからの動きはこれでいいなと皆を見回し、幸助で視線を止める。

「なにを考え込んでおる。疑問でもあったか？」

「いやないよ。ただ兵の目的を考えてただけだから」

こうは言ったが本心ではない。

考えていたことは、リーゼたちの中に兵との内通者がいるかもといったことだ。以前見たドラマなどでこういった展開の場合スパイが入り込んでいたのを思い出したのだ。

リーゼとジスのこれまでの行動を思い出していたので、静かだったのだ。

エリスも内通者のことは考えていて、リーゼとジスのことも疑った。島のことを心配する様子に違和感がないことから、可能性としては低いと見ている。内通者がいても今島にいる人間かリーゼたちを補助していた誰かだろうと考えた。

幸助も同じく二人をスパイ候補から外す。

リーゼとジスが演技して幸助たちの目を欺いているとしたら、相応な役者だろう。幸助はともかく、エリスは経験が豊富で人を見る目はあるのだから。

五人は村人から小船を借りる。帆のない手漕ぎのもので、船尾に立ち櫂を使い動かす。帆付きの小船もあったが、そちらは漁で使うらしく借りることはできなかった。帆船の扱いなど誰も知らないので渡されても困ったが。

少し話し合い、リーゼが動かすことになった。船をリーゼ以外動かしたことがなかったのだ。

あとは目立たないようにエリスが魔法で、船を覆うように幻を被せた。今小船はイルカサイズの魔物に見えているはずだ。

漁村を出発し一時間を過ぎた頃、リーゼが少し疲れを見せ始めたので幸助と交代する。リーゼの補佐を受けつつ船を進め、到着する少し前にはほぼ問題なく船を動かせるようになっていた。

リーゼが向かおうとしていた船着場には、兵たちが乗ってきた船

があり見張りらしき兵もいた。幻が効いているようで怪しまれている様子はない。

「ここから上がるのはよしたほうがいいね。

リゼスさん、どこかこっそり上がれそうなところある？」

「そうね……東に向かってくれる？　そこにちよつとした入り江があるから」

「了解」

ゆつくりと櫂を操り、静かに船を東へ向ける。三十分ほど陸地沿いに進み、入り江に到着する。

岩の一つにロープで船を繋ぎ、五人は陸に上がる。時刻はもう二時間もすれば日が落ちるといったところだ。

「暗くなってから行動する？」

幸助の問いかけにエリスは悩む。

「その方が動きやすいが、取り返しのつかない事態にならないよう少しでも早く情報がほしいところじゃ。

幸助、こっそりと誰にもばれずに見て回することはできるか？」

「できなくもないかな」

ナガレやシャイトの移動法をできるだけ真似、情報入手を欲張らなければという条件がつくが。

見つからないこと優先で、情報は二の次ということで幸助は一人入り江から移動する。身軽になるため荷物と剣は置いていった。

村人を心配してリーゼも行く主張したが、隠密行動ができないのでエリスたちが止めた。

リーゼから現在地から村までの道のりは聞いているので、探す手

間は省けている。

空を飛ばば楽に情報を集められる可能性はあるが、それは一か八かの賭けにもなる。ばれなければ問題は無いが、空の上だと隠れる場所などなく、見ているとばれてしまえば侵入者がいると相手に情報を与えることになり、秘密裏に動けるというこちらの優位性が一つなくなってしまう。

（見張りがいるな）

気合を入れて見張っているという風ではないが、見えている位置に一人、少し離れたところに気配がもう一つ。

そういった気配を避けて、木陰から木陰へと風の音木々のざわめきに紛れて静かに移動する。

日が暮れるまで村を遠巻きに回り、様子を探る。

村の中には住人を見張る兵が多いが、特に暴力を振るわれてはいない。村人は村から出ないようにされてはいるが、一箇所にとめられているといったことなく、少し不自由な普段通りの生活をしていた。表情に明るさがないのは無理もないことだろう。

（これは厄介）

助けるにはどうすればと考え出た結論だ。

どこか一箇所にとめられているのなら、エリスにそこに結界をはってもらい防衛拠点にしてもらえばよかった。

現状は住人と兵が入り混じっていて、助けるために突っ込んだところで手の届かない村人が人質にされておしまいだ。

ならば兵たちのトップを押さえればと考えたのだが、そのトップらしき人物の姿が見える範囲にいない。建物の中なのか村を留守にしているのかすらわからない。

これ以上詳しいことが知りたいのなら、もっと近づく必要がある

見つかる可能性が高くなる。

情報は二の次が決められていたことなので、幸助は一度引くことにする。

その帰りにリーゼに村へとこっそり戻ってもらい、村人が決まった時間に一箇所に集まるようにできないかと考えたり、鳥の幻をまといから空を飛ばばもっと近づけたかもしれないと思いつつ入り江に戻る。だがこれらの考えはすぐに無駄になる。

幸助が入り江を離れて一時間弱ほど経ち、残った四人は入り江に潜みつつ帰りを待っていた。

「あとどれくらいでコースケさん帰ってくるのかな」

「ここからだ村に行くのに二十分くらいかかるから、まだかかると思う」

ウィアーレとリーゼは時々会話をかわして、エリスとジスはそれを聞きながら静かに帰りを待っていた。

リーゼは村人が心配なのかじっとすることができず、ジスは気持ちを紛らわせるためか荷物を何度も探っていた。

「怪我したりは心配してないんだけど、一人での行動はなにかあったら誰にも頼れないし」

「ワタセさんって強いのか？」

「地元じゃ一番って言っているかもしれないよ。ねえ、エリスさん」

「ああ、強さだけでいうなら言い過ぎというわけじゃないな」

「たしかに力は強かったわね」

一緒に復旧作業していた時のことを思い出す。

「地元で一番って具体的にはどれくらいの強さなんです？」

ジスは荷物を探る手を止めて、話している三人に近づく。

「最近だとウッドオーガを一人で倒したそうじゃな」

「ウッドオーガを一人で？ それはすごいですねっ！」

語尾が強くなったのは幸助の強さに感動したからではなく、エリスに近づいたジスが手に隠し持っていた細身のナイフをエリスの肩に振るったからだ。

突然の暴挙にウィアーレとリーゼは理解及ばずといった表情になり、エリスは肩を押さえ悔しげな顔になる。

「その顔は僕がこうしたことに疑問を抱いていないようですね」

「今この場で確信を持てたのじゃがな。しかし……上手く隠したもののじゃの……う」

「演技のギフトは伊達ではないということです」

ジスが持っているギフトは演技の2段階目。その効果を持てれば、エリスから疑いを逸らす演技をするのも容易いことだった。なにしろ人が良いという人格になりきっていて、旅の間の行動は心の底からのものだ。

嘘を見抜くギフトでも持っていれば見抜けたのだろうが、生憎とそんな便利なギフトは持っていない。

エリスは体を小刻みに震わせている。体を動かそうとしてできないでいる。

それに気づいたジスは笑みを浮かべた。

「動けないでしょう？ この刃には持続性はないけれど即効性に優れた麻痺毒を塗ってありますからね」

効果は三分ともたないが、刺して十秒で体が痺れ始める優れものだ。話している間に、毒が体中に回った。

簡単な解説をしてジスは右手に持ったナイフをエリスの首に当てる。そして左手に持った小瓶をリーゼに差し出す。

「リーゼ、この薬をワイアーレさんに飲ませなさい。

逆らえばエリシールさんがどうなるかわかってますよね」

旅の間に浮かべていた笑みと変わらぬ、されど感じられるものは違う笑みでリーゼに命じる。

「ジス、どうしてこんなことを？」

「封印されているものを手に入れるために決まっていますよ」

ジスは島の関係者などではなく、封印を解く鍵を王国側が確実に手に入れるため投入された諜報部の人間だ。

ギフトによって島のことを考えて動いていると見せかけることができるため、選ばれたのだった。

今動いたのは、このタイミングが最善と判断したからだ。エリスとワイアーレを人質にとってしまえば、幸助がいくら強かろうがジスの言うことを聞くしなくなる。島に到着し兵士たちの援軍がすぐに期待でき、幸助が一人離れたこの場面以上の好機が以後来るかわからず動いた。

強さのランク的にいうとジスは平均Dの上位といったところだ。C一のエリスとの差は大きいのだが、エリスが遠距離を得意としていて格闘では駆け出しに勝てる程度の実力しかないことが、ジスにとって幸いした。

事前に準備していれば接近戦もわりと大丈夫なのだが、そんな準備をしていないエリスはあっさりと奇襲を受けてしまった。

「さあ早く飲ませなさい。なに毒ではないです。ただの睡眠薬ですよ。殺してしまったら人質としての役割を果たせなくなりますから」

ウィアーレに直接飲めと命じないのは、飲む振りをさせないためだ。

小瓶を受け取ったリーゼは謝りつつ、ウィアーレの口に小瓶を持っていく。ウィアーレも拒めばエリスの身が危ないとわかっているので、抵抗せず飲み込んだ。

こちらの薬は即効性はないが、半日以上眠らせる持続性を持っている。

小瓶の中身が減り、ウィアーレの喉が動き、しっかり飲んだことを確認したジスは次にエリスの飲ませるよう命じる。

エリスも抵抗らしい抵抗はできずに薬を飲まされた。

「飲ませたわよ。最後に私も飲めばいいのかしら」

「いや、リーゼには起きていてもらおう。三人とも寝ていたら帰ってきたワタセさんに怪しまれそうですし。」

次はエリシールさんの腕をロープで縛ってください。魔法を使われると厄介ですからね」

幸助にはここまでジスを怪しまずに戻ってきてもらう必要がある。ここまで戻ってきてもらい人質で動きを制限する。

遠目にジスたちの異変に気づき、逃げられでもしたらその後の捜索などが面倒なのだ。戦闘能力の高さから捕獲が困難になるのは目に見えていた。

「島の、人間の中に、内通者が、いたのか？」

リーゼにロープで腕を縛られつつ、口をなんとか動かしエリスは

聞く。

「はい、いますよ。エリシールさんに言ってもわからないでしょうけど、クレントさんって人がとある貴族に封印のことを話したのが始まりですね」

「クレントさんがどうして」

クレントという人物は外との物流を担当している。そのため島外に出ることもあり、島以外の暮らしに触れる機会が多い。外を見るうちに、徐々に島での暮らしに物足りなさを感じていき贅沢をしながらっていった。

思いを溜め込んで悶々とした日々を過ごし、ある時鍵を探す道具が反応した。これを利用すれば望んだ生活ができるようになる。即座にツテを頼って貴族まで話を持っていったのだ。

「誰でも望むこと、権力とお金のためです。」

クレントさんの提案はこちらとしても魅力的でした。うちの国は小さく立場は低いですからね、大きな力というのはとても魅力的なのです。魔物であれば捕らえ使役し、道具であれば研究し、周囲の国に対する力とする」

「…ふんっ、手に負える、ものだといいがな」

「ここに集めた兵は、わが国でも精鋭。ギフト持ちも多数います。早々後れを取ることなどあり得ませんよ」

物量によるごり押しは、竜などの例外を除けばこの世界でも通じる策だ。それを理解しているジスは自信を持って言った。

そろそろ葉に抵抗しきれなくなってきたエリスは目を閉じ、押し寄せる眠気を受け入れる。

ウィアーレが起きさえすれば、なんとか脱出の望みはあると考えながら。

エリスとワイアーレは眠り、ジスとリーゼは幸助の帰りを待つ。
エリスたちは岩を背に座らせ、毛布をかけ縛られているのを見せな
いようにして、休憩しているように見せかけられた。

エリガデン島への旅路（後書き）

感想と誤字指摘ありがとうございます

書き溜めた分のアップと書き進めることを優先しているため、修正は後回しにしています。書き溜めた分を消化したら修正したいと思います

進化

「ただいまー。あれ？ エリスさんたち寝てる？」

ジスの狙い通りに幸助は怪しまず皆の下へ戻ってきた。海を見ていて顔を背けていたリーゼの表情を見たり、エリスたちの様子を間近で見る事ができたら怪しんだだろうが、ジスはそんな暇は与えない。

エリスの隣に座っていたジスは、幸助が近づいてきて放していたナイフを再びエリスの首に当てる。

「動かないでください」

「なにしてんの！？」

「人質です」

にこやかな表情でジスは幸助に告げる。リーゼは済まなそうな顔で幸助を見ている。

「スパイだったのか？」

「おや？ ワタセさんも気づいていたのですか？」

「一度はジスさんとリゼスさんを疑ったよ。ないって判断したけど」

幸助はナイフから目を放さずに答える。

「見事に騙されたんだな」

「演技には自信があるんですよ。さて、リーゼ」

「なによ？」

ぶっきらぼうな返答にジスが気分を害した様子はない。そんな態

度を取るしかないと理解しており、気にしない余裕があるのだ。

それを見て幸助はリーゼは仲間ではなさそうだと、疑いを減らす。疑いを晴らさないのはこのやりとりも演技かもしれないと思ったからだ。

「空に魔法を放ちなさい。それで兵を呼び寄せるのです」
「……わかったわよ」

指示に従い、リーゼは空へと炎の魔法を放つ。

夕日に染まる空にその魔法は目立ちにくかったが、それでも気づく兵はいて、周囲の仲間たちを呼び集め、魔法の見た方角へと歩き出す。

集まってきた兵にジスは事情を説明し、幸助たちを拘束させる。精鋭という部分に違いはないようで、兵たちは無駄口を叩かず動いていた。

幸助とリーゼは武器も荷物も取り上げられ、ロープで縛られて連行される。着ているジャケットが特別なものとはわからなかったのか、それは取り上げられることはなかった。

先ほど歩いた道を辿り、幸助たちは村にやってきた。連れられた中にリーゼの姿を見つけ、村人たちは動揺を隠せない。リーゼが戻ってきたということは封印を解く鍵となる人物もいるということ、本当ならばリーゼの帰還はすごく嬉しい。だがこんな状況では喜べるはずもなく、悔しげな表情をしている村人もいる。村人に見送られつつ、兵たちが寝起きしている拠点に連れて行かれる。

そこで幸助とリーゼたち三人は別々に監禁される。リーゼたちは拘束されたまま見張りを立てられ、テントの一つに入れられる。幸助も似たようなものだが、ジスから強いという情報を得ている兵たちは手枷や重りなどの拘束に加え、定期的に痺れ薬を投与することで幸助を無力化した。

ここでジスや兵にとって予想外のことが起きる。それは幸助の薬に対する抵抗力だ。薬を投与されるたびに耐性を得ていつて、四度目に投与された時にはほとんど効かなくなっていた。短時間で耐性を得るなど想像の埒外なので、誰も怪しむことはなかった。

これはなにかのチャンスになり得ると幸助は薬が効いた演技を続ける。

夜が明けぐたりとしている幸助を担ぎ、兵たちは村の外に列を成す。並んだのは四十人で、残りは村人の見張りと船の護衛だ。

「そいつが鍵なのか」

「はい」

「そのようで」

三人の男の声を幸助は捉えた。一人はジスのもので、残り二人はわからない。少しだけ目を開き、確認すると三十才後半の飾りの多い鎧を着た騎士と四十才ほどの一般人男性のそばに、ジスがいた。おそらく四十才の男がクレントで、騎士が兵たちのトップにしてクレントがツテで繋がりを得た貴族の代理なのだろう。

「ジスといったな？ 鍵の確保ご苦労であった。ミシューエム様にそなたの功を伝えておこう」

「ありがたきお言葉」

一礼するジスに、騎士は頷きを返す。

騎士は兵に指示を出し、動かず目を閉じたままの幸助を台車に乗せる。薬が効き続けていると誤解した兵により、運ぶ際に邪魔になった拘束は解かれている。

「では早速封印の地に向かうか」

「出発！」

兵の一人の掛け声で、皆歩き出す。

着ている鎧がガチャガチャと鳴るだけでほかに音はなく、私語をするような兵は誰もいなかった。

既に封印の場所を確認していたようで、兵たちは道案内を必要とはしていない。

天気は曇り。行軍の兵たちには助かる天気だが、先行きの不安さを示しているようでもある。

ゆつくりとした行軍は四十分ほど続いて、周囲の光景は木々のない草原、そして草がまばらに生える荒地に変わっていった。

「あれが封印か」

騎士の視線の先には高さ三メートルの黒石の塊がある。それは綺麗な立方体で、台車に乗せられている幸助には位置的に見えないが見えていたら大きな墓石といった感想を持つ。

「はい。うちに古くから続くものでございます」

「あの形は自然物ではありえないな」

全員が封印まで二十メートルの位置まで近づくと、騎士が声を上げ止める。そこから兵を扇状に展開させ、封印が解け魔物が現れ暴れた時のために準備を行う。

「封印を解くには、鍵を近づけるだけでよかったのだったな？」

「はい。言い伝えではそうっております」

「誰か鍵を運んで、置いて来い」

騎士の指示に従い、兵二人が幸助の脇と足を持って、黒石のそばまで運んだ。

この時には幸助の痺れは完全に取りれており、こっそりと転移の準備を行っていた。転移先は村のすぐそばで、エリスたちの救出に向かうつもりなのだ。

転移するタイミングは封印が解けた後、封印されたものへの対応で村への注意が疎かになるだろうという判断からだ。

幸助を下ろした兵たちは素早くその場を離れる。

残された幸助は細かな振動を地面から感じ取る。それは徐々に大きくなっていき、黒石からピシリといった連続音を聞く。

やがて揺れは離れていた騎士たちも感じ取れるようになる。

「いよいよか」

「いよいよでございますな」

封印を利用したクレントも封印の解除には感慨深いものがあるように、目を細めて黒石を見ている。

皆の視線の先で、黒石全体から細かな欠片が落ちている。

不意に振動が止む。幸助も騎士たちもどうしたのかと思っていたところに、大音を立てて黒石が内側から破裂した。

砂埃の中に一つの影が揺れる。それは大きなものではなく、人間と同サイズの影。

近くにいた幸助は人の気配を感じ取っていた。その気配は、ただの人間とは思えないほど力強かった。

（封印されていたものは人間？　なんで人間が封印されていたか気になるけど、今は救出が最優先！）

幸助自身も砂埃に隠れている状態で　転移するにはちょうどよかった。

魔法を発動させたすぐ後に、男の声が上がる。

「復活だ！」

破裂音に負けなくらいの大音量で周囲に響く。魔物でも古代兵器でもない封印されていたものの正体に、騎士たちは驚きを隠せない。

土煙が収まり、現れたのは三十後半の屈強な美丈夫。白の短髪を逆立て、目には楽しげな色が浮かんでいる。自信に満ちた雰囲気纏っており、対峙するだけでただものではないという印象を受ける。

「さあーてっ戦おうか！」

続いた言葉に騎士たちはさらに驚く。

風となって吹きつける闘志に、否が応でも騎士や兵の緊張感が高まる。

「どういことだこれは！？」

騎士に怒鳴るように聞かれたクレントも首を傾げるしかない。当然だ。封印されたものが人間などとは知らなかったのだから。そんな疑問など関係ないと、封印されていた人間は一步踏み出す。

「ま、待て！ お前は何者なんだ！ それにどうして封印など！？」

止めようと手を前に突き出し騎士が問いかけた。

その問いに男は親指で自身を指し、名乗りを上げる。

「俺か？ 俺はセクラトクス！ いつか生まれるだろう強き者と戦うため封印を望み、ようやく復活した男だ！ 人呼んで巨人殺しのセクラトクス！」

「「「はあっ！？」」「」」

今日一番の驚きの声が周囲に響いた。

誰でも知っている古の英雄が目の前に現れたのだ。驚くという方が無理だった。

普通ならば世迷言だと決め付けるところだが、封印されていたというのと発せられるプレッシャーから疑うことすら思いつかない。

「さあやろうぜ？」

騎士たちの動揺など関係ないと、笑みを浮かべ突っ込んでくるセクラトクスに騎士たちは慌てて戦うために身構えた。

封印を解くために兵が出発した声を聞き、エリスたちは動き出す。薬の影響は抜け、体は動き意識もはっきりしている。ただ幸助と違って、拘束はされたままだ。

三人が置かれている状況は、テントの中に一まとめに座らされている状態だ。兵士も一人一緒に入っているが、どうにもできないだろうと三人への注意は散漫になっている。

だからエリスが小声でワイアーレに話しかけても気づくことはなかった。

ばれないようにぼそぼそと会話を続け、いつ動くか、どのように脱出するかを決めていった。

（頃合じゃな。ワイアーレやれ）
（わかった）

ワイアーレは小さく頷き、歪みを見張りにぶつける。兵は意識を歪まされ、気絶する。

エリスがワイアーレが起きていればなんとかなると考えたのは、

魔法と違い縛られていても歪みを使うことになんら制限がないと知っていたからだ。

ウィアーレが出して飛ばした歪みを見て、リーゼがなにか言いたそうな目を向けている。

「さて、縄を解くかの」

若い頃色々やんちゃしたおかげで、多少のぎこちなさはあるが縄抜け可能なのだ。

見張りが起きている状態ではさすがにばれるのでできないが、気絶させてしまえばこちらのものだ。

さっさと縄を外し、ウィアーレの縄も外してやる。

「ありがとう。体を自由に伸ばせるっていいね」

「そうじゃの。リーゼはどうする？ 私たちと一緒に脱出するか？」

「封印がどうなるか気になるから、一緒に行きたい」

「わかった。少し待っておれ。それと気絶させた方法に聞きたいことがあるじやろうが後回しにしてくれ」

すぐにリーゼの縄も解いている。

三人は静かに硬くなった体を解し、エリスの透視の魔法で周囲を探る。できるなら荷物を取り戻したかった。

荷物の位置と兵の位置を把握したエリスは、ウィアーレにいつでも歪みを飛ばせるように言って、魔法を使う。兵たちの鎧兜を真似た幻を自分たちに被せたのだ。

透視を併用しつつ、テントを出る。なるべく兵に会わないルートを進み、荷物が置かれているテントまで来た。

そのテントにはほかの荷物も置かれていて、見張りに兵が二人立っている。

「ウィアーレ、私たちがそばを通っても気がつかないようにさせることはできるか？」

「気絶させるんじゃないくて？」

「気絶させたら、倒れて注目が集まるじゃろ」

「ああ、そっか。この場合、認識を歪ませたらいいのかな？」

視界を歪ませたらすぐに気づかれるだろうと、正常な判断をできなくさせた方がいいのか聞く。それにエリスは頷く。

やることはウィアーレにとり憑いた歪みがベラッセンの人々にやったことと同じ。

気絶させることよりも難しいのだが、一度実験でやったことあるので、その時のことを思い出しつつ歪みを二つ地面に沿って飛ばす。

「上手くいった、かな？」

少し自信なさげに呟いた。

試してみると言ってみてリーゼが足下の小石を兵の目の前に投げる。

兵たちはなんの反応も見せずに目の前を見たままだった。

これは大丈夫そうだと判断し、三人は急いでテントの中に入る。自分たちの荷物を取り返し、幸助のものはエリスの足下に置かれた。

「転移で逃げるが、入り江から封印のある場所にいけるのかの？」

「大丈夫です」

「そうか、ならばさっさと逃げてしまおう」

足で幸助の荷物に触れたままエリスは転移を発動させる。

入り江に現れた三人は幸助の剣以外は隠し、封印のある場所へと急いで向かう。

リーゼは遠目に封印だったものを捉えた。

「封印が砕けてる」

「もともとはどんな形だったのじゃ？」

「黒い石でできた三メートルほどの立方体」

今や土台近く以外は砕け、周囲に散らばっているといった有様だ。さらに近づき、騎士たちに十分以上遅れて到着した三人が見たものは、たった一人以外は地に伏す人たち。

「……なにがあったのかな？」

「さあて、あの立っている者に聞いてみればわかるんじゃないかう」

ウィアーレとエリスの声を捉えたセクラトクスが振り返る。

「こいつらよりかは手応えがありそうだな？」

セクラトクスの視線の先にはエリスが。強者の気配を感じ取ったのだろう。

見られたエリスは背に冷たい汗を流している。目の前の男が何者かはわからないが、自身と同等かそれ以上の力を持つことはわかった。

「二人とも離れろ！」

ウィアーレとリーゼに怒鳴り、すぐに魔法の準備を始めた。それを見てやる気十分と、セクラトクスはニヤリと笑みを浮かべた。

村のすぐそばに転移した幸助は、兵たちが騒がしいのに気づいた。木陰に隠れて耳を澄ませ内容を聞き取る。

内容は三人がいなくなったということだ。

（自力で逃げたのか。どこに行っただろう？）

救出しなくていいのならば、村には用事はなく、三人の行き先を考える。

考えられるのは二通り。隠れるか、封印のある場所に向かうか。幸助を置いて島から出たとは考えにくい。

リーゼが一緒ならば封印を気にするだろうということと、隠れ場所が不明ということから再度封印のあった場所へと向かうことにした。

来た道を走り、十分もかからずに戻ってきた幸助は、前方にはったシールドを破られたエリスがセクラトクスに殴り飛ばされるところを見ることになる。

湧いた怒りを胸に抱き、倒れたエリスに駆け寄った。

セクラトクスの視線が強く刺さることを感じ取りながら、エリスを優先する幸助はそれを無視する。

「大丈夫っ？」

久々にダメージを受け、赤くなった頬を撫でつつ顔を顰めるエリスを抱き起こす。

「おお、コースケか。たいしてダメージは受けておらんよ。シールドで威力は落ちていたからな。

しかしお主、今までどこにいた？ここに連れてこられていたはずじゃろうに」

「薬の効果が抜けたんで、封印が解けると同時に転移で村まで移動

したんだ。エリスさんたちを助けようと思ってたんだけど、入れ違いになった」

「そうみたいじゃな」

幸助の手を借り、エリスは立ち上がる。

「見つけた！ 見つけたぞ！ お前がそうなんだろう！」

無視されていたセクラトクスが喜びに満ちた表情で幸助を指差し、叫ぶ。

「お前が竜殺しだな！」

湧き上がる興奮を抑えきれないと壮絶な笑みを浮かべる。自身を越える力量を感じ取り、確信した。

動揺したのはリーゼだけで、自分以外は誰も驚いていないことからセクラトクスの言葉が本当だと悟る。

「違うと言ったら？」

興奮するセクラトクスとは対照的に、幸助は冷ややかに返す。

「言葉なんか関係ねえ！ 戦ってみりゃわかるだろ！」

「どうする？」

エリスの問いに幸助は頷きを返す。

「ほう、珍しい。戦うのか。断りの言葉が出るものだとばかり」

「エリスさんが殴られた借りは返さないかね」

一番世話になっていて、仲良くなったエリスを殴られたことに怒っている。表面上は冷静に見えるが、心の中は怒りが燃え盛っていた。

幸助の目にはいつになく激しい闘志が宿っている。その視線を受けてセクラトクスの熱意はさらに高揚する。

熱くなりすぎていると判断したエリスは、幸助の後頭部を軽く叩く。

「少し落ち着け。思わぬ不覚を取るぞ？ 並外れた力はあるようだが、コースケには劣るさ。ぶん殴って、あいつの頭も冷してこい」

そう言ってエリスはウィアーレたちのところへと歩いていく。かわりに剣の重たさにふらつくウィアーレが近づく。

「はい、これ」

「ありがとう」

「えっと、頑張った。……気の利いたこと言えなくてごめん」

気落ちするウィアーレの肩を軽く叩いて、エリスたちのところへ戻るよう促す。

幸助は剣を抜き、セクラトクスへと近づく。

セクラトクスは転がっている兵が持っていた戦斧を拾い、肩に抱える。

二人の距離は二メートルまで近づき、視線が絡み合う。

今ここに古き伝説と最も新しい伝説の闘いが始まろうとしていた。

幸助とセクラトクスは同時に勢いよく一步踏み出し、剣と斧をぶつけ合う。踏み込みで地面が抉れ、ぶつかり合ったことで出て散った火花を気にせず、そのまま押し合う。

力は幸助の方が上で、セクラトクスは押し切られた形となる。そ

れに嬉しげな表情となる。

「いいね　いいな！」

笑いながら斧を真横に振るう。幸助はなにも答えず、下がって避ける。風圧で髪が揺れる。下がった幸助を追い歩を進め、セクラトクスは斧を切り返す。

幸助はその場に留まり、剣を持っていない左手で迫る斧を止める。先ほどの力比べで腕一本でも止めることが可能と読んだのだ。

読みは当たり、少々重い衝撃を感じつつも斧は止まる。動きを止める形になったセクラトクスへと、右手の剣を振るう。

「おっと！」

セクラトクスはあっさりと武器から手を放し、バックステップで剣を避けた。そして落ちている長剣を拾う。兵たちが落とした武器がそこらに散らばっており、一つの武器に執着する必要はないのだ。掴んでいた斧を捨て、幸助はセクラトクスへと突っ込む。待ってられないとセクラトクスも突っ込み、再び武器がぶつかり火花が散った。

ギンッギンッと金属のぶつかる音が響く。一撃一撃が常人にとって死ぬ威力を秘めている。それが当たり前のように繰り返されている。

情勢は幸助の有利だ。いまだ一撃も喰らわず、二度だけだが剣を当てている。

肩と頬から少しの血を流しているセクラトクスは、戦意をなくす様子はまったく見せず、それどころか勢いは増すばかりだ。

「粘るな」

エリスの言葉にワイアーレが首を傾げる。

「そうなの？ 私は闘いのことはわからないから、少しコースケさんが押してるのかなって思うだけなんだけど」

「ワタセさんが竜殺しというのなら、たしかに相手は粘っていると思う」

リーゼはエリスに同意なのだろう。

エリスは幸助のステータスを知っており、セクラトクスのステータスもなんとなく把握している。自分よりも強いが、そこまで離れてもいない。エリスが得意な距離で戦えば十分に勝ちを拾える相手だと。

その差から考えて、幸助の一方的展開になると思っていたのだ。だが結果はセクラトクスが押し負けているものの、追従する闘いを見せている。

「封印されていたものが人間を強化するものだったのかもしれない。竜殺しに追従する強さを手に入れられるのじゃ、危険視されて封印されてもおかしくはなからう」

「ですが封印は解けと言いつつ残っています。危険視しているなら解けとは言わないはず」

封印が解けてセクラトクスが名乗りを上げたところを見ていないため、エリスたちは事情をわかっていない。

「……参考になるかと思って称号を読み取ってみたんだけど」

「どんな称号を持っておった？」

「巨人殺しと……」

そこでワイアーレは止まる。さらに称号を読み取り、幸助と戦っ

ている人物の見当がついて、それが信じられないのだ。

「巨人殺しか、珍しいものを持っておるな。あの強さとその称号。まるで大昔の英雄みたいではないか」

「たぶん当たってるよ、それ。残るもう一つの称号は古の大英雄」

三人の間に静かな時間が流れる。

確固たる証拠があるにもかかわらず、ウィアーレと同じく聞いたものが信じられないのだ。

三人の視線がセクラトクスに集中する。

「……なんじゃと？」

「ちよっと待って！　じゃあ封印されていたものって!？」

「おそらくセクラトクスなんじゃないかな」

いまだ半信半疑といった感じでウィアーレが言う。

「どうしてそんな大物がうちの島に封印なんかされてるの!？」

「さあてなあ」

まさか強者と戦いたいという理由だけで封印を望んだとは、欠片も予想できないでいる。

封印をコールドスリープのように使う者がいるとは三人とも聞いたことがない。それゆえに推測できないのだ。

「あれがセクラトクスだとすると、粘るのも納得ものだわな。

平均Cのステータスと戦いの経験が合わさって、あの結果なのじやろう」

セクラトクスの正体がわかり、エリスは余裕を持てた。さすがに

歴史に名を刻んだ英雄といえど、竜殺しには敵うまいと考えたのだ。実際、目の前で幸助が押している様子を見ていることも、そんな考えを後押ししている。

エリスの余裕を見て、ワイアーレも気持ちにゆとりが生まれる。大丈夫、もう少ししたら終わると思えてきた。

だが二人の思いとは裏腹に、闘っている幸助は余裕をなくしていた。早く倒さないとやばいといった、嫌な予感が戦闘中ずっと頭から離れないのだ。殺すつもりはないが、大怪我くらいはさせるといった心持ちで攻め、効果が上がらないことに焦りが募っていく。

セクラトクスの闘い方が上手いということもあるが、幸助の対人戦の経験の少なさが影響もしている。

その経験の少なさが現時点での幸助の弱点だ。さらにもう一つ弱点はあり、実力が伯仲している戦闘を一度もしていないということも弱点だ。今までは格下の相手ばかりで、追従してくる相手にやりづらさを感じている。

若いエリスとの戦いでも苦戦はしたが、あれは勝つことを目的とはしていない耐久戦といった感じだ。格上との出会いといえば海竜との遭遇になる。しかし闘うことはなかったので経験の蓄積になどなりはしない。

逆にセクラトクスは格上との闘いは慣れている。演劇にも、称号の由来にもなっている巨人との戦いもセクラトクスの方が格下だったのだ。

二つの弱点とセクラトクスの実力が合わさり、圧倒できないという状況になっている。

けれどそんな状況でも幸助に有利というのは事実だ。

幾度目かの剣の打ち合いで、セクラトクスの手を痺れさせ、握りを甘くさせ剣を弾く。がら空きとなったセクラトクスの胴体に、蹴りを放ち三メートルほど吹っ飛ばした。

「強いな。俺が闘った中で一番の強さだ！」

ダメージはあるのだろうが感じさせない動きで立ち上がる。

「いい加減諦めるか、倒れるかしてくれない？」

早期決着を願いつつも、それを感じさせずに言う。いまだ予感
は治まっていないのだ。

「諦める？ 倒れる？ 馬鹿言っちゃいけねえな！ まだ俺の全
てを見せてないぜ！」

セクラトクスは右の拳を腰の辺りに持っていき、左手で右手首を
掴む。力が右拳に集中していき赤い燐光が拳を包む。準備が整った
のか左手を離し、幸助へと突っ込んでいく。

自慢の一撃なのだろうと幸助は推測し、それを受けければ諦める
のではないかとその場に腰を据え、両手を重ねて突き出す。

そこにセクラトクスは右拳を叩きつけた。

それは称号巨人殺しを得て使えるようになった、セクラトクスの
必殺技と言っている一撃。巨人の一撃と呼ばれるもので、威力を増
大させるというシンプルなものながら、ステータスの高さもあいま
って侮れない攻撃となっている。

幸助はスタンっと両手に重い衝撃を受ける。受けた衝撃に踏ん張
りがきかず、じりじりと下がっていく。それでも耐え切った。

「耐えたぞ！ これでもまだ続けるのか？」

両手に感じる痛みを隠して問う。嫌な予感はこれではない。耐え
切れるものに対して警告が発せられるはずはない。

「あれを受けてなんらダメージを受けたように見えないのはすごい

な！ だからこそ楽しいんだがな！ これからが本番だ！」

そう言っで一瞬間が空き、セクラトクスから発せられるプレッシャーが段違いのものとなる。少し離れた位置で見ていた三人は、プレッシャーに押されるように一歩下がる。

一瞬の間になにがあつたのか、それを知るのはセクラトクス自身とウィアーレのみだ。

幸助の予感はいまだと警告を発している。これを予感していたのだと、この状態にさせてはいけなかったのだと。

セクラトクスがなにをしたのか？ 称号を換えたのだ。巨人殺しから古の大英雄へと。

それに合わせてステータスも大きく上がっていた。先ほどまでが平均C。今は平均Bと跳ね上がっていた。

「再開だ！」

宿った力に満足した笑みを浮かべて、幸助へと走る。

幸助も三人も一瞬、セクラトクスを見失った。それほどまでに速い踏み込みだった。

気づいた時には幸助の目の前にいて、幸助はギリギリのところまで攻撃を防ぐことができた。

一際大きな火花と剣の破片が飛ぶ。

「ぐうつ」

歯を食いしばり、押し合いに耐える幸助。力を入れても押し切れない、むしろ押されているのだ。

押し合いは続き、両者の持つ剣から小さくひび割れる音が聞こえてくる。剣の方が耐え切れなくなってきた。それでも押し合いが止まることなく、やがて音を立てて剣が折れた。

前のめりになる幸助と、その勢いを利用して頭突きを仕掛けるセクラトクス。

「おらっ！」

「がっ!?!」

大きな衝撃が額に感じられ、幸助がのけぞる。

その隙を逃すセクラトクスではなく、使い物にならない剣を放し、連続して拳を振るう。

防御する間もなく幸助は拳を喰らっていき、皮膚が裂け血が流れ、たしかなダメージを負っていく。

幸助も剣を捨て反撃し、攻撃を当てていく。だがセクラトクスに効いた様子はない。

あつという間に形勢は逆転し、幸助不利となっていく。

ステータスが劣っている状態でも闘えていたセクラトクスが、幸助以上の力を手に入れたのだ。こうなるのは当然の流れだ。

この様子を見てウィアーレは泣きそうな表情を浮かべ、リーゼは心配し、エリスは焦る。幸助をフォローしたいがタイミングを計れず、手をこまねいている間にも幸助はぼろぼろになっていく。

「本気を出せよ」

「十分、本気、だ！」

片膝を地につけ、息を切らせながら答える。同時にナイフを投げるも、セクラトクスは容易く避けた。

「いや違う！ お前俺を殺そうとしてないだろ。殺意の籠っていない攻撃なんぞ効くかよ！」

効いていないことはないのだが、本来の威力が出ていないことも

たしかだ。

この世界に来て一年以上経ち、生物を殺すということの抵抗は薄れている。しかしいまだ人を殺すということは禁忌として幸助の中にある。そんな幸助に殺意を込めろといったところでできるわけではない。

黙ったまま変わる気配のない幸助を見て、セクラトクスはつまらなさそうに鼻を鳴らす。命がけの戦いをしたいセクラトクスにとって、本気を出さない幸助は先ほどまでと違ってつまらない相手に思えている。

「死にかければ考えも変わるだろ」

猛攻が再び始まる。

幸助の怪我は増し、動きも鈍り、なすがままになっていく。無理矢理突き出した拳も当たらず、カウンターを喰らった。

そしてセクラトクスの勢いののった拳が、幸助の胸にのめり込み、幸助を十メートル吹っ飛ばした。

骨の折れる音を聞き、骨の折れた痛みと肺に刺さる痛みを感じ、幸助の意識は遠のいていく。

エリスは幸助の名を叫び、ワイアーレとリーゼは悲鳴を上げる。

受身も取れずに地面に背中から落ち転がった幸助に、治療のため近づこうとしたエリスが足を止める。セクラトクスが闘いの邪魔だと止めたわけではない。

「なんじゃこれは？」

足を止めた原因は、幸助から吹き出る黒い風にあった。

その風は幸助から出て、幸助へと帰っていく。幸助を繭のように包み、覆い隠していく。

すぐに繭は黒い卵となり、外界から完全に幸助を隠した。

それをセクラトクスは期待の表情で見て、エリスたちは不安の表情で見ている。

やがて卵にひびがはいってき、ある程度広がるといっきに砕けた。

「があああああああっ！」

人ではなく、獣の雄叫びを上げて負っていた怪我はどこにもない幸助らしきものが現れた。

雄叫びは物理的な衝撃を周囲に放つ。セクラトクスは余裕の表情で立っているが、エリスたちはその場で踏ん張らなければ転がっていたかもしれない。

同時にエリスたちはその咆哮に恐怖し体を振るわせる。あれが幸助だとわかつてはいても、自分たちの命を容易く奪える存在だと本能が理解した。

皮膚は黒く染まり、髪は鉛色、両腕は黒鱗でできたガントレットが装着され、指先には鋭い爪。両足にも似たような鱗製のグリーブを履いており、指先には三本の爪、踵にも一本の爪があり、しっかりと地面を掴んでいる。腰の後ろには一メートル弱の黒色の尾。一番目立っているのが、額に生えた黒水晶らしき角だ。

目には変化はないのだが光がなく、しっかりと意識を保っているのか怪しい。

こんなことになったのは幸助がこの世界に来て、これまで力を溜め込みすぎたせいだ。獣人の村の時のように大きく力を使うことはあったが、そんなことは稀といい。神域に入ったり、武闘大会に出たりもしたが、それらでは力の消費は少なかった。使う分よりも溜まる分の方が多かった。

使われない力は幸助の中に溜まっていき凝縮され、爆発する日を待っていた。

そうして今日、命の危機に直面し力を抑えていた理性は沈黙、溢

れ暴れる力は制御されることなく幸助に新たな力を与えたのだった。竜を殺し幸助に宿った力は人が持つには大きなものだ。誰でも持て余すものだ。遅かれ早かれ、これは起きたのだろう。

同時刻、遠く離れた地で、幸助を見ていたミタラムがこの変化を目にした途端意識を失った。未来を見ている時と同じような状態になっており、一緒に幸助の様子を見ていた神々は幸助とミタラムの変化に慌てることしかできないでいた。

「コー……スケ？」

ふらりと一歩踏み出した幸助に、エリスが躊躇いつつ声をかけるも反応はない。

聞こえなかったかのように幸助はセクラトクスへと歩を進めていく。

ある程度まで近づくと、セクラトクスが見せた踏み込みに勝るとも劣らない速度でいっきに接近し、拳を振りぬく。

それになんとか反応したセクラトクスは、回避は間に合わないと防御を選ぶ。腕をクロスさせ、幸助の拳を受ける。衝撃は凄まじく、受けた格好のまま、地面を滑る。腕は痺れて、あるはずの痛みが感じられない。

その一撃には先ほどまでであった手加減が皆無で、まさに全力といえるものだ。幸助に殺す気が生まれたわけではない。ただ目の前にいる敵を沈黙させるということのみ頭にある。理性がない状態で、獣性に引きずられた形なのだ。

これこそ自分の求めていたものと、セクラトクスは嬉々として応戦する。

殴り、殴られ、肉を打つ音が響き、血が飛ぶ。

二人が動いた、大地が揺れ、空気が震え、とても二人が闘っているとは思えない光景となっている。

この戦闘の影響は遠く離れた村にも伝わっている。村人たちも兵たちも封印が解けたと勘違いしていた。村人は何事もなく事態が収拾することを祈り、兵たちは仲間の無事を祈る。

二人の闘いは、人の範囲を超え、エリスが手出しできない域にある。思い出されるのはボルドスと共に黒竜に挑んだ時のこと。あの時にもなすべなく、有効な戦果を上げることなく逃げることでしかできなかった。当時感じたプレッシャーと同等のものを今の幸助からエリスは感じ取っている。

闘いは暴走している幸助が押し返した状態だ。

高い能力を確かな技術と勘で扱うセクラトクスに対し、技術などどこにもないただ力を振るう幸助。

普通に考えると、猪突猛進ともいえる幸助をセクラトクスがいなくて戦いは終わるのだが、そんな状況には見えない。技術はなくとも力と速さはセクラトクス以上で、その二つのみでセクラトクスと渡り合っていた。

セクラトクスも楽しがって足を止めての殴り合いといった様相になっており、こうなってくると決着は体力次第。

体力でどちらが有利かというと、幸助に分がある。一年以上溜め続けた力は伊達ではないのだ。

闘いの余波で、これまでも巻き込まれていた兵たちの残りが離れた場所へと蹴飛ばされていく。

次第にセクラトクスの攻撃回数が減り、ついに決定打が放たれた。満足げな顔で吹っ飛ばされ、十メートル近く転がっていった。全力を出して闘えたのだから、負けたとしてもセクラトクスにとっては大満足な戦闘だったのだ。

いかなる未来

「終わったか」

「ようやくだね」

予想外の闘いが終わり、エリスとワイアーレはほうつと安堵の息を吐く。リーゼは目の前で起きた人外対決に放心状態で言葉もない。そんなエリスたちの考えを裏切るように、幸助の動きは止まらない。暴走した状態なのだ、対応していたセクラトクスがいなくなったところで止まるわけではない。相手がなくなったことで、どのように動くかわからない状態だ。つまりはエリスたちに危険が及ぶということもありえる。

周囲にあるもの、兵たちがいなくなり、幸助の視線がエリスたちに向く。相変わらずの光のない目で、いまだ正気を取り戻していないのだとわかる。

やばいかもしれないと、エリスが逃亡用のために転移魔法を準備を始める。

エリスたちへと歩こうとして、幸助の動きが鈍る。どこか苦しげな唸り声を出し、その場に立ち尽くす。

「どうしたのかしら？」

リーゼの問いに二人は答えることができず、幸助を見守る。

すると幸助の着ているジャケットが鷹へと変化し、エリスたちの元へ飛んでくる。足下に降り立った鷹は人間の子供へとさらに姿を変えた。

エリスとワイアーレは、この子供は話に聞いたリンではないかと思いつく。

「リン君なのかな？」

ウィアーレの問いに、少し苦しげなリンがこくんと頷き、視線をエリスとウィアーレに向ける。

「お姉さんたちに頼みがあるんだ」

「なんじゃ？ コースケに関する事とか？」

「うん。お兄さんを止めたいから協力して」

「止められるのか！？」

「僕一人じゃ無理だけど、お姉さんたちとさっきまで闘ってた人の協力があれば」

「あやつの？」

エリスが顔を顰めた。好感を持っている人物ではないことと、協力など得られるのかという思いがある。

「どうしてもあやつの力を借りなければ駄目か？」

「んーお姉さんたちの誰かが、お兄さんを気絶させることができるならいなくても大丈夫」

「ウィアーレ、歪みを飛ばしてコースケを気絶させてくれ」

わかったと頷き、ウィアーレは歪みを飛ばす。歪みは幸助に当たり消える。

「駄目。弾かれた」

兵に使った時は体の中に染み込む様が見えていたが、今飛ばした歪みは染み込まずに表面で弾けて消えていった。

エリスはウィアーレの歪み以外に気絶させる方法が思い浮かばない。気絶させるとなると攻撃魔法が一番有効だろうが、かつて黒竜

にほとんど効かなかったことをよく覚えていて、今の状態の幸助にも有効な効果は望めそうにないと予想していた。

歪みをぶつけたことで刺激を与えたことになり、幸助の注意が再びエリスたちに向く。それだけで恐怖から周囲の気温が下がったように感じられた。ゆつくりと近づいてこようとしている幸助の周囲に、エリスは魔法で土人形を生み出し、幸助へと歩かせる。それに幸助は反応し、土人形を潰していく。

「……仕方ないか。起こす前に聞いておきたいことがある。コースケがああなった原因を知らないかということと、セクラトクスになにをさせたいのか。いや後者は聞くまでもないか」

気絶させる役目なのだろうと言いながら気づいた。この場にいる者で一番高い攻撃力を持っているのだ。

聞いたばかりのことが頭から抜け落ちるほど、エリスは大きな焦りを抱いているのだろう。

「原因は、生存本能の過剰反応と力の発散ができてなかったこと。命の危機に溜め込んだ力を使って難を逃れようとしたんだけど、力を溜めすぎてたんだ。意識をなくした状態で、力の制御なんかできるわけもなく暴走してる。

このまま暴れてお姉さん達を傷つけたら、お兄さん絶対悲しむから止めたいんだ!」

「コースケのことを大事に思っておるのじゃな」

リンから苦しい表情が減り、かわりに照れが浮かんだ。そんなリンにエリスたちは笑みを浮かべた。すぐに引き締めたが。

「してコースケを気絶させた後はどうする?」

「気絶までいけば後は僕が力を吸い取って、元の状態に戻すよ。今

も力を吸い取って動きを鈍くしてるんだ。

元々お兄さんから力を吸い取るって役割も持っているんだよ僕」

「吸い取って現状のようなことにならせないためか？」

「うん。結局はなっちゃったけどね」

エリスに脳裏に、今後神たちがなんらかのアクションを起こすかもしれないと浮かんだ。

その思いは当たっていた。下級神クラスとはいえ、神の域に届いて見せたのだ。コーホックたちは慌てて今後のことを話し合っている。

「今は神のことなど考えても仕方ない。セクラトクスを起こすぞ！」

エリスたちがリンの話を聞いているうちに、リーゼがセクラトクスを運んできていた。

倒れているセクラトクスに治癒の魔法を使い、頬を殴って起こす。殴られた仕返しも兼ねていた。

怪我人兼英雄に対してのそんな行動にウィアーレとリーゼは引いている。

「なんだか頬が痛いんだが」

「気にするな」

エリスは一言で切って捨て、手短に用件を伝える。

こうなったのはセクラトクスにも責任があると締めくくる。

「まあ、手伝うのはかまわんさ。俺がやることはまた闘うことではないんだろう？」

リンは頷きを返す。

「ただな？ 二つほど問題がある」

なんだろうと四人は首を傾げる。

「一つ目は、先ほどまでの強さは今俺の中にはないということ」
「どういうことですか？」

あれほどまでの強さを見せておいて、ということなのだろうとリーゼが聞く。

「さっきまでの強さは称号で強化していたものだ。

効果としては俺の知名度の高さを強さに変換するというもので、一日に一回一時間のみ強化できる。さっき気絶したことで効果が切れたことになったんだ。使うには一日待つ必要がある。

今俺に求めてられている役割なら巨人殺しの称号の方が向いているんだが、既に一度称号換えていて変更もできん」

セクラトクスが考えているのは巨人の一撃での攻撃だ。今のまま攻撃するより、あちらの方が威力は高い。

ウィアーレが勢いよく一歩進み出る。

「それなら私が！ 私は称号変更できるギフト持ちですから！ 早速換えます」

すぐにウィアーレが称号を換え、セクラトクスはそれを確認した。

「これで一つ目の問題は解決したが、もう一つは俺の攻撃が当たってことだ。殴りかかって素直に当たってくれると思うか？」

「効くかわからんが、魔法で動きは止めてみるが」

準備ができるならば対竜用に習得したステータスを落す魔法が使えるが、時間も道具もないためその魔法は使えない。

「僕も力をもっと吸って力を下げるよ」

「私は応援くらいしかできないよ」

「私もそうですね」

ウィアーレとリーゼはなにかしようとしても邪魔でしかないと自覚している。

「じゃあ、僕から始めるよ」

そう言ってリンは集中し始める。その横でセクラトクスが力を溜め始め、エリスも魔法を使う準備を始めている。

動きを鈍らせていた幸助はさらに重圧がかかったように動作が重たげなものになる。

「ううつ」

「なんだか苦しそうだけど大丈夫？」

成果が出始めると同時に顔を顰めるリン。

ウィアーレの問いかけに頷いて大丈夫だと示す。だが実のところ大丈夫とはいえない状態だった。

本来ならばリンが今のようになれるのは十年単位の時間を必要としていた。それを幸助の助けになるために無理して実体を出していた。

それだけならば問題はなかった。苦しげな理由はもう一つあり、それは限界を超えた力の吸収にある。例えば植物に水や栄養剤のやりすぎは成長に悪い。それと同じで、ある程度の力の吸収はリンに

とっていいことだが、今の吸収量は栄養過多となっている。

リンは今ここで自分が倒れると幸助を助けられないという思いだけで、立ち続け、力を吸収していた。

その無理のおかげで平均B+のステータスが一時的にB-まで下がっている。

「絡みつけ鉄鎖！」

地面から生えた金属製の鎖が、何本も幸助に絡みつく。若いエリスが幸助に使った土の鎖の上位に当たる魔法で、幸助の動きを封じる。

リンの様子から何度も挑戦できることではないとエリスは推測する。それはセクラトクスも察していて、力を限界まで高め、確実に当てられるタイミングを計っている。

リンの我慢も気合も限界に達しようとしていた時、セクラトクスが動く。

「うらあっ！」

幸助の動きを読んで拳を放つ。セクラトクスの右拳は吸い込まれるように、幸助のこめかみ辺りに当たった。

真正面から頑丈さを抜いてダメージを与えられるとは最初から思っておらず、脳を揺らすことで意識を刈り取ろうとした。

弱者でも打ち所が良ければ、強者を殺すことは不可能でも倒すことは可能と知っていた。

セクラトクスは小さく舌打ちをする。少しだけ狙いがずれたのだ。拳がこめかみに当たった状態で一秒五秒と過ぎていく。誰もが動けず長く感じた十秒が過ぎた時、幸助が崩れ落ちた。

エリスたちがほうつと安堵の溜息を吐く中、リンだけは幸助に走り寄り、小さな手を幸助の背に当てる。

最後の一踏ん張りで、いっきに力を吸っていく。皮膚の黒さが薄くなっていき、角や手足の防具や尻尾の先から青い光の粒となっていく。その粒はリンへと集まっていく。代わりにリンの顔色がさらに悪くなる。

リンの姿が鷹へと戻る。人型でいるよりは楽なのだ。

一分ほどで幸助の姿が元の人間のものへ戻り、リンは青い光の中に姿を隠す。光が収まるとそこには鷹の姿はなく、鷹よりも少し大きな青い竜が幸助の背中に乗っていた。

竜は小さく鳴くと、力なく倒れ伏し濃紺のジャケットへと変わった。

リンが竜に変化したのは力を一度に吸い過ぎたせいだ。大量吸収した力が運良く進化へと使われることになった。一步間違えば、吸収した力を暴発させ死んでいた。

幸助の力のほとんどは竜から得たものだ。それを多く吸い取ったリンはその影響を強く受けたのだ。

後に精霊竜と呼ばれる竜はこうして生まれた。

といっても無理しすぎたリンが竜として動くようになるのは三十年という長い月日を要する。

特に今は休息のため深い眠りにについているため、これまでできていた鷹への変化もできなくなっている。

防具としての格が下がったかというところでもなく、リンが強くなったため防具としても強化されている。

鋼を上回る硬度に、魔法にも強くなっていて、軽さと柔軟性服は布と同じ。そこらの一級品を超える一品となった。

ただしこれを着ている幸助が、素でそこらの雑魚の攻撃を受け付けないので、あって困らないという程度の防具になってしまっている。

リンが眠りにつき、幸助も元に戻って眠っている。これで本当に

終わったと皆、その場に座り込む。セクラトクスだけ若干の余裕を残しているのはさすがといえる。

周囲は元々荒れていたが、さらに荒れている。地に伏していた兵たちは戦いの影響で飛ばされ散らばっており、土台が残っていた封印は全部砕けていて、地面もところどころ砕け抉れていた。

皆休みたく思っていて、村に戻ろうとして止まる。兵がいてまともに休めそうにないと小船を借りた漁村まで戻ろうということになる。

転移で飛ばうと提案したエリスに皆集まる。幸助はワイアーレとリーゼが二人がかりで運んでいる。

「お前も来るのか」

近寄ってきたセクラトクスにエリスが迷惑そうな顔を向ける。

「いいじゃねえか。竜殺しを止めるの手伝ってやったらう」

「……仕方ないのう」

本当に嫌そうに言う。このまま残して、これまでのことを話されても困ると渋々了承した。

皆が集まったことを確認し、エリスは漁村に転移する。

セクラトクスはすぐに眠り、女三人は幸助の世話を少しした後ソファーや椅子に座り眠気に負けて眠る。捕まっていた時、眠り心地が悪く、よく眠れていなかったのだ。

五人が寝ている間に島では、異変が治まり封印の様子を見に行った兵によって騎士たちが回収されていた。

無事な者はおらず、軽傷の者も少ない。皆どこかしら軽くない怪我を負っており、中には死者もいた。人外の闘いに無防備な姿で巻

き込まれたのだから当然といえるのだろう。

ジスは重傷で腕一本失くし、一般人のクレントは巻き込まれて生きていられるはずもなく死亡していた。

兵たちはなにがあったのか調査していく。目的は、封印を解いて封印されていたものを回収することだ。回収すべきものが見当たらないので、このまま被害だけ受けて帰れば叱責は必定。せめてどうなったかの調査はやらなければならないことだった。

その調査で、封印されていたのはセクラトクスで、その英雄と互角に戦っていた幸助のことを兵たちは知る。二人が闘っている時に起きた兵が何人かいたのだ。巻き込まれて再び気絶する羽目になっていたが。住居と強いということ以外に幸助の情報が得られなかったのは、兵士たちにとっては不満があったが、幸助にとって幸運だった。

生きていた騎士はこの情報のみを持って主の下へ戻る。

これを聞いた主はクワジット王に報告し、幸助とセクラトクスの入手を提案する。王もそれに即頷く。高い能力を持った人材を喉から手が出るほど欲しているのだ。

セクラトクスはその名声も利用できるし、能力の高さも保障されている。英雄が国にいて王に従っているというだけで、一つのステータスになる。他国に出張して指導の一つでもしてもらおうというのは、外交に役立つカードになるだろう。

幸助の方は名声はないが、戦闘能力の高さだけでも十分に魅力的だ。

この二人を手に入れるために国が取った手段は、兵の派遣と賞金首として冒険者ギルドに登録することだった。もちろん生きて捕らえることを絶対条件にしている。国の兵に手を出し、死者すら出した罪人という名分がある。賞金首とするのに迷いはなかった。

英雄やそれに比する実力者といえども、小国といえど国一つと戦うことは無謀だ。王たちは三ヶ月もせずに、二人が自分たちの目の

前に現れるだろうと考えていた。

しかしそれは実現しなかった。兵の派遣をしようとした時、思っ
ていなかったところからストップがかかったのだ。

ストップかけたのはコウマ国。ペレレ諸島でも上から数えた方が
早い大国からのストップに、クワジット王国は文句も言えずにいた。

コウマ国が動いたのはルビダシア家が原因だ。見覚えのある名前
が賞金首になっているのだ、ということか気になって問い合わせ
たのだった。ルビダシア家は幸助に借りがあるが、それを恩に思っ
て有罪を取り消そうとしたわけではない。本当に罪を犯したのなら
庇う気はない。ただどうして賞金首になったのか詳細を知りたかつ
たのだ。

クワジット国にとっては詳細を知られるのは避けたかった。見つ
けた高能力の人材を他国に取られるかもしれない。罪人とした経緯
がいいがかりに近い。たった二人に精鋭が一方的に負けたという恥
も知られたくない。封印を解く時の幸助の扱いもマイナスだろう。

大国へのプレッシャーと後ろめたさが態度に出て、コウマの使者
は怪しんで疑いを抱く。堂々としていれば案外スムーズに調査が終
わったかもしれないのだが。

そういった腹芸を容易く行えないから小国のままなのだろう。

調査は詳しく行われ、エリガデン島にも使者は赴き話を聞く。そ
れにクワジット兵も同行し、余計なことを喋らせないように目を光
らせたが、そんなものは無視したリーゼやそんなリーゼに後押しさ
れた村人が全て話したため、クワジットの行いは全てコウマに知ら
れることとなった。

結果、幸助とセクラトクスの賞金は取り下げられる。セクラトク
スは少し無理があるかもしれないが、幸助は無実だと判明したのだ。
むしろ被害者だろう。依頼で来たのに、人質を取られて利用された
のだから罪に問えない。

兵たちの怪我は事故として扱われ、セクラトクスの賞金もそのついでに取り下げられたのだ。セクラトクスの罪状について調査すれば、その過程でクワジットの行ったことも明らかにする。国としての弱みを晒すわけにはいかず、セクラトクスも無罪とされたのだ。

クワジット国は幸助に近づくなどコウマ国から命じられた。これに対してクワジット側はさすがに横暴だと意見を出したのだが、輸出入制限の一言で意見を取り消さざるを得なかった。コウマから買う物売る物は少なくなく、それに制限がかかるとクワジットとしては痛いものがある。制限された分を他国と取引しようとしても、ペレレ諸島内ではコウマの機嫌を損ねたくない国は取引を拒むだろう。諸島外では経費がかかりすぎて、国の予算に大きなダメージがいく。この命令は、今後クワジットがちょっかい出して幸助が困るかもしれないと考えたルビダシア家が、王に頼んで出してもらったのだ。これでシズク救出の借りを返したことにする。

コウマ王もシズク救出のことは知っていて、今回のことで幸助の実力を知り、自国の印象を良くするのにちょうどいいとルビダシア家からの要望に頷いたのだ。

ちなみにこの一連の出来事は幸助たちが帰った後、知らない間に起きて終わった出来事である。

時は遡って、幸助が起きた時のことだ。

五時間ほどで目を覚ました幸助。その前に全員起きていて、セクラトクスに封印された経緯などを聞いていた。

人間のライバルを求めて、いつか誕生すると言われていた竜殺しに会うため友人に封印してもらい、解除を頼んだ。始めは友人の子孫が封印を守っていたが、それはいつしか村ぐるみの使命となり、重要視されていた。

そんな流れの始まりを聞いて、友人の遠い子孫にあたるリーゼは脱力せざるを得なかった。

突然の英雄の失踪に世間では、暗殺や敗北して隠居したといった噂が流れた。それを信じたのはセクラトクスを知らない者たちで、知人たちはきつと碌でもない理由で消えたのだと確信を持っていた。知人たちはセクラトクスが英雄と呼ばれるような人物ではないと知っていた。戦いを求めてあちこちと移動し、その戦いの過程で偶然人間にとって害のある魔物を殺していっただけなのだ。本人には人助けをしたという意識はほとんどない。依頼で魔物退治したのは、美人に頼まれたり、子供の裏表のない称賛に煽てられ勢いで行った程度だ。

話を聞いた後は、皆思い思いに過ごしていた。

ウィアーレは幸助の世話で、エリスは今後のことを考え、セクラトクスは島の皆のことを心配するリーゼから今の世界のことを聞いている。

「あ、起きた。どこか痛いところかない？」

「……ないけど、なんでこんなところにいるんだっけ？」

ウィアーレに聞き返す。

「どこまで覚えておる？」

「えっと……闘ってて、いいようにやられて、そんなところ。負けて見逃された？」

「いや、俺が負けたんだ。暴走していたみたいだから覚えてなくて当然だろうがな。いやー強かった！　またやろうな？」

笑いつつ言ってくるセクラトクスに、やらんと返す。

セクラトクスはこう言われても気にせず、無理矢理押しかけ闘おうと思っている。夢にまで見た自身よりも強い人間だ。闘わないという選択肢はない。

なんとなくそういう考えが読めて、幸助は肩を落とした。

「コースケさん、お腹空いてない？ 果物あるけど食べる？」

聞かれると空腹を自覚し、音が鳴る。

ウィアーレはそれを返事と解釈し、果物の皮を剥いて渡す。少しだけ不恰好なそれを受け取り礼を言う。

「ありがとう」

渡された果物を口に運ぶと同時に、部屋の中に突然人が現れる。幸助だけが見覚えがある人物、いや神だ。いつになく真剣な表情で幸助を見ている。

「コーホック？ なにしに來たの？」

口の中のものを飲み込み、問いかける。

驚いたのはエリス、ウィアーレ、リーゼで、セクラトクスもコーホックが神だと知れば驚いた。

セクラトクスが半生を過ごした時代の娯楽の神とは代替わりして、名前に聞き覚えがなかったのだ。

「コーホックって神様じゃないですか！？ え？ 本物？ 同じ名前の人間じゃなくて？」

「本物だよ。これでも神の一員だ」

驚くリーゼに硬い声で返す。

「あ、声が同じだ」

声だけは聞いていたワイアーレもコーホック本人だとわかった。

「長いこと生きてきたがこんな近くで神なんぞ見たのは初めてだ。コースケいると退屈せんのう」

「神なのか。強いんだろうな」

セクラトクスの目がキラリと光るが、今すぐ闘おうとは思わない。いずれは神とも闘ってみたいと思っているが、もっと力をつけていい勝負ができるようになってからと思っている。

ワイアーレたちを無視して、コーホックは幸助を見たまま口を開く。

「今日ここに来たのは一つ聞きたいことがあるからだ」

「聞きたいこと？」

なんだろうと幸助は首を傾げる。

「今後、神に対してどういった対応を取るかだ」

「対応って言われても。特にこれといった指針はないけど。それに会おうと思って会える存在じゃないし、対応なんて決める意味はないと思う」

「もしでいい、もし出会ったらどういう行動を取る？」

「もしというか今会ってるし……相手次第かな。コーホックみたいに穏やかに接してきたら穏やかに返す。敵対なんかしてきたら逃げようとするかな」

「敵対し返すということはないと考えていいのか？」

「敵対して無事でいられるわけないし、どうにか逃げてコーホックとか見てる神に助け求めるけど。あ、身近な人に手を出されたらわからない」

「……それはそうだろうな。基本的には好戦的といった対応はしな

い。これでいいんだな？」

「それであってる」

ここでコーホックは深く溜息を吐いた。安堵しているのがよくわかった。硬かった雰囲気は柔らかなものへと変わる。

「なんで安堵してんのさ」

「お前さんの実力が洒落にならんところまで来てたからな。暴走中の平均ランクがどれくらいになっていたと思う？ 平均B＋だぞ？ 下級神クラスだ。筋力に至ってはA。中級神上位クラスにまで届いてんだ。それで問題にならないわけがないだろう。」

暴走するお前さんを見ていた神々からは、封印だとか排除といった意見も出ていたんだ。史上初の神殺しが生まれる前に始末しておけってな」

「……………」

血の気の引いた幸助はなにか言おうとして何も言えずにいる。

自分が神々に警戒される、そんな大それた存在であることが信じられなかった。性質の悪い冗談であってくれと願う。

「対応について聞いたのは、神がコースケに対してとる方針を決めるためなのか？」

エリスの問いに頷く。

「もしコースケが戦いたいといった選択をしていたら、問答無用で排除となっていたと見ていいのじゃな？」

「ああ。その選択をしていたら今ここを見ている神々が転移してきて、ここら一帯ごと封印することになっていた。その上でコースケを排除するために動いた」

「非好戦的で助かった」

心の底から助かったと思っている幸助に、コーホックはそうだと頷く。

「好戦的で思い出したけど、セクラトクスさんも暴走していたコースケさんに追従してたよね。

セクラトクスさんも神様にとって要注意人物ってことになるのかな？」

ウィアーレの疑問にコーホックは首を横に振る。

「現状では放置しても問題ない。古の大英雄の称号効果でも下級神に及ばない。セクラトクスの名声は現状で最大値だからこれ以上効果の上昇はあり得ない。コーホックの評価を落せば称号効果も落ちるから弱体化は楽だ。

これらの理由から問題視はされていない」

上がるのは幸助の竜殺しと違って、ステータスのみだ。ステータス外の能力まで上がらないので、神に近かろうが気にしないのだ。後平均一ランク上がれば下級神に届くが、その一ランクがすごく遠い。修行に明け暮れても早くて二十年先だ。

「問題視されていないなんて言われたら、一矢報いたくなるな」

「努力次第ではそれはできるそうだ。一年五年の努力じゃ無理だろうだが」

戦いの神といった戦い関連の神たちの評価だ。

修練を積んだとわかったら評価した神が手合わせに行くというコーホックの言葉に、セクラトクスは気合が入る。

再び幸助に向き直り、称号を見えるようにしてカードを見せてくれというコーホックに、幸助はカードを渡す。

「予想が当たったか」

「なにが？」

「竜殺しの称号が成長しているんだ」

ほれ、と幸助の目の前に出されたカードには、竜殺し3と確かに刻まれている。

「あの暴走中の変化は成長に関係していると確定したか」

「変化？ 暴走中なかあった？」

「そういや明確な意識はなかったんだったな。その時の姿を頭に送ってやる」

コーホックが幸助の額に指を当てる。すぐに幸助は変わった自身の姿を見ることができた。

「竜っぽくなってたんだなあ」

「俺たちはあれをギフト『竜装衣』と名づけた。竜を真似たような姿だ、ピツタリだと思わないか？」

「竜を装う衣ね、ほんとにそれっぽいよ」

「ちよつと変わってくれるか、ステータスの変化をみたいんだ」

「いきなり変わって言われても」

さっきの姿をイメージし、変化しろーと念じる。

変化はすぐに起きた。幸助の体から青い風が出て、体を包んだ。繭のようにならず、額と手に青い風が集中し、幸助はあの時とはまた違った姿に変わる。

髪や目の色は変化なく、肌は褐色へ。角は青水晶のようなものが

生え、手には色しか変わらない青鱗のガントレット。足には変化なく、尾もない。

ステータスも二段階アップではなく、一段階アップとなっている。目には変化前と変わらず理性の光が宿り、暴走状態ではないとわかる。

変化した自身の手を幸助は物珍しげに見ている。

「あの時とは違うのう」

「あの姿は最終変化した姿じゃないか？ 修練を積みばあの姿に辿り着くと思うぞ」

コーホックはそう言うが、竜殺しの称号が成長した時点であの姿になることは確定していた。修練を積みば変化が早まるというだけでしかない。そしていつか半竜半人という世界でただ一人しかいない種族が生まれる。

「別に修行しなくていいよね。この姿でも持て余すのに」

これ以上は余計だと言い切った。

パワーアップせずとも、今までの暮らしに十分すぎるほどの能力を持っていたのだ。切羽詰った状態でもないのに、これ以上のパワーアップを望むはずもなかった。

「コースケならそう言うじゃろうな」

「だよねー」

エリスとワイアーレは納得したように頷く。

セクラトクスはもったいないと言っている。リーゼは話を理解する気はなかった。この場の話は聞かなかったことにすると決めていた。自分が関わるには不釣合いと考えたのだ。竜殺しのことも、ウ

イアーレの歪みのことも忘れることにしている。迷惑かけた分の恩返しはしようと思っているが。

「そう言ってもらえると助かる。鍛えるとか言い出したらまた警戒する必要があるしな。そろそろ帰るが、最後にこれを飲んでくれ」

コーホックはヤクルトサイズの小瓶を懷から取り出し、カードと一緒に渡す。

「これは？」

目のあたりに持っていて小瓶を揺らし、中身がチャプチャプと揺れる様を見つつ言う。

中の液体は不純物の入っていない、透明感のある綺麗な朱色をしている。見ただけではどんな効力かはわからない。

「上級神から渡されたものでな。神と竜殺しが出会った時に両者の力が落ちるようになるんだと」

「神の力も落ちんの？」

「お前さんの力だけが落ちるようになると、神が気軽に会いに行つてちょっかいかけるかもしれん。それは竜殺しだけに負担を負わせるだろうと仰つてな。神の力も落ちるようになると、ふとしたことで神も死ぬ可能性がある。死にたいと思つている神はいないだろうから、会うことを避けるようになる。会いに行こうと思う神はそうそういないから、念のためなんだが」

「ほんとにその効力だけ？」

「俺に聞かれてもな。作ったの上級神だからなあ。飲まないって選択してもいいが、その場合は警戒度が上がるぞ？」

「だろうね。仕方ない飲むか！」

腹を括って、いつきに飲む。ほんのり甘く、すっきりとした味だった。

コーホックがそばにいるため効果はすぐに表れ、カードのステータス表記がオールEまで下がった。

「なんか体が重く感じる」

「俺も似たようなもんだ」

コーホックも自身の体を見回し変化を確かめる。

「じゃあ、俺は帰る。宿からある程度離れたら元に戻れると思う」

そう言ってコーホックは宿から出て行った。

コーホックがいなくなつて一分ほど経ち、体が軽くなるのを感じ、ステータスが元に戻る。

「さてともう一泊したらさっさと出ようかの。リーゼも私たちについて来るがいい」

「え？ でも島の皆が心配」

「今帰ったら兵たちに捕まる可能性があるぞ。五日もすればいなくなるだろうし、私が転移で送ってやろう」

「……送ってくれるなら」

一泊した五人は転移し、行きに立ち寄ったセブシック大陸の港で時間を潰す。

この五日の間にリーゼは幸助に、迷惑をかけたことを謝った。リーゼのせいではないとはいえ、知り合いがやったこと。自身も一部加担したところもあるのだ。

色々と疲れたとはいえ、もう終わったことなので幸助は謝罪を素直に受け入れた。

受け入れる条件といわけではないが、自分が竜殺しだと黙っていてくれという口止めをする。リーゼは既に忘れると決めていたので、即頷いた。

セクラトクスにも口止めするが洩るので、喋ったら絶対手合わせしない闘わずに逃げる、と脅し頷かせた。竜殺しと戦うためだけに封印までされたのだ、この脅しはよく効いた。

五日後にリーゼを送り、エリスは幸助の荷物を持って帰ってきた。

「コウマに寄る予定じゃったが、向こうをうろつくとクワジット国に言いがかりつけられる可能性もあるし止めておこうか。わざとではないとはいえ、兵を怪我させたからのう。しばらくは近寄らん方がいいじゃろうて」

「エゼンビアに続き、ペレレ諸島も行けなくなったよ」

行かない方がいいというだけで行ってもいいのだが、行けば面倒事が起こるだろう。

「時間が経てば行けるようになるよ！」

ウィアーレの励ましに少し癒される。

「私たちは帰るが、セクラトクスはどうするのじゃ？」

とつとと別れたいと思いつつ聞く。

「どこかに行こうにも金がねえしな。ついていこうと思ってるが？」
「ついて来られても迷惑じゃ。お金ないと言うが、お主なら強めの魔物殺して荒稼ぎできるだろうに」

「ああ、そーいやそーうだな。ついて行かなくても問題ないのか。じゃあ自由にやるかな」

再戦のため幸助の住所を聞いたセクラトクスは、酒と女が待つて
るぜと言いながら街の外へ向かう。早速魔物を殺してお金を稼ぐつ
もりなのだろう。

セクラトクスがいなくなり、幸助はほっと安堵の溜息を吐いた。

「あの人はすぐに名を広めるだろうねえ」

「強いし、それを隠すつもりもないだろうし広まるだろうね」

幸助の言葉にウィアーレが頷く。

たしかにセクラトクスは有名にはなるが、さすがに英雄が復活し
たとは思われず、同じ名前の強い者が現れたと考える者が多数だ。

「あれのことはもういいじゃろ。帰るぞ」

「あ、うん。しっかしたただ封印解くだけと思ったのに、一騒動だっ
たなあ。また剣壊したし。頑丈な剣ってどこにないものか」

「素手で戦うしかないんじゃない？」

「進んで戦う方じゃないし、それでもいいけど。触りたくない魔物
に出会ったときとかね」

「そういう魔物は魔法で相手すればいいじゃろ。剣が欲しいならど
うにかならんことはないが」

「どうになるの？」

「家にある竜の鱗を材料に作ってもらえばいいのさ」

武具の材料としては最高の部類だ。ただし作り手が一流でないと
材料を生かすきれいなのだが。

幸助はそういった人材に繋がりがあある。ベラッセンにいるのだ。
クラレスの父が一流とっていい職人だ。

費用もそれなりにかかるが、お金ならばある。頼めば問題なく剣
はできあがるだろう。

「その方向でいこうかな。鱗少しわけてもらっていい？」

「かまわんよ。元々はお前さんのものみたいなものじゃ」

「ベラッセンに行くなら、ついて行くからね。皆に会いたいし」

断る理由もなく幸助は頷く。

ベラッセンで創作製どころではない騒ぎが待っている、そんなことを予測もせず三人は一ヶ月ぶりの家に思いをはせる。

>br<

数えるのも馬鹿らしくなる数の魔物。それに対する人々の数は少ない。千分の一いればいい方だろうか。

戦いの始まりに幸助が一人、人々の先頭に立つ。一メートルを越す剣を持ち、竜装衣を使った状態で、それを真横に薙いだ。その一振りから力が解き放たれ、前面にいた魔物を扇状に削る。そのたった一度の攻撃で、幸助は一万近くの魔物の命を奪っていた。

そんな幸助に人々は恐怖を抱き、魔物たちは意に介さず前に進む。人々も魔物を迎え撃つと、幸助を避けて前に進む。幸助も一人で行き進む。

人と魔物の戦いが始まる。

神に連れられ消えていくウィアーレがいる。諦めの表情を浮かべたウィアーレへと幸助が走る。だが多くの人々に邪魔され、どうしてもたどり着くのが遅くなる。

人々を掻き分けそばにたどり着いた時、ウィアーレは消える寸前だった。

ウィアーレは近寄ってきた幸助へと手を伸ばす。助けを求めるためではなく、これからの幸助の助けとなるよう歪みを放つため。

歪みは放たれ、幸助の体に注ぎ込まれた。気持ち悪さでうずくま

る幸助の前でワイアーレはいなくなった。

幸助が傷だらけで地に膝をついている。そのそばには口とわき腹から血を流すエリスがいる。エリスは致命傷を負っている。百メートル以上離れた位置には手を幸助たちへと向けた神が数人。

エリスが何事か喋り、幸助が必死に止めようとしている。その間に神たちの手には光が集う。

小さく笑みを浮かべたエリスが何事か話す。それに幸助は首を横に振る。同時に神たちは一斉に光を二人へ放つ。

神たちの放った光が当たる寸前に、幸助の姿は消えた。残ったエリスは髪の毛一本も残さず光の中に消えていった。

二人が消えたことを確認した神たちは満足げに頷いて去っていく。

満月が照らす荒野の下、鋭い雰囲気を持つ幸助が岩を背に座り、ぼろぼろになっている剣を抱いて目を閉じている。ぼろぼろなのは剣だけではなかった。着ているもの、そばに置いていある鞆もぼろい。幸助自身も薄汚れている。

雲一つない満月の夜なのだが、どこか薄暗い。風も激んだものを含んでいるように思われる。

座り続け、十分か一時間か。時間の経過がわかりづらい。

どれくらい経っただろうか、不意に幸助が目を開き立ち上がる。

その三秒後、神が数人現れた。

神の一人が幸助へとなにかを喋るが、幸助は聞き流しいつきに近寄り、その神を斬り捨てた。

慌てて距離を取りつつ攻撃を始める神と、攻撃を全て避けながら追いかけて次々と斬り捨てていく幸助。

幸助の表情は淡々としていて作業をこなしているだけといった感じだ。

やがてその場に立っている者は、神を殺し力が増した幸助だけとなる。

風は止み、水は濁り、地は荒れ、光は遠のく。

倒れ伏した上級神たち。

竜の爪を世界神に突き立てる幸助。

崩れ行く世界。

世界を喰らった竜の誕生。

人形のように微動だにできなかったミタラムが目を開ける。ほぼ同時にコーホックが帰ってきた。

ミタラムはコーホックに近づき問いかける。その目には焦燥の色が浮かんでいる。

「コースケに葉渡した？」

「渡したが、なんで知ってるんだ？ ミタラムが意識を閉じている間のことなのに」

「未来を見たから」

早口でそれだけ言うと、ミタラムは急ぎ足でその場から離れる。

ミタラムがそんな様子を見せるのは珍しく、コーホックは後を追いかける。

「どこに行くんだ？」

「上級神のところ」

「なにしに？」

「見た夢の実現を防ぐため」

「どんな夢を見たんだ？」

「世界崩壊」

「は？」

呆けるコーホックを置き去りにして、ミタラムは上級神の元へ急ぐ。

ミタラムが見た夢は変えることができる未来。だが阻止するために動かなければ高確率で実現する未来。

あんな未来が実現したところなど見たくないミタラムは、阻止するために動く。

だが既に葉は渡された。崩壊の未来を阻止するには葉が渡されないよう動く必要があった。あれは弱くするが、強くもなる葉。

阻止するためにできることはまだあり、協力を得るため上級神の元へ向かう。

ここが運命の分岐点だった。ミタラムが幸助を見ていなければ、未来を見なければ、阻止するために動かなければ、世界の崩壊は決定していた。

一難去ってまた一難

家に帰り、三日のんびり過ごした幸助はベラッセンに行く前にリッカートに行くことにした。

店自体は完成し、開店準備も大詰めになってきた頃だろうと思ったのだ。ペレレ諸島へと出かけたことで、約束していた雇用の際の面接立会いができなかった。開店前に一度も顔を出さず、店員と会わないのはオーナーとして失格だろう。

メリイールとセレナに買ったお土産を手到店の近くまで来ると、以前は聞こえていた釘を叩く音や大工の声は聞こえなくなっていた。代わりに店の前には、ガレオンが手配したのであろう警備が立っていた。立っているのは二人。一人は四十ほどの男で熟練といった雰囲気をもとっている。もう一人は幸助よりも年下で十六才ほどか。

「頼んだ警備って引退した人だったよな？」

ガレオンとの会話を思い返し、そうだったと頷く。冒険者としては動かない、知り合いの強い人間を回したのかと思いつつ店の前まで来た。

「こんにちは。通りますね」

「ちよっと待ってくれ。関係者以外を勝手に通すわけにはいかならん」

熟練風の男に止められる。

「無関係じゃないんだけど、ここのところ来てなかったし仕方ないか」

「そうなのか？ 見ない顔だから念のため、誰か呼んでくるからそ

のままでいてくれ」

「呼んでくるなら店長頼みます」

「店長と知り合いなのか」

「はい」

オーナーと言って信じてもらえるかわからず、男に従い素直に待つ。

出来上がった建物が外からどんな風に見えるか見ていると、少年のが話しかけてくる。

「なあ、あんた」

「なに？」

「店長とどんな関係なんだ？」

「どんな関係……協力者じゃないかな。この店を立ち上げるのに協力したんだよ」

「へー」

「こっちからも聞きたいんだけどいい？」

少年が頷くのを見て、続ける。

「ここの警備って冒険者を引退した人になるはずなんだよ。でも君は引退という言葉が似合わないし、なんでここに雇われてるのかなと」

「俺はトアドさん、名前を言ってもわからないか、さっき俺と一緒にここに立っていた男に頼み込んでここに雇ってもらったんだ。正式には雇ってもらったわけじゃないんだけど。旅に出ているオーナーが戻ってくるまで保留なんだと」

「なんで頼みこんでまで雇ってもらおうと？ なにか思い入れでもある？」

「いや、別にここじゃなきゃ駄目ってことはなかったんだ。俺は現

役の冒険者なんだけど、依頼の成功率が低くてお金がなくなっとな。少し世話になったトアドさんが警備の職を得たって聞いて、ツテで雇ってもらえたらって思ってた」

「どんな失敗したのさ」

「いや、それは」

言い洩る少年に幸助は不思議そうな顔を見せる。それを見て失敗を笑うために聞こうとしてるのではないとわかり、少年は続ける。

「失敗したこと話すのは恥ずかしいじゃないか。恥を晒すようなものだろ」

「そういやそうか。じゃあ情報料払うから、依頼のようなものとして捉えたら？俺も冒険者だし、今後の参考になるかもしれないから聞いてみたかったんだ」

この理由のほかにコキアに失敗例を聞かせて、同じ轍を踏まないように学ばせようと考えている。

「銅貨で十枚払うけどどう？」

「話だけで十枚か、それは助かる」

決まりと幸助は財布から銅貨を取り出し、少年に渡す。少年は嬉しそうに受け取った銅貨をポケットに仕舞う。

「最初にした失敗は畑を荒らす獣退治。知らない人と組んでやったんだけどさ。全員かけだしで上手く連携とれなかったんだ。それで夜の見張りの順番とかも上手く調整できなくて、うとうととしている間に荒されたんだ。」

一時的にでもいいから誰かリーダーを決めて、その人の言うことに従うってことすれば少しはましな結果に終わったかもしれない」

「誰か一人くらいは依頼に慣れた人がいたらよかったのにな」

「たしかにな。ほかには期限付きで鉱物の採取に行つて、期限内に帰つてこれなかったなんてこともあった」

「そういった依頼つて移動時間も考慮して出されてるんじゃない？ 急ぎの依頼だった？」

「いや歩きでもギリギリ間に合うと判断して移動費をけちつた帰りに、足止め喰らつて間に合わなくなったんだ」

「余裕もたせないと」

これには幸助は呆れを隠せなかった。だが転移や飛翔で移動できる幸助には思いつきにくい失敗で、参考になっている。

そんな表情になるのも仕方ないと少年は苦笑いしている。

「んで次は特定の魔物の部位を集める依頼」

「魔物の事前調査してなくて不覚をとつた？」

なんとなく予想できたので先に言ってみた。

少年は首を横に振り否定する。

「事前調査はしたんだ。でも調査がたりなくて予想していなかった攻撃喰らつて、倒すどころじゃなくなった」

「なるほど」

少年が次を話そうと口を開くと同時にメリィールが出てきた。

「オーナー！？ 帰ってきたんですね、お帰りなさい」

「「オーナー！？」」

警備二人が驚きの声を上げる。

「オーナーって本当なのか？」

少年は驚きの表情のまま幸助を指差して問う。それに幸助は頷く。

「ギルド長から若いとは聞いていたが、それは俺たちを担いでいるんだとばかり。本当に若いとはなあ。じゃあウッドオーガを倒したってのも本当なのか？」

「本当ですよ」

気負いなくあっさりと答えた幸助を見て、男は本当らしいと心の中で唸る。

「トアドさん、ウッドオーガってどれくらい強いんですか？」

「俺の平均ランクがDで、ほかに三人から五人同程度の奴が集まり、なんとか倒せるかもしれないところか。勝率は高くない」

「トアドさん強かったですよね……それでも苦戦する魔物か。俺の話なんか聞く必要なかったんじゃない？」

やっぱり心の中で馬鹿にしていたのかと少年は暗い思いを抱く。

そんな思いが少し表情に出ているのを見て、幸助は誤解を解くために口を開く。

「いやいや参考になったよ？ 事前調査をしっかりすることとか、余裕を持った行動をするとか、依頼の難度に関係なく役立つ話だし。知り合いに駆け出し冒険者がいて、その子に実例付きで話をしてあげられる」

「でもさ」

「納得してなくても、役立つと思ったのは本当なんだよ。自慢にも聞こえるかもしれないけど、俺は依頼を失敗したことない。一般的な冒険者とはずれてるって自覚もあるし、そんな俺が駆け出しの子

に教えてるとその子もずれた冒険者になりかねない。一般的な冒険者からの話は、ずれを修正するのに役立つと思うんだ」

「……ほんとに自慢に聞こえた。でも俺の話を馬鹿にしていたわけじゃないのはわかったよ」

良かったと幸助はほっと胸を撫で下ろした。いくら強かろうが恨みは買いたくないのだ。

仕事の最中な警備二人と別れ、幸助はメリイールと一緒に店内に入る。背後では年齢は近いが、力量は遠いことに落ち込む少年をトアドが励ましていた。

言葉遣いの練習中なのか、男女の入り混じった同じ言葉が聞こえてくる。先生役はセレナのようにだ。

店内はホルンの実家と似たような雰囲気を漂わせており、貴族喫茶というのに相応しく感じられる。あとは店員が相応の態度をできていれば完成といえるだろう。

「どうですか？ 目的に即した内装になっていますか？」

内装はキラキラと輝くような豪華さではなく、落ち着いた感じになっている。よく見てみると柱や窓枠には細かく装飾が掘られていて、純白レースのカーテンも気品を感じさせる。壁にかけられた絵画や置かれている花瓶など一品一品は、平民でも頑張れば買えるものばかりだ。だがまとめて購入すると高すぎる買い物となる。

「上出来だと思う。大工さんたちも、メリイールさんたちも頑張ったんだね」

「ありがとうございます」

嬉しげに笑みを浮かべ一礼する。

店員たちに紹介するため、幸助はメリイールに先導され店員たち

が集まる場所に連れて行かれる。

見えている店員の数は合計八人。女五人に男三人だ。これはウェイトレスとウェイターだけの数で、厨房にはもう四人店員がいる。そちらはメリイールの指導で、紅茶の入れ方を学んでいる最中だった。

近づいてきた二人に気づき、皆の注目が集まる。

店員たちの表情は誰なのかという疑問顔で、セレナは驚いた表情となっている。

「あ、やつと帰ってきた！ お帰りなさいオーナー！」

「ただいま。お土産があるよ」

持っていた紙袋を持ち上げ揺らす。中身はガラス細工のコップだ。それぞれ薄い青と薄い赤の透明なグラスで、全体に緩く捻じれておりそれが模様となっている。綺麗だったので、自身の分も合わせてお土産に買ったのだった。

「ありがとう！」

「副店長、ちょっといいですか？」

女店員の一人がセレナに声をかける。

「なにかな？」

「えっとその人がオーナーって本当ですか？」

「本当。このお店を建てる費用全部出したんだよ」

「全部って、大工から少し聞いたんですが普通の喫茶店よりお金がかかってるって。それを二十にもなってなさそうな人が出したんですか？」

「うん」

「貴族がお金持ちの出？」

視線が集まり幸助は首を横に振って否定する。

「たくさんお金が手に入ったから、この店に使っただけ。俺はなんの変哲もない庶民の出だよ。」

注目が集まったついでに自己紹介といこうか。コースケ・ワタセ。このオーナーで普段は冒険者をしてる。拠点はベラッセンだ。そんなわけでこっちには常にいるわけじゃない。メリイールさんとセレナの言うことをよく聞いて、よく働くようにね」

店員たちは若干呆けたように頷く。

「オーナー、上に行きましょう。話すことなどがありますし。セレナも来て頂戴」

「わかりました。皆は練習を続けるように」

三人が厨房に顔を出した後、二階に上がったのを見て店員たちは若いオーナーについて話し出す。

資金的にこの店大丈夫なのかという声が上がったり、お金の入手経緯の予想だったり、誘惑すればオーナー夫人なれるかもといった声も上がっていた。最後の意見は、メリイールやセレナが嫁候補もしくは嫁ではないかという推測にまで話題が発展していた。

階下のざわめきには気づきつつも、話されている内容は気にしない三人。幸助は聞こえていたが、下手に追求するとさらに話題が広がる可能性もあり、聞かなかったことにした。

メリイールとセレナは、以前ユイスのことで幸助に抱いた感想と似たようなことが話されているとは思ってもいない。

事務所のソファァーにテーブルを挟んで幸助とメリイールたちは対面して座り、幸助は紙袋を二人の前に置く。

「これを先に渡しとくよ」

「中身見ていい？」

なにが出るかなと心弾ませ、セレナは紙袋の中からグラスを取り出しそれぞれ光に透かして見ている。

「メリイールさんと話し合って好きな方を選ぶといいよ」

「セレナ、好きな方を選ぶといいわ」

「じゃあ、青い方をもらう。赤いのはメリイールさんの髪に映えると思う」

はい、と赤いグラスをメリイールに渡す。グラスを受け取り小さく笑みを浮かべる。

それを目の前において、今度はメリイールが布袋を幸助の前に置く。

「これは商人ギルドから受け取ってきたお金です」

「ありがと」

今回はまだ爪きりとピーラーの分のお金は含まれていないので、大金というわけではない。

それを鞆に仕舞ったのを見て、メリイールは報告を始める。

「ご覧の通り店は完成し、店員も雇いました。面接時期にオーナーがいなかったものでこちらで妥当だと思われる人を雇いました。オーナーの帰りを待っていたのですが、待ち続けると開店時期が遅れるのでこちらで勝手に選びました。申し訳ありません」

「謝ることないよ。約束を破ったのはこっちだし。店を運営していく二人が相応しいと思った人を雇えばいい」

「そう言っていただけだと助かります。警備はギルドから推薦され

て来たのですが、オーナーが頼んでいたと聞きました」

「うん。ギルド長にツテができてね。会った時にいい人がいればって頼んでおいたんだ」

「注文通りの人たちで助かっています。ただエルジン君については、私たちでは判断しかねたので保留にしていますが」

「俺が話していた若い冒険者であってるよね？」

「はい」

「真面目に働いてる？」

「一応はね、ほかの警備さんたちに比べると頼りなさはあるね。あとは帰りとか、女の子に声かけたりしてる」

私もかけられたとセレナが言う。今は店に集中したいため断りを入れた。

「声をかける……まあ若いしそんな軽さはあって当たり前か。仕事の邪魔になってるならクビにするけど、そこらへんはどう？」

幸助も同世代といっているいいが、エルジンに対して仕方ないなあといった目上が持つ感想を抱いた。エリスやウィアールと一緒に暮らしていて、異性と話したり遊んだりしているので余裕があるのだ。

そんな幸助の様子に、メリイールとセレナはユイスか誰か彼女でもいて余裕を持っているのだろうと推測した。

「邪魔ではないよ。ですよねメリイールさん？」

「ええ、そうね」

「そっか。真面目に働いているかぎりには雇ったままでいいよ。ただし給料はほかの警備さんたちより少なめだ」

働きの同じことができていないのならば、真面目でもほかの警備と同額はあげられない。

ほかの警備たちから不満が出る可能性があるのだから。幸助が乞い願った形のトアドたちと飛び込みのエルジンならば、トアドたちの方が優先度が高いのは当然だろう。

「わかりました」

店員たちの給料は、週休一日、早番遅番の二交代制で、一ヶ月銀貨二十枚となっている。メリイルとセレナはそれに十銀貨五枚だ。幸助の収入は必要経費を除いた余りとなっている。

警備たちは週休一日の三交代。給料は店員と同じだ。

銀貨二十枚は一家族一ヶ月分の生活費で、一人が稼ぐ分としては十分に高めの給料といえるだろう。普通は家族の一人が働き、誰かもう一人がちよつとしたバイトで稼いで銀貨二十枚に届くのだ。

エルジンは一人暮らしなので生活費に銀貨二十枚は必要なく、給料が少なくとも暮らしていけるのだ。無駄遣いすればそのかぎりではないが。

「だいたい銀貨十五枚くらいで。ただし給料が少ない代わりに、週休二日にしといて。ギルド依頼を受ける時間をあげたいし」

銀貨十五枚は税金を払うとしたら生活費としてはギリギリだ。もっとお金がほしければ簡単なものでも依頼を受けるしかない。

連続して休み取れても二日なので、長時間拘束する依頼は受けられず、選ぶものは簡単なものとなるだろう。自然とこつこつ経験を積む形となり、冒険者として順調に育っていけるかもしれない。

幸助はそれを狙って指示を出したというわけではなく、偶然そうなっただけだった。

「それくらいならば大丈夫ですね。もともといない予定の人間です。で、休みが多くとも問題ないようになっていきますし」

「ん、よろしく。警備を除いた店員たちの教育はどうなってる？」

「キッチン側はなんとか形になってきてますね。実際に作ってますから、失敗とかわかりやすいです」

「ホール側はもう少ししてところ。こっちは中々実演ってできないからねえ」

高めの給料の分、質も高いものを求め店員教育を厳しめに行っている。おかげで急ごしらえでもなんとかなりそうという感じになってはいるが、一度開店前に本番に近い練習をしたいというのがメリイールとセレナの考えだ。店員も同じで、実際に客に接して初めて学べるものがあると考えている。

それには幸助も賛成だ。

「ギルドに行って職員借りてこれるかな？　ただで飲み食いできるなら来てくれるかもしれん」

あまり借りを作りたいわけではないのだが、人を集められるツテが今はそこ以外にない。

「それができるならありがたいです。頼めますか？」

「ちよっと行ってこよう。その前に一度俺を客として練習してみない？　どんな具合なのか実際確かめてみたいし」

「それもいいね。じゃあ、皆にそのこと伝えてくるよ」

セレナが立ち上がり、一階に下りていく。

「ほかになにか伝えることはある？」

「そうですね……商人が来る程度でしょうか。あ、オーナーはベラッセンで活動しているんですけどっけ」

「そうだけど？」

「冒険者たちがベラッセンで仕事があるとかなんとか言っていましたね。道を歩いている冒険者の話を耳にただけなので、詳しいことはわかりません」

「出かける前はなにもなかったんだけどね。なんだろう、近々行くつもりだったからその時わかるか」

報告は終わり、ちょっとした雑談をして一階の準備が終わるのを待つ。すぐにセレナがやってきて準備を整えたことを伝える。

幸助は一度外に出て、入ると外から声をかけて、玄関に踏み込む。メリイールとセレナが幸助を出迎える。

「いらっしやいませ」

二人は一礼し、セレナが一步前に出て話しかけてくる。

「お客様は一名でのご来店でしょうか？」

「ああ」

「ではこちらへどうぞ」

セレナが先導し、幸助はその後ろをついて歩く。

セレナが椅子を引き、幸助が座る。

そこにウェイトレスの一人がキャスターテーブルに、クッキーとマドレーヌを載せて近づいてきた。本番ではもう三種類ほどお菓子を載せる予定だ。

「お客様、本日のお菓子はこちらとなっております。ほかにサンドイッチなどの軽食もございます。好きなものをお選びください」

ウェイトレスに軽食のメニューを聞き、少し考えお菓子を選ぶ。

「マドレーヌをもらえるかな」

「承知いたしました」

ウェイトレスは小皿にマドレーヌを二つ移して、幸助の前に静かに置く。

「こちらのお菓子に合う紅茶をお持ちいたしますので、少々お待ちください」

三分ほど待つとティーカップとポットをトレイに載せた別のウェイトレスがやってきた。

失礼しますと一声かけ、テーブルにトレイを置き、紅茶を入れていく。香り付けの酒、砂糖、ミルクを入れるか聞き、ティーカップを幸助の前に置く。

「お待たせいたしました。おかわりなど御用がございましたら、近くにいます店員に申し付けください」

幸助が頷くとウェイトレスは離れていく。

マドレーヌを食べ、紅茶を飲み終わり、ウェイターを呼び、サンドイッチと紅茶のおかわりを頼む。

飲み食いを終え、席を立つとウェイトレスが近づいてくる。

「お帰りでしょうか？」

幸助は頷き、会計まで案内してもらい、客としての行動を終える。再びホールに戻ってきて、店員皆を集める。

「ではこれから反省会を開きます。まずは俺が気づいたところを言ってくよ。全体的に動きが硬かつ

た。これはまあ仕方ない。練習して慣れていけばなんとかなるから注意点じゃない。次は客を見すぎ。俺一人だったからかもしれないけど、開店してからもじっと客を見るようなことはしては駄目。不快に感じる客がいるだろうから。見るならそれとなくだ」

視線に関しては幸助の感覚の鋭さを基準にしたので、そこまで問題にしくてもいい。だが客の中には冒険者もいるかもしれない。そういった客は幸助と同じように視線を感じ取り不快に感じるかもしれないため、念のために言っておいた。

「ほかには呼び方もかな。ここは普通の喫茶店じゃなくて、シチュエーションも商売にするとところ。だからお客様っていう呼び方はここが喫茶店ってことを強調させると思うんだ」
「どのように呼べばいいのでしょうか？」

メリイールが皆を代表して問う。

「メリイールさんとセレナは気づくと思ってたけどね。奥様、若奥様、お嬢様、旦那様、若旦那様、若様。こんな感じで呼べばさらにそれっぽくなるんじゃない？」
「たしかにそうですね」

皆頷き、呼称について受け入れた。

「次は料理の方だね。といっても食べ物の方はそこまで言うことはない」

材料の良さもあるが、メリイールとセレナがしっかり叩き込んだのだろう、そこらのお店に負けないくらいの味は出ていた。

「言うとしたら飲み物だ。味が少し薄かった。茶葉にお湯に注いでティーカップに入れる時間が早いんだと思う。待たせたら駄目だと焦った?」

キッチン担当の三人を見て言う。お茶の葉も安いものではないが、お菓子よりも未熟と感じられた。
今回紅茶を担当した者が口を開く。

「確かに焦りはありましたが、味の違いなどほとんどないのでは?」
「言うとおりはほとんど違いはない。でも違いはあるんだ。妥協しないでほしい。客は通常の喫茶店よりも高いお金を払うことになるんだ、それに見合った物を出すべきだと思わないか? ちよつと入れてみようか、違いがわかると思うから」

「入れるってオーナーが?」

「そうだけど?」

「できるのですか?」

ほかの者たちもできるかと同じ思いを抱いたのだろう、疑いと驚きの混ざった視線が幸助に集中する。

ユイスとして過ごしていた時にメリイルたちに鍛えられたのだ、入れることは可能だ。今も家で入っていて腕は鈍っていない。

「なんでもいいから茶葉と入れる器具を持ってきて、それを使って入れてみせるよ」

「私が取ってくる」

セレナがキッチンに向かい、道具一式を持ってくる。

茶葉の種類をセレナに聞き、幸助は手早く準備していく。最初は手抜きバージョンを三人分入れ、次に手抜きなしバージョンをやはり三つ入れて振舞った。

よどみない流れるような作業に、入れ慣れているという雰囲気、店員たちの表情は驚き一色となる。冒険者だと聞いて、粗暴なイメージを持っていたのだ。手間をかけて紅茶を入れるような人物だとは思っていなかった。

飲み終えた店員に幸助は問いかける。

「どう？ 違いはわかった？」

「……はい」

店員たちの舌にも違いは感じられ、その上でしっかりと入れた方が美味しかった。

「オーナー、お茶入れるの上手ですね」

一口飲んだメリイールが感心したように言う。

「ある人たちに丁寧に教えてもらったから」

「もしかしてユイスですか？」

「違う違う」

あなたたちですと心の中だけで言い、手を振って否定する。

「丁寧に教えてもらったおかげで上達も早かったし、毎日上手いお茶飲めて感謝してる」

「ユイスも上達早かったですよ。教え甲斐がありました」

「そうなんだ。ユイスも感謝してると思うな」

「だとしたら嬉しいですね」

メリイールとセレナは笑みを浮かべて頷き合う。

そんな二人から店員たちへと視線を動かし口を開く。

「俺が現時点で気づいたのはこれくらい。あとはさっきも言ったように慣れるしかない。頑張ってくれ」

はいつと威勢のいい返事が返ってきて、やる気があるならばなんとかなるだろうと幸助は頷く。

「じゃあギルドに行ってくる。承諾してもらえたとして、実行はいづからがいい？」

「今日でも構わないですが、明日の方が都合はいいですね」

「なんの話？」

開店練習のことを知らないセレナが首を傾げる。

「この後、メリイルさんから話があるよ」

そう言って幸助は外に出る。

ギルドに入り、見覚えのある受付に話しかける。向こうも幸助を覚えていたようで、ギルド長に会えるかという幸助の質問に、会う約束はあるかと問いかけることなく、聞いてきますと言って場を離れる。

「お会いになるそうです」

「そうですか。ありがとうございます」

一度行って覚えているため案内は断り、幸助はギルド長の執務室に向かう。

「こんにちは」

「おう。会いに来てくれて助かったぜ」

「なにか用事でも？ 急ぎの依頼でも発生しました？」
「そうだ。まあ座れ」

椅子を勧め、ガレオン自身はその場から動かず難しげな表情を浮かべている。

「先にそっちの話から聞こうか。なにか用事があって来たんだろう？」

「ギルドの職員を貸してもらいたいです。店を持っているって話しましたよね？ それが喫茶店っていうのは知ってます？」

「ああ、知っている」

警備を用意した時に調べたのだ。こういった内容の経営方針なのかも知っている。

「開店前に本番に近い練習をやりたくてですね。お客さんとして来てもらいたいです。練習にはある程度の人数が必要で、その人数を集められるコネがガレオンさんくらいしかなくて。御代はもちろん取りません。なにか気づいたことがあれば言ってもらいたいという条件はありますが」

「それくらいなら構わんど。休みの奴や休憩する奴を店に向かわせる。これでいいか？」

「はい。ありがとうございます」

行く人数と時間と日数を話し合い、幸助の用事は終わる。

「次は俺の話だ。依頼ということになるんだろうが、お前に無関係でもない。先日、五日ほど前だがベラッセンから冒険者をよこしてくれと連絡があった」

「なんか冒険者が仕事があるとか言ったらしいですね」

「ああ、緊急の討伐依頼だ。討伐対象は偽神信仰者だ」

その名を聞いて、やはり来たかと幸助は一瞬顔を歪めた。それにガレオンは気づくも、ウィアーレの件について知らないので偽神信仰者に対していい感情を持っていないと判断する。

「始まりはベラッセン郊外に偽神信仰者が集まっているのに、ベラッセンの住人が気づいたことだ」

気づいた住人は狩りに出ている、偶然発見したのだ。偽神信仰者は灰色の服に、黒の手袋と靴を身に着けている。そんな奴らが街道から外れているとはいえ、遮蔽物の少ない平地に集団で集まっていれば誰でも気づく。

「略奪前に気づいたことは幸運だ。すぐに発見の報告はギルドに知らされ、冒険者や警備兵が集められて討伐隊が組まれた。その時に念のためにとこっちにも冒険者募集の連絡が来たんだ。偽神信仰者の討伐を開始する報告が来て、経過報告がいつまで経ってもこないからこっちから連絡を入れてみたんだが、まったく繋がらなくてな。連絡装置の故障かと思ったが違った。こうなるとベラッセンになにかあったとしか思えない。以前も歪みが発生した時、連絡がつかなくなっただけだな」

「歪みが出たこと知ってたんですか」

「簡単な報告はきているぞ。発生し解決したと。解決に動いた人物の名も。そういえば最後に解決のために動いたのはお前だったな」

「はい」

この口ぶりではウィアーレが歪みに捕らわれていたことは知らないかと、幸助は心の中で安堵の溜息を吐く。

「今回も解決に動いてくれると助かる」

「本拠地のことだし、知り合いもいるんで動きますよ。結局、話はベラッセンに行って問題解決に関わってくれってことでいいんですよね？」

「ああ」

「店に行った後、すぐに行きます。練習のことよろしく願いしますね」

話を終えギルドを出た幸助は、店に戻って了承を得たことを伝えるとすぐにベラッセンに転移する。

ウィアーレが孤児院の者たちを心配するだろうから連れて行こうかとも考えたが、偽神信仰者に見つからない方がいいと考え、一人でベラッセンに行くことにした。

時は幸助がベラッセンに飛ぶ数日前まで遡る。

その日、コキアたちは街から三十分行ったところにある小川に行っていた。そこで採れる蟹を捕まえるためだ。

これは薬屋が常に出している依頼だ。この蟹は茹でても揚げてもえぐみが強く食べるのには向かないが、乾燥させ砕いて粉末にしたものが滋養強壮剤の材料となる。

ウドリガが薬屋と交渉し、採ってきた蟹の量によっては報酬のほかにちよつとした薬の材料も貰えるようになっている。

川周辺には強い魔物は出ないので、他所からやってきた魔物でも出ないかぎりコキアがついていても問題なかった。

五時間ほどかけて、四人はとりつくす勢いで蟹を採っていった。とった蟹は布袋の中に入れ、結び目に棒を通し、コキアとジェルムが二人がかりで持っている。一匹だいたい百グラムで、総重量は十キロ以上だ。

「いっぱいとれたねー」

「これだけあれば、きっと薬の材料も貰えるべ」

大漁大漁とテリアとウドリガが話している。

「たしかにたくさんとれたわ」

「食べる生物が少ないから大量発生しやすいんだっけ」

テリアたちにジェルムが同意し、コキアがギルドにあった生物図鑑で調べたことを思い出す。

どのような蟹か口頭で説明されたが、念のため絵姿も見ておこうとギルドで調べたのだ。

「今回もそんな大量発生だったのね。運が良かったわ」

川辺に溢れてたわけではないが、浅瀬の中や石をひっくり返せば簡単に見つかった。

ほくほくとした気分で薬屋に持っていく、薬屋の主人に渡す。とってきた量が多かったため主人も驚く。

「これだけあれば当分困らないな。ありがたい。報酬は一人銀貨一枚、それはギルドに預けてある。こっちが約束の薬の材料だ」

「ありがとうございます」

ウドリガが頭を下げ、材料を受け取る。

「材料は、傷薬、解熱剤、毒消し、鎮痛剤の材料の一部だ。薬を作っている出来だったら買い取るからな？」

「その時は頼みますだ」

四人は薬屋を出てギルドに向かう。
報酬を受け取った四人は新たな依頼を探す。

「なにか新しい依頼あるかしらね」

「ちよつと宿代が心もとないから受けないとね」

「だべな」

宿組三人は財布事情から受ける必要性を感じている。

この三人が泊まっているのはシェイの宿で、居心地はいいが少し高めの宿代のためお金の減りが早い。

「俺はまた参加できるようなものがないな」

家があるコキアは今よりもいい武具を買うためにお金を貯金している。

「コキアが参加できるものとなると報酬が少ないんだよねえ」

「簡単な討伐依頼受けてもいいんでないか？ 三人いるからフォローできるべよ」

「コースケさんがねえ。でも一度受けてどれくらいできるか探ってみるのもいいかもしれないね」

「どーするコキア？ 私はテリアの言うように挑戦してみるのもいいと思うけど」

三人からの提案に、コキアは考え込んでいる。

毎日の訓練をサボってはならず、以前一人で挑んだ時よりも強いといえる。そして今度は一人ではなく、仲間がいる。

「一度行ってみるよ。ただ弱めの魔物でお願い」

「それはわかってる。弱めの魔物相手じゃないと、フォローまで気

が回らないのは前一緒に行った時に理解した」

「んじゃあ、討伐依頼探すべ」

四人であればどうだこれはどうだと依頼を探す。

そうしているとギルド職員が冒険者たちに聞こえるよう大声を出し、注目を集める。

十分に注目が集まったところで、職員の一人が口を開く。

「緊急召集です。街から離れたところに偽神信仰者の集団が見つかりました。この報告を受け町長は戦力の収集を命じました。義務のある冒険者は町長の屋敷まで向かってください。ただし戦力的に不安のある者は除きます」

もう一度繰り返した職員は急ぎ足で奥に戻っていく。召集でやることができ、忙しくなったのだ。

ギルド内にいた冒険者がぞろぞろと向かう中、四人は足を止めている。

「コキアは留守番かな」

「私もその方がいいと思う」

「おらもだ」

「無理？」

三人からの言葉にコキアは若干不満を抱く。反発してついていくとは言わないが。

だがどのようにコキアが言っても三人は頷かないだろう。さっきまでは討伐依頼受けてもいいと言っていたが、それは雑魚相手だからだ。偽神信仰者の中にもコキアと同じ実力の者はいるかもしれないが、コキア以上の者の方が多いだろう。そんな者たちの戦いで、三人はコキアのフォローができるとは思っていない。

「コースケさんがいれば同行しても守ってくれたかもね」

テリアはそう言いつつも、同行許可しないだろうなと思っている。

「私たちは行ってくるからコキア君はもう家に帰りなさい」
「訓練場でいつもの訓練してから帰る」

三人に別れを告げて、コキアは訓練場へと去っていく。
コキアを見送りギルドを出ようとした三人にギルド職員が話しかける。ウィアールの先輩だったディアネスだ。

「なにか御用ですか？」

「あなたとコキアという少年はワタセさんに師事しているんですよね？」

「はい」

「だとしたらワタセさんが帰ってきてるか知りませんか？ 戻ってきていたら召集に参加してもらいたいのですが」

「私たちのところには顔を出してないんでわからないですね」

「そうですか。まだ帰ってきてないのかな」

「おそらく、そうだと思います」

テリアの言葉に残念そうな表情となり、礼を言ってディアネスは離れていく。

今度こそ三人はギルドを出て、町長の家に向かう。

町長の家の前には既に数十人の冒険者が集まっていて、三人が行った後も続々と集まっていた。

三十分後に町長と部下が出てきて、説明を開始する。最初に話された内容はギルドで聞いたことをさらに詳しくしたものだ。その後、に戦いの際の基本的な動き、討伐隊を前衛組後衛組支援組の三つに

分けることが話される。出発は明後日の朝。出発に関しては、明日襲撃があれば街の入り口に集合と付け加えられている。そして最後に、税金を払っている冒険者には報酬が出ると言って町長たちは戻っていく。

当日の動き方は奇襲できれば奇襲するという考えだが、相手も街中や街外に斥候を出しているであろうことを前提としているため、奇襲を重視はしない。大人数で動くので見つかりやすいだろうということも奇襲を重視しない理由の一つだ。隠れて移動できる場所があればいいのだが、偽神信仰者たちがいる辺りは地下道や森はない。林はあるが、そこに着くまでに見つかる可能性が高い。

「私たちはばらばらになるね」

「ウドリガさんは前衛もできるけど支援に行く？」

「そうするべ」

テリアの問いに頷く。一番力を発揮できるのが支援なので、そっちの方に行った方が役立てるだろうと考えた。

三人は明後日のために準備を始める。それはほかの冒険者たちも同じで、冒険者に関連のある店周辺は活気付いた。

ジェルムたちが準備を整えている間、コキアは幸助が見せた奥義をものにしようと一人剣を振っていた。

力がないから置いていかれた。そのことに悔しさがある。駆け出しとはわかってはいるが、コキアも街を守りたいという思いはある。だから力があればついていけたと思い、今思い浮かぶ具体的な力である奥義を求めている。

「こうだったよな？」

コキアなりに見様見真似で剣を振る。だが的である案山子のような木の人形は少しも揺れることはない。

ピクリともしない人形をコキアは恨めしげに見ている。

「少しくらいは揺れてもいいと思うんだけどな」

何が足りないのか、幸助が言っていたことを思い出しつつ剣を振る。

三十回ほど振りなんの変化もなく、一度止める。

「『刃に魔力と斬るという意思を込めて混ぜ合わせ、剣を振るのに合わせて込めた力を飛ばす』だったっけ、難しいなあ。見た目は風が起きているだけなんだけど、ただ振るだけじゃあそこまでの威力はでないし」

正解を言い当てているとは知らず、正解を求めて首を捻っている。幸助の説明も具体的とは言えず、コキアは自分なりの解釈で実在しない奥義を求めていく。

「風がキーポイントなのかな？ 力を飛ばすってところに風が飛ぶようなイメージを付け加えてみたらいいのかな」

居合いの構えで剣に力を注ぐ。実際に注げているのかはわからないが、イメージを強く持っている。そこに風が剣に纏わりつくイメージも付け加え、上手くできますようにと祈りつつ、その風を飛ばすように振り抜く。

「……」

的は動かなかった。だがコキアは剣を振り抜いたまま固まってい

る。

それはまた何も起きなかったことに失望したからではなく、自分の中のなにかが動いたことを感じ取ったからだ。小さな動きだった。だけどたしかに自分の中にあるなにかが反応を見せたのだ。

「……糸口掴んだ？」

今までになかったことに一筋の光明を見た思いだった。湧き上がってくる笑いそのままに、もう一度剣を振るう。また的は揺れなかったが、変化は感じ取れた。

「これを鍛えていけば習得できるかもしれない！」

ぐっと拳を握りコキアは笑みを浮かべたまま訓練に戻る。

ジェルムたちが出発し見送った後、すぐに訓練場に籠り、外のことを気にせず集中し剣を振り続けた。何百何千と振る毎になにかは徐々に反応を強くしていった。

反応の強さに、気を良くしたコキアはますます訓練にのめりこむ。外の騒動に気づかないくらい集中していた。

敗北した者たち

二日経ち、あるかと思われていた襲撃はなく、冒険者と警備兵で構成された討伐隊は街を出る。討伐隊の人数は四百人。前衛が二百三十人、後衛が百人、支援が三十人だ。残り四十人は馬に乗り、遊撃隊の役割を持つ。

既に放たれていたベラッセン側の斥候の情報を元に、討伐隊は偽神信仰者たちの野営地に向かう。この時期の風向きも考え風上に立たないように行軍していった。

野営地まで徒歩三十分というところまで近づき、再度斥候を出す。戻ってきた斥候によると、こちらの様子に気づいた様子はないとのこと。畏かもしれないとは思うが、奇襲できるかもしれないと討伐隊のトップは考え、ここからは戦闘態勢を整えて静かに移動するようにと討伐隊に命じる。

支援組は徒歩二十分の位置までで止まり、そこに簡単な陣地を作り出す。

前衛後衛組はさらに進み、魔法が届く距離まで近づくと、偽神信仰者からも討伐隊が見え、さすがに態勢を整えようと動き出す。

その動きが終わる前に、討伐隊のトップが命じる。

「後衛、撃て！」

準備を終え、いつでも魔法を使える状態だった後衛組は命令に従う。

矢や投石や炎や氷や風や岩石が次々に飛ぶ。それらが偽神信仰者たちへと降り注ぐ様子を思い描いていた討伐隊は、軌道がずれていく魔法に目を剥いた。真っ直ぐ進んでいた矢と投石も、曲がる魔法に巻き込まれて野営地に届くことはなかった。

「馬鹿な!？」

合図を出している男の声が周囲に響く。すべてが外れた光景を見た者たちも同じ思いだ。

百人が魔法を飛ばしたのだから、十くらいは外れる魔法があっても驚かない。想定内といえるだろう。しかし全てが外れるのは明らかにおかしかった。

討伐隊が動揺している間に、偽神信仰者側は粗方準備を整え野営地から出てくる。

「今度は出てきた奴らに魔法を撃て! その後前衛は前進だ!」

再度の命令に従い討伐隊は動いていく。偽神信仰者たちからも魔法は飛び、数の差から相殺できなかった分が討伐隊に飛んでくる。ダメージを受けた者はいえるものの、脱落者はなかった。

討伐隊の陣は前衛の方陣と後衛の方陣となっている。空から見ると、横長の長方形が大小二つ並んでいる。

対して偽神信仰者側は態勢は整えたが、時間に余裕があったわけではないので、前衛と後衛の二つに分かれただけで、討伐隊のようにきっちりとした陣とはなっていない。

前進した前衛と偽神信仰者の前衛がぶつかる。敵味方混ざり合う形となり、数の多さから溢れた偽神信仰者の前衛が混戦した場から離れて、討伐隊の後衛に向かう。それを魔法などで迎撃していき時間が流れていく。

きちんと陣形を組めたことがよかったのか、形勢は討伐隊有利で進む。遊撃隊が敵後衛組へと突撃をかけ、魔法使用を阻害できたことも有利に進んだ要因だろう。

これはいけるかと討伐隊のトップが考えていると、偽神信仰者の野営地からラッパが聞こえてきた。それが後退の合図だったのだろう。偽神信仰者たちは、走って討伐隊から離れ野営地に戻っていく。

討伐隊には、追えという合図を待つ者と待たない者がいて、三十人ほどが追い討ちをかける。

戦いの動きを見てトップが指示を出そうと動く。その前に偽神信仰者側からのアクションがある。

衝撃波の波というのだろうか、津波のようにあらゆるものを薙ぎ払う攻撃魔法が偽神信仰者の野営地から放たれた。

討伐隊や偽神信仰者の後衛が放った魔法とは格が違う。比べることにすらおこがましい威力と範囲で、一度で討伐隊の前衛をほぼ全員倒してしまった。

「なんだと!？」

たった一度の攻撃で崩壊した前衛組を見て、指揮を出していた男や周囲の人間は驚きを隠せない。

動きを止めた討伐隊へと、野営地から一人の人間が歩み寄る。遠目には白い仮面をつけた人間ということくらいしかわからない。

「私は偽神。人間よ退け」

偽神と名乗った者は特に大きな声を出しているわけでもないのに、その場にいる全員が抑揚のないその声を聞き逃すことはなかった。

偽神自ら来ているのは想定していなかった討伐隊は、大きな衝撃を受けた。多くの者が負けたと考える。

有利に進めていただけに、たった一度の攻撃で自陣が崩壊して感じた絶望は大きかった。

「私たちへの攻撃、一度は見逃してやる。その代わり、伝言役を果たせ」

「……伝言?」

誰かが漏らした声に答えるように偽神は続ける。

「歪みに捕らわれし者を差し出せ。素直に差し出せばなにもせず退いてやる。もう一度言う。歪みに捕らわれし者を差し出せ。期限は三日だ」

偽神たちはこの用件を伝えるため、わざと見つかりやすい位置に野営地を作り、討伐隊を待っていたのだ。

街に一度も襲撃をかけなかったのにも意味はある。襲撃をかければ恨み憎しみが生まれる。偽神の狙いがウィアーレと判明した時、先走った住民がウィアーレを殺害しないように被害を出さなかったのだ。偽神も結果的にウィアーレを殺すことになるが、死体となって寄越されても困るのだ。

用件を伝えた偽神は野営地へと帰っていく。その背に後衛組の一人が魔法を飛ばした。迫る炎に気づいているのかいないのか。反応をみせず直撃する。

やったかと数人が心の中で思う。

だが直撃を受けた偽神は魔法など当たらなかったといった様子で歩き続けた。どこも燃えた様子はなく、その様子から避ける必要すらない攻撃なのだと示しているようで、討伐隊は強さの違いを見せ付けられた気分だった。

こんな状態で再度攻撃する気はおきず、討伐隊は退いていく。

倒れている偽神信仰者がいたが、手を出せばどうなるかわからず放置して支援組のいる陣地まで戻る。そこで負傷者の治療をした彼らは街へと帰り、伝言役を果たす。

町長は武力でどうにかなる問題ではないと判断。たった一撃で二百人近くを倒してみせたのだ、しかも消耗した様子はない。二倍三倍の数を集めても結果は同じだと考えた。集める時間がないことも理解している。

町長たちは歪みに捕らわれた者を差し出すことに決めた。一人と街の住人全部どちらを選ぶかどうか迷うまでもなかった。絶対に約束が守られるかどうかはわからないが、三日で偽神を退ける用意ができず、少しでも街が守られる方に賭けることにしたのだ。

王都に連絡を取ることができれば、まだなんとかなったかもしれないが、偽神がどうやってか邪魔しているようで連絡つかないのだ。馬を走らせても三日で到着は無理だ。転移の使い手ならば知らせることは可能だが、三日でどうにかできるとは思えなかった。一応、役人に手紙を持たせて行ってもらいはしたが。

差し出すと決めてすぐに役人たちは情報を集めだし、ギルドからウィアーレがそうだと情報を入手した。居場所も聞き、孤児院に行くもウィアーレはそこにいない。どこにいるのかウェーイに聞いてもわからないとだけ返答が返ってくる。少しでも情報を集めようと役人は街中にウィアーレについての情報を求める書いた張り紙を出す。

討伐隊が意気消沈して帰ってきたところを見た住民たちは、役人がどうしてウィアーレを求めるのかわからなかったが、ウィアーレを探さないと自分たちが危ないかもしれないと察する。

我が身可愛さに住民たちは動き、すぐに孤児院のことを突き止めた。役人たちと同じようにウィアーレの居場所を突き止めるまでには至らなかったが。

ウィアーレが見つからないまま、時間は流れる。住民たちの不安は高まり、リッカートからやってきた冒険者と治療した冒険者でも一度討伐隊を組んでもらおうかという案が出始める。

三日目までにウィアーレが見つからなければ再度討伐隊を組もうと決まり、進展なく二日目が過ぎていく。

転移先をギルドか孤児院のどちらかにするかで幸助は迷う。先に

ギルドに行くとそのまま動く必要があるかもしれないので、孤児院の無事を確かめることを優先する。

玄関先や庭に出ると子供たちやそこを通っている人にぶつかる可能性があるため、屋根に出た。

屋根から見た街は荒れている様子はなく、人通りがやや少ないといった感じだった。

屋根から飛び降り、孤児院の玄関に近寄ると、扉近くで誰かが話している声が聞こえてきた。人数は複数で、腕に包帯、右頬には塗り薬をつけたウェーイ相手になにかを話している。

「ウェーイさん、ほんとに頼むよ」

「頼むと言われてもないものはいないんだ。匿っていないのはこの前の調べたからわかってるだろう？」

「ここにいないのはわかった。だが行き先は知っているんだろう？そこを教えてくださいませんか？」

「街を出たことくらいしか知らんよ」

「いい加減この繰り返しは疲れてきたんだがねえ。お前さんがこの子たちの行き先を知らないはずないだろう！？ここ出身の子たちに話を聞いてそのことはわかっているんだ！」

「知らんものは知らんのだよ。それに知っていてもウィアーレに犠牲を強いるようなことに協力はできない」

「その嬢ちゃん一人の犠牲で、お前さんたちも含めたこの街の住民が助かるのか！？冒険者や警備兵は負け、略奪が起きても守りきれぬ者はいないんだぞ！？」

幸助は内容を理解し、気配を消して玄関から離れる。今この場で出て行くことはウィアーレの居場所を隠しておきたいウェーイが望まないだろうと推測したからだ。幸助はウィアーレと一緒に行動していて、街の人々はそれを覚えているだろう。今エリスの家にウィアーレがいることを住民たちは知らないが、なんらかの情報を持つ

ていると推測するかもしれない。

玄関から離れ、勝手口から入る。そこに誰かいれば話を聞いたのだが、誰もおらず勝手に動き回ることもできず、そこで玄関先の話が終わるのを待つことにした。

話し合いは進展を見せず、十分後に終わる。

焦りと不機嫌な雰囲気を感じさせる人々が、孤児院から完全に遠ざかったことを確認し、幸助はウェーイに会いに行く。

「こんにちは、大変なことになってますね」

「コースケさん!？」

ウェーイの緯線が幸助の周囲を見るように動く。

「ウィアーレなら家にいますから安心してください」

「そうですか、よかった。今この街に来たら住民のほとんどがウィアーレを追い掛け回すことになりますから。それだけで済むかもわからない状態です」

「偽神信仰者が近くにいますよね？」

「そうです。ですがそれだけではありません」

ウェーイは椅子に座りつつ話す。表情は暗い。幸助も近くの椅子に座る。

「詳しいことなにも知らないですよ。教えてもらえますか？」

「ええ。偽神信仰者が近くに来て、ギルドは討伐依頼を出しました。偽神信仰者たちはなぜか動こうとしませんでした。どんな事情があるかが討伐するということになりなく、一昨日冒険者と警備兵の討伐隊は集まっている場所へ強襲をかけました。相手の数は五百ほど、対するこちらは四百と少なめでしたが、地の利はこちらにあり、策を使い、油断せず戦えば負ける可能性は低いものでした」

「聞こえていた話から推測すると討伐隊は負けた？」

「はい。負けました。負傷者は伝言を持たされ見逃されました。その伝言は三日後までに歪みに捕らわれた人間を差し出せというものでした。街に入り込んでいた偽神信仰者が上手くやったのか、それともギルドがなんらかの判断を下したのか、ウィアーレの似顔絵が歪みに捕らわれた者として街中に張り出されました。あとは皆がウィアーレを探し始め、ここに住んでいたことを知られといった具合です」

偽神信仰者たちがエリスの家ではなく、こちらに来たのはコーホックが言っていたように、ウィアーレの位置を詳しくは捉えられないからだ。街のある辺りから反応があるのだから、そこにいるのだろうと思いベラッセンの住民にウィアーレを差し出すよう要求したので。

偽神が感じ取った反応は、ウィアーレが長く街にいたことで残っている歪みの残滓だ。それがあつたからウィアーレがペレレ諸島に行っていることに気づかなかった。

「ここの人たちは無事なんですか？ 乱暴されたとかは」

「家捜しの際に突き飛ばされたなどはありましたが、大怪我をしたということはなく」

よかったと幸助は胸を撫で下ろす。ウィアーレが心配するだろうと思って聞いたのだが、幸助自身も心配する気持ちがあったわけではない。大事にならなかったとわかれば安心もする。

けれど人は軽傷だけで済んでいるが、家具やドアなどは乱暴に扱われ壊れてしまった物も多い。

「討伐隊が負けた理由は相手が強かったり、こっちの質が低かったり、罠にかかったりですか？」

「いや、偽神がいたらしい」

「偽神？ 偽神信仰者が崇めてる偽神？」

聞き間違いかなと思い、確かめるように問う。

「それで間違いないですよ。偽神信仰者だけなら被害は出るものの勝てたらしいです。味方の不利を悟り、偽神が出てきて一気に形勢が変わったと聞きましたね」

「……偽神ってどれくらい強いんでしょうね」

「今の偽神はわかりませんが、昔の偽神が竜と互角に戦ったという話を聞いたことがありますね」

「竜と、それは強い」

幸助の脳裏には、以前間近に見た海竜の姿が浮かんでいる。

「まあこの国にいた黒竜のような上位竜ではなく下位竜ですが。それでもステータス平均B－はあるのですから、人間からしてみれば雲の上の存在ということに変わりないですな」

「B－ですか」

幸助の心の中にいけるかもしれないという思いが湧く。自身の強さがB－、竜装衣を使えばBまで上がる。偽神信仰者たちは討伐隊とほぼ互角と見ていいだろうから、そこまで脅威ではなく無視していい。

空からでも急襲して偽神を倒してしまえばなんとかなるのではと考える。

ウィアーレを安心させたいのか、珍しく好戦的だ。少し慢心している部分もあるのかもしれない。

いつもの幸助ならばエリスが近くにいれば一声かけるなりするだろうが、ウィアーレに知られないようにということもあり一人で動

くことにする。

偽神たちがどこにいるのか、偽神の姿を聞いた幸助は暗くなるまで孤児院で寝させてもらった。戦うのなら万全の状態で戦いたかったということと、奇襲するなら暗い方がいいだろうと考えたからだ。明かりがあるおかげで暗さが緩和されている街から出て、暗い平野を偽神たちがいる場所へ走る。

徒歩で一時間ほどの距離を走り通し、偽神の野営地を見つけた。暗い中、明かりをつけているので非常に目立っていた。

そこを念のために気配を消し、観察する。

「仮面をつけた、人間と変わらない姿だったか」

ウェーイが人々から得た偽神の情報だ。顔半分を隠す白の仮面をつけている者が一人いて、それが偽神だと冒険者たちが言っていたのをウェーイは聞いた。

外には出ていないだろうと思いつつも、遠目に偽神を探し動いていく。

「やっぱりいないか。あの立派なテントの中だろうなあ」

野営地にはいくつもテントがはられ、その中に一つだけ大きさも装飾も違うテントがある。

目星をつけた幸助は、急襲のため空に浮かび偽神がいるであろうテントの上空四十メートルまで移動する。

陽動としていくつかの場所に火を放つことも考えたのだが、物資を燃やしてしまうとベラッセンやほかの町村から略奪しそうなので止めておいた。

偽神信仰者たちに常に狙われるようなことにはなりたくないの、どこかの街で見た男を少し変えた幻を纏い、竜装衣を使う。

徐々に高度を下げ、地上から二十メートルまで来た時、幸助は体

から力が抜ける感覚がして、飛翔魔法の効果が切れた。

何事と思う間に、幸助はテントの天井を破り中に突っ込んだ。

こんな派手なことをすれば当然周囲は気づく。

偽神信仰者たちがテントを取り囲む中、痛みに顔を顰めつつ幸助は偽神と対面していた。

「何者」

仮面で顔を隠した者が短く問う。

声が発せられただけで、幸助の背にじわりと汗が滲む。

見た目から女だとわかるが、枯れた声と見た目の年齢があっていない。年は二十過ぎくらいだろう。真っ白な長髪と青白い肌を持ち、すつきりとした顎のラインや形のよい唇から美人なのかもしれないと、幸助は思う。仮面の目の部分に穴が開いてはいるが、暗く目は見えない。

「刺客と答えようか」

「一人でか？ 剛毅」

「やれると思ったから来たまでだ」

そう言いながら幸助は内心焦っている。戦いに来たのだが、今はどうやって逃げようかと焦りを押さえつけ必死に考えている。

偽神から感じられる強さが思った以上だったからではない。むしろ海竜よりもずっと弱いと断言できる。ステータスで表せばBに届いていない。

それなのに幸助が弱気になる原因は、

（コーホックからもらった薬なんだろうな）

と予測をつけていた。

空から落ちた時に感じた力のなくなる感触が、コーホックがそばにいた時に感じたものと同じだったのだ。

しかし全く同じではない。同じだったらもっと焦っている。焦が少ないのは力の下がり幅が少ないからだ。あの時はステータスEだったが、今はそれ以上にあると感じられている。いつものB-にはまったく届かないが。

（だいたいジェルム以上エリスさん以下。ステータスD+くらいかな）

それくらいと自身の力を見て取り、当たっていた。

冒険者としては上位に来る実力だが、偽神を倒し、集まった偽神信仰者を倒せるかという無理だ、断言できる。偽神信仰者の中にはステータスD+の者もいる。そういった者がいなくとも、今の幸助に百人以上の相手を蹴散らす力はない。故に逃げることを優先しなければならぬ。理性も本能もそれで一致していた。

「来ないのか？」

（それができたら苦労はしないんだよ！）

対面する偽神から自分以上の力を感じ取り、迂闊に動けないのだ。あの薬は神と幸助の力量を同程度下げる効果がある。だがその効果は、幸助が偽神に自分以上の力を感じ取っていることからわかるように、完全には発揮されていない。

これは偽神が正式な神ではないからということと、歪みを力の元としているからだ。正式な神ではないため、力の下がり幅が少ない。体の中にある歪みが薬を正常に作用させていない。偽神は歪みを使いこなすことはできないが、確かに偽神の中にある。

この二つの理由が、幸助と偽神に力の差を生み出した。

「こっちから行く」

偽神は近くにあった装飾の多い錫杖を掴むと無造作に突き出してくる。幸助はそれを避けきれず、右腕に滑るように当たるも性能が上がったジャケットのおかげでダメージはなかった。偽神が全力ではないこともダメージがない理由だ。

偽神は連続して錫杖を突き出し、幸助は少しずつ下がりがら避けていく。初めに比べると突きの速度は上がっていて、幸助は完全に避けることができなくなっていた。ジャケットに当てればダメージが少なくて済むので、腕で防御していく。

「どうした防御と回避だけか？」

隙あらばと幸助は投げナイフを両手に持つてはいるが、投げる暇はなかった。

幾度も突きを放ち、偽神はジャケット部分に当てても成果はほぼないと察し、顔や足を狙い始める。当たればダメージは受ける。だが狙いが絞れたおかげで、少しは避けることができるようになる。滲んでいた汗は、今では流れるほどになっている。

「粘る。お前の実力か、それとも事前に行ったなにかのおかげか」

偽神も自身の能力が下がっていることに気づいていた。それが神の作った薬のせいということや二人が離れたら元に戻るということまでは気づいていない。

「どうだ！」

隙は見つからなかったが、無理矢理ナイフを投げる。代償として太腿を叩かれ、骨に響く痛みが走る。それを齒を食いしばって我慢

する。

偽神の胸目掛けて飛んでいったナイフは狙いたがわず命中する。

「動きはいいが、無力」

ナイフは服に穴を開けて止まる。そのまま床に落ちた。床に転がっているナイフには血の一滴もついていない。偽神にダメージを与えることはできなかったのだ。

あの程度では駄目ということ覚えておき、次に投げる時はもっと威力を高めると幸助は心の中で考えている。

再び偽神の一方的な展開になる。下がることは止めておらず、後ろに下げていた手にテントの壁が触れる。

幸助は錫杖を避けながらも一本ナイフを取り出す。壁は分厚いが布製で、切り裂いて出ようと考えた。

「アメガレト様、失礼いたします」

背を見せダメージ覚悟で、壁を裂こうと動きかけた時、テント入り口から中の様子を知るため偽神の世話役が入ってきた。

一瞬偽神の気がそれたことを見て取り、幸助は入り口へと走り外に出る。すぐ後ろで錫杖が壁を叩く音が聞こえた。

外にはテントを囲むように偽神信仰者たちが集まっていた。少なく見ても百人以上はいる。中には武器を手を持ち殺気立っている者もいる。これら全てを相手取る必要はないだろうが、数十人と戦うことになるかもしれない。偽神から早く離れようと思い、痛む太腿のことを考えないようにして囲む人々に突っ込む。

四方八方から剣や槍が突き出され、それを避け切るのは無理だった。胴と腕は無事だが、顔や足に切り傷があつという間に増えていく。同士討ちを避けるためか、魔法などは飛んでこなかった。一歩進むたびに傷は増え血が流れ、一メートル先が遠く感じられる。傷

だらけになりながら幸助は技術も鍛えることを決めた。今までは力押しでどうにか頑張ってきたが、セクラトクスや今回のような特殊な状況で同格の相手と戦い、力押しになりがちだと痛感したのだ。次があるかわからないが、あるかもしれない次に備えておこうと心に決めた。

そんなことを考えているからか、既にテントから偽神が出てきている、そのことに気づく余裕もない。

ただ必死に突き出される武器を避けていると、背後から偽神の声で散れと聞こえてきた。

偽神の命令に偽神信仰者たちは即座に従い、左右に避けていき、偽神から幸助まで真っ直ぐに道ができる。

今がチャンスと幸助は振り返らず走る。その背に偽神は魔法を放つ。

「死ね」

吹雪混じりの氷の矢が幸助へと迫り、いくつも当たっていく。幸助は勢いに押され、地面を転がる。転がっている途中で薬の効果範囲から抜け出たのか、力が戻るのを感じ取った。

あの状況では倒れたままだろうという偽神信仰者たちの予想を裏切る動きで幸助は立ち上がり、痛みを我慢し走り去る。夜闇に消えていく幸助を偽神信仰者たちは追いかけるが、振り切られ捕らえることはできなかった。

そのことを偽神は咎めることなく、テントに戻る。

「あいつは何者だったのでしょうか？」

「刺客」

世話役の疑問に短く答えた。

「アメガレト様を殺せると思っていたのでしょうか？　というより刺客を送ってきたということは我らの要求を突っぱねるつもりなのでしょうか」

「かもしれない。再度の攻撃あるかもしれぬ、皆にそのこと告げておけ」

「はい」

世話役はテントを出て行き、偽神は錫杖を置いて、椅子に座り目を閉じる。

世話役が戻ってきてても目を開けることなく、そのままだった。世話役は偽神に声をかけることく邪魔しないよう静かに椅子に座る。そのまま静かに時間が流れていく。

幸助は偽神のいる野営地から全力で十分走り続け逃げ切った。血が減り遠のく意識を繋ぎとめ、家へ転移魔法を使う。

転移先は居間で帰りの遅い幸助を、エリスとウィアーレがそこで待っていた。

「た、ただいま。治療お願い」

「なにがあったんじゃ!？」

「コースケさん!？」

全身傷だらけ、息も絶え絶えな幸助の様子にただ事ではないと二人とも慌てる。人間最強と云っていい幸助がここまで傷だらけになることなど滅多にない。またセクラトクスと戦ったかと考えたが、それならば共にいるはずで別のなにかにやられたのだろうと考える。

「意識保つの、辛いから、短く言うと、偽神が来た。ベラッセンに、ウィアーレを、要求。それを、どうにかしようとして、このざま。

……ごめん、ちよつと寝る」

短すぎる情報を残して幸助は意識を失った。

ここで幸助はもう少し粘るべきだった。制限のつく薬のせいで負けたと言え、二人もなんのハンデもなく真正面から戦い負けたと思うことはなかったのだ。

エリスが治療するのを手伝いつつウィアーレはウェーイたちのことを考える。

治療が終わり二人で幸助を部屋に連れて行く。

「コースケさんがここまで傷つくなんて」

「今回の偽神は強いのだな。今までの偽神の中で一番の力を持っているのかもしれない」

「そんな偽神にベラッセンが狙われたら」

「ひとたまりもないじゃろうな」

部屋を飛び出そうとしたウィアーレの腕をエリスが掴む。

「名乗り出て交渉でもするつもりか？」

「それしか父さんたちを守る手段がない！」

放してと手を揺らすも、エリスの筋力には敵わず掴まれたままだ。

「交渉に応じてくれると思うのか？ お前さんが出て行けばこれ幸いと捕まえ、あとは好き勝手動くだけじゃと思うがな」

「でも交渉に応じてくれるかもしれない！ コースケさんがどうにかできないなら、偽神の欲しがってる私自身を対価にするしか！」

「コースケがどうにかできないと決まったわけじゃなからう。一度戦いなにか勝機を見出しているかもしれない。お前さん自身が出て行くのは、最後の手段にしておけ」

納得できないという表情のワイアーレにエリスは続ける。

「コースケが信じられんか？　これまでお前さんの頼みを引き受け、どうにかしてきたコースケが信じられんか？」

「信じられるけど……」

「今はその気持ちを抱いてコースケが起きるのを待っている」

看病は任せたと行ってエリスは部屋から出て行く。幸助が起きたら再戦のため動くだろうと考え、そのための準備を今からしておくのだ。

一時間ほどなにかを考えつつ、看病していたワイアーレは決意した顔で立ち上がる。そっと扉を開け、静かに玄関へと向かう。

階段を下りて玄関の前まで来た時、聞き覚えのある声が頭の中に響く。

『おっとストップだ』

「……この声はコーホック様？　なにか用事でしょいか？」

エリスに聞こえないよう小声で話す。

『ああ、行かれたら困るからな。歪み使いは神には重要なんだ』

「では偽神をどうにかしてもらえるのでしょうか？」

『いや、なにもしない。偽神の被害は人間のみで、世界に影響を与えないからな』

偽神は強い力を持っているが、これまで信者ためにだけ動いている様子を見て、世界を壊すようなことはないと判断している。信者たちは死にたがりではないので、世界を壊すといった自殺行為は望まず、神にとっては無害なのだ。

神の名乗ることがおこがましいという思いすら抱いておらず、世

界の一部としてみなし排除する気もない。

「そんな!？」

『慌てることはない。コースケならばなんとかできる』

「なんとかできるって、また負けるかもしれないじゃないですか！今回は怪我で済んだけど、次は死んじゃう可能性だって……そんなのは嫌です。止められたって行きますから」

『……仕方ない。事が終わるまで隔離させてもらうぞ』
「え？」

疑問を抱いたワイアーレを包むように淡い黄色の光が生じる。その光が薄くなっていくと同時にワイアーレの姿も薄くなっていき、光が消えた頃にはワイアーレも消えていた。

『ミタラムは上手くやったかねー』

誰もいなくなった階段前にコーホックの声が小さく聞こえ消えていった。

ワイアーレが消えて一時間経ち、準備を一段落させたエリスが幸助の様子を見に部屋に入る。

「コースケは起きた? ……ワイアーレ?」

トイレかと思い、幸助の様子を見つつ少し待つ。十五分が過ぎてさすがに変だと、家中を探してみる。一通り見て回っても見つかることはない。

「出たのか」

落ち着いた様子でない理由を推測する。

まだ遠くに行ってはいないだろうと、ベラッセン方面へ人探しの魔法を使うが、反応がなく首を捻る。

「どういうこと？ 歪みを使って魔法の効果を逸らしている？ そんなことできるとは聞いておらぬが」

いなくなって慌てないのは、ここからベラッセンまで徒歩二日弱かかり、転移や飛翔の魔法を使えないウィアーレには行程の短縮化ができず、先回りが可能だからだ。

ウィアーレがいくら急いでも一日足らずで到着は無理だ。幸助の目覚めを待っても十分に間に合う。

エリスは自身の体力を減らさないため、床に座り込み毛布に包まって壁に寄りかかり眠る。寝心地がいいとはいえないが、野宿よりもましだ。

幸助は意識がどこかぼんやりとしながら目を開く。目に入る色は乳白色一色。それに以外になにもないが、そのことに疑問は抱かない。ただ安らいだものを感じている。

「起きた」

乳白色の空間に、突然濃紫の長髪を持つ少女が現れた。誰もが可愛いと思うと同時に考えが読めないと思うだろう容姿だ。

「誰？」

「ミタラム」

「……偶然と必然の神様と同じ名前」

「本人」

「そうなんだ」

いまだぼんやりとしたままの幸助に、ミタラムは幸助ではない誰かに何事か呟いた。

それが関係しているのか、幸助の意識がはっきりして目に光が宿る。途端に様々な疑問が浮かぶ。

「え？ ミタラム？ どうして？ それにここどこ？」

「あなたに助言しに来た。ここは夢の中。夢を司る神の力で話せている」

「神様って人の夢の中にまで来られるのか。助言って？」

「偽神と戦うのに役立つはず」

「偽神？ あ……」

眠る前に起きたことが心に思い浮かんでいく。

幸助は両腕で震える体を抱く。顔は恐怖で染まっていた。

「怖いの？」

「怖い？ 怖いに決まってる！ 死にかけたんだ！」

これまで幸助が死にかけたのは三回。

竜にぶつかった時、セクラトクスと戦った時、そして今回だ。

一回目は意識がなかった。二回目は怒りで恐怖が薄れ、痛みで意識が飛びかけていた。だが今回は最初から危機を感じていた。

明確に命の危機を感じたのは初めてなのだ。ステータスが強化され遠ざけられていた死を感じて、それを思い出し恐怖に震えている。そんな幸助の様子を見て、困ったように小首を傾げたミタラムは近づいて幸助の頭を抱きかかえた。以前見た人間の親が、泣いている子供にこうやっていたことを思い出し真似た。

ここは夢の中だ、時間などいくらでもあり、落ち着くまで待つのに問題などない。

いくらかの時間が流れ、震えが治まった幸助はミタラムから離れる。恥ずかしさに顔を赤くしつつ。神とはいえ見た目年下の少女にかっこ悪いところを見られ、なおかつの胸に抱かれ慰められたのだ、すごく恥ずかしかった。

「落ち着いた？」

「……おかげさまで。ありがとうございます」

「本題に入る」

幸助の心情を気にせず、ミタラムは夢の中にまで来て伝えたかったことを話す。

淡々としたミタラムのおかげで、幸助は頭が冷え落ち着いて話を聞くことができた。

「力の使い方が下手」

「力の使い方？」

「抑えて戦うか、全力で戦うかしかってない。それだと偽神を相手にするには厳しい」

「……また偽神と戦うって決まったわけじゃ」

「ウィアーレを見捨てるの？」

「っ!？」

その反応で見捨てられないと見抜き、ミタラムは続ける。今度は遮ることなく最後まで聞いていく幸助。

聞き終えて、閉じていく意識の中で偽神に届くかもしれないと小さく希望を抱いた。

完全に意識が閉じる前に「頑張って」と聞こえたような気がした。

再戦

幸助が目を覚ましたのは日が昇ったすぐ後だ。身を起こした物音でエリスも起きる。

「コースケ……？」

声をかけようとしてエリスは止めた。

身を起こした幸助が童装衣を使って、右手を見ているのを見たからだ。やがて起きた変化に幸助は満足そうな笑みを浮かべた。

「できた」

「コースケ、それは？」

「あ、エリスさん、おはよう。これは力の効率的な使い方を教えてもらったんだ。これなら望みはまだある、と思う」

表向き今の幸助に恐怖を感じている様子はない。恐怖はあるが、心の中に仕舞いこむことができている。

だから幸助が死に怯えていたと、エリスが気づくことはなかった。

「教えてもらったって誰に？」

「ミタラムって名乗った神様」

「偶然と必然を司る神じゃったか。その神がどうして力の使い方を教える？」

「偽神を俺に倒してもらいたいとか、詳しい理由は教えてもらえなかった」

正直なところミタラムは幸助が偽神と戦うことは反対なのだ。

偽神を殺すだけならばセクトクスをぶつければいい。強い相手

と戦いたがっているセクラトクスならば喜んで戦うだろう。ただしそれは博打でもある。今セクラトクスが関わっている騒動は、ミタラムが見た未来に関わっている。セクラトクスが事件を解決すれば、未来が変わる一因となる。失敗すれば未来が決まる一因となる。

その騒動はドラゴンには及ばないが、準ずる力を持つアンデッドキングという魔物が関わっており、あの場で倒せるのがセクラトクスくらいしかないのだ。セクラトクスを連れてくると、人口十万人の都市がゾンビやスケルトンといったアンデッドモンスターの住処になる。人間がアンデッドに変わること事態は問題視していない。アンデッドキングが自由に動くこと、魔物が増えることを問題視している。

「神には神の考えがあるということかのう。まあよい。それよりも昼になにがあったのか詳しく聞かせてくれ」

「えっと」

竜装衣を解きつつ、倒れる前に話したことを思い出す。

リッカートでガレオンの頼みを聞いたところから、偽神信仰者の野営地脱出までを語っていく。薬による弱体化も忘れずに話した。

「なるほどのう。薬のせいであんなになるまで苦戦したのか。というか偽神でも効果が出るのじゃな」

「効果が中途半端で助かったのか悪かったのか。逃げ切れたことを考えると助かったのかな」

「偽神の強さはどれくらいじゃった？」

「おおよそでいいなら……称号で強化する前のセクラトクスと同じくらい？」

「平均Cくらいか。それなら私と一緒に行けばなんとかなるか」

一対二ならばそれでいいだろうが、偽神にも仲間がいる。幸助は

そこを指摘する。

「魔法でまとめて蹴散らせば問題なからう？」

「討伐隊がそれやって全弾外されたんだと。俺が偽神に近寄れば能力が下がってそうだったことはできないかもしれないけど」

「偽神側に動きを悟らせずに魔法を使ったのではなく、討伐隊は野営地前まで言って攻撃を仕掛けたのだろ？ 偽神側に戦う準備はさせなかったが、攻撃しようとする様子は見えていたと思っっているんじゃない？」

「そう聞いたよ」

「ならば攻撃の意思を悟らせず奇襲を行えば、一度は偽神信仰者たちにダメージを与えることが可能だと思うが、どうじゃろう？ それで偽神信仰者たちを誘き出し、コースケが偽神と戦っている間に私が偽神信仰者たちをさっさと倒してそっちに合流すれば」

「勝率は上がるか」

「能力の下がった偽神ならば私でも十分戦力になるからの。竜相手よりましじゃ」

一人で突っ込んでいった時よりも勝率は高いが、幸助はもう少し勝率を上げたく思う。エリスが囧になっても、偽神信仰者全員が偽神のそばを離れるわけではないと考え、能力が下がった状態でそれらの相手をしつつ偽神と戦うのは無理だ。それらの相手をしてもらうのに、ジェルムたちを雇うことを思いつく。

「ジェルムたちには多少の事情を話してるし、話せないこともあるって理解しているから雇っても大丈夫じゃないかって思う」

「たしかに全員が誘き出されるわけではないか。しっかりと口止めするという条件つきでなら頷くぞ。目立つつもりはないのだろう？」

偽神討伐は難易度が高い。成せば名声が手に入り、名が広まる。

当然王族貴族といった者たちの関心も集まる。

今まで幸助はそれらに関わることを避ける方向で来た。これからもそれを続けるのならば、今回の偽神討伐を成し遂げてもらえれば、それが必要がある。

「口止め料も込めて雇用料払えば黙っててくれる、といいなあ」

一名黙っていられるか不安な人物が幸助の頭に浮かぶ。

「不安な奴でもおるのか？」

「ジェルムがちよいと不安かなあ」

「思い込んだら一直線な娘か。うっかり口を滑らせる可能性もあるか。話してそれでも心配なら外れてもらうことも考えよう」

「そうだね。そういえばウィアーレの姿が見えないけど、どしたの？」

「あの子はベラッセンに向かったようじゃ」

「向かったって……そんな落ち着いて言うことじゃないよ！？ 探して連れ戻さないよ！」

「必要ない。むしろ好都合。ここからベラッセンまで二日だ。ウィアーレが移動している間に討伐を終わらせてしまえばいいだけだよ」

歪みを使えばここらに出てくる魔物から逃げるくらいはわけもないので、一人で行動していることは心配していない。

「そう、なのかなあ？」

「そうだと納得しておけ。その方が気合が入ろう。この話はここまですべてして、この後はどうする？ もう少し休んでから行動するかの？ そのジェルムという娘のところに行くにも早すぎる」

時刻は午前六時を少し過ぎた頃だ。

「俺は十分休んだし、起きてていいんだけど。エリスさんはどうする？ 俺は朝ご飯作るよ」

「私は一階のソファで横になっておこう。朝食ができるまで休んでおるよ」

行動を決めると二人は一階に下りる。エリスは早速ソファに寝転がり、二分ほどで寝付く。幸助はそんなエリスを視界の端に入れ、のんびりと朝食を作っていく。

昨日のパンの残りを使ったピザトースト、作っておきしていたチキンブイヨンを使った屑野菜スープ、甘さを控えたヨーグルトソースのかかったフルーツサラダの三品だ。どれも手間がかかるものではなく、のんびり作っても一時間かからず出来上がった。

寝ているエリスを起こして、朝食を済ませる。朝食後、エリスは準備していた武具を身に着けていく。杖は一・三倍の増幅器で、青糸で紋様の描かれた紫地のマントは魔法に強い布で出来ている。この二つは冒険者として活動していた時の装備だ。ほかに魔力を回復する丸薬なども持ち出している。

全ての準備を終えて、転移でベラッセンに移動する。街の入り口で一度、家方面へ人探しの魔法を使うが、やはり反応はなかった。

「やはり反応はないか」

「歪みって便利であり厄介でもあるね」

「そうじゃのう」

話しながらシディの宿へ向かう二人に、街の住民が厳しい表情で近寄ってきた。

「あ、あんた！」

「俺？」

「そうだ！ あんたウィアーレって女とよく一緒にいただろ！？」

「そうだけど。それが？」

「居場所を教えてください！ 今日が期限なんだ！ さっさと差し出さないと偽神がやってくる！」

ウィアーレを差し出して助かりたいという気持ちはわかる。だが知人を犠牲にするとはっきり言われて、不快に感じないわけがない。そういう思いを心に隠し、なんのことだかわからないといった風に返事を返す。

「知らないのか？ 街から少し離れたところに偽神や偽神信仰者がいるんだ。討伐隊が組まれたが、やられたんだ。もう一度組まれるらしいが、勝率は低いって誰もが言ってる」

「そんなことに。悪いけど今のウィアーレの居場所は知らないんだ」

現在地を知らないという意味では嘘は言っていない。それに騙されたか、住民は項垂れて離れていく。

宿に着くまでに同じことが二度あり、誰もがウィアーレを差し出そうとしていた。

一般人が太刀打ちできるような存在ではないと知っているため住民を責める気はないが、今後依頼を受ける時に幸助は心中穏やかざる思いを持ちそうだった。

リッカートに本拠地を移そうかなと考えつつ宿に到着した。

「いらっしやいって、コースケとボルドスさんのお姉さん！ 泊まりに来たの？」

「違うよ。ジェルムたちってまだここに泊まってる？」

「泊まってるよ。でもジェルムさんは怪我で寝込んでる」

「討伐隊関連で怪我を？」

「そうみたい。ウドリガさんが薬師として治療してるから、順調に回復してるみたいだよ」

蟹を渡して得た薬草がさっそく役に立ったのだ。

ジェルムたちの部屋を聞き、二人は移動する。扉をノックすると私服姿のテリアが出てきた。

「コースケさんと誰です？」

「とりあえずおはよう。話があって来たんだけど中に入っても大丈夫？」

「はい、どうぞ」

少し散らかってますがと前置きして入り口からずれる。

「ウドリガにも聞かせたいから呼んできてもらっていい？ その間にジェルムの治療しておくよ」

「わかりました」

頷いてテリアは部屋から出る。

ベッドに近づくと気配を察したのか、ジェルムが目を開ける。

「コースケさん？ それと知らない女の人？」

眠たげな様子で口を開く。

「おはよう。治療するからどこが悪いのか教えてくれ」

「左肩と右の太腿と足首だけど？ 肩と足首は骨にひび、太腿は切り傷」

わかったと言って幸助はそれぞれの症状に合わせて魔法を使って

いく。

その治療の間にテリアがウドリガを連れて戻ってきた。

「これで終わり。どう？ 痛みは引いた？」

ジェルムは起き上がり、体調を確かめるため体を軽く動かす。動くたびタンクトップの胸元が開いて近くにいた幸助には覗けてしまい、視線を見えない方向へとずらす。

「治った、治ったよ！」

嬉しそうにはしゃいだ声を出す。

「ありがとう！ ウドリガもありがとう」

「仲間だべ、気にしなくてよか」

気にするなとウドリガが手を振る。

「コースケさん、話があるって言ってたけど、それはどんな話ですか？」

治療が終わり、ジェルムの確認も終わった時を見計らいテリアが聞く。

「三人を雇いに来たんだ。討伐隊に参加したみたいだから偽神がいることは知ってるよね？ 俺はその偽神を殺そうとしている」

「いやいやいや！ さすがにコースケさんが強かろうと無理でしょ！？」

ジェルムの主張にテリアも頷いている。

「おらも同意見だ。あんたが強いらしいというのは三人から聞いたが、ジェルムの言うように偽神は無理だべ。おらたちが加わったところで有利になるわけでもない。討伐隊が組まれるみたいだから、その人たちと一緒に行った方がいいと思うだよ」

「討伐隊と一緒に行動したら、作戦に支障がでるんだよ。三人に偽神戦に参加しろとは言わない。相手してもらいたいのは、偽神のそばにいる者たち。奇襲と囷で偽神から離しても、全員がいなくなるわけじゃないから、残った偽神信仰者たちの相手をしてもらいたい。偽神の相手は俺とエリスさんがする」

腰が引けている三人に、やろうとしていることを説明する。

「確かにあの時、防御する時間は与える形になってた。完璧に奇襲できるなら魔法を防ぐことは無理かな。例え偽神でも瞬間的に防御魔法を使えはしないと思うし。でもたくさんいる偽神信仰者たちに大ダメージを与える魔法なんて使えるの？」

エリスの実力を知らないテリアからすれば当然の疑問だろう。

「広範囲への魔法は使える。これでも一応優れたる魔女と呼ばれておるからな」

「優れたる魔女？ エリスって名前に聞き覚えあるなって思ったら、有名な魔女じゃないですか！？ そんな人が協力するなら偽神討伐なんて言えるわけですね」

幸助たちの自信の源を発見したと、テリアは納得している。エリスのことを知らなかったジェルムとウドリガも、テリアからエリスが行ったことを聞いて納得した様子を見せる。

そんな三人の様子から、幸助は有名なことは人々を安堵させるこ

ともあるのだと実感し学んだ。といってこれから自身も名を広めようとは思わなかったが。名を広めることで起きることがいいことのみならば、エリスに出会って説明を受けた時にどうするか聞かれはしなかっただろう。いいことだけではないからどうするか問うたのだ。

「確認ですが、私たちが相手するのは偽神信仰者だけですよね？」

「そうじゃの。ただし取り巻きが全員囹に釣られたら、コースケの援護をしてもらうが。直接は戦わずともよい」

「援護とは？」

「離れた位置から石を投げるなり魔法を使うなりして偽神に集中させない。注意が散漫になれば隙もできる。私が合流すればそれもする必要はない。あとは道具を貸そう。一・三倍の腕輪型増幅器と身軽に動けるようになるベルトと筋力が一定時間上がる丸薬じゃ」

「そんなベルト持ってたんだ」

幸助の言葉にエリスは頷く。

「戦いの準備をしている時に、以前暇つぶしのダンジョンで手に入れたことを思い出してな。依頼を受けることがなくなり、使わなくなっ

て持っていたことを忘れておった」

最後に使ったのは二年近く前、黒竜に挑んだ時だ。

「増幅器もすごいですけど、もしかしてそのベルトって神器ですか？」

「うむ」

二十五年ほど前に暇つぶしのダンジョンを突破し手に入れたのだ。ダンジョン突破の景品ということ、すなわち神器だ。

使用期限が切れているかもしれないと、見つけ出した時にエリス

は身につけ効果を確認し、まだ使えたので持ってきた。

「腕輪は私が持つとして、ベルトはどっちが使う？」

この言い方からしてテリアは雇われることに決めたようだ。ほか二人も使うことを考えているので、テリアと同じなのだろう。

「……使ってみたいけど、ウドリガの方がいいと思う。それを身につければいつもより攻撃が当てやすくなって、私も助かるし」

ウドリガは力の強さから一撃は重いが、やや鈍重で素早い敵には不利なのだ。しかしこのベルトがあればジェルム以上の活躍ができると期待されている。

「おらが使っているのか？」

頷くジェルムを見て、エリスからベルトを受け取った。

丸薬は二人分あるので、戦いの前に前衛二人が飲む。幸助は例の薬との相互作用がどうなるかわからず、飲まないようエリスに止められた。

「報酬は全額前払いで一人金貨五枚。はい、渡しとくよ」

タンスに放り込んでいたお金から持ってきた金貨を三人に渡す。

「多っ……くはないのかな？　どうなんだろう？」

手の上の金貨を見て、ジェルムが首を傾げている。偽神と戦うのなら安い方だが、その護衛相手となると高い。偽神信仰者討伐で支払われる金額は、一番の活躍をした者で大体金貨二枚だ。

偽神の近くで戦う危険性と口止め料を含めてこれくらいではないかと、エリスに提示された金額をそのまま準備したのだ。

「多い方じゃよ。それには口止め料も入っておる」

「口止め料？　なにを黙ってもらいたいんだべ？」

「私らが偽神に挑み倒したということを」

エリスの言葉が心底理解できないとジェルムたち三人は首を傾げる。偽神討伐で得られるお金と名誉は計り知れない。それを放棄すると言っているのだから、一般的な冒険者に属するジェルムたちからすれば理解できなくて当然だ。

口止め料というか依頼で報酬を払うという形にしたのは、こちら側の事情を探らせないという意味も込められている。

幸助が頼めばジェルムたちは協力する。鍛えてもらっている恩があるから。ただし詳しい事情も求めてくるだろう。竜殺しや歪み使いという話はあまりしたくない。なのでお金で雇い、深入りするな依頼した仕事のみやれと示しているのだ。

「どうして黙っておかないといけないんですか？」

「有名になる気がないから。前も言っただろ、下手に動くと王に迷惑かけることになるって」

「言っていましたけど、それなら討伐に行かないって選択肢もあると思うんですけど」

「その選択肢は選べない。ワイアーレがいるから」

幸助のその言葉でジェルムとテリアは、幸助が偽神討伐に関わる動機を理解した。

「ワイアーレって皆が探している人だべさ。あんたの知り合いだったべか」

「うん。偽神に差し出すって選択肢はないし、このまま放っておくってことも選べない。先延ばしにするだけだからね。だから倒すしかないんだよ」

「名声とか欲しくなくても偽神討伐しようとする理由はそれだべか、納得だ」

「そういえばコースケさんたちは、偽神がワイアーレって人をどうして欲しがっているのか知ってるの？」

偽神の要求を聞いて抱いた疑問をジェルムは聞いてみる。

「今の偽神の体はそろそろ使えなくなる。次の器として適合したのがワイアーレらしい。どういう理由で適合したのかは知らない。歪みが関連しているのだろうと思うけど」

「じゃあ差し出せば偽神は若返るってこと？」

「それで合ってると思うよ」

「街の人たちはそのこと知ってるのかな？」

ジェルムはテリアを見る。自分は怪我で動けなかったし、ウドリがも治療のためほぼ宿から動いていない。けれどもテリアは動けた。偽神の要求といった情報を集めてきたのはテリアで、今の街のことに詳しいのもテリアだ。

ジェルムの視線を受けてテリアは首を横に振る。

「多分知らないと思う。偽神が元気になるって知ってたら、ワイアーレさんを差し出すことに躊躇いを感じるはずだし」

テリアが知るかぎりでは住民たちが躊躇いを感じていた様子はない。

「本調子じゃない今が倒し時なんだね。よおっし気合入ってきた！」

ジェルムが偽神を倒すわけではないが、倒す手伝いをして街や人々を守ることができる。ジェルムが憧れた冒険者のようで、それになれるかもしれないと思うと嬉しく気合が入った。

幸助にはそういった思いはわからないが、テリアやウドリガはなんとなくわかる。エリスも察することはできたが、同意はしない。エリスにとって冒険者とは生きていくための手段で、憧れを持ったことはなかったのだ。

話が終わり、三人の戦う準備も終わる。ウドリガはベルトをつけた状態で軽く動き、普段との身体能力の差を確かめた。

五人は再び同じ部屋に集まる。ここから直接偽神の野営地近くに転移するのだ。討伐隊が出る前に偽神信仰者たちに仕掛けたいので、移動時間を惜しんでいる。

エリスが転移魔法の準備を始めようとした時、扉がノックされる。一時中断し、テリアが出る。

「コキア君？」

やって来たのは戦いの準備を終えたコキアだ。

時間的にはまだ午前八時を少し過ぎた頃で見舞いには早いし、見舞いに鎧を着込んで来ることはないだろう。

戦う準備をして勢ぞろいしたメンバーを見て、コキアは驚きの表情を見せている

「コキア？ なにか用事？」

「コースケさんたちと同じ。皆も討伐隊に参加するんでしょ？ それに連れて行ってもらおうと思って頼みに来たんだ」

「俺のいない間に強くなった？」

ジェルムたちを見るが、三人は首を横振る。最後に幸助と会った時よりは強くなっている。だが劇的に強さが上がっているわけではない。魔物と戦わせる前に偽神信仰者たちが来て、鍛えるどころではなかったのだ。

「駄目。今回は誰もコキアのフォローできない。俺もそんな余裕はない」

「次はついていけるようにって訓練して奥義を使えるようになったんだ！ それでも！？」

「奥義？ まさか俺が出かける前に教えたあれ？」

「風流しって言ってたやつ」

「ほんとに使えるようになった？」

「ずっと一人で秘密の訓練して昨日なんとかできるようになった」

「ほんとにできるようになったのコキア君？」

「ほんとだってば」

「コースケさん……」

テリアは戸惑いと驚きの感情をたつぷりと乗せて幸助を見た。見られている幸助も同じ思いだ。

この場でもっとも驚いたのは、奥義が出鱈目だと知っている幸助とテリアだろう。ジェルムも驚いてはいるが、二人には及ばない。奥義がなんのことだか知らないエリスとウドリガは驚きようがない。確認してみようと宿の庭に出て、風流しと呼ぶ技を使ってもらう。コキアは腰を落とし、剣を構え集中する。魔法を使える者たちはコキアの持つ剣に魔力が取り巻くのを感じ取った。

「風流し！」

技名を呼び剣を振る。幸助が見せたものは突風のようなものだったが、コキアが見せたものはカマイタチにも似た風が吹いた。幸助

のものは突き倒すといった感じで、コキアのもは一箇所を打つといった具合だ。

どうだとコキアが胸を張り、誇らしげに幸助を見る。

「……ほんとにできたんだな」

「……できちゃいましたね」

すごいなとジェルムとウドリガが感心している横で、幸助とテリアは呆気にとられた表情でコキアを見ている。

「二人ともなにを驚いておる？ あれは魔法じゃろ？ 少々風変わりじゃが」

「「魔法？」」

エリスの言葉に二人とコキアは声を揃えて聞き返す。

「魔力を使い、祈りを捧げ、望んだ効果を出す。これが魔法でなくてなんじゃ？」

そうエリスの言うとおりなのだ。コキアは奥義を使おうと訓練し、幸助が見せた現象と似た魔法を作り上げた。

ただし訓練するだけでは作り上げることはできなかった。コキアと相性の良い『風』だったので完成に至ったのだ。

「でもコキアの魔力はD-にも届いてないのに、あんな魔法使える？」

「ギフト持ちなんじゃろ。ギフトは本来の実力以上の結果を出させるからう」

「俺ギフトなんて持ってないけど」

カードを見せてみるというエリスに従い、ポケットからカードを出す。

コキアの知らぬ間に、ギフトの欄に『風の祝福』という文字が刻まれていた。毎日カードをじっくりと見るわけではないので、気づかなかったのだ。ギフトが刻まれたのは初めて風流しを成功させた時だ。

「あ、なんか出てる」

「風の祝福というのは、風の魔法に適正を持つということじゃ。それのおかげでさっきの魔法が出来上がったのじゃろうて。先祖にシルフがいると出ると聞いたことがある。親から先祖に精霊がいると聞いたことないのか？」

「一言もそんなこと言ってなかった」

「親も知らないくらい先祖なのかもしれんの」

「の祝福というのは精霊の種類分だけあり、効果はどれもコキアのギフトと似たようなものだ。」

精霊の子孫全員が持っているわけではなく、ある程度の適正が必要となっている。

このギフトを持っている者の多くは、魔法使いの道を選ぶ。一属性だけとはいえ実力以上の魔法が使えるのだから、活かさない手はない。

エリスがコキアにそのことを説明し、幸助が剣士から魔法使いへと転向するか聞く。

それにコキアは首を横に振る。魔法使いよりも剣士になりたい。冒険者に憧れた時、思い描いたのは剣士の自分だ。

「まあ好きにするといい。それを活かすも殺すも自分次第なのだから。今回のように自分が欲しいものを作り上げるという方法も取れるからのう」

エリスの言葉にコキアは頷き、幸助の方へ向く。

「奥義習得したしついていいですよね」

「それとこれとは話が別。できることは増えたけど、強さが上がったわけじゃない」

「……いや連れて行ってもいいかもしれぬ」

「エリスさん？」

足手まといになるとわかっていなのに連れて行くことを認めるエリスを、幸助は不思議そうな顔で見る。ジェルムたちも同じだ。対してコキアは嬉しそうな顔だ。

「戦いに参加させようと思っているわけじゃない。偽神の気を逸らす一手として使えるんじゃないかと思うたのじゃよ。コキアと言ったな？ それは何度使える？」

「五回。一回使ったからあと四回」

「昨日五回使った後は使えなくなったのじゃな？」

確認するように聞くエリスに、コキアは頷きを返す。

「では後一回と考えていた方がいいか」

「どうして？」

「魔力は一日経てば全回復するわけじゃないからよ。回復して大体半分くらいだったはず」

コキアと隣で首を傾げたジェルムにテリアが説明する。魔法をよく使っているエリスとテリアだから簡単に気づくことができた。

続いてエリスは風流しの命中率について聞く。コキアは昨日の練習を思い出し、止まった的に狙った通りに当てることができたこと

を告げた。

「では二十メートルほど離れた人間の頭部に当てることは可能か？」

先ほどの魔法を見て、エリスはそこまで威力は高くないと判断した。それを体に当てるだけでは無視される。だが顔ならば反射的に目を閉じるなりして、隙を作らせることができるのでは思ったのだ。

顔を狙うだけならばエリスやテリアがすればいいだろうが、魔法使いですといった姿の者が遠距離攻撃を仕掛けても意表は突けない。見た目は弱そうな剣士のコキアが、やるからこそ意表がつけるかもしれない。

「それは……どうなんだろう。昨日は十メートルの位置にある人形に当ててたから」

「できないのであれば連れて行かない。もう一度聞く、見栄を張らずに答えるのだ。できないのにできると答えられても困るからのう」

反射的にできると答えようとしたコキアは、真剣なエリスの顔を見て開きかけた口を閉じ、よく考える。

昨日の使った魔法の一回一回を思い出し、放った後に軌道が曲がったりしていないか、狙ったものから大きく外れたりしていないか確認していく。

三分ほどの思考の末に顔を上げて、エリスを見る。

「……きちんと集中すれば当てることができる」

「嘘偽りはないな？」

コキアはしっかりと頷いた。

「ならば連れて行こう。私と共に行動してもらい、指示に従ってもらう」

偽神や偽神信仰者と間近で戦う幸助たちと一緒にいるより安全だろうと判断したのだ。エリスも団体で追いかけられる予定だが、近づいて戦うことはない。偽神信仰者からの遠距離攻撃に気をつける必要があるが。

コキアは再度頷く。コキアはエリスが何者か知らない。だがエリスの雰囲気やこれまでの会話から自分などより遥かに経験を積んだ冒険者だろうと考え、素直に従うことにした。

コキアが頷くのを確認したエリスは風流しの使用回数が後一回では心元ないので、持ってきていた魔力回復薬を飲ませて、使える回数を増やした。

コキアに薬を与えてすぐ転移の準備を始める。これ以上時間を費やしたくはなかったのだ。

今度は邪魔されることなく準備を終え、皆で転移する。

飛んだ場所は偽神のいる場所から二十分といったところだ。

ここから幸助たちとエリスたちは別行動で動く。戦いの合図は、エリスの野営地への攻撃だ。

討伐隊の進攻を警戒した偽神信仰者たちの偵察を避けて、両者は木などの影に隠れつつ移動していく。

エリスたちは陣営が見える位置まで移動し、岩陰に隠れる。もう少し近づきたいが、ここ以外に隠れる場所がない。

「私は攻撃魔法の準備するから、誰か近づいてこないか見張っているように」

「はい」

コキアに見張りを任せ、エリスは自身の持つ最大威力の魔法を使

う準備に入る。

地面に杖で陣を描き、右手に杖、左手に媒介の道具を持ち、陣の中に入って目を閉じ祈る。一分ほど経ち、エリスを中心に緩く風が吹く。

「幾多の風よ、矢となり吹き荒れろ。風王の群弾！」

エリスが掲げた杖の先から、強風が出て空へと吹いていく。同時に左手の媒介がなくなった。

風は上空でいくつもの塊となって、矢に負けない速さで目の前の野営地に落ちていく。風の弾は人やテントに次々と命中していく。魔法に気づいていなかった偽神信仰者たちは不意打ちを受けた。

コキアは何事かと飛び出てきた偽神信仰者たちが倒れていく姿を見ることになった。魔法は十五秒ほど続いて終る。野営地全体に満遍なく風の弾は着弾し、野営地はあつという間に荒れ果てた風景となる。

「うわあ」

使われた魔法の威力がすごすぎて、コキアは感想もでない。心の中で偽神も倒せたのではと思う。だが魔法を使ったエリスは倒せないと分かっている。偽神は竜に近い力を持っているのだ。これくらいではわずかなダメージしか与えられないだろうと、実際に竜と戦った経験から判断している。

魔力を回復させる丸薬を飲み、今使ったものよりは威力の低い攻撃魔法の準備をしつつ、野営地へと走る。今度は石を飛ばす魔法を使い、野営地に降らせる。

野営地に近づき魔法を使ったことで、エリスとコキアが襲撃の実行者と見当をつけた偽神信仰者たちは二人を捕まえるため、野営地から出てくる。もう一度高威力の魔法を使われることを警戒して、

さっさと捕まえてしまおうと少なくない数の偽神信仰者が出てくる。その人数を確認してすぐに、弱いが短時間で発動できる攻撃魔法を偽神信仰者へと飛ばし注意をひきつけ、飛翔魔法を使う。「飛ぶ」と一声かけてコキアの両手を片手で掴み、偽神信仰者から距離を取りつつ飛ぶ。

それを追いかけて野営地から離れる偽神信仰者たちを、幸助たちは見ていた。

「すごい威力だべ」

「すごかったねー」

「さすがは名高い魔女です」

三人がそれぞれ感想を言っている間に、幸助は偽神のそばに轉移できるよう準備を始めた。

野営地を出た偽神信仰者たちが十分離れたことを確認し、幸助は三人に轉移することを告げる。

「行くぞ！」

その場から姿を消した四人は、偽神の使っているテントそばに出る。そのテントも風の弾によって壊れていた。

そしてテントのすぐ近くに、無傷な偽神とどこどこに傷を負っている五人の偽神信仰者が立っている。

体から力が抜けることで偽神の存在を察した幸助は誰よりも早く動いた。

心の中にはまだ恐怖がある。それを今回は一人ではないと、頼りになるエリス、少し不安だが助けてくれるジェルムたちがいると、心の奥底に押さえつけた。

突如現れた四人に驚きつつも、立ちふさがろうとする偽神信仰者たちの間を走りぬけ、竜装衣を使い、右手に力を集中する。変化し

ていた左手が元に戻り、額の角も少しだけ小さくなる。代わりに右手を覆っているガントレットが、肘辺りまで広がりさらにごつく変化する。

幸助が夢の中でミタラムに教えられたのは、力を集中することだ。

力の集中というのは戦いを経験した者ならば教えられるまでもなく、当たり前に行っている。少しでもダメージを増すために簡単に使用できる技術、というか基本なのだ。

少し特殊だが、称号を換える前のセクラトクスが幸助にダメージを与えるために使った巨人の一撃、あれがいい具体例だ。

幸助は素の能力が高いがため、集中せずとも戦えてきた。この世界に來たばかりの頃はまだできていた。けれども次第にこの世界に慣れてきて集中する必要がなくなってきたのだった。

例えるなら格闘ゲームで必殺技を使うまでもなく、パンチやキックのみで戦えていた状態なのだ。しかもプレイヤーの技術もそこまです必要としないほどキャラ性能が高い。だから基礎も疎かになる。

だが能力が下がり、このままでは偽神討伐が困難だと判断した神が、少しでも攻撃力を高める方法として集中するということを思い出させた。

教えられたその結果、全身に満遍なく使われていた竜装衣の力の一箇所集中化が起きた。

この変化はミタラムにとって予想外だったりする。多少の攻撃力の上昇を見込んでの指摘だったのだ。

劇的な変化にミタラムは頭を抱えた。多くの神は驚くだけだったが、これがこの発展形が、葉など無関係で神を殺せる技となることに気づいているミタラムにとっては、未来を変えることを阻害する厄介なものではない。

できればその発現は避けて、その一步手前で済ませたかったが、幸助の飲み込みの良さがミタラムの思惑を邪魔した形となった。

「吹っ飛べーっ！」

走り寄った勢いそのままに、幸助は怖さから微かに震える右手を偽神の腹に叩きつける。

偽神は体をくの字に折り、三メートル以上飛んだ後、止まらず地面を転がっていく。

「そっちは任せた！」

振り返らず、ジェルムたちに偽神信仰者を任せ、立ち上がろうとしている偽神に走る。

「はい！」

ジェルムは幸助の背へと大きく返事をして、ウドリガと共に偽神信仰者へと立ち向かう。

偽神信仰者たちは偽神へと加勢しようとするが、ジェルムとウドリガに進路を阻止され、迂回しようとしてもテリアの魔法に邪魔され加勢できないでいた。

苛立たしげに舌打ちして、ジェルムたちと戦い始める。偽神を加勢するには三人を倒すか、増援を待つしかないと理解したのだ。

エリスの魔法による怪我のせいで護衛たちの動きは本調子ではない。これならば数で負けていても望みはがあると、ジェルムたちは目の前の戦いに集中する。

曲げられた事実

立ち上がろうとしている偽神に幸助は蹴りを放つ。肩に当たるかと思われた蹴りは、腕で防御される。偽神は少しよろめくも大した変化は見せず立ち上がる。

幸助はあれで殺せていたらと思うが、そう簡単にはいかないかと小さく首を横に振る。

偽神は幸助が着ているものや雰囲気から、容姿は違うが昨日の暗殺者と同じと断定した。昨日の今日でやってきたことを意外に思い、能力低下と高威力の攻撃という下手をすれば自身を殺しうる手段を用意したことに少し感心している。

そういった感情を欠片も表に出さずに口を開く。

「警戒すべきはその拳のみ」

受けるダメージを確かめるため蹴りをわざと受けたのだった。

「しかしその力……」

言いかけて首を横に振り止める。竜に近いものを感じ、竜を殺して得たものと問いかけようとしたのだ。竜を殺したにしては弱いため、自身の知らないギフトなのだろうと考え、問うことはしなかった。

代わりに素早く魔法を使い、昨日も使っていた錫杖を手元に呼び寄せた。それを両手で持ち、構える。最初は幸助を近づけまいと素早く使える弱い攻撃魔法を使っていたが、ジャケットの防御力を突破できなかった。

そこからは昨日と同じ光景となる。ただし幸助が逃げるために隙を窺うのか、攻撃を当てるために隙を窺うのかという違いはあるが。

五分十分と時間が経っても光景は変わらない。

「ふむ？」

偽神が内心首を傾げた。状況は自分が有利。だが違和感が湧いた。試しに頭胴足へと三連続で突きを放つ。戦い始めた時には当たっていた攻撃だ。今も当たってはいる。しかし錫杖から伝わってくる衝撃が小さくなっていた。

この短時間で自分の動きを学んだのかと目を見開く。能力が下がったといっても、常人よりは学習能力が高いことには変わらない。攻撃を当てるため避けるため、幸助は必死に動きを読んでいた。

動きを読まれたのは、少し強い雑魚と侮った偽神のミスだ。

もう一つ理由を付け加えるのならば、偽神の戦闘パターンのなさだろう。偽神は戦う者ではなく守る者。基本的には本拠地で偽神信仰者を守護し、外敵への対応は偽神信仰者が行う。そういった理由で、戦い続けたセクトクスよりも戦闘経験が少なく、戦いが巧みというわけではない。

「脅威」

褒め言葉とも警戒とも取れる一言を漏らし、偽神は攻撃のペースを上げる。時間をかけない方がよいと判断した。

幸助を倒すべき敵と認識したのだ。

攻撃の速度や力が上がり、再び偽神の一方的な光景となる。けれども幸助が倒れることはなかった。速度や威力が上がっても、技術や癖は変わらない。これまでに学んだ偽神の動きを元に、致命傷となる攻撃だけは、防ぎ避けていた。

徐々に幸助が攻勢に出る。攻撃手段が右の拳しかないため、フェイントを入れても避けられるが、少しずつ反撃できるようになっている。

幸助が押していても接近戦しかできないのは変わらず、偽神は再度魔法で攻めようと距離を取ろうとする。離れられたら罅り殺されることを理解している幸助は偽神が動いた分だけ距離を詰める。

「くっ」

「離されるつもりはない！」

戦う二人の表情は正反対だ。

偽神が僅かながら焦りを浮かべているのに対し、幸助は真剣ながらもどこか余裕がある。

このままではいずれ攻撃を喰らってしまうと思っている偽神と、エリスが加勢に来てチャンスが生まれると信じている幸助の心理状態の差だ。

ほぼ互角にまで持っていた戦いをさらに十分続け、幸助が待ち望んでいた時が来た。

幸助の背後十五メートルほどの位置に現れたエリスたちを見て、偽神は幸助の援軍だと即座に判断する。

「致し方なし」

隙を見せること覚悟で偽神は幸助から距離を取る。エリスが来たことに気づけていない幸助はそのチャンスを活かせず、右の拳を偽神の左手に掠らせることしかできなかった。

偽神は人差し指と中指が折れたことを自覚し、それだけで済んだことを幸運と判断する。

代償を払い稼いだ距離と時間を使い、現状で使える最大威力の魔法を使う。それは討伐隊を薙ぎ払った魔法の同系統劣化版。

「潰れろ、エリアプレス」

幸助とエリスとコキアを巻き込むように衝撃波が空から落ちる。
いや落ちようとした。それを阻止したのは、幸助でもエリスでもなく、時々幸助の様子を見ていたテリアだ。

「ライトニング！」

咄嗟に、使おうとしていた雷の魔法を偽神信仰者から衝撃波に標的を変え、衝撃波の威力を分散させる。本来の威力の三分の二ほどに削れた衝撃波が三人を襲う。

幸助はその場に止まりダメージを受けつつも耐え、エリスとコキアは片膝を着く。

止まった幸助へとさらに炎の矢を飛ばす偽神。それを幸助はジャケットの防御力頼みして、左腕で受ける。ある程度の衝撃と散った火の熱さはあったものの、ダメージはない。

幸助はさらに追い討ちを受ける前に、再び距離を詰める。振るわれる錫杖が左肩に当たるも、衝撃は少なかった。偽神の指を折ったことで握りが甘くなったのだ。

これならば多少のダメージは受けてもいいと、攻撃に比重を置く。戦い始めと立場が逆転する。偽神の表情は、はつきりとわかるほど歪んでいる。

幸助が押している間に、エリスは落ち着いて魔法の準備をして、ダメージが大きいコキアは足取り重く少しずつ偽神に近づく。これはエリスの指示で、偽神にコキアも接近戦を挑むつもりだと勘違いさせるためだ。本当は予定通り、風流しを使うのにちょうどいい位置取りをするために移動している。

「コースケ、避ける！」

エリスがこれ見よがしに魔法を使うことを宣言する。
わざとらしく普段の偽神ならば疑っただろうが、余裕をなくして

いる現状では罨かもしれないと気づくのに一拍の間を必要とした。目の前に迫る速いが直線で避けやすい光線を咄嗟に避け、しまったと思いつつすぐに周囲を確認する。

やけに時間の流れが遅く感じられた偽神の視界に映るのは、すぐ近くで腰溜めに右の拳を構える幸助と、杖を自身に向けるエリスと、剣を振りぬいたコキアだ。

警戒すべきは幸助で、強さを感じないコキアのことを視界から外した途端、偽神は顔に痛みのない衝撃を受けた。

「何？」

誰が、どうやって、どこからと思考が脳裏に走り、視界から外したコキアのことを思い浮かべる。衝撃を受けた方向から考えて、エリスはあり得ない。

コキアの攻撃が炎や氷など色のついたものでなかったのも良かった。色がついていれば、剣を振りぬいた時点で魔法を飛ばしたと判明し奇襲にはなり得なかった。

この瞬間、一瞬のみだが偽神は幸助のことを忘れた。

その一瞬の隙に、幸助は偽神に接近して力を溜めた拳を胸の真ん中にぶち当てた。そのまま吹っ飛ばすのではなく、地面に叩きつける。

地面に倒れバウンドした偽神は、肺の空気が押し出されていくのを止められなかった。

「もう一丁！」

迫る幸助の拳を見ながら偽神は己の死期を悟る。二回は耐えられるが、三回目は無理だと自覚がある。

偽神は私心を持たないが故に、全ての結果を受け入れる。

漏れでた言葉は恨みでも命乞いでもなく、「見事」という賞賛の

一言だった。

幸助の拳が偽神の胸に当たる。肉を押し、骨を折る感触が伝わる。人間の姿をしているとか、女だとか、殺すことの葛藤など、この時の幸助の頭にはなかった。ただただ偽神を殺すということのみを考えて拳を振り下ろした。

偽神の胸に拳をめり込ませた形で、幸助は止まる。抜けていた力が戻ってきたことで、偽神が死んだことを確信する。『偽神殺し』の称号獲得という声も脳内に聞こえた。

殺したことへの罪悪感が高ぶっていた感情に流されたか、ない。だが最後に拳を通して伝わった潰れた肉と砕けた骨の感触は、この先ずっと忘れることはなかった。

「俺たちのっ勝ちだっ！」

大声というよりは、吼えるように天を見上げ幸助は宣言する。

野営地中に声は響き、誰もが動きを止めた。

エリスたちは目的が達成されたことの達成感から喜び頷く。偽神信仰者たちは困惑と不信の表情を浮かべ、倒れ動かない偽神を見て絶望の表情となり、その場に座り込んでいく。

そういった気力をなくした者たちに、エリスは容赦なく魔法を叩き込んでいく。

そこまでやらなくともと幸助は言うが、のちのちの怨恨を減らすためだと言われれば止めることはできない。

そんなことを言っているエリスだが、ここで怨恨を断ち切るのは無理だとわかっている。囹になった時に誘き出した偽神信仰者全員を殺したわけではないのだ。生き残った彼らが離れた位置からここを見ているのだろう、とほぼ確信している。だからか即死する威力の魔法は使っていない。治療せず時間が経てば、死ぬことにかわりはないが。

逃げたと思われる偽神信仰者を追わないのは、今後のウィアーレ

の位置を把握できないと推測しているからでもある。ウィアーレの位置を探っていたのは偽神で、偽神信仰者には無理だ。偽神を復活させれば再び探ることが可能なだろうが、復活は簡単にできないだろう。復活にウィアーレが必要だとしても、ウィアーレの居場所を知るのは相当に難しい。今回のことがあり、再びの襲撃を避けるため住所を変えると考えるのが普通だろう。似顔絵を元に探すにしても変装されれば似顔絵は意味がなくなる。

あとは偽神が同行していない偽神信仰者など、討伐難易度は今回に比べて格段に下がる。復讐目的で襲ってきてても返り討ちは難しくないという考えもある。

「撤収だ」

気絶させ終えたエリスが声をかけ、皆エリスの周りに集まる。

偽神信仰者たちはしばらく目を覚まさないだろう。その間に討伐隊が到着するはずで、後始末は彼らに任せることにした。

六人が消えた三十分後に、偽神信仰者の生き残りが集まってきて偽神の遺体を故郷に連れ帰るため回収する。その後、まだ生きている仲間を起こそうと動く前に討伐隊の接近に気づき、仲間を見捨てる形でその場を離れることになる。

悲壮な覚悟を決めた討伐隊が見た光景は死屍累々といったもの。

少し呆けた後、とりあえず生きている偽神信仰者を二人ほど捕らえて残りは全て殺す。なにかこの状況となったヒントが残っていないか、野営地を全員で探るも何も発見できず、捕虜を連れて街に帰る。なにも損害なく生きて帰ることができた、問題が解決した、といったことは嬉しいのだが、わずかにすっきりしない思いも抱いていた。その解消は捕虜から得られる情報でできると考えていた。だが期待を裏切るかのように捕虜二人は詳しいことは知らなかった。

一人はエリスの奇襲で早々に気を失っていて、もう一人はジェルムやウドリガと戦おうとして近づく前に、テリアの魔法の流れ弾に

当たって意識を失っていた。そういう事情で誰かが少人数で戦いを挑んできた、若い奴らだったという情報以外は得ることができなかったのだ。

街のトップたちの認識では、偽神信仰者を倒した者は不明となる。その一方で冒険者ギルドはもしかしたらという推測で別の見解を持っていた。ギルドは朝早くに幸助を見たという情報を得ていた。そしていつの間にか姿が消え、誰も町から出て行くところを見ていないという情報も得た。幸助には実力があり、転移の魔法も使えるとギルドは知っている。さらにウィアーレと親しいということも。もしかすると偽神信仰者たちの野営地に転移で奇襲をかけたのではないかと考えたのだ。もっともこの推測は、幸助がこの先しばらくベラッセンのギルドに近寄ることがなかったので確定させることができなかった。

エリスが転移で飛んだ先は自分の家だ。休むには今のベラッセンは騒がしいだろうと考え、コキアたちも連れてきたのだ。

家に入ると、ウィアーレが椅子に座って幸助たちを待っていた。

「あ、お帰りなさい。お疲れ様」

幸助を見てばつが悪そうな表情となる。

「……なんでここにいの!？」

予想外のことに対し言葉をなくし、驚きつつ幸助は尋ねる。

エリスから聞いた話だと、ベラッセンに向かっている最中でここにいるはずがないのだ。

「ようやく解放されたんだよ」

解放？　と全員が首を傾げた。

それを見てワイアーレが夜中あったことを説明していく。幸助とエリスはそういうこともあるかと納得し、コキアたちは神に監禁されたと聞いて驚き、どうして監禁されたのか聞きたがった。

「話してもいいのかな？」

「ワイアーレの好きにすればいいと思う。ただし口止めはしないと駄目。まあ下手に噂を広めようなら神からペナルティ喰らう可能性もあるし、強い口止めは必要ないのかも」

「ペナルティってどういうこと？」

ジェルムの問いかけに、ワイアーレは簡単に事情を話すことで応えた。

「歪み使いなんていたんだ」

言葉だけでは疑うが、カードにしつかりと刻まれていては信じるしかない。

幸助とエリスが普通に接しているのを見て危険はないとわかるのだが、心情的に穏やかでいられずジェルムたちは腰が引けている。それを見てワイアーレは困ったように笑みを浮かべた。ジェルムたちの気持ちがわかるので責めることはできないのだ。同時に態度を変えない幸助とエリスがありがたかった。

「とりあえず、今日はうちで休んでいくといいじゃろ。明日になればコースケがベラッセンに送る」

「……ワイアーレ連れて孤児院行こうと思ってたから別にいいんだけどね」

幸助とエリスは普段着に着替えて、ジェルムたちは武装を解いて部屋の隅に置く。

幸助が着替えている時、ワイアーレが部屋に来る。

「どしたの？」

「ごめんなさい」

「いきなり謝られても」

「一人で行こうとしたこと」

そのことかと納得した。

「まあ、今回は俺もやばいとは思ってたけどね。それでも少しは信じて欲しかったってのが正直なところかな」

「……うん。お父さんたちが心配でたまらなくなって」

「心配するのを責める気はないよ。当たり前前の感情だし」

「あとは迷惑かけることしかできなくて、ごめんなさい」

終わり良しといった状況なので、幸助としては謝られても困るところだった。むしろ、ありがとうと言ってもraithたい。

顔を伏せて沈んだ様子のワイアーレに近づく。

「ていつ」

「いったーっ!？」

幸助がでこピンをして、ワイアーレの額から通常のでこピンではでないような音がした。

本当に痛かったのだろう。額を両手で押さえて、涙目で幸助を見る。

「前も言ったけど、歪み使いになりたくなったわけじゃない。だ

からついてまわる問題はワイアーレに全責任があるわけじゃないんだ。気にするなって言っても気にするんだらうけど、気にしすぎることはない。気持ちは少しは理解できるし、愚痴言いたいなら聞くから、あまり落ち込まないようにね」

「……うん」

「んでね？ ごめんじゃなくて、聞きたい言葉あるんだ」

幸助がなにを言いたいのか理解していない顔で、ワイアーレは首を傾げた。

ヒントを出す。

「感謝を示す言葉」

「ありがとう？」

「そう」

「助けてくれてありがとう？」

「その通り」

納得したワイアーレは精一杯心を込めて、言葉にする。

「助けてくれて、ありがとう」

「ん、じゃあ下に行こうか」

幸助がワイアーレの肩を軽く叩き、ワイアーレは弱いながらも笑みを返した。

全員のお茶を入れた後、幸助はテーブルに突っ伏した。隣にワイアーレが座る。

「なにか軽くつまめるもの作ろうかな」

「疲れてるんじゃない？ 私がやるよ」

「動けないほどじゃないから、手伝いをお願い」

二人が台所に立ち、ジェルムたちの間にほっとしたような申し訳ないような雰囲気が漂う。歪みに関わる者が近くにいるというだけで緊張してしまうのだ。

それをエリスは気にせず、もう一度今回のことは黙っているように念を押す。ジェルムたちは頷き、少し静かになる。

することがなく手持ち無沙汰になったジェルムたちは、今回の戦いでステータスが上がったかとカードをチェックする。偽神と戦ったわけではないが、楽な戦いというわけでもなかった。次から次に偽神信仰者が現れ、徐々に押されていった苦しい戦いだった。そんな戦いを乗り越え、どれか一つくらいは上がっているだろうと考えたのだ。

「え？」

大したことをしていないコキアも一応チェックして驚く。

「どうしたべ？」

「ステータスが全部一段階上がってる」

「はい？ 全部だか？」

「うん」

コキアの記憶では、Dーは一つもなかったのに精神がDーになっていて、一つあったEーの頑丈さがEーになっている。ギフトの効果ではない。風の祝福はステータスに影響を与えるものではないのだ。

「コキア、今日なにか倒した？」

「なにも」

ジェルムの質問に首を横に振って答えた。

「じゃあ攻撃を当てたのは？」

「偽神に一回だけ。あとはエリシールさんに連れられて移動してただけ」

「その一回で全部上がったということになるね。それだけ偽神から得られるものがすごかったのか」

ステータスが低くて上がりやすかったというのも一つの要因なんだろう。

「偽神を倒したコースケさんはどれくらい上がったんだろう？」

テリアの疑問に全員の視線が幸助に集まる。

会話が聞こえてた幸助はカードを取り出し確認する。それを隣からウィアーレが覗き込んでいる。

「うわあ」

ステータスの高さにウィアーレは感嘆の声を漏らす。その様子にジェルムたちは好奇心を刺激される。

さすがに偽神を倒したとなると目に見えて変化のなかったステータスにも変化は出た。

上がったのは器用と知力と精神で、Bだった器用がB＋に、C＋だった知力がB－に、C－だった精神がC＋になっている。これにより平均がBに上がる。魔力もC＋へと上がった。これはエリスに並んだことになり、竜装衣を使えばエリスを超える。

新しい転移の魔法を教えてもらおうと思いつつ、変化した部分を伝えた。

「魔力がC＋になった」

「「C+!?!」」

ジェルムたちが盛大に驚き、エリスも感心した様子を見せている。

「あとは偽神殺しの称号も手に入れた」

こちらはそうだろうなと納得する様子を見せる。

偽神殺しの称号効果は、歪みへの耐性だった。

幸助も魔力が上がったことは嬉しかった。なぜならこれまで使っていた転移魔法の使用回数が増えたからだ。

カードをしまい、料理を作りあげる。それを出した後は昼食まで寝て過ごす。家事でもしようかと思っただが、だるさが感じられのゆっくりしようと思ったのだった。

ほかの者たちもつられるように眠る。コキアはそこまで体力を消耗してはいないはずだが、初めての大きな戦場ということで精神的に消耗したものがあつた。一人起きていたワイアーレは、静かに幸助の隣に座り過ぎしていた。ときおり幸助の髪を軽く撫でたり、頬を突いてみたりしながら。

それに幸助は半分気づいていた。誰かが触っているなという程度だが。悪意害意敵意がないので、気にしないでいたのだ。

夜が明け、朝食を食べたジェルムたちはベラッセンへと帰る準備を始める。

その間に幸助はワイアーレに幻の魔法を使った。ワイアーレに対する街の人たちの反応が好意的ではないだろうと思ったからだ。ワイアーレも寂しげではあるが同意だった。

転移で街の入り口に飛び、そこでジェルムたちと別れる。コキアは家に、ジェルムたちは宿へ。幸助はすっかり疲れが取れているが、ジェルムたちはまだ疲れがうつすら体の底に残っていた。なので今日はのんびりと過ごすつもりだ。

ジェルムたちと別れる際に今回のことの礼を言って、いつか困ったことがあれば力になると約束した。

別れた後、幸助たちは予定通り孤児院へと向かう。

建物に入ると、遊んでいる子供たちの姿が見える。その子供たちだが、誰かが入ってきた物音に若干怯えた様子を見せた。ここ数日の大人たちの訪問で、大人にトラウマに近いものを持ってしまったのだ。

怯えにワイアーレは当然気づく。子供たちを慰めようと一歩踏み出し、子供たちが少し後ずさったことにショックを受けた。自身が原因で迷惑をかけて嫌われたのだと思ったのだ。それは勘違いで、今のワイアーレは幻で別人に見えている。知らない大人が近寄って警戒したというのが事実だ。

「コースケさん。そちらは？」

誰かがやって来たことに気づいたウェイイが出てくる。

「こんな姿だけど、ワイアーレです。街の人たちを警戒しているため、今は幻を被せています」

ここではいつ客が来るかわからないため、奥に行って魔法を解くことになり、皆で移動する。

食堂に入り、幸助は魔法を解く。

「おねえちゃん！」

元の姿に戻ったワイアーレに子供たちが群がった。

先ほどとは正反対の反応にワイアーレは一瞬茫然とするも、すぐに理解して膝を着き子供たちを抱きしめた。体は細かく震え、目は潤んでいる。いまだ自分を慕ってくれることが嬉しくありがたい。

そんなウィアーレを子供たちが心配し、大丈夫だと返事をして
いる。

ウィアーレと子供たちに触れないことにして、幸助はウェーイと
話す。

「街の様子はどうですか？」

「問題が解決したと大喜びですよ。昨日は遅くまで皆騒いでました
ね」

「偽神信仰者に関してなにか情報は入ってきてます？　どんな風に
撃退したのかとか」

「詳しくはわかりませんね。討伐隊が必死に戦い、偽神信仰者を倒
していった不利を悟った偽神が退いたということくらいでしょうか」
「……そうですか」

ギルドや街のトップは、自分たちが役立たずだったことを住民や
周囲の街の者たちに知られないようにと偽の情報を流したのだ。既
に一度敗北して信用が下がっている。二度目も何もできなかったこ
とを知られば、なんのために税金を払っているのかといった不満
の声が上がるだろう。場合によってはギルドの収入が減り、街のト
ップが変わる。それは避けたかった。

偽の情報を流すと決めた後、本当のことがばれるという心配はあ
ったが実行した。

捕虜から手に入れた情報では、正体不明の数人が偽神信仰者を撃
退したとわかっている。その人物たちが名乗り出ても、偽神を含め
た偽神信仰者たちを少人数で撃退したというよりも、数の多い討伐
隊が追い払ったということの方がまだ信憑性があり、住民たちは街
側の主張を信じるだろうと判断した。

冒険者たちから情報が漏れるだろうとはわかっている。しかしそ
れは自分たちの恥を晒すことで、素面では話さず酔った勢いで話す
といった漏れ方だろうと予測していた。それならば酔っ払いの戯言

と跳ね除ける気満々だった。一応口止め料として報酬も払っている。嬉々として話すことはないだろう。不利な戦いに挑み、偽神と一緒にいる偽神信仰者を撃退したというのは箔がつくのだ。利益をなくすようなことを率先してやるとは思えない。

退治した者たちが名乗り出てきた時は報酬として、大金を払い、ギルドの持つコネを使って貴族に推薦するつもりだ。決して安くはない金が出るだろうが、それでも評判が落ちて出てくる不利益に比べたら安い方だ。

こういったギルドたちの判断に幸助は不満はない。エリスからそういった手段を取るだろうと聞いていた。

ジェルムたちは少し我慢ならないものがあつたが、そこは口止め料を払っているということと、今回のことでギルドや街が荒れる可能性があると説明され、不承不承納得した。

ベラッセンのギルドになにか聞かれても話せることは、ワイアーレを守っていたという捻じ曲げた事実くらいだ。

ただしガレオンにだけは話すようにとアドバイスを受けている。ガレオンの依頼で幸助は動いていたことになっている。それを利用して、ベラッセンギルドへの貸しとなるよう動いてくれるはずだと。

「ワイアーレがここの出身ということで、今後ここが責められるようなことはありませんかね？」

ワイアーレには聞かせられないので小声になる。

「どうでしょうか。昨晚の内に、謝罪には来たのですが」

喉元過ぎればなんとやら。命の危機が去り、ここ数日の自分たちの行動を省みた住民たちが謝りに来たのだ。危機を感じはしたが、実際には被害にあっていないのだ。やりすぎじゃないだろうかと思

悪感が湧いた。

その謝罪で、生まれた溝がなくなるかというとなんかそんなことはなく、住民たちの負い目はしばらく続くだろう。同じように子供たちが抱いた思いもなくなりはないだろう。

「子供たちのことを考えたら、この街は住みづらいのかもしれないね。リッカートにでも引っ越します？ ツテはあるし、資金も出せますよ。ギルドも謝罪がてらお金を出す可能性もありますし」

「引っ越しですか。即答はできかねますね。それにお金を出してもらうなど、ただでさえウィアーレを守ってもらったのです。これ以上お世話になるわけにはいきません」

引越しも一つの手段だとわかっているが、この街には思い出がある。孤児院出の者たちも住んでいて、そういった者たちから離れたくはなかった。

子供たちの意見も聞いて、結論を出すとうェーイは言う。

「そうですか。お金くらいの困りごとなら、たいしたことじゃありませんから遠慮なく頼ってもらっていいですよ」

「本当に困った時は頼らせてもらいますよ」

「はい」

結論としては引っ越さないことになり、住民と多少ギクシャクしながらも表面上は問題なく暮らしていく。

この後はウィアーレを待ちつつ、なんでもない雑談をして時間を潰す。

一時間ほど滞在した二人はリッカートへと転移する。

「俺はギルドに行ってくる。ウィアーレは待っていてくれないか？ 問題なく過ごせる場所あるからそこで」

「どこ？」

「俺がオーナーの店。喫茶店だから、のんびりお茶飲んだり、お菓子食べながら待っているといいよ」

「あ、リッカートにあるって言ってたね」

店まで歩き、立っていたトアドに挨拶して入る。

ガレオンが約束を守ったのだろう。店にはギルド職員がやって来ている。

入ってきた二人を新たな客と思い、ウェイトレスが近づいてくる。

「いらっしやいませ、とオーナーでしたか。店長か副店長を呼んできた方がいいですか？」

「いや、また後で来るからそれだけ伝えておいて。あとはこの人を俺が戻ってくるまで持て成しといってくれる？ 特別扱いとかはしなくていいから」

「わかりました。お客様、でいいのでしょうか？」

「えっと、コースケさん？」

ウェイトレスに問いかけられ、ウィアーレは困り幸助に聞く。それに幸助は頷く。

ウェイトレスがお嬢様と呼ばずに客と呼んだのは、ウィアーレの滞在が練習ではないと判断したからだ。

「ではもう一度。お客様、こちらへどうぞ」

連れられ客席へと向かうウィアーレを見送り、幸助は店を出る。

ギルドに入ると昨日とは違う受付がいた。用件を伝え、ギルド長に取り次いでもらう。戻ってきた受付に許可を貰い、ギルド長の部屋に向かう。

「こんにちは」

「おう。報告を聞こうか」

既に誰かが撃退したと報告は来ているので、ガレオンは落ち着いていた。

「エリスさんとウドリガたちに協力してもらって偽神と偽神信仰者を倒した」

「……そうかもしれんとはベラッセンのギルド長とも話したが、えらくあっさり答えるな？」

「エリスさんがガレオンさんには伝えておけてさ」

「そうか、まあ助かるが。一応証拠かなにかあれば助かるが、なにかあるか？」

カードを取り出し、偽神殺しの称号を表示させる。

「撃退ではなく、本当に殺したとはなあ。お前さんには納得いかないかもしれんが、交渉したいことがある」

「殺したことを黙っておけ？」

「そうだ。ギルド側としては役立たずだったという事実を隠しておきたいんだ。口止め料も含めて報酬は弾むことになっている」

「ジェルム、テリア、ウドリガ、コキア、エリスさんにも報酬が？」

「討伐に参加したのなら、そいつらにも口止めは必要だろうな」

「その五人、エリスさんは聞かないとわからなけど、にはいくら出せます？ 前三人が倒したのは偽神信仰者で、コキアは偽神を倒す役に立った。エリスさんはその両方」

報酬の参考になればと役割を話す。

ガレオンは少し考え、口を開く。

「エリス婆は金はいらんだろう。貸し一つで十分だ。その四人には閃貨一枚ずつでどうだ？ 渡すには口止めが絶対条件だが」

先に渡してあるお金と合わせれば破格と言っているいい報酬だ。

「それで十分だと思う。口止めはしてあるし」

「ということは名乗り出るつもりはなかったのか？」

「ええ、目立つつもりはないんで」

「ふーん。それでお前さんの報酬はどうする？ 金で払うか？」

幸助は首を横に振る。お金よりも頼みたいことがあった。

「お金には困っていないんで。それよりもベラッセンギルドに頼みごとって可能ですかね？」

「内容によるな」

「ベラッセンにウェーイって人がやってる孤児院があるんですが、そこの支援や補佐をお願いしたいんです」

「たしかそこは偽神が求めていたウィアーレという女がいた孤児院だったな？ お前はそいつと親しいと聞いている。今回動いたのはその嬢ちゃんを守るためでもあったのか」

「そうですよ」

「その嬢ちゃんは街にいなかったらしいが、エリス婆の家にいたのか？」

「はい」

神に守られていたことは黙っておく。そのことを言えば歪み使いのことも言う必要が出てくる。

ガレオンは支援について領き、ベラッセンに連絡しておく約束する。それだけではまだ報酬というには足りず、お金が支払われることになった。

「こっちからも聞きたいんですけど、歪みに捕らわれた人間がワイアーレってばらしたのはギルド？ それとも事情を知っている冒険者ですか？」

「知ってどうするつもりだ？」

ガレオンの目が少し細められる。返答によっては答えるつもりがないのだろう。

「ただ気になっただけです。どうこうするつもりも言うつもりもないですよ」

「……ギルドだ。一人の犠牲で街が助かるのなら、と判断したらしいな」

「ですよね。予想通りです」

ワイアーレや孤児院に大きな害が出ていれば、なにか報復の思いでも湧いたのかもしれないが、大きいと言える害は出ておらず幸福は特に思うことはなかった。

これで今日の用事は終わり、コキアたちに渡す報酬を受け取って、職員の貸し出しに礼を言ってギルドを出る。

店に戻り、メリイールとセレナに練習の効果のほどを聞く。いくつかのミスや問題点が出てきて、練習をしておいて正解だという結果が出ていた。

店員たちに励むように言い、ワイアーレと店を出る。そのまま家に帰り、今度は一人でベラッセンへと転移する。転移先はシディの宿で、テリアカウドリガにでもお金を渡しておこうと思ったのだ。シディに挨拶して、二階に上がろうとすると昼食のため下りてこようとしているテリアと会う。

「コースケさん？」

「あ、ちょうどよかった。ちょっと話しあるから、部屋に行っていない？ 廊下とかでは話しくいんだ」

「いいですよ」

二人でテリアとジェルムの部屋に入る。ジェルムは二度寝しているのか、スースーと寝息を立てていた。

「起こしちゃ悪いし、さっさと用事すませようか。これを渡しておくから四人で分けて」

「閃貨じゃないですか！？ どうしたんですか！？」

なんでもないように渡された閃貨を見て、目を見開いている。

幸助は見慣れている閃貨だが、テリアにとっては初めて見る閃貨だ。驚きもする。

「リックカートギルドからの報酬」

口止めやギルドによる手柄の横取りといった事情を説明する。

それに納得し、絶対に喋らないとテリアは心に決める。喋るということはギルドにたてつくということだ。そんな度胸はない。

そんなテリアに頷き、幸助は宿を出る。次会うのは十日後で、場所がギルドではなく街の入り口だ。コキアも実戦を経験したし、雑魚との戦いを始めてもいいだろうと考えたのだ。ギルドの行いや街の人たちの行動にもやっとしたものを感じ、依頼を受ける気が起きず、ギルドに近寄る気が出ないという理由もある。

報酬を渡して、ようやく今回の騒動に関することが全て終わったと感じる。

ぐっと背を伸ばし、家に帰ってのんびりしようと転移の魔法を使った。

曲げられた事実（後書き）

第一次書き溜め放出終了

もうちょつとしたら次の書き溜めが完成するので、また連続で放出すると思われ

今回ほどの量はないですけどね、三四話くらいか
おそらくあと五日もあれば完成するはず

剣にまつわるエトセトラ 前

偽神騒動を終え、二日ばかりのんびりと過ごしていた幸助はベラッセンに来ている。ウィアーレは魔法の勉強のため留守番だ。使いたい魔法があり、座学で学んでいる。使いたいものは今のステータスでは使えないが、後々どうにかするつもりでいる。エリスはその付き添いだ。

ベラッセンに来たのは、偽神の騒動があって保留となっていた幸助用の剣を作るため。

チェイン武具店に入ると見知らぬ男の店員がカウンターにいた。クラレスの従弟なのかもしれない。

「こんにちは。剣を作ってもらいたいんですけど」

「急ぎですか？ もしそうだとしたら無理なんですよ」

理由を聞くと、店主であるクラレスの父親が所用で街の外に出ているらしい。この店で売り物になる剣を作るのは父親だけで、今は製作依頼は受け付けていないのだ。

「特注でなくともいい剣ありますよ？」

「いえ、頑丈なものを作ってもらいたくて。以前買った二本はまだ使えたのに、力入れすぎて壊れてしまっ」

「そうですか。戻ってくるのは二十日くらい先なはずですよ。待ちますか？」

「待ってもいいんですけどね……この街か近くの町村に腕のいい職人っています？」

「親父さんに匹敵する職人はいないと思いますね。親父さんクラス職人で一番近くに居る人で、フィオーネ帝国の街ゴンハンハじゃないかな。そこにいる人以外だと大陸を出ないと思う。俺

の知るかぎりではという条件がつくけどね」

フィオーネ帝国は大陸南部にある国だ。以前、ペレレ諸島に向かうために立ち寄った港がある国の南西に位置している。ベラッセンからゴンハンハまで馬車で順調にいつて一ヶ月くらいだ。

国の規模や経済は特に大きいものではなく、幸助の住んでいるピリアル王国と変わらない。特徴といえば林業が盛んくらいか。家具用木材や質の良い木炭を輸出している。

「そっちに行った方がいいのかな。ああそうだ、クラレスさん居ますか？」

「クラレスさんは出てるよ」

「まだ旅行中なんですね」

「旅行中っての知ってるのか。あと二ヶ月もすれば帰ってくるらしいって手紙が来たな」

そろそろボルドスも帰ってくるということなのだろう。エリスに知らせておくことにした。

ありがたいと礼を言って幸助は店を出る。

家に帰り、エリスにゴンハンハに行ったことあるか聞いた。そこには行ったことはないらしいが、フィオーネ自体には行ったことがあるようで、連れていつてもらえることになった。

転移を使用し、飛翔魔法を使えば一日かからないということ、馬車での移動はない。旅行から帰ってきて十五日ほどだ、また旅行を兼ねて行くとは思えなかった。

ウィアーレは留守番で、エリスと二人でゴンハンハに向かう。家を出て三時間ほど、午後二時前に二人はゴンハンハに到着した。

空から見た町の大きさはベラッセンよりも小さい。人口五千人を超えくらいだろうといった感じだ。

町に入り、道行く人に情報を聞かため話しかける。有名なようで

店の場所はすぐにわかった。しかし不安になる話も聞いた。

「死んでたとは」

「作れる職人がおるかわからんのう」

幸助が求めた職人は二年ほど近く前に死んでおり、現在は息子や弟子が店を切り盛りしているらしい。彼らも一人前の職人だが、先代には及ばないというのが人々の見立てだ。

クラレスの従弟がこのことを知らなかったのは、彼が職人ではなく積極的に情報を集めていたわけではないからだ。

「行ってみるしかないか」

「駄目だったら、キューハン行きじゃの」

キューハンとはカルホード大陸にあるキューハン自立都市のことだ。そこは良質の鉄を作る都市で、ほかに希少な鉱石の採れる山が近くにある。それらを求めて職人が集まっており、腕のいい職人もいる。鍛冶の活発な街で、竜の鱗を扱える職人が必ずいるとエリスは確信を持っている。

最初からそこに行けばいいはずなのだが、転移でいける場所を増やすためにこちらを選んだのだった。

教えてもらった道を行くと、チェイン武具店よりも大きな店が見えてきた。看板にはエリアーナ武具店と書かれている。

「ほう」

店内に一歩足を踏み入れ、エリスは感心の声を上げる。幸助は地球のコンビニやブティックを思い出した。

店の中は綺麗に武器防具と区分けされており、広々としている。今まで行った武具店はどこか混雑さを感じさせたが、こちらはそう

いたものが感じられず精練されたものを感じる。今も五人の冒険者が武具を手に取り、自身に合ったものを探している。

だが二人には店の雰囲気に対し、客の数が少なく思われた。そういう時間帯に來たせいなのかもしれないが。

「すみません」

「はい。なにが御用でしょうか？ お探しの物があればご案内いたします」

「いえ、劍を一つ作ってもらいたいのですが」

「人件費が必要となり既製品よりも割高になりますが、よろしいでしょうか？」

「はい」

「では少々お待ちください」

そう言って店員はカウンターの下から書類を取り出し、こちらに必要事項を書き込んでくださいと幸助に渡す。

内容は武器の種類、利き手、形状、希望重量、使用材料、予算といった感じだ。

エリスと相談し、細かく書き込み、店員に返す。

内容を確認するため読んでいた店員の顔色が徐々に変わっていく。材料や予算の部分に驚いたのだ。

「ご、ご確認させていただきます。お名前はコースケ・ワタセ様。劍を所望され、利き手は右。形状は両刃両手持ちの劍、重量は重くなくても構わなく、材料は竜の鱗、予算は指定なし。補足として、切れ味よりも頑丈さを優先。そして高品質であること。こちらでよろしいでしょうか？」

「それをお願いします」

「う、承りました。念のためお聞きしたいのですが、この要望だとかなり重くなると思われます。具体的には二十キロを簡単に超えて

しまいますが」

「大丈夫です」

竜の鱗という部分や予算に糸目はつけないということで、店員はもしかしたら金持ちの依頼なのかもしれないと考える。貴族か、とも考えたがどう見ても二人は貴族に見えない。それに貴族からの依頼ならば店に來ないで、自分たちを呼びつけるので違うだろうと判断した。

要望を聞くかぎりでは、実際に使用することは難しく思え、装飾品としての依頼だと推測した。この重量で実戦用だと思えず、聞かずに判断してしまった。

この推測が破滅への一歩だ。

「こちらからも聞きたいのだが、ここの職人は竜の鱗を扱いきれるのか？」

「は、はい！ 先代からしっかり指導を受けた者ばかりです！」

誇るように胸を張って、エリスの疑問に答える。

これが証拠だと壁に飾ってある片手剣を指差す。見ただけではわからないので、持たせてもらおうと重心がしっかりしていて、握りもよく手に馴染む最高品だとわかった。剣に関してそれほど詳しくはないエリスにもそう感じさせた代物で、作り手の技量の高さがよくわかる一品だ。

「これを作ることができるのなら安心じゃの」

「どれくらいで出来上がりますか？」

「そうですね……長くて一ヶ月。早くて二十日を目安にしてもらえれば」

「じゃあ、一ヶ月後までには來ます」

「はい。お待ちしております。それでは前払いの料金として金貨一

枚頂けますでしょうか？」

安くはない前払い金を躊躇い無く幸助が出したことで、店員は金持ちからの依頼だと確信してしまった。

竜の鱗と金貨を受け取り、店員は頭を下げる。二人からは見えな
いが、口元が歪み、欲に染まった笑みが浮かんでいた。

ベラッセンギルドに近寄らないため依頼を受けることがなく、時間が余っている幸助は暇になっていくかというところでもない。

偽神と戦っている時に決めた戦闘技術向上のため、庭先で一人手製の木剣を振るっていた。基本である型を繰り返し、ゲンオウやセクラトクスといった強者をイメージしたシャドー、竜装衣を使い実際に動いて詳細を調べるなどといったことをしていた。学習能力が高く、しかも真面目にやっているため剣は冴えていくばかりだ。おかげで木剣で薪を切るなんてことも容易にこなせるようになった。

ほかには最も力が伝わるナイフの投げ方の開発もできていた。これを偽奥義の代わりに、ジェルムとコキアに伝授することになっている。近距離攻撃一辺倒のジェルムにとって、中距離への攻撃手段を持つことは今後に役立つはずだと思ったのだ。

ウィアーレに頼まれて、魔物退治にも何度か行った。困っている人を助けるためではなく、ステータスを上げるためだ。

ウィアーレも歪みを使いこなすため自己鍛錬をしている。その成果を知るために魔物退治に出かけるということと、自力で幻を纏う魔法を使えるようになるためだ。使いたい魔法とは幻を纏う魔法だ。ついでに便利そうな魔法の勉強もしていた。

一人で魔物退治は危険があるかもしれないと、幸助に同行を求め、それに幸助は快く頷いた。

冒険者になるためではなく、ただステータスを上げるためだけな

ので、コキアに行っているような指導は必要なく、魔物を殺してステータスを手早く上げることには反論はなかった。

どうせならばと家の周りの魔物よりも強い魔物がいる場所をエリスに聞いて、そこでステータス上げを行うことにした。行った先で歪みを使い、同士討ちや高所からの自殺などをさせていく。そんな戦い方でも力は吸収できた。最後にはヴァイオレントバルブのいるところまで連れて行き、そこらの森で捕まえた鹿を夕食用に取り分けた後、釣り餌としてばら撒きおびき寄せる。出てきたヴァイオレントバルブたちを同士討ちさせ、ステータスアップを行う。これまでの魔物退治でなんとかヴァイオレントバルブにまで歪みが効くようになり、ステータスアップは成功した。

結果、十日ほどで平均Eだった能力は平均Dまで上昇した。能力だけでみれば、コキアをあっさりと抜いた。目的だった幻の魔法も使えるようになっていく。必要魔力はDだったが、今のウィアーレは魔力D+で少しやりすぎた感が否めない。

心構えや戦闘経験の少なさ故に、同ランクの冒険者と戦えば勝率は一割あればいい方だろう。歪みを使わないという前提条件だが。逆にいえば歪みを使うと格上にも負けない可能性がある。

歪みを使わず戦い、最近魔物とも戦い始めたコキア相手に勝率五割に届けばいい方だろう、といった感じの強さになっている。

そんな風に剣が出来上がるまで過ごし、満一ヶ月となる少し前に再びゴンハンハにやって来た。受け取り帰るだけなので、滞在時間は三十分もかからない。そう聞いてウィアーレは留守番すると言い、同行していない。

「こんにちは」

「いらっしやいませ」

「一ヶ月前に剣の製作依頼をしたのですが」

「……ああ！　ワタセ様でしょうか？」

頷くと少々お待ちくださいと言って、店員は店の奥に入っていく。五分も経たずに、木箱を持った二人と持っていない一人と一緒に戻ってきた。

「お待たせしました。私は当店の店主です。この度は当店を利用していただき、まことにありがとうございます。こちらがご注文の品となります」

ご確認をと言って、木箱の蓋を開けるように指示を出す。

中身は飾り気の少ない黒金色のロングソードだ。鞘に入っておらず刃がむき出しになっており、柄から剣先まで一メートルを少し超す長さで、剣の腹は通常の剣より広めだ。

「詳細をお聞きますか？」

「簡単に特徴的なところだけ教えてもらえますか？」

「特徴ですか……ご注文のとおり頑丈さを求めたため重量は三十キロを超えています。通常の剣の重さを超えましたが、その分頑丈さは折り紙付きです」

「代金はいくらに？」

「竜の鱗という珍しいものを触れたお礼に細かい分は省き閃貨三枚でいかがでしょうか？」

「安くはないか？　品質高いものを頼んだのだ、もう二三枚上乘せしていると思ったのじゃが」

「そ、それはですね。独自のルートで品質の良い鉱石を安く仕入れることで、ほかの店よりも安く提供できました」

焦ったような口調で早口でエリスに説明する。そんな店主にエリスは疑いを持つ。

「……そうか」

幸助が閃貨を出し、店主に渡す。

「ありがとうございます。馬車かお供の方がいれば、そちらまで運びますが？」

「その前に、幸助試し斬りしてみないか？」

「いいけど？」

「試し切り、ですか？」

店主たちは予想外といった表情でエリスを見ている。

「ここも武具店なら武器の具合を確かめるために演習場くらいあるのだろう？」

「ありますが、ですがこれを持って使うのは」

「持てないとしても？ 幸助、持って見せてやれ」

ひょいっと木箱から片手で取り出した幸助を店員たちは驚きの表情で見ている。子供一人分の重さに、少しも重そうな表情を見せていないのだ、驚くのは当然だろう。

「重さはどうだ？」

「前使ってたやつよりも馴染むけど、もう少し重い方が」

飾り用だと思っていた剣が、実際に使われるものだとしり店員たちは心の中でまずいと同じセリフを吐いた。その表情をエリスと幸助は見逃さずにいる。

演習場に移動し、藁束の人形の前に立とうとした幸助をエリスが止める。

「頑丈さを知りたいのだ。そんな藁束ではわからんじやろう。金属鎧を着せた人形を持ってきてくれ」

「いえ、あの」

「ないのか？」

失敗作の鎧を着せた人形があるにはあるのだが、それを使えば知られたくないことが分かってしまう可能性がある。

「…いえ、あります」

店員はちらりと店主を見た後、倉庫から鉄製の人形を運んでくる。店主は乾いた笑みを浮かべていた。

店員が準備している間に、素振りをしていた幸助が首を傾げている。それは剣に違和感を感じたせいだ。原因はバランスのおかしさだ。重さの調整ができていない。軽くする努力を怠っているというわけではない。重くしろといったのは幸助で、重いことに対しては文句はない。重心の位置がおかしいといえいいのか、振って使うことを考えていない作りなのだ。飾ってあった片手剣とは比べ物にならない。比べること自体失礼にあたる。装飾用だと思っていたのだから、そこらを見殺した作りなのは無理もない。

「……準備できました」

「これは鉄かの？」

「はい」

幸助が人形の前に立つ。

「ちょっと待ってください」

剣を振りかざした幸助を店主が止める。

「なんですか？」

「剣が壊れた場合の保障はしませんよと言いたかったのですが」

その場にいた全員がなに言ってるのかという表情になる。

この剣に使われた材料の一つは竜の鱗で、過去の記録から剣の硬度は鉄を超えていることがわかりきっている。

それなのにその発言は、鉄と同等と認めるようなもの。鉄と同程度など、ありえないのだ。怪しんでくれと叫ぶような行為だ。

どう反応しているのかわからず、幸助はエリスを見る。『かまわん、やれ』という視線を受けて、剣を振り下ろした。

その行為に幸助は鍛えた技術を使っていない。剣の頑丈さを知るためなのだから、技術で鉄を斬っても意味はないとわかっていた。

ガンッと金属同士がぶつかる音が周囲に響く。結果は剣が人形の金属部分を潰し斬り、胴体辺りで止まっているというもの。力と重さだけで鉄を切っていた。その代償はあり、剣の方も鎧に接触した刃が潰れていた。

「やはりか。竜の鱗使わなかったな？」

「使いましたが？」

なあ？ と店主は店員に目配せし、やや戸惑った様子を見せつつも店員たちは頷く。

「ほう、使ったと？ 使って鉄に負ける剣ができたというのか」

「このような結果になったのなら、鱗が偽物だったのでは？ 竜の鱗は貴重な物、偽物を用意し詐欺に使う者もおりましたよ。騙された責を私どもに押しつけられても困りますな」

自分たちは悪くないと押し切るつもりなのだろう。焦りも戸惑いも見せず、やや口早に強気で言い放った。

「偽物か」

「出た結果から考えるに間違いないかと」

「家にまだ十枚以上あるのだが、それ全てが偽物だということになるな？」

「そ、そういうことになりますな」

エリスの言葉に店主の気持ち揺らぐ。先ほど言ったように竜の鱗は貴重な物。持っていても一枚のみで、証拠となる竜の鱗は既に相手方の手にはない。本物としても、その一枚がない以上本物だと証明しようがないと考え、強気に出ていたのだ。

「では家から取ってきて鑑定してもらおうか、商人ギルドの人間にもちろんお前さんたちも同行してな」

「鱗が偽物だとして、私どもとは無関係でしょう？」

「偽物と言いがかりをつけ、出来損ないの剣を売りつけられたのだ。無関係ではなかる？」

「っ!？」

店主は言い返せず詰まる。

そんな時、大きく溜息を吐いて年若い店員の一人が口を開く。

「諦めた方がいいですよ、プフルヌさん」

「なにを!？」

「このままだと最悪店じまいしなくちゃいけない。それがわからな
いあなたではないでしょ」

「黙れ! まだそう決まったわけでは! こいつらがあれは偽物だ
つたと認めればいいだけだろ!」

無茶だと全員が呆れ顔になる。

明らかに粗悪品とわかるものを渡され、引くほど幸助はお人好しではない。ましてやエリスはいかなる理由があっても同情はしないだろう。

「仕方ない、止めさすか。潮時だしね」

そう言って店員は懷から一枚の紙を取り出し広げる。

紙の一番上には大きな文字で強制閉店状と書かれていた。これは商人ギルドが問題ある店へと出す命令書で、ギルドに加盟している店はこれに従う義務がある。閉店と書いてあるが、実際は店を閉めるわけではなく一時的な営業停止命令だ。

「そ、それは！？　なんでお前が？　まさか……」

「もともとあなた達を監視するためのスパイとして残ったのですよ」
「やはりか！？　ゲートツクの奴め！」

幸助たちを置いてきぼりにして、店員たちだけで話が進む。

とりあえず話を聞いていれば、おおまかに事情がわかるだろうと二人は黙って会話を聞く。

彼らの会話で、大体の事情は把握できた。

店主は先代の凄腕職人の息子で、店主自身も職人だった。しかし腕は一流といえるものではなかった。父親から一人前とは認められはしたが、父親のように一流になれそうにないのは自分でもわかっていて。正直なところ、武具を作ることよりも経営の方が興味があった。それを父親に告げるとやりたいようにやれと返ってきて、経営を学び始めた。そちらには職人よりも才があったのか、ノウハウの飲み込みが早かった。そして経営に加わり、店を動かし始めた。

有名な親を持つと子供は比べられるもので、店主も親と比べられていた。それに不満はなかった。職人として父親がすごいのはよくわかるし、誇りこそすれ妬むことはなかった。それでも何度も比べられ続けると、心に溜まっていくものがある。いつしか父親にも負けないことを成し遂げて、比べられないようになってやると考え始めるようになる。

職人としては勝てない。ほかに勝てるとしたら、と考え店を大きくすることを目的とした。当時の店は現在とは違い、大きい店ではなかった。なまじ有名なだけに店の中が混雑することもあり、客側としてはいい店ではないだろうと思っていた。この店をもっと利用しやすくして客を多く獲得すれば、認められるだろうと思ったのだ。その日から店主は、経費削減、店の整理、改装の下準備といったことに励んでいく。おかげで店に来る客は以前よりも増え、収入も増えた。

そうして月日が流れ父が死に、店を継いだ店主は変わらず店を大きくすることに熱心だった。だが徐々に客足が遠のいていった。それは先代が死んで最高品質の武具が得られなくなったからだ。弟子の中に先代に追いつける職人がいなかったのだ。

減った客と収入を取り戻そうと、店主はさらに励み暴走していく。そのために粗悪な材料を使ったり、職人が納得のいかない完成品を店に出したり、本来の品質以上の宣伝文句で品を売ったりしていき、嫌気が差した職人が出て行く事態となった。今残っているのは店主が脅迫したり、金儲けに賛同している者たちだ。

ゲートックという人物も出て行った者だが、店主を粘り強く説得していた人物でもある。何度かの話し合いの末、無駄だと悟ったゲートックは自身の弟子の一人に店の行く末を見守り、これ以上店手が醜態を晒すようなら商人ギルドに密告するように言いつけ、別の街に去っていった。それが半年ほど前のことだ。

弟子は言いつけ通り動いて、今回のことでもう駄目だと考えて、事前に商人ギルドと話し合っていたことを実行した。今日の態度で

処分が軽くなる可能性もあったのだが、店長に反省の色が見られな
いため、その可能性は潰れた。

ゲートックたち出ていった職人がすぐに商人ギルドに知らせな
かったのは、店が潰れることを惜しんだからだ。先代を尊敬してい
て、店が潰れれば先代の名も落ちると考え、知らせることができな
かった。

「終わりなのか」

体から力が抜けたようで、店主はその場にへたりこむ。鱗を売り、
臨時収入を得て、それを使い豊富な材料を買いカルホード大陸で
行われる武具の品評会用の品を作ろうと思っていた。そこで高評価
を得られれば、また客が来ると考えていたのだ。

「絶望しているところ悪いが、竜の鱗はどうした？」

「売ったよ」

竜の鱗を受け取った店員から、飾り用の剣に使うのなら頑丈に作
ってしまえば、実際に戦いに使用するわけではないのだから、鱗を
使っているかどうかかわからないだろうと言われ、頷き売ったのだ
った。

「では売った金と迷惑料をもらおうか、口止め料も必要か？」

店主は怒気が強く籠った目でエリスを見る。エリスはそれを鼻で
笑う。

「なにを怒っている、当然のことじゃろ。こっちが依頼した物は作
らず、出来損ないを渡され、提供した材料は盗まれた。返せないな
ら、金で払え」

「そんな金はない。全て材料費に消えた」

「では商人ギルドにでも借金してこい」

冷たく言い切る。どんな事情があろうが、同情する気は全くなかった。

こんなエリスを初めて見た幸助は、新鮮だなど思いつつ怒らせないうようにしようと思っていた。幸助としても同情はする気はない。出来損ないを買わされたのだ、戦いの中で壊れでもしたら一大事になったかもしれない。いや大抵のことでは壊れたくらいでピンチにはならないだろうが。だからといって許せるものではない。

「店と店にある物を売ればなんとかなるでしょう」

スパイと名乗った店員が口を挟む。

「店を売るなどできるか！」

店主にとっては生きがいなのだ、売ることなど論外だ。

「あれもできない、これもできない。ふざけるのもたいがいにしるよ？ 店を守りたいなら、店の品位を落すようことをしなければよかったんだ。それをお前がゲートツクさんたちを呆れさせ、追い出すような真似をしたから、守りたかったものを失うことになるんだ」
「お前になにがわかる！」

「お前の事情など知らない！ 知る気もない！ 世界にはいろんな人がいるんだ、その人たち全てにそれぞれの事情がある。お前だけが特別だと思うな！」

スパイをこなした男にもなんらかの事情があったのだろう。それを超えたからセリフに説得力を感じさせることができていた。

その言葉に込められたものを店主も感じ取ったのだろう、なにも言い返せずにいる。

傍観者な幸助は心の中で拍手を送っていた。

店主が観念したことで話は進む。店は営業停止となり、幸助たちは竜の鱗を売ったお金と支払ったお金の返却と迷惑料をもらえることになった。竜の鱗は既に街にはなく、行方知れずとなっていたのでお金での弁償となったのだ。

自分たちに被害がこないよう無関係を装っていた店員たちも、商人ギルドは見逃さず罰を与えた。店主の暴走を諫めるどころか協力していた者たちだ、自業自得といえるだろう。脅迫されていた者たちは、同情の余地ありと罰が軽くなかった。

商人ギルドは出ていった者たちが営業を行うのなら店の存続を許可した。だが出て行った者たちは首を横に振る。守ることができず、見捨てたのだ。今更戻ることとはできないと、誰一人帰ってはこなかった。これによりエリアーナ武具店は短い歴史を終えることとなった。

「「ただいま」」

「おかえりー。剣を受け取るだけなのに遅かったね？」

ウィアーレはそろそろ寝ようかといった頃に帰ってきた二人を見て首を傾げた。剣を持っているように見えなかったからだ。剣はどうしたのかと問う。

事情を話し、剣を手に入れられなかったことを話す。

「だから明日ベラッセンで頼むことになりそうじゃな」

「そんなことがあったんだ。ついてなかったね」

「ほんとに」

この運の悪さは翌日まで持ち越されたのか、チェーン武器店の店主は再び出かけていてすれ違いとなった。いつ帰ってくるか未定の状態で、明日かもしれないし十日後かもしれない。

待っていても良かったが、行ける場所を増やすということでキューハン行きとなった。

「そんなわけでキューハンに行くことになった。ワイアーレはどうするかの？」

「そうだね……向こうで泊まりになるなら一緒に行こうかな」

「帰りは遅くなるかもしれないが、泊まりにはなんと思っぞ？　さすがにまたハプニングがあるとは思えん」

「じゃあまた留守番してるよ。もう少しで雨避けの魔法ができそうなんだ」

「ほう？　どこまでいった？」

二人が魔法について話す間に、幸助は遅い夕食の準備を始める。ワイアーレが作っていたので、温めなおすだけでよかった。

そして次の日、二人は二度の転移でキューハン自立都市に来た。まずは幸助が家から武道大会のあったレゾティックマーズへと転移し、そこからエリスがキューハンに転移したのだ。一度で移動するにはエリスの実力では少しだけ転移距離が足りなかった。次からは童装衣を使った状態の幸助ならば、行き来できるようになる。

キューハンは街の周りを五メートルほどの石壁で囲まれた堅牢な街だ。壁の所々には見張り用の櫓も作られており、守りに力を入れているのがよくわかる。街を中心に五百メートル先にもいくつか見張り小屋と櫓があり、魔物や盗賊の動きを常に見張っている。

東西南の入口には常時二十人以上の警備兵が居て、諍いを起こさうものならすぐに兵によって鎮められる。街中にも警備兵の姿はよく見られ、あちこちに目を光らせている。

自立都市と名乗るだけあって、自分たちの身は自分たちで守ると

いう気風が感じられた。

「この街で一番の鍛冶師を探さんとう」

「まあ、一番じゃなくても竜の鱗が扱えて、信用のできる人ならその人でもいいんだけどね」

「そうじゃの。とりあえずギルドに行って情報を集めるとするか」

ギルドでは簡単にトップランクの鍛冶師を教えてもらうことができた。だが注文を受けてもらえるかはわからないということもわかった。それはエリアーナ店主も言っていた品評会が近いことで、鍛冶師はそれに出す武具作成に集中しているだろうから、注文を受ける余裕はないだろうとのこと。

「困ったね」

「行ってみて断られたら、品評会が終わった後にでも予約を入れられないか聞いてみようかの」

「それがいいね」

向かうのはワレイドア工房というところだ。そこは武具店は経営しておらず、契約した他所の店に卸したり、注文を受けて作ったりといった商売をしている。腕がよく、作った物が高く売れるので熱心に客を集めなくても生活が成り立つのだ。

「こんにちはー」

入り口から声をかけても返事はない。それどころか品評会に向けて忙しいのならば金属を打つ音などで煩いはずなのに、とても静かで熱気も感じられない。

念のためにもう一度声をかけると、奥から誰かやってきた。

「なにかご用で？」

四十半ばの女で、どこか暗い雰囲気を持っている。

「剣を作ってもらいたいんですが」

「ごめんなさい、今注文を受けていないの」

「やっぱり品評会用の武器作製で忙しいんですね。それなら品評会の後でもいいんですが」

「……品評会用の武器も作成してなくて、なにか作ることができない状態ではなくて」

「なにかあったのかの？」

暗い表情が悲しみに染まる。

「ああ、言いたくないのなら言わなくともよい。私たちは部外者じゃ、立ち入られたくないところもあるじやろう。コースケ、別の店に行こう」

「うん」

「……すみません、せっかくお越しいただいたのに」

「気にせずともよい。早く問題が解決するとよいの」

「ありがとうございます」

女に見送られて、二人は工房から離れる。

次にオーボット工房という所に行き、そこでも現在の注文は受けていなかったが、品評会後の注文は受け付けていた。

「注文は長剣ですね。いくらかかってもいいから、とにかく頑丈に。重さは五十キロまで大丈夫……えっと本気ですか？」

「本当です。なんならなにか持ち上げてみましょうか？」

「でしたら、その箱をお願いします。四十キロと少しあるはずで

すから」

イレノスと名乗った店員がナイフがたくさん入った箱を指差す。

「よいさつと」

幸助は箱の縁を掴み、片手で軽々と持ち上げる。

「おおっ本当みたいです。これならば普段は使えないような材料も使えて、頑丈な剣ができそうですよ。職人が腕がなると喜びます」
「それは頼もしいのう。それでだ、作る剣の材料としてこれを使っ
てほしいのじゃが」

持ってきていた竜の鱗をテーブルの上に出す。

それはと不思議そうな顔をしたイレノスは、エリスに許可を取り、
手に取る。触ったり、曲げたり、明かりに照らしてみたりとしてい
くうちに驚きの表情に変わっていく。

自身の知識から出た結論があっているのか、少し震える声で尋ね
る。

「もしかして、竜の鱗ですか？」

「その通り」

「本物は初めて見ました」

溜息を吐き、椅子の背もたれに寄りかかる。すぐに真面目な顔つ
きとなり背筋を伸ばす。

「申し訳ありませんが、この注文は取り消させてもらいます」

「どうしてか聞いてよいかな？」

「私どもの得意分野は防具なのです。武器も一級品と呼べる物は作

ることはできますがね。そしてこれを使って防具を作れと言われたら可能なのです。ですが武器は無理です。これを使って作っても、素材の持ち味を全て引き出すことができていない物を作ってしまうだけです。そのような物を客に渡すのは私どもの誇りが許しません」

できないことをできないと言い切ったイレノスから、確固たる信念を持っているのが感じられた。

「そうか、ではこれを使える武器職人を紹介してもらえないだろうか。少ないが謝礼も払う」

「謝礼などいりませんよ。こちらの力不足で断ることになったのですから。竜の鱗を扱えそうな職人はこの街に二人のみ。うち一人は刃物よりも打撃武器を得意としていますから、お客様の希望を叶えることができるのは、ワレイドア工房さんだけでしょう。ですが今あそこは……」

その先は言いづらいのだろう、最後まで言わずに口ごもった。

「そこには一度行ったのじゃよ。そこが駄目だったからここに来たのだが」

「そうでしたか」

「なにがあったのか聞いてもいいのかな？」

幸助の言葉に少し考える素振りを見せる。

「……同業者の多くが知っていますから、いつか耳に入るでしょうし、ここで話しても同じでしょうね。ワレイドア工房さんは親子と二人の弟子で武器を作っています。十五日前のことです。息子さんと弟子の二人で、近くの山に鉱石を取りに行ったのです。品評会用の武器に使う材料のために。そこで息子さんが崖から落ちてしまい

ました。ついていった弟子だけでは救護は無理で、麓にいた人たちに起きたことを伝えた後、街に戻って冒険者たちを雇い急いで救護に向かいました。ですが崖下には落下跡はあったものの、息子さんの姿はなかったのです。血を流した様子はないので、一人で下山したのだろうと探し回ったのですが、一向に見つからず。以来、仕事を放り出して山の中を探し回っているのです」

「そういった理由なら注文受付はしないよね。その山って大きいんですか？」

「それなりといったところですね。強すぎる魔物はいないし、対策もわかっているんで、冒険者でなくとも入ることは可能です」

「……腕がよく、品評会が近い。出場を阻みたいライバルもいるんじゃないかな」

囁くようなエリスの言葉を聞いて、イレノスは頷いた。暗に事故ではなく事件ではないかと聞いたのだ。

「その可能性もあると思います。その線で考え、怪しまれた弟子の一人に街の警備兵が事情聴取を行いました。山に行く前に怪しい者に会っていたということもなく、結果はシロでした。私も話は聞いたのですが、なにか隠しているような気もしたのですよ。事故現場は誤って落ちるような場所ではないですし。それは警備兵も同じらしく、それとなく弟子を見張っているらしいです」

「そういった情報は話してはいかんのじゃないかの？」

「でしょうね。話したのには理由があります。あなた方にバハル君の搜索を依頼したいのです。そのための情報提供です」

「偶然会った冒険者に、よその工房の息子救出を依頼？」

おかしいだろうと幸助は首を傾げた。

「竜の鱗を持っていることや、先ほど見せてもらった力の強さ、資

金力から実力のある冒険者と推測しました。事件を解決すればワレイドア工房さんもやる気を取り戻し、注文を受け付けてくれますよ。そちらにも損はない依頼でしょう？」

幸助の疑問に半分のみ答えを返す。後半の疑問には答えていない。

「実力があると仮定して、わざわざそういった冒険者に依頼する理由があるのかの？」

「ただ道に迷っているだけならいいのですが、誘拐され監禁されていた場合、そこらの冒険者では無事に取り戻せないでしょう？」

疑問系だが、確信しているかのような口調だ。事故ではなく、事件だという思いが強いのだろう。

「その口ぶりでは、なにか確証があるのか？」

「ありません。ですが可能性はゼロではありません。過去品評会でワレイドア工房さんが高評価をもらい、邪魔に思っている者たちがいるのは確かなのです。そこに弟子さんの隠し事が絡んでいると考えています」

「私は気乗りしないが、コースケはどうだ？」

親という存在に含んだものを持つエリスは、親が喜ぶようなことをするのに気乗りしないのだ。

「何ヶ月も探せって言われると俺も引き受ける気はしないかな」

「それについては二十日と期限を切るつもりです。品評会絡みで行方不明になっているのなら、品評会の受付が終われば帰ってくると思いますので。用済みということと殺される可能性もあるので、あなた方に依頼しています」

「二十日か。それならやってもいいかな」

息子を見つけ出せば恩を売れて、気合を入れて剣を作ってくれるだろうと考えた。

それにこの街は世界でも有数の鍛冶が活発な街だ。ここでも竜の鱗を扱える職人が少ないのなら、ほかの場所にはほとんどいないと考えた方がいい。それを探す手間を考えると、ここで頼めるようにした方がいいだろう。それがわかっているので、エリスも完全に断る態度を見せていないのだ。

「コースケが引き受けるのなら手伝うか。あの工房が恨みを買ったことがあるとか、そういった話を聞かせてもらえるか？」

「受けてもらえるんですね。ありがとうございます」

イレノスは事故現場やワレイドア工房のライバル店や不満を持つ者といった、イレノスの知るかぎりの情報を話していく。

行方不明になった人物の名前はバハル。二十一歳で、鍛冶の腕はまだ発展途上。父親に追いつくことを夢としているのだと周囲に話していたらしい。父の作品だけではなく、いろんな人の作品を見るため、他所の工房に出かけることが何度もあったとのこと。時にはキューハンを出て、ほかの村や町にまで行って作品を見ていたらしい。

「最後に聞きたいんだけど。あなたとワレイドア工房の関係って？ 無関係な人がここまでしませんよね？」

「あそこの店主マイナルとは従弟で、ライバルだったんですよ。ライバルといっても職人としてではなく、恋愛の方ですが。親戚に無事でいてほしいということもありますが、かつての想い人ユシルさんに元気になってほしいという思いもあります」

昔恋した人が沈んでいる様子を見るのは忍びなく、どうにかした

いと思い情報を集めていたのだ。

それに納得した二人は工房から出る。そのまま二人は事故現場に向かう。自身の目でどういったところか確認しておきたかったのだ。幸助は現場百回という言葉を思い出し、もしかしたらなにか発見があるかもと考えている。

剣にまつわるエトセトラ 後

事故現場までは徒歩で三時間と近い方だ。そこまで二人は空を飛んでいったので、一時間とかかかっていない。

事故現場は山の中腹一步手前といった場所で、山肌が露出したちよつとした広場になっている。こういった広場はこの山には三箇所あり、ここは一番麓に近い場所だ。

山肌が露出しているのは、そこにある鉱石を求めて掘られたからだ。その鉱石は浅い部分にあり簡単に取れるようで、穴と呼べるほど深いものはない。バハルが落ちたのは山肌から四メートルほど離れたところで、角度八十度近くの坂というか崖となっている。

崖下まで十五メートル弱といったところで、背の低い木が生えている。木がクッションとなり死ぬことはなかったのだろう。

魔法を使うかロープなどを持っていなければ、降りることは難しい。近くに崖下に行く道もなく、弟子がすぐに助けに行けなかったのは仕方のないことだとわかる。

広場の広さは、二十人の人間が集まれば押されて落ちてしまう可能性もあるといった感じで、二人で来ていたのならよほどのことがないかぎり落ちはしないだろう。

『鉱石が転がって、それを拾うために崖に近づいたら強風に押され、前のめりに落ちた』というのが同行していた弟子の証言だ。

「この位置から体を押す風は、山から吹き降ろしの風。人を押すくらいだから強いはず。そんな強い風なら麓にも届いてるはずだよね」「そうじゃの。麓に建物があったから、あとで聞いてみるか」

現場に来て冒険者や警備兵も同じ疑問を抱き、同じように聞いていた。

事故当日建物にいた人の証言だと、確かに強めの風は吹いていた。

だがそれが人を動かせるものかはわからないということだ。

次に二人は崖から降り、落下現場を調べる。落下の際に折れた枝が目立つくらいで、ほかは時間が経ってわからなくなっている。

「特に変わったところはないね」

「時間も経つとるしのう」

「ここから移動して、無事に麓に移動できたとしてキューハン方面にはでないみたい。高い所から落ちたんだし、まずは近くの村とかに行って休むよね？ 行ってみる？」

「それはほかの者たちも考えるじゃろうし、見つかったという情報がないから外れじゃないかの？」

「そっか。一応山のどこかに監禁されてないか探し回ってみる？」

「魔法も使って探してみるか」

以前幸助を探す時に使った魔法の亜種、魔力に反応する探索魔法と透視魔法で人並の魔力を探していく。山が大きくないといっても、それなりに広いので一日では終わらず、三日間山中を探し続けることになった。結果は無駄足。魔法に反応したのはどれも魔物ばかりで、山にいるとしたら死体となっているということだ。

「一度依頼人の元に戻るかの。新たな情報が入っておるかもしれないし、山にはいないということも報告しておきたい」

エリスの提案で、オーボワット工房に戻る。

「こんにちは。今日はどうしたんです？」

武器を運んでいたイレノスが入ってきた二人に気づく。

「報告と情報が入ってきていないか聞きにきたのじゃよ」

「そうですか。まずは報告からお聞きかせください」

「山を魔法も使って探してみたが、いるとは思えなかった。まだ山にいるとしたら死んでいるとしか思えんいう」

「……そうですか。まだ生きていると仮定して、搜索を続行してください」

仮定と言うあたり、バハルが無事でいると無条件で信じているわけではないらしい。

高所から落下して行方不明と、不安材料が二つ揃っているのだから無理はない。

「新しい情報は入ってきてないですね。警備兵たちも搜索を打ち切ることにしました」

「打ち切るの？」

「はい。探し始めてそろそろ二十日です。これだけ探して見つからないのだから、魔物に食べられたのだろうと考えているようです。

そうではない可能性を訴えたのですが、警備兵も搜索だけに時間を割くわけにはいかなと言われました」

イレノスを知る情報の裏で、一度搜索を止めたようにみせかけて、なんらかのアクションが起きるのを待つという判断もある。弟子からまだ情報を引き出せていないのだ。油断して動いてくれることを期待している。

このことは公表してしまっでは意味がなく秘密にすべきことなので、イレノスは情報を得ることができなかった。

「現状での手掛かりは弟子くらいじゃの。一度会った方がよいのかな」

「ワレイドア工房に行くと、ユシルさんたちが不安がるかもしれないので、家を教えましょう」

すぐに教えられた家に向かう。弟子は一人暮らしで、長屋のような建物の一部屋を借りて暮らしているらしい。

時刻は昼前で、通常ならば働いている時間だ。いなければ夕方にもまた来ようと、幸助は扉をノックする。

「ん？」

「どうした？」

「なんか視線を感じたんだけど」

扉をノックした瞬間、複数の視線が感じられた。気づいていると悟らせないため、振り返ることはしなかった。エリスも同じように振り返ることはしなかった。もしかすると行方不明に関連することかもしれない、泳がせた方がよいと判断した。

弟子は出かけていなかったようで、玄関に近づいてくる気配があり、扉が開く。

出てきた男は、店員に聞いていた特徴を持ち、弟子本人だとわかる。

「どなたですか？」

「ワレイドア工房さんの息子さんについてお聞きしたいことがあります」

「そのことでしたら既に話したでしょう？」

警備兵の一員と勘違いした弟子が顔を顰めて答えた。

「いえ一度も聞いてないのですが」

「私たちは警備兵関連ではなく、オーボワット工房からの依頼でバハルという人物を探しておる」

勘違いに気づいたエリスが指摘する。

「オーボワット工房……イレノスさんですか」

「はい、その通りです」

「親方や奥さんだけじゃなく、イレノスさんにまで心配かけてるんですね」

そう言って憂鬱そうに溜息を吐いた。

「当時のことについて聞きたいんですけどいいですか？」

「はい。答えますよ」

エリスと相談し聞くと決めたことを聞いていく。

「鉱石採取に行って風が吹いて落ちた。これに間違いはない？」

「はい。強く印象に残ってますから、さすがに忘れようがありません」

「落下して生きていることは確認しました？」

「崖に近寄って、下は見ました。ですが木々が邪魔で無事の確認はできませんでした。声をかけてみましたが返事もなかったです」

当時のことをしっかりと思い出すかのように目を閉じ思考し、スラスラと答える。

「その後の行動は？」

「麓の建物にいた人に落ちた場所を伝えて、俺は街に救援を増加を頼みに行きました」

「場所を伝えて一緒に行こうとは思わなかったのですか？」

「落ちた場所はすぐわかりやすい場所ですから、案内は必要ないと思いました」

「あとは救助に行ったらバハルさんはいなかったということですね？」

「はい」

イレノスから聞いた情報と変わらないのだが、エリスは二つ怪しさを感じた。

一つは淀みなく答えたこと。十五日前のことなのだから、少しは詰まってもよさそうだと思ったのだ。衝撃的で記憶に強く残っただけかもしれないが。

二つ目は、当時の行動が落ち着いているように思えた。知り合いが目の前で事故にあったのだから、慌てて当然だ。それなのに案内は必要ない、安否を気遣い同行しない、さらに多くの救助を求める、といったことを思いついている。冷静であれば思いつくことだが、突発的に起きたことに対して慌ててとった対応としてはいささか不自然さを感じる。

事前に落ちると知っていれば、落ち着いた対応も取れるとエリスは考え、弟子が落としたのかもしれないと思いつく。

弟子とバハルの関係、その他の人間関係も一度調べてみようという今後の方針を決めた。

「聞きたいことはそれだけですか？」

「落ちた現場に争った形跡とかありました？」

「なかったですね」

「俺からは以上です。エリスさんは？」

「……いやない」

証拠が集まっていない状況で下手なことは言えないと、考えついたことを口に出すのは止めた。

「ありがとうございます」

「いえ、親方たちのためにも早く見つけてあげてください」

そう言って一礼し弟子は扉を閉めた。最後のセリフは心が竦っており、本当にそう思っていると感じられた。

これを聞いて、エリスは弟子犯人説の可能性を下げた。

二人は弟子の家から離れる。その後ろを誰か尾行しているのに幸助は気づいていて、エリスに伝えた。

「どうする？ 撒く？」

「捕まえて、話を聞いてみるのも手じゃな。得た情報が少ないから。う。捕まえるとしても人の少ないところでじゃな。助けを呼ばれて警備兵に捕まるといったことにはなりたくない」

「ちようどいい場所あったっけな」

この街を隅々まで歩いたわけではなく、ちようどいい場所が即座には浮かばない。

「逆に尾行してみようか。路地裏に入って、幻をまとい変装して尾行してきた者の顔を確認して、尾行してみるというのはどうじゃ？」

「いい考え浮かばないし、それでいいと思う」

二人は魔法の準備をして、目に付いた路地裏へ入る。

路地に入り、急ぎ足でさらに角を曲がってすぐに魔法を使う。そして何食わぬ顔をして少し離れて表通りへと歩く。二人一緒だと怪しまれる可能性があると思ったのだ。

先を歩く幸助とぶつかるように警備兵の二人組が路地裏へと入ってくる。

「すまないが、ちよつといいか？」

「はい？」

「今ここに男と女が入ってこなかったか？」

「ああ、その角を曲がったみたいですけど。なにかあったんですか？」

「ありがとう。急ぐのでな、では」

もう一人も幸助へと頭を下げ、走って去っていく。それを見送り、変装したエリスを待つ。

「警備兵とは予想外じゃったの」

「だよね」

「おそらく弟子を怪しんで見張っていた警備兵に、私たちがなにか関連があると思われたのか」

「無駄足にさせちゃって悪いことしたね。今度呼び止められたら、依頼されたって言った方がいいかな？」

「そうしておこうか」

頷きあった二人は、イレノスの元へ向かう。バハルの人間関係についてなにか聞けないかと思ったのだ。

イレノスの知るかぎりではトラブルはなかったと聞いた。親しい人間も教えてもらい、その人たちがいる場所を回る。イレノスからの依頼だと前置きして、話を聞いていく。

得た情報では恨まれるようなことはしていないとわかった。時に喧嘩することもあったが、深刻な事態にはなっておらず、遺恨を残すようなことになっていない。ほかには一年前から好きな人ができて浮かれていたという情報も得た。それがこの街の人物ではなく、同じ鍛冶師だということもわかった。

好きな人と駆け落ちした可能性はないかと友人たちに聞くも、結婚のことを話した様子はなく、バハルの親も結婚を反対するような頭の固い人たちではないとのこと。

「情報は入ったけど、怨恨ではなさそうってことくらいかな、わかったのは」

「そうじゃの。駆け落ちという可能性も低いし、まだまだ情報が足りないな」

二人して、露店で買ったジュースを飲みつつ頭を捻る。
そこに一度撒いた警備兵が近寄ってきた。

「見つけたぞ！」

「あ、さっきはどうも」

「……慌てないな？ 外れか？」

一度は撒いた自分たちを見て、全く動揺した素振りを見せない二人に警備兵たちは落胆の色を隠せない。

「バハルの件については無関係じゃな。私たちもオーボワット工房からの依頼で探しておるのじゃよ」

「オーボワット工房から？」

簡単に事情を伝える。

「そうだったのか。親しかったのなら心配して依頼することもあるか……そっちはなにか情報を掴んだのか？」

「そちらの情報も教えてもらえるとありがたいのう」

互いに情報を交換するも、似たようなもので進展はなかった。山にはいないらしいということと、怨恨の線はほぼ皆無と確定しただけだ。

「落したショックで記憶失って、どこかで養生してるとかは？」

思いついたことを言ってみた幸助に、警備兵は首を横に振る。

「この街と他所の村の医者のところを確認に行ったが、それらしい患者はいなかった。怪我の治療に来たということもなかった」

「死んでるって可能性が高まった気がする」

警備兵も幸助の言葉を否定できないのだろう、咎めることなく苦い表情を浮かべるだけとなる。

「弟子のことがなければ死んだと断定されてもおかしくはないの。弟子から無理矢理にでも聞きだすべきなのか」

「今のところ唯一つの手がかりだから、手荒なことをして手がかりを失いたくないんだ。だから見張りだけで済ましている。じゃあ、俺たちは仕事に戻る。なにか情報を得たら警備兵の休憩所まで来てくれ」

この後警備兵はオーボワット工房に向かい、二人が本当に依頼を受けたのか確かめて仕事に戻った。与えられた情報を鵜呑みにするほど素直ではないのだ。

ジュースを飲み終えた幸助たちは、今後の動き方を決めてからオーボワット工房に向かった。ライバル店の場所を聞き、そこを透視して監禁されていないか調べてみようということになった。ごり押しだが、今のところそれくらいしか手はない。弟子の動きは気になるが、今は警備兵に任せようということになった。

教えてもらったライバル店はこの街に二箇所、他所に四箇所といったところだ。位置が離れている店もあり全部回るのは三日ほどかかるだろう。

その日の内に街にある店とその店所有の倉庫を見て回り、いないと判明した。

次の日から外回りを始め、二日目のとある村で幸助たちは弟子が歩いているのを見て、即座に隠れ後を追いつめた。

バハルとは無関係の用事でここに来たのかもしれないが、念のため尾行してみることにしたのだ。既にこの村にある工房は見て、空振りとなっていた。

弟子は二人に気づかず、村はずれの一軒屋に入る。一階建ての一般的な家屋だ。外から見るとぼろく、人が住んでいるようには見えない。

「中を見してみる」

エリスは透視の魔法を使い、中の様子を確かめる。弟子の姿を求めて視線を動かし、下に視線を向けた時にエリスは動きを止めた。

弟子のそばに、男と女がいる。男はイレノスから聞いていたバハルの特徴に当てはまる。オーバーオール姿の女の方は見覚えはなかった。申し訳なさそうな弟子が何かを話していて、それをバハルたちが聞いている。話しが終わるとバハルと女は首を横に振る。それを見て弟子は大きく溜息を吐いた。

バハルはロープで縛られたりしていないので、あそこには自分の意思でいるのだろう。

「いた？」

「ん、ああいる。弟子とバハルともう一人、知らない女がいる」

「女？ バハルさんのことを聞いて出てきた女っていえば好きな人くらい。その人がそうなのかな？」

「おそらく」

エリスから見て、仲が悪そうには見えない。

「これで依頼は達成じゃの」

「あ、そっか。見つかるだけで良かったんだっけか。理由も探らないとっていつの間にか思ってた」

「それは親や警備兵たちと話し合うだろうさ」

二人が頼まれたのは、バハルの搜索と誘拐されていた場合の救出で、どうして行方不明になったかの調査は受けていない。どのような理由があるうと関係なく、バハルを見つけたせば依頼達成なのだ。イレノスとしては探していくうちに理由もわかると思っていて、理由の調査は口にしなかったのだ。見つかったことは確かなので、こういう見つかり方でも依頼達成だと認めることになる。

この後バハルがここから動かないか、ほかに誰か来るか、などを確かめるため三時間ほど見張り続けた。

その間に弟子と女が出てきてどこかへ去っていった。幸助が女を尾行し、どこの誰か探る。行った先はこの村に探りに来た工房だった。

「ライバル店の関係者じゃと？」

「そうだと思う」

「ライバル店がバハルを誘拐、はないかあの様子だと」

誘拐ならば逃げ出さないようにするだろう。しかしバハルは拘束されておらず、空き家の施錠もされていない。いつでも逃げ出すことが可能なのだ。脅されているから逃げ出せない、と言うにはバハルと女の様子はギクシャクしていなかった。

「どうなっておるのやら」

「後で聞けたらいいけどね」

その言葉にエリスは頷く。

バハルが移動する様子も逃げ出す様子もないので、二人はキュー

ハンに戻り、オーボワット工房へと向かった。

「見つかったぞ」

「本当ですか！」

店に入って短く告げたエリスの言葉を聞き、持っていた書類を床に落としたイレノスはエリスに駆け寄る。

「で、どこに？ どうして行方不明に？」

「どこにいるかはわかったが、どうしてかはわからぬままじゃよ。親を連れて行って直接聞けばよい」

「探している途中で理由がわからなかったんですか？」

「誘拐されたわけではなさそうだとはわかったのじゃがな」

見つけた経緯を話す。

「しらみつぶしで行っていた最中で、偶然見つかったと。それは運が良かった。そういうわけなら理由はわかりませんね、納得です」

「それで今から会いにというか、捕獲に行くか？」

「行きましょう。ユシルさんたちも一緒にいいですよね？」

「ああ、構わんぞ」

「じゃあ急いで旅支度してきますから待っていてください」

そう言って背を向けたイレノスに、エリスが声をかける。

「転移の魔法で行くから旅支度する必要はないぞ？」

「転移、ですか？ 急ぎの荷物を届けてもらいたい時にギルドに依頼するんですが、それと同じ魔法ですか？」

「同じじゃ」

「使える人って優れた魔法使いって聞いていましたが、優秀な人に

依頼していたんですね私」

そこまで優秀だとは思っていなかったのだ。

それならばと、他の店員に後を頼み、ワレイドア工房へ向かう。

「ユシルさん！ バハル君見つかりましたよ！」

工房に入り、店の奥まで聞こえるように大声を出す。すぐに奥から人が急いで出てくる音がした。

ユシルとマイナルが嬉しさと不安を混ぜた表情で出てきた。

「イレノス！ 今の本当なのか！？」

「イレノスさん！」

二人はイレノスに縋るように近寄る。その二人に笑みを浮かべて頷く。二人は安堵してその場に泣き崩れた。

十分ほど床に座り込んでいた二人を、イレノスは慰める。そうして二人は涙を拭って立ち上がった。そこでイレノス以外に人がいることに気づく。

「あら？ あなた方はたしか……」

「この人たちがバハル君を見つけてくれたんだよ」

「ありがとうございます！ ありがとうございます！」

マイナルが二人の手を取って、強く礼を言う。ユシルも深々と頭を下げる。

「以前お客様としていらっしゃいましたよね？」

「はい。あの後、オーボワット工房に向かい、そこでバハルさん捜索を依頼されました」

「イレノスもありがとう！」

「俺も心配だったんだ、礼なんていい。早速バハルのいるところに向かおう。転移の魔法で連れて行ってくれるそうだから、すぐに会えるぞ」

「なにからなにまでありがとうございます」

感謝の思いが絶えない夫婦はもう一度幸助たちに頭を下げた。

落ち着いた後、全員でバハルのいる村まで移動する。早く息子に会いたく落ち着かない夫婦を案内し、ボロ家まで来た。見慣れぬ人間が落ち着かない様子で空き家に向かう様は、とても目立つものだった。

入りたそうにしている夫婦に断りを入れて、バハルがいるか、危険はないか透視で確かめる。中にはバハルだけで、暇すぎてうとうととしている様子が見えた。

「大丈夫じゃな。入ろう」

エリスが先頭に立ち、皆を案内する。

中も人が住んでいるようには思えないもので、あちこちに埃が溜まり、扉や窓は壊れていて、木製の床も歩くとびに小さく音が鳴る。そんな中、到着したのは廊下の端。そこは掃除したようにある程度綺麗になっていた。地下室への入り口はわかりやすく、隠し部屋として使われていたのではないとわかる。おそらく地下倉庫として使っていたのだろう。

地下への蓋を開けると階段が見え、二メートルほど下の石畳の床が明かりに照らされているのが見えた。

「また来たのか？」

弟子や女と勘違いしたバハルの声が聞こえてきた。

「「バハル！」」

「父さん母さん！？　なんでここに！？」

両親の声を聞いてバハルは、見える位置に急いで移動する。地下から見上げ、本当に両親だと確認し、驚きの表情を見せる。その表情の中にわずかながら焦りもある。

「それはこっちのセリフだっ」

マイナルが怒鳴り返す。散々心配したこともあり大きな声で、家の外にも聞こえていただろう。

マイナルとユシルが地下へ降り、三人での話し合いが始まる。

どれほど心配したかということに始まり、どうしてこうなったのかと話題が移っていく。

バハルは心配かけたことに対しては素直に謝る。しかしどうしてこんなことになったのかは黙る。

「謝るとするのはおかしくないか？」

エリスがポツリと漏らす。

「いやおかしいというのはちと違うか。しかしどこか違和感がある。心配かけて謝った……その後に自分の無事を伝えたりしないか？」

「といますと？」

「誘拐されたのなら、さらわれる時にもめたりすると思う。もめなかった場合は魔法で気絶させられたか。怪我はなくとも、精神的に無事でいるのは難しい。そうでなくとも崖から落ちているのじゃ、どこかしら怪我しておると思うが。その具合を伝えておらぬ」

「そういえばそうだね」

三人の会話を思い出し、幸助もイレノスも違和感が出てきた。

その時幸助の耳が足音を捉えた。距離的に玄関辺りだろう。幸助はエリスとイレノスに静かにするようジャスチャーで伝え、静かに玄関に向かう。

途中で扉が壊れた部屋に隠れて、そこから近づいてくる足音の主を確かめる。

部屋の前を通ったのは、二時間前にこの家を出ていった女だった。女は足音を立てないように歩いている。

女が完全に部屋を通り過ぎてから、幸助は声をかけた。

「ここに何の用ですか？」

「ひゃあっ!？」

すごく驚いたようで、振り返った女の目の端には涙が浮かんでいる。

少しだけすまなく思いつつも、もう一度問いかけた。

「いや、私はその……そうっ! そっちこそこんな空き家に何の用なの? 私はそれを確認するために来たの!」

「ここに潜んでいた男の親を連れて来たんだけど。そっちは昼間もここにいたよね?」

「うう」

あっさりと言い返されて呻く。

「あれ? バハルの親を連れて来たって言った?」

「言ったね」

「じゃあ、ばれたんだ」

「全部ではないけど、事情はわかってる。でも確認のために詳しい

話を聞きたい」

こうなった経緯がわかるかと嘘を吐く。

女は余裕がなく、幸助の嘘に気づかなかった。

リップと名乗った女の話によって、今回の出来事は犯人がいないことがわかった。騒ぎが起きた原因を生み出した人間はバハルだ。だから犯人はバハルとも言える。

事の発端は何度か話題になった武具の品評会だ。これにバハル自身は出ないが、リップは出る。リップはこの村にある工房で二番目の腕を持つ。

リップはバハルの恋人で、出会いはバハルが修行一環として工房を訪れた時だ。やってきたバハルの相手を任され、交流を持ち次第に互いに惹かれていった。

結婚を考えていたのだが、ライバル店であるワレイドア工房の息子ということで店主兼父親が難色を示した。そして結婚の条件に品評会で最高評価を貰うことという条件を出した。

今のリップの腕ではマイナルには敵わないと、リップ本人もバハルもわかっていた。けれどどうしても結婚したく、どうにかできないかと考えて行方不明事件をでっち上げることにした。行方不明になれば、マイナルは剣を作るどころではないと思ったのだ。実際そうだったわけなのでだが、自分たちを優先しすぎて突然子供がいなくなった両親の気持ちを考えていない。

弟子は行方不明に現実味を持たせるため、バハルが頼みこんで協力者となった。弟子が本当に見たのは、落下ダメージ軽減準備を整えたバハルが風が吹いている時に崖から飛び降りたところだ。

マイナルたちが消沈している様子を見て、罪悪感が湧き一度本当の言おうとして言いそびれ、タイミングを失いそのまま言えずにいた。

さすがにイレノスや冒険者まで関わってきて、もう止めようと説

得しようと思ったのが一昨日の夜だ。

この話を聞いて、幸助はエリスたちの元に戻り、バハルたちも集めて暴露した。

話を聞いたマイナルは激怒し、バハルを殴る。ユシルも怒っていた。そんなことをする前に一言相談すれば協力したのだ。結婚を喜びこそすれ、反対する気などなかった。相手方に土下座の一つくらい簡単にしてやった。

リップの父親に難色を示されたことで、マイナルたちもそうかもしれないと思ってしまったことが、相談しなかった原因だ。

親という存在が気に入らないエリスでも、今回はマイナルたちに同情した。さすがに自分勝手すぎるだろうと。

そのままマイナルとユシルは、バハルとリップに一時間ばかり説教をした後、幸助たちをほったらかしにしていたことに気づき、慌てて謝った。

その日はバハルたちはその村に泊まり、幸助たちは家に戻る。

翌日、幸助たちはさらに説教を受けて憔悴しているバハルたちを見ることになった。

リップの父親も交えた夜の話し合いで、二人で協力して両方の父親を納得させる剣を作るまでは結婚禁止ということになっていた。

一言相談すればできていた結婚が最低でも二年先に伸びることになったが、自業自得というものだろう。

「この度は馬鹿息子のことでご迷惑おかけしました」

夫婦揃って頭を下げる。バハルとリップも頭を下げている。リップの父親も事件が起きた原因の一人として頭を下げている。

「それでお礼としてなにをしたらいいかと思っていたところ、イレノスから剣を作るといいとアドバイスを受けまして、それでよろし

いのですか？」

イレノスもその剣を作る材料を提供することで、依頼の報酬とするつもりだ。

「目的がそれですから、こっちとしては願ってもないことです」

「では、今日から早速作りましょう！ 竜の鱗を使った剣は久しぶりです。楽しみですね」

「品評会には出展しないので？」

「今から作ってもいいものはできませんし、恩人を後回しにできません。それに正直なところ品評会よりも竜の鱗の方が興味を惹かれているんですよ」

そう言って明るく笑うマイナルをイレノスは仕方ないなと諦め顔で、ユシルは仕方ないわねと笑みを浮かべて見ている。ユシルがイレノスではなくマイナルを選んだのには、こういう母性を刺激される部分に関係していた。

リップとその父親を除いた一行はキューハンに戻る。ユシルとイレノスとバハルは警備兵に事情を話すため、警備兵の休憩所へ出かけ。マイナルは幸助に質問したりして剣を作る参考にしていく。

剣の完成には一ヶ月と少しかかるとマイナルは話す。じつくりと丁寧に作りたいため、それくらいかかるとのことだ。

俺の最高傑作にしてやるとマイナルは笑っていた。

次に会うのは完成しているであろう四十日後だ。

また来ますと告げて、二人は家に帰った。

剣にまつわるエトセトラ 後（後書き）

脱字、おかしい箇所指摘ありがとうございます

帰ってきたよ家政婦さん

英雄復活、偽神来襲と続いた騒動が嘘のように穏やかな日々が過ぎる。

剣が出来上がるのは一ヶ月ほど先、幸助は鍛錬をしたり、新しい魔法を習得したりとのんびり過ごしていた。ほかにコキアを鍛えに行ったり、果物のパイやクッキーを作りお土産にして店の様子を見に行ったりもしている。それらのお菓子は好評だった。お菓子作りに自信を持ち始めていた、キッチン担当の自信を碎くほどに。

実のところ開店は予定より遅れていた。季節に合わせたメニューの練習も加わったせいだ。練習を始めた時は初夏一二歩手前といった感じで、熱いお茶を飲んでもまだ違和感はなかったのだ。だがギルド職員に協力してもらった頃には気温も上がり始め、アイスティーを求める声が少なくなかった。そういった追加練習を終え開店したので少し遅れたのだ。

宣伝と珍しさもあって、開店三日間は忙しすぎるほどに忙しかった。見に行った幸助は手伝ってくださいとセレナに強制連行され、キッチンでお茶を入れ、お菓子作りをするはめになった。馬鹿みたいに体力があるので疲れるということはなく、閉店後は疲れ果てた店員たちの世話もすることになった。

客の反応は、一日目は戸惑いが大きかったが、三日目は理解が広まり楽しむ客もいた。お茶とお菓子の味にも満足した様子で、たまの贅沢に来ようかという声が聞こえていた。

そんな忙しさが落ち着いた店の様子を見に行った次の日の朝、朝食で使った食器を洗い終えた幸助にエリスが話しかける。

「コースケ、今日はなにをして過ごす？」

「今日はリッカートに行ってくるよ」

「変装の魔法を実際に試してみたくて私が頼んだんです」

「実際に使って動くか、いいんじゃないか？ いざという時にいきなり使うより、実験しておいた方が安心できるしのう」

「うん」

「なにか買ってくるものがある？ 夕食食べたいものがあるとか」

「そうじゃの……今日は魚という気分」

わかったと頷き、幸助は出かける準備を済ませる。ワイアーレも幻を纏い変装を完了した。

転移を使う二人をいつてらっしやいと見送ったエリスは、魔法の研究のため自室に戻る。その魔法は開発したはいいが、自分では魔力ランクが足りず使えなかったものだ。それを幸助に習得させて、実際にどうなるか確かめようと考えている。もしかすると自分に使えるように改良できるかもしれないのだ。

がんばるか、と気合を入れてエリスは机の上の紙束に集中し始めた。

街から少し離れた場所に転移し、幸助とワイアーレは街に入る。日差しが強くなっており、夏と言っていい季節だ。暑さに負けないよう、街のあちこちから威勢のいい声が聞こえてくる。

幸助はジャケットの袖を捲り上げ、ワイアーレは半袖ブラウスとハーフパンツという涼しさを求めた服装となっている。

ワイアーレの用事は魔法の効果を確認するというだけで、街を歩き回るだけで済んでしまう。人々がワイアーレを見て、おかしい反応をみせなければ成功だ。

「コースケさん、これからどうする？ 私は歩き回るだけで用事が終わっちゃうんだけど」

「冒険者ギルドに行こうかなって思ってるよ」

「ギルド？ 依頼受けるの？」

「そう。雑務系をね」

ウィアーレを促して、ギルドに向かう。

この街で自分の名前を広めようと雑務系を受けようと思ったのではない。広めようと思ったのは店だ。依頼先で一言二言店のことを告げる、そういった宣伝目的で雑務系依頼を受けようと思ったのだ。効果はそれほど大きくないだろうが、やらないよりはましだろうと考えた。

ギルドに入り、雑務系依頼を見ていく。

「ベラッセンよりも多いね」

「そりゃこっちの方が人口多いから。それだけ問題もたくさんあるよ」

「あ、そうだね」

幸助は飲食店と一応食材店からの依頼は避けて、個人のものを中心に探していく。店からの依頼をこなして、そこで宣伝すると客を奪う形になる。開店したばかりで、悪い噂を流されるわけにはいかなかった。

「最初はこれ行こうか」

「庭の手入れ？ きちんとやれるか自信ないよ？」

「きちんとやりたいならプロに頼むし、素人作業でいいってことだと思う」

幸助の言葉に納得し、この依頼を受けることになった。

依頼者の家に行き、依頼を受けたことを告げる。依頼者は六十近くの老人で、最近腰が痛くなって手入れができなくなったのだという。

幸助の予想通り、素人手入れでかまわないということだ。手入れするのは庭の高さ四メートルほどの木と幸助と同じ高さの垣根。木

は枝をある程度枝を払い、垣根は上部三十センチほど切るように頼まれ、木は幸助、垣根はウィアーレがやることになる。

「梯子と台座取って来るからちょっと待っててくれや」

「台座だけで構わないですよ」

「梯子ないと木の手入れできんぞ？」

「空中に浮ける魔法使えるので」

「あ、そういうことかい。さすが冒険者、便利な魔法が使えるな」

羨ましいと笑い、脚立とハサミを取りに行く。

宙に浮いて、枝を切っていくことで梯子の昇り降り、位置調整が省略でき手早く終わる。

ウィアーレの方も一定の高さに切っていくだけなので、ミスが起ころうともなく順調に進め終わらせた。

約四時間後には掃除も含めて作業が終わる。途中で奥さんがお菓子を出して休憩となったので、四時間もかかってはいない。

「おーっ早いねえ。以前は一人でやったということもあるが、三日かけたんだよ」

「丁寧にやらなくてよかったですからね」

「完了証明紙だ、ありがとさん」

依頼を終えた幸助は店のことを伝え、よかったら奥さんと来てくださいと言って幸助たちは依頼者の家から出る。

その日の依頼はそれで終わりとして、買い物をして帰る。

次の日も、その次の日も宣伝を兼ねて依頼をこなしていく。ウィアーレもお金を貯めるため、幸助に同行した。

やった依頼は、工房の大掃除手伝い。重いものを運ぶので、少しでも手伝いがほしかった紡績工房の主からの依頼だった。力仕事は楽な部類な幸助と、ステータスが上がって力がDになったウィアー

レにとっては簡単な依頼だった。

古くなった家具を捨てたいので運んで欲しいという依頼もあった。こちらでも力仕事でさっさと終わり、あまりの速さに依頼人を驚かすことになった。

次は失せ物探し。家の中で落としたと思われる指輪を探す手伝いをしてほしいというもの。ワイアーレが金属探知の魔法を覚えていたので、これも楽に終わった。指輪は廊下の床下に落ちていた。壁際に細い穴が開いており、家具の影になっていて穴が開いていることに気づかず、指輪のありかもわからなかったのだ。

次は碎石作業。急ぎで砕いた鉱石が必要となったが、人数が足りず納入に間に合うかわからず誰でもいいので助けてくれという依頼。これも力作業なので問題なかった。

次は隣の空き家が騒がしいので、調べてくれというもの。依頼者は周囲の家。原因はツインテールキャットや明光甲虫や雪羽鳥といった小型の大人しい魔物が集まり、集会所としていたからだだった。人間に飼われている魔物もいるため、退治するというわけにもいかず、代わりの迷惑にならない場所を見つけ、そちに連れて行き解決とした。

最後に牧場を広げたいので、柵を作ってくれという依頼をこなす。指示された箇所に杭をどんどん打っていき、板を杭に打ちつけていく簡単な作業だった。

ほとんどが体力仕事だったが、ステータスが上がったワイアーレは最後まで付き合ひ、上がった体力に感動していた。

久々の荒事も裏もない仕事に、幸助はこういった仕事の方がやり性に合っていると感じていた。

店の宣伝も忘れずやり、既に行ったという人もいて幸助はありがたいと思っていた。

柵を作る依頼を終えて報酬を貰って帰ろうとしている時、二人は受付に声をかけられた。いつもの受付嬢で、幸助にギルド長から依

頼があるということを伝えるため呼び止めたのだ。

「そちらの方を客室に案内しますので、あなたはギルド長の執務室へ行ってください」

「大変な仕事なんですかね？」

「私には内容は知らされていません」

情報を制限しているということは、やはり面倒な仕事なのだろう。

「じゃあ、行ってくる」

「うん、待ってるよ」

執務室へ移動し、ノックしてから入る。

「よく、来たな」

「依頼があるって聞いたんですけど」

「ああ。まあ座れ」

「はあ」

偽神信仰者が来た時ほどの焦りはガレオンからは感じられない。それを見て、そこまで大変な仕事ではないのかなと幸助は思う。

「最近、雑務系依頼を頑張っていたようだな」

「ずっと家にいるのも不健康だと思いましたから。ついでに店の宣伝もしてみましたよ」

「討伐や護衛といった依頼の方が儲かるだろ？」

「雑務系の方が性に合ってるみたいで」

「そうか。そこらへんは個人の感性とかだな」

うんうんと頷き、手元にあったお茶を飲む。稼ごうと思えばいつ

でも稼げるのだし、ほかの冒険者の仕事をなくさないという意味でも強要はしない。

「えっと依頼の話は？」

「ああ、するぞ。頼みつつのは、潜入してほしいところがあるんだ」「潜入ですか」

面倒そうだと幸助の顔が険しいものになる。

「すまん、お前さんにしか頼めそうにないんだ。ほかの奴だと大怪我しそうでな。ギルド長つてのは、ちよいと裏に関わる人間を使うことがあってな。今回もそんな人間を使っていたんだ。まあ、向こうから情報を持ってきて、それを確かめるため動かしたんだがな。潜入してほしいところは、泥棒一味のアジトだ。表向きは二年前に開店した工芸品店だ。店のそばに立てた倉庫に盗んだ物を隠しているらしい」

らしいというのはその倉庫に入って中を見ることが出来ていないためだ。

「潜入してなにをすれば？」

「護衛だ。先に潜入している奴がもっと詳しいことを調べ、盗品や次に盗む場所を探ろうとしているんだが、怪しまれた時に助けてくれる強い奴が欲しいと言ってな。どうやら冒険者崩れが用心棒としてっているらしい」

「その潜入している人は戦うことできないんで？」

「一般人との喧嘩に勝てる程度じゃないか？」

それでは冒険者を相手するには力不足だなと、幸助は頷く。

「潜入したら泥棒の手伝いをしろと頼まれる可能性もあるが、その時はついて行っている。誰かを傷つけたりしなければ、事件後警備兵の協力者として扱われ無実で済む。あとできれば女に変装してもらいたい。できればだが」

「できますけど、なんで女装？」

「向こうの連中が少しは女っ気がほしいって言ったらしくてな。あとは男よりは女の方が油断を誘えるだろう？　もう一つついでに言う、お前さんが冒険者だと知っている可能性もある。確率は低いかな。もしかすると偶然ギルドに出入りしているところを見たことがあるかもしれない。変装せずに潜入して冒険者とばれたら、ギルド関連で潜入していると考えるはずだ。そうなるとギルドや警備兵に狙われていると判断して、逃亡される可能性がある。そういった可能性を潰したいんだ。だからばれないように変装してほしい」

「ちょっと思っただんですけど、泥棒のアジトだってわかっていながら警備兵たちを動かしてさっさと捕まえてしまえばいいと思う」

「そうしたいんだが、盗まれた物の中に絶対取り戻したい物があってな？　一度に全員捕まえることができず、取り返したい盗品を持って逃げられるなんて事態を起こしたくない。盗品がアジトにあると決まったわけでもない。街の外に隠してあったら、それを持って逃げられるってことも起こり得る。常にアジトに全員いるわけではないようなあ。一度に全員捕まえてしまいたいから、機会を待っているってのが現状だ」

「そうですか」

変装するならユイスバージョンは使えない。潜入したといっても、ずっとアジトに籠りっぱなしではないだろう。外に出た時に偶然メリールやセレナに会うことがあるかもしれない。泥棒として動いている最中に会ってしまえば、二人にも迷惑がかかるかもしれない。

「こんなもんでどうでしょう？」

魔法を使い変装する。容姿のイメージは、受付嬢の顔パーツを少し変えた感じだ。別人だとわかる程度に似せた。

二十歳半ばで、目は黒色、髪は鈍い銀色。背中までの長髪を毛先で括り、体の前に垂らしている。タレ目気味で穏やかそうな感じの美人になった。

「ティオネに似ているな」

「受付さんに似せてみた」

「ああ、だから似ていると思ったのか。というか声も変わったな」

「そういう魔法だから。あの人の名前ティオネって言ったんだね。この姿の名前は……シオンでいいかな」

ティオネという音の響きからなんとなく思いついた名前を言い、ガレオンも了承した。

その後シオンとしての背景を作り上げ、泥棒の専門用語や常識を聞き、幸助は部屋を出て行く。

作った背景での生まれはカルホード大陸。海竜にさらわれて帰る時に寄った港辺りの出身で、そこを中心に盗みをやっていた。犯罪者として名が売れる前に大陸を移動し、貯まったお金を使い穏やかに暮らしていたという設定だ。今回の誘いに乗ったのは、お金が必要になったので一時的に復帰したということにした。

潜入は明日からということになった。ガレオンとしては、鍵開けや罠発見解除の技術訓練を大急ぎでさせた後に潜入させようと考えていたが、それらを習得していることを知って予定を繰り上げた。

翌日ギルドに行つて、待ち合わせ場所と手伝いだとわかるように合言葉を教えてもらう。そこでノースリーブの白シャツとキュロットスカートを借りて変装を完了する。ほかにも数種類女物の服を借りている。服も幻で誤魔化せるが、本物を着ていた方が違和感を与

えないだろうとガレオンに着ることを勧められたのだ。

待ち合わせの時間十分前に着くようにギルドを出て、待ち合わせ場所の倉庫で、壁に寄りかかり待つ。

十分を少しだけ過ぎた頃、三十半ばの短髪中肉中背の男が近寄り、合言葉を呟く。それに幸助は返す。

「あんたが助っ人でいいんだな？」

「はい」

「名前はシオン。エゼンビア大陸出身。俺と会ったのは向こうで一度だけ一緒に仕事したことあり。こっちでは偶然再会した。これで合ってるな？」

幸助は頷きを返す。

「そっちの名前はコンストさんでよかったですね？」

「ああ。大將が送ってくれた人材だ、頼りにするぞ」

「期待に添えるよう頑張りますよ」

「ああ、頑張ってくれ。それじゃ、アジトに行こう」

コンストに連れられ泥棒のアジトにやってきた。目立たない場所にひっそりある、というわけではなく商店街近くのわりと目立つ場所にある。

「帰ったぞ。言ってた奴連れてきた」

「そいつがお前さんの知り合いか。別嬪さんじゃないか」

暇そうに店番をしていた男が答えた。店内には壺や皿や置物といった価値のありそうな古い物から、ただのお土産のような物まである。

「ボスはどこだ？ 顔合わせておかないと駄目だろ？」

「倉庫にいるんじゃないか？」

「行ってくるらあ。シオン、行くぞ」

店の裏にある倉庫に移動する。

倉庫の大きさは高さ五メートル少し、幅四メートル、奥行六メートル。物置というには大きく、蔵というには小さい。コンストの話ではここに盗んだ物が入っている。盗品は骨董品などを他所の街に売りに行くと偽り、定期的に街の外に運び出している。運び出す際には街の入り口にいる警備兵がざっと検査するが、本当にこの街で買った物と混ぜてあるのであればいていないらしい。

「ボス、ここにいるのか？」

倉庫にはできるだけ入らないように言われているので、外から声をかける。倉庫に入ることができるのは、ボスと古参だけだ。

返事をしながら男が出てきた。年の頃は四十くらいだろう。柔和な顔つきで、荒事には向いてなさそうな男だ。

幸助も本当に泥棒たちのボスなのかと内心首を傾げている。

「その人がコンストの言っていた女かい？」

「ああ、シオンって言うんだ」

「初めまして」

「ああ、初めまして。稼ぎたいと聞いているが悪いな、すぐには稼がせることができそうにない。標的にしていた店の見取り図や警備の情報がまだ完全じゃないんだ。それまで雑用してもらいたいが、かまわないか？」

「別にいいですけど、雑用ってなにをすれば？」

「うーん、そうだねえ……とりあえずは建物の掃除でもしといてくれ。用事があったら呼ぶ」

「わかりました」

もう行けと言って、男はまた倉庫の中に入っていく。

コンストに掃除道具のありかを教えてもらい、幸助は掃除を始める。店はまだでしたが、居住区は散らかり汚れていた。男たちだけだ、ある程度汚れていても平気なのだろう。幸助も平気な方ではあるが、暇なので掃除に集中していく。

掃除をしている幸助を、ほかの泥棒たちは不思議そうな顔で見て、すぐにコンストが連れてくると言っていた女だと思い出した。それがわかると、掃除に集中しているためスカートからちらちらと見える太腿の白さやふりふりと振られる尻を見て、鼻を伸ばしている。邪な視線を感じてはいる幸助だが、知らないとはいえ男を見て鼻を伸ばしている者たちのことを思うと、少し哀れになり注意するのは止めておいた。

「おーい、シオンよ」

「はい？ 何か用事ですか？」

拭き掃除の手を止め、話しかけてきたコンストに顔を向ける。

「そろそろ昼だ。なにか食べに行かないか」

「もうそんな時間ですか」

「集中していたみたいだな。あちこち綺麗になっていて驚いたぜ」
「ついつい夢中になってしまいました」

立ち上がり服についた埃を払う。

「少し待っててください。汚れ落としてきます」

「あいよー。店先で待ってるぜ？」

雑巾を洗い、身なりを整えた幸助は店先に向かう。そこには知らない顔が五人いて、コンストと話している。幸助が昼食に出るというので、一緒に行こうと思った連中だ。

終始話しかけられ落ち着いて食べられなかった昼食を終え、再び掃除に励む。

日が傾き始めたことに気づき夕飯はどうするんだろうと思い、近くにいた男に聞いてみた。昼食と同じように外で食べるということだった。というか料理を作る者がいないので、毎日外食なのだという。自炊した方が安上がりだろうと言ったが、自分たちで作っても美味しいものがないと返された。

「今日のところはこれくらいでいいかな？」

掃除は明日の午前中で終わるといった程度まで進んだ。

窓から夕日が差し込んでいる。ほかに用事を言いつけられていないので、今日は帰ろうと思いボスを探す。

部屋にいるということなので、ノックして返事を待ち、外から声をかける。入っていいと許可を貰い、扉を開け、入り口近くに立つ。

「ボス、ちょっといいですか」

「なにか用事？」

見ていた書類を机に置いて、幸助へと視線を向ける。

「いえ日が落ちてきたし、掃除以外に用事がないなら帰ろうと思っただんですけど」

「ああ、別にかまわないよ。熱心に掃除していたみたいだね、助かったよ」

「それしかやることなかったですからね。じゃあ、また明日」

「あ、ちよっと待って」

「はい？」

「シオンって料理できるのかい？」

「できますよ。自炊してますから」

「そうか……じゃあ明日昼食を作ってくれないか？」

「いいですけど、なにか注文はありますか？　ないから勝手に作りますよ。あと何人分？」

「肉を使わないでくれたら、なんでもいい。人数は五人分くらいでいいと思う」

人数に関しては考えていなかったらしく、いかげんに決めたとわかる。量ではなく質を重要視しているようだと言った幸助は考えた。

「ボス、肉食べられないんですか？」

「食べるよ。まあ、そこらは聞かないでくれ」

「はあ。んー……魚も駄目？」

魚の身も肉といえば肉だ。それまで使えないとなると、少しめんどくさかった。

「魚は大丈夫。牛とか動物の肉を使わないでくれたらいいから」

「わかりました。では帰ります」

「頼んだよ」

失礼しますと頭を下げ、幸助は部屋を出る。ボスは再び書類に目を通し始める。

店から出ると尾行されていることに気づく。怪しまれたっけと首を傾げ振り返り、視線の主を探る。尾行していた者は隠れる意思はないようで、視線の先にいた。昼も見た顔だった。

なにしているのかと聞くと、夕食でもどうかと誘ってきたので、自炊するからと断った。食い下がられたが、その気がないとわかる

と残念そうに去って行った。

「女といたいならナンパでもしたらいいのに」

自身の変装している姿が美人ということを忘れているが故のセリフだった。

明日の昼食なにを作ろうかと考えつつ歩き出す。今度は尾行している者はいないようなので、路地に入りそこで転移を使って帰った。翌日、朝からアジトに入り、再び掃除を始める。昼前には終わるという推測は当たり、建物内は粗方掃除が済んだ。あとはボスの部屋など新入りが勝手に入ることでできない部屋だけだ。

「昼ご飯の食材買って来ないとね」

掃除道具を片付けて、店にいた同僚にお金をもらい外に出る。

メニューは海鮮スープパスタとムニエルだ。栄養を考えるとサラダもつけた方がいいかなと思ったが、泥棒の健康状態を気遣っても意味はないと、この二品だけにした。

食材を買い込み、店に戻る。

調理を始めて三十分ほど経つと料理の匂いが漂い始め、それにつられるように同僚たちがキッチンに集まってきた。

「料理作ってんのか？」

「ボスに頼まれたからねー」

「全員分？」

「五人分」

「なにを作ってるんだ？」

「海鮮スープパスタとムニエル」

「いい匂いだなー」

「ありがと」

「罵ってくれ」

「誰ですか今の!？」

視線は手元に向けたまま動かす手を止めずに、質問に答えていく。最後の質問だけは、思わず振り返り手が止まる。

出来上がる頃にボスがキッチンにやってくる。

「できたのか。ちょうど良かった。二人分持って行くよ」

「どうぞ。私が一人前食べるから、残り二人前は誰か食べていいですよ」

次の瞬間、俺が俺がと言い争いが始まる。

早く決めないと冷めると言ってから、幸助は自分の分を食べ始めた。取れたての魚介類ではなく冷凍ものと乾物ベースのスープだが、それでも十分な出汁が出ており、満足いく出来だった。

誰が食べるかで争っていた者たちは、全員食べたいと言って聞かなかったのも、一口ずつ食べることになった。

多く食べた食べてないと騒いでいる姿は、そこらの男と変わらず泥棒には見えなかった。

美味かったばかりに一口では満足できなかった男たちは、夕食も作ってくれと土下座する勢いで頼み込んでくる。なにげにコンストも混ざっているのを見て、幸助はなにやってるんだと呆れていた。

呆れ顔での了承だったが男たちは喜び、改めて昼食を食べに外へと出かけていく。二人前の料理に対し七人いたのだ、満足できる量を食べられたわけなかった。

外から美人の美味い手料理万歳といった声が聞こえてきた。それを聞き、やはり馬鹿の集まりだなと思うのだった。

使った食器などを洗い、することがなくなった幸助は店の掃除もやっけてしまおうと動き出す。さすがに客が見る部分は散らかっては

いないが、細かく見ると汚れている部分はある。それらの掃除をしていけば、暇を潰せるだろうと思った。

店番の男と話しつつ、掃除をのんびり進めていく。ついでに夕食の献立も考えた。

その日は大したハプニングなどなく時間が過ぎていった。

夕食はパンと具沢山カレー風スープだ。この世界にはカレーはない。だがなんとなくカレーっぽいスープはあった。これにもう二種類ほどスパイスを加えトロミをつけるとカレーになりそうだなと幸助は思っていたが、その二種類のスパイスがわからずカレーはできていない。

使った食器を水につけておくように言って、幸助は帰る。

今日の帰りもつけられていることに気づいた。また夕食の誘いかなど考え、相手するのがめんどくさく撒くことにした。

十分後、無事に撒くことに成功した幸助は家に帰る。

その後、四日ほど掃除と調理だけ行い過ごした。四日目には家政婦として来たんだっけ？ 思うようになった。

ボスからの頼みごとは相変わらず、肉抜き料理を作ることだけだった。

「シオンー、今日もメシ楽しみにしてるぜ！」

「ここってほんとに泥棒が集まっているのか疑問に思えてきたよ」

話しているとどこを襲ってどれくらい稼いだとか言ってくるので、彼らが泥棒というのはわかってはいるが、毎日おかずを奪い合う姿を見ていると少々疑いの思いも湧く。

「仕事のない日なんて、こんなもんだぜー」

「そんなものですか」

店番と二人で話していると、ボスがやってくる。

「シオン、ちょっと来てくれるか？」

「はい？」

ボスの部屋に移動し、向かい合う。

「ここ数日、君を見張らせていた。それは気づいていたようだね。尾行していた奴が毎日撒かれたと報告してきて自信をなくしていたよ」

「あの尾行、ボスが頼んでいたんですか。夕食に誘おうと後をつけているのばかり」

「見つかったらそう言えと助言していたんだ。聞いた話だと半ば本気だったらしいが」

「そうでしたか」

「ちなみにどうして撒いたか聞いてもいいかい」

「家を知られたくないからですよ？　ボスだって私に入れないようにして場所があるでしょう？　それと同じです」

今まで盗んだ金目の物とか置いてますからと誤魔化した。それに納得した様子でボスは話を続ける。

「それで見張らせていた理由だが、仲間として信じられるかと思っ
てな。だがお前さんの情報は少ない。他所の大陸出身ならば仕方ない
と思うが。いい加減情報が集まらないから、直接聞くことにし
た。それが呼んだ理由だ」

「聞くことにしたって、私を信じていいかってことですか？」

「そうなるね」

「聞かれて困る問いですね、それ」

幸助は本当に心底困っている。どう答えろというのだ。ガレオンからの依頼をこなすためには、信じろと言うべきなのだろう。しかし自分から信じられると言っても説得力はないのではなからうか？

「なんて答えればいいのか？」

「……信じられると即答しない時点で、ある程度の信は置けるか。じゃあ次の質問だ。秘密を知って黙っておけるか？」

「誰に黙って？」

「ほかの奴らにだ。詳しくは倉庫の中身について知って黙っていられるかということなんだが」

「とりあえず聞かれたら、ボスが黙ってろって言うてたことにするけど。さすがにボスの命令なら諦めるんじゃない？」

「そうじゃない奴もいるからねえ」

「例えば？」

「用心棒連中。実力が上だからって時々横暴な行動に出るんだよ」

困った困ったと苦笑を浮かべている。心底切羽詰っているようには見えない。

「用心棒さんって、私会ったことありませんよね？」

「別の場所で待機してもらってるからね。こっちだと商売の邪魔になる」

「どれくらい強いんです？」

「ステータスD上位が二人、あとは平均的なDとD-が五人」

「それなら暴力でこられてもなんとかりますね」

「シオン、強いのか？」

「それでも平均D+ですよ」

「それは、すごいね。冒険者している方が儲かるんじゃない？」

「できない理由があるから、泥棒してたんですよ？」

その言葉にボスは納得した表情で頷いた。

「シオンに一つ仕事を頼む」

「どこかに盗みに入れと？」

「違う。倉庫の中にいる者の世話だ。私がやっていたが、男がやるよりは女の方があの子も少しは安心するだろう。大事な収入源だし、少しは大事にしてやらないとな」

「正直なところ人身販売は嫌なんですが」

「奴隷商売はする気はないよ」

詳しいことは倉庫の中ですと、二人で倉庫に移動する。

鍵を開けて中に入る。中には仕入れていた商品に隠れるように盗品が置かれている。宝石が個別に仕分けられて入れられている小さなタンスや茶器が置かれている戸棚、純銀製の小さな置物、花瓶など様々だ。幸助も知っている茶器トランプシリーズ、その本物もある。

全部売り払うと、親子が遊んで暮らせるくらいになるだろう。

「すごいですね。でも世話してもらいたい子というのが見当たらないんですが」

「地下だ」

置物の一つを動かし、その床に鍵爪を差し込んで持ち上げる。

地下から明るい光が漏れ出てくる。

地下は八畳ほどの広さで、高さは二メートル。ベッドなど必要最低限のものはあるが、暮らしやすそうには見えない。部屋の間五才くらいに見える子供が縮こまっている。

幼いせいか、それとも生まれ持った顔立ちのせいか、男なのか女なのかわからない。

「あの子の世話をしてもらいたい。あの子は稀玉族といって、魔族の派生種族になる」

「魔族って魂石を生まれながらに持っている種族ですよ？ それの派生種族ということは、なにかが違うと」

「その通り。稀玉族は魔族ほど魔法の才はなく、魂石も生まれながらに持つということはない。しかし魂石に近い稀玉を年に一度、利き手の反対の手から生み出すことができるんだ。稀玉は増幅器に使われている材料で、質の悪い物でも金貨五枚で売れる。最高品質の物になると閃貨三枚で売れたという記録も残っている」

「それはすごいですけど、よくそんな種族の子供が手に入りましたね？ いろんな人に狙われるからって隠れていそうなものですが」
「馬車を襲ったら、生き残りにこの子がいたんだよ。運が良かったとしかいいようがない。親も残っていたら言うことなしかったんだけどね」

「そうですか」

「おや？ 不満そうだね？」

「まあ、私は盗みはしますが、誰かを殺すことはしてきませんでしたから」

思わず漏れ出た感情を、そう言って誤魔化す。実際地球の泥棒には殺しはしない、貧乏人に施しを行う義賊というタイプの泥棒もいた。似たような者がこちらにもいるだろうと判断しての言い訳だ。

「シオンはそういうタイプの泥棒なのか。殺しが必要な盗みには連れて行かないことにするよ」

「ええ、お願いします。この子を世話するにあたって、注意することはありませんか？」

「肉を食べさせては駄目。種族的に受け付けないようで、食べさせると稀玉の質が落ちる。あとはここから出さないということくらいで、人間の子供と同じでいい」

「わかりました」

「じゃあ、頼むよ」

そう言っただけでボスは梯子を上っていく。

ボスがいなくなつて稀玉族の子供が怯えなくなるわけではなかった。一緒にいた幸助のことも怖がつて、部屋隅から動かない。

世話するには怯えられるとやりづらいこともあり、どうにかして親しくなりたかった。

自己紹介からかなと思ひ一歩進む。近づくとびくりと体を震わせ、さらに怖がる。

（近づきすぎると駄目っぽいなあ）

とりあえずは一緒にいることに慣れてもらひ、自己紹介はその後に行ふことにした。

「ただ一緒に居る空間にいるもの暇だし……ここも掃除するかな」

健康状態を考えるなら、清潔な状態を保つた方がいいだろう。一度外に出て掃除道具を取ってくる。

取り返したいという物を教えてもらうんだと倉庫にある品々を見渡し思う。だが幸助が持ち出すことを予測してなんらかの手を打っているかもしれない、持ち出すことは無理かなと思ひ直す。

時々、子供に話しかけつつ掃除をしていく。返事はないが、話しかけることを止めはしなかった。気にしているとわかってもらえれば、少しは懐いてもらえるかと思ひたのだ。

動き回る幸助を子供は怯えた目で見続けている。

「そろそろ昼か。なにか食べたいものはある？」

相変わらず返事はない。

のんびりやろうと思い、地下室から出て行く。

同僚たちの昼食は焼きたてパンを使ったハムとチーズとレタスのサンドにコーンスープ。自分と子供の分は卵とチーズを使ったサンドとコーンスープとリンゴだ。

「昼ご飯だよ、一緒に食べよう？」

料理を載せたトレイを子供の前に置く。これにも無言だったが、食事まで無視するわけではなく、手に取って食べ始める。

良かったと笑みを浮かべて、幸助も自分の分を食べ始めた。

食べ終わり、食器を一まとめにしている時に、幸助は子供の口端にスープがついているのを見つけた。

「ちょっといい？」

一言断って、怯える子供の口端にハンカチを当てる。

「うん、取れた」

「……あ」

これに子供はなにか言いかけて止める。なにを言いかけたのか気になるが、無理に聞き出すこともあるまいと聞くのは止めておいた。食器を片付け、掃除を再開する。ほとんど終えていたのですぐに終わった。こうなるとすることが本当になくなり困る。

自分が泥棒ではなく、護衛目的で来ていることを話せば警戒心がなくなるかと考えたが、それを証明する術がない。あとこの子からボスに情報が流れても困るので、それは止めた。

（帰ったらワイアーレに子供を相手する時の注意点とか聞こう）

そうすれば、もう少しまともに立ち回れるだろうと考える。せめて名前くらいは知れるようになりたかった。

静かな時間が流れ、夕食の買出しに行く時間になる。

「夕飯の材料買ってくるね」

無言の子供に声をかけて地下室を出る。

倉庫から出て溜息を吐くと、タイミングよく現れたボスに声をかけられた。

「どうだい、上手くコミュニケーション取れた？」

「話しかけてもずっと無言ですよ。ボスはどうでした？」

「俺も同じだ。両親が殺された時、俺もそこにいて顔を見られたし、懐かれることはないよ。ここに連れて来た当初は泣いてばかりだったしな」

「そりゃ世話するの無理でしょうねえ。のんびりやっていくしかないかー」

ボスの言葉で改めてあの子供との接し方が難しいことがわかった。親から愛情を注がれるのが当たり前の年齢で、突然親を奪われてその後なんのフォローもないのだ、心が壊れず怯えるという反応があるだけまだましなのかもしれない。もう一度心の中で大きく溜息を吐いた。

「まあ、俺としては稀玉が取ればいいんだ。死ななかつたら問題ない」

「その場合、取れる稀玉の質悪そうですね」

ボスへの底なしに下がる評価を横に置いて、なんとかして少しで

も元気付けてやりたいなと考える。

ボスたちが罰を受けるのはほぼ確定なので、自分が心配すべきは子供のことだとイラつく心を宥める。

「少しでも質を上げるため、頑張ってくれ」

「丸投げですか。いやボスたちにできるとは思ってないんでいいですけどね。あの年齢の子供が興味持ちそうなものとか持ち込みますよ。いいですか？」

「かまわないよ」

頼んだと言って去っていく。

転移でどこかに逃がしたくなった幸助だが、それをする则自分と連れて来たコンストに被害が行きそうなのでできないと判断を下した。

夕飯の材料を買うついでに、子供が興味を持ちそうな玩具やぬいぐるみを買っていく。

地下室へそれらを持って行っても、興味を示すことはなかった。

幸助の見ないところで触るかもしれないと置いたままにして、夕飯を作るために出て行く。

用事を済ませて家に帰り、ワイアーレに事情を話す。ワイアーレもエリスも泥棒たちに憤慨する。

ワイアーレから得られた子供への接し方は、とにかく粘り強く接すること。返事がなくとも適度に話しかけ、できるだけ長い時間を共にするということだった。

幸助はもらった助言を元に行動していく。こまめに地下室へ通い、子供の様子を見ていく。おかげで外の建物の掃除は完璧と言えなくなったが、泥棒の家だしと気にしなかった。

世話を始めて一週間経ち、子供から怯えが薄れた。あくまでも薄れただけでなくなっているないので、まだスキップには気を使う。

この一週間の間に、ボスたちは一度強盗をやっていた。入った場所では薬屋で、売り上げ金と貴重な薬を奪ってきていた。これについてコンストは情報を与えられておらず、ほかの者から情報を得ることもできていなかった。コンストもこの盗賊団に入って四ヶ月と新入りの部類だ。情報を渡すことに警戒心を持たれていたのだ。

そんなコンストでもわかったことがある。今回のような街中での血が流れる強盗をやったのは今回が始めてだということだ。リッカー外での押し入り強盗はやっていたことを知っているが、街中での強盗は血を流さない誰かにばれにくい方向でやっていたのだ。

これを知りコンストは一つの推測を立てた。それは、ボスは本拠地を移動するつもりなのかもしれないということ。リッカーでの盗みは既に十件以上やっている。いい加減怪しまれると判断し、そろそろリッカーでの盗みを終えるつもりで、最後に派手に行こうとしている可能性がある。今回の強盗はそれへの景気づけなのではないか。最近倉庫の荷を頻繁に外に出していることも推測の裏づけとなっている。

これが当たりとわかるのは三日後だ。

隠れ里

幸助がいつものように子供の近くにいと、倉庫の外から名前を呼ばれた。

なんだろうと思いつつ、外に出る。そこにいた同僚によるとボスが全員を呼んでいるらしい。

「シオンも来たか。これで全員だね」

一番広い部屋に二十五人の人間が集まっている。

幸助が知らない顔もいて、おそらく彼らが用心棒なのだろう。

「ボス、話とはなんですかい？」

「うん。実はリッカーでの仕事を次で最後にしようと思っね。最後の仕事は全員でやろうと思っている」

それだけ大仕事なのだろうと泥棒たちは楽しみだという顔で話合っている。

ボスがパンツと手を叩き、騒ぎを収める。

「押し入る場所は、金貸し屋のオーグルムマネーだ。それなりに名の知れた金貸し屋だから知っている者も多いだろう。その情報は十分集めた。皆が役割を十分に果たしてくれれば成功間違いなしだ。頑張ってくれ」

ボスの言葉に気合の入った返事が響く。

満足そうに頷いたボスが、個人個人に役割を言い渡していく。当然幸助にも役割が言い渡される。

幸助がやることは建物の内を見回っている警備の始末と、盗んだ

金をここに運び込むことだ。コンストも同じく運搬を任される。

「ボス。シオンにそんな荒事ができるんですかい？」

「シオンはああ見えて、この中で一番強いよ。ステータス平均D＋と聞いた」

幸助に注目が集まり、視線で本当か問いかけられる。それに幸助は頷きを返した。

「まだ疑う者がいるみたいだから、用心棒さんたちと手合わせしてもらおうか。オウンさん、お願いできますか」

「いいだろう」

ボスが指名したのは二人居る平均D上位の片割れだ。

使う武器は槍だが、さすがに仲間内で殺し合いをする気はないように、素手対素手の勝負となった。

庭に出て、ボスが開始の合図を出す。

向かってくるオウンを幸助が迎え撃つ。セクラトクスや偽神に比べたら欠伸が出るほどの速度で、幸助は突き出されたオウンの腕を掴んで引いて、足を払い背中から地面に叩きつける。咳き込むオウンの首を掴んで、ニツコリと笑って少しだけ力を込めた。

「降参だ」

時間にして一分も経っていない早い決着に、周囲は沸いた。

これで幸助が警備の相手することを心配する者はいなくなる。

「決行は明日の深夜だ。各人、準備があればそれまでに済ませるように」

それが解散の合図となり、それぞれ幸助にすごかったと告げて去っていく。

オウンたち用心棒はボスに呼ばれて一緒に去っていく。

地下室へと戻ろうとした幸助のそばをコンストが通り、何気ない仕草で紙を渡して去っていく。

その場で中身を確認しそうになったが、誰かに見られたら怪しまれると倉庫の中で確認することにした。

倉庫の扉を閉め、天井の窓から入ってくる光の下で紙を確認する。

（夕飯の材料を買いに行く時、初めて会った場所に寄れ。無理して来ることはない、か。いつも通りなら行けるけど）

書いてあるように、誰かつけてきたり同行しようとして無理だったら行かないことにして、地下室に入る。

この三日で、いまだ怯えられるものの、子供の体に触っても逃げられなくなっていた。触れるようになったら、体を洗おうと決めた。自分でも濡れタオルで体を拭いてはいるようだが、十分とはいえず臭いがしていたのだ。

体を洗うよと告げてから、用意していた大き目のタライに水を入れ、魔法で沸かす。

服を脱がせたことで、性別がようやくわかる。男だった。将来もてそうだなと思いつつ体を拭いていく。くすぐったく動く子供を垢が出なくなるまで、丁寧に拭いていく。少し肌が赤くなったが、さっぱりした様子だ。

「次は頭洗うから、目を閉じてて」

子供は無言で首を横に振る。

「頭洗われるの嫌？」

再び首が横に振られる。

「……目を閉じるのが嫌？」

頷いた。幸助には少し慣れたが、それでも目を閉じている間になにかされるかもと怖がっている。

「困ったね……ああ、散髪する時仰向けで洗うことがあったっけ。あれなら大丈夫かな」

なにか方法がないかと考え、すぐに思いついた。そのための準備を整える前に、体を拭いて風邪をひかないようにする。

服を着せた後、必要な物を取るため外に出る。

壊れて捨てる予定の板を持ち込み、その下に野球ボール大の石を三つ並べて、板の片方がタライと同じ高さになるよう調節した。

子供に寝転がってもらい、頭を片手で支えながら、ゆっくり髪を濡らし頭皮を揉んでいく。手入れ不足でぼさぼさだった髪は、洗ったことで鮮やかな赤い色を取り戻した。

それに見惚れていると子供の目から涙が零れ落ちる。

「ど、どこか痛かった!？」

小さく首を横に振る。

髪を洗われるのがやはり嫌だったのかと聞いてみるも、同じく首を横に振る。

なぜ泣くのか幸助にはわからない。

なぜ泣いたのか、それは両親に体を洗ってもらった時のことを思い出したからだ。

いくら強かろうが泣く子には勝てない。どう慰めたものかと焦り

つつ、髪を洗い終える。

髪を拭き終えても泣き止む気配はなく、どうとにでもなれと抱きしめ背中を軽く叩く。これで泣き止まなければ打つ手なしと、困った表情で一時間ばかり抱きしめ続けた。

久々の人の体の温かさに触れ子供は眠る。それに気づいた幸助は心底安堵した。

ベッドに寝かせて、今のうちに買い物に出ることにした。買い終えた後、倉庫に向かえばちょうどいい時間になるだろう。

同僚たちは準備に集中しているようで、同行する者も尾行する者もいなかった。

食材を抱えて倉庫そばで十五分ほど待ち続けると、コンストがやって来た。

「つけられてはいないか？」

「大丈夫です」

「では早速本題に入ろう。明日盗みに行くということをギルド長に知らせてくる。お前からなにか知らせることはあるか？」

「今稀玉族の子供の世話を任されているんですよ。その子の出身地の候補を調べてもらえるように伝えてください」

「稀玉族とはまた……わかった必ず伝える。ほかには？」

「伝えることはそれ以外には。あ、当日の動き方を聞きたいんです。ボスの言う通りに動いた方がいいんですかね？　それもコンストさんのガードに動いた方が？」

「俺のことを気にかけてながら、指示通りに動いてくれ。できるか？」

「やってはみます。ですがそちらも危なくなったら気づけるように大声上げるなり騒いでください」

「わかった。念のためにもう一度聞くが伝えることはないか？」

「そうですね……」

言い忘れがないか考え、ないと判断し頷いた。

二人はそこで別れる。

夕飯を作り、子供と一緒に食べて、後片付けをしていつもと変わらぬ行動でその日は帰る。

泣いたのをあやしたからといって、子供が急激に懐くことはなかった。少しだけ固さが緩んではいたが。

翌日のアジトではさすがに皆気持ちが高ぶっていて、いつもの馬鹿っぽい姿は見られなかった。

今日で彼ともお別れと思うと寂しさが湧いてくる、なんてことは全くなく幸助は普段通りに家事をこなしていった。

そして日が暮れる。仕事を終えて騒いでいた街の住民も家に帰り寝静まった頃、動きやすく目立たない服装に着替えた泥棒たちは動き出す。空には半月が浮かんでいるが、雲もある。明かりが生み出した影から影へと静かに移動していき、目的地であるオーグルムマナーに到着した。

ボスが全員が揃ったことを確認して、オーグルムマナーの周囲を探る。

オーグルムマナーに雇われた見張りのほかに、オーグルムマナーを囲むように深く気配を抑え込んでいる者たちがいる。捕り物のため雇われた冒険者と警備兵だ。オーグルムマナーから少し離れた物陰に隠れて気配を抑えている。そのせいかボスたちが気づいた様子はない。確実に気づいているのは初めから知っているコンストと気配を察した幸助だ。

「情報通りだね」

オウンたち六人ほど周囲の様子を探らせるために走らせたボスは、見回りの様子を見て満足げに頷く。この場を離れた者たちが古参だということに幸助とコンストは気づいていない。

もう少ししたら見張りが建物内に入ると言い、それに合わせて突

入すると指示を出す。

ボスの言葉通り、警備は建物周囲の見回りを終えて中に入っていく。

「行け！」

ボスが小さく命令を下す。幸助とコンストを含めた突入班六人は敷地に足を踏み入れる。

目指すは金庫のある地下室だ。裏口の鍵を開け建物の中に入ると、建物内の気配が動く。動きは二つ、建物内に留まる者とゆっくり建物から出て行く者だ。幸助たちを逃がさないように動いているのだろう。

それらを気にしつつ先に進もうとした時、外から声が聞こえてきた。

「待て」「逃がすか」といったもので、外で待機した者たちが見つかっただけらしい。

六人は止まり、小声でこれからどうするか話し合う。それをコンストが逃げようと言って、外に出る方向へ誘導している。幸助も賛成し、四人は考え出す。早くしないと中に入ってくるとコンストが急かし、冷静な判断をできないようにする。

一分後、皆で外に出ることになった。

建物内で待ち伏せている者たちは動いておらず、このまま外に出ると捕まえるのは外で待ち伏せている者たちだ。

気配を感じ取っているのは幸助だけなので、あっさりと六人は捕まった。抵抗したのは四人で、幸助とコンストは無抵抗だった。

変装をしている幸助を見て、警備兵や冒険者はあんな美人が泥棒をしているのかと残念そうな顔をしていた。

捕まった者たちは手をロープで縛られ一まとめにされ、地面に座らされる。警備兵たちはこれで全員と言っていたが、明らかに人数が足りない。いない者はボスを含めて八人だ。

「コンストさん」

「ああ、逃げられたか」

幸助がなにを言いたいのか、察したコンストは自分の考えを短く返した。

「このまま街の外に出て行くかもしれん」

「金づると言ってたあの子を置きっぱなしにするわけではないよね？」

「ないだろうな」

「助けに行かないと」

「止める気はないが、この状態でか？　いくら強いといっても無理だろう？」

「大丈夫」

そう言って立ち上がる。

「なんだ？　座れ！」

警備兵の言葉を見無視し幸助は助走なしで屋根まで飛び上がった。人外の身体能力を目にして皆呆然としている。

アジト目指して一直線に屋根の上を走る。背後からは、慌てた声で止まれと聞こえてくるが聞く気はない。途中で手を縛るロープは力任せにちぎる。

全力での移動だったので一分もかからず、アジトが見える位置に到着する。そこからアジト前から移動する集団が見えた。ざっと全員を見て、子供を担ぐ男の姿を捉えた。魔法か薬でも使われたか、子供は静かに担がれている。

屋根を蹴り、子供を担ぐ男目がけて飛ぶ。着場所は男のすぐそば。子供だけをさらうのは不可能と瞬時に判断し、男ごとさらい、

再び飛び上がり近くの屋根に着地する。

静かで素早いその一瞬の手並みに、泥棒たちは誰も反応できなかった。

子供と一緒にさらった男が困惑しているうちに、子供から引き離し近くの花壇に蹴り落す。柔らかい土の上ならば、怪我はしても死にはしないだろうと考えたのだ。

男が落ちる音で、泥棒たちは我に返り動き出す。

「う、上だ」

落とされた男が痛みに呻きつつ、屋根を指差す。タイミングよく雲に隠れていた月が出て、屋根の上にいる幸助を照らす。

見下ろす幸助と見上げるボスの視線がぶつかる。

「シオンかい」

「この子は返してもらいますね」

「やはり警備兵が送り込んだスパイだったんだね」

「気づいてたんですか？」

「確信はなかったけど、コンストが少し怪しい動きを見せていたからその可能性もあると思っていた。そんな程度だよ」

ほかにもそのように怪しく思った奴はいて、そういった者をオーグルムマナーに送り込み、残りの怪しいと感じなかった者は店の前に待機させたのだ。自分たちが逃げるための囷とするために。今ボスの周りにいる七人は古参で、捕まると困る者たちだ。

オーグルムマナーを狙うというのは嘘だった。成功しようが失敗しようが関係ない。下準備と計画に手を抜かなかったのは、本気で狙うと新参者に思い込ませるためだ。

もともと新参者は囷として使い見捨てる計画だった。コンストと幸助が怪しくなくとも斬り捨てることに変わりはない。これは

ボスの常套手段だ。どの街でも最後の仕事は自分たちが逃げるための囷としていた。

「その子は惜しいが、外に運び出した物でも十分だ。逃げさせてもらうよ」

「させると思いますか？」

「足手まといがいて、俺たちを止められると？　いくら強くでも無理だというものだよ」

オウンと幸助の力量について話し合っており、そこから足手まといがいるならばどうにかなると判断した。

「それは」

子供を抱いたまま屋根から飛び降りる。音もなく着地して続きを口に出す。

「やってみないとわかりませんよ？」

言うと同時に幸助は動き、一番近くにいた男の腹を蹴り抜いた。続けて回し蹴りでもう一人。

泥棒たちはここであればに逃げるという選択をすれば、無事に逃げる事ができた。だが相手は腕の使えない女が一人。自分たちでも勝てると思ったのか、一斉に襲い掛かってきた。

幸助は服や髪に掠らせることなく、すべて避けていった。そして二分後には、その場に立っているのは幸助一人だけとなった。

「……いつか、復讐するよ」

ボスが苦しげに、だがはっきりと幸助に告げる。

「その顔、声、名前、すべて心に刻み込んだ」

「えっと頑張ってください？」

「余裕だね。名前が偽名で、姿も変装したものだから余裕があるのかもしれない。でも声まで変えることはできないし、その強さも探し出すヒントになる」

それでも探し出すのは無理だろう。声も違えば、性別も違う。シオンという存在はすべて嘘と言っている。その存在に詳しいのは、ギルド長と泥棒たちだ。そんな状況で情報を集めて、幸助に辿り着くなど不可能だ。それができるなら情報機関で働いた方が、泥棒をやるよりもいい稼ぎになる。

「また会うことはないと思いますけどね」

正体がばれないという自信と、泥棒たちのこれからの処遇を思っ
ての言葉だった。決して軽くない処罰が下るだろう。生きていられ
る可能性は低いのではと考えていた。

警備兵たちが近づいている気配を捉えた幸助は、屋根に上がって
ボスたちが捕まったことを確認し、その場を離れる。

そのままギルドへと向かう。こんな時間にガレオンがいるかわか
らないが、聞いてみるだけ聞いてみようと思ったのだ。いなかった
ら子供を連れて一度家に帰るつもりだ。

ギルド正面入り口は当たり前ながら閉まっている。裏手に回り、
明かりがついていた部屋に近づいて、窓をノックする。

「どうしました、こんな夜更けに」

出てきた職員は子供を抱いた幸助に訝しげな視線を向ける。

「夜分申し訳ありませんが、ギルド長はいらっしゃいますか？ 私
はギルド長の依頼で動いていたシオンと言います」

「ギルド長なら執務室にいますと思いますが、少々お待ちください。
聞いてきますので」

部屋の中にいるもう一人の職員に幸助の見張りを頼み、ガレオンの
ところへ向かった。目立たない服装の女が子供を抱いて夜更けに
やって来て怪しまない方がおかしく、見張りを置くのは正常な判断
だろう。

五分ほどで職員は戻ってきて、幸助に裏口へ回るように言う。

「ギルド長がお会いになるそうです。ついてきてもらえますか？」
「はい」

職員の案内でガレオンの執務室に移動し、一緒に入る。

「コースケ。どうなった？」

子供をソファーに寝かせて、ガレオンに向き直る。もう変装する
意味はなく魔法を解いた。

「全員捕まった」

「その子供は例の稀玉族でいいんだな？」

「うん。昨日の今日だからまだ故郷の候補地は見つかってないです
よね？」

「まあな。その子から話を聞いてから探そうと思っていたんだ。そ
の方が探しやすいだろ」

「それもそうですね」

「ギルド長、この人は信頼できるのですか？ 敵視しているという
ことではなく、ギルド長を残して私が夜警に戻っても大丈夫なのか

つてことなのですが」

「ああ、大丈夫」

「そうですか、では失礼します」

二人に一礼して、部屋から出て行く。

「着替えたいんだけどさ。余り物の服とかある？」

動くことに不自由はしないが、怪しまれること确实なので普通の服に着替えたかった。

「あるぞ。取ってくるから待ってな」

服を取って戻ってきたガレオンは、ついでに子供に毛布も取ってきて被せた。

その後はガレオンは報告待ちで執務室で眠り、幸助は子供が起きた時見知った者がいないと怖がるだろうとそばにいることにした。

子供は盗みの証拠の一つで、警備兵たちが確認を取るまでは勝手に連れ帰れないのだ。といったものの既に連れ歩いている状態であり、さらにボスの証言で誘拐されたと勘違いした警備兵たちが探し回っていたりする。その勘違いはコンストから事情を聞くまで続いた。

夜明け前に警備兵たちはギルドにやってきて幸助に事情聴取を行う。子供にも話を聞きたいが、起こすには早いと判断し後回しにする。

幸助はアジトでやっていたことを話し、警備兵は泥棒たちから聞いた話と照合していく。

「話に違いはないとわかりました。これはちょっとした疑問なんです、変装していたんですね？　よく最後までばれずにいれまし

たね？」

「魔法を使った変装ですから」

「念のために見せてもらっていいですか？」

幸助は頷き、魔法を使う。

声が変わり、握手した感触が完全に女の手だということにも驚く。自分の知っている魔法とは違うと言う警備兵に、上位の幻の魔法だと説明する。納得した警備兵はまた後で来ると言って報告に帰っていった。

窓外を見ると空が白みだしていて、もうすぐ夜が明ける。

「朝ご飯でも作ってこようかね。ガレオンさん食べます？」

「んー食べるわ」

「了解」

寝不足気味で眠そうながらも返事が返ってきた。

夜警の職員にキッチンを使うと断りを入れて、そこにある材料でフレンチトーストとサラダを作る。甘い匂いが静かなギルド内に漂う。使った物を洗った後、自分とガレオンにはコーヒーを、子供にはホットミルクを入れて執務室に戻る。

もう起こしてもいいだろうと、魔法で姿を変えて子供を軽く揺らす。

起きた子供はいつもの地下室ではないと気づき、回りをきよろきよろと見回す。

「おはよう。ご飯あるから食べよ？　ここがどこかは食べ終わったから説明するから」

幸助の言葉に頷き、フォークを食べやすく切り分けられたフレンチトーストに突き刺す。

食事を終えて、食器を一まとめにしてトレイに載せる。それをテーブルの端に置いて、話を始める。

「なにか話そうか……まずは君が寝ている間にあったことを話すよ」

子供が頷いたことを確認して、幸助は一夜の捕り物話を話す。

「そういうわけで君はもう自由なんだ。怖い思いしなくていいし、おうちに帰ることができる。ここまではいい？」

子供は頷く。

「次は改めて自己紹介でもしようか」

そう言って幸助は魔法を解く。子供はそれに小さく驚いた顔になる。小さな反応ですんだのは感じられる魔力が同じだったからだ。稀玉族は、魔法の得意な魔族の派生種族がゆえに魔力は身近なもので、人を見分ける手段の一つとして当たり前のように差異を感じ取っている。それは小さな子供でも同じだ。

「さっきまでの姿はあそこに潜り込むために魔法で変えたもの。こっちが本当の姿。名前はコースケ、改めてよろしく。それで君の名前を聞きたいんだけど」

「フェウス」

初めて声を出し答えた。少しは信じてもらえたのかと、幸助は嬉しくなる。

「そっかフェウス君か。フェウス君のおうちはどこか教えてくれる

？　そこまで連れて行くよ？」

フェウスは首を横に振る。

「おうちを教えたくない？」

「……おいだされたからない」

「追い出された？」

幸助とガレオンは顔を見合わせる。

「稀玉族は他種族に狙われることが多いから、結束は固いはずだぞ？　追い出すなんて初めて聞いた」

「どうして追い出されたかわかるかな？」

「わかんない。でもいみごって言ってた」

「忌み子、フェウス君が言われたの？」

「おとーさん」

フェウスから聞き出した断片的な情報を繋ぎ合わせ、幸助たちは一つの推測を立てた。

フェウスたち一家は、稀玉族が暮らす村で静かに暮らしていた。父親が村の掟になんらかの形で触れる存在だったが、居住は許されていた。しかし不作が続き、村の食い扶持を減らさなくてはいけなくなつた。その対象となつたのがフェウスたち。村から追い出されたフェウスたちは村を出て、ユーレウスという場所を目指していた。その途中、ボスたちに襲われフェウスが生き残つた。

話して両親の死を思い出したか、涙ぐむフェウスを幸助は抱き寄せる。

「ユーレウスってところに親戚でもいたんでしょうかね？」

「いやユーレウスってのは、はぐれ者たちが集まって暮らす隠れ里

だ。フェウスの父親のように一族から追い出された者や馴染めない者や追われる者が静かに暮らすことを望み作った村。隠れ里というように、明確な場所は知られていない。坊主の両親は噂を頼りにあちこち放浪したんじゃないか」

「ゴールがわからずに放浪、楽な旅ではなかったんでしょね」
「だろうな」

両親の苦勞を思い、少ししんみりとした空気になる。苦勞したままで、フェウスを残し死んでしまった二人の無念はいかほどだろうか。幸助にはそれは想像すらできない。

「フェウス君は幸せにならないといけませんね」

「両親はそれを切に望んでいるだろうなあ」

「フェウス君の今後といえば、これからどういった扱いになるんです？ 出身地に送り届けても受け入れられることはないように思うんだけど」

「ただの孤児ならしつかりとした孤児院に入れるが、稀玉族を入れるわけにはな。目が眩んだ馬鹿に狙われる可能性が高い。となると取れる手段は二つだ。ユーレウスに連れて行く。お前さんが引き取る」

「俺が引き取るって」

「エリス婆やお前さんがいれば、誘拐される心配なんざないだろ。それにエリス婆は子育ての経験もある」

それは納得でき領くことのできる理由だった。その方向でいこうかと真剣に考える。

考えていくうちに、自分たちと共にいてフェウスが幸せになれるかと考えが移っていく。

エリスはおそらく問題ない。ウィアーレは偽神信仰者に狙われている。幸助も一度目立てば周囲が放っておかないだろう。

自分たちの周りにいれば、フェウスも目立つ。騒ぎのある日常に身を置けば、傷つくこともあるだろう。そう考えると、穏やかな暮らしが送れそうなユーレウスに行った方がいいのではと思えてきた。「……ユーレウスに連れて行こうと思います。そこは静かに暮らす者たちの秘められた村ということなので、稀玉族を狙う者もないと思います。それに俺たちと暮らすと、同年代の友達ができそうにない」

似たような境遇の者たちとの生活の方が、稀玉族ということを選ばずにいれて暮らしやすいだろうと思い、ユーレウスに連れて行くことを選ぶ。

「そうか。村のありかは俺が知つとる。そこに入るための許可証も持っているから、後で貸そう」
「ありがとうございます」

隠れ里はリッカートから南に馬で二日の位置だ。そこには全長一キロ強の裂け目があり、底には川が流れている。裂け目は昔の地震でできたものだと言われている。

裂け目を渡るための橋が一つあって、橋の東の壁に、村へと続く穴が開いている。裂け目の上からは見えない位置にあるので、探そうとしないかぎり気づかれるような入り口ではない。

村に入るための許可証は、紋章の掘られた木の鈴だ。鳴らすとコロコロンと澄んでいると言いがたいが、落ち着く音が鳴る。

ギルドが開く少し前、冒険者たちがギルド前で開くのを待っている頃に、警備兵がもう一度やってくる。

フェウスに話を聞いて、ボスの話と違いがないことを確認した。そして今後の話になり、ユーレウスに連れて行くことになっている

と知り、難色を示す。どこにあるかわからない村よりも、リッカーの方が暮らしやすいだろうと思ったのだ。だが街で暮らすとなると、常に護衛がついていなければいけない不自由な暮らしになるとガレオンに説明され、納得し帰っていった。

「この子の服とか小物買ってこようと思うんですが、お金ください」「足りそうにないのか？」

「財布家に置いてまして」

取りに帰ればいいだけだが、ついでに報酬も貰うつもりなのだ。ガレオンは金庫から今回の報酬を取り出す。

「今日明日は喫茶店にいますから、警備の人が尋ねてきたらそっちにいるって言えばいいですよ」

「ああ、わかった。お疲れさん」

幸助とフェウスは手を繋ぎ、部屋から出て行く。

今着ている服と来ていた女物の服は洗濯して後日、鈴と一緒に返すことになる。

その時に泥棒たちの処罰を教えられる。ボスとオウンを含めた古参たちは死刑、この街で参加した泥棒たちは取った行動で罰の重さが変わった。ボスに疑われた者は強盗に参加できず、罰が軽めになった。罰が重くなった者は死亡率の高い開拓作業へと回された。

ついでに探していた盗品も無事に見つかったらしく、ガレオンはほっと胸を撫で下ろしていた。

ギルドから出て、店を回り買い物を済ませて、喫茶店に向かう。子供連れで現れたオーナーに、メリイルとセレナを含めて店員たちは驚く。フェウスのことは送り届ける依頼を受けたと誤魔化した。見た目が可愛いいため、フェウスは店員たちに構われていたが人見知りして幸助の後ろに隠れることが多かった。その様子も可愛いと皆

は微笑ましそうに見ていた。

警備兵が訪ねてくることもなく、幸助はリツカートを出る。この二日でフェウスにユーレウスに住むことを話していて、納得してもらっている。幼くとも行く場所がないということは理解しており、愚図ることはなかった。

飛翔魔法を使い移動したので、馬で移動するよりも早く裂け目に着く。周囲に誰も人がいないことを確認して、ユーレウスへの入り口を探す。

光が入らず真っ暗な穴の入り口に立つ。ひんやりとした空気が満ちている。出口は遠いのだろう、奥の方に明かりは見えない。明かりの魔法を使い、進む。聞こえていた川の水音も聞こえなくなった頃、曲がり角の先にぼんやりと明かりが見えた。

通路から出るとそこは薄暗い林だった。見上げると、大きいとはいえない裂け目が見えた。入ってくる光量が少ないため昼でも薄暗いのだろう。

一步を踏み出そうとして止められる。誰かにいることに気づいていた幸助は驚くことはなかったが、フェウスは幸助にしがみつき声のした方向へ顔を向ける。

大木の後ろから弓に矢をつがえた男が姿を現した。サリーのような服を着た男だ。

「何用だ？」

その問いに幸助は許可を貰っていると告げて、鈴を取り出す。

「移住希望者を連れて来た者です。鈴も持ってきてます」

幸助が差し出した鈴をじっと見つめた男は弓を下ろす。

「本物のようだな。ようこそユーレウスへ。これから村長に会って

もらう、ついてきてくれ」

「わかりました」

男の後ろをついて林を五分歩くと、建物が見えた。建物の中には複数の気配あり、誰かの話し声も聞こえてくる。

男は扉を開き、入り口の見張りの交代を頼む。そして案内を再開する。

男につれられ村の中を歩く。少ない光量を補うように、村のあちこちに明かりの魔法が使われており、林の中のように薄暗いということはなかった。

出歩いている人は少なく、出会った人は幸助たちを珍しそうに見ている。ここいるのは事前に聞いていたように人間だけではなかった。獣人や妖精族や妖魔族も見かける。

やがて周囲の家と特に変わらない、家に到着し中に入る。

中にいたのは黒い人間だった。髪肌歯が墨を塗りたくったかのように真っ黒で、唯一違う色を持つ部位は目で色は群青。優しい顔をした四十手前の女だ。

このような特徴を持つのは妖精族のシャドウしかない。シャドウそのものか、コキアと同じように血の流れを汲む者なのだろう。

「村長、この者たちが移住を希望しておりますので連れてきました」
「ご苦勞様、あとは私が話しましょう」

案内してきた男は失礼しますと言って家から出て行く。

「椅子に座ってくださいな、今お茶をいれますから」
「ありがとうございます」

礼を言う幸助の隣で、フェウスもペコリと頭を下げる。
出されたお茶はハーブティーの一種らしく、独特の香りがカップ

から漂う。幸助が飲んだお茶は微かな渋みを感じられ、フェウスの口には合わないかもと隣を見る。

「その子のお茶は甘くしてあるから大丈夫よ」

そこらの配慮はしていたようで、幸助が何か言う前に村長が説明する。その言葉通り、フェウスは問題なく飲んでいる。

「この村に來た用件としては、あなた方二人が移住希望ということ
でよろしいですか？」

「いえ、俺はただ送り届けただけで、この子を置いてもらいたいです」

「わざわざここに連れて來たということはわけありなのよね？」

頷きフェウスの事情を話す。村長は頷き、微笑む。

「わかりました。責任を持ってお引き受けいたします」

問題なく引き受けてもらい、幸助はほうっと安堵の溜息を吐く。

「しかし本当にあなたも居住希望ではないの？」

「違いますよ？」

「その強さだと憧れを持たれる以上に、怖がられることの方が多い
でしょうに」

「……ギフトですか？」

ここに来て幸助は能力の高さを見せていない。一目見ただけで力量看破するなど、相当な実力者がギフト関連でしかない。

幸助は村長に高い実力を感じ取っておらず、後者だと判断した。

「魔眼のギフトで、効果は計測よ。様々なモノの大まかな情報を得ることができるの。英雄クラスの間は数度見たことあるけれど、怪物クラスの人間なんて初めて見たわ」

力量はわかるが、称号まではわからないようでそれについて口にすることはない。

「怪物って……まあ外れてないと思うけど」

ステータスCが英雄クラスと呼ばれ、ステータスBは怪物クラスと呼ばれている。Eは一般人、Dは強者、Aは神といったように区分けされている。

「強すぎる明かりは濃い影も生み出すものです、注意した方がよろしいかと」

「実力隠して生活してますんで、今のところは大騒ぎになったことはありませんよ」

「そうでしたか」

注意を促すこともなかったかと、いらぬお節介でしたと詫びる。

「外で暮らしづらくなったら、いつでもどうぞ」

「その時はよろしく願います。あ、外でここで暮らしたいって人がいたら連れてきてもいいんですかね？」

「構いませんよ。ただしよく吟味した上でお願いします。このような隠れ里を見つけるために、はぐれの真似をする人がいますので」

隠れ里には、フェウスのように希少な種族がいることがあるのだ。ここにも二人ほど、フェウスと似た境遇の種族が住んでいる。

ある人種にとっては隠れ里は宝箱のようなものだ。ここ以外にも

隠れ里はあるが、見つかり略奪された場所もある。静かに暮らしたい村長たちにとっては迷惑な話だ。

「気をつけます」

「ええ」

「役割果たせたので帰ろうと思います。それで最後の質問なんですが」

「はい」

「この子の世話って誰がするんでしょう？　ないとは思うけど、子供嫌いの人に頼むとかないですよね？」

「二つ考えがあります。そのどちらかになるかはわかりません。一つは私が引き取る。もう一つは子供を産めない女がいるので、そちらに預ける。私もその方も子供好きですから、虐待はあり得ません断言できます」

しっかりと幸助の目を見て、言い切った村長の様子を見て信じられると考える。

「そう、ですか。安心しました」

幸助は立ち上がる。フェウスが幸助を見上げる。

「俺はもう行くよ。フェウスも元気で」

フェウスの頭に手を置いて、髪を撫でる。

フェウスは気持ち良さそうに目を細める。初めて会った時から考えると、信じられないような反応だ。

「もう少しゆっくりしていったらと思うのだけど。しばらく会えなくなるから、フェウス君寂しいと思うわ」

「大丈夫です。この場所は覚えましたが、転移の魔法で毎日でも会いに来ることができますよ」

「あら？　だから気楽に帰るって言ってたのね」

フェウスにもこのことは話してあるので、寂しがる気持ちは小さい。

「だったら一つ頼まれてもらえないかしら」

「頼みですか？」

「ええ、この村は外との交流がほぼゼロと言っていいわ。時々村人が外に出て買い物に行くけれど、このことを隠すため頻繁には行けず足りない物が多くて。時々でいいから、足りない物を買ってきてもらえると助かるの」

「いいですよ。ただしお金はそちら持ちですよ？」

「それは当然、と言いたいんだけどお金はなくて。かわりに作った物採れた物を渡すから、それを売ってお金に換えてもらえないかしら？　依頼料もそこから出すわ」

「足りない場合はどうすれば？」

「それなりに貴重な物を出すから足りないってことはないと思うのよ。ちよっと待っててもらえる？　出してくるわ」

すぐに淡い青色の反物を持って戻ってくる。それをテーブルの上に置いた。

「これを」

「ただの布に見えるけど、貴重って言ってたからそうじゃないんですよね？」

「はい。これは妖精族シルフが風を紡いで糸としたものを織ったものです」

「風？」

「そういった特殊な技能を持つ一族がいたんですよ」

過去形なところに触れられない事情を感じて、幸助はそれ以上問うことを止めた。

触ってみてもいいか許可を貰い、手に取る。元が風だからかとても軽い。触り心地は柔らかくささりとしている。絹には及ばないが、かなりのものだ。

「大体どれくらいで売れるんでしょう？」

「聞いた話だと金貨三枚ほどだと」

「そうですか。でしたらそれくらいを目安に交渉しますよ。あと何を買ってくれば？」

「優先してほしいのは調味料です。ほかには小麦粉。あと余裕があれば本もお願います、物語集や事典が欲しいです。こんなところでしょうか」

「わかりました。では帰ります。フェウス、またね」
「うん」

そう言ってフェウスは小さく手を振る。それに幸助も振り返し転移の魔法でリックカートへ移動する。

ガレオンに会い、鈴と服を返したついでに預かった布をギルドが買い取るか聞いてみた。ギルドが買い取ってもいいが、もしかするとエリスが欲しがるかもしれないので、聞いてみたらどうだと返事が返ってきた。それじゃあと家に帰り、エリスとワイアーレにこれまでのことを話した後、風の布が欲しいか聞いてみる。買い取ろうとエリスが頷き、定価の金貨三枚で売れた。

そのお金で頼まれたものを買った幸助は、お土産にクッキーを作って隠れ里に持って行く。

大量に仕入れた調味料や小麦粉は村人に喜ばれた。クッキーは村の子供たちにとっても喜ばれた。

ボルドスの事情

剣の完成まで後十日にまで迫った日、その日はコキアたちに会う日で幸助はベラッセンから少し離れた場所でコキアたちを待つ。

夜のうちに雨が降り、朝は涼しい。空には雨雲はなく、日中晴れて暑くなりそうだと思える天気だ。

空を見上げていると、視界の端に人影が入る。来たかと街の方角を見ると、人数が多かった。

「ボルドス!？」

数ヶ月ぶりに見る顔がコキアたちと一緒に歩いてきている。

久々の再会に嬉しくなり、幸助からも近づく。

「久しぶり!」

「おう!」

ボルドスが笑いながら拳を突き出し、幸助も合わせるように拳を突き出して、軽くぶつけた。

「そろそろ帰ってくるのは知ってたけど、コキアたちと一緒に来るとは思ってたかった。腕も上げたみたいだね」

「お前も強くなったみたいじゃないか。詳しくはわからんが、なんとなくそんな雰囲気を感じられる」

「当たってるよ。大会で別れた後、いろいろあったから。後で話す」「楽しみにしとく」

「それでどうしてコキアたちと一緒に?」

「姉さん、家を移動させただろう? それでどこにあるかわからなくなっとな、困ってギルドに駄目元で聞いてみたら、コースケの教

え子知っているかもしれないとこいつらを紹介されたんだ。あとギルドから伝言がある」

「なんとなく内容が予測できる」

顔を出せといったものだろう。

「ギルドに来てくれたとき」

「やっぱり。悪いけど、しばらく近寄らないって言ってもらえると助かる」

「かまわんが、どうして行かないんだ？」

「それも後で話すよ」

ジェルムたちは事情を知っているので話してもいいのだが、どうせ後で話すのだからということと一応守秘義務を守ろうと考えた。幸助が気軽に話している様子を見ると、コキアたちも口が軽くなるかもしれないのだ。

そうかと頷き、ボルドスはそれ以上追求しない。

コキアたちに少しだけ待つように言って、ボルドスを転移で家まで送る。

引越ただけではなく、新しくなった家に驚いているボルドスを置いて、コキアたちのもとへ戻った。

「ただいま。まずはいつも通り、素振りから始めようか」

「その前に聞きたいことが」

剣を抜きつつ、ジェルムが聞く。

「さっきのボルドスって人何者なんですか？」

「本人に聞かなかった？」

「ベラッセンギルドで名の知れた冒険者ということくらい」

「それで合ってるよ。数ヶ月前までベラッセンを中心に活動していた冒険者でね、ベラッセンギルドでの知名度はトップじゃないかな。カルホード大陸のレゾティックマーグってところで開かれた武闘大会に出場するために、旅に出て本戦出場を果たした。その後はあちこちを見て回って、最近帰って来た。そんなところ。ジェルムたちよりも強いよ」

「コースケさんとの関係は？」

「エリスさん繋がりだね、武器の扱いとか冒険者として色々教えてもらった。俺とジェルムたちみたいな関係だね」

「師匠というほどじゃなくて、先生とかそんな感じ？」

そうそう、と幸助は頷く。

納得したジェルムは剣を振り出す。その隣でコキアとウドリガもそれぞれの武器を振り出した。

ジェルムたちは以前手に入れたお金で、装備を新調している。ジェルムは剣を、テリアは杖型増幅器を、コキアは鎧とふくらはぎまで覆うブーツを、ウドリガはハンマーを買っている。

偽神騒動での実力アップと装備の新調で、チームの攻撃力は上がっており、受ける依頼が討伐系に偏りだしている。たまには護衛や収集の依頼も受けて冒険者としての経験も積むように忠告し、今日の訓練を終える。

幸助は皆の話を聞き、訓練風景を見て、何かに納得し決めた顔つきになっていた。それに気づいたテリアとウドリガはなんだろうと首を傾げていた。

「そろそろ俺はコキアたちの先生役を辞めようと思う」

「え!？」

「そんな!？」

突然のセリフにコキアとジェルムが驚く。テリアとウドリガも驚

いてはいるが、驚きの大きさは前者の方が大きかった。

「元々一人前になるまでっていう約束だったろ？ 話を聞いたり訓練の様子を見て、ちょっと早いけど俺が関わらなくても十分だって判断した。本当はその判断のために、強い魔物と戦ってもらおうと思ってたんだけど、ジェルムは偽神信仰者との戦いで最後まで戦い抜いてたし、コキアは偽神の雰囲気には押されず攻撃を仕掛けることができてた。あれを思い出したら十分だって思えた」

コキア以上の實力を持っていた幸助が恐怖を感じていたのだ。コキアがああ場で動けただけでも称賛ものだろう。

「まだ教わることがあるのに」

ジェルムはそう言うが、幸助としては教えることはもうないと思っている。剣の型も癖は抜け、教えたものに固定されていて、このまま指摘していたことを守っていれば変な癖がつくことはない。知識もギルドなどで調べれば、十分身につく。

「教えられることは教えたよ。あとは自分で磨くだけ。いつまでも先生役にくっついてたら一人前とは呼べないよ」

「コースケさんはこの後なにか予定があるんですか？ またどこかに依頼で出かけたりとか？」

忙しくなるから止めることを言い出したのかと思ったテリアが聞く。

「剣を取りに行く以外で、特にこれといった用事はない。のんびりと暮らすよ？ 忙しくないだろうから困ったことがあったり、別の大陸に行きたかったりしたら家に来るといい。力になれる範囲で力

を貸すよ」

「家ってどこにあるのか」

「方角的に言うとおっち。真っ直ぐ進むと森がある。その中にエリスさんの家がある」

「必ずお伺いします。お世話になりました」

「助言助かっただよ。ありがとう」

テリアとウドリガが頭を下げる。二人も残念には思っているが、いつまでも頼ってられないと納得できている。

「テリアはストレスを溜め込まないようにね。ウドリガは修行が無事に終わることを願っているよ」

「ストレス溜まったら、美味しいものを食べさせてもらいに行きます」

「わかった。待ってる」

「ほら二人とも世話になったんだから、お礼くらい言いなさい」

戸惑う二人の手を取って前に押す。ジェルムとコキアは押されるままに幸助の前に出る。

二人とも納得できてはいないが、ボランティアということを出し、いつまでも拘束できないと諦める。

黙ったままだった二人は顔を見合わせ、同時に頭を下げた。

「「ありがとうございます!」」

確かな感謝の思いが感じ取れる。

「ジェルムは暴走しそうになったら、深呼吸して一拍置くように。コキアは日々の訓練を怠らないように。今は努力すればするほど強くなるんだから。んじゃ、またいつか会おう」

短く別れを告げて、幸助は転移で家に帰る。あっさりとした別れにジェルムたちは寂しく思うが、いつでも会えると思い直し、次会った時は成長ぶりを見せ付けて驚かしてやろうと決意した。

何か依頼を受けようと言いながら四人は街に戻る。討伐系の依頼を選ぼうとして止め、護衛を選んだところを見ると決意は本物なのだろう。

家に帰ると居間でエリスたちが話していた。ボルドスとワイアーレは椅子に座っているが、エリスはキッチンで作業しながらの会話だった。

「ただいま。昼はエリスさんが作んの？」

「ああ、ボルドスに頼まれたからの」

手伝おうか、という質問にエリスは首を横に振る。ワイアーレの申し出も断っていた。ボルドスの久々の帰還にエリスも顔に出ていないが、嬉しく感じていて手料理を振舞いたかったのだろう。

「おかえり。話を聞いたが、色々とやったんだな。俺もそれなりに動いたが、竜に歌姫、弟子、店、昔の英雄に偽神とそんな豪勢なことはなっていないぞ」

「自分から関わったの店くらいだけだね。あとは全部向こうからきた」

「らしいな」

積極的に動いたら、これまで以上のトラブルに遭遇することになったのかもしれないと思いつつ頷く。

「ボルドスはどんなことやってきたの？」

「あの大会の後、魔物退治に出たのは知ってるな？　ほかの冒険者たちと協力して倒せたんだ。その後は護衛の依頼を受けて、ほかの街に行った。その時、護衛した商人に気に入られて、町を治めている貴族に紹介された。貴族御用達の商人だったみたいでな、前からいい冒険者を見つけたら紹介してくれと頼まれていたらしい。男爵と地位は低かったが、上手く町の特産品を扱って金は持っていたな。偉ぶったところのない感じのいい人だった。話していくうちに、町の自衛団を鍛えてやってくれと依頼されて一ヶ月と時間を制限して引き受けた。そいつらに教えてみて思ったんだが、やっぱりコースケの物覚えのよさは異常だな」

「あーよくわかる。料理が上手で何年もやってきたんだろうなと思ってたら、やり始めて一年も経ってないって聞いてすごく驚いたからねえ」

ウィアーレが深々と頷く。

「称号のおかげだけだね。楽させてもらってる」

「積極的に技術習得して、それを伸ばす努力を怠らなかったらどこまでいけるんだろうな？」

「好奇心が刺激される話じゃの」

「俺のことは置いといて、話の続きは？」

「自衛団を鍛えるところまで話したか。んでその鍛錬をコースケと比べたせいで、厳しめになったんだ。その分強くもなったが。指導を終える頃には加減も覚えたよ。俺にとっても実りのある依頼になったな、あれは。誰かに教えることで教えられることがあるというのが、本当だな」

「俺もコキアとジェルムに教えたけど、実感ないけどなあ」

「お前は特殊だ」

幸助の疑問をボルドスは短く切って捨てた。同意するようにウィアーレとエリスが頷いている。

幸助が実感を得なかったのは、二人に教えてわかることは既にわかっていただけからだ。

「約束の一ヶ月が過ぎた後は、町から三日離れた場所にある遺跡に行ってみた。湖に浮かぶ島から入れる地下遺跡でな、雇い主だった男爵の許可がないと入れない遺跡だったんだ。時々兵士も入って地図を作ってたらしい。その地図作成を手伝ってくれとも言われた。遺跡内で手に入った物は貴重すぎる物以外貰えることになって、チームの皆張り切っていた」

「冒険って感じだね。楽しそうだ」

「確かにな。緊張もしたが、楽しくもあった」

その当時のことを思い出しボルドスは笑みを浮かべる。

遺跡内であったことをボルドスは語っていく。地図があった部分は順調にいき、未踏破部分からの慎重な行動。見破れなかった罠による負傷。巣穴拡大して遺跡と繋がった魔物との戦闘。隠し通路を発見し、そこにあったどうやって作ったかわからないサファイア製の虎像。そしてその像よりも脇にあった希少金属を見て大騒ぎしたクラレスに、皆が呆れたこと。

そういったことを幸助とウィアーレは冒険活劇を聞くようにドキドキハラハラしながら聞いていた。エリスは似たようなことを昔経験していたので、そういうこともあると冷静に聞きつつ料理を仕上げていた。

「完成したぞ。話はまた後でな」

チリビーンズに似た料理をメインに、魚のフライ、ポテトサラダと朝作っておいたパンが並ぶ。チリビーンズからはスパイスのいい

香りが漂い、よだれが溢れ出てきそうだ。魚のフライには幸助が試作し、エリスが気に入ったタルタルソースも添えられている。

祈りを捧げて食事となる。ボルドスは美味しそうに料理を頬張っていく。

残さず食べ終え、昼食が終わる。

「ボルドスが半分近く食べたよね。そんなに美味しかった？」

「美味しかったというのもあるが、俺にとって一番馴染みのある味でいくらでも入っていくんだよね」

「家庭の味というやつかな」

お袋の味と言っていたら、エリスが不機嫌になったかもしれない。それを予測して幸助は家庭の味と言った。

後片付けを幸助とウィアーレが引き受け、話し相手をエリスに代えて話が再開する。

「えっとどこまで話したっけな？」

「遺跡探索じゃろ」

「そうだったそうだった。虎の像はさすがに貰えなかったけど、金属と踏破エリア拡大の報酬は貰えたよ。その後はまた町の移動をしたんだ。クラレスがキューハンに行ってみたいと言ったから、次の目的地はキューハンになった。そこで特に変わったことはなかった。数ヶ月後にある品評会のことを知って残念がってたな。その次の目的地は、セインの奴が行きたがったんで暇潰しのダンジョンに決まった。冒険者たちが集まる街だけあって、冒険者に関わる話に事欠かなかったな。武具や道具も豊富で、冒険者にとって過ごしやすい街だった」

「私も行ったことあるが、それは感じたな。必要な物がすぐに揃うのは助かったし、腕のいい医術者がいてすぐに怪我が治り、疲れを取るサービスの質も高く戦闘や探索がしやすかったのう」

エリスは懐かしげな顔で頷いている。

「一ヶ月で切り上げるつもりで、ついつい長居したんだ。二ヶ月以上滞在していたっけか。神器は手に入れられなかったけどな。金はいくら手に入ったが。んで十分見回ったし、そろそろ帰ろうかってことになり、少し寄り道しながら帰ってきたんだ」

「今後の予定は決まっておるのか？」

「いや、決まってる。考えたいこともあるしな、少しのんびり過ごすよ」

考え事という部分で難しい顔つきになった。よほどのことなのだろう。

「相談にのるぞ？」

「いやこれは相談にのってもらっても意味ないと思う」

「話せないことなのか？」

「話せるんだけどな……聞きたいなら話すよ」

三人が頷くを見て、ボルドスは小さく溜息を吐いた。指で頬を書きつつ、ぼそりと言葉にする。

「実は帰りの船で、クラレスとセインに告白された」

「そういう方向の話なのか」

「へー」

「うわわわっ、告白ですか!？」

上からエリス、幸助、ウィアーレだ。エリスはなるほどと言いつつ理由に納得した。幸助はあの二人ついに告白したのかと感心している。強く反応したのがウィアーレで、恋愛話に興味のある年頃

なのだろう。落としそうになった皿を鍛えたステータスを発揮して掴みとっている。

「返事はどうしたのじゃ？」

「酔った上での勢いにのせた告白みたいだったし、本気かいまいちわからなくてなあ」

「本気だよ。クラレスさんから、アプローチかけてもボルドスが鈍くて気づいてくれないって聞いたことある。もう一人も同じこと言ってたらしい」

「……そうなのか？」

いつのまにそんな話を？　といった疑問一杯の顔で幸助を見る。それに頷き返す。

「本気なのか」

「本気とわかったわけなんですけど、ボルドスさんはどのように返事を？」

「……わからん」

本気で困ったと考え込む。なにも考えが浮かばず、髪をぐしゃぐしゃと掻き困りきった顔で口を開く。

「三人のうち誰か、なにか参考になる話ないか？」

「恋愛関連ねえ、俺は恋愛ごっこならしたことあるけど、参考にはならないな」

後片付けを終わらせて、椅子に座りながら答える。

それにボルドスよりも、エリスとウィアーレの方が興味を引かれた様子になる。

「聞いてみたい、その話」

「私もだな」

「面白い話だよ？ 今から四年くらい前かな？ 友達が彼女作って自慢してきて、俺も恋愛に興味が出たんだ。それで以前からちよつといいなって思ってた子に告白して受け入れられた。一ヶ月くらい遊んだり、話したりして一緒にいた。そして俺も相手も熱が冷めて別れた。二人とも恋愛ってものに興味があって、それを体験できたから満足したんだ。恋に恋するお年頃ってやつだったんだろうねえ」

別れる時は話がこじれることなく、すんなりといった。その後はいい友達といった関係が続いた。

幸助がこちらに来て、故郷で行方不明になって家族以外に心配してくれる人と言われて、一番に思い浮かぶのは彼女だ。

「それは参考にならないな」

「でしょ？」

「私も参考にならない話はできるよ。今にして思うと憧れだったんだなって思う。十歳前かな？ どじな私をあれこれ世話してくれる六つ上の兄さんがいたんだ。その人が好きで一緒にいたくて、いつもくっついてた。憧れから恋に発展することもあるんだろうけど、そうなる前に兄さん孤児院出て行って、会う機会が減って恋になることはなかったね。今は幸せな家庭を築いてる」

相手は幸助も会ったことがある、遺跡関係の依頼を出してきたコンサットだ。

「それも参考にならないなあ。こっちは恋愛までいってるみたいだからな。残るは姉さんだけ」

「ないな。人との接点がそれほど多くない私にそんな話を持ってこ

られても困る」

「だと思ったよ。そういやコースケ、以前じゃなくて今は好きなやつとかいないのか？」

「今？ エリスさんとウィアーレが好きだね」

「あっさりと二股宣言か？」

ボルドスはちらりと言われた二人の反応を窺う。エリスは表面上変わったところはなく、ウィアーレは顔を赤くして盛大に照れている。

「付き合うとか言っていないのに、二股宣言はないだろうに。それに恋愛の域までは行っていないよ」

あっさりと二股宣言をいなした。本当に恋愛感情は抱いていないのだろう、とわかるほどのあっさり加減だった。

「簡単に自己分析してみたけど、頼りになる姉貴分と危なっかしい妹分って感じじゃないかな」

「姉か」

「妹」

幸助の言葉をそれぞれ受け取める。表情から心の内は読めない。真剣な顔になっているのは両者とも変わらないが。

「姉妹に恋愛感情は湧かないか」

ボルドスはそう言うが姉妹と断定しているわけではないので、どうなるか未定と見てもいいのかもしれない。

「まあ、俺のことはいいよ。今はボルドスの話。今二股とか言っ

たけど、一度に複数と付き合うのは俺の故郷と同じように問題視されるんだね」

「一概にはそうとも言えんがの。一人を愛するという者が多いことは確かだ。だが貴族などは一夫多妻や一妻多夫もいる。さすがに多夫多妻というカオスなものはないが。養っていきける経済力がある者は複数を娶ることもある。一般人は一夫一妻が普通だが、妻や夫が二人いる者もいる」

明確に禁止されているわけではないのだ。本人たちが同意し、甲斐性さえあれば認められる。羨ましがられることはあるが。

もててるからと調子に乗って複数と結婚し破綻した者は、誰からも蔑まれる対象になる。逆に家庭円満な者は敬意を持たれる。ついでに同性愛もそれほど偏見はない。

神が禁止と言っていれば、人々もそれに影響されたのだろうか、そういったことは一切言っていない。

地球よりもそこの感覚は曖昧なんだと、幸助は久々に異世界を感じる。

「あとと言えることと言えば、どちらかを選んだら選ばなかった方が可愛そうって思っただけ両方を選ぶのは失礼に当たる。そんなところか」

テレビか本かで得た知識だが、言っておいて損はないだろうと幸助は付け加えた。

「よく考えてみる」

「そうしろ」

部屋に戻るボルドスにエリスは短く言葉を投げかけた。

「拾った時は小さかったのだがなあ。あんな悩みを持つまで大きくなったのか」

「感慨深い？」

幸助の問いかけにまあなと頷く。

「親としての感情じゃないかなそれ」

エリスはじろりと幸助を睨む。偽神から受けたものとは別種の圧力を感じ、心に怯えが生まれる。それでも言っておいた方がいいと思ひ、引かずに見返す。

先ほどは再会に水を差さないため空気を読んだが、ボルドスが部屋に戻った今は遠慮しなくてもいいだろうと思っただのだ。

一分ほど見合ひは続き、エリスがふっと力を抜く。

「わかっておるさ、それくらい。ボルドスが私を母と呼びたがっていることもな」

目を閉じて、椅子の背もたれに体重を寄せ、そっと呟く。

「まだ無理だ。だが大丈夫になる。いつか、というほど長い時間はいからず」

人の一生に近い時間をかけてここまでできたのだ。心に刺さった棘を少しずつ少しずつ抜いて。棘を抜いても傷は残る。それでもボルドスに母と呼ばれるくらいは平気になれる。エリスはそう思っているし、信じてもいる。

目を閉じ動かないエリスに、幸助とワイヤーは触れることができず。静かにその場を離れる。自分たちがなにかしなくとも、なんとかなると明確ではないものの理解できた。

次の日にはエリスの様子は元に戻っていた。一方のボルドスは始終難しい顔で悩み続けていた。ボルドスの悩みは次の日もその次の日も続いた。

悩みすぎてストレスが溜まった時は、幸助相手に思いっきり暴れてストレスを発散し、また悩む。

幸助たちは五日も悩めば結論出るのではと思っていたが、それ以上経ってもボルドスは悩み続けた。

いい加減鬱陶しくなったエリスは、再度ボルドスと話すことにした。幸助とウィアーレも同じ思いだったので、エリスがそう言い出した時は助かったと思ったのだった。

「どんなことを悩んでおるのじゃ？」

「どんなんて、いろいろだな。ほんとに俺が好かれているのかとか、俺よりも相応しい奴がいるんじゃないかとか、二人のどちらに答えればいいか、それとも二人ともに答えればいいのかとか」

「お前自身はその二人のことをどう思っておる？　それがわかれば簡単だと思うがの」

「……自分の気持ち、か」

また悩み始めたので、問題を単純にしようとしてウィアーレが問いかける。

「好きか嫌いかのどっち？」

「好きだな」

その問いには簡単に答えた。悩むまでもない問いだった。

「その好きに少しでも異性に向けるものはある？」

「自分に向ける笑顔が綺麗だとか、名前を呼ばれて嬉しいなとか、楽しんでいる姿を見て自分も楽しく嬉しく感じたりとかした？」

幸助もワイアーレに続いて聞く。

ボルドスはクラレスやセインと過ごしたこれまでのことを思い出していく。

「綺麗だなんて思ったことはある。楽しそうだとも思ったことはある。名前はどんなだろうな？」

呼ばれることが当たり前となっていて、嬉しいなどと意識していない。

「逆にしてみよう。呼ばれなくなったら悲しく思う？」

「……おそらく」

「二人はボルドスにとって、そばにいて当たり前の存在になっておるのではないか？ 好意を抱いていると言っていると思うがの」

「私もそう思う」

「俺も同じだよ」

「そうか？ いや、そうかもしれないな」

少々強引な押し付けかもしれないが、強く背を押してもしないといつまでも悩んでいそうだと三人とも思っていた。

「好意の有無がわかったところで、次はどちらを選ぶか、両者を選ぶか。俺としては両者を選ぶっていうのがお勧めかな。どちらがより好きなのかという疑問に意味はない。どちらにもいいところがあると思う。たくさんいいところを知れば、好意は増える。今はどちらかの好意の方が多くても、後々逆転することだってある。より深く相手のことを知っていけば、いくらでも相手を好きになれる」

参考になればと言ってはみたが、勢い任せのでまかせばかりだ。

知ること嫌になる可能性があることを言っていないのだから。背は押した、あとは誰が何を言っても自身で選ぶことだ。

エリスもウィアーレも、クラレスとセインのことを知らないのとどちらを選べとは言えない。

しっかり考えてみると言って、ボルドスは庭に出て行く。まだ考え込んでいる表情だが、昨日よりは断然に晴れやかになっていた。

「どういった結論出すんでしょうね」

「ボルドスが幸せになれる選択をしてほしいものじゃな」

この二日後、結論を出したボルドスはエリスに送られベラッセンへと戻っていった。

そこでクラレスとセインの三人で話し合い、想いを伝えた。

ボルドスが出した結論は二人と一緒になるというもの。その答えにクラレスとセインは頷いた。軽い気持ちで出した答えならば、惚れているとはいえ断っていた。そんなお調子者に惚れたつもりはないのだ。

だが想いを伝える時のボルドスの表情が言葉に込められたものが、軽い気持ちではないと物語っていた。悩んで、考えて、時間をかけて出した答えだとよく伝わってきた。だから二人は頷いたのだ。

それを隠れて見ていたエリスはそつとその場を離れる。決して不快ではない重みが体からなくなった気がして、一抹の寂しさが感じられた。

三日後、家にボルドスとクラレスとセインの三人がやってきて、付き合うことになったとエリスに報告する姿があった。エリスは笑みを浮かべて、ボルドスをからかいつつその言葉を受け取った。

ボルドスが報告に来る一日前、そろそろ剣が完成する頃だと幸助はウィアーレとキューハンに向かう。エリスはついて行かなくとも

いいだろうと、留守番を選んだ。近々ボルドスが来ることを予感していたのだろう。

初めて来る街ということで、ワイアーレのちょっとした観光に付き合い寄り道して、ワレイドア工房に到着する。

入り口から声をかけると、怪しまれていた弟子が出てきた。

「あ、お久しぶりです！ 剣完成しましたよ！」

どこか興奮気味に剣が出来上がっていることを伝える。それほどいい出来なのだろうか、幸助は少し楽しみになった。

「親方ー！ ワタセさん来ましたよ！」

「おーっ！ 来たか！ 中に入れてくれ！」

「というわけなのでどうぞ」

弟子に連れられ、工房に入る。そこにはマイナルと見知らぬ男が待っていた。もう一人の弟子なのだろう。ユシルとバハルはいない。リップに会うため街を出ているのだ。

テーブルの上に、木箱が置かれている。蓋がされていて中身は見えないが、注文した剣で間違いないだろう。

「待ってたぞ！ これを渡せるのが楽しみだったんだ！」

マイナルは機嫌良く笑いつつ、木箱をばしと叩く。

「かなりの自信作みたいですな」

「おう！ 今まで一番の出来だな」

「見るのが楽しみだ」

楽しみにしてると言って、マイナルは蓋を開ける。

中身を見た瞬間、ワイアーレが小さく感嘆の声を漏らした。幸助も目を見開き、驚いた表情となっている。

存在感がすごい、見ただけで名品とわかる雰囲気がある。エリアーナ武具店で出されたまがいものとは、比べ物にしてはいけないくらいの剣だ。

見た目の印象は装飾の少ない黒い剣というもの。刀身は黒曜石のように艶かしい黒色で、光を受けた部分が薄く虹色に反射している。鰐は鈍い金色の金属でできており、柄には茜色の布が巻かれ、柄頭には金色の留め金をはまっている。

形状としてはチンクエディアという剣に近い。鰐近くの幅が一番広く、刃先に向かうにつれ徐々に狭くなっていく。あちらは短剣だが、こっちは両手で扱うことを意識した長剣だ。全長百十センチほど、刀身は八十センチ、柄は二十五センチ。重さは見た目にそぐわぬ五十キロ弱となっている。

「持ってみてもいいですか？」

「あんたの剣だ。断りを入れんでいいさ」

片手で木箱から取り出す。今まで持った剣の中で一番重いが、これくらいがちょうどいいと感じれた。

軽く振ると、剣と腕が一体化したように思えるほど扱いやすかった。

すごい剣だと実感が湧き、嬉しさに心が跳ね、顔が笑みに変わるのを抑えきれない。

「うわっうわーっ！」

剣を振ることが楽しく、縦横と屋内ということのを忘れて振っている。

その姿に全員見惚れ、注意することができないでいる。あまりに

楽しそうで、剣筋が綺麗で、演舞を見ている気になっていた。刃が風を斬る音すら、演舞を引き立てる音楽のように聞こえる。

五分ほど振り続け、満足した幸助は動きを止めた。マイナルに近寄り、勢いよく頭を下げた。

「すごいです！　ありがとうございました！」

「いやいや、こっちもいいもん見せてもらった」

「それで御代はいくらになるんでしょう！？」　今なら言い値を出しますよ！」

「金はいらねえ」

「は？」

信じられない言葉を聞いたと幸助の表情は驚きで固まっている。

「いやいやいや！　こんなにすごいものをただでもらえませんか！」

息子さん見つけた報酬にしては高すぎますよ！？」

「報酬ってのもあるんだが、それを作ったことでお褒めの言葉もらえたんだ。鍛冶師としてはそれで十分なんだ」

「お褒めの言葉？　誰にですか？」

「鍛冶を司る神ドリズ様にだ。物作りをしている者はこの嬉しさがわかるんだろうけどな」

剣が出来上がった時に脳裏に言葉が届いたのだ。それは剣の出来を褒めるもので、過去百年以上見返してもこれ以上の剣はないというものだった。

一つ難点を挙げると、重さゆえ使い手を選ぶということだが。万人に向けて作った物ではないのでマイナス点にはならない。

こういったお告げは品評会で最高評価を貰っても聞けるものではなく、マイナルも初めて聞いた。

今後はこれを超える剣を作ることを目的に、さらに励んでいくと

気合が入っている。

「お褒めの言葉と目標という二つの褒美がもう貰えている。これ以上はいらねえよ」

「ありがとうございます」

それほどのものを作ってもらえたことと、お金を取らないことの二つに感謝の思いを込めて頭を下げた。

「これが鞘だ。いつまでも抜き身でいるのもどうかと思うぞ」

銀色の金属で縁取りされた、柄と同じ茜色の鞘を手渡す。渡された鞘に宝物を仕舞うように剣を納める。

腰に下げるには無理があると、鞘には背負えるようにベルトがつけられている。

「剣の手入れはいつでも受け付けているからな？」

「はい。では本当にありがとうございます」

最後にもう一度頭を下げて、幸助たちは工房を出る。

剣とは戦うためにある道具。それが手に入ったことは日常の終わりを意味すると考えてもいいのではないだろうか。

新種の魔物、既存の魔物の強化といった戦いの兆しは既に現れていた。戦いの規模を大きくしようとする者、防ごうとする者は既に動き出しており、表沙汰になるまでそう遠くない。

幸助だけではなく、多くの者を巻き込む戦いが始まるうとしている。

手に入れた剣は、困難を切り開く剣となれるだろうか？ 剣は黙して語らない。

ボルドスの事情（後書き）

感想と誤字指摘ありがとうございます

第二回書き溜め放出終了

また書き溜めに戻ります。次は二週間かからないはず

「隠れ里」に泥棒たちのその後を少し付け加えました
フェウス連れてギルドを出るあたりです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2499j/>

竜殺しの過ごす日々

2011年10月6日22時45分発行